サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第５冊

# 高松城跡（西の丸町地区）Ⅲ

第１分冊

2003．3

香　川　県　教　育　委　員　会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第５冊

# 高松城跡（西の丸町地区）Ⅲ

第１分冊

2003．3

香　川　県　教　育　委　員　会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

# 第１分冊目次

序文
例言
第１章　調査の経緯と経過
第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　調査の経過 …… 1～3
１．調査の経過 …… 1～2
２．発掘調査及び整理作業の体制 …… 2～3
３．整理調査の経過 …… 3
第２章　調査の成果
第１節　調査地点周辺の状況 …… 3～4
第２節　調査区割 …… 4
第３節　基本層序 …… 4～6
第４節　近世遺構 …… 6～31
１．Ⅰ区 …… 7～9
２．Ⅱ区 …… 9～11
３．Ⅲ区 …… 12～13
４．Ⅳ区 …… 14～17
５．Ⅴ区 …… 17～19
６．Ⅵ区 …… 19～20
７．Ⅶ区 …… 21～22
８．Ⅷ区 …… 22～25
９．Ⅸ区 …… 26～28
10．Ⅹ区 …… 28～30
11．Ⅺ区 …… 30～31
第５節　中世遺構 …… 32～35
第６節　近世遺物 …… 36～77
１．Ⅰ区 …… 36～38
２．Ⅱ区 …… 38～42
３．Ⅲ区 …… 42～44
４．Ⅳ区 …… 44～47
５．Ⅴ区 …… 48～50
６．Ⅵ区 …… 50～56
７．Ⅶ区 …… 57～59
８．Ⅷ区 …… 59～68
９．Ⅸ区 …… 69～72
10．Ⅹ区 …… 72～75
11．Ⅺ区 …… 76～77
第７節　中世遺物 …… 77～82
第８節　攪乱出土遺物 …… 83～84

第３章　総括
第１節　中世礫敷遺構について …… 85～91
第２節　各石垣の所属時期について …… 92～98
第３節　遺構変遷について …… 99～106
第４節　西の丸町地区出土の陶磁器について …… 107～142
第５節　京・信楽系陶器 …… 143～156
報告書抄録

## 挿図目次

第225図　高松城跡（西の丸町地区）中世礫敷遺構分布図（Ｓ＝１／500） …… 87～88
第226図　遺物組成比較 …… 91
第227図　『外国船具図巻』所載の「木碇」（小川2001より抜粋） …… 86
第228図　Ⅷ区ＳＺｃ01層位別の産地組成 …… 97
第229図　大坂城における陶磁器組成（積山編年を基軸に、鋤柄・森1999、難波1992を加筆） …… 98
第230図　高松城跡（西の丸町Ｃ地区）整地層概念図 …… 106
第231図　様相別材質組成 …… 120
第232図　様相別器種組成（土師質土器） …… 121
第233図　様相別器種組成（陶器） …… 122
第234図　様相別器種組成（磁器） …… 123
第235図　様相別産地組成 …… 124
第236図　中国産磁器変遷図 …… 125
第237図　Ⅷ区ＳＺｃ01前面堆積土出土中国産磁器 …… 125
第238図　肥前系陶器変遷図１ …… 126
第239図　肥前系陶器変遷図２ …… 127
第240図　肥前系陶器変遷図３ …… 128
第241図　瀬戸・美濃系陶器変遷図 …… 129
第242図　備前系陶器変遷図１ …… 130
第243図　備前系陶器変遷図２ …… 131
第244図　肥前系磁器変遷図１ …… 132
第245図　肥前系磁器変遷図２ …… 133
第246図　肥前系磁器変遷図３ …… 134
第247図　肥前系磁器変遷図４ …… 135
第248図　理兵衛焼の可能性のある一群１ …… 137
第249図　理兵衛焼の可能性のある一群２ …… 138
第250図　理兵衛焼の可能性のある一群３ …… 139
第251図　京・信楽系陶器変遷図１ …… 140
第252図　京・信楽系陶器変遷図２ …… 141
第253図　堺・明石系摺鉢変遷図 …… 142
第254図　京・信楽系陶器法量 …… 143
第255図　京・信楽系陶器口縁形状 …… 143
第256図　京・信楽系陶器高台形状 …… 143
第257図　京・信楽系陶器施釉範囲 …… 143

第258図　京・信楽系陶器属性分類図(1/2) …… 146
第259図　京・信楽系陶器属性分類図(2/2) …… 147

## 表目次

第１表　高松城跡(西の丸町Ｃ地区)調査工程図及び調査担当者 …… 1
第２表　高松城跡(西の丸町Ｃ地区)礫敷遺構出土遺物組成一覧 …… 90
第３表　Ⅷ区ＳＺｃ01層位別遺物組成 …… 96
第４表　Ⅷ区ＳＺｃ01層位別出土遺物 …… 97
第５表　各様相基準資料 …… 107
第６表　様相別土器・陶磁器カウント及び組成１ …… 118
第７表　様相別土器・陶磁器カウント及び組成２ …… 119
第８表　様相別材質組成比率 …… 120
第９表　様相別器種組成比率(土師質土器) …… 121
第10表　様相別器種組成比率(陶器) …… 122
第11表　様相別器種組成比率(磁器) …… 123
第12表　様相別産地組成比率 …… 124
第13表　高松城跡出土の理兵衛焼の可能性のある一群について …… 136
第14表　＜胎土－釉調＞属性分類 …… 148
第15表　＜胎土－含有鉱物＞属性分類 …… 149
第16表　＜釉調－含有鉱物＞属性分類 …… 150
第17表　京・信楽系陶器一覧表(1/3) …… 151～152
第18表　京・信楽系陶器一覧表(2/3) …… 153～154
第19表　京・信楽系陶器一覧表(3/3) …… 155～156

# 序　文

財団法人香川県埋蔵文化財調査センターでは、四国横断自動車道高松東道路の建設、高松空港跡地の整備など、国・県の大規模開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査と出土文化財の整理研究・報告書刊行の業務を香川県教育委員会より委託を受けて実施しております。

このたび、「サンポート高松整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第５冊」として刊行いたしますのは、平成９・11・12年度に調査を実施しました高松市西の丸町に所在する高松城跡（西の丸町地区）Ｃ地区についてであります。

本調査区では、江戸時代の４列の石垣と明治時代の石垣を検出しました。いずれも、海域を順次埋め立てて石垣を築いており、まさに、江戸時代版のウォーターフロント計画ともいえる興味深い内容であります。さらに、発掘調査によって検出した５列の石垣と江戸時代の絵図に描かれた石垣の対応関係が明らかになるという大きな成果も挙げております。

本報告書が本県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深まる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土文化財の整理・報告にいたるまでの間、県土木部サンポート高松推進局並びに地元関係各位には多大なご協力とご指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後ともよろしくご支援賜りますようお願い申し上げます。

平成15年３月

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
所　長　　小原　克己

# 例　言

1．本報告書は、サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告で、香川県高松市西の丸町ほかに所在する高松城跡(西の丸町Ｃ地区)の報告を収録した。
2．発掘調査は、香川県教育委員会から委託され、香川県教育委員会が調査主体、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。
3．発掘調査の期間及び担当は以下の通りである。
平成９年度(報告調査区名：Ⅺ区)
平成９年６月１日～７月31日
宮崎哲治・岡本　利・東条貴美
平成11年度
平成11年４月１日～平成12年３月31日
古野徳久・松本和彦・乗松真也・島田英夫・岡本　利・佐々木正之・増井泰弘・豊島　修・森澤千尋・陶山仁美・糸山　晋・中村文枝
平成12年度(報告書調査区名：Ｊ区)
乗松真也・川原和生・糸山　晋
4．調査にあたって、下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。(順不同、敬称略)
県土木部サンポート高松推進局、地元各自治体、地元各水利組合
5．本書の作成は、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施し、第３章第５節を陶山仁美が、その他の執筆及び編集は松本和彦が担当した。
6．本書の作成にあたっては、下記の方々のご教示を得た。記して謝意を表したい。(順不同、敬称略)
東　信夫、厚　秀雄、大嶋和則、大橋康二、岡　佳子、北野信彦、紀太洋子(14代紀太理平洋子)、日下正剛、小林浩治、佐藤亜聖、渋谷啓一、谷川　穣、豊田　基、長佐古真也、乗岡　実、浜田恵子、藤澤良祐、北條ゆうこ、堀内秀樹、森村健一、御厨義道、雪田隆子、四国城下町研究会
7．本書で用いる方位の北は、国土座標系第Ⅳ系の北であり、「日本測地系」を用いている。
標高はＴ．Ｐ．を基準としている。
8．挿図の一部には国土地理院作成の１／25,000地形図「高松南部」・「高松北部」を用いた。
9．本書で用いる遺構略号は以下の基準に拠っている。
ＳＡ：柵列　ＳＢ：建物(礎石・掘立柱建物すべて含む)　ＳＤ：溝状遺構　ＳＥ：井戸状遺構
ＳＫ：土坑　ＳＰ：柱穴(礎石もこれに含む)　ＳＸ：不明遺構　ＳＺ：石垣ないし関連遺構
なお、遺構略号の次に記す「ｃ」は、分冊となる遺跡報告書単位で採用する地区名を示しており、第３分冊目にあたる本書収録地区をＣ地区としたため、「ｃ」となる。なお、既刊行の概報は年度単位の調査区名を採用しており、同一遺構でも本書とは遺構番号が異なる。
10．挿図及び土器観察表の色調表現は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖　1994年度版』に準拠した。
11．引用文献は文末に一括して掲載した。

# 第１章　調査の経緯と経過

## 第１節　調査に至る経緯

### 平成９年度調査

平成９年４月１日付けで香川県教育委員会と財団法人香川県埋蔵文化財調査センターとの間で締結した埋蔵文化財発掘調査事業の契約に基づいて調査を実施した。調査区は都市計画道路予定地の300㎡で、平成７年度の調査区の東に隣接する国労会館の一部にあたる。都市部での調査であり、周囲に金属フェンスを設置して、防塵・防音とともに安全確保に留意した。小規模の調査であったが、基礎の撤去に伴う周辺住民からの苦情や予想以上の湧水などで以外と手間取ることとなった。現地での発掘作業は６月２日から開始し、７月29日の用地引き渡しを持って終了した。

### 平成11年度調査

平成８年度の民間換地部への移転確定と撤去が終了した箇所とＪＲ四国高松駅３番線以北の撤去部及び都市計画道路の拡幅予定地で合計6,799㎡を対象地として調査を開始した。調査着手時点では高松城跡の海側への広がりが確定してなかったことや施設撤去予定時期の関係から高松駅０～２番線部のホーム部は11年度調査対象地には含めていなかったが、道路の切り回し等による調査期間の前倒しやその後、明治以降の開発により消失した箇所が想定以上に広がっていた。そのため調査体制の一部増強も合わせて、新駅舎周辺の大半の箇所を年度内に調査対応実施した。調査では、高松城築城期から幕末期までの城域の海側への４回におよぶ拡張を確認した。高松城跡の今年度の発掘調査面積は9,492㎡となった。

### 平成12年度調査

最後に残った対象地東南部区画整理部が対象となった。調査対象面積は260㎡である。

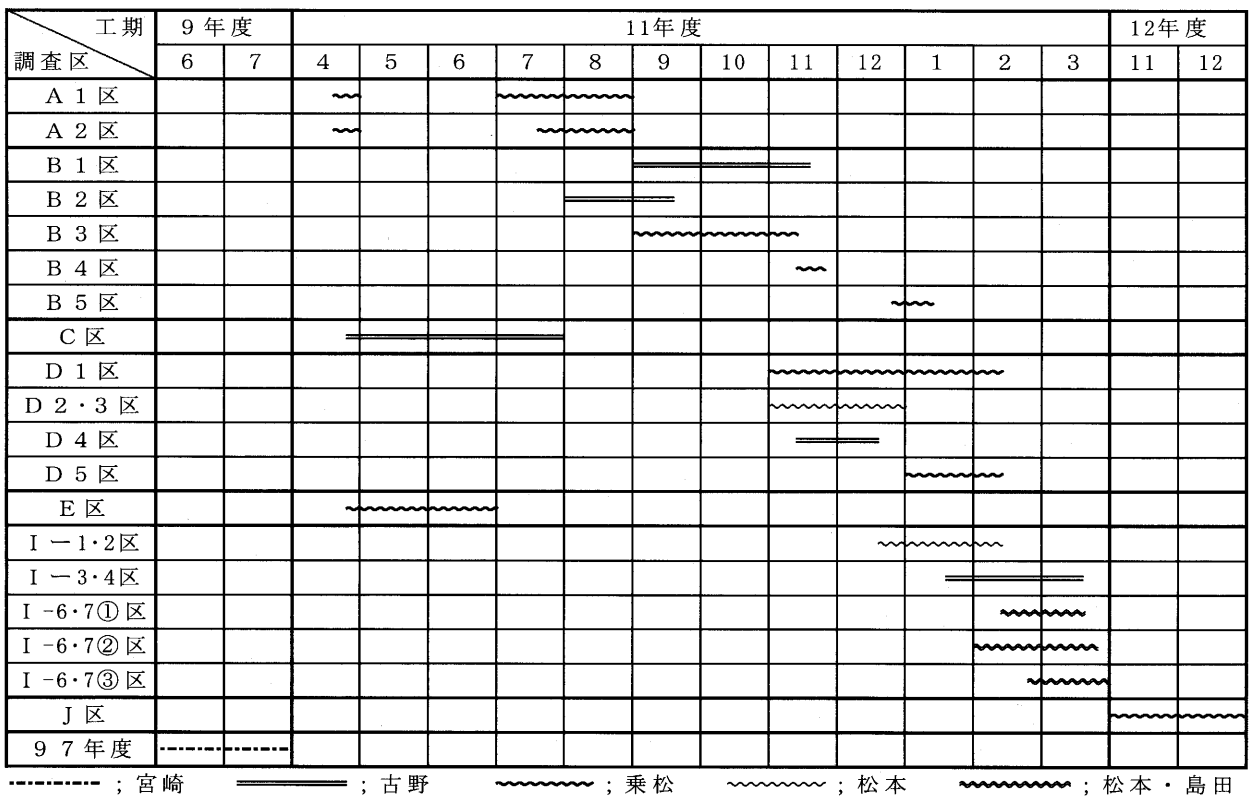
以上、各調査年度別に調査に至る経緯を調査概報に基づき報告した。本書に収録した高松城跡（西の丸町Ｃ地区）の発掘調査対象面積は合計10,052㎡となる。

なお、平成12年度には都市計画道路の街路部分の調査も合わせて実施し、同年度に整理作業も行い、『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第３冊　高松城跡（西の丸町地区）Ｉ』として報告書が既に刊行されている。高松城跡（西の丸町地区）では調査年度や事業主体の差異によって、３冊の報告書を作成することになる。既に報告書が刊行された都市計画道路街路部分は高松城跡（西の丸町Ａ地区）、平成７・８年度に発掘調査を実施した箇所を高松城跡（西の丸町Ｂ地区）とし、本書に収録した箇所は高松城跡（西の丸町Ｃ地区）となる。

## 第２節　調査の経過

### １．調査の経過

第１表に、調査区別の調査期間及び調査担当者をまとめた。なお、調査区割りに関しては、第２章第２節に示した。




第１表　高松城跡（西の丸町Ｃ地区）調査工程図及び調査担当者

## 2．発掘調査及び整理作業の体制

発掘調査及び整理調査の体制は以下のとおりである。

**平成９年度調査体制**

香川県教育委員会事務局文化行政課

| | | |
|---|---|---|
| 総括 | 課長 | 菅原良弘 |
| | 課長補佐 | 北原和利 |
| | 副主幹 | 渡部明夫 |
| 総務 | 係長 | 山崎　隆 |
| | 主査 | 星加宏明(～５．31) |
| | 主査 | 松村崇史(６．１～) |
| | 主事 | 打越和美 |
| 埋蔵文化財 | 文化財専門員 | 木下晴一 |
| | 技師 | 塩崎誠司 |

財団法人　香川県埋蔵文化財調査センター

| | | |
|---|---|---|
| 総括 | 所長 | 大森忠彦 |
| | 次長 | 小野善範 |
| 総務 | 参事 | 別枝義昭 |
| | 副主幹 | 田中秀文(６．１～) |
| | 係長 | 前田和也(～５．31) |
| | 主事 | 細川信哉 |
| 調査 | 参事 | 近藤和史 |
| | 主任文化財専門員 | 藤好史郎 |
| | 文化財専門員 | 宮崎哲治 |
| | 文化財専門員 | 岡本　利 |
| | 調査技術員 | 東条貴美 |

**平成11年度調査体制**

香川県教育委員会事務局文化行政課

| | | |
|---|---|---|
| 総括 | 課長 | 小原克己 |
| | 課長補佐 | 小国史郎 |
| | 副主幹 | 廣瀬常雄 |
| 総務 | 係長 | 中村禎伸 |
| | 主査 | 三宅陽子 |
| | 主査 | 松村崇史 |
| 埋蔵文化財 | 係長 | 西村尋文 |
| | 文化財専門員 | 森　格也 |
| | 主任技師 | 塩崎誠司 |

財団法人　香川県埋蔵文化財調査センター

| | | |
|---|---|---|
| 総括 | 所長 | 菅原良弘 |
| | 次長 | 川原裕章 |
| 総務 | 副主幹 | 六車正憲 |
| | 副主幹 | 田中秀文 |
| | 主事 | 細川信哉 |
| 調査 | 参事 | 長尾重盛 |
| | 主任文化財専門員 | 藤好史郎 |
| | 主任文化財専門員 | 島田英夫 |
| | 文化財専門員 | 古野徳久 |
| | 文化財専門員 | 岡本　利 |
| | 文化財専門員 | 佐々木正之 |
| | 文化財専門員 | 増井泰弘 |
| | 主任技師 | 豊島　修 |
| | 技師 | 松本和彦 |
| | 技師 | 乗松真也 |
| | 調査技術員 | 森澤千尋 |
| | 調査技術員 | 陶山仁美 |
| | 調査技術員 | 糸山　晋 |
| | 調査技術員 | 中村文枝 |

**平成12年度調査体制**

香川県教育委員会事務局文化行政課

| | | |
|---|---|---|
| 総括 | 課長 | 小原克己 |
| | 課長補佐 | 小国史郎 |
| | 副主幹 | 廣瀬常雄 |
| 総務 | 係長 | 中村禎伸 |
| | 主査 | 三宅陽子 |
| | 主事 | 亀田幸一 |
| 埋蔵文化財 | 係長 | 西岡達哉 |
| | 文化財専門員 | 森　格也 |
| | 文化財専門員 | 宮崎哲治 |

財団法人　香川県埋蔵文化財調査センター

| | | |
|---|---|---|
| 総括 | 所長 | 菅原良弘(～10．31) |
| | | 小原克己(11．１～) |
| | 次長 | 川原裕章 |
| 総務 | 副主幹 | 大西誠治 |
| | 副主幹兼係長 | 六車正憲 |
| | 主任主事 | 高木康晴 |
| 調査 | 参事 | 長尾重盛 |
| | 主任文化財専門員 | 藤好史郎 |
| | 文化財専門員 | 川原和生 |
| | 技師 | 乗松真也 |
| | 調査技術員 | 糸山　晋 |

**平成13年度整理体制**

香川県教育委員会文化行政課

| | | |
|---|---|---|
| 総括 | 課長 | 北原和利 |
| 芸術文化グループ | 課長補佐 | 小国史郎 |
| | 副主幹 | 中村禎伸 |
| | 主事 | 亀田幸一 |
| 文化財グループ | 副主幹 | 大山眞充 |
| | 主任 | 西岡達哉 |
| | 文化財専門員 | 古野徳久 |
| | 文化財専門員 | 宮崎哲治 |

財団法人香川県埋蔵文化財発掘調査センター

| | | |
|---|---|---|
| 総括 | 所長 | 小原克己 |
| | 次長 | 川原裕章 |
| 総務 | 副主幹 | 大西誠治 |
| | 係長 | 多田敏弘 |
| 整理 | 主任文化財専門員 | 真鍋昌宏 |
| | 主任文化財専門員 | 片桐孝浩 |
| | 主任技師 | 松本和彦 |

**平成14年度整理体制**

香川県教育委員会文化行政課

| | | |
|---|---|---|
| 総括 | 課長 | 北原和利 |
| 芸術文化グループ | 課長補佐 | 渡邊勇人 |
| | 主任 | 香川浩章 |
| | 主事 | 亀田幸一 |
| 文化財グループ | 主任 | 大山眞充 |
| | 主任 | 片桐孝浩 |
| | 文化財専門員 | 古野徳久 |
| | 文化財専門員 | 佐藤竜馬 |

財団法人香川県埋蔵文化財発掘調査センター

| | | |
|---|---|---|
| 総括 | 所長 | 小原克己 |
| | 次長 | 渡部明夫 |
| 総務 | 副主幹 | 野保昌弘 |
| | 係長 | 多田敏弘 |
| 整理 | 主任文化財専門員 | 藤好史郎 |
| | 主任文化財専門員 | 真鍋昌宏 |
| | 主任技師 | 松本和彦 |

発掘調査に携わった方々は以下のとおりである。

現場整理作業員　飯間高子、小笠原千恵子、漆原陽子、高澤由起子、松本恭子

現場作業員　大木誠二、柏原法雄、塚原進、松本康弘、北迫高男、杉山周二、満丸文二、川田晴雄、香西正俊、高尾司之、高橋辰男、井戸等、竹井康広、影山弘、林俊雄、渡辺喜彦、山本秀雄、篠原密夫、金香勝、富田英三、山下重光、中川恒夫、富岡晴美、山田馨、多田勝、高木輝男、松本一郎、上西弘、中川弘美、多田敏夫、今井由記子、藤井サヨ子、満丸香代子、西崎文子、清水節子、堀上幸子、網谷チズ子、糸目八重子、百生享子、岡田カネ子、松本和子、元山冨子、土居智江子、串田光子、日下千鶴子、高橋美佐子、池原サカエ、松本悦子、井下美佐子、井下ミチ子、中原トヨ子、岡シズエ、川田悦子、久利文子、野生須フミエ、河西雅子、桜又タカ子、三谷恵子、山本シゲ子、高橋秀子、川渕ひな美、稲田寿子、川田房子、伊賀悦子、上原光世、辻上トミ子、唐渡安子、西村和代、宮地恵美子、峯春子、家田アキミ、林テル子、白井久美子、宮武和子、川田市子、長山キミエ、金香栄子、石川悦子、河野ミチ子、山内ウメ子、細川レイ子、百歩静子、高木ミチ子、山下八千代、中村芳子、村尾律子、泉千代子、井手上操、藤井桂子、藪下文子、遠藤マサ子、中川真理子、上西キミ子、川野清、川原武夫、上枝貞義、池添正行、吉田実、櫛田英子、十河恵子、遠藤トミ子、中山美智子、藤本恵子、池添キヌエ、筒井幸子、藤沢洋子

### 3．整理調査の経過

整理調査は平成13年４月１日に開始し、平成14年７月31日に終了した。調査面積は10,052㎡を測り、出土遺物は選別済みの状態で20リットル入りコンテナで340箱を数える。整理工程的には極めて厳しい調査であった。整理調査に携わった方々は以下のとおりである。

整理補助員　合田和子、小林里美

整理作業員　久保真由美、北濱敦子、塩崎(田中)宏美、陶山仁美、辻悦子、高橋牧子

# 第２章　調査の成果

## 第１節　調査地点周辺の状況

高松城跡は四国北東部、香川県中央部に位置する(第１図)。前面に海を望み、背後に城下町が展開する水城として著名である(第２図)。

その築城は、天正15(1588)年に入部した豊臣系大名である生駒親正によって行われる。なお、関ヶ原の戦いにおいて、藩主親正は豊臣軍(西軍)に与したが、その子一正が徳川軍(東軍)に属して戦功を挙げ、継続して讃岐を治めたが、寛永17(1640)年に家臣間の対立が原因とされる生駒騒動が勃発し、生駒氏は出羽国矢島に改易される。当時の讃岐の石高は15万石程度であったとされるが、出羽国矢島は１万石である。

その後、寛永19(1642)年に水戸藩主水戸頼房の長子松平頼重が高松城に入部する。頼重は入部後、上水道の設置、二ノ丸・三ノ丸・本丸等の石垣の修築、天守閣の改築、東ノ丸・北ノ丸の増築、侍屋敷の新設といった城下の整備に着手する。享保３(1718)年に江戸最大級の火災である高松大火が発生し、侍屋敷83軒、町屋1402軒を焼失した。この火災を契機として、城下の大規模な再整備が実施され、高松城跡(西の丸町Ｂ地区)では、これを契機とした整地面が確認されている。その後、高松城跡には大きな変化はなく、幕末まで松平氏の治世が継続する。しかし、江戸幕府崩壊に伴って廃藩置県を経て高松城は廃止され、明治30年以降外堀・中堀、西浜舟入が埋め立てられる。その景観は失われつつある。

### 絵図による調査地点の変遷

高松城跡(西の丸町地区)の発掘調査地点を第３図に示した。周辺地割に関しては享保年間(1716～1736)に描かれた『高松城下図』(第７図)を参考にして復元し、Ｂ地区には18世紀前半の整地面を貼付した。これによると、調査地点は中堀と外堀ないし西浜舟入に囲まれた西外曲輪に位置することになる。後述するが、発掘調査では西外曲輪の北辺をなす石垣を４条検出しており、以下紹介する絵図における西外曲輪北辺の石垣との対応関係が重要となる。出土遺物や遺構の重複関係から、それぞれの石垣は、順次海域を埋め立てて構築されており、城下を拡張する過程を看取することができる。

以下、絵図を参考にして、調査地点の変遷を整理する(絵図の年代観に関しては森下1996に依拠し、その出典も断りがない限り同論文から抜粋したものである)。また、絵図では『高松城下図屏風』との関連から、いずれも北を下に配置している。

生駒期における絵図として、『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』がある(第４図)。寛永15～16(1638～1639)年に描かれた絵図で、屋敷割とその拝領者が明記されて

いる。西外曲輪を均等割した屋敷割であるため、調査地点との厳密対応は特定できないが、調査では西外曲輪の北辺をなす石垣を検出しており、調査地点は絵図の西外曲輪北端部東側の「蔵」部分と無記名の北端部西側付近に該当する。

また、松平頼重入城直後で、1650年代以前に描かれたと考えられる『讃岐高松丸亀両城図　高松城下図』がある(第5図)。西外曲輪を縦断する道路が鍵形に屈曲し、その両脇に規模の異なる屋敷地割が描かれる。『高松城下図屏風』にも、鍵形に屈曲する街路とその脇に展開する複数の屋敷地を認める(第6図、1650年代前半)。鍵形道路は高松城跡(西の丸町B地区)で確認されており、絵図との対応関係を考える指標となる。B地区の北ないし西に位置するC地区はこの鍵形街路と西外曲輪北辺の間に該当することになる。しかし、調査では街路を示す痕跡は確認することはできなかった。

享保年間(1716～1736)に描かれた『高松城下図』では西外曲輪の西半に「大久保飛騨」、北東部に「西御屋敷」と記載されている(第7図)。調査では、両者を区画する施設として石組の溝を確認している。総延長はB地区からC地区まで約140mを測り、西外曲輪を縦断し、東西に区画する広域地割として評価されている(佐藤2003刊行予定)。さらにこの石組溝はB地区における整地面の変遷では、享保3(1718)年に発生した高松大火後の整地面から確認でき、それ以前の主要地割ラインであった鍵形道路はこの段階で消滅している。つまり、高松大火によって大規模な地割の改変が行われ、その基軸として石組溝が構築されている。出土遺物の年代観は18世紀前半に属し、絵図の年代観との矛盾もない。よって、18世紀前半における調査地点は高松藩筆頭家老の大久保家の屋敷地と藩主の居住域に該当することになる。

文化年間(1804～1814)に描かれた『高松市街古図』では、西外曲輪の西半には「大久保飛騨頼都」、北東部には「原」という記載があり(火災に備えた緩衝地)、19世紀初頭にも西半部は大久保家の屋敷地であったことが窺える(第8図)。一方、北東部は『天保15年高松之図』(1844年)では「籾倉、長屋アリ」(第9図)、『東讃高松絵図』(弘化年間(1844～1848)では「火除明地」とある(森下1996)。さらに、幕末頃に描かれた『高松城全図』では(第10図)、西外曲輪西半がわずかに描かれ、「西御屋敷」と表記される。単純な記載ミスの可能性も残すが、18世紀中葉以降、大久保家が藩主である松平氏と親戚関係にあったことに起因する可能性もある。なお、北東部は畑地と記載されている。

明治期には西外曲輪全体が統合され、「懲役バ」(『讃岐高松市街細見新図』明治15年)、「監獄署」(『高松市街明細全図』、明治28年、第11図)と記載され、西外曲輪全域に監獄署＝刑務所が設置されていることが窺える。

以上、絵図から見た調査地点の変遷をまとめると、生駒氏入城時の状況は明らかではないが、松平氏入城直後の段階では、鍵形に屈曲する街路の両脇に複数の屋敷地が展開していたことが窺える。さらに、18世紀初頭には屋敷割に大きな変化を認め、西外曲輪の西半が大久保家の屋敷地として統合され、その北東部には藩主の居住域が設置される。また、大久保家屋敷地は幕末まで継続するが、北東部は藩主の屋敷地→防火用の緩衝地→籾倉・長屋→火除明地→畑地と次々と変化したことが窺える。さらに明治期には、西外曲輪全体が監獄署として一区画に統合されるといった変遷を想定することができる。

## 第2節　調査区割

第13図に発掘調査時の調査区割を提示した。調査区割は調査着手時点における施設撤去状況などから、アルファベットによる大調査区割を設定し、作業ヤードや排土置き場、進入路等の関係から、細分した調査区名を設定した。A区であれば、2地区に細分し、それぞれA1区・A2区となる。平成9年度に調査を実施した箇所に関しては、便宜上97年度調査区と仮称した。各調査区の調査期間及び調査担当者については第1表に示した。細分した調査区の総数は20区画を越える。各調査区における整地面の捉え方、出土遺物の取り上げ方法、セクション設定箇所といった調査方法に関する統一的な取り決めは実施していないため、その内容は各調査担当者によりばらつきを認め、隣接した調査区でもその調査成果は一様ではない。

本報告に際しては、近接した調査区における検出遺構や層序(整地層)の連続性を最大限評価し、Ⅰ～Ⅺ区の11区画の設定を行い、第14図に示したような新たな調査区割を設定した。以下、新調査区割に基づいた報告を行う。

## 第3節　基本層序

高松城跡(西の丸町B地区)では、11世紀後半から明治期まで計7面の遺構面が確認されている。各整地面で検出した遺構内容や炭化物・焼土を含む整地層、出土遺物の年代観を絵図、文献記載と対比し、それぞれの整地面の理解が提示されている(佐藤2001)。当調査区とは隣接した位置関係にあり、その遺構面の変遷や歴史事象に差異を認める必要はなく、逆にその対応関係を考慮して報告する必要性は高い。しかし、本調査区の整地層・遺構等の遺存状況は良好ではなく、上記した整地面を捉えることはできなかった。加えて各調査区によって、把握した整地面ないし遺構検出面の構成土や検出レベルに差異があり、明確な基本層序を提示することはできない。大多数の調査区の遺構検出面は1ないし2面のみであった。

こうした状況であるが、C地区では西外曲輪の北辺に該当する近世段階の石垣を4条確認し、さらに明治

期の石垣も１条検出している。出土遺物の年代観や遺構の重複関係から、順次海域を埋め立てて城下を拡張していることが窺える(第15図)。新たな石垣の構築はかつて海域であった箇所を埋め立て、新たな生活面を創出するという拡張行為であり、少なくとも４回行われる。それぞれの石垣に伴う整地面があると仮定すれば、第16図に示したような概念的な整地面を想定することができる。５条の石垣に伴う想定整地面は５面あり、最も北側(海側)に位置する石垣＝ＳＺｃ13を埋め立てた遺構検出面も確認しており、これを想定第０面とし、下層遺構である中世前半期に属する面を加え、計７面の整地面を想定することができる(第16図)。しかし、あくまでも概念的な把握であり、石垣の構築に伴い広範囲での整地がなされたとは考えがたい。検出状況も複数の想定面を同一遺構検出面で確認した調査区が大半である。ここで留意したい点として、例えば1630年代後半の構築を想定したＳＺｃ02より北側には、1630年代後半以前の遺構は確実に存在しない点である。前述したように、高松城跡(西の丸町Ｃ地区)では、整地層の連綿とした堆積は認められず、整地層出土遺物の取り上げ方法も標高による記載が大多数となり、整地層出土遺物の年代観から、各検出面の機能年代を想定することは困難である。こうした状況を踏まえ、本報告では各石垣による城下の拡張過程を基軸とした変遷を捉えることを主目的とし、前記した想定整地面という概念を用いた。

こうした概念整地面を念頭に置き、基本層序の作成を行った(第18・19図)。しかし、概念のみで遺跡を理解することは困難であり、またあるべき方向性ではない。そこで、最も良好なかたちで遺構変遷を捉えることができるⅠ・Ⅱ区における遺構面の変遷も指標とした。Ⅰ・Ⅱ区では西外曲輪を縦断する石組溝を検出しており、さらにⅣ区、高松城跡(西の丸町Ｂ地区)まで連続する。各調査区間の遺構検出面の対応関係を考える上では、キーとなる遺構であり、Ｂ地区における整地面との関係を知る上でもメルクマールとなる重要な遺構である。基本層序の作成には、概念のみならず、こうした遺構変遷とキーとなる石組溝を参考とした。

なお、それぞれのセクションポイントに関しては、第17図に示した。

第18図上段は、５条の石垣の断面図を張り合わせたものである。第17図において網掛けトーンでその位置を示した。弥生土器や須恵器を包含する狭義の基盤層であるⅠ層の直上に堆積する中世前半期の礫敷遺構とそれを包含するⅡ層を認める。その上位に整地を施し、最も南に位置するＳＺｃ01が構築される。それに伴う整地層がⅢ層となる。ＳＺｃ01の前面(海側)に堆積するⅣ層は、ＳＺｃ02に伴う整地土であり、その上面は想定第４面となる。同じく、ＳＺｃ02の前面に堆積したⅤ層は、ＳＺｃ02から40m海側に位置するＳＺｃ03に伴う整地土と判断でき、その上面は想定第３面となる。ＳＺｃ12はＳＺｃ03の北側約５mに位置し、それに伴う整地層の確認は一部に留まる(Ⅵ層)。ＳＺｃ12の前面堆積土は20～30m前後北側(海側)に位置するＳＺｃ13に伴う整地層＝Ⅶ層が堆積する。上面は想定第１面となる。さらに、ＳＺｃ13の前面に堆積したⅧ層は調査区外北側に位置するであろう護岸施設に伴う整地土と考えられ、その上面は想定第０面となる。上記したように、既存の石垣の前面にある海域を埋め立て、新たな石垣構築することにより、城下の拡張を実施していることが窺える。それぞれに石垣に伴う整地面の検出レベルは標高0.8～１m前後を測り、明治期以降の削平によって、大半の調査区では１面ないし２面の遺構検出面の確認に留まる。つまり、同一面で前記した複数の想定面を検出したことになる。

第18図中段は、５条の石垣を含め調査区を南北に縦断する基本層序である。第17図では実線の太線でその位置を示した。基盤層であるⅠ層とその上位に堆積する中世礫敷遺構ないしその包含層(Ⅱ層)を確認した。Ⅹ・Ⅸ・Ⅷ区ではわずかな凸凹を認め、起伏のある旧地形の復元が可能である(第２章第５節において中世段階に属する遺構を報告し、第３章第１節において詳細に検討する)。Ⅷ区以北の状況は上段の基本層序と同じであるが、Ⅲ区において、Ⅴ層上面に堆積した整地層を確認している(Ⅺ層)。その上面では大型の礎石建物を検出し、土質・検出レベル等から、Ⅷ区南端部で検出した層位に連続すると判断した。いずれの調査区もその上位には、明治期以降の整地層を認め(Ⅻ層)、Ⅺ層上面で検出した遺構は19世紀代に属すると考える。よって、１～1.2m前後の同一面において石垣の変遷から想定した複数の整地面が混在することになる。

なお、Ⅸ区ではⅻ層とⅡ層間に複数の層位を認め、それぞれの層位で遺構を検出している。しかし、層序の連続性を把握することは困難であった。同様に、Ⅹ区北端部においても複数の層位を認めるが、層位の連続性は不明である。その要因をⅩ区南端部の層序が端的に示している。黒塗部はＳＫｃ40の遺構埋土となる。１点のみ肥前系陶器溝縁Ⅲ細片を含むが、出土遺物の様相は17世紀第２四半期である。ＳＸｃ40は標高１m付近から開削された遺構となり、その所属時期からＳＺｃ01ないし02に伴う整地層、つまり想定第５ないし４面で検出すべき遺構であり、Ⅹ区北端部とⅨ区不明層位は第５ないし４面構成土に対応すると考えられる(Ⅲ層ないしⅣ層)。しかし、Ⅸ区ではその間に複数の遺構面を確認しており、矛盾が生じる結果となる。調査地点全域に連続する整地層が展開する状況ではなく、調査地点、各屋敷地単位で同時期の整地層の標高が異なる状況を想定しなければならない。しかし、Ⅸ区の調査成果からそれぞれの遺構検出面の年代を想起することはできなかった。

第18図下段は、享保３(1718)年に発生した高松大火後の主要地割である石組溝のセクションをいずれも北から南に向かう方向で配置したものである。絵図との関連では、石組溝の右側(西側)は大久保家屋敷地側、左側(東側)は西御屋敷側となる。第17図では◆印でその位置を示した。ここで層序を提示したⅠ・Ⅱ区は、複数の遺構面があり、石垣の変遷や石組溝検出面の関係を明確に捉えることができる。

Ⅰ層(基盤層)はⅠ区南端部でわずかに確認でき、最も南側に位置するＳＺｃ01石材に連続する。ＳＺｃ01に伴う整地層(Ⅲ層)は確認できないが、Ⅰ・Ⅱ区ではＳＺｃ02に伴う整地層(Ⅳ層)が標高１ｍ付近まで堆積する。その上面は想定第４面となり、Ⅰ区では第３面、Ⅱ区では第２面として遺構面を確認している。さらに、Ⅰ区南端部ではその上位にⅨ層の堆積を認め、それに伴う遺構面を確認している(Ⅰ区第２面)。その標高は１ｍ前後を測り、その上位に石組溝を検出した層位(Ｘ層)を認める。上端レベルは1.3ｍを測り、標高による調査区間の層位の連続性に問題を残すことを示す。Ⅰ区北端部では上面が削平を受け、標高１ｍの上面が現状での石組溝検出面となる。よって、Ⅰ区北端部で空白とした箇所は、Ⅸ層か石組溝検出面構成土であるＸ層かは判断できない。なお、その上位にはⅢ区ないしⅧ区南端部で確認したⅪ層の堆積を認める。一方、Ⅱ区南端部では標高１ｍまでⅣ層の堆積を認め、その上面で石組溝を検出しており、複数の想定面が混在した状況となる。Ⅳ層上位には19世紀代の遺構を上面で確認したⅪ層が堆積し、Ⅴ・Ⅵ・Ⅸ・Ｘ層がⅪ層形成時に失われたのか、元来敷設されていなかったのかは判断できない。

第19図上段は、調査区中央付近における東西方向の基本層序を示した。第17図では、▲印にポイントを示した。Ⅱ区を横断するＳＺｃ02の南に堆積したⅣ層と前面に堆積したＳＺｃ03に伴う整地層(Ⅴ層)が基本的にはベースとなる。Ⅲ区ではⅤ層上面において、一部の確認に留まるが、遺構面を確認した(Ⅲ区第２面)。その上位にはⅪ層を認め、上面において19世紀代に属する大型礎石建物群を検出している(Ⅲ区第１面)。ⅪⅪ層はⅡ区東部にも認め、同じく19世紀代に属するであろう礎石建物群を検出した(Ⅱ区第１面上位)。

Ⅱ区東部では1630年代後半に形成されたⅣ層をベースとし、現状ではそれを掘り込み面として、18世紀前半に属する石組溝を認める(Ⅱ区第１面下位)。検出レベルは標高1.1ｍを測る。Ⅰ区南端部における石組溝の掘り込みレベルは標高1.3ｍを測り、Ⅱ区とは0.2ｍの比高差を認める。Ⅱ区東部では、その上位にⅪ層が堆積し、この段階での削平も考慮する必要があるが、詳細は不明と言わざるを得ない。

第19図下段は、調査区南よりにおける東西方向の基本層序である。第17図では●印に該当する。Ⅰ層(基盤層)は、Ⅷ区ではほぼ水平面をなし、Ⅰ区において緩やかに西に傾斜する。その上面には中世礫敷遺構ないしそれを包含する層位が厚く堆積し、Ⅷ区における標高は１～1.2ｍを測る。その上位には明治期以降の整地層を認め(Ⅻ層)、Ⅷ区中央部では近世整地面は確認できない。遺構検出面はⅡ層上面において、すべての近世遺構を検出したことになるが(Ⅷ区第１面)、その上面では確認できず、Ⅰ層上面においても近世遺構を捉えた(Ⅷ区第２面)。報告では、Ⅷ区第３面という概念で、明治期を除く、近世遺構のみの概念的な面を設定している。Ⅰ区ではＳＺｃ01(16世紀末)の上位にＳＺｃ02に伴う整地層が厚く堆積する(Ⅳ層)。その上位にはⅨ層を認め、上面においてⅠ区第２面の主要遺構であるＳＢｃ01とＳＤｃ01を検出している。Ⅰ区第１面は石組溝を主要遺構とした検出面で、Ｘ層上面に該当する。標高は1.2～1.3ｍを測り、Ⅱ・Ⅲ区で検出したこの上位に堆積するⅪ層と等しいレベルとなる。

以上、高松城跡(西の丸町Ｃ地区)における基本層序について報告した。連綿と整地した層位を確認できる調査区は皆無に近く、隣接する西の丸町Ｂ地区で確認されている６面におよぶ近世遺構面との対応を明記することは困難な状況である。しかし、石垣の変遷や広域に展開する石組溝、Ⅰ・Ⅱ区における遺構面の変遷を足掛かりとし、前記したような概念想定面を用いることを選択した。

## 第４節　近世遺構

本来であれば、前記した概念想定面に基づき報告すべきであるが、恣意的な作業により導き出した不安定な時間軸に沿った事実報告は、今後の検証作業の妨げになることは否めない。前節で述べたように、複数の整地面に属する遺構が、削平等により同一面で確認している状況もそれに拍車をかける。

こうした状況を考慮し、本報告では各調査区の遺構内容やその連続性、整地面の変遷を検討し、近似した内容を持つⅠ～Ⅺ区の調査区を再設定し(第14図)、各調査区別に報告することとする。事実報告では、高松城跡(西の丸町Ｂ地区)の整地面との対応関係は明記せず、各調査区において発掘調査時に確認した遺構検出面に基づき、第１面、第２面、第３面等として提示する。その際、隣接した調査区における遺構の連続性を認める場合が多々あり、各調査区の冒頭で提示する遺構配置図において、隣接調査区の状況も掲載する。

なお、各調査区間の整地面の対応関係や高松城跡(西の丸町Ｂ地区)との関係については、第３章第３節で検討したい。

## 1．Ⅰ区

### 基本層序

調査では３面の遺構面を検出した。第24図に基づきⅠ区の基本層序について触れる。高松城築造以前の堆積層として、25～27層を確認した(その上面には中世遺物を含む包含層＝ＳＸｃ50包含層が形成される)。これを掘り込みＳＺｃ01が構築される(24層)。ＳＺｃ01に伴う整地面は確認できないが、Ⅰ区第３面として捉えた。14～23層はＳＺｃ01からＳＺｃ02への拡張に伴う整地層である。これに伴う遺構は確認できないが、上層に堆積した12・13層上面でＳＢｃ01・ＳＤｃ01ほかを検出しており、Ⅰ区第２面とした。ＳＢｃ01の検出レベルから、11層も第２面構成土の可能性が高い。さらに、ＳＢｃ01を被覆する３～８層はＳＤｃ02の掘り込み面でもあり、Ⅰ区第１面構成土と判断した。

### 第１面(第20図)

標高1.1～1.3mで確認した遺構面である。数条の石組溝を中心に確認し、なかでもＳＤｃ02は北接するⅡ区ＳＤｃ09、その北に位置するⅣ区ＳＤｃ11に連続する区画溝である。さらに、Ⅰ区南の高松城跡(西の丸町Ｂ地区)でも確認できる。西外曲輪のほぼ全域を東西に区画する施設として注目でき、各調査区の遺構面の対応関係を考える上でメルクマールとなる。遺構の重複関係から、ＳＤｃ02～05が機能した段階とその廃絶後に構築されたＳＤｃ06の２時期以上の所属時期の遺構が混在した状況が窺える。

以下、各遺構について述べる。

### 柱穴

**ＳＰｃ70**(第26図)　Ⅰ区南西端部で検出した柱穴である。明瞭な掘方は確認できないが、拳大の小礫を充填しており、一部礎石の可能性が高い板状の石材も確認できる。

**ＳＰｃ65**(第26図)　Ⅰ区南西部で検出した柱穴である。掘方底面に沿って礫を敷き詰めた状況が確認できる。

**ＳＰｃ62**(第26図)　Ⅰ区南部で検出した柱穴である。ＳＰｃ65と同様に掘方底面に沿って拳大以上の礫を敷き詰める。柱の根固め石の可能性が高い。

**ＳＰｃ57**(第26図)　Ⅰ区南東隅で検出した柱穴である。

**ＳＰｃ48**(第26図)　Ⅰ区北東部で検出した柱穴である。ＳＰｃ49・50とともに列状に並ぶが、内容は明らかではない。

**ＳＰｃ60**(第26図)　Ⅰ区南部で検出した柱穴である。ＳＤｃ04構築以前の柱穴の可能性が高い。

### 土坑

**ＳＫｃ01**(第26図)　Ⅰ区東部で検出した土坑である。ＳＤｃ05と重複関係を有し、それに先行する。検出長1.9m、検出最大幅約１mを測り、平面形は長楕円形を呈する。深度は0.18mを測り、焼土・炭化物を含む灰色粘質土の単一層である。

### 溝状遺構

**ＳＤｃ02**(第25図)　Ⅰ区ほぼ中央部で検出した石組溝である。調査区を南北に縦断し、主軸方位はＮ４°Ｅの方位を示す。石材の重複関係から、ＳＤｃ04・05と同時期の所産であり、ＳＤｃ06に先行し、ＳＤｃ03には後出すると考える。第24図に基づき、その掘り込み面について述べると、ＳＤｃ02の東側では確認する限りでは３層を掘り込み面とする。その上層に堆積する２層は攪乱ないし表土層であり、厳密な掘り込み面について言及することはできないが、少なくとも３層はⅠ区第１面に伴う整地層と判断することができる。その上面レベルは1.3mを測る。西側は攪乱層が1.1m付近まで及び掘り込み面について言及することはできない。ただ、12・13層上面においてⅠ区第２面の主要遺構であるＳＢｃ01・ＳＤｃ01を検出しており、その上層に堆積した５～８層はＳＤｃ02構築面であり、Ⅰ区第１面に伴う整地層と判断することができる。

ＳＤｃ02は一辺約0.3～0.4mを測る方柱状の石材を側石とし、最大で２段の構築を確認している。石材は、安山岩が主体を占め、一部ＳＺｃ01の石材を転用した可能性も残る花崗岩・角礫凝灰岩も認める。溝の内幅は0.4～0.5m前後、掘方は約２m前後を測り、裏込に拳大以下の礫を充填する。溝内の埋土は第24図では、下層に灰色粘質土(36層)、中層に灰色粘質土(35層)、上層に淡灰色粘質土(34層)がそれぞれ堆積する。第25図Ｅ－Ｅ’間のセクションを参考にすると、中層の堆積土の砂粒子は細かく、上層の粒子は粗いことが窺える。下層埋土は粘土層で、溝底に敷設した可能性も残る。溝の勾配は側石の基底レベルで北に向かって約１°傾斜する。

また、その検出位置や遺構内容からⅡ区ＳＤｃ09・10、Ⅳ区ＳＤｃ11と同一遺構であることが窺える。さらに、本調査区の南に位置する高松城跡(西の丸町Ｂ地区)のＳＤｂ28にも連続する。南北検出長は約140mに達し、調査地点である西外曲輪を東西に画する区画施設と評価することができる。

**ＳＤｃ03**(第25図)　Ⅰ区北端部で検出し、ＳＤｃ02の東側側石の0.6m東に位置する石組溝である。Ⅱ区の状況を考慮すると、ＳＤｃ03はＳＤｃ02の本来の東側側石に該当し、Ⅰ区で検出したＳＤｃ02の東側側石の大多数は修築に伴い、規模を縮小した段階の側石であることが窺える。よって、ＳＤｃ02の本来の内幅は約1.1m前後であったと考えられる。主軸方位はＮ４°Ｅを呈する。

**ＳＤｃ04**(第25図)　Ⅰ区南部で検出し、ＳＤｃ02に隣

接、平行する石組溝である。北端部はＳＤｃ05と重複関係を有し、それに先行する。両側石を認め、西側の側石はＳＤｃ02の東側石に接するように構築される。同時期の所産とも考えられるが、ＳＤｃ02の東側石に持たせかけるように、ＳＤｃ03の東側側石を設置した状況も窺える。検出最大長1.8m、内幅0.4mを測り、西側側石は２段、東側石は１段分積んでいるのが確認できる。使用石材は安山岩が大多数を占め、砂岩を少量認める。主軸方位はＮ３°Ｅを測る。ＳＤｃ03とは構造・主軸方位が異なり、連続する遺構ではなく、ＳＤｃ03とＳＤｃ04の間で屋敷割ないし屋敷地内の空間構成が変化している状況が窺える。

**ＳＤｃ05**(第25図)　Ｉ区南部で検出した石組溝である。ＳＤｃ04に後出する重複関係を有し、西端部はＳＤｃ02に連結する。主軸方位はＳＤｃ02に直交し、N77°Wを測る。写真観察ではＳＤｃ02の東側石の一部を外して連結部を設け、さらにＳＤｃ02の東側石の一部をＳＤｃ05の北側石に兼用した状況が窺える。使用石材は安山岩が主体を占める。また、埋土は第25図Ｇ－Ｇ'間セクションが示すように、６層埋土はＥ－Ｅ'間堆積土の１層と同埋土であり、ＳＤｃ02上層埋土を共有している状況が窺える。

**ＳＤｃ06**(第26図)　Ｉ区南端部で検出した溝状遺構である。ＳＤｃ02に後出する。主軸方位はN88°Wを測り、ほぼ東西主軸を呈するが、ＳＤｃ02手前で直角に屈曲し、南に延びる。東西検出長約10m、南北検出長２mを測る。溝幅・深度ともには約0.5m前後を測り、溝上位埋土を中心に拳大からその２倍程度の安山岩塊石ないし板石を充填した暗渠構造を呈する。

以上、ＳＤｃ02～06の重複関係を中心にその構築過程を整理すると、ＳＤｃ02西側石とＳＤｃ03を東側石としたプレＳＤｃ02が構築され(溝幅１m)、その後、規模を縮小したＳＤｃ02が築かれる。ＳＤｃ04はＳＤｃ02と同時期の所産と考えられるが、側石の重複関係から若干後出して築かれた可能性も残る。ＳＤｃ05はＳＤｃ04に後出し、ＳＤｃ02の東側石を外してそこに排水した状況が窺える。つまり、ＳＤｃ02が機能した時期幅は比較的長いと考えられ、ＳＤｃ06の構築によって機能を失うという変遷が想定できる。

**第２面(第21図)**

ＳＢｃ01とＳＤｃ01を検出した標高0.9m前後で確認した遺構面である。同一レベルで柱穴や土坑も確認している。なお、第２面から第３面への掘り下げ時に確認したＳＸｃ01も第２面として提示しているが、厳密には標高0.9m遺構面で捉えた遺構ではなく、第３面との関係から、第２面とした。

**建物**

**ＳＢｃ01・ＳＤｃ01**(第27図)　Ｉ区南西部で検出した礎石建物と石組溝である。ＳＢｃ01は0.5m以下の礎石と考えられる石材が不規則に並び、Ｉ区南壁にもその可能性がある石材を認める。礎石を含む範囲において、小礫を多量に含む整地土が敷設されており、ＳＢｃ01に伴う施設と考えられる。第27図では一点破線でその範囲を表現した。地盤を安定させると同時に除湿機能があったと考えられる。

ＳＤｃ01はＳＢｃ01の北に近接した石組溝である。ＳＢｃ01に伴う区画施設と考えられる。東端部は第１面ＳＤｃ02により失われ、東西検出長は8.8mを測る。主軸方位は、N87°Wを呈し、ＳＢｃ01の遺存する礎石列にほぼ平行した位置関係になる。溝幅は0.6～１mを測り、溝内に安山岩塊石・花崗岩を用いた石組を設置するが、大多数は抜き取られている。

**柱穴**

**ＳＰｃ36**　Ｉ区南端部で検出した柱穴である。
**ＳＰｃ18**　Ｉ区北端部で検出した柱穴である。
**ＳＰｃ12**　Ｉ区北端部で検出した柱穴である。
**ＳＰｃ14**　Ｉ区北部で検出した柱穴である。

**不明遺構**

**ＳＸｃ01**(第28図)　Ｉ区中央部で検出した不明遺構である。検出レベルは0.5m付近であり、厳密には第２面(標高0.9m)で確認した遺構には該当しない。上面での検出状況は乱雑に塊石を積み重ねた状況であったが、掘り下げると、西側に面を認めることを確認した。標高0.1m前後を基底面とし、長さ0.3m、幅0.2m前後の石材(安山岩・花崗岩)を縦方向に立て並べ、その上部にやや小型の塊石を数段小口積みしている。その性格は不明であるが、ＳＸｃ01は第３面のＳＺｃ01の北側に位置し、ＳＺｃ02(ＳＺｃ01の北約20m位置する石垣、1630年代後半の築造を想定)に伴う整地土を掘り込み面としており、ＳＺｃ01に伴う第３面の遺構でないことは明白である。第28図Ｐ－Ｐ'間の断面では、４～８層埋土が溝状の掘方内に堆積している状況が窺え、ＳＸｃ01は溝状遺構の一部であった可能性を想定することができる。

**ＳＸｃ02**(第28図)　Ｉ区中央部やや南よりで検出した不明遺構である。標高0.8m前後で検出し、第28図Ｐ－Ｐ'間のセクションが示すように、ＳＸｃ01埋没後に構築された遺構である。拳大からその２倍程度の石材を列状に配置しており、検出長約6.4mを測る。主軸方位はＮ４°Ｅを測る。調査時には地割石列と呼称し、Ⅱ区で確認した同様の遺構＝ＳＸｃ04とほぼ同じ主軸方位を呈しており、関連した遺構である可能性が高い。南に延伸させると、高松城跡(西の丸町Ｂ地区)の鍵形

街路を構成する柵列やＣ地区まで続く石組溝といった重要な地割ラインに合致しており、地割を示す区画施設の可能性を想定しておきたい。

**第３面(第22図)**

標高０～－0.2m(マイナス)を基底面として、石垣(ＳＺｃ01)を確認した。これに伴う遺構面は確認できないが、これを第３面とした。ＳＺｃ01内には中世段階に属する礫敷遺構＝ＳＸｃ49の石材が充填しており(図版68)、近世遺構を確認することはできなかった。

なお、ＳＺｃ01は隣接するⅦ区・Ⅷ区でも確認しており、高松城跡(西の丸町Ｃ地区)で確認した石垣のなかでは最も南に位置する石垣であり、最も古い構築年代を付与することができる。

**石垣**

**ＳＺｃ01**(第29図)　Ⅰ区全域で検出した石垣である。調査区北側で「く」字形に屈曲し、西辺はＮ19°Ｅ、北辺はＮ75°Ｅ方向に築かれる。両辺がなす隅角は125°を測る。標高０～－0.2mを基底面として、最下段石材を設置する。基底面レベルは東辺では北に向かってわずかに傾斜するが、北辺はほぼ水平である。石材は直接加工の粗い角礫凝灰岩・花崗岩・安山岩を砂上に設置しており、胴木等の施設は確認できない。石材は１段の検出に留まる箇所が大半であるが、最大で２段遺存しており、その勾配は75°前後を測る。石垣の構築法は、野面積みの範疇に収まる。裏込の状況を第29図Ｑ－Ｑ'間セクションで確認すると、基盤層である１～５層上面に中世前半に属する礫敷遺構であるＳＸｃ49石材が敷設され、それを切り込むようにＳＺｃ01の掘方を設け、前面石材を設置する。裏込には一辺0.2～0.4m前後の石材を充填する。なお、護岸前面石材には蛎殻等の付着は認められず、石垣は水面上に出ている場合が多かったと考えられる(古野ほか2000)。

ＳＺｃ01を含め、検出した５列の石垣は調査対象地である西外曲輪のそれぞれの所属時期の北辺に該当し、海域と城下を区画する施設、現代の防波堤のような機能を想定することができる。

## ２．Ⅱ区

**基本層序**

調査では２面の遺構面を確認している。第32図に基づき、Ⅱ区の基本層序について触れる。Ⅱ区ではⅠ区ＳＺｃ01から約20m北に拡張した石垣＝ＳＺｃ02を検出し、出土遺物の年代観から1630年代後半の構築を想定している。海域を埋め立てた城下の拡張であり、ＳＺｃ02以南の堆積層はそれに伴う海域の埋め立て土と評価することができる。第32図では、14層がＳＺｃ02の掘方埋土、15～25層がそれに伴う整地土に該当する。さらに、ＳＺｃ02から約40m北にＳＺｃ03が位置する(17世紀中葉の構築を想定)。同じく、海域を埋め立てた城下の拡張であり、ＳＺｃ02の前面に堆積する11～13層はＳＺｃ03に伴う整地土と判断できる。よって、Ⅱ区で検出したＳＺｃ02の南には、それに伴う整地土、北にはＳＺｃ03に伴う整地層がそれぞれ堆積していることになる。

遺構面は２面確認し、さらに第１面は遺構の重複関係から分離が可能であり、第１面上位と下位として報告する。第１面上位は下位の主要遺構であるＳＤｃ07・09の機能停止後の遺構面であり、第32図５・７～９層上面に該当する。出土遺物では、1.3～1.1m整地層、ＳＤｃ07・09間整地層が第１面上位構成土となる。削平により確認できる箇所は一部に留まるが、遺存状況が良好な箇所の標高は、1.3m前後である。第１面下位のＳＤｃ07・09はＳＺｃ02に伴う整地土である15～25層上面を掘り込み面としており(34・52層)、第１面下位に伴う整地層は認められない。ＳＤｃ09はⅠ区ＳＤｃ02に連続し、Ⅰ区第１面の標高が1.1～1.3mである点を考慮すると、第１面下位に伴う整地層は、上位面の形成段階に削平されたか、元来敷設されなかった可能性が想定できる。第２面はＳＺｃ02に伴う整地面としたため、第１面下位と同じく、15～25層上面となる。

**第１面上位(第30図)**

削平等により検出レベルは安定しないが、標高1.1～1.3mで確認した遺構面である。下位面の石組溝であるＳＤｃ07・09の機能停止後の整地層上面において、礎石建物を中心とした遺構が展開する。

**建物**

**ＳＢｃ02**(第34図)　Ⅱ区中央部で検出した礎石建物である。「コ」字形に石材を敷き並べた遺構で、その東辺はＳＤｃ09の石組を破壊した位置に築かれる。石材の大多数は安山岩が占める。石敷を除去した状況を赤色で示したが、南北２間(礎石間隔２m)、東西１間以上(礎石間隔２m)の礎石建物を確認した。南北の主軸方位はＮ３°Ｅの方位となる。各礎石は0.5m前後の上端面の扁平な大形石材を据え、その周囲の形状に沿って拳大からその２倍程度の石材を配置する構造を呈する。

第34図Ｅ－Ｅ’間セクションでは大形石材の下にも石材を認めるが、第１面下位遺構であるＳＤｃ09石材に該当する。さらに南端の礎石列の南側１ｍにも平行する礎石列を認め、関連する施設と考えられる。礎石間隔は2.3ｍを測り、東端礎石は前述した建物の東辺主軸に合致する。

こうした状況を考慮すると、「コ」字形に石材を敷き詰めた遺構は、前述した礎石の間に位置し、礎石建物に関連した施設であることが窺える。土蔵の基礎とまでは言及できないが、沈下を避けるために設けられた施設と評価できよう。なお、ＳＤｃ09延長部、ＳＤｃ09敷石部分、ＳＤｃ09敷石下がＳＢｃ02に伴う出土遺物と考えられるが、その大多数は後述するＳＤｃ09の所属時期である18世紀前半の遺物が占める。少量ではあるが、19世紀前半に属する遺物もあり、ＳＢｃ02の所属時期を窺うことができる。

**ＳＢｃ03**(第35図)　Ⅱ区中央部で検出した礎石建物である。ＳＢｃ02と重複関係を有し、それに後出する。標高1.2～1.3ｍで検出し、第１面下位遺構であるＳＤｃ09の機能停止後の整地土上面に構築される。第35図では３・５～13・16～22層がそれに該当する。「Ｔ」字形の平面プランで、南北３間、東西２間の礎石列を確認した。南北主軸方位はＮ４°Ｅの方位を示す。礎石は0.5ｍ前後の板石を用い、一部には礎石を据える浅い掘方を設け、埋土には漆喰も認める。さらに、ＳＰｃ83の礎石直下には黄土色粘土(第35図１層)を敷設する状況も確認した。

**ＳＢｃ04・05**(第36図)　Ⅱ区西部で検出した礎石建物である。検出レベルは標高1.2～1.3ｍを測り、第１面下位遺構であるＳＤｃ09の機能停止後の整地層＝第１面上位整地層の上面で検出した。東端の礎石列が直線上を呈し、遺存する礎石間隔が東西・南北ともに1.8ｍ前後を測ることから、南北４間以上、東西２間以上の礎石建物であることが窺える。南北主軸方位はＮ４°Ｅの方位を測る。攪乱部が中央に及ぶ点や調査区外に延長することを考慮すると、総柱建物であった可能性が高い(当初は２棟の建物と考えており、遺構名を２つ付けたが、後の検討の結果１棟と判断した)。礎石の大半は失われているが、径１ｍ、深度0.3ｍ前後の掘方内に比較的締まった埋土を充填し、その上部に拳大の小礫を多量に配置して礎石を据える構造を呈する。

**ＳＢｃ06**(第37図)　Ⅱ区中央やや西よりで検出した礎石建物である。検出レベルは1.3ｍ前後を測り、第１面上位整地層の上面で検出した。東西に並ぶ礎石を３石確認し、その主軸方位はＮ88°Ｗの方位となる。礎石は0.5ｍ前後の板石を用い、礎石間には拳大からその２倍前後の小礫を配置する。その小礫の範囲は東西礎石列の北には広がらず、東西礎石の両端から、「コ」字形に延びることから、ＳＢｃ06は南に延長する建物であることが窺える。また、第37図セクションが示すように、小礫は礎石の下部には及ばないため、礎石の沈下を防ぐものではなく、ＳＢｃ02と同じく上物の沈下を防ぐ施設と考えられる。

**不明遺構**

**ＳＸｃ03**(第37図)　Ⅱ区西端部で検出した不明遺構である。検出レベルは1.1～1.2ｍを測り、検出面は第１面上位整地層か否かは不明である。拳大からその３倍程度の石材を集積した遺構で、明瞭な掘方は確認できない。しかし、一部には礎石にも利用可能な規模の石材を認め、直線的に分布する状況を踏まえると、ＳＢｃ02・06で確認した礎石建物の礎石間に配置したのと同じ構造であった可能性も否定できない。

**第１面下位(第30図)**

削平により検出レベルは安定しないが、前述したように、ＳＤｃ09はＳＺｃ02に伴う整地土である15～25層上面を掘り込み面としており、第１面下位に伴う整地層は認められない。ＳＤｃ09・10はⅠ区ＳＤｃ02、Ⅳ区ＳＤｃ11に連続し、調査区間の整地面の対応関係を考える上では、重要な遺構である。検出遺構はＳＤｃ09・10とそれに平行するＳＤｃ07・08のみである。

**溝状遺構**

**ＳＤｃ09・10**(第38図)　Ⅱ区中央部で検出した石組溝である。検出レベルは1.1ｍ前後を測り、第32図に示したⅡ区南壁面によると、52層がＳＤｃ09掘方裏込埋土に該当する。その検出面はＳＺｃ02構築に伴う整地層であり、その上層に堆積した７層は第１面上位整地層と考えた。北半は後出して構築されたＳＢｃ02により失われ、南北検出長は７ｍ前後となる。主軸方位はＮ４°Ｅの方位を示す。石組は東西側石に加え、その間にも側石を認める。当初、東西側石でＳＤｃ09を構成し、その後西側石と中側石に規模を縮小したと考えられる。当初の溝内幅は１ｍ、規模を縮小した段階は0.4～0.5ｍ前後を測る。西側石は最大２段、東側石は３段、中側石は１段構築しているのを確認した。西側石と中側石がほぼ0.4ｍ前後を測る石材を使用しているのに対し、東側石は0.3ｍ前後のやや小型石材を用い、横目地が明瞭に確認できる。西・中側石と東側石では使用石材・構築方法が異なり、東西側石→西・中側石という変遷とは呼応しない。こうした状況を重視すると、規模を縮小する段階に西側石も再構築された可能性を想定することができる。掘方は約1.2ｍを測る。埋土は第38図Ｏ－Ｏ’間セクションでは、59層が当初のＳＤｃ09埋土下層に該当し、灰緑色粘質土が堆積する。溝底に敷設したものか、堆積した埋土かは不明であるが、

堅緻に締まる。54層は規模を縮小した段階の埋土となる。58層には、中側石が存在するが、当該箇所では失われている。溝内の勾配は明らかではないが、側石の基底石レベルはほぼ水平である。

**ＳＤｃ07・08**(第39図)　Ⅱ区中央東よりで検出した石組溝である。検出レベルは1.2m前後を測り、掘方検出面は、第39図Ｖ－Ｖ’間セクションによると、ＳＺｃ02に伴う整地層上面となる。主軸方位はＮ３°Ｅとなり、ほぼＳＤｃ09に平行するが、北端部でN23°Ｗに屈曲する。この屈曲部は再構築された可能性が高く、溝幅を減じており、両袖式の横穴式石室の玄室と羨道部のように凸形の平面形を呈する。さらに、ＳＤｃ07に連続するＳＤｃ08では、東側石を確認し、それに直交する南側石も検出した。当該箇所で集水枡状の施設となるか、もしくは西に屈曲してＳＤｃ09に連続すると考えられる。溝底ないし側石基底石レベルは北に向かい緩やかに傾斜する。側石には0.4m前後の方柱状の形状を呈する安山岩が用いられ、ほぼ１段のみの確認に留まる。埋土は第39図Ｔ－Ｔ’間セクションでは、下層に粗砂層、中層に灰緑色粘質土、上層に暗灰緑色粘質土がそれぞれ堆積しており、下層における流水、中・上層における滞水状況を窺うことができる。西側石の大半は失われているが、溝内幅は0.4～0.5mを測り、屈曲部以北は0.3～0.4mとなる。掘方を確認した箇所では1.5mを測る。

**第２面(第31図)**

第１面下位との検出標高差はないが、ＳＺｃ02構築に伴う整地面を第２面とした。第32図では、14層がＳＺｃ02の掘方埋土、15～25層がそれに伴う整地土に該当し、その上面で検出した遺構面である。確認した遺構は稀薄で、ＳＺｃ02を除くと、Ⅰ区ＳＸｃ02と関連するＳＸｃ04のみに留まる。

**石垣**

**ＳＺｃ02**(第40図)　Ⅱ区を東西に横切るように確認した石垣である。Ⅰ区で検出したＳＺｃ01から約20m北に位置する。主軸方位はN78°Ｅの方向となり、ほぼＳＺｃ01に平行し、検出した限りでは直線上を呈する。基底石設置レベルは標高０ｍを測るが、その設置方法は標高0.2mの砂を深さ0.15m前後掘り込み、その上に石垣石材を設置している(古野ほか2000)。使用石材は長さ1.0m、高さ0.4～0.8m、奥行き0.5～0.8m前後を測る角礫凝灰岩が主体をなし、その間隙に拳大から人頭大の砂岩系石材ないし安山岩を充填する。前面石材の勾配は約70°を測る。凝灰岩は粗い直接加工により切り出されたもので、矢穴は確認できない。一部に横目地が通る箇所を認めるが、その構築法は野面積みの範疇である。最も遺存状況が良好な箇所で最大２段積んでいるのを確認し、残存石垣の最高位は標高0.95mを測る。よって、ＳＺｃ02の南側にあり、少なくともそのレベルより下位の堆積土はＳＺｃ02に伴う整地土となり、第33図Ｃ－Ｃ’間セクションでは１～３層がそれに該当する。裏込は稀薄で、標高0.6m前後に拳大から人頭大の石材を散漫に配するに過ぎない(図版13)。

**不明遺構**

**ＳＸｃ04**(第21・31図)　Ⅱ区中央部で検出した不明遺構である。拳大からその２倍程度の石材を列状に配置しており、検出長は約6.5mを測る。主軸方位はＮ４°Ｅを測り、Ⅰ区ＳＸｃ02と同じ主軸方位を呈する。約１ｍ前後のずれがあり、同一直線上にはならないが、関連した遺構である可能性は高い。前述したように、主要地割ラインに合致しており、何らかの区画施設と考えられる。また、その北端はＳＺｃ02の南で途切れ、検出レベルも1.0m以下であることから、第２面に伴う遺構と判断した。

## 3．Ⅲ区

### 基本層序

Ⅲ区では２面の遺構面を確認したが、第２面は旧調査区Ｂ３区のみの確認に留まる。標高1.0m以下には、細砂・粗砂層が堆積し、その上面において第２面を確認している。Ⅲ区はⅡ区で確認した石垣（ＳＺｃ02）の北に位置し、それに伴う遺構面は存在しない。ＳＺｃ02の北約40mにＳＺｃ03が位置し、1.0m以下の埋土、第43図Ａ－Ａ’間セクション15層、Ｂ－Ｂ’間セクション11～13層はＳＺｃ03に伴う整地土＝海域の埋め立て土と判断できる。第１面はその上層に堆積するＡ－Ａ’間12～14層上面で検出した。標高は1.3～1.4m前後を測る。Ⅱ区における第１面上位構成土に対応する整地層と理解できる。

なお、Ⅲ区は享保年間（1716～36）に描かれた『高松城下図』では「西御屋敷」と記載されており、藩主の居住域に該当する調査地点である。

### 第１面（第41図）

標高1.3～1.4mで確認した遺構面である。大型の礎石建物を中心に確認した（ＳＢｃ07・ＳＡｃ04）。ＳＢｃ07の南北礎石列の一部は、後述するⅣ区の礎石建物（ＳＢｃ08）と主軸方位のみならず、ほぼ一直線上に並んでおり、関連性を指摘することができる。

### 建物

**ＳＢｃ07**（第44図）　Ⅲ区ほぼ全域で検出した大型礎石建物である。南北検出最大長13.6m、東西検出最大長10.8mを測り、調査区外へ延長するため、その正確な規模は明らかではない。主軸方位はＮ４°Ｅの方位となる。礎石列の位置関係から、ＳＡｃ04もＳＢｃ07に伴う遺構であることが窺え、ＳＢｃ07に付随する門の可能性も考慮する必要がある。さらに、第44図Ｅ－Ｅ’の礎石列の延長線上に位置するＳＰｃ115の存在を重視すると、東西検出最大長は16.8mとなる。ＳＰｃ115を除くと、東西主軸では礎石間が約２m、６間、南北主軸では礎石間４m前後を測り、ＳＡｃ04を含めないと２間に復元できる。礎石間の距離が長く、上物を支えることが困難であり、遺構面上に直接礎石を設置した束柱の存在を想定する必要がある。

礎石は、一辺１m前後を測る浅い深度の柱穴を設け、暗黄褐色粘土ブロックを含む暗褐色粘質土や褐色砂質土を充填し、その上部に設置する。0.3～0.5m前後の扁平な安山岩塊石を用い、上端レベルは標高1.3m前後に揃えられる。

なお、ＳＢｃ07に平行した主軸方位をとる溝状遺構を検出した（**ＳＤｃ10**）。検出最大長４m、溝幅0.9m前後を測る。その位置関係から、ＳＢｃ07に伴う雨落ち溝的な性格を付与することができる。また、Ⅳ区ＳＢｃ08南北礎石列は、ＳＢｃ07西端礎石列に合致し、何らかの関連性は指摘できるが、ＳＤｃ10の存在があり、同一建物の可能性は極めて低い。

### 柵列

**ＳＡｃ04**（第44図）　Ⅲ区南部、ＳＢｃ07の南に位置する柵列である。主軸方位はＮ86°Ｗとなり、ＳＢｃ07に正確に直交ないし平行する。さらに、ＳＰｃ97はＳＢｃ07の西端部礎石列の延長線上に位置し、関連した施設として評価できる。礎石には0.6～0.8mの規模を測る大形板状石材を用い、ＳＢｃ07使用石材より大形石材が選択される。礎石間隔は約４mを測る。ＳＢｃ07に伴う門としての性格を想定しておきたい。

**ＳＡｃ03**（第45図）　Ⅲ区中央北端で検出した柵列である。主軸方位はＮ86°Ｗにとり、ＳＢｃ07・ＳＡｃ04に合致する。一辺0.5m前後を測る板状石材を用い、礎石間は約３mを測る。礎石上端レベルに比高差を認め、その存在には問題を残す。

### 柱穴

**ＳＰｃ115**（第45図）　Ⅲ区西端部で検出した柱穴である。埋め戻した柱穴の上端に拳大の石材を配置し、0.5m前後の扁平な塊石も混在する。ＳＢｃ07のＥ－Ｅ’礎石列の延長線上に位置し、それに伴う礎石の可能性も否定できない。

**ＳＰｃ176**（第45図）　Ⅲ区南西部で検出した集石である。0.3m以下の石材を不規則に配置し、円形を呈する箇所も認める。復元することはできなかったが、礎石建物を構成する柱穴の可能性を残す。

**ＳＰｃ117**　Ⅲ区中央北端部で検出した柱穴である。

### 土坑

**ＳＫｃ04～06**（第46図）　Ⅲ区西部で検出した土坑列である。ほぼ南北主軸で直線的に３基の土坑が並列する。平面形はほぼ円形を呈し、深度はいずれも0.15m前後と浅く、舟底状の断面形状となる。埋土は黒褐色弱粘質土で、埋土中に少量の炭化物を包含する。

**ＳＫｃ09**（第46図）　Ⅲ区中央で検出した土坑である。旧調査区では、ＳＫｃ09北半をＢ２区、南半をＢ３区で検出したことになる。平面形は２×1.8mを測る長楕円形ないし隅丸方形の平面プランを呈する。断面形状は逆台形を呈し、一部深くなる。仔細に観察すると、底面と立ち上がり部の屈曲部分において、北東部・南西部ともにオーバーハング気味に抉り込む状況が窺え、第46図４層埋土の埋積前段階には滞水状態であった可能性が想定できる。

**ＳＫｃ11**（第46図）　Ⅲ区西部で検出した土坑である。平面形は不整形、断面形状は0.1m前後の浅い舟底状を

呈する。埋土は下層に炭化物包含層（２層）、上層に赤灰色粘質土の焼土層（１層）がそれぞれ堆積し、底面には被熱痕を認める。

**ＳＫｃ12**（第46図）　Ⅲ区西部で検出した土坑である。北半は側溝により消失するが、平面形は径0.5m前後の円形を呈する。断面は浅い舟底状を呈し、埋土は焼土層が堆積し（１層）、底面には厚い被熱層を認める。前述したＳＫｃ11に隣接し、いずれも底面に被熱痕を認め、関連した遺構であることが窺える。

**ＳＫｃ07**（第47図）　Ⅲ区北部で検出した土坑である。３×1.4m以上の長方形の平面プランを呈する。４～９層を埋土とし、少なくとも1.4m以上の遺構面から掘削された遺構であることが窺える。最下層には礫を多量に包含する灰色砂質土が堆積し（９層）、下層に炭化物を含む灰色ないし黄土色粘質土を認め（７・８層）、淡褐色砂質土を介在し（中層、６層）、上層に灰色ないし黄土色粘質土が堆積する。最下層と下層、中層と上層埋土にそれぞれ対応関係を認め、遺構の性格が反映すると考えられるが、その性格は不明である。出土遺物の年代観は18世紀第４四半期である。

**ＳＫｃ13・14**（第47図）　Ⅲ区中央西よりで検出した土坑である。径0.7m前後の楕円形の平面形態を呈する土坑が0.3m間隔で２基並列する。埋土は明らかではないが、ＳＫｃ13には0.2m前後を測る石材を認める。

**不明遺構**

**ＳＸｃ06**（第46図）　Ⅲ区西端で検出した不明遺構である。調査区外へ延長するため、全容は不明である。検出した限りでは、不整形を呈する。埋土は、下層に赤灰色粘質土、上層に淡褐色粘質土が堆積する。

**第２面（第42図）**

調査時の調査区名では、Ｂ３区でのみ確認した遺構面である。標高1.1m前後で確認し、第43図Ａ－Ａ’間セクション15層、Ｂ－Ｂ’間セクション11～13層上面が第２面に相当する。遺構密度は稀薄である。

**柵列**

**ＳＡｃ01**（第45図）　Ⅲ区中央北端で検出した柵列の可能性が高い遺構である。0.2m前後の石材が不規則ながら直線状に並び、主軸方位はN83°Wを示す。その検出長は7.8mを測る。柱穴等の下部構造はなく、遺構面直上に石材を直接設置していたようである。

**ＳＡｃ02**（第45図）　Ⅲ区中央部で検出した柵列である。５基の柱穴がN84°Wの主軸方位で直線的に並ぶ。一部には根石も確認できる。ＳＡｃ01とほぼ平行した主軸方位を呈し、関連した遺構の可能性も残すが、第１面で確認したＳＢｃ07のＣ－Ｃ’東西礎石列ともほぼ同位置で検出している。

**土坑**

**ＳＫｃ02**（第45図）　Ⅲ区中央やや西よりで検出した土坑である。平面形は方形を呈し、南北長0.6m、東西長0.9mを測る。南北断面形状は逆台形を呈し、埋土は褐灰色粘質土の単一層である。

**ＳＫｃ03**（第45図）　Ⅲ区中央西よりで検出した土坑である。平面形は方形を呈し、短軸長0.35m、長軸検出長0.45mを測る。断面形状は逆台形を呈する。

**ＳＫｃ08**（第46図）　Ⅲ区中央部で検出した土坑である。東半は失われており全容は明らかではないが、径0.6m前後の楕円形の平面形を呈する。断面形状はＵ字形となる。土坑中央部には底径38cmを測る土師質土器甕をやや北側に傾斜するように設置している。

**不明遺構**

**ＳＸｃ05**（第45図）　Ⅲ区東部で検出した不明遺構である。東西検出長約7.3mを測る溝状遺構で、主軸方位をN86°Wにとる。断面形状は浅いⅢ状を呈し、埋土は褐灰色粘土の単一層である。上面には一辺0.5m前後の扁平な板石を上端レベルが揃うように配置しており、礎石建物ないし土蔵の基礎であった可能性が高い。

## 4．Ⅳ区

### 基本層序

Ⅳ区では２面の遺構面を確認した。第１面は標高1.1ｍ前後、第２面は標高0.9ｍで検出したが、必ずしも整地層に伴って検出した遺構面ではなく、大多数は同一遺構面で確認している。Ⅳ区では３列確認した石垣で遺構変遷を想定することができる。前述したように、石垣は西外曲輪の北辺に位置し、城下と海域を画する施設である。ＳＺｃ03は前述したⅡ区ＳＺｃ02の北側約40ｍに位置し、その構築時に大規模な拡張を行ったことが指摘できる。その北側５ｍにはＳＺｃ12があり、さらに30ｍ北側にはＳＺｃ13が位置する。それぞれの石垣の構築年代は、ＳＺｃ03が17世紀中葉、ＳＺｃ12が18世紀後半、ＳＺｃ13が明治時代となり、石垣の構築年代から遺構変遷を理解することができる。こうした状況を踏まえ、第50図に基づきⅣ区における基本層序について触れる。４～９層は基盤層と判断し、１’・11～15はＳＺｃ03裏込、１～３はＳＺｃ03に伴う整地土とした。19はＳＺｃ12裏込で、その上位にはＳＺｃ13に伴う整地層が厚く堆積する（16・17・20～32層）。石垣の構築年代を考慮すると、ＳＺｃ13に伴う整地土上層には、明治時代以降に属する遺構しか確認できないはずである。さらに、18世紀後半に構築されたＳＺｃ12の上部が崩落している状況から、その南に位置するＳＺｃ03より北側に位置する遺構はすべて、明治時代以降の所産という解釈が成り立つ。また、Ⅳ区はＳＺｃ02より北側に位置し、その構築年代である1630年代後半～ＳＺｃ03構築時期に属する遺構は当然存在しない。よって、Ⅳ区ではＳＺｃ03以南の遺構もその築造時期以降の所産という前提条件を付与することができる。

### 第１面（第48図）

明治時代に構築された石垣・ＳＺｃ13に伴う整地層上面で検出した遺構群である。明治時代の遺構と近代ないし現代に属する遺構が混在しており、その識別は行えていない。第48図では、礎石等の石材を黒く塗り潰した。礎石建物ないし、柵列、溝状遺構を中心に確認している。明治時代の絵図では、西外曲輪全域が監獄署として整備されており、明治時代に属する遺構の大多数はこれに伴う施設である可能性が高い。

なお、ＳＺｃ13上面ないしその北にも遺構面は展開するが紙幅の都合上、今回は報告しない。

### 石垣

**ＳＺｃ13**　Ⅳ区北端部で検出した石垣である。旧高松駅の地下駐輪場によって一部失われているが、Ⅳ区における検出総延長は約51ｍを測る。検出した限りでは直線状を呈し、主軸方位はN87°Ｗとなり、ほぼ東西を指向する。その構築には海域の埋め立てを伴い、城下の拡張過程の一端を窺うことができる。Ⅳ区東端部では、ＳＺｃ03に連続する突堤を確認した（ＳＺｃ04）。ＳＺｃ12の構築・機能段階にも突堤は継続使用され、ＳＺｃ13の構築により、その内部ないし整地土中に埋め戻される。しかし、単純に埋め戻すのではなく、それを枠として利用し海域を埋め立てた状況がＳＺｃ04の上面に堆積した礫群の存在から窺える。礫群はＳＺｃ13の南、ＳＺｃ04の中央やや北よりに位置し、拳大から人頭大の２倍はある石材が５×４ｍの範囲に広がる（第51図、図版27・28）。埋め立てに際して、まず海域へ突出した突堤の一部を破壊し、海域の埋め立ての足掛かりとした可能性が指摘できる。

第53図にＳＺｃ13断面図を掲載した。奥行き約4.5ｍ、現存深度約２ｍを測る掘方の前面に石垣石材を設置し、４～６層の裏込埋土を充填する。裏込は拳大から人頭大以上の石材を重層的に充填しており、検出した石垣のなかでは最も堅牢な構造である。石材は安山岩塊石が主体を占める。石垣は最大で３段分積んでいるのを確認し、傾斜角度は60°前後を測る。石材は約0.5～１ｍを測る横長の安山岩・花崗岩を用いる。その構築方法は、最下段に0.2～0.4ｍ前後の塊石を設置した上部に大形の石材を横積みし、その上端に生じた凹凸を小型石材を用いて解消する。さらに、その上端にも大形石材を横積みし、同じく上端の凹凸を小型石材を用いて水平に仕上げる。こうした構築法により、各段ともに明瞭な横目地を認める。一方、最下段石材の設置レベルは、ＳＺｃ13東端部では－0.65ｍ、西端部では－1.4ｍを測り、0.75ｍの比高差を認め、東から西へ緩やかに傾斜していることが窺える（傾斜角度約1.5°）。

なお、Ⅳ区中央部と東端部におけるＳＺｃ13の裏込石材規模が異なる点に関しては、上面の削平度合いに起因する。中央部では第53図４層、東端部では５層を裏込として確認しており、上面の削平が東端部では顕著であったことが窺える。

### 柱穴

**ＳＰｃ193**　Ⅳ区中央北端部で検出した柱穴である。N88°Ｗの主軸方位を示すＳＡｃ17を構成する柱穴である。出土遺物には肥前系磁器端反碗を認め、1820～60年代の年代観が想定できるが、ＳＡｃ17を構成する柱穴には電信柱を埋設したものも認める。

**ＳＰｃ209**　Ⅳ区中央部西よりで検出した柱穴である。

### 溝状遺構

**ＳＤｃ12**（第48図）　Ⅳ区北部で検出した溝状遺構である。Ⅳ区東部で途切れるが、Ⅳ区を東西方向に横断し、土層の確認では西接するⅤ区にも連続する。主軸方位はN82°Ｅの方向を示す。検出長約31ｍ、溝幅は約３ｍ前後を測る。第54図33層がＳＤｃ12埋土に該当し、細分は行っていないが、南側の掘方肩部には粘土を貼

った状況も窺える。断面形状はU字形を呈し、深度は0.7m前後を測る。その検出位置は下層で確認したＳＺｃ03に合致し、それに関連ないしその影響で掘削された溝状遺構と考えたいが、出土遺物には明治・大正期に属する陶磁器を含み、明治期の遺構と判断した。

**第２面(第49図)**

ＳＺｃ03とＳＺｃ12の２条の石垣とそれに伴う整地面で確認した遺構を第２面として捉えた。当初、ＳＺｃ03と12は同時期の所産である可能性も考慮に入れて調査を行っていたが、ＳＺｃ03の前面に打設された杭列(ＳＺｃ07)が一部ＳＺｃ03根石を外して打設した状況を確認し、時期を違えた石垣であると判断した。また、ＳＺｃ03に伴う施設として、Ⅳ区東端部で突堤を検出した(ＳＺｃ04)。その東端ラインは中堀西側の石垣に連続する可能性が高く、中堀を復元する貴重な材料となる。さらにＳＺｃ03にはその構築時に埋設された階段状施設とその脇から北へ突出する立石群を検出している。水面への昇降に用いた施設と考えられる。

これらの石垣に伴う整地面における遺構密度は極めて低く、礎石建物・溝状遺構の確認に留まる。しかし、Ⅰ～Ⅲ区で検出した遺構との連続性・関連性を認め、遺構変遷の想定ないし各調査区との対応関係を容易にする。

**石垣関連施設**

**ＳＺｃ03**(付図１・２)　Ⅳ区中央やや南よりで検出した石垣である。平面形はＳＺｃ03東半ではN86°Ｅの方向で直線的に延びるが、西半は根石まで後世の削平により失われる。しかし、ＳＺｃ03に沿って打設された杭列(ＳＺｃ07)がほぼ根石の前面0.15mに位置することから、西半のＳＺｃ03根石ラインをその杭列から復元することが可能である。復元ではN75°Ｅとなり、約11度屈曲していることが窺える。掘方南端に位置する裏込石材もこれに呼応して屈曲し、ＳＺｃ03はⅣ区中央やや西よりで小さく屈曲することが窺える。

前面石材は最大で２段積んでいるのを確認した。その崩落は激しいが、裏込石材は標高0.9mまで遺存しており、根石から６段程度積んでいた可能性がある。西接するⅤ区では５段確認している。その勾配は67°前後を測り、掘方底面に直接根石を設置する。付図１・２に前面石材立面図を掲載したが、裏込石材も図化したため、やや煩雑となった。石材は一辺0.6m前後を測る方柱状の石材を原則横積みする。最下段石材上面に横目地が通る箇所もあるが、石材間の凹凸を解消するための小型石材の充填等の処置はなされていない。２段目石材の上端にかろうじてその処置を施す箇所を認めるが、遺存状況が悪く全容は不明である。

第54図に掘方ないし裏込堆積状況を示した。当該箇所では２段分の前面石材を確認し、1'・11～15層を裏込埋土と判断した。掘方は石垣前面から約３ｍの奥行きを有し、現存深度は約1.4mを測る。掘方の掘り込み面は0.9m付近と考えられるが、１と１'としたように、ＳＺｃ03に伴う整地層の最上層である１層と掘方埋土に明瞭な差異を見出せない。確認した限りでは、２ないし３層上面において掘方を検出した。しかし、裏込石材は0.9m付近まで確認でき、おそらく掘方の掘削面は１層上面であったと考えられる。また、裏込には人頭大からその２倍はある石材が充填される(図版16～21)。２段目上端に休止面＝構築の作業単位があるためか、拳大前後の石材がそのレベルでのみ確認できる。石垣前面ないし裏込石材は安山岩が８割を越え、花崗岩・砂岩が少量確認できる。

ＳＺｃ03の前面において、石垣ラインに沿って打設された杭列を確認した(**ＳＺｃ07**)。Ⅳ区西部では最下段石材の前面約0.15mの位置にほぼ１ｍ間隔で打設されており(図版19)、当初ＳＺｃ03の構築に伴う目安ないし足場的な杭の可能性を想定していた。しかし、Ⅳ区東部において、ＳＺｃ03の最下段石材を外した箇所にも打設された状況を確認し(第55図、図版20)、前後関係を認めることが明らかになった。しかし、その打設位置は、Ⅳ区西部ではN75°Ｅ(ＳＺｃ03もN75°Ｅ)、東部ではN88°Ｅ(ＳＺｃ03はN86°Ｅ)の方向を呈し、ＳＺｃ03に平行し、同様に鈍く屈曲する。こうした状況は、ＳＺｃ03がある程度存在した段階に打設されたことを示しており、その崩壊に伴って補強用に打設された杭列であるとの評価ができよう。また、後述するＳＺｃ12とＳＺｃ03は平行した位置関係にあり、同時期に機能した２段の石垣とも想定できるが、このＳＺｃ07の存在は、ＳＺｃ03と12が時期を違えることを立証した。つまり、ＳＺｃ03構築→ＳＺｃ07の打設→ＳＺｃ12構築という前後関係になる。杭には角杭と丸杭があり、西部では丸杭が主体的に用いられ、東部では逆に角杭が多く用いられる。いずれも先端を打設しやすいように、加工して尖らせている。角杭には貫穴を認める個体も存在し、柱材からの転用材の可能性も考えられる。

一方、ＳＺｃ03石材をすべて除去した後にも杭列を確認した(**ＳＺｃ09～11**、第56図、図版21・25)。ＳＺｃ09は復元したＳＺｃ03基底石の約１ｍ内側(南側)に位置し、角杭・丸杭が直線状に並ぶ。主軸方位はN71°Ｅとなる。ＳＺｃ10はＳＺｃ03基底石から約２～３ｍ内側(南側)に位置し、鈍く屈曲する杭列を形成する。西側ではN71°Ｅ、東側ではN90°Ｅの方位を呈し、ＳＺｃ09にほぼ平行する。杭種には角杭と丸杭を認める。ＳＺｃ11はＳＺｃ03前面から約４ｍ南側に位置し、２本の丸杭と角杭を確認した。ＳＺｃ09～11はＳＺｃ03石材を除去した段階で確認しており、ＳＺｃ03構築以前に打設された杭列であることは明白である。しかし、ＳＺｃ03の前面石材が鈍く屈曲するのと同様に、

ＳＺｃ10もほぼ平行して屈曲しており、ＳＺｃ03の構築に関連した施設である可能性は極めて高い。胴木等の沈下を防ぐ木組は確認できなかったが、それに類する性格を想定することができる。

**ＳＺｃ04**(第57図)　Ⅳ区東端部で検出した突堤と考えられる遺構である。ＳＺｃ03から97°北に触れた主軸方位を示し、北(海側)に突出する。検出長は約13m、幅5.8m前後を測る。西側において0.5～１mを測る石材を２ないし３段積んでいるのを確認した。基底レベルは北に向けて傾斜し、その角度は３°を数える。最下段石材の上端では接地面に平行して傾斜する横目地を認めるが、２段目石材は南に小形石材を用い、北に向かい漸次大形になるように石材を選択し、傾斜する基底面レベルに対し、２段目上端レベルが水平になるように補正を行った状況を看取できる。東側は一部に遺存する石垣を認めるが、後述するＳＺｃ08がなければ、それが石垣であるのか、裏込石材であるのかは判断できない。また、ＳＺｃ04内部の構造は、東西にそれぞれ外向きに面を有する石垣を設置し、その内部に土砂ないし裏込石材を充填する。第57図Ｉ－Ｉ'間セクションでは、２・３層整地土を敷設し、その上面から掘方を掘削し(５・６層)、西側は直接旧海岸上に、東側は３層直上にそれぞれ最下段石材を設置する。その後、掘方内に拳大から人頭大の石材を充填する。２段目の石垣は西側でのみ確認できるが、２段目石材を設置し、その内側に土砂を充填させ(１層)、石材付近にのみ拳大の２倍前後の小礫を用いる。１層には人頭大から１mを測る規模の石材に土砂を介在させ、上部構造は削平により不明であるが、これ以高は礫充填層ないし礫敷設層であったと考えられる。なお、ＳＺｃ04の北側はＳＺｃ13によって破壊されており、元来の規模を推測することはできない。

また、ＳＺｃ04の東側石垣に沿って列状に打設された杭を５本認める(**ＳＺｃ08**)。角杭と丸杭がある。打設状況や杭の内容は、前述したＳＺｃ07に酷似し、その打設時期は同時期であった可能性が高い。ＳＺｃ04は出土遺物や遺構の重複関係からその構築時期について言及することはできないが、少なくとも、ＳＺｃ07を打設した時期には存在していた可能性が高く、ＳＺｃ04の構築はＳＺｃ03と同時期の所産であったと考えたい。また、ＳＺｃ04の使用石材は、安山岩が９割以上を占め、わずかに花崗岩・砂岩が確認でき、ＳＺｃ03の石材組成に酷似しており、その同時構築の蓋然性は高まるであろう。

**ＳＺｃ05・06**(第58図、図版24)　Ⅳ区西部で検出した階段状遺構と立石群である。**ＳＺｃ06**は花崗岩切石(長さ１m、幅0.6m、高さ0.5m)を標高０mに設置し、その上部に長さ0.4m、幅0.3m前後の扁平な石材を３石階段状に配置した遺構である。さらに１段下がった切石の前面にも0.4m前後を測る立方体形状の石材が配置されており、階段状施設としての位置付けが可能である。切石は復元したＳＺｃ03石材に組み込まれ、その脇にはＳＺｃ07を構成する杭が打設される。つまり、ＳＺｃ06はＳＺｃ03構築段階からその内部に組み込むように埋置された施設と考えられる。なお、切石の設置方向は必ずしもＳＺｃ03と呼応せず、N46°Ｅの方向を示す。Ⅳ区の西に位置するＶ区におけるＳＺｃ03とも関連するが、Ｖ区で後述するようにＳＺｃ03は当該箇所で切石の設置方向に屈曲した可能性を想定しておきたい。

一方、**ＳＺｃ05**はＳＺｃ06切石の脇から北にかけて構築された立石群である。一辺１m以上を測る大形石材を縦ないし横方向に立て並べたもので、枯山水のような印象を覚える。ほぼ南北方向に直線的に延び、北端部は後述するＳＺｃ12の前面に合致する。石材は片麻岩・安山岩・花崗岩を認める。当初はＳＺｃ12に伴う施設で、地割を示す指標的な性格を想定していたが、ＳＺｃ06の脇から連続する点を考慮し、水面に昇降するＳＺｃ05に伴う波除けないし波止場的な性格とし、ＳＺｃ03に備え付けられた施設と判断した。

**ＳＺｃ12**(第54図、付図１・２、図版16・17・25)
Ⅳ区中央部で検出した石垣である。検出した限りでは直線状を呈し、総延長は約53mを測る。主軸方位はN82°Ｅを示す。ＳＺｃ03の北約３～５mに位置し、当初は同時構築の可能性も想定していたが、ＳＺｃ07の存在から時期を違える石垣であると判断した。前面石材は、最大で２段積んでいるのを確認したが、第54図セクションが示すように、その崩落は著しい。幅0.5m、長さ0.8m、厚み0.4m前後を測る石材を主体的に用いるが、長さ・幅ともに１mを越える石材も認める。ＳＺｃ03使用石材に比して大形である。使用石材はＳＺｃ03石材を転用した安山岩が８割以上を占め、花崗岩・砂岩を含み、わずかに片麻岩の使用も確認できる。構築方法は、根石直上に多少の凹凸を認めるが横目地の通りを認め、石材の小口部を前面に向けた小口積みが行われ、ＳＺｃ01～03に認める横積みが主体を占める在り方とは異なる構築技術が採用される。第54図Ｅ－Ｅ'間セクションによると、19層がその裏込埋土に該当し、前面石材から奥行き約２m、残存深度約１mを測る掘方に石材を直接設置し、裏込には拳大から人頭大の石材を入念に詰める。掘方の掘り込み面は確認できないが、18層はＳＺｃ12に伴って整地された層位である可能性が高い。また、第50図Ａ－Ａ'間セクションでは、５・６層が裏込埋土に該当し、掘方の規模は3.4m以上を測ることになる。裏込石材の規模も人頭大以上の規模が主体を占め、地点によって構造を違える。ＳＺｃ12構築段階に埋め込まれるＳＺｃ03との位

置関係に起因すると考えられ、それに近い位置に構築されるＥ－Ｅ’ではやや簡易な構造となり、離れた位置のＡ－Ａ’では頑丈に構築された可能性が高い。また、最下段石材を設置したレベルは東に向かって緩やかに傾斜しており、ＳＺｃ03に酷似した状況を呈する。

**溝状遺構**

**ＳＺｃ11**(第58図)　Ⅳ区西端部で検出した石組溝である。主軸方位はＮ１°Ｅを示し、ほぼ南北を指向するが、ＳＺｃ03手前で「く」字形に屈曲する(N37°Ｅ)。ＳＺｃ03ないしＳＺｃ12との連結箇所は確認できないが、排水施設としての性格が付与できる。「く」字形に屈曲する要因として、北に直線的に延長した箇所に位置するＳＺｃ06を避けた可能性を想定しておきたい。その想定が正しければ、ＳＤｃ11の構築段階までＳＺｃ03は機能していることになり、ＳＺｃ03の構築年代を考える指標になる。さらに、ＳＤｃ11はその検出位置や主軸方位から、Ⅰ区ＳＤｃ02、Ⅱ区ＳＤｃ09・10に連続し、『高松城下図』(享保年間、1716～36)に記載された「西御屋敷」と大久保家屋敷地を区画する施設と考えられる。Ⅳ区ＳＤｃ11の出土遺物は稀薄であったが、これらの出土遺物から、18世紀前半の構築が想定できる。なお、石材は一辺0.4m前後を測る安山岩が選択される。

**建物**

**ＳＢｃ08**(第59図)　Ⅳ区中央部南よりで検出した礎石建物である。検出面は標高1.1mを測る。「Ｆ」字形に近い平面プランで、南北５間以上、東西２間以上の礎石列を確認した。礎石は遺構面に直接設置するものと柱穴を掘削し、それを埋め戻した後に設置するものが混在する。北半の３石には柱穴を認めず、異なる上物構造ないし異なる建物であった可能性も残る。礎石は一辺0.5m前後の方形ないし不整形の板状石材が用いられ、その上端レベルはいずれも1.3mを測る。南北主軸方位はＮ５°Ｅを示し、Ⅲ区で検出したＳＢｃ07の主軸方位に合致し、さらに礎石列が直線状に並び関連性を認める。また、ＳＢｃ08北端に位置するＳＰｃ260はＳＺｃ03の裏込石材の上部に位置し、ＳＢｃ08は少なくともＳＺｃ03に伴う段階の建物ではないことが指摘できる。

**不明遺構**

**ＳＸｃ07**　Ⅳ区中央南端部で検出した不明遺構である。平面形は不整形を呈し、埋土は不明である。

## ５．Ⅴ区

**基本層序**

Ⅴ区では２面の遺構面を確認したが、Ⅳ区と同様に整地面の変遷として、層位的に捉えた遺構面ではない。Ⅴ区西部では、Ⅳ区から連続し、17世紀中葉の構築年代を想定した石垣＝ＳＺｃ03を検出し、さらに明治時代の構築であるＳＺｃ13に伴う整地土を確認しており、これを基軸に遺構変遷を把握した。第62図に基づき基本層序について述べると、５・６層がＳＺｃ13に伴う整地土である。その上端面は標高1.2m前後を測り、同レベルで第１面を確認した。第62図では７層上面が第１面の遺構であるＳＢｃ09の礎石設置面となり、同じく標高1.2m前後を測る。よって、５・６・９・10層上面が第１面に相当する。一方、第２面に伴う遺構はＳＺｃ03のみの確認に留まる。Ⅳ区西端部におけるＳＺｃ03・12の前面石材位置を第61図に示した。10～12層はその検出位置や層位内容から、ＳＺｃ03に伴う整地層の可能性も想定できるが、調査担当者の所見では、第１面の造成によってⅤ区東半の近世段階の整地層は失われ、Ⅳ区から連続する石垣は存在しないとされる。よって、10～12層も第１面整地土であると評価せざるを得ない。

Ⅴ区西半の土層堆積状況を第65図で窺うことができる。これによると、27・28層がＳＺｃ03構築以前の堆積層で、標高は－0.5m前後を測る。18～26層はＳＺｃ03に伴う整地土ないしその裏込埋土に相当し、その上端レベルの標高は、約0.7～0.8mを測る。Ⅴ区西半部における第２面はおおむねその標高で検出できる。また、ＳＺｃ03前面に堆積した３～13層はＳＺｃ13(明治時代の構築)に伴う整地土である。Ⅳ区では、ＳＺｃ03前面に約３～５ｍの位置に18世紀後半前後の構築を想定したＳＺｃ12が存在するが、Ⅴ区では確認できなかった。しかし、一部ＳＺｃ12石材の可能性もある石材を確認しており、14～16層をそれに伴う整地層と判断した。

**第１面(第60図)**

Ⅴ区東半部では標高1.2m前後で検出し、明治期に構築されたＳＺｃ13に伴う整地面と理解できる。遺構密度は稀薄であるが、区画施設と考えられる石垣状の立体構築物(ＳＸｃ09)や礎石建物を検出した。明治時代の絵図では、調査地点には監獄署が設置されており、検出した遺構はそれに伴う施設の可能性が高い。

**建物**

**ＳＢｃ09**(第63図)　Ⅳ区東部で検出した礎石建物である。遺構面直上に直接礎石を設置するため、一部失われているが、東西６間以上、南北４間の東西主軸の礎石建物で、主軸方位はN86°Ｗを示す。礎石は0.8～１m前後の安山岩塊石を用い、１石のみではなく、２～４石によって、１つの礎石を構成する。礎石間隔は東

西・南北ともに約２ｍを測るが、南端の東西礎石列のみ１ｍと狭くなり、異なる上物構造が想定できる。庇・縁・柵等が想定できよう。

なお、ＳＢｃ09の主軸方位は、後述するＳＸｃ09の主軸方位に直交ないし平行しており、両者は関連した遺構であることが指摘できる。

**不明遺構**

**ＳＸｃ09**(第64図)　Ⅳ区中央部で検出した不明遺構である。その北端部はⅥ区ＳＸｃ11に連続し、総延長は40mを越える。主軸方位はＮ３°Ｅの方位を示し、ほぼ南北を指向する。上面プランは、南端部から北へ30m付近までは幅1.4～1.6mの外側に面を向けた２列の石列を認め、内部に礫を充填する。30mより北側は幅を0.9mに減じる。土塀の基礎のような構造を呈するが、断面形状は極めて特異である。第64図に提示した断面図によると、ＳＸｃ09の西側には石垣状の面を認める。断面図では東側にも面を認めるが、その確認は一部に留まり、主として西側に面を創出するための石垣状の施設と考えたい。以下、Ｄ－Ｄ'間セクションに基づきその構築過程を復元する。ＳＸｃ09に伴う整地土と考えられる12～22層を掘り込み、掘方を掘削する(23・24層)。その後、ＳＸｃ09を構築するが、掘方内には上部の固定を図るため、0.5m前後の塊石を持たせ掛けるように設置する。これを除き、裏込には顕著な石材の使用は認められないが、ＳＸｃ09内部には一辺0.2m前後の塊石を充填する。その構築法は西側を前面として0.4～１ｍを越える石材を設置すると同時に、東側約1.3mの位置にも東に面を向けて大形の石材を設置し、その内部に礫を充填する。断面図が示す構築状況及び前面石材の横目地の通り方から、標高0.3～0.4m前後と0.8m前後に作業単位を見出せる。ＳＸｃ09の西側には湿地状の堆積を認め、29～31層には粘性の高い粘土が堆積し(下層埋土)、その上位には植物腐敗層を認める(28層、中層)。下層・中層は、ＳＸｃ09外堀として図化した遺物の出土層位に相当する。さらにその上位に26・27層を認め、上層埋土とした。これらの埋土はいずれも水平堆積に近い状況を呈するが、32～44層はレンズ状堆積となる。いずれも瓦・漆喰・礫を多量に含む。掘方の有無は不明である。なお、西端部に堆積する45・46層と26～30層が連続する層位か、否かの判断はできない。本報告では調査所見に従い、上記したような堆積状況を想定したが、ＳＸｃ09の両脇に堆積する層位の解釈については、多くの問題を残す。

また、前後するが、ＳＸｃ09の南半部は検出面から基底石まで約1.8m前後の高さを有するが、北半部では、１石のみ配置しており、その構造は大きく異なる。南半部の層位は不明であるが、前述した土層堆積状況は、南半部の状況を示す。南半部の積み方は0.4～１ｍ前後の方柱状の形状を呈する安山岩ないし花崗岩を横積みする。推測の域を出ないが、高い石積みを認める範囲の西側にのみ大型の土坑状の施設が存在したと想定しておきたい。また、第64図28～30層の出土遺物の大多数は19世紀前半の状況を示すが、数点のみ明治期まで下る遺物を認める。出土遺物や整地面との関連から、明治時代の所産と判断した。明治時代の絵図では西外曲輪全域が監獄署として整備されており、それに伴う施設である可能性が高いと考える。

**ＳＸｃ08**　Ⅴ区南東隅で確認した不明遺構である。平面形は径2.5m前後の円形を呈し、埋土中には拳大からその３倍程度の安山岩を多量に含有する。

**第２面(第61図)**

第２面はⅤ区西半でのみ検出し、東半は前述した第１面ＳＸｃ09の造成によって確認することはできない。その標高は約0.7～0.8mを測る。検出遺構はⅣ区から連続するＳＺｃ03のみとなる。主軸方位がⅣ区とは異なり、Ⅴ区東半において屈曲する状況を想定した。

なお、ＳＺｃ03に伴う整地面は攪乱により失われ、Ⅴ区における近世遺構はＳＺｃ03に限られるが、第65図セクションにおいて、Ⅳ区ＳＺｃ12に連続する可能性のある石材も確認されている。

**石垣**

**ＳＺｃ03**(第65図・付図１・２)　Ⅴ区西半部で検出した石垣である。検出した限りでは直線状を呈し、その主軸方位はほぼ東西を指向する。構築方法や石材の選択等から、この石垣をＳＺｃ03に連続する遺構と判断したが、Ⅳ区で検出したＳＺｃ03とは主軸方位や検出位置を違える。Ⅴ区東半において屈曲したと考えられるが、第１面の造成により失われる。第61図にその推定復元を行った。Ⅴ区ＳＺｃ03を直線的に東へ延伸し、さらにⅣ区西端部で検出したＳＺｃ03の構築段階に埋設されたＳＺｃ06の花崗岩切石の主軸方位を南西に延伸するという方法による復元を行った。これによると、Ⅳ区ＳＸｃ06部分で「く」字形に鈍く屈曲し(約151°)、さらにⅤ区東端部において、再度鈍く屈曲し、Ⅴ区をほぼ東西に横断するという平面プランになる。

付図１・２に平・立面図を掲載した。最大で５段積んでいるのを確認し、その上端は標高0.6m前後を測る。最下段石材の設置レベルは東端で－0.9m、西端で－１ｍを測り、旧地形はわずかに西へ傾斜する。一辺0.5m前後を測る石材が主体を占め、一部には１ｍ近い規模の石材も認める。その種別は安山岩が主体を占め、花崗岩・砂岩を少量含む。その形状は立方体状を呈し、横積みする。基底石上端に横目地の通りを認めるが、２段目以高には、設置した石材により生じた上端面の凹凸を解消することなく、上部に石材を構築しており、横目地の通りは認められない。

第65図に基づきその構築過程を復元すると、上段ほぼ中央にＳＺｃ03前面石材が位置し、その背後に構築以前の堆積層をわずかに認める(27・28層)。明瞭な掘方は見出せないが、21・26層の下端ラインを繋いだ線に復元できるかもしれない。仮にその想定が正しければ、24・25層は構築以前の堆積土ないし構築に伴う整地層と評価できる。18～21・26層は裏込埋土に相当し、拳大から人頭大の礫を多量に含む。前面に堆積した14層には多量の石材を含み、石垣前面に設置された捨て石の可能性も考慮した。しかし、Ⅳ区の成果から第65図セクション右端で一部確認できる石材をＳＺｃ12石材の可能性を想定し、14～16層はＳＺｃ12に伴う整地層とし、さらにその上位に堆積する３～13は明治期の所産であるＳＺｃ13に伴う整地層と解釈した。

こうした構築法、石材選択及び裏込の状況は前述したⅣ区ＳＺｃ03に酷似しており、この石垣をＳＺｃ03と判断した。これにより、ＳＺｃ03の検出総延長は70ｍ近くを数えることになる。

## ６．Ⅵ区

### 基本層序

Ⅵ区では１面のみ遺構面を確認した。調査区北端に、Ⅳ区から連続するＳＺｃ13が位置し、これに伴う整地土上面で遺構面を確認した。ＳＺｃ13は明治期の構築を想定しており、Ⅵ区で確認した遺構はいずれも明治期に属する。

第67図に基づき基本層序について述べる。上段中央にＳＺｃ13が位置する。基底石設置レベルは０ｍ以下となり、激しい湧水によりその確認は行えなかった。７～18層はＳＺｃ13裏込埋土で、掘方掘削面は上面の削平を無視すると、19層上面となる。調査では19～32層をＳＺｃ13に伴う整地層上層、33～39層をＳＺｃ13に伴う整地層下層と捉え、遺物の取り上げもこれに基づく。前者は細砂・砂質土・粘質土が重層的な堆積を示し、後者はおおむね砂層ないし細砂で構成され、整地の作業単位が異なることが窺える。また、５層はＳＺｃ13上面の堆積土で、ＳＺｃ13が機能を停止した後に形成された整地層である。遺構面はＳＺｃ13に伴う整地層上層の上面で確認した。上面の削平状況が一様ではなく、その標高は0.9～1.3m前後を測る。なお、５層上面にも遺構を検出したが、本報告では割愛する。

### 第１面(第66図)

Ⅵ区は高松城跡(西の丸町Ｃ地区)の北端に位置し、Ⅳ区で検出したＳＺｃ12(18世紀後半構築、幕末まで機能)のさらに北にある。さらに、明治期に構築されたＳＺｃ13に伴う整地層上面において遺構面を確認しており、Ⅵ区で検出した遺構はすべて明治期に属することは明白である。しかし、ＳＺｃ13に伴う整地層上・下層、検出遺構の出土遺物には、明治期の遺物を圧倒的に上回る出土量の18世紀後半代に属する土器・陶磁器が出土する。なかでも、高松城様相把握の暫定的な基準資料に用いたＳＸｃ13・14出土遺物は、18世紀第３四半期の良好な一括資料といえるほど、まとまった内容を示す(松本・佐藤2001、松本2002)。しかし、陶磁器組成では、明治期に属する遺物が0.7％ほど確認できる。通常であれば、混入遺物の範疇に収まる出土量であるが、石垣の変遷＝城下の拡張過程からは無視することはできない。こうした出土遺物の内容は、確認した遺構面が明治期に属するのかという問題を提起し、ＳＺｃ13を明治期の構築とした信憑性、ＳＺｃ13とＳＸｃ13・14の間にもう１条石垣がなかったのかといった多くの問題を内包する。しかし、整地層の理解、石垣の拡張過程、少量ながら出土を認める明治期の土器・陶磁器、調査精度といった点から、Ⅵ区で検出した遺構はすべて明治期の所産であることは間違いない。出土遺物に関しては、何らかの事情により、明治期になって一括廃棄されたと理解したい。

**石垣**

**ＳＺｃ13**　Ⅳ区北端部で検出した石垣である。Ⅳ区からほぼ直線的に延長し、主軸方位はほぼ東西を指向する。Ⅵ区の調査では、矢板等の湧水防止処置を行えなかったため、激しい湧水により０ｍ以下は未確認である。Ⅳ区では、ＳＺｃ13の基底石設置レベルは西に向かって約1.5°の角度で傾斜しており、それに基づき復元すると、Ⅵ区西端部では標高－2.25m付近に基底石が設置された可能性が想定できる。

第66図にトーンで示したＳＺｃ13は検出した裏込石材の範囲を示し、重機のみによる確認作業の結果、かろうじて前面石材の上端部を確認することができた(図版35下端)。裏込石材は、拳大から人頭大以下の石材が充填され、安山岩が主体を占め、砂岩・花崗岩が少量混じり、一部片麻岩の使用も認める。Ⅳ区ＳＺｃ13の裏込埋土との比較では、第53図５層に対応する可能性が高い。

なお、明治時代以降の所産であることを示す型紙摺りによって染付がなされた肥前系磁器を含むが、Ⅳ区において、その所属時期を明確にしたため、敢えて図化は行っていない。

**柵列**

**ＳＡｃ05**(第68図)　Ⅵ区西端部で検出した柵列である。一辺0.3m前後の安山岩塊石が直線的に並び、その主軸方位はＮ３°Ｗの方向を示す。礎石は径0.5m前後の柱穴を掘削し、それを埋め戻して設置し、上端レベルはいずれも標高約１ｍを測る。

**土坑**

**ＳＫｃ15**(第68図)　Ⅵ区ほぼ中央で検出した土坑である。短軸長1.6、長軸長2.1mを測る長楕円形の平面プランを呈する。深度は0.15mを測り、浅い皿状の断面形態となる。

ＳＫｃ16(第68図)　Ⅵ区のほぼ中央部で検出した土坑である。径0.6m前後の円形を呈し、掘方は浅いＵ字形を呈する。断面には0.2m前後の石材を認め、図版35では、埋土上面に拳大の板石を並べる状況が確認できる。根石と根固め石の可能性を想定でき、建物ないし柵列を構成する遺構であったと考えられる。

**ＳＫｃ17**(第68図)　Ⅵ区西部で検出した土坑である。短軸長1.2m、長軸長1.5mを測り、卵形の平面形を呈する。深度は0.15mを測り、浅い皿状の断面形状である。埋土は瓦片を多量に含有する暗褐灰色弱粘質土の単一層である。瓦はいずれも細片であり、瓦当面は確認できない。

**不明遺構**

**ＳＸｃ10**(第68図)　Ⅵ区中央南端で検出した不明遺構である。ＳＸｃ11と重複関係を有し、それに先行する。一辺0.5～1.4m前後を測る大形石材(片麻岩・花崗岩・安山岩)を径3.4mの円周上に立て並べた石組遺構である。内側には0.4～1.4mを測る石組と同じ石材が転落ないし敷設される。石組に伴う裏込埋土は確認できず、掘方に密着させた状況が想定でき、８層がその内部に堆積した埋土となる。１・２層は表土であり、４～７・９層が石組を越えて堆積しており、ＳＸｃ10は２段掘方構造を呈していたと考えられ、上部は径6.8m前後を測る。井戸の可能性も想定したが、掘方は湧水層まで及ばず、不明遺構とした。

**ＳＸｃ11**(第64図)　Ⅵ区中央南端部で検出した不明遺構である。Ⅴ区ＳＸｃ09から連続し、ＳＸｃ10に後出する重複関係を呈する。

**ＳＸｃ12**(第68図)　Ⅵ区中央部で検出した不明遺構である。短軸長2.1m、長軸長2.2mを測り、平面形は不整形を呈する。上面には拳大から１ｍを越える規模の石材が不規則に配置される。

**ＳＸｃ13・14**(第69図)　Ⅵ区西部で検出した不明遺構である。東西主軸で、0.8mの間隔をおいて直線的に並ぶ。ＳＸｃ13は短軸長3.5m、長軸長5.5mを測り、平面形は歪な長方形を呈する。ＳＸｃ14は短軸長2.2m、長軸長4.5mを測り、同じく歪な長方形を呈する。埋土は不明であるが、いずれも逆台形の断面形状を呈する。検出状況や両遺構間の遺物に接合関係を認め、元来は同一の遺構であった可能性が高く、東西に細長く延びる遺構であったと考えられる。

ＳＸｃ13・14出土遺物は高松城様相把握の暫定的な基準資料として用いたように、18世紀第３四半期の陶磁器組成として極めて一括性の高い内容を示す。しかし、検出面の形成年代や少量ながら認める明治期の遺物から、明治期の所産であることは疑いない。同様に、ＳＫｃ15出土遺物も19世紀前半に属する遺物が主体を占めるが、明治期の遺構と判断した。

**ＳＸｃ15**(第69図)　Ⅵ区中央部南端部で検出した不明遺構である。１×1.2mを測る扁平な板石を含む礫群である。石材は安山岩・花崗岩・砂岩を認める。

## 7．Ⅶ区

### 基本層序

Ⅶ区の遺構はすべて同一面で検出したが、Ⅶ区北部にはⅠ・Ⅷ区に連続するＳＺｃ01が位置し、それを軸に遺構変遷を理解すると、複数の遺構面を想定することが可能である。以下、第71図Ａ－Ａ’間セクションに基づきⅦ区の基本層序について述べる。15～18・38層は基盤層である。その上面には後述する中世前半の包含層ないし遺構埋土を認め(14層、42～47層)、上端レベルは標高0.9m前後を測る。ＳＺｃ01掘方の掘り込み面は、前述した中世遺構埋土となるため、整地層との関係については言及できないが、その裏込埋土は標高１m付近まで確認できる(19～23層)。ＳＺｃ01の前面に堆積する層位はⅡ区で検出したＳＺｃ02に伴う整地土と判断できる(27～37層)。こうした理解からＳＺｃ01より北にはＳＺｃ01に伴う整地面ないし遺構は確認できないことになる。標高0.9～1.1mには８～12層と24～26層を認める。その上面から掘削された遺構埋土を39・40層に確認でき、標高1.1mは遺構検出面とみなすことができる。しかし、両層位の標高は一致するが、いずれもＳＺｃ01の裏込埋土最上位に一部のみ被さり、連続する整地層か否か判断することはできない。敢えて層序の性格について述べるなら、８～12層はＳＺｃ01裏込埋土に連続する状況も認め、ＳＺｃ01に伴う整地層と理解したい。また、24～26層はＳＺｃ02に伴う整地層ないしⅣ区で確認したＳＺｃ03に伴う整地層と評価することもできる。さらに、両層位の上位には６・７層を認める。上端レベルは標高1.3mを測り、それを掘削面とした遺構埋土を確認しており(41層)、上面は遺構検出面と判断できる。単純に標高のみを比較すると、基本層序では想定２ｂ面に伴う整地土、Ⅱ区第１面再整地層(第32図８・９層)に合致し、連続する整地層である可能性も想定できる。

一方、Ｂ－Ｂ’間セクションでは、標高0.9mを上端とした基盤層直上に整地層を認める(６層)。上面レベルは標高1.2m前後を測り、それを掘り込み面としたＳＫｃ21を確認した(７・８層)。ＳＫｃ21は17世紀後半の良好な出土遺物があり、少なくとも整地層(６層)はそれ以前に形成されたと考えられる。Ａ－Ａ’間セクションとの比較では、８～12層ないし24～26層に対応すると考えられ、出土遺物の年代観を考慮すると、後者に該当する可能性が高い。

以上、壁面図からⅦ区における基本層序を復元したが、調査ではいずれも同一面で検出した。検出面の標高は0.9～1.1mを測る。検出した遺構の大多数は、生駒氏入城直後に構築されたＳＺｃ01の南に位置する。土坑・柱穴を中心に確認し、下層遺構である中世前半に属する遺構もある。中世遺構に関しては一括して後述する。

### 石垣

**ＳＺｃ01**(第72図)　Ⅶ区北部で検出した石垣で、Ⅰ・Ⅷ区でも確認することができる。平面プランはⅠ区で「く」字形に屈曲した後、Ⅶ・Ⅷ区ではN75°Ｅの主軸方位で直線的に延びる。Ⅶ区での遺存状況は良好ではなく、一部前面石材が失われた箇所も認める。標高０m前後に基底石を設置し、最大で２段積んでいるのを確認した。0.5～１m前後の規模を測る石材を前面に用いるが、その形状は石切場から切り出したままの状態であり、設置に際しては上面に凹凸、下端に間隙を認める。その凹凸や間隙は小形石材を用いて解消されるが、それらを充填というよりは、むしろ詰めて塞いでいる観を強く抱き、極めて粗い構築法といえる。また、使用石材の種類には角礫凝灰岩・安山岩・花崗岩を認める。

### 柱穴

**ＳＰｃ315**　Ⅶ区東部で検出した柱穴である。柱穴としたが、径１m前後を測る。

**ＳＰｃ316**　Ⅶ区東部で検出した柱穴である。

**ＳＰｃ323**　Ⅶ区東部で検出した柱穴で、中世遺構であるＳＸｃ46と重複関係を有し、それに後出する。

**ＳＰｃ329**　Ⅶ区中央西端部で検出した柱穴である。

**ＳＰｃ325**　Ⅶ区西部で検出した柱穴である。

### 土坑

**ＳＫｃ18**(第72図)　Ⅶ区南西部で検出した土坑である。一部攪乱により失われるが、短軸長0.55m、長軸検出長0.7mを測り、長楕円形の平面プランを呈する。断面形状はＵ字形を呈し、埋土は灰色粘質土の単一層である。明治期以降の整地層と考えられる１層上面で検出しており、明治期の遺構と理解できる。

**ＳＫｃ19**(第72図)　Ⅶ区南西部で検出した土坑である。平面形は楕円形を呈し、短軸長0.6m、長軸長0.7mを測る。土坑内には埋置された土師質土器甕底部を認める。掘方と甕の間隙は少なく、５cm前後しかない。

**ＳＫｃ20**(第72図)　Ⅶ区南端部で検出した土坑である。南半は調査区外へ延長するが、検出した限りでは径1.7m前後の円形を呈する。検出面からの深度は１m近くを測り、断面形状はＵ字形となる。下層に暗灰色シルト層が堆積する(10層)。その埋土に対応して西側掘方の底面際にオーバーハングする箇所を認め、遺構の性格を反映する可能性がある。しかし、基盤層は細砂層であり、遺構開削時に生じた痕跡と理解したい。５～９層を上層とした。いずれも灰褐色系の粘質土で、炭化物を含有する。土層注記では水平堆積とあるが、掘方の形状に沿ったレンズ状堆積と表現した方が適切である。

**ＳＫｃ21**(第72図)　Ⅶ区南西部で検出した土坑である。東半は攪乱により失われ、南北検出長1.8m、東西検出長1.1mを測る。平面形は不明であるが、遺存部分では隅丸方形を呈する。深度は逆台形状となり、検出面からの深度は約0.6mを測る。埋土は下層に灰黒色粘質土が薄く堆積し、その上位に連続して埋積したと考えられる２～７層が堆積する。土器・陶磁器に混じり、獣(鳥)骨・魚骨を多量に含み、廃棄土坑(ゴミ穴)と評価することができる。魚骨は高知大学佐々木邦夫教授に鑑定を依頼した結果、少なくともマダイ・キュウセン・ダツ？・異体類(カレイ・ヒラメ類)が含まれることが判明した。なかでもマダイの出土量が最も多く認められる。

**ＳＫｃ22**(第72図)　Ⅶ区中央部で検出した土坑である。一辺1.1mの正方形の掘方の中央部に0.3～0.5mを測る安山岩塊石を２石設置する。石材の上面に平坦面はなく、礎石として機能した可能性は極めて低い。

**ＳＫｃ23**(第73図)　Ⅶ区西部で検出した土坑である。ＳＫｃ24と重複関係を有し、それに後出する。南北に主軸方位をとり、西半及び北半は確認できない。南北検出長3.5m、東西検出長１mを測り、溝状に長く延びる平面形態を呈する。断面形状は逆台形を呈し、深度は0.25mを測る。埋土には炭化物を多量に含み、隣接するＳＫｃ24・25と酷似した内容となり、連続する同一の土坑であった可能性も考えられる。なお、出土遺物の年代観もほぼ同時期となる。

**ＳＫｃ24**(第73図)　Ⅶ区西部で検出した土坑である。重複関係からＳＫｃ25に後出し、ＳＫｃ23に先行する。平面形は径1.5m前後を測る円形を呈し、断面形状は浅いＵ字形となる。埋土中には炭化物を多量に包含し、さらに焼土も認める。仔細に観察すると、炭化物の含有を多量に認める層位と少量の層位が相互に堆積する状況も窺え、遺構の性格を反映すると考えられるが、言及することはできない。

**ＳＫｃ25**(第73図)　Ⅶ区西部で検出した土坑である。ＳＫｃ24に先行する重複関係を有する。平面形は不整形を呈し、東西検出長1.7m、南北検出長0.5m前後を測る。検出面からの深度は0.05mと極めて浅く、断面形状は浅い皿状を呈する。

### 井戸

**ＳＥｃ01**　Ⅶ区西壁面で確認した井戸である。第71図Ａ－Ａ’セクション49層に該当する。調査途上において、崩落したため図面等の記録を行うことはできなかった。第71図Ａ－Ａ’間セクションでは、その掘り込み面は24～26層上面となる。下部構造は、幅0.1m前後の板材を円形に巡らせた井戸枠を使用していたようだが、詳細は不明である。ここでは明治期の所産であると想定しておきたい。

## ８．Ⅷ区

### 基本層序

報告では３面の遺構面を提示したが、層序の理解から、厳密には２面の遺構面を確認した。調査区北側には、Ⅰ・Ⅶ区から連続する石垣＝ＳＺｃ01が位置する。前述したように、高松城跡(西の丸町Ｃ地区)で検出した石垣のなかでは最も南に位置し、さらに最も古く位置付けられる。出土遺物の年代観より、16世紀末の構築が想定でき、生駒氏入城時に築かれた石垣と考えられる。よって、ＳＺｃ01より北にはこれに伴う遺構面はないことが窺える。以下、第77図に基づき基本層序について述べる。

18層は基盤層としたが、摩滅した弥生土器・須恵器(古墳時代後期)を含む広義の包含層である。その上面に中世包含層が形成される(17層)。砂上に安山岩板石を敷設したＳＸｃ34・35を包含し、にぶい赤褐色の色調を呈する特徴的な層位である。北へ緩やかに傾斜する状況も窺えるが、４～６層は調査区東端に位置する近代の石組溝埋土に相当し、Ａ－Ａ’間セクションでは17層上端の標高は確認できない(第78図Ｃ－Ｃ’間セクションでは、標高1.1～1.2mを測る)。19～23層はＳＺｃ01掘方裏込埋土であるが、その掘り込み面は14層上面となり、14～16層はＳＺｃ01に伴う整地層と判断できる。ＳＺｃ01の前面に堆積した25～37層は、ＳＺｃ01の北20mに位置するⅡ区で検出したＳＺｃ02に伴う整地層である。その上面はＳＺｃ02構築以降の遺構面となるが、直上まで攪乱層が及ぶため(１層)、その上部に設置されたであろう整地層は確認できない。標高は0.9～1.1mを測る。同様に中世包含層(17層)の直上に堆積する層位も明治期以降の整地層と考えられる。Ｃ－Ｃ’間セクションでは、４・５層ないし８層がこれに該当する。なお、南端部の第78図Ｂ－Ｂ’間セクションで中世包含層(11～13層)の直上に堆積した４～10層を掘り込むＳＸｃ23埋土が確認でき、近世段階の整地層の可能性を残す。よって、Ⅷ区ではＳＺｃ01以南では、中世包含層である17層上面の１面のみで、ＳＺｃ01構築以降の近世遺構を確認し、それより以北では、25～37層直上においてＳＺｃ02構築以降の近世遺構を確認したことになる。

提示した整地面との対応では、第１面は中央に位置する土層観察用の畦より以北は(旧調査区Ｄ１区)、明らかに明治期以降に属する遺構を配置し、それより以南は(旧調査区Ｄ２・３区)、17層上面で検出した遺構を示す。第２面はベルト以北では、17層上面で検出した遺構とＳＺｃ02に伴う整地土上面で検出した遺構、以南では17層を除去し、基盤層である18層上面で検出した遺構をそれぞれ配置した。第３面は以北では、ＳＺｃ01と第２面で検出したそれより南に位置する遺構を配置した。以南では、第１・２面で検出した遺構を整合した。本来第１面で検出すべき遺構を、17層埋土

と遺構埋土の識別ができず、第２面で検出したという経緯があり、第３面にはＳＺｃ01以南に位置する遺構として、両者を配置した。しかし、17層は中世包含層であり、その下位には中世遺構が存在すると考えられ、第３面で提示した遺構のすべてが近世遺構ではないことを明記しておきたい。

各遺構面では、配置した遺構が重なる場合が多く、帰属する整地面が不明瞭な点もあり、Ⅷ区では遺構面別の遺構記載は行わない。

### 石垣

**ＳＺｃ01**（第79・80図）　Ⅷ区北部で検出した石垣である。Ⅰ区では「く」字形に屈曲する状況を確認し、その西辺がⅦ区を経由し、Ⅷ区に連続する。主軸方位はＮ79°Ｅの方向に直線的に延びる。中央部の石材は失われているが、東西検出長は約18ｍに及ぶ。

前面石材は基底石を含め、最大３段積んでいるのを確認し、60～70°の勾配で構築される。最下段石材は、東端部では標高０ｍ前後、西端部では－0.2ｍ前後にあり、西へ緩やかに傾斜する旧地形に設置されたことが窺える。なお、Ⅰ区屈曲部の設置レベルは、Ⅶ区では標高０ｍ、Ⅰ区では－0.2ｍ前後を測り、いずれもほぼ水平であり、旧地形にわずかではあるが起伏を認めることが指摘できる。構築状況は西側と東側ではやや異なる。西側では最下段に一辺0.5～0.8ｍ前後の方柱状の石材を直接横積みし、その上端の凹凸に小形石材を充填するため、横目地の通りを認める部分が大半を占める。しかし、一部には横目地を超過する大形石材が用いられ、２段目以高の構築に影響を与える。２段目にも基底石とほぼ同じ規模の石材を用いるが、前述した大形石材により横目地の通りはなく、わずかに落とし積みがなされる箇所を認める。一方、東側では石材規模を西側と同じくするが、その構築に際し、直接基底石を設置するのではなく、拳大からその２倍程度の石材を不規則に設置し、その上部に基底石を据える。基底石上端の凹凸は小形石材で解消し、２段目が遺存する箇所では基底石より大形の石材も確認できる。

前面使用石材には硬質の花崗岩・角礫凝灰岩・安山岩がほぼ同量用いられ、小形石材の９割以上を安山岩が占め、残りは砂岩で構成される。

第79図Ｄ－Ｄ’間セクションを中心に裏込状況ないし前面の土層堆積状況、構築・埋没過程を復元する。４～７層が裏込埋土ないしＳＺｃ01に伴う整地層に該当し、第77図Ａ－Ａ’間セクションでは、14～16層がＳＺｃ01構築に伴う整地層となり、それを掘り込む掘方埋土が19～23層になる。裏込には拳大から人頭大の石材が充填され、安山岩が主体的に用いられる。Ｄ－Ｄ’23・24層はＳＺｃ01の前面堆積土の最下層で、黒灰色系粘質土の埋土となる。ＳＺｃ01の機能中に堆積した層位と理解できる。その上位に堆積する８～22層は砂質土ないし弱粘質土が互層に堆積し、比較的短期間に形成された層位と考えられ、土質や色調からおおむね３層に大別できる。下層には暗青灰色砂質土層（20～22層）、中層に暗青灰色砂質土と赤灰褐色砂層が存在した層位（11～19層）、上層に赤灰褐色砂層（８～10層）がそれぞれ堆積する。出土遺物の取り上げもこれを単位に実施し、本報告でも層位別に提示する。層位の性格は、ＳＺｃ01の北側約20ｍの位置にⅡ区ＳＺｃ02が位置し、８～22層はその構築に伴う海域の埋め立て土の可能性が高い。第77図Ａ－Ａ’では38層が黒灰色粘質土、25～37層がＳＺｃ02に伴う整地層にそれぞれ対応する。なお、第79図Ｅ－Ｅ’間セクションにおいて、本報告では調査時とは異なる層位理解を行った。１～７層は基盤層で、調査段階には８～15層をＳＺｃ01に伴う整地層と判断していた。調査概報では、ここから出土した報文番号1105の年代観によって、ＳＺｃ01の構築年代を17世紀前葉とした（古野ほか2000）。しかし、裏込埋土であることが明白な16・17層を掘り込み、石垣石材の上部に堆積する30～32層に連続する状況から、ＳＺｃ01の機能停止後の整地層と理解を改めた。前面堆積土は、25～28層を黒灰色粘質土、19～24層を赤灰褐色砂層と暗青灰色砂質土の混在層、18層が赤灰褐色砂層となる。

なお、Ｆ－Ｆ’・Ｇ－Ｇ’セクションにより、裏込状況を再度確認すると、基盤層直上に敷設される中世段階に属するＳＸｃ35を掘り込み、ＳＺｃ01掘方が掘削される。後述するが、ＳＸｃ35は12世紀後半を中心とした時期の汀線に沿って石敷を行った遺構である。Ⅰ・Ⅷ区において、ＳＺｃ01の検出位置と重複する関係にあり、ＳＺｃ01が少なくとも中世前半段階の汀線に近い位置に構築された状況が窺える。Ⅷ区ＳＺｃ01西半の裏込に石材が集中するが、これはＳＸｃ35を構成するもので、ＳＺｃ01に伴う石材ではない。

### 柵列

**ＳＡｃ06**（第81図）　Ⅷ区東端部北よりで検出した柵列である。ＳＰｃ346～351が直線的に並び、その主軸方位はＮ４°Ｅの方向となる。ＳＰｃ346～350には、厚さ２㎝を測る礎板を検出した。その上端レベルは0.55～0.7ｍと一様ではないが、腐食の進行状況による差異と理解できる。礎板間隔は約１ｍの等間隔となり、ＳＰｃ350とＳＰｃ351の間隔が１ｍ以上を測り、ＳＰｃ351に礎板が確認できない点から、ＳＡｃ06北端はＳＰｃ350であった可能性が高い。第３面遺構配置図では、ＳＡｃ06はＳＺｃ01の南側に位置する。

**ＳＡｃ07・08**（第81図）　Ⅷ区東端部中央で検出した柵列である。いずれもＮ５°Ｅの方向で直線的に柱穴が並ぶ。それぞれの組み合わせは不明瞭であるが、ＳＰｃ359・358では柱痕跡ないしその抜き取り痕が確認で

き、その底面レベルも0.6m前後とほぼ等しい。礎板は確認できないが、前述したＳＡｃ06とほぼ同一直線状に位置し、関連する遺構と考えられる。

**柱穴**

**ＳＰｃ372**　調査区北部東よりで検出した柱穴である。

**ＳＰｃ367**　調査区北東隅で検出した柱穴である。

**ＳＰｃ463**　調査区中央東よりで検出した柱穴である。上面埋土はにぶい黄橙色砂質土となる。

**ＳＰｃ388**　調査区南東部で検出した柱穴である。

**ＳＰｃ405**　調査区中央で検出した柱穴である。上面埋土は砂質土ブロックを多く含む灰黄褐色粘質土となる。

**ＳＰｃ392**　調査区中央やや南よりで検出した土坑である。ＳＥｃ06に後出する重複関係を有する。ＳＥｃ05に先行する切り合い関係にあるが、出土遺物よりそれに後出する可能性が高い。

**ＳＰｃ381**　調査区南東部で検出した柱穴である。上面埋土は褐灰色粘質土となり、埋土中には黄橙色粘土ブロックを包含する。

**ＳＰｃ455**　調査区中央で検出した柱穴である。

**ＳＰｃ430**　調査区中央で検出した柱穴である。上面埋土は灰黄色砂質土となる。

**ＳＰｃ459**　調査区中央で検出した柱穴である。上面埋土は黒褐色混砂粘質土で、炭化物ないしにぶい黄橙色砂質土ブロックを包含する。

**ＳＰｃ471**　調査区南西隅で検出した柱穴である。上面埋土は褐灰色粘質土で、黄橙色粘土ブロックを少量含有する。

**井戸**

**ＳＥｃ03**(第82図)　調査区中央東よりで検出した井戸である。掘方は方形を呈し、土師質土器井筒を井戸枠として利用する。井筒径は約0.7mを測る。断割調査は行っていないが、５段以上積んでいるのを確認した。

**ＳＥｃ02**(第82図)　調査区中央部東端で検出した井戸である。Ⅷ区東端部で確認した近代の石組溝と重複関係を有し、それに後出する。ＳＥｃ03に近接し、その間隔は１mを測る。井戸枠には土師質土器井筒を用い、掘方も不整形ながら方形を呈し、ＳＥｃ03と近似した内容となる。断割調査の実施は行えていないが、５段以上の構築が確認できる。

**ＳＥｃ04**(第82図)　調査区北部で検出した井戸である。検出箇所は攪乱が広く、深く及び、検出面の標高は0.2m前後を測る。上部構造は不明であるが、下部において、径３mを上回る掘方を確認し、幅0.1m前後の板材を組み合わせた井戸枠を検出した。断割調査は行っていないが、常時湧水を認め、その透明度は極めて良好で、真水である可能性が高い。

**ＳＥｃ05**(第83図)　調査区中央やや南東よりで検出した井戸状遺構である。ＳＥｃ06に重複し、それに後出する。掘方は径約1.8mの円形を呈し、検出面から底面までの深度は0.9m前後を測る。掘方断面形状は逆台形を呈する。石組は４段分確認し、凹凸は激しいが、各段上端部がおおむね揃う。石材は安山岩が８割以上を占め、花崗岩・砂岩を少量認め、最下段には五輪塔の転用石材も確認できる。第83図によると、掘方の井戸枠石材の間隔は、0.2m前後を測り、裏込には掘方の掘削によって生じた砂質土が用いられる。なお、掘方底面と最下段石材接地面には0.2～0.3m前後の差異を認め、12～14層は掘方掘削後に再度設置された埋土と考えられる。井戸内には、拳大から人頭大の石材が敷設され、転落石の可能性も考慮したが、元来からの設置を想定した。なお、掘方底面は標高－0.1mを測り、調査時には湧水は確認できなかったが、機能時には湧水していた可能性が高い。

**ＳＥｃ06**(第83図)　ＳＥｃ05と重複する位置で検出した井戸状遺構である。掘方は長軸長1.7m、短軸長1.4mを測る長惰円形を呈する。掘方断面形状はＵ字形となり、検出面からの深度は0.6mを測る。内側に内湾する面を認め、石組井戸の一部が遺存していると考えられる。石材はいずれも安山岩となり、ＳＥｃ05を構築する際に抜き取られる。

**土坑**

**ＳＫｃ26**(第83図)　調査区北東隅で検出した土坑である。径１m前後を測る円形を呈し、掘方はＵ字形となる。検出面からの深度は、約0.4mを測る。

**ＳＫｃ27**(第84図)　調査区中央やや東よりで検出した土坑である。北半は側溝により消失し、東西検出長0.7m、南北検出長0.4mを測る。

**ＳＫｃ28**(第84図)　調査区中央やや南西よりで検出した土坑である。攪乱と遺構によって、全容は明らかではないが、東西検出長1.9m、南北検出長1.6mを測る。平面形は不整形を呈し、深度は0.1mと極めて浅い。

**ＳＫｃ29・30**(第84図)　調査区北端部で検出した土坑である。北半部は調査区外へ延長し、東西検出長2.1m、南北検出長１mを測る。掘方断面形状は逆台形を呈し、土師質土器甕を２基併行して設置する。甕の底径は0.4mを測り、底部から0.3m前後遺存する。甕内の内容物は確認できないが、２連一対で機能した遺構と考えられ、便所遺構の可能性も残る。

**溝状遺構**

**ＳＤｃ13**(第81図)　調査区東端部で検出した溝状遺構である。東端部に位置する近代の石組溝を除去した段階で検出した。直線状に延び、主軸方位はＮ５°Ｅを示す。断面形状はＵ字形となる。

**不明遺構**

**ＳＸｃ17**(第83図)　調査区西端部で検出した不明遺構である。ＳＺｃ21に後出する重複関係を有し、それに先行する。東西検出長2.4mを測り、平面プランは不整形を呈する。

**ＳＸｃ18**(第84図)　調査区北部で検出した不明遺構である。東端部は攪乱により失われるが、平面形は隅丸方形を呈する。南北検出長1.6m、東西検出長２m前後を測る。断面形状は逆台形状を呈するが、西側は直角に近い傾斜角度で立ち上がり、東側は緩やかである。埋土は下層に暗灰黒色粘土層が堆積し(５層)、その上部に基盤層の崩落土を認める(４層)。さらに最上部には再度、黒灰色粘質土層が西側から流れ込むように堆積し(３層)、その上位に基盤層ブロックを含む１・２層を認める。４層の存在から、５層と１～３層に大別でき、形成年代に差異を認める。また、１・２層は比較的短期間に埋め戻された可能性があり、削平状況は不明であるが、現状での最終埋没土となる。５層埋土には多量の炭化物ないし木製品を含み、後者は報文番号1327～1331として図化したちゅうぎとなる。廃棄土坑の可能性もあるが、土層堆積状況や出土遺物から便所遺構の可能性が高いと考える。

**ＳＸｃ19**(第85図)　調査区中央で検出した不明遺構である。南半ないし西側の一部は攪乱により失われ、全容は不明であるが、平面形は凹字形のようなプランを呈する。セクション図は提示できないが、深度は0.2m前後を測る。底面はほぼ水平となり、一点破線で表現した内側は、漆喰・砂利を含む埋土を用いて堅緻に締め固める。その上部にレンガをＴ字形に配し、一部コ字形に積み上げた箇所や狭い範囲に敷き詰める状況も確認できる。遺構の正確は不明であるが、明らかに明治期以降の所産と考えられる。

**ＳＸｃ50**(第85図)　当初、ＳＸｃ19と重複関係を有すると判断したが、掘り下げの結果、同一遺構と判断したものである。遺物整理が不十分であり、ＳＸｃ50として遺物を報告したが、ＳＸｃ19からの出土遺物と理解して頂きたい。

**ＳＸｃ20**(第84図)　調査区中央西端部で検出した不明遺構である。ＳＸｃ21掘り下げ後にその底面で確認し、それに先行する遺構である。長軸長1.8m、短軸長1.1mを測り、楕円形の平面形を呈する。断面形状は逆台形となる。

**ＳＸｃ21**(第85図)　調査区中央西端部で検出した不明遺構である。西半は調査区外へ延長し、半円形のプランで検出した。断面形状は浅い皿状を呈する。10～15層がＳＸｃ21に伴う埋土と考えられ、下層に黒褐色粘質土(12層)、上層に灰黄褐色粘質土が堆積する(10層)。

**ＳＸｃ22**(第86図)　調査区中央やや北よりで検出した不明遺構である。耐火レンガを用いた構築物で、平面形は東西に円形を連ね、東側に突出部のある瓢箪形となる。レンガの長側面ないし小口面を内側に向けて横積みし、内側に比較的滑らかな曲面を創出する。基底部からの高さは0.9mを測り、西側の内径は1.6m、東側は1.5mを測る。両者の間には直線的に仕切られた壁があり、その下位部分のみ方形の窓を認める。突出部は東側円から連続し、収束することなく、平行に延びる。その境部分の底面には枕木状の木材を設置し、底面は緩やかに駆け上がる。木材の設置は、突出部先端にも認め、構築物の東端を画する。底面構造は、西側円は径0.5m前後の板状石材を敷き並べ、その上位に暗灰色粘土を薄く貼り付ける(３層)。東側円には拳大からその２倍程度の円礫を不規則に配し、その上位に堅緻に締まる砂質土(６層)と漆喰の可能性もある土を敷設しており(４層)、異なる構造を呈する。埋土は炭化物を多量に包含する黒色砂が厚く堆積する。その性格は不明であるが、埋土中より報文番号1360として図化した窯構築部材が出土する。高松城跡(西の丸町Ｂ地区)から多量に出土した窯道具や窯構築部材、焼け歪んだ陶磁器との関連が注目できる。明治期には、西外曲輪全域に監獄署が設置され、監獄内では受刑者の安価の労働力を利用した陶磁器生産が行われており、それに関連した施設である可能性が想定できる。また、使用された耐火レンガは、前述したＳＸｃ19にも確認でき、両者の関連性が指摘できる。

**ＳＸｃ23**(第86図)　調査区南端部で検出した不明遺構である。東半は調査区外へ延長し、検出した限りでは、不整形プランを呈する。埋土は17～23層を想定したが、17～19層は別遺構かもしれない。南側の掘り込み面は７層上面であり、東側へ投影すると10層上面となり、標高1.3m前後となる。調査区の大半は1.1mで遺構面を検出しており、注目できるが、遺構からの出土遺物は皆無である。

## 9．Ⅸ区

### 基本層序

Ⅸ区では４面の遺構面を確認した。第89図に基づきその基本層序について述べる。20～25層は摩滅した弥生土器・須恵器を包含するが、基盤層とした。調査区調査区南端では標高0.3m、中央付近では0.6m、北部では0.6mを測り、北部～中央部にかけて比較的平坦な面を認めるが、南に向かって傾斜する旧地形に復元できる。16～19層はＳＸｃ31・32を包含し、中世前半に属する遺物を多量に包含する層位である。調査区南部を中心に確認し、南に傾斜する旧地形の低い箇所に堆積した状況が窺える。基盤層ないし16～19層上面が第４面の検出面となる。その上位に一連の整地層と考えられる10・12～15層が堆積し、その上面において第３面を検出した。第２面は８・９・11層上面で検出し、27層においてこれを掘り込み面とした遺構埋土が確認できる。その上層には６・７層が堆積し、第１面構成土となる。26層に遺構埋土が確認できる。３～５層は明治期以降の整地層と判断した。第90図Ｂ－Ｂ’・Ｃ－Ｃ’セクションもＡ－Ａ’間セクションの基本層序におおむね符合する。

それぞれの遺構検出面の標高は平坦ではなく、第４面が0.4～0.6m、第３面が0.5～1.1m、第２面が0.8～1.1m、第１面が1.0～1.3mを測る。

### 第１面（第87図）

標高1.0～1.3mで検出した遺構面である。４基の井戸を中心に検出した。ＳＥｃ09からは報文番号1487として図化した曲物が出土し、「獄署」という焼き印を認める。調査地点は明治期に監獄署が設置されており、それに伴う遺構と判断できる。

### 井戸

**ＳＥｃ07**（第95図）　調査区東端部で検出した井戸である。径1.5m前後の円形掘方内部に土師質土器井筒を設置し、３段以上積み重ねた状況が確認できる。裏込には灰色ないし褐色粘土ブロックを包含し、掘方掘削時に生じた土量を用いたと考えられる。

**ＳＥｃ08**（第95図）　調査区中央南よりで検出した井戸である。土師質土器井筒を井戸枠として利用し、その接合箇所にはモルタルが確認できる。

**ＳＥｃ09**（第95図）　調査区北西部で検出した井戸である。検出面では、土師質土器井筒を確認したが、掘り下げると、下層からは幅0.1m前後の板材を組み合わせた桶を検出した。桶の外面にはツタを用いた固定がなされるが（図版54左下）、土圧により円弧は保たれない。井筒との連結は、下部木桶の外に被せるように井筒を設置し、その接合には漆喰の使用を認める。

出土遺物には、「獄署」という焼き印を押印した曲物を認め（報文番号1487）、明治期に設置された監獄署に関連した井戸であることが窺える。

**ＳＥｃ10**（第95図）　調査区南西部で検出した井戸である。井戸枠には土師質土器井筒を用い、２段以上確認できる。その径は0.6～0.7mを測る。掘方は北側で確認し、掘方と井筒の間、つまり裏込部分は0.1mしかない。井筒内には人頭大以上の礫の転落を認める。

### 土坑

**ＳＫｃ39**（第95図）　調査区北西隅で検出した土坑である。西半は調査区外へ延長する。南北検出長2.3m、東西検出長1.1mを測り、検出した限りでは隅丸方形の平面プランを呈する。掘方断面形状は、浅い皿状となる。

### 第２面（第87図）

標高0.8～1.1mで検出した遺構面である。調査区の大半が攪乱となり、建物ないし柵列の復元は行えなかったが、10基を越える礎石を検出した。

### 柱穴

**ＳＰｃ534**（第94図）　調査区北東隅で検出した礎石である。長軸長0.5m以上、短軸長0.4mの柱穴を埋め戻し、礎石を据える。礎石上面には水平面を認める。

**ＳＰｃ533**（第94図）　調査区北東部で検出した柱穴である。径0.4m前後を測る柱穴である。完形に近い瀬戸・美濃系磁器碗・皿を１点ずつ検出した。底面には拳大前後の石材が不規則に配され、根固め石の可能性も残す。

**ＳＰｃ532**（第94図）　調査区中央南東よりで検出した礎石である。礎石の形状に呼応する柱穴を掘り、埋め戻した後に礎石を設置する。礎石の規模は0.2×0.3mを測る。

**ＳＰｃ530**（第94図）　調査区中央で検出した礎石である。径0.2mを測る柱穴に礎石を据えて埋め戻す。礎石上端面には水平面を認める。

**ＳＰｃ528**（第94図）　調査区西部で検出した礎石である。径0.4m前後の柱穴を埋め戻し、礎石を設置する。

**ＳＰｃ529**（第94図）　調査区西部で検出した礎石である。長軸長0.45m、短軸長0.3mを測る柱穴に、上面が平たい石材と小形石材を据える。

**ＳＰｃ527**（第94図）　調査区西壁で検出した礎石である。上面が水平な石材を礎石として認める。

**ＳＰｃ536**（第94図）　調査区東壁で検出した礎石である。人頭大の石材を用い、上端の水平面は狭い。

**ＳＰｃ525**（第94図）　調査区北西部で検出した礎石である。長楕円形の柱穴上部に礎石を設置する。

**ＳＰｃ524**（第94図）　調査区北西部で検出した礎石である。長楕円形の柱穴上部に礎石を設置する。

**ＳＰｃ523**(第94図)　調査区北西部で検出した礎石である。径0.3m前後を測る柱穴の上位に礎石を設置する。なお、これら礎石の石材にはいずれも安山岩が用いられる。

**ＳＰｃ535**　調査区北東部で検出した柱穴である。上面埋土は黄褐色シルト質土となる。

**ＳＰｃ537**　調査区西部で検出した柱穴である。上面埋土は暗灰色粘質土となる。

**土坑**

**ＳＫｃ38**(第94図)　調査区中央やや東よりで検出した土坑である。平面形は歪な五角形状を呈し、断面形状は浅い皿状となる。

**第３面(第88図)**

第３面は標高0.5～1.1mで検出した。遺構面は旧地形と同様に、南に向けて緩やかに傾斜する。遺構は柱穴のほか、埋土中に拳大前後の石材を多量に包含する不明遺構を検出した。なお、攪乱が調査区の大半に及び、遺構を検出した面積は狭い。

**柱穴**

**ＳＰｃ520**　調査区南東隅で検出した柱穴である。上面埋土は暗灰褐色弱粘質土となる。

**ＳＰｃ517**　調査区中央部で検出した柱穴である。上面埋土は暗灰褐色弱粘質土となる。

**ＳＰｃ505**　調査区北西部で検出した柱穴である。上面埋土は暗灰褐色弱粘質土～砂質土となり、炭化物の含有を認める。

**不明遺構**

**ＳＸｃ26**(第93図)　調査区中央南西よりで検出した不明遺構である。一辺1.7m前後を測る隅丸方形を呈する土坑状の落ちを含む範囲に、拳大からその２倍程度の小礫の集積を認める。断面形状は逆台形を呈し、土坑内には小礫が充填され、一部検出面より盛り上がる箇所もある。小礫範囲は、土坑掘方を超過して広がり、その最大検出長は５mに達する。石材種別は、安山岩が主体を占め、ごく少量のみ花崗岩・砂岩を認める。下層の礫敷遺構とは明らかに層位が異なる。Ⅱ区で検出した礎石建物の礎石間に配置した礫群に共通する可能性もあるが、礎石は確認できない。

**ＳＸｃ27**(第93図)　調査区中央で検出した不明遺構である。一辺1.4m前後の不整形プランを呈し、断面形状は舟底状となる。検出面からの深度は0.2mを測る。埋土中央部には拳大から人頭大の石材を認め、石材は、安山岩が９割を占め、花崗岩・砂岩がほぼ同量確認できる。ＳＸｃ26の石材組成に近似する。

**ＳＸｃ28**(第93図)　調査区南西部で検出した不明遺構である。東半は現代の建物基礎により失われ、南北検出長1.6m、東西検出長0.7mを測る。埋土内には多量の小礫を認め、その石材組成はＳＸｃ26・27に共通する。断面形状は舟底状を呈し、遺構検出面からの深度は約0.3mを測る。ＳＸｃ26～28は土坑状の落ち込み内に石材を充填し、使用石材組成も等しく関連した遺構であることは明白である。検出位置が直線的に並ぶ状況もこれを反映する。その性格については、不明であるが、下層の礫敷遺構とは関連しない。

**第４面(第88図)**

標高0.4～0.6mで検出した遺構面である。第２・３面では遺構面の大半に攪乱が及んでいたが、第４面では、攪乱の範囲が比較的狭い。その結果、他の遺構面より遺構密度は高くなる。

**柱穴**

**ＳＰｃ494**　調査区中央やや南東よりで検出した柱穴である。上面埋土は暗灰褐色砂質土から弱粘質土となる。

**ＳＰｃ486**　調査区中央で検出した柱穴である。上面の埋土は暗灰褐色砂質土から弱粘質土である。

**ＳＰｃ483**　調査区北東部で検出した柱穴である。上面埋土は暗灰褐色砂質土から弱粘質土となる。

**土坑**

**ＳＫｃ31**(第91図)　調査区南東部で検出した土坑である。長軸長2.1m、短軸長1.3mを測る不整形の平面形を呈する。断面形状は階段状を呈し、底面ほぼ中央に径１m前後の落ちを認める。検出面からの深度は0.2mを測る。

**ＳＫｃ32**(第92図)　調査区南東隅で検出した土坑である。北西部は攪乱により消失するが、長軸長2.2m、短軸長0.7mを測り、皿状の浅い断面形状となる。埋土は炭化物を少量包含する暗褐灰色砂質土の単一層である。

**ＳＫｃ33**(第91図)　調査区中央北東よりで検出した土坑である。東西を攪乱により失い全容は明らかではないが、南北幅3.5mを測る大形土坑である。緩やかに立ち上がり、底面に平坦面を認める断面形状となる。埋土は下層に灰色砂(２・３層)、上層に褐灰色砂が堆積する(１層)。

**ＳＫｃ34**(第92図)　調査区南部で検出した土坑である。西端部は攪乱により消失し、南北幅0.8m、東西検出長1.2mを測る長楕円形プランを呈する。断面形状は逆台形となり、検出面からの深度は0.2mを測る。

**ＳＫｃ35**(第92図)　調査区中央で検出した土坑である。

北西側を攪乱により失うが、径1.9m前後の円形を呈する。断面形状は舟底状をなし、検出面からの深度は0.4mを測る。

**ＳＫｃ36**(第92図)　調査区南端部で検出した土坑である。南半は調査区外へ延長し、北端部の検出に留まる。断面形状は浅い皿状を呈し、深度は0.1mを測る。

**ＳＫｃ37**(第92図)　調査区西部で検出した土坑である。南半は攪乱により消失するが、一辺１m前後の不整形を呈する。西半部を中心に底面周縁に沿った溝状の落ちを認め、明灰褐色砂が堆積する(２層)。最終埋没土は褐灰色弱粘質土となる(１層)。

**不明遺構**

**ＳＸｃ24**(第91図)　調査区中央西端部で検出した不明遺構である。４面に配置したが、出土遺物から中世前半期に属する遺構と考えられる。第５節において後述する。

**ＳＸｃ25**　調査区中央で検出した不明遺構である。東西に攪乱が及ぶため、全容は不明であるが、検出した限りでは、南西から北東方向に主軸方位をとる土坑ないし溝状遺構である。その幅は３～４mを測り、検出面からの深度は0.2m以下と極めて浅い。

## 10. Ｘ区

**基本層序**

調査区の３／５程度まで攪乱が及んでおり、遺構面の大多数は失われる。加えて、残り２／５の大多数にも最終遺構面まで攪乱が及び(標高1.1m付近)、検出した遺構の大半は最終面で確認した。基本層序を第97図Ｂ－Ｂ’間セクションに基づき述べる。10～28層はＳＫｃ40の埋土である。出土遺物の年代観は17世紀前葉を示し、少なくとも1.1m前後にはそれに伴う整地面が存在していたと考えられる。その下位に基盤層である７～８層を認める。基盤層としたが、弥生土器・須恵器等を包含し、中世以前の堆積層と理解できる。ＳＫｃ40埋土の上位に、５層、４層、３層がそれぞれ堆積し、その上面がほぼ水平であることから、それぞれ遺構面であった可能性が高い。５層上面は1.2m前後、４層上面は1.4m前後、３層上面は1.6m前後を測る。一方、Ａ－Ａ’間セクションでは、標高０～0.3mを上面とした基盤層を認める。その上位には中世土器包含層が形成され、ＳＸｃ30を包含する。さらに、その上位にそれぞれ整地層になる可能性が高い層位を認めるが、Ａ－Ａ’間セクションにおける最上位標高は1.0mを測り、前述したＳＫｃ40に伴う遺構面より下位に位置する。よって、Ａ－Ａ’セクション３～５・13・14・17層はＳＫｃ40を検出した整地面と理解できる。

検出遺構は、東西・南北主軸の柵列、井戸、土坑等があり、調査区南端で一部のみ検出した大形土坑は廃棄土坑として注目できる。

**柵列**

**ＳＡｃ09**(第98図)　調査区南西部で検出した柵列である。ＳＰｃ557～561が0.8～１m間隔で直線的に並ぶ。主軸方位はN83°Wの方位にとる。各柱穴には0.1～0.2m前後を測る根石を認め、その上端レベルは0.3～0.5mと不揃いである。ＳＫｃ48の埋没後に柱穴が開削されており、それに後出することが窺える。

**ＳＡｃ10**(第98図)　ＳＡｃ09に重複する位置で検出した柵列である。ＳＰｃ562・563で杭を確認し、それを繋ぐと、ＳＰｃ559内に位置する杭も同一直線状に並ぶ。杭間隔は0.55mと等しい。ＳＰｃ559の検出状況から、ＳＡｃ09に後出する可能性を想定しておきたい。

**ＳＡｃ11**(第98図)　調査区南東部で検出した柵列である。ＳＰｃ564～571がN84°Wの主軸方位で直線的に並ぶ。すべての柱穴がＳＡｃ11を構成する可能性もあるが、それぞれの柱穴深度は不揃いである。根石は存在しないが、ＳＰｃ571には柱材を認める。ＳＡｃ09と関連して街路となる可能性も想定したが、わずかに主軸方位を違える。

**ＳＡｃ12**(第98図)　ＳＡｃ11に重複する位置にある柵列である。ＳＰｃ568・572・573がN81°Wの方位に直線的に並ぶ。いずれも柱穴内に根石を認め、その上端レベルは標高0.3m前後を測る。ＳＡｃ11とは異なる時期に属するが、前後関係は不明である。

**ＳＡｃ13・ＳＤｃ14**(第98図)　調査区南東部で検出した溝状遺構と柵列である。ＳＤｃ14は主軸方位をＮ３°Ｅにとり、検出長は約5.1mを測る。溝幅は約0.4mを測り、断面形状は箱形を呈し、検出面からの深度は0.3m前後となる。埋土は下層に基盤層ブロックを含有する灰色シルト質土、上層に灰黄色シルト質土がそれぞれ堆積し、流水の痕跡は認められない。ＳＡｃ13は、ＳＤｃ14に後出する重複関係を認め、その層位関係は、Ｆ－Ｆ'間セクションに提示した。９層が柵列を構成する柱穴の埋土となり、明らかにＳＤｃ14に後出する状況が窺える。布掘りの可能性も想定したが、ＳＤｃ14掘方を明らかに掘り込む状況も確認でき、異なる時期の所産と考えた。両者ともに区画施設と考えれば、主要な地割ラインであったと想定できる。それを示すように、高松城跡(西の丸町Ｃ地区)では、Ｘ区の北に位置するⅧ区ＳＡｃ06～08が同一延長線上に位置する。さらに、高松城跡(西の丸町Ａ地区)ＳＤａ01とＳＡａ01も同じく同一直線状に並ぶ(古野2001)。

**柱穴**

**ＳＰｃ599**　調査区南東部で検出した柱穴である。上面埋土は灰色粘質シルト質土で、基盤層ブロックを少量包含する。

**ＳＰｃ557**　調査区南東部で検出した柱穴である。上面埋土は青灰色シルト質砂で、グライ化する。

**井戸**

**ＳＥｃ11**(第99図)　調査区北東隅で検出した井戸である。攪乱により掘方の一部は消失するが、径1.4m前後に復元できる。掘方はＶ字形を呈し、中位で屈曲し、下位は直線的になる。検出面からの深度は約0.9mを測り、基盤層５層に到達する。５層は小礫を多量に含む砂礫層で、湧水層となる。石組の井戸となり、拳大から人頭大の規模の石材が用いられる。その構築は、掘方断面形状に呼応し、標高－0.2mより下位は直立し、それ以高は大きく開く。裏込埋土にもそれに伴った土質・土色の変化を認める。石材は、安山岩が主体を占め、少量の花崗岩・砂岩を含む。

**ＳＥｃ12**(第99図)　調査区南部で検出した井戸である。掘方は長軸長2.3m、短軸長1.6mを測り、長楕円形の平面プランを呈する。掘方深度は検出した限りでは深度１m以上を測り、断面形状は西側にテラス面を有するＵ字形となる。井戸枠には、幅0.1m以下の板材を桶状に組み、外面にツタを上下２段に回し、井戸枠の固定を図る。

なお、当初はＳＫｃ42と呼称し、井戸枠を検出後に名称を変更した。遺物の整理不足から、出土遺物ではＳＫｃ42とＳＥｃ12の両者をそれぞれ提示したが、ＳＫｃ42も同遺構出土遺物となる。

**土坑**

**ＳＫｃ44**(第99図)　調査区南西部で検出した土坑である。長軸長１m、短軸長0.6mを測り、隅丸方形の平面プランを呈する。断面形状は浅い皿状を呈する。

**ＳＫｃ41**(第99図)　調査区北端部で検出した土坑である。長軸長約３m、短軸長約2.4mを測り、楕円形の平面形となる。検出面からの深度は浅く、0.3mを測る。

**ＳＫｃ43**(第99図)　調査区南西部で検出した土坑である。南北検出長1.6m、東西幅1.5mを測り、平面形は不整形を呈する。断面形状は、逆台形状となり、検出面からの深度は0.3mを測る。

**ＳＫｃ40**(第100図)　調査区南端部で検出した土坑である。北端部の検出に留まり、元来の規模は不明である。東西検出長5.2m、南北検出長１mを測る。埋土は２層に大別でき、下層に暗灰色シルト質土～粘土層(24～28層)、上層にブロックを含む黄灰色シルト質土が堆積する(10～23層)。下層上端面には堅緻に締まるオリーブ色系の層位を帯状に認め、下層堆積後、一定期間開放状態にあり、その後に上層埋土が堆積したと考えられる。よって、上層と下層の堆積時期には差異が生じることになる。出土遺物ではそれに言及することは困難であるが、肥前系陶器では胎土目積み製品が主体をなし、砂目積みを少量認め、さらに小破片ではあるが、溝縁皿も存在する(報文番号1546)。肥前系磁器も少量認めるが、その量は少なく、おおむね1640年代前後に位置付けられる。ＳＫｃ40の最終埋没時期は1640年代前後となるが、遺物の主体は1620～30年代となる。こうした出土遺物の様相を土層堆積状況で理解することも可能かもしれない。

**ＳＫｃ47～49**(第101図)　調査区南西部で検出した土坑である。ＳＫｃ48は攪乱により北半が消失し、南北検出長約2.5m、東西検出長約２mを測る。平面形は不整形となり、ＳＫｃ47・49に先行する重複関係を有する。断面形状は逆台形状となり、検出面からの深度は0.5mを測る。底面には平坦面を認める。埋土は上層に炭化物を多量に含む層位を認め(６層・22～28層)、下層に基盤層ブロックを含む灰色系シルト質土が堆積する(７～９層)。ＳＫｃ47は1.3×0.9mの楕円形の平面プラン

を呈し、断面形状は舟底状となる。検出面からの深度は0.3mを測り、埋土はオリーブ灰色シルト質土の互層となる。ＳＫｃ49は西半部のみの検出に留まり、東半は調査区外へ延長する。平面形は不明であるが、ＳＫｃ48に後出する重複関係となる。埋土は基盤層ブロックを含む灰色シルト質土がわずかに確認できる(10・29層)。ＳＫｃ47～49は重複関係より、ＳＫｃ48→ＳＫｃ49・ＳＤｃ14→ＳＫｃ47という埋没過程が想定でき、ＳＤｃ14埋土を14～16層に認める。

なお、ＳＫｃ50はＳＫｃ48と同一遺構であるが、遺物の整理不足からＳＫｃ50として報告する結果となった。ＳＫｃ50出土遺物はＳＫｃ48出土遺物と理解して頂きたい。

**ＳＫｃ45・46**(第101図)　調査区南西部で検出した土坑である。当初、別遺構として調査し、その後連続する遺構であることが判明した。本来であれば、同一遺構名とすべきであるが、遺物の整理不足から両者を併記する結果となった。南北長1.5m、東西長2.4mを測り、長楕円形の平面プランを呈する。断面形状は舟底状となり、検出面からの深度は0.3mを測る。埋土は炭化物を包含する灰色系シルト質土の互層となる。

**ＳＫｃ51**(第101図)　調査区南西部で検出した土坑である。一辺1.5m前後の不整形プランを呈する。断面形状は浅い舟底状となり、検出面からの深度は、0.1mを測る。埋土は下層に青灰色シルト質土(４層)、中層に灰色系シルト質土(２・３層)、上層に基盤層ブロックを含有する暗青灰色シルト質土がそれぞれ堆積し(１層)、上層埋土は比較的短期間に埋め戻されたと考える。

## 11. Ⅺ区

### 基本層序

最も層位の遺存状況が良好な第102図のＡ－Ａ’間セクションに基づき基本層序について述べる。10・11層に基盤層を認め、その上面の標高は0.6m前後を測る。その上位には連続する整地層と考えられる８・９層が堆積する。上面は平坦に揃えられ、元来遺構検出面であった可能性が高い(標高0.7m前後)。さらに上位に７層が厚く堆積する。上面の標高は1.2m前後を測り、遺構検出面であった可能性が高い。６層上端には攪乱層が及んでおり、元来の標高は不明であるが、1.2～1.3mを測る。上面は遺構検出面であった可能性が高い。調査区の大半は国労会館の基礎によって９層まで削平を受けており、10層上面で遺構を一括して検出した。

井戸・土坑・柱穴を中心に検出し、いずれも17世紀前葉までに位置付けられる。なお、下層遺構として、中世前半期に属する礫敷遺構を確認した(第５節)。

### 柵列

**ＳＡｃ14**(第103図)　調査区南端で確認した柵列である。ＳＰｃ606～608がＮ82°Ｗの方位に直線的に並ぶ。いずれも径0.7m前後、検出面からの深度は0.3mを測り、底面はほぼ水平に揃う。断面形状は箱形を呈し、埋土は灰色弱粘質砂質土の単層で、柱痕跡等は確認できない。柱間間隔は1.5～２mを測る。

隣接する高松城跡(西の丸町Ｂ地区)のＳＢｂ37(旧遺構名ＳＢ８Ｄ202)と関連する可能性が指摘されるが(宮崎1998)、主軸方位に差異を認める。

**ＳＡｃ15**(第103図)　調査区中央やや東よりで検出した柵列である。ＳＰｃ609～612が直線状に並び、主軸方位をＮ５°Ｅにとる。各柱穴は径0.3～0.4m前後、柱間隔は1.2m前後を測る。柱痕跡をＳＰｃ610・611で確認でき、ＳＰｃ609・612では根石の可能性のある石材を認める。

### 柱穴

**ＳＰｃ627**(第103図)　調査区南東部で確認した柱穴である。長軸長0.7m、短軸長0.5mの楕円形の平面形を呈し、検出面からの深度は0.2mを測る。

**ＳＰｃ630**(第103図)　調査区南東部で検出した柱穴である。径0.5m前後を測り、箱形の断面形状を呈する。検出面からの深度は0.28m前後を測る。

**ＳＰｃ620**(第103図)　調査区中央東よりで検出した柱穴である。径0.2mを測り、深度は0.1mに満たない。

**ＳＰｃ614**(第103図)　調査区北部で検出した柱穴である。径0.3m前後を測り、埋土内に一辺0.2m前後の根石ないし礫石を認める。

**ＳＰｃ615**(第103図)　調査区北部で検出した柱穴である。径0.4m前後を測り、底面に根石を認める。

### 井戸

**ＳＥｃ13**（第103図）　調査区北部で検出した井戸である。西端部は攪乱により失われるが、径2.1m前後の正円形に近い平面形を呈する。掘方は箱形の断面形状となり、検出面からの深度は1.1m前後を測る。底面レベルは－0.6mを測り、湧水層に達する。掘方内には石積みによる井戸を設け、上端内法は約１mを測り、ほぼ垂直に構築される。石材は一辺0.3m前後を測り、構築に伴う横目地の通りは認められない。その種別は安山岩が主体を占め、花崗岩・閃緑岩・角礫凝灰岩を少量含む。掘方と側石石材との間隙は0.1～0.2mと狭く、一部には掘方に接する箇所も認めるが、裏込には拳大以下の石材を用い、基盤層粘土ブロックを含有することから、掘方掘削時に生じた土量を用いたと考えられる。井戸内の埋土は４層に細分でき、４・５層には、側石に使用した石材の崩落も認める。

**ＳＥｃ14**（第104図）　調査区南西部で検出した井戸である。掘方は径3.1m前後を測り、ほぼ正円形の平面形を呈する。掘方は箱形の断面形状を呈し、検出面からの深度は約1.8mを測る。底面の標高は－1.3mを測り、湧水層に達する。掘方内には石積みの井戸を構築し、最上部の内法は約1.8mを測り、わずかに逆八字形となる。石材規模・形状は、標高－0.5m前後において差異を認める。それより下部には0.4m前後を測る比較的大形石材をほぼ垂直に積み、上部には小形石材を混在させるようになり、わずかに上開き気味に構築する。－0.5m付近の西側裏込にも休止面を示す石材を認め、これを境に構築単位が異なると理解できる。石材種別は安山岩が大多数を占め、わずかに花崗岩を認める。裏込には、掘方掘削時に生じた土量を用いるが、小形石材の使用は確認できない。井戸内埋土は２～６層と７層に大別できる。７層は側石内埋土に相当し、一部には植物遺体も残る。２～６層はＳＥｃ14が機能停止後の埋没土となり、側石を破壊した状況も窺える。

### 土坑

**ＳＫｃ52**（第105図）　調査区中央で検出した土坑である。南半は攪乱により消失するが、検出した限りでは南北検出長1.3m、東西幅3.1mを測る。平面形は不整形を呈する。断面形状は浅い皿状となり、埋土は下層に濁灰褐色混中砂粘質土（３層）、上層に淡褐色中～粗砂が堆積する（２層）。

**ＳＫｃ53**（第105図）　調査区南東隅で検出した土坑である。北西部の検出に留まり、３／４は調査区外へ延長する。検出した限りでは隅丸方形を呈し、逆台形の断面形状となる。検出面からの深度は0.8mを測り、埋土は淡灰色系の砂質土で構成される（４・５層）。

**ＳＫｃ54**（第105図）　調査区南東部で検出した土坑である。検出径は１m前後を測る正円形プランとなるが、セクションでは２段掘方が確認でき、その上端最大径は1.8mを測る。標高0.2m前後で掘方形状は大きく変化し、－0.3mまで直に掘り込まれ、底面は水平となる。埋土も標高0.2mより上位には濁灰色混中砂粘質土を認め（３層）、それより下位は、シルト質土と粘質土が互層に堆積する（４～６層）。掘方底面では湧水が確認でき、井戸の可能性も想定する必要があるが、側板等の施設を検出することはできなかった。

**ＳＫｃ55**（第105図）　調査区中央部で検出した土坑である。北半は国労会館基礎により失われる。検出した限りでは、不整形を呈し、東西幅は１mを測る。箱形の断面形状となり、深度は0.5mを測る。

### 溝状遺構

**ＳＤｃ15**（第105図）　調査区北部で検出した溝状遺構である。検出した限りでは、直線状を呈し、N87°Wの主軸方位となる。溝幅は0.4m弱を測り、浅い舟底状の断面形状を呈する。検出面からの深度は0.1mを測る。

### 不明遺構

**ＳＸｃ29**（第105図）　調査区南部で検出した不明遺構である。南西から北東方向に延び、検出長７m、幅２～４m前後を測る。浅い皿状の断面形状を呈し、検出面からの深度は0.2～0.3mを測る。埋土は淡茶灰色中～粗砂で構成される。

## 第５節　中世遺構

前節までは調査区別に報告したが、当節では中世段階に属する遺構を一括して報告する。第106図にその分布状況を示したが、明瞭な掘方がなく、旧地形の低い箇所に安山岩板石を敷き詰めた礫敷遺構と土坑状の掘方を有する不明遺構がある。結論的には前者は当時の汀線の緩やかな斜面に拳大の板石を設置した遺構と評価できる。不明遺構に関しては、旧地形の高い箇所に開削された遺構で、下層に灰白色系粘質土を敷設し、礫敷遺構と同じ石材が充填ないし上面に敷設された遺構である。その性格は不明であるが、出土遺物の年代観から両者はいずれも同時期の所産であることが窺える。出土遺物が示す年代観は、12世紀後半～13世紀前葉に位置付けられる。

以下、各遺構について報告する。

### 礫敷遺構

**ＳＸｃ30**（第107図）　Ｘ区北端部で検出した礫敷遺構である。第107図Ａ－Ａ’間セクションでは、中世段階の基盤層である19～21・26～28・30・32・33層上面に0.5ｍ前後の起伏を認め、調査区ほぼ中央が高く、東西へ緩やかに傾斜する旧地形が復元できる。ＳＸｃ30石材を包含する層位は旧地形の低い箇所に堆積し、その上端は0.4ｍ前後を測り、ほぼ水平となる。南北セクションであるＢ－Ｂ’間セクションでは、南側にわずかに傾斜する旧地形とそれに沿って堆積するＳＸｃ30包含層を認める。その構造は旧地形を形成する基盤層に、拳大前後の板石を張り付けるように敷設する。上位遺構や攪乱により石材が確認できない箇所もあるが、調査区全域に広がる。Ⅺ区中央部ではＳＸｃ30に連続する石材やそれを包含する層位は確認できない。石材は安山岩が主体を占め、わずかに花崗岩を認める。安山岩は表面が赤化するが、被熱によるものではなく、風化による変色と考えられる。また、板石の間隙やそれを包含する層位からは多量の中世土器が出土し、報文番号1843として図化した碇の可能性がある木製品も認める。

**ＳＸｃ31**（第108・109図）　Ⅸ区南半部に位置する礫敷遺構である。その平面プランは、調査区全域に分布する現代建物基礎等による攪乱や上位遺構によって不明な点が少なくない。しかし、攪乱を受けていない箇所とセクションに残る石材の分布からの復元は可能である。南西隅では北西から南東方向にかけて、基盤層とＳＸｃ31石材の境を認める。第109図Ｅ－Ｅ’間セクションの16層北端部と基盤層である21層の接点がおおむねその境に位置し、それ以北にはＳＸｃ31石材は認められない。21層は南に潜り込むように傾斜しており、わずかではあるが、南に傾斜する旧地形が看取でき、その低位にＳＸｃ31は位置する。調査区南端部中央は、Ｄ－Ｄ’間セクションにより、調査区南端部から８ｍ北側までＳＸｃ31を構成する石材が確認できる。東端部では、南端から５ｍ付近までＳＸｃ31の石材を認め、その北側に位置する攪乱を受けていない箇所において、石材は確認できない。よって、調査区西端から南東方向に凸形に突出し、Ｄ－Ｄ’間セクション北端部まで入り込み、さらに東に延びる平面プランに復元可能である。前述したように、この境より旧地形は緩やかに南に傾斜し、低位側にＳＸｃ31は位置し、それより北側は旧地形の高い箇所となる。上面の削平状況は明らかではないが、調査区西端部中央にＳＸｃ24が位置し、0.15ｍ前後の深度を認める点から、顕著な削平はなかったと理解したい。

石材は前述した平面プランより南側には、散漫ではあるが、ほぼ全域に分布する。丁寧に敷き並べた状況ではなく、無造作に石材を設置する。使用石材は風化して赤化した安山岩板石が大多数を占め、花崗岩・砂岩をごく少量認める。なお、石材の間隙から多量の中世土器が出土している。

**ＳＸｃ32**（第111図）　Ⅸ区北西隅で検出した石敷遺構である。セクション図はないが、北ないし西方向へ傾斜する旧地形に復元できる。前述したＳＸｃ31の15ｍ北に位置し、その間には旧地形の高い箇所が介在するため、ＳＸｃ31との連続性は認められず、旧地形の想定からはⅧ区南端部で検出したＳＸｃ34に関連すると考えられる。石材は安山岩板石で構成される。

**ＳＸｃ34**（第110図）　Ⅷ区南端部で検出した礫敷遺構である。ＳＸｃ34の北端部は攪乱が激しく、平面プランは窺えない。しかし、その３ｍ北に位置するＳＸｃ41周辺では、石材の広がりは認められず、ＳＸｃ34の北に位置する攪乱の範囲内にＳＸｃ34北端ラインがあると考えられる。第110図Ｆ－Ｆ’間セクションでは、中世段階の旧地形を構成する14・15層上面が南に向かい緩やかに傾斜する状況が窺える。石材は上位遺構や攪乱により所々に空閑地を認めるが、元来は全面に分布すると考えられる。石材の設置状況は、一方向から設置するものではなく、接地面に突き刺すような状況も認められない。ある一定の範囲に板石を無造作に置いたという表現が妥当であろう。また、石材の上面レベルはＦ－Ｆ’間セクションでは旧地形に沿って緩やかに南に傾斜し、Ｇ－Ｇ’間セクションではある程度の起伏を認める。使用石材の大多数は、風化により赤化した安山岩板石で構成され、わずかに花崗岩・砂岩を認める。

一方、Ｇ－Ｇ’間セクションでは、２つの注意すべき特徴がある。第１は北西端において石敷遺構の下に土坑状の落ち込みを認める点である。３・５～７層がその埋土となり、底面に沿って石材を含まない層位が

あり（７層）、上層に石材を含む層位を認める（３・５・６層）。さらにその上面に安山岩板石を敷設している。後述する土坑状の掘方を有する遺構に近似した特徴となろう。第２は旧地形の上位に石材を直接設置する箇所もあるが、大半は旧地形と石材の間に介在する層位を認める点である。石材の上位と下位に堆積する層位の差異を見出すことができなかったため、１層としたが、本来は両者を細分しなければならない。

こうした点を考慮すると、旧地形に土坑状の落ち込みがあり、その下層を１層に酷似した層位で埋め、中層を浅黄橙色系のシルト質土、上層を灰赤色混砂粘質土でそれぞれ埋め戻し、さらにその上位に石材下位にあたる１層が堆積し、ＳＸｃ34石材が敷設され、最終的に石材上位にある１層が堆積するという堆積状況を示す。なお、土坑状の落ち込みは隣接するＳＸｃ41やＳＸｃ40に類例を認めるが、その性格は不明である。

**ＳＸｃ49**　Ⅰ区西半部で検出した礫敷遺構である。16世紀末に構築された石垣の内側で検出し、一部石垣の石材に覆い被さる状況もあるが（図版68）、出土遺物の年代観は明らかに先行する。ＳＺｃ01裏込石材との識別が困難な状況に起因し、層位的に異なる形で検出している。第24図Ｄ－Ｄ’間セクションでは、中世段階の基盤層である10・11層上面が北に向かい緩やかに傾斜しており、それに沿ってＳＸｃ49を包含する４～９層を認める。セクションは示し得ないが、西に向かい傾斜する状況もあり、全体として北西方向へ傾斜する旧地形を復元することができる。石材は風化により赤化した安山岩板石を用い、わずかに花崗岩・砂岩を認める。石材の間隙からは中世前半期に属する遺物が多量に出土する。

**ＳＸｃ33**　Ⅺ区北東部で検出した礫敷遺構である。セクションでは示し得ないが、北東から南西に傾斜する旧地形が復元でき、その傾斜に沿って安山岩板石が敷設される。他の礫敷遺構と同じく、風化により赤化し、共通性が窺える。石材に混じり、中世前半期に属する土器が一定量出土している。

以上、各調査区で検出した礫敷遺構に関して、それぞれ個別に報告した。第３章第１節で検討を加えるが、ここで旧地形の復元を行いたい（第225図）。

南端に位置するＳＸｃ30・31は南に傾斜し、Ⅸ区北端のＳＸｃ32は北側ないし北西部に傾斜する。その間には礫敷遺構は認められず、検出した限りでは水平面をなし、旧地形の高い箇所であったと考えられる。Ⅷ区南端部では南西方向に傾斜するＳＸｃ34があり、ＳＸｃ32を考慮すると、Ⅷ区とⅨ区間には低地が存在していたと考えられる。さらにＳＸｃ35は北へ傾斜しており、Ⅷ区北部では北へ傾斜する旧地形が想定できる。ＳＸｃ34との間には礫敷遺構はなく、検出した限りでは水平面をなし、Ⅸ区中央部と同じく旧地形の高い箇所と想定できる。さらにⅠ区ＳＸｃ49は北西側へ傾斜しており、ＳＸｃ35と共に北へ傾斜する旧地形を形成する。ＳＸｃ33はＳＸｃ31西端部で確認した北西から南東方向への検出ラインの延長線上に位置する点は注目できる。上記したように、旧地形の低い箇所に礫敷遺構が存在し、礫敷遺構が確認できない箇所は旧地形が高い部分であったと考えられる。後述する土坑状の掘方を有する不明遺構はいずれもこの高い部分に存在する。こうした高低を認める旧地形の低位に位置する礫敷遺構の分布範囲を繋いだラインは中世段階の汀線になる可能性が高いと考えられる。砂嘴状の突出部や内湾気味に入り込んだ箇所を認め、その汀線に大規模な開発を加えることなく、板石を敷設したものと理解できる。

**不明遺構**

**ＳＸｃ24**（第91図）　調査区中央西端部で検出した不明遺構である。西半は調査区境に開削した側溝により失われ、全容は明らかではない。短軸長約１ｍ、長軸検出長1.1ｍを測り、隅丸方形の平面形を呈する。検出面からの深度は、0.15ｍを測り、舟底状の断面形状となる。埋土は灰色系砂質土で構成される。埋土中より報文番号1420として図化した石仏頭部が出土し、共伴遺物として12世紀中葉前後に属する和泉型瓦器椀や同安窯系青磁碗がある（報文番号1418として図化した瀬戸・美濃系陶器天目碗は混入と理解したい）。また、遺構面掘り下げ時に土坑南東部より和鏡が出土している（報文番号1421）。検出した土坑掘方より0.1ｍ前後外側に位置するが（図版63）、元来はＳＸｃ24の埋土であった可能性が高く、遺構面の認定に際して、やや掘り下げ過ぎたと考えられる。その想定が正しければ、元来の掘方断面形状は２段掘方を有し、その中位のテラス面に和鏡が鏡背を上に向けて安置していた可能性を指摘することができる。和鏡と陶磁器のセット関係から墓を想起すべきであるが、石仏が加わり、墓としての性格は首肯し難い。ここでは、稀薄な根拠であるが、鏡の出土状況と出土遺物のセット関係から、和鏡と石仏を埋納した遺構と考えておきたい。

**ＳＸｃ41**（第111図）　Ⅷ区中央やや南よりで検出した不明遺構である。東南部を攪乱により失うが、径1.8ｍ前後を測り、円形の平面プランを呈する。検出面からの深度は0.4ｍ前後を測り、逆台形の断面形状となる。埋土は下層に灰白色粘質土（４層）、上層に灰黄色系砂質土が堆積する（２・３層）。上層埋土には板状安山岩を多量に包含するが、下層には石材が確認できないという特異な堆積状況を呈する。石材は他の礫敷遺構と同じく風化により赤化した安山岩板石であり、出土遺物

の様相も等しく、同時期の所産と評価できる。その性格は、水溜状の施設や製塩工程の鹹水貯め等が想定できるが、ここでは足場固め的な施設と評価しておきたい。

**ＳＸｃ35**(第79図)　Ⅷ区北部で検出した礫敷遺構である。北半は16世紀末に築造された石垣(ＳＺｃ01)により失われる。第77図Ａ－Ａ’間セクションでは、18層が中世段階の基盤層となり、その上位にＳＸｃ35を包含する17層が堆積する。南半部は緩やかに北へ傾斜し、北半部は、一部攪乱により不明な点を残すが、明瞭な傾斜変換点を認める。ＳＸｃ35はＡ－Ａ’間セクションの西10mの地点に位置し、当該箇所ではこの明瞭な傾斜変換点は認められず、第79図Ｆ－Ｆ’・Ｇ－Ｇ’間セクションが示すように、緩やかに北に傾斜するＳＸｃ35石材が確認できる。それに後出してＳＺｃ01の構築に伴う掘方が掘削されるため、急激な変換点を示す旧地形は確認できない。石材の敷設方法は、傾斜の高い側から低い側にかけて、先に設置した石材に持たせ掛けるように設置する状況を看取できる箇所もあり、設置時の在り方を示す可能性も残すが、全体としては、無造作に設置された印象が強い。石材は風化により赤化した安山岩板石が用いられ、わずかに花崗岩を認める。

**ＳＸｃ40**(第111図)　Ⅷ区中央部で検出した不明遺構である。検出箇所は前述した南に落ちるＳＸｃ34と北に傾斜するＳＸｃ36の間に位置し、旧地形が高い部分に該当する。遺構検出面は中世段階の基盤層となる(７層)。攪乱により一部失われるが、径２m前後の隅丸方形の平面形プランを呈する。検出面からの深度は0.4mを測り、緩やかな円弧を描く断面形状となる。埋土は下層に灰色系シルト質土ないし砂質土(４・６層)、上層に灰オリーブ色系混砂粘質土が堆積する(３・１層)。上層には板状安山岩を一定量含むが、下層にはその含有は認められない。石材は礫敷遺構と同じ風化により赤化した安山岩板石で構成される。下層に粘質土の堆積はないが、下位に板状石材を含まない状況はＳＸｃ41に近似する。出土遺物の様相も礫敷遺構に共通しており、所属時期は中世前半に位置付けられる(12世紀後半～13世紀前葉)。

**ＳＸｃ37**(第111図)　Ⅷ区中央部で検出した不明遺構である。北側の掘方は検出したが、その全容を確認することはできなかった。断面形状は緩やかなＵ字形を呈し、検出面からの深度は約0.6mを測る。埋土は下層に粘性の高い灰白色粘質土(９層)、中層に灰色系混砂粘質土(５～８層)、上層に暗灰黄色粘質土がそれぞれ堆積する(４層)。下層の灰白色粘質土はＳＸｃ41の下層に通じるが、埋土中には安山岩板石は確認できない。出土遺物も稀薄であり、積極的に中世前半期に属する遺構とは評価できない。

**ＳＸｃ36**(第111図)　Ⅷ区北部で検出した不明遺構である。ＳＸｃ35の南に位置し、極めて近接した位置関係にある。径1.2m前後の正円形プランを呈し、Ｕ字形の断面形状となる。検出面からの深度は0.5m前後を測り、埋土は下層に明灰色細砂質土(３層)、中層に灰色細砂質土(２層)、上層に赤灰褐色細砂層が堆積する(１層)。埋土内には多量の安山岩板石を包含し、いずれも風化により赤化する。石材の検出状況は、土坑の形状に沿ってドーナツ状に石材を配し、南側では掘方に突き刺すように石材を設置する(図版66左下)。前記した掘方を有する不明遺構とは石材の検出状況や土層堆積状況が異なるが、使用石材は礫敷遺構ほかと等しい。その性格は不明であるが、木柱を固定した柱穴状の土坑の可能性を想定しておきたい。

**ＳＸｃ42**(第112図)　Ⅶ区南端部で検出した不明遺構である。長軸長2.2m、短軸長1.3mを測り、長楕円形の平面プランを呈する。埋土中には多量の安山岩板石を包含し、風化により赤化する。土層堆積状況は不明であるが、明瞭に土坑状の掘方を有する。出土遺物の年代観は中世前半期に属する(12世紀後葉)。

**ＳＸｃ43**(第112図)　Ⅶ区南端部で検出した不明遺構である。南半は調査区外へ延長するため全容は不明である。南北検出長0.5m、東西検出長1.2mを測る。埋土内には風化により赤化した安山岩板石を包含し、明瞭な掘方を認める。

**ＳＸｃ47**(第112図)　Ⅶ区中央西端部で検出した不明遺構である。西端部は調査区境に設けた側溝により失われ、南北長2.7m、東西検出幅1.9mを測る。不整形の平面プランを呈する。検出面からの深度は0.2m前後を測り、浅いⅢ状の断面形状となり、明瞭な掘方を認める。土層堆積状況は底面に橙茶灰色粘質土を置き、その上部に安山岩板石を敷設する。石材は風化により赤化する。遺存する石材上面はわずかに北へ傾斜し、南北方向の土坑底面も緩やかに北に傾斜する。出土遺物は12世紀末～13世紀前葉に属し、礫敷遺構と同時期の所産となる。

**ＳＸｃ46**(第112図)　Ⅶ区中央東端部で検出した不明遺構である。東半は調査区外へ延長するため全容は不明であるが、検出した限りでは南北検出長2.5m、東西検出長1.4mを測り、隅丸方形の平面形が想定できる。検出面からの深度は0.3m前後を測り、逆台形の断面形状となる。埋土は淡橙灰色粘土を主体とし(１層)、石材の含有は皆無である。その上面には安山岩板石が設置

され、ＳＸｃ40・41に近似した堆積状況を呈する。石材は前述した他の不明遺構や礫敷遺構と同じく風化により赤化した安山岩が用いられる。出土遺物から、12世紀後葉～13世紀前葉の年代観が付与できる。

**ＳＸｃ48**（第112図）　Ⅶ区中央部で検出した不明遺構である。南北長1.2m、東西長0.6mの半円形状の範囲に安山岩板石が集中する。明瞭な掘方は表現されていないが、元来掘方が存在したと考えたい。

**ＳＸｃ44**　Ⅶ区北端部で検出した不明遺構で、16世紀末に構築されたＳＺｃ01の前面に位置する。散漫に安山岩板石が分布する。出土遺物には近世初頭に属する土師質土器小皿も含み（報文番号1800）、前記した礫敷遺構や不明遺構のような出土遺物の一括性は低い。

以上、不明遺構について報告した。その分布はいずれも礫敷遺構に挟まれた旧地形の高い箇所に位置し、その検出面は中世段階の基盤層となる。明瞭な掘方を有し、基盤層の低地に板石が敷設された礫敷遺構とは性格を違える。基盤層を掘り込み、下層に灰色系粘質土を敷設した後にその上部に安山岩板石を設置する構造が主体を占める。その性格は不明な点が多いが、ここでは足場固め的な地固めのための遺構と理解しておきたい。また、ＳＸｃ36は木柱を固定した可能性が高く、他の不明遺構とは明らかに性格を違える。なお、その使用石材や出土遺物の年代観は礫敷遺構と等しく、同時期の所産といえる。

## 第６節　近世遺物

### １．Ｉ区（Ｃ区）

**整地層**（第113～115図）

１～43はＩ区包含層から出土した遺物である。それぞれ出土したレベルから１～11、33～38は第24図３～５層、12～20、39～42は11～13層、21～31、43は14～23層にそれぞれ対応する。

**1.3～1.0m**　１・２は肥前系磁器である。１は高台内無釉の一重網目文碗である。1640～1650年代。２は鉢である。内外面に花弁文を認める。17世紀末～18世紀第１四半期。３～５は肥前系陶器である。４はいわゆる三島手の鉢である。５は灰釉施釉後に鉄釉を流し掛けし、二彩手となろう。高台は畳付を規則的に削り込む（刳り高台）。６は京・信楽系陶器瓶ないし茶入れである。底部は碁笥底を呈し、畳付から高台内は無釉である。７・８は備前陶器である。８は底部内面に強いナデ調整を施し、円錐状に盛り上がる。底面には「Ｃ」字形の刻印を認める。９・10は土師質土器皿である。いずれも底部切り離し手法は回転糸切りである。11は瓦質焼成の亀山系鍋である。口縁部は体部直角に屈曲し、端部に向けて顕著に肥厚する。体部内面には入念な板ナデ調整を認める。

32～35は軒丸瓦である。32は丸瓦部も完存し、全容を窺うことができ、玉縁寄りに釘穴を１孔認める。32・33は巴の尾が長く延び、圏線状に重なるが、前者は巴径、珠文径が大きい。34・35は巴の尾が比較的長く延びるが、圏線状をなさない。珠文径に差異を認めるが、その数は12個と等しい。36・37は軒平瓦である。中心飾りはいずれも下向きの三葉文で、唐草は下向きに２転する。38は平瓦である。狭端面に刻印を認める（丸枠内に一）。

**1.0～0.8m**　12は中国産青磁碗である。内面には片彫りの蓮弁文を認め、横田・森田分類龍泉窯系青磁碗Ｉ－２ａ類に該当する（横田・森田1978、以下中国産磁器青磁・白磁分類はこれに依拠する）。13～15は肥前系陶器である。14は見込み及び畳付に砂目を認める。15はいわゆる呉器手碗である。高台内の抉り込みが深く、横断面形状はアーチ状を呈する。16は瀬戸・美濃系陶器丸皿である。鉄釉を全面に施釉し、見込み及び高台内には輪ドチ痕を認める。当遺跡出土の瀬戸・美濃系陶器丸皿のなかで、鉄釉施釉製品は数点に留まる。17は京・信楽系陶器碗である。高台内にはかすかな兜巾を認める。18は備前摺鉢である。内面には斜め方向のスリメを認め、乗岡編年近世１ｂ期の所産と考えられる（乗岡2000、以下備前摺鉢の年代観はこれに依拠する）。口縁帯外面には縦方向の沈線を１条認める。19・20は外耳付き羽釜である。口縁部は短く直立し、端部を水平に収める。当遺跡では1261に比較的良好な遺存状況を認め、全容を窺うことができる。

39～42は軒丸瓦である。39は珠文数が推定16個と多く、その径は小さい。巴の尾は細長く延び、圏線状に重なる。40～42の尾は長く延びるが、圏線をなさない。40は珠文径がやや大きく、その数は12個に復元でき、41・42は復元では14個になり、その径も小さい。

**0.8m以下**　21～24は肥前系陶器である。21は下膨れの形態を呈し、口縁部は強く外反する。外面には丸文を認める。23・24は絵唐津である。斜格子文、草花文を認める。25～27は瀬戸・美濃系陶器である。25は天目碗である。体部下半の露胎部分には錆釉を施す。大窯編年Ⅲ期の所産である（藤澤1993・2001、以下瀬戸・美濃系陶器（大窯製品に限る）の年代観に関してはこれに依拠する）。26は丸皿である。全面に施釉を認め、高台は付高台の可能性がある。志野か。27は志野織部向付である。器高３㎝前後を測る。28は施釉陶器皿である。底部には回転糸切り痕を認め、見込みには段を有する。29は施釉陶器碗である。高台内の施釉を認め、畳付内側には少量の砂が付着する。産地不明。30は土師質土器摺鉢である。顕著な使用によりスリメは著しく摩耗する。31は弥生土器である。下川津Ｂ類土器広口壺である。内外面にはローリング痕を認める。

43は軒丸瓦である。巴頭は円形に肥厚し、尾は長く間延びするが圏線をなさない。

**柱穴**

**Ｉ区ＳＰｃ36**（第115図）　44は瀬戸・美濃系陶器鉢ないし皿である。端部は水平面を有し、内方へ小さく引出す。

**Ｉ区ＳＰｃ18**（第115図）　45は肥前系陶器三島手の鉢である。「十」を印花→白泥塗布で表現する。

**Ｉ区ＳＰｃ12**（第115図）　46は肥前系陶器皿である。内底部と口縁部境に段を有し、口縁部はかすかに内湾する。47は土製品である。用途不明。

**Ｉ区ＳＰｃ14**（第115図）　48は肥前系青磁碗である。口縁端部は小さく外反する。

**Ｉ区ＳＰｃ48**（第115図）　49・50は肥前系磁器である。49は碗で、口縁部外面に縁文様に二重圏線と草花文を描く。50は小皿である。見込みには菊花文を認める。高台を認めるが、施釉後に釉を掻き取る際に成形しており、畳付を有さない。51は肥前系陶器碗である。

**Ｉ区ＳＰｃ60**（第115図）　52は肥前系磁器皿である。口径に比して高台径は小さく、見込みには草花文を認める。

**石垣**

**Ⅰ区ＳＺｃ01裏込**(第116図)　53～58は肥前系陶器である。53～56は碗である。53・54は口縁部が内湾気味に立ち上がり、55・56は端部手前で明瞭に外反する形態を呈する。器形の差異に呼応して、釉調も異なり、前者はやや厚みのある暗緑色系の灰釉を施すが、後者は釉厚が薄く、オリーブ色系のガラス質釉調を呈する。56は1630～40年代に位置付けられる。57は溝縁皿である。1630～40年代。59は瀬戸・美濃系陶器皿である。高台内には輪ドチ痕を認める。60は同安窯系青磁皿である。見込みには櫛状工具によるジグザグ状文と片彫りによる文様を認め、底部の釉を掻き取る。横田・森田分類同安窯系青磁皿Ⅰ－２類。下層遺構からの混入品である。61は備前摺鉢である。口縁端部外方を下方に引き出し、内側を上方へ摘み上げ、小さな口縁帯を作り出す。乗岡編年中世４期の所産になろう。62は土師質土器脚付甕である。底部は体部調整に後出する板ナデ調整により丸みを有する。機能的には火鉢と想定できるが、煤痕等の付着は認められない。63は飯蛸壺である。

64は軒平瓦である。中心飾りは不明となり、焼成は不良である。瓦当縦幅・文様区縦幅は狭く、顎下端幅は分厚い。65は鬼瓦である。外面には一重枠内に丸文を彫り込み、内面には顕著な掻き取り痕跡を認める。

**不明遺構**

**Ⅰ区ＳＸｃ01**(第116図)　66・67は肥前系陶器皿である。いずれも口縁部は内湾気味に開く。68は瀬戸・美濃系陶器丸碗である。内外面には鉄釉を施釉する。

**Ⅰ区ＳＸｃ02**(第116図)　69～71は肥前系磁器である。69は器壁厚が薄く、いわゆる薄手の半球形碗となろう。口銹を認める。69は17世紀末～18世紀前半、70は18世紀前半の所産である。71は波佐見窯産の青磁皿である(三股青磁窯産)。脚を有し、外面には印花を認める。口縁部は型打で輪花となり、口縁端部は水平にカットし、辰砂釉を施す(中野1998)。見込みには片彫りによる芭蕉文を認める。1630～40年代。72は肥前系陶器刷毛目鉢である。

**溝状遺構**

**Ⅰ区ＳＤｃ01(Ｃ区ＳＤ05**、第116図)　73は瓦質焙烙ないし亀山系鍋である。内耳には明瞭な穿孔を認める。口縁部は体部から直角に屈曲し、端部にかけて漸次肥厚する。

**Ⅰ区ＳＤｃ03(Ｃ区ＳＤ04**、第117図)　74・75は肥前系陶器皿である。前者は溝縁皿、後者は内湾気味に立ち上がり、口縁部が輪花を呈する。76・77は土師質土器小皿である。77の底部には回転糸切り痕を認め、底部から体部への屈曲が不明瞭である。

**Ⅰ区ＳＤｃ04(Ｃ区ＳＤ06**、第117図)　78は備前坏である。底部には回転糸切りによる切り離し手法を認め、口縁部は短く直立した後、大きく開く。

**Ⅰ区ＳＤｃ02裏込(Ｃ区ＳＤ02裏込め**、第117図)　79は肥前系磁器碗である。薄手の半球形碗である。17世紀末～18世紀第１四半期。80は肥前系青磁碗である。17世紀中葉～末。81は肥前系陶器皿。絵唐津。

**Ⅰ区ＳＤｃ02埋土(Ｃ区ＳＤ02埋土**、第117図)　82～84は肥前系磁器碗である。82は外面に一重網目文を認める。1650～60年代。84は外面及び口縁部内面に鉄釉、内面下半には透明釉を施釉する。85は肥前系青磁天目台である。外面には２条突線を２段認める。86は肥前系陶器碗である。87・88は肥前系陶器皿である。87は鉄絵を認める絵唐津、88は溝縁皿である。89は施釉陶器皿である。底部には回転糸切り痕を認める。外面下半は無釉となる。産地不明。90は土師質土器小皿であろう。91は土師質土器小皿である。口縁端部内外面には煤の付着を認め、灯明具としての機能が窺える。

92・93は軒平瓦である。92は上向きの三葉文を中心飾りとし、唐草は２転する。93の中心飾りは不明であるが、唐草は２転する。いずれも瓦当縦幅・文様区縦幅が狭く、顎の高さは極めて低い。

**Ⅰ区ＳＤｃ06(Ｃ区ＳＤ03**、第117図)　94は肥前系磁器小杯である。数条の鎬間に「寿」を描く。1630～40年代。95は肥前系磁器皿である。1630～50年代。96は土師質土器摺鉢である。口縁端部を内側に折り曲げ、体部境が小さく突出する。胎土中には微細な雲母粒を多く含む。

97は軒丸瓦である。巴頭は大きく、尾は長く延び、圏線状をなす。珠文径はやや大きく、珠文数は12を数える。98は軒平瓦である。中心飾りは巴文様をなし、唐草は細長く延び、２転する。文様区は瓦当の中心には位置せず、やや下方に下がる。

**Ⅰ区ＳＤｃ05(Ｃ区ＳＤ07**、第117図)　99は軒丸瓦である。巴頭は円形をなし、尾は極めて細長く延びる。珠文数は17個に復元できる。内面にはコビキを認める。

**Ⅰ区ＳＤｃ02南端を覆う白色粘質土**(第118図)　100・101は軒丸瓦である。100は巴頭が半球状をなし、尾は巴頭付近から極めて細い。珠文は12個に復元でき、その径はやや小さい。101は巴頭が板状となり、尾はにぶく延びる。珠文径は小さく、その数は12個に復元できる。筒部には２孔の釘穴、内面には布目→鉄線切り痕跡を認める。102は軒込瓦である。菊花文。103は軒桟

瓦丸瓦部である。巴文。瓦当面及び外面にはキラコ(雲母粉)の塗布を認める。104・105は軒平瓦である。いずれも中心飾りは不明である。

**土坑**

**Ⅰ区ＳＫｃ01(ＳＺ02(ＳＰ11)**、第118図)　107は肥前系磁器碗である。外面には縁文様として二重圏線、主文様として五弁花(桜か)他を描く。17世紀末～18世紀前半。108は肥前系磁器皿である。高台径は口径に比して小さく、見込みには紗綾形文を認める。1630～40年代。109は土師質土器小皿である。口縁部は短く内湾気味に立ち上がり、底部切り離しは回転糸切り手法による。見込みは回転ナデ調整後のナデ調整を認める。

## 2．Ⅱ区(Ｂ１・５区)

**整地層**(第119～124図)

110～201は整地層出土遺物である。それぞれ出土レベルや遺構との関係から、110～124、186～189が第32図４・５・７～９・32・33・39～46層、125～141、190～193が第32図８・９層からの出土となり、143・144、194は層位との対応は不明である。145～147が第32図15～29層、148～157、195～198、158～184、199～201も第32図15～29層から出土したと考えられる。

**1.3～1.1m**　110～114は肥前系磁器である。110は蓋物と考える。外面には草花文を描き、高台脇には鋸歯文を認める。18世紀前半。111は紅皿である。型押成形のため外面露胎部分にはシワを認める。112～114は蛇の目凹形高台の皿である。112は高台高が低く、113・114は高い。112は口縁部内面に亀甲文ほか、113は見込みに竹・笹文を描き、高台内に「或化年製」の款銘を認める。114は型打成形による菊花皿である。見込みには足付きハマの目跡を認める(４箇所)。それぞれ19世紀前半、1770～1810年代、19世紀前半～幕末の製作年代が与えられる。115は瀬戸・美濃系磁器手塩皿である。高台平面形状は正方形を呈し、糸切成形であることが窺える。見込みには五弁花、口縁部内面には紗綾形文を認める。19世紀後半以降の所産である。116・117は京・信楽系陶器碗である。116は半筒形碗と考えられる。117は京・信楽系陶器とするには違和感のある器形である。産地不明とした方が適切であろう。118は京・信楽系陶器蓋である。外面のみ灰釉を施釉する。119は瀬戸・美濃系陶器甕であろう。外面及び口縁部内面には灰釉、体部内面には鉄釉を認める。120は京・信楽系陶器皿ないし盤である。胎土は灰白色系の色調を呈し、素地は緻密でまったりした質感である。釉調は灰白色系の色調を呈し、やや厚く施釉し、ねっとりした質感となる。内面には色は消失するものの三葉葵の上絵付けを認め、理兵衛焼の可能性が想定できる(飯田町遺跡調査会1995)。さらに、その痕跡から縁取りがある可能性が想定でき、当遺跡出土の215・262、高松城跡(西の丸町Ｂ地区)出土の851の例から赤を主体とし、金の縁取りを行った可能性が高い(佐藤2003刊行予定)。121は軟質施釉陶器皿である。灰白色系の極めて緻密な胎土が選択される。内面には草花文・渦文が型成形で表現され、内外面に淡い緑色系の釉(緑釉？)を施す。ここでは源内焼の可能性を想定しておきたい。高松城跡(西の丸町)を除く県内の報告例では、空港跡地遺跡Ⅲ・574が挙げられるに過ぎない(森下友1998)。なお、121はこれに胎土・釉調等が酷似している。122は備前灯明皿である。123は備前摺鉢である。口縁端部は三角形状を呈し、口縁帯外面には凹線を２条認める。残存部位による限り、スリメ間隔は２cm前後を測る。乗岡編年近世２ａ期の所産であろう。124は瓦質土器羽釜である。口

縁部は内湾し、端部を丸く収める。横方向に延びる外耳を認め、上孔径３㎜、下孔径２㎜の穿孔を２孔認める。高松城跡(西の丸町)Ｃ地区では、横方向の外耳を有する羽釜の出土例はこの１点に留まる。県内の類例としては、管見では川南・東遺跡ＳＸ2005(大嶋2000)、空港跡地遺跡Ⅳ ＳＤｆ97(佐藤2000)、龍川五条遺跡Ⅱ ＳＥ03(森下英ほか1998)のみである。

186～188は軒丸瓦である。186・187は巴の尾が細長く延び、圏線状に重なる。186は巴径がやや大きく、その数は11ないし12個となり、187は径が小さく、16個に復元できる。188は巴文・珠文ともに厚みを有し、瓦当面にはキラコの塗布を認める。189は軒平瓦である。中心飾りは菱形文となる。

**ＳＤｃ07・09間第１整地面再整地層**　125～132は肥前系磁器である。125～128は碗である。125は白磁碗で、口銹を認める。内面には梅花文を上絵付けする。17世紀末～18世紀前半。127は高台が「八字形」に開く碗で、見込みには源氏香、高台脇には「ヨ」文を連続して描く。1760～90年代。128は地方窯産の製品で、厳密な意味での肥前系磁器となる。1820～60年代。129は肥前系磁器蓋物である。外面区画文内には「卍字形」文、四方襷文を認める。18世紀後半。130は広東碗蓋である。把手内には草花文を描く。1780～1820年代。131は白磁瓶蓋である。18世紀代。132は皿である。高台は口径に比して小さく、口縁部は底部から立ち上がった後、さらに開く。見込みには牡丹文を認める。1630～40年代。133～135は肥前系陶器である。133は呉器手碗である。高台横断面はアーチ状を呈する。134は溝縁皿である。135は砂目皿である。畳付には砂目が溶着し、その剥離痕も認める。136・137は京・信楽系陶器碗である。136は外面に笹葉文を上絵付けし、高台内に「蘭」？の墨書を認める。138は施釉陶器鉢である。139は瀬戸・美濃系磁器端反碗である。140は備前灯明皿である。仕切板が口縁部より低い形態を呈し、口縁端部外面にのみ塗土を施す。141は施釉陶器人形である。前後型合わせ成形で、全面に透明釉ないし灰釉を施釉する。行司をモチーフにしたと考えられ、手には軍配を持つ。142は土師質土器摺鉢である。

190・191は軒丸瓦である。190は巴頭から尾への移行が不明瞭で、尾は巻き込み気味に延びる。191は大きい巴頭から尾は短く巻き込み、珠文径は大きい。瓦当面にはキラコの塗布、丸瓦部内面にはゴザ目→刺し子ないし内叩き痕を認める。192・193は軒平瓦である。192は半裁花菱文を中心飾りとし、二重線の唐草が２転する。193は四葉文を中心飾りとし、唐草は２転する。いずれもキラコの塗布を認める。

**1.1～1.0m**　143は肥前系磁器皿である。口縁部は外反し、端部は呉須の口銹である。内面には牡丹唐草文、外面には唐草文を手描きで描く。18世紀前半。144は肥前系陶器溝縁皿である。顕著な焼き歪みを認める。

194は軒丸瓦である。巴の尾は長く延び、圏線状に巻き込む。珠文数は14を数え、その径は小さい。

**1.1m以下**　145は肥前系陶器溝縁皿である。畳付を含め灰釉を全面施釉し、見込み及び畳付には３箇所の砂目を認める。口縁部は端部手前で水平ないしわずかに垂下気味に収める。146は土師質土器坏である。口径11.4㎝を測り、底部と体部境が不明瞭である。底部には粗い回転糸切り痕を認める。口縁部を中心に煤痕が付着する。147は焼塩壷である。口縁部内面に強いナデ調整によって面を有する。器表面は内外面ともに二次焼成による剥落が顕著である。

**1.0～0.8m**　148は漳州窯系青花碗である。磁器質な胎土で、分厚い透明釉を全面施釉する。畳付全面には粗い砂の付着を認める。見込みには二圏線内に変形丸文、外面には花弁文を描く。149は中国産白磁皿(漳州窯系)である。橙色の色調を呈する陶器質な胎土で、分厚い釉を施釉する。150は肥前系磁器皿である。高台径が小さく、畳付から高台内には顕著な砂の付着を認める。器表面及び断面は灰黄褐色系の色調を呈する焼成不良品である。151は肥前系陶器皿である。見込みには簡略化した植物文様を描く。絵唐津。畳付には回転糸切り痕跡を認める。152は京・信楽系陶器香炉である。口径7.2㎝を測る小型品で、外面には円形浮文を配し、一条沈線を施す。また銹絵染付による若松文を認める。153は京・信楽系陶器異形器形である。鉢状器形として図化したが、脚台部端の可能性も残る。胎土素地は緻密であるが、気泡を認める。口縁部上端面には重ね積みによる溶着痕が確認できる。胎土の特徴が、飯田町遺跡鏡台の一部に酷似しており(飯田町遺跡調査会1995)、理兵衛焼の可能性を考慮している。154は焼締陶器鉢である。胎土の特徴から信楽焼の可能性を想定している。155～157は土師質土器深鉢であろう。内湾する体部から口縁部を内方へ折り返し、その境に明瞭な突出部を認める。いずれも胎土中に雲母粒を多く含有する。なお、156は1127に図化した外耳付き鍋の可能性も考慮する必要があり、体部外面には煤痕がほぼ全面に付着する。

195～197は軒丸瓦である。195・196は円形をなす巴頭から尾は延びるが、圏線を指向しない。珠文数は12を数え、その径もほぼ等しいが、尾を巻く方向に差異を認める。197は巴頭と尾境が不明瞭であるが、尾は細長く延びる。珠文径はやや小さく、その数は13個に復元できる。198は軒平瓦である。中心飾りは四葉文で、唐草は上下に２転する。

**0.8m以下**　158・159は瀬戸・美濃系陶器皿である。158

の口縁部は２段階に開き、端部を上方へ小さく摘み上げる。159は底部片である。高台内には輪ドチ痕を認める。いずれも大窯Ⅲ期の所産であろう。160は肥前系陶器碗である。畳付周辺のみ釉を掻き取り、砂が付着する。161～164は輸入磁器である。161は同安窯系青磁碗である。内面には櫛状工具とヘラ彫りによる花文、外面には櫛状工具による施文を認め、横田・森田分類Ⅰ－１ｂ類に該当する。下層遺構からの混入と考える。162は中国産青磁碗である。畳付を含め厚く施釉し、高台内の一部のみ無釉となる。高台内には直径３㎝弱の窯道具痕跡を認める。163は漳州窯系青花碗である。灰白色の磁器質胎土で、見込みには人物像を描く。高台内は無釉であるが、畳付の釉は施釉後に掻き取る。164は景徳鎮窯系青花皿である。器壁は薄く、シャープで、透明感のある釉を施釉する。高台内を含め全面施釉であるが、畳付の釉は外側のみ掻き取る。見込みには波文をややくすんだ明青色の呉須で描く。1590～1630年代。165～167は肥前系磁器碗である。165は外面に折枝文を認める。18世紀前半。166は外面縁文様に二重圏線を認め、17世紀後半に位置付けられる。167は外面に蛸唐草を描く。1730～60年代。168は肥前系青磁瓶である。碁笥底となり、外面は畳付を除き全面に青磁釉を施釉する。1630～40年代。169は肥前系陶器碗である。口縁部は直線的に外傾し、端部を小さく外反させる。170～175は備前陶器である。170～173は摺鉢である。口縁部形態やスリメの施文状況、色調等から乗岡編年との対応関係を記すと、170は近世１ｂ期、172は近世２ｂ～３ａ期、173は近世３期にそれぞれ該当しよう。174は甕とした。底部には窯詰めの痕跡を示すであろう色調の違いを認める。175は小瓶とした。底面には入念な板ナデ調整を認める。176～178は焼締陶器である。176は瓶である。体部下半に最大径を有し、それより上半はカキメ、下半はナデ調整を施す。福岡～中国地方産の可能性が高く、17世紀～18世紀前半の所産である。177は瓶であろう。底部には回転糸切り痕を認め、備前焼の可能性が高い。178は摺鉢である。体部は内湾し、端部手前で強く外方へ折り曲げる。スリメ単位は不明であるが、スリメ間隔は1.5㎝を測る。179は施釉陶器鉢である。内面体部と口縁部境及び外面下半は無釉である。180は施釉陶器甕である。混入品か。181は土師質土器坏である。底部厚が１㎝前後と分厚く、底面には静止糸切り痕を認める。182・183は土師質土器外耳付き鍋である。口縁部と体部境外面に鍔状の突出を認め、その一部を引き延ばし、外耳を形成する。さらにその上端から斜め方向に径２㎝弱の円孔を穿つ形態となる。いずれも胎土中には雲母粒を一定量含有する。佐藤分類では土師質土器鍋Ａ形式に該当する（佐藤2003刊行予定）。184は瓦質土器内耳付き鍋である。口縁部はボール状の体部から強く屈曲し、端部に向けて漸次肥厚する。端部は斜め下方へ小さく引き出し、面を有する。在地産焙烙に比して内耳は頑丈かつ穿孔も明瞭で、径８㎜前後を測る。佐藤分類では「亀山系土器鍋」に該当する。185は土師質土器鉢である。底部は碁笥底を呈し、底面中央に径２㎝前後の円孔を有する。植木鉢としての機能が想定できよう。

199・200は軒丸瓦である。199は巴の尾が極めて細長く延び、圏線状に連なる。瓦当面に占める文様区の比率がやや小さく、縁部幅が広い。200は円形状をなす巴頭から尾は細く延びる。珠文径は大きく、その数は12を数える。201は丸瓦である。内容は不明であるが、外面にはヘラ彫りによる文字、内面にはコビキＡ手法を認める。

**溝状遺構**

**Ⅱ区ＳＤｃ08埋土（Ｂ５区ＳＤ01埋土中**、第124図）

202～208は肥前系磁器である。202～206は碗である。いずれも器壁厚が薄く、いわゆるＵ字形高台碗ないし薄手の半球形碗となろう（堀内1997）。202は外面に藤花文を描くが、花房のみコンニャク印判の使用を認め、手描きと印判を併用する。203の文様にも手描きと印判の併用を認める。204は高台内に「○○年製」の款銘を認める。205は口銹となり、外面には渦草文を認める。206は腰部の張りが弱い器形である。高台内には「太明年製」の款銘を認める。207は小杯とした。口縁部は２段に開き、端部を小さく外反させる。外面には草花文を描く。208は香炉である。口縁部は内側に鋭く折り返し、端部は遺存しないが、先細る形態となろう。内面下半は無釉で、外面には縁文様として二重圏線を認める。209・210は京・信楽系陶器碗である。209は型成形の蓮碗である。蓮葉は３段構成で、はす違いに配置する。葉の上端を小さく突起させ、さらに葉脈も表現する。口縁端部には３㎜間隔での刻目も認め、灰釉を高台外側面にも施釉する。類例として、高松城跡（西の丸町）Ｂ地区報文番号724がある（佐藤2003刊行予定）。細片であるが、209に酷似した特徴を有する。また、高松城跡（東ノ丸、香川県歴史博物館建設予定地地点）ＳＤ08から出土した1777も同一意匠として評価できる（北山1999）。しかし、器壁が厚い点、葉脈が表現されない点に差異を認める。前者は高松城編年様相５基準資料（18世紀前半、松本・佐藤2001、松本2002ａ、以下高松城編年についてはこれに依拠する）、後者は年代幅のある資料であるが、陶磁器の生産年代の大半は17世紀初頭、18世紀前半に限られる。但し、整地層の変遷等からは幕末から明治時代に伴う遺構のようである。これら蓮碗は管見による限り、全国的にも類例をみない。再度土器を観察すると、畳付付近まで施釉する点に特徴を見い出せる。こうした特徴は飯田町遺跡出土の理兵衛焼にも認められる（飯田町遺跡調査会1995、千代田区飯田町遺跡調査会ほか2001）。210は口縁部が比較的長く直立する形態を呈する。外面に竹文を上絵付けし、茎

部を赤で表現する。笹葉部は消失しており不明であるが、緑ないし金であった可能性が高い。

**Ⅱ区ＳＤｃ09埋土（Ｂ１区ＳＤ02埋土**、第125図）　211～213は肥前系磁器である。211・212は一重網目文碗である。前者は1650～60年代、後者は1630～60年代の所産である。213は皿である。見込みには草花文を描き、平行線状の透彫り（陰刻沈線）を認める。214は肥前系陶器刷毛目鉢である。高台は畳付の一部を残し、刳り込む（刳り高台）。215は京・信楽系陶器碗である。口径16.6cmを測る大型の碗である。腰部がやや細く、口縁部は小さく端反る。上絵は三葉葵である可能性が極めて高く、赤による枠線とその両脇を金で縁取る絵付けを認める。灰白色の色調を呈し、磁器質な緻密な胎土である。216は備前摺鉢である。口縁帯はかろうじて板状を呈し、内面には斜め方向のスリメを認める。乗岡編年近世１ｂ期の所産である。217は軒丸瓦である。巴の尾は極めて細長く延び、圏線状をなす。珠文径は大きく、その数は14個に復元できる。

**礎石建物**

**Ⅱ区ＳＢｃ02（Ｂ１区ＳＤ02延長部**、125図）　ＳＤｃ09延長部として取り上げられているが、その後の検討の結果、ＳＢｃ02に伴う一群と判断した。

218～221は肥前系磁器である。218～220は碗である。218は外面には梅花文を基調とし、雪輪内に薄を描く。1690年代～18世紀前半。219はＵ字形高台碗(低)である。外面には蛸唐草文、見込みには五弁花を手描きで描き、高台内には「大明成化年製」の款銘を認める。1730～60年代。220は内面縁文様に二重圏線、外面には叩きによる染付を認める。1780～1840年代。221は1630～50年代に属する皿である。222は備前摺鉢である。口縁端部は断面三角形状となり、内面の段も痕跡的となる。スリメは10条１単位で、その間隔はスリメ端で１cmを測る。中位から底部にかけては使用による摩滅を認める。乗岡編年近世２ｂ～３期の所産である。223・224は軒丸瓦である。巴頭から尾はにぶく屈曲し、圏線状をなす。224は円形状の巴頭から尾は細長く延びる。225・226は軒平瓦である。225は上向きの三雲文、226は宝珠文を中心飾りとする。

**Ⅱ区ＳＢｃ02（Ｂ１区ＳＤ02敷石部**、第125図）　ＳＤｃ09敷石部として取り上げられているが、その後の検討の結果、ＳＢｃ02に伴う一群と判断した。

227は肥前系陶器碗である。高台内に兜巾を認め、畳付には回転糸切り痕が遺存する。残存部位では外面の施釉は確認できない。

**Ⅱ区ＳＢｃ02（Ｂ１区ＳＤ02敷石部下**、126図）　ＳＤｃ09敷石部下として取り上げられているが、その後の検討の結果、ＳＢｃ02に伴う一群と判断した。

228は漳州窯系青花皿である。浅黄橙色の陶器質な胎土に、黄色みを帯びた分厚い釉を施釉する。229～240は肥前系磁器である。229～232は碗である。229の外面には手描きによる松・竹文を認める。全体に呉須はぼやけるが、コンニャク印判使用に起因するものではない。18世紀前半。230は外面に蝶、231は草花文を描く。いずれも18世紀前半～中葉。233は小杯である。高台内には崩れ大明年製を認める。17世紀末～18世紀第１四半期。234～239は皿である。234は型成形による変形皿である。内面には型紙摺りを用いた草花文を認める。1690～1730年代。235は芙蓉手の皿である。口縁部は直線的に大きく開き、端部に向けて先細る。1640～60年代。236は見込みに水草を認める。1640～60年代。237は型打成形による輪花皿である。見込みに丁寧な草花文を描く上質製品である。1670～80年代。238は口縁部内面に手描き草花文とコンニャク印判による野菜文を認め、外面には区画文、丸文内笹葉文を描く。1690年代～18世紀前半。239は口縁部内面文様に墨弾きの技法を用いる。1770～1810年代の所産であり、混入品と理解できる。240は白磁瓶蓋である。かえり部分にアルミナ砂の塗布を認める。18世紀代。241・242は肥前系陶器である。241は碗である。見込みに３箇所、高台内に２箇所の砂目を認める。242は溝縁皿である。243～245は京・信楽系陶器である。243は碗である。外面には上絵は消失するが、若松文の上絵付けを認める。244は手桶である。灰色系の釉をやや厚く施し、青色の釉下彩を流し掛けする。胎土は灰色系の色調を呈し、緻密さをやや欠く。同様の製品が滴翠美術館所蔵として、『日本の美術No28京焼』に紹介されている（佐藤編1968）。同書では理兵衛焼と紹介され、その内箱の蓋表に「仁青写　手桶水指」という記載があると紹介されている（中央公論社1989）。理兵衛焼の可能性を考慮したいが、実証性に欠く。245は鬢水入れである。246は備前摺鉢である。13(14)条１単位のスリメを認め、その間隔は口縁部中位で１cm弱を測る。247は土師質土器火消壷蓋である。胎土中には雲母粒を比較的多く含む。

**溝状遺構**

**Ⅱ区ＳＤｃ07（Ｂ１区ＳＤ01**、第127図）　248～256は肥前系磁器である。248～250は碗である。248は白磁碗である。仔細に観察したが、上絵は認められない。1670年代～18世紀第１四半期。249は器表面に顕著な貫入を認め、外面には鳥（雁？）と草花文を認める。250も貫入が激しく、外面に蘭・垣根？を描く。いずれも17世紀末～18世紀第１四半期の所産である。251は小杯である。外面にはコンニャク印判で桐文を押印する。18世紀前半。252は猪口である。口縁部外面には雨降り文を認め、18世紀前半に位置付けられる。253は波佐見窯産青磁皿である。口縁部は内湾気味に大きく開き、端部のみ強く外反する。17世紀後半。254は中皿である。底部から

鈍く立ち上がり、端部手前で強く開く。端部には口銹を認め、高台内にはハリ支え痕を1箇所認める。見込みには手描き五弁花、口縁部内面には墨弾きを用いた花文、外面には輪郭線の明瞭な花唐草文をそれぞれ認める。1690～1730年代。255は型打成形の輪花中皿である(八角皿)。口縁部は鈍く立ち上がり、端部を小さく外反させる。高台内中央にはハリ支え痕を認める。見込みには五弁花、口縁部内面には梅に鶯、草花文をそれぞれ対置する位置に押印する。口縁部外面にも桐文を認める。1690年代～18世紀初。256は見込みに葦を描く。1670年代～18世紀初。釉には無数の気泡を認め、黒色の粒が付着する点から、二次焼成を受けた可能性が高い。257～260は肥前系陶器である。257は碗である。口径に比して器高がやや低い形態を呈する。258～260は皿である。258・259は砂目皿で、259・260は溝縁皿である。261・262は京・信楽系陶器碗である。261は灰色系の陶器質な胎土で、オリーブ灰色の灰釉を施釉する。釉肌を仔細に観察すると、釉内に無数の気泡を確認することができる。器壁厚が厚く、口縁部は直立し、端部は先細る。上絵には注連縄文の可能性もあるシダを描き、葉は緑色、枝部には金色の上絵を用いる。262は三葉葵の上絵付けを認め、赤を基調とし、輪郭線には金を用いる。淡黄色系の陶器質な胎土にクリーム色系のやや厚い釉を施釉する。三葉葵の上絵という点から理兵衛焼の可能性が高いと考えたいが、上絵がなければ通常の京・信楽系陶器とは識別できない。263は備前瓶であろう。口縁部は玉縁状を呈し、口縁部内面及び外面には鉄釉を施す。264は施釉陶器鉢であろう。外面には鉄釉、内面には灰釉を施釉し、見込みには胎土目らしき痕跡を認める。265は焼塩壷蓋である。

266は軒丸瓦である。巴頭から尾への移行は不明瞭で、尾は短く巻き込む。瓦当面にはキラコの塗布を認める。267・268は軒平瓦である。いずれも中心飾りは不明である。269は軒込瓦である。

### 3．Ⅲ区(B 2～4区)

**整地層**(第128～130図)

270～303、317～323は第43図11～14層、304～316、324・325は第43図15層にそれぞれ対応する。

**1.4～1.1 (1.0) m**　270～283は肥前系磁器である。270～275は碗である。270は外面縁文様に二重圏線、主文様に草花文、内面縁文様に一重圏線をそれぞれ描く。1650～70年代。271は高台内無釉の青磁碗である。1630～40年代。272は見込みに蛇の目釉剥ぎ→アルミナ砂の塗布を認める。18世紀後半。273は外面に一重網目文、274は外面に蛸唐草文、内面縁文様に四方襷文を認め、いずれも18世紀後半に位置付けられる。275は広東碗である。高台脇には蓮弁文、口縁部内面には捻文を描く。1780～1820年代。276は蓋である。外面には「C字形」を地詰文とし、草花文を散らす。天井部内面には崩れ松竹梅繋ぎ文を認める。1820～60年代。277は紅猪口、278は型押成形の超小型の紅皿である。後者は赤を用いた5条の横線文を上絵付けする。279・280は皿である。280は鉢状の器形を呈し、高台は三角形状を呈する。口縁部外面及び見込みには草花文を描く。18世紀前半。281は青磁火入れである。端部は内方へ肥厚し、玉縁状を呈する。内面下半は無釉で、屈曲部には帯状に砂が付着する。18世紀代。282は青磁油壺である。283は水滴である。284・285は瀬戸・美濃系磁器端反碗である。284は内面縁文様及び口縁部外面に形容し難い粗雑な文様を認める。285は地詰文に草花文、扇窓内にも草花文を描く。1820～60年代。286・287は京・信楽系陶器碗である。286は小杉碗である。明黄褐色の陶器質な胎土で、灰黄色系の灰釉をやや厚く施釉する。底部露胎部分は赤橙色に発色する。287は端反碗である。内外面の貫入が顕著である。288・289は瀬戸・美濃系陶器である。288は丸碗である。器壁が厚く、胎土も緻密さを欠く。口縁部外面には「長の」を下絵で描く。高台内には「テヌ」の墨書を認める。289は馬目皿である。290は施釉陶器碗である。高台は細く高い。畳付を除く全面に赤黒色の鉄釉？を施釉する。混入の可能性も否めない。291は軟質系施釉陶器摺鉢である。口縁部は外方へ折り返し、玉縁状をなす。全面にスリメを認め、スリメ間隔はない。スリメ端は口縁部横ナデ調整によって失われる。全面に鉄釉を施釉する。292は施釉陶器鉢である。把手部がかろうじて残存する。293は備前灯明皿である。底部には回転ヘラケズリ調整に先行する回転糸切り痕を認める。294・295は堺・明石系摺鉢である。294は顎下端を下方へ強く引き出し、口縁帯外面には2条の凹線を施す。口縁部内面には凹線によって形成されたかすかな段を有する。見込みのスリメは「ウールマーク」状ないし捻れた三角形状を呈する。なお、顕著な使用によりスリメが消失する箇所も認める。白神編年Ⅱ型式2段階の所産であろう(白神1992、以下堺

・明石系摺鉢に関してはこれに依拠する)。295は口縁部内面に明瞭な段を有する。白神編年Ⅱ型式に属する。296は焼締陶器摺鉢底部片である。見込みには「＊」のスリメを認める。備前摺鉢の可能性が高い。297は焼締陶器甕である。298は土製品仏像である。前後型合わせによると考えられるが、その痕跡は認められない。器表面に胡粉(キラコ)の塗布を認める。299は土錘である。300は肥前系陶器鉢と考えたが、福岡～中国地方産の可能性も残る。見込みには胎土目痕跡を認める。301は在地産の瓦質焼成焙烙である。器高は高く、ボール状の器形を呈する。口縁部は水平方向に延び、端部をやや垂下させる。302は土師質土器火鉢である。平面形は四角形を呈し、四隅に脚を有する。側面には窓を認める。303は碁石である。

317～321は軒丸瓦である。317は巴頭が大きく、尾は細長く延び、圏線状に連なる。珠文径は小さいが、その数は11個と少ない。318は巴頭からにぶく屈曲し、尾に重なりは認めない。319は比較的大きい巴から強く屈曲し、尾は短く巻き込む。珠文径は大きく、その数は12個に復元できる。320は巴頭が極めて大きく、板状をなす。尾は短く、重なりはない。珠文は比較的小さく、その数は12個に復元できる。321は円形をなす巴頭から尾は細長く巻き込む。珠文径は大きく、9個を数える。いずれもキラコの塗布は確認できない。322・323は軒平瓦である。322は宝珠文を中心飾りとし、上方に3転し、下方にも2転する。平瓦部と瓦当部の接合部には接合を容易にするために刻目を施す。

**1.1(1.0)m以下**　304は漳州窯系青花皿である。にぶい黄橙色の陶器質な胎土に黄緑色を帯びた透明釉を厚く施す。305は瀬戸・美濃系磁器碗である。呉須はコバルト呉須で、染付はゴム印による。昭和前半に位置付けられる。306は肥前系磁器蓋である。黒色呉須を用いたゴム印による施文を認め、昭和前半に位置付けられる。307は肥前系磁器皿である。高台は二重高台となり、内高台のみ無釉→アルミナ砂の塗布を認める。口縁部外面4方向に火焔宝珠文、見込みには龍文、宝珠文、口縁部内面には雲文をコバルト呉須で描く。地方窯産。明治・大正期。調査精度と出土遺物が示す各層位の年代決定が不明瞭である点を示すために敢えて掲載しておく。308～310は肥前系陶器である。308は小杯である。底部には回転糸切り痕を認める。309は三島手の鉢である。見込みには砂目を認める。310はT字形口縁の甕である。311は京・信楽系陶器碗である。淡黄色系の陶器質な胎土で、外面には赤と緑と白(色は消失)による半裁菊花文を上絵付けする。312は瀬戸・美濃系陶器蓋である。天井部外面には4条の沈線を認める。鉢ないし行平鍋の蓋になろう。313は備前摺鉢であろう。口縁端部内方を上方へ強く摘み上げ、外方を横方向へ引き出し、口縁帯を作り出す。外面は口縁部と体部境(口縁部下3㎝)に明瞭な重ね積み痕跡を認める。314は備前坏である。重ね積み焼成により端部外面のみ色調が異なる。315は土師質土器外耳付き鍋である。口縁部は体部から連続して内湾するが、外面境には鍔状の縁帯を有する。かろうじて外耳が残存し、その孔径は1.5㎝前後に復元できる。佐藤分類土師質土器鍋A形式。胎土中には雲母粒を含有するが、その量は極めて少ない。316は焼塩壷である。口縁部がすぼまり、内面に面を有する。内面は二次焼成による変色を認める。

324は軒丸瓦である。巴頭は円形をなさず、尾は極めて細長く延びる。珠文径は著しく小さく、珠文数は27個前後に復元できる。瓦当面には離れ砂を認める。325は軒平瓦である。瓦当に占める文様区の割合は極めて小さく、幅1.3㎝前後を測るに過ぎない。中心飾りは不明であるが、上向きに4転以上転じる唐草を認める。

**不明遺構**

**Ⅲ区ＳＸｃ05(Ｂ３区ＳＸ09**、第131図)　326は肥前系磁器碗である。小広東碗と考えられる。

**土坑**

**Ⅲ区ＳＫｃ02(Ｂ３区ＳＸ04**、第131図)　327は肥前系磁器猪口である。外面には竹文を描く。328は京・信楽系陶器端反碗である。329は備前灯明皿である。330は土師質土器鉢である。体部は直線的に開き、口縁部を肥厚させ、端部を水平に収める。側面下端には径2㎝強の穿孔を認めるが、残存部位では底部には穿孔は確認できない。雲母粒を多量に含む特徴的な胎土である。

331は軒丸瓦である。巴頭は円形をなし、尾は短く巻き込み、珠文数は16個を数える。瓦当面にはキラコの塗布を認める。

**Ⅲ区ＳＫｃ03(Ｂ３区ＳＸ05**、第131図)　332は軒丸瓦である。巴尾は長く延び、圏線状に連なる。珠文数は復元では12個を数える。

**柱穴**

**Ⅲ区ＳＰｃ108(Ｂ３区礎石４**、第131図)　333は肥前系磁器小広東碗である。見込みには抽象文(蝉？)、外面には算木文を認める。

**Ⅲ区ＳＰｃ111(Ｂ３区礎石５**、第131図)　334は京・信楽系陶器碗であろう。器壁が厚く、比較的厚く施釉する。高台は刳り高台となる。335は備前灯明皿である。

**Ⅲ区ＳＰｃ106(Ｂ３区礎石６**、第131図)　336は肥前系磁器油壺肩部片であろう。外面には草花文を認める。

**Ⅲ区ＳＰｃ100(Ｂ２区ＳＰ07**、第131図)　337は肥前系磁器青磁碗である。口縁部は直立し、端部は先細る。338は小型有溝土錘である。

**Ⅲ区ＳＰｃ101(Ｂ２区ＳＰ08**、第131図)　339は京・信楽系陶器灰吹であろう。外面には銹絵による折花文を

認める。340は施釉陶器小瓶とした。胴部中央がわずかに窪むが、備前人形徳利のように人形が付くか、否かは判断できない。341は施釉陶器瓶である。口縁部は玉縁状を呈し、外面及び口縁部内面には鉄釉を施釉する。底体部境には幅8㎜を測る面取りを認める。

**Ⅲ区ＳＰｃ112（Ｂ３区ＳＰ03、**第131図）　342は肥前系磁器筒形碗であろう。口縁部は直立し、端部は内側に傾斜する。

**Ⅲ区ＳＰｃ117（Ｂ２区ＳＰ05、**第131図）　343は施釉陶器瓶である。玉縁状の口縁部で、341より光沢のある鉄釉を施す。

**土坑**

**Ⅲ区ＳＫｃ04（Ｂ４区ＳＫ03、**第132図）　344は中国産青花碗とした。不明瞭な呉須と光沢のある胎土から、瀬戸・美濃系磁器の可能性も否定できない。345・346は肥前系磁器である。345は碗である。外面縁文様に二重圏線を認める。346は仏飯器とした。畳付は無釉で、アルミナ砂を全面に塗布する。

**Ⅲ区ＳＫｃ05（Ｂ４区ＳＫ01、**第132図）　347は軒丸瓦である。巴頭は円形をなし、尾は細長く延びる。珠文径は大きく、９個を数える。

**Ⅲ区ＳＫｃ07（Ｂ２区ＳＫ02、**第132図）　348～351は肥前系磁器である。348・349は碗である。前者には二重網目文を描き、18世紀後半の所産となる。349は撥高台碗（八字形に開く高台＋腰張形碗）で、外面には草花文を規則的に配置する。1770～1810年代。350は小杯である。外面には蛸唐草文、内面縁文様には四方襷文を描く。18世紀後半。351は皿である。口縁端部は口銹となる。18世紀前半。352は瀬戸・美濃系陶器腰錆碗である。口縁部外面には櫛描状の沈線を数条認める。353は焼締陶器甕である。肩部外面にはカキメを入念に施し、外面及び口縁部内面には塗土を認める。354は軒丸瓦である。巴頭は円形をなし、尾は短く巻き込む。胎土中の赤色粒の粒径が大きく、その含有量もやや多い。

**Ⅲ区ＳＫｃ08（Ｂ３区ＳＫ01、**第132図）　355は施釉陶器底部片である。外面には灰釉の可能性が高い釉を施釉する。胎土や内面の色調は焼締陶器に酷似する。

**Ⅲ区ＳＫｃ09（Ｂ２区ＳＫ01、**第132図）　356は京・信楽系陶器異形器形である。傾きは内面に残る稜ないしナデ調整から復元したが、天地の正否は明らかでない。二次焼成を被るため元来の色調とは異なるが、胎土は緻密で、灰黄色の色調を呈する。釉は灰白色系の灰釉を全面にやや厚く施釉する。

**４．Ⅳ区（Ｉ１・２区、Ｉ６・７区①②③）**

**整地層（第133図）**

357～361は第１面から第２面への掘り下げ中に出土した遺物である。362～379は第50図５・18・15層に対応するが、石垣が未確認の状況での取り上げによるため、層位の年代を遺物の年代観が示さない。

**1.1～0.9m**　357は肥前系磁器広東碗である。外面には不賊文を認める。1780～1820年代。358は瀬戸・美濃系陶器瓶掛である。口縁部外面にはソギを認める。全面に施釉するが、口縁端部は敲打痕により、釉は剥落する。359は施釉陶器鉢である。口縁部は直立し、端部は外方へ直角に屈曲する。口縁部には錆釉→掻取（唐草文）、端部には灰緑色の釉を施釉する。近・現代遺物の混入の可能性も残る。360は堺・明石系摺鉢である。口縁端部は断面三角形状を呈し、内面にはわずかに段を認める。白神編年Ⅱ型式の所産である。361は土師質土器深鉢である。口縁部は内湾し、端部を内側に肥厚させ、水平面を有する。内外面ともに顕著なローリング痕を認める。

**0.9～0.7m（0.9m以下）**　362～366・368・369は肥前系磁器である。362～365は碗である。362の外面には窓内梅花文を認める。363は外面に梅花文を描き、見込みには蛇の目釉剥ぎ→アルミナ砂塗布を認める。364は外面に二重網目文、内面に一重網目文（斜格子文）、見込みに菊花文（印判）を描く。1700～50年代。365は端反碗である。366は蓋である。撥高台碗の蓋になろう。368は小皿である。口縁部内面及び外面には鉄釉を施釉し、見込みには蝶を描き、透明釉を施釉する。鉄釉染付とここでは表現しておく。なお、高台内は無釉である。369は皿である。高台は蛇の目凹形高台（低）で、見込みには梅花文、口縁部内面には渦文他、口縁部外面には源氏香他を認める。367は関西系磁器端反碗蓋であろう。呉須は淡青色の色調を呈し、ぼやけた印象が強い。外面には桐文、雲文、雷文、天井部内面には「成化年制」の款銘、縁文様には雷文をそれぞれ描く。なお、把手内にも寿を抽象化した款銘を認める。1820～60年代。370は瀬戸・美濃系磁器端反碗である。文様構成は365に共通するが、産地は異なる。1820～60年代。371は備前系陶器鉢である。372は備前盤である。口縁部は短く内湾し、端部は丸く収める。底部には入念な板ナデ調整を認める。373は肥前系陶器刷毛目鉢である。見込みに白泥による波状・直線的な刷毛目を認める。374は土師質土器十能である。受け部内面には煤が付着する。

**石垣関連**

**Ⅳ・Ⅴ区ＳＺｃ03裏込**

**（Ｉ１・２区、Ｉ４区南側護岸裏込め、**第134図）

375は景徳鎮窯系青花皿である。見込みには宝文を描

く(芙蓉手)。二次焼成を受け、器表面に気泡を認める。1590～1630年代。376・377・379は肥前系磁器である。376は一重網目文碗で、1650～60年代に位置付けられる。377は青磁ないし染付皿である。17世紀中葉～末。379は青磁碗である。口縁部は緩やかに開き、端部のみ小さく外反する。1630～50年代。378・380は肥前系陶器である。378は小杯である。底部はわずかに高台を形成するが、その抉り込みはやや浅く、砂及び釉が付着するため、現状では極めて浅くなる。17世紀前半。380は壷である。高台は碁笥底を呈するが、抉りは浅い。外面上半及び内面下半には灰釉を施釉する。381は瀬戸・美濃系磁器端反碗である。幕末。382は瀬戸・美濃系陶器蓋とした。突起状のつまみを有し、天井部外面のみ施釉する。底部内面には回転糸切り痕を認める。383は焼締陶器小壷ないし小瓶であろう。384は軒丸瓦である。巴の尾は短く巻き込み、珠文数は12個を数える。385は平瓦である。全面にキラコの塗布を認める。

**Ⅳ区ＳＺｃ12裏込(Ｉ１・２区、Ｉ６・７区②③北護岸裏込め**、第134図)

386・387は肥前系磁器である。386は青磁皿である。内面にはヘラ彫りによる施文を認める。1630～40年代。387は皿である。口縁部が大きく開く形態を呈する。1630～40年代。388は信楽陶器甕である。外面には鉄釉？を施釉する。389は備前摺鉢である。スリメ間隔が広い段階の所産である。390は土師質土器椀である。顕著な摩滅(ローリング)を受ける。391は土師質土器鍋である。13世紀前半に属するであろう。器表面の摩滅は著しい。392は軒丸瓦である。全面に顕著な摩耗を認める。

**Ⅳ区ＳＺｃ05周辺(Ｉ１・２区立石周辺**、第135図)

393・394は肥前系磁器である。393は広東碗で、1780～1820年代に位置付けられる。394は鉢であろう。口縁部は緩やかに外反し、端部を横方向から下方に垂下させる。18世紀後半～19世紀前半。395は備前鉢口縁部片である。外面には「□」の刻印を認める。396は堺・明石系摺鉢である。口縁部内面には明瞭な段を有し、顎下端を小さく拡張する。白神編年Ⅱ型式２段階の所産であろう。397は軒丸瓦である。円形をなす巴頭から尾は円形に巻き込み、径の大きい珠文を12個認める。

**Ⅳ区ＳＺｃ03前面堆積土(0.9～－0.2m)(Ｉ１・２区南護岸前面堆積土(0.9～－0.2m)**、第135・136図)

398～406は肥前系磁器である。398～403は碗である。398は薄手の半球形碗で、高台脇に連結輪状文を認める。18世紀第２四半期～18世紀後半。399は見込みに蛇の目釉剥ぎを認めるくらわんか手の碗である。外面には蘭を描く。400は外面文様に手描きとコンニャク印判を併用する碗で、1690～1730年代に属する。401は小広東碗である。見込み及び外面には草花文を認める。1770～1810年代。402も小広東碗になる可能性が高い。18世紀末～19世紀前半。403は端反碗である。高台脇文様には菱形文、外面には線描きの草花文、内面縁文様には雷文を描く。1820～60年代。404は異形器形である。体部から連続する高台は八字形に強く開き、体部は直線的に開く。見込みには明瞭な段を有し、幾何学文、外面には放射線状文を描く。高台内にも幾何学文様を認める。1780～1810年代。405は青磁香炉である。三足を有し、脚先端部は無釉である。残存しないが、高台へ移行する痕跡を認める。406は台皿である。高台高は1.6㎝と高く、口縁部は緩やかに開き、端部はさらに外反する。口縁部内外面には八卦、見込みには人物像を認める。18世紀後半。407は京・信楽系陶器香炉である。408は施釉陶器蓋である。内面には灰釉、外面には帯状に淡い鉄釉を施釉する。外面には飛鉋痕を認める。409は施釉陶器土瓶である。外面には丸彫りによる斜め方向の鎬と三足と考えられる形骸化した脚を認める。外面上半には極暗褐色、内面には暗褐色の鉄釉をそれぞれ施す。410・411は備前灯明皿である。いずれも口径は８㎝前後であるが、前者は仕切板を有する。後者の底部には回転ヘラケズリ調整に先行する回転糸切り痕を認める。412は瓦質土器羽釜である。鍔部は斜め下方へ直線的に延び、端部を下方へ鋭く引き出し、垂下させる。底面に回転糸切り痕を認め、底部外面及び内面には丁寧な板ナデ調整を認める。口縁部外面には型成形により文を陽刻する。

413・414は軒丸瓦である。413は巴頭が大きく、尾は極めて細長く延び、圏線状をなす。珠文数は11個に復元できる。414は巴頭が円形をなし、尾は短く、太く巻き込む。珠文径も大きく、８個を数える。415は軒平瓦である。中心飾りは半裁花菱文で、唐草は３転する。肉厚なレリーフ状を呈し、キラコの塗布を認める。416は円盤状木製品である。曲物の底部になる可能性が高い。２箇所の破損を認めるが、釘による修復を行っている。417は木製品組物部材であろう。上面両端及び突部に木釘と考えられる痕跡があるが、機能は明らかでない。墨書を認めるが、識読できない。

**Ⅳ区ＳＺｃ03前面堆積土(0.5～0.1m)(Ｉ１・２区南護岸前面堆積土(0.5～0.1m)**、第136図)

418は産地不明磁器蓋である。焼き歪みはあるが口径40㎝前後を測る大型品で、把手を有する。内面外縁には３㎝前後無釉の範囲があり、身との重ね積みによる痕跡を認める。外面には雷文・圏線で文様帯を形成し、抽象化した龍を描く。肥前地域以外の地方窯産である。18世紀後半～19世紀第３四半期。

**Ⅳ区ＳＺｃ12前面堆積土**

**(Ｉ１・２区北護岸前面堆積土**、第137図)

419は景徳鎮窯系青花碗底部片である。内外面及び断

面は顕著なローリングを受ける。見込みには幾何学的な花文、高台内には「大明成○年製」の款銘を認める。16世紀後半。420～423は肥前系磁器である。420は青磁碗である。器表面の摩滅は激しく、元来の青磁釉の色調は失われる。1630年代～17世紀末。421は猪口である。外面には牡丹・蔓草文を認める。1780年代～19世紀前半。422は鉢である。器表面及び断面の摩耗は著しい。1630～50年代。423は青磁瓶である。碁笥底を呈し、体部は底部から直線的に開く。内面にも油滴状に青磁釉を認める。18世紀後半～19世紀前半。424は肥前系陶器溝縁皿である。見込みには砂目を２箇所認める(復元では三箇所)。425・426は瀬戸・美濃系陶器内禿皿である。前者は灰白色系、後者はオリーブ灰色系の色調を呈する灰釉を施釉する。大窯３期の所産であろう。

427～430は軒丸瓦である。いずれも巴の尾が細長く巻き込み、圏線状をなす。427・429は珠文数が17個前後に復元でき、428・430は12ないし13個を数える。429の瓦当には離れ砂を認める。

**Ⅳ区ＳＺｃ12・04間堆積土**

**（Ｉ６・７区③北側護岸と突堤間堆積土**、第137図）

431は漳州窯系青花皿である。口縁部は直線的に開き、端部へ連続する。見込みには鏡(段)を有する。焼成温度によるためか、呉須は青色には発色せず、赤橙色の色調を呈する。畳付には粗い砂目(籾殻痕？)が付着する。1590～1630年代。432は備前摺鉢である。口縁部は板作りをわずかに留め、内面にはかすかな段を認める。12条１単位のスリメで、その間隔はスリメ端で１cm前後を測る。乗岡編年近世２ｂ～３期の所産であろう。

433は軒平瓦である。中心飾りは不明であるが、唐草は上下に２転する。

**Ⅳ区ＳＺｃ04検出中**

**（Ｉ６・７区③突堤検出中**、第138図）

434は肥前系陶器呉器手碗である。高台の抉りは高台脇とほぼ等しく、高台内中央がやや突出する。435は備前摺鉢である。口縁帯はやや分厚い板状を呈し、内面に明瞭な段を有する。乗岡編年近世１ｂないし２ａ期の所産であろう。436は土師質土器坏である。底部には回転糸切り痕を認め、底体部境が不明瞭である。黄白色系の色調を呈し、胎土中には雲母粒の含有を認めない。

437は軒平瓦である。中心飾りは宝珠文で、脇飾りを認める。唐草は２転以上。

**Ⅳ・Ⅴ区ＳＺｃ03・12検出中(Ｉ１・２区、Ｉ６・７区②③南・北護岸検出中**、第138図）

438～441は肥前系磁器である。438・439は碗である。438は外面に区画文と一重網目文を描き、魚？を認める。439は高台内無釉の青磁碗である。高台外側面から高台内にはアルミナ砂の塗布を認める。440は青磁染付皿である。高台径は小さく、高台内に砂の付着を認める。441は青磁台皿である。高台高は1.5cmと高く、畳付内外には面取りを認める。442は肥前系陶器呉器手碗である。高台横断面はアーチ状を呈し、抉り込みは高台脇と同じかやや深い。443は瀬戸・美濃系陶器水甕である。見込みには胎土目を認める。444は瓦質焼成の焙烙である。口縁部は水平方向に延び、端部を垂下気味に収める。

445～447は軒丸瓦である。445は巴頭が不明瞭で、尾は短く巻き込む。珠文は小さく、その数は13個に復元できる。446・447は比較的明瞭な巴頭から尾は長く延び、圏線状をなす。珠文数は前者が12個、後者が11個に復元できる。

**Ⅳ区ＳＺｃ07・08打設木杭**

**（Ｉ区南護岸前面打設木杭**、第139・140図）

448～454は木杭である。断面形状は方形が主体であるが、円形をなすものも含まれる(453・454)。先端部はちょうなによる加工を認め、先細る。その加工を観察すると、角杭では隅角部分を削り込み、４側面を加工する一群(450・451)、その逆の行程を踏む一群(449・452)を認める。なお、貫穴を認める杭も含まれ(449・452)、柱材が転用された可能性が高い。

**Ⅳ区ＳＺｃ13関連(Ｉ６・７区①Ａ区護岸裏込め、裏込石材検出中ほか**、第141・142図）

455～462は肥前系磁器である。455～460は碗である。455～458はコバルト呉須を用いた型紙摺りによる染付がなされる。明治・大正期。459・460はコバルト呉須のゴム印草花文を認め、460には叩きによる施文もある。明治・大正期。461は蓋物である。外面にはコバルト呉須と緑色の絵薬を用いた型紙摺りによる草花文を描く。明治・大正期。462は蛇の目凹形高台(低)の丸皿である。口縁部外面には丸文と源氏香が３方向に交互に配する。1780年代～19世紀第１四半期。463は関西系磁器小杯(薄手酒杯)である。口縁部は端部のみ端反る。見込みにはゴム印の上絵で角枠に「大」の絵付けを認める。19世紀後半。464は肥前系磁器ないし関西系磁器碗である。外面にはコバルト呉須により一重網目文を描く。大正～昭和。465は不明陶器碗である。外面には等間隔に鎬状の段を認め、外表面にシワがある点から、型押成形の可能性が考えられる。口縁部内外面には透明釉？を施釉する。466～472は軟質系施釉陶器である。466～467は土瓶蓋である。466は外面に白泥を塗布し、櫛状工具による放射線状文をコバルト呉須で施した後、上絵(鉄絵)でその間隙に放射線状文を描く。468は行平鍋ないし鉢の蓋であろう。かえり部はなく、口縁部は天井部から連続し、外面に櫛描沈線を施す。469～471は土瓶である。肩部に形態差を認めるが、にぶい黄橙色の胎

土は共通する。472は器種不明であるが、受け部の存在から土瓶になる可能性が高いであろう。内外面ともに顕著な指押さえで成形され、体部内面のみ灰釉を施釉する。指押さえには布圧痕を認める箇所も存在する。口縁部形態は異なるが、成形技法は当遺跡出土577に酷似する。473・474は施釉陶器甕である。473はT字形口縁で、体部にカキメを認める。内外面に黒褐色の色調を呈する釉(鉄釉か)を施釉する。大谷焼の可能性を考えておきたい。474は口縁部が玉縁状を呈し、内外面に灰釉を施す。体部中位及び口縁部内面には白色の釉を垂れ掛けする。475は京・信楽系陶器香炉である。口縁部は外傾気味に直立し、端部を内側に肥厚させる。胎土は灰色系の色調を呈し、内外面には釉内に無数の気泡を認める灰白色系のねっとりした灰釉を施釉する。外面には色調は消失しているが、縁取りのある唐草文を上絵付けする。476は土師質土器火鉢と考えた。口縁部は直立し、端部を外方へ折り曲げ、口縁部は逆L字形を呈する。口縁端部には刻目文を施し、口縁部外面には型成形による列点文と斜交文を陽刻文として表現する。477は不明石製品である。長さ5.3cm、径0.6cmを測り、数条の刻目を施す。材質は滑石と考えられ、両端部に研磨痕ないし擦痕を認める点から火付け具＝火打ち石としての機能を想定しておきたい。

478～484は軒丸瓦である。いずれも巴頭の肥大化・扁平化が著しく、珠文も大きい。478を除き瓦当面にはキラコの塗布を認める。485・486は軒平瓦である。中心飾りは半裁花菱文であろう。唐草は485が半肉状に盛り上がり、486は二重線によって表現される。486の瓦当面にはキラコの塗布を認める。487は軒込瓦である。半肉状に盛り上がる菊花文を瓦当文様とし、キラコの塗布を認める。

488・489は角礫凝灰岩製の石臼の上臼である。裏込め石材からの出土であり、廃棄ないし転用されたと考えられる。底面中央には下臼と組み合わせる窪みを認め、横打込穴を一対認める。いずれも度重なる使用により底面の摩滅は著しく、溝の有無は判断できない。

**Ⅳ区ＳＺｃ13上面堆積土(0.8m～ＳＺｃ13上面)**
**(Ａ区護岸上面堆積土(0.8m～護岸上面)**、第143図)

490～494は肥前系磁器である。490・491は外面にコバルト呉須を用いた型紙摺りによる草花文、見込みには松竹梅繋ぎ文を認める。492は青磁染付碗である。外面には青磁釉を施釉し、草花文の花文を白泥塗布→釉下彩(桃色)、葉・茎を緑・にぶい赤褐色の上絵で表現する。内面には染付による草花文を描き、透明釉を施釉する。493は碗蓋である。外面には銅板転写による桜窓内に梅に鶯、扇窓内に松文を認める。494は蓋物である。端部内面は無釉で、外面には型紙摺りによる草花文を認める。以上、明治・大正期の所産である。495・496は京・信楽系陶器である。495は異形器形である。灰白色系の色調を呈する胎土で、胎土内にはわずかに気泡を認める。釉はやや黄色味を帯びた灰釉を施釉する。496は香炉としたが、向付のような器形となる。胎土・釉調は495に近似する。497は焼塩壷である。外面には指押さえ痕、内面には布圧痕を認める。

**溝状遺構**

**Ⅳ区ＳＤｃ12(Ｉ１・２区1.1mＳＤ01**、第143図)

498は肥前系磁器端反碗である。内外面には型紙摺りによる草花文・輪宝文を認める。明治・大正期。499は瀬戸・美濃系磁器端反碗である。外面には放射線状文、内面縁文様には圏線を染付ける。器表面には無数の気泡を認め、二次焼成を受けたことが窺える。500は京・信楽系陶器碗である。貫入が激しく、端反碗に復元できる。501は土製品外型である。脚部前側の型と考えられる。前後型合わせ。502は土製品脚部である。偶蹄類の脚部と考えられる。前後型合わせ。

**Ⅳ区ＳＤｃ11検出中**
**(Ｉ１・２区ＳＤ02検出中**、第143図)

503・504は肥前系陶器碗である。503は見込み及び高台内に砂目、畳付には回転糸切り痕を認める。504は呉器手碗である。にぶい黄色系の色調を呈する灰釉を施釉する。505は京・信楽系陶器灯明皿である。506は土師質土器火鉢である。底径11.4cmを測り、三足と考えられる脚を有する。体部側面には窓を有し、端部に煤痕の付着を認める。胎土中には多量の雲母粒と角閃石を含み、いわゆる下川津Ｂ類土器の胎土と酷似する。

507～509は軒平瓦である。507は中心飾りに宝珠文を配し、細い唐草が３転する。

**不明遺構**

**Ⅳ区ＳＸｃ07(Ｉ１・２区0.9mＳＸ01**、第143図)

510は肥前系磁器碗である。18世紀後半～19世紀第１四半期。511・512は京・信楽系陶器である。511は小碗である。512は端反碗である。灰白色系の磁器質な胎土が選択される。513は土師質土器小皿である。底部は回転ヘラ切りであり、下層遺構からの混入品と考えられよう。514は土製品外型である。

**柱穴**

**Ⅳ区ＳＰｃ193(Ｉ１・２区1.1mＳＰ04**、第143図)

515は肥前系磁器端反碗である。外面には一重斜格子文、内面縁文様には多重圏線及び縦線文を描く。1820～60年代。

**Ⅳ区ＳＰｃ209(Ｉ１・２区1.1mＳＰ28**、第143図)

516は施釉陶器瓶である。大谷焼の可能性が高い。

## 5．Ⅴ区（Ⅰ３・４区）

**整地層**（第144図）

517～529は第64図12～22層、530・531は５～10層にほぼ対応すると考えられる。

**Ⅴ区ＳＸｃ09東側整地層**

**（Ⅰ３・４区ＳＺ01東側整地層）**

517～522は肥前系磁器である。517・518は粗製のくらわんか手の碗である。517は見込みには印判五弁花、外面には草花文・笹文を認める。18世紀後半。519は蓋物である。高台高は低く、腰張り気味となる。外面には氷裂文を地文とした菊花文散らしを認める。18世紀後半。520は小広東碗である。見込みには松樹文を描く。ガラス焼継の痕跡を認め、高台内には焼継材と同じ原料を用い、「ヒ」という文字を描く。焼継師による受注後の混乱を避けるための目印と考えたい（日下2002）。521は端反碗である。外面には多重圏線と扇文？を描く。砥部焼の可能性が高い。522は青磁蓋物である。外面には陽刻の蔓草文を認める。523は肥前系陶器皿である。見込み及び畳付には砂目を４箇所認める。524は施釉陶器瓶である。体部外面には鉄釉、底部には灰釉を施釉し、底部外面には窯詰めに用いた砂が付着する。産地不明。525は京・信楽系陶器火入れないし香炉である。526は軟質系施釉陶器皿である。器高は３㎝と低く、向付のような器形を想定することができる。内面には指押さえ、外面には型押成形による鎬と葉文を認める。胎土には灰白色の極めて緻密な素地が選択され、明黄褐色に発色する灰釉を施す。

527～529は軒丸瓦である。527・528は珠文径が大きく、瓦当面にはキラコの塗布を認めない。529は巴頭が比較的明瞭で、尾は太く、短く巻き込む。珠文径はやや小さく、16個を数える。キラコの塗布を認める。

**Ⅴ区0.9m以上整地層（Ⅰ３・４区0.9m以上整地層）**

530は瀬戸・美濃系磁器端反碗である。531は平瓦である。端面には「扇に丸」の刻印を認める。

**不明遺構**

**Ⅴ区ＳＸｃ09裏込**

**（Ⅰ３・４区ＳＺ01内（裏込め）**、第144図）

532～534は肥前系磁器である。532は高台高が比較的高く、腰部の張りが弱い器形である。533は白磁碗である。口縁部は内湾し、端部に口銹を施す。534は型打成形の菊皿である。口径８㎝を測る小型品である。端部には口銹を認める。18世紀末～19世紀前半。535は施釉陶器である。器種は不明であるが、外面に飛鉋→白泥塗布→櫛描沈線文を施す点から行平鍋ないし土瓶の可能性が高い。536は瓦質大甕である。口縁部は直線的に内傾し、端部を内方へ折り曲げる。口縁部内面には石灰と考えられる付着物を認める。537は土製品・五重塔である。前後別作りないし壁掛け用の製品で、中空である。外型成形。538は土製品外型である。器表面は橙色の色調を呈し、501・514のような浅黄橙色系の色調とは異なる。

**Ⅴ区ＳＸｃ08（Ⅰ３区ＳＸ02**、第144図）

539は肥前系磁器広東碗である。外面には水草と魚文が対置する。1780～1820年代。

**Ⅴ区ＳＸｃ09外堀**

**（Ⅰ３・４区ＳＺ01外堀**、第145～148図）

第64図28・29層からの出土遺物である。540～548は肥前系磁器である。540～546は碗である。540は外面に二重網目文、内面に一重網目文、見込みに印判菊花文を描き、1700～50年代に位置付けられる。見込みには上絵により「東○○」、外面にも文字風の絵付けを認める。541・542は広東碗である。前者には竹文、後者には区画内四方襷文を外面文様とする。1780～1820年代。なお、541の見込みには傷隠し痕を認める。543・544は端反碗である。543は区画文内に松文、竹文を描き、遺存しない箇所には梅文が描かれよう。544には楼閣山水文を描く。1820～60年代。545は白磁色絵碗である。高台は比較的シャープで、外方へ開き、腰張り気味の器形を呈する。見込みには「清」の款銘を染付け、清朝磁器の影響を認める。外面には色絵による文様を認めるが、内容は不明である。色絵の大多数は消失しているが、赤橙色と赤灰色の色調を認める。1770～1810年代。546は広東碗に類似する底部形態を呈する碗である。外面に草文、見込みには十字花を認める。ガラス焼継による補修が行われる。1780～1820年代。547・548は広東碗蓋である。把手径が広く、547は外面文様に把手内も同じキャンパスとして、鳥と葦文を描き、天井部内面には草花文を描く。548は外面に枝(藁)束文を描く。釉の発色が悪く、オリーブ灰色系の色調を呈する。地方窯産。19世紀前半。549～551は瀬戸・美濃系磁器端反碗である。550は外面対方向に菱形文を描き、見込みには陰刻沈線で松竹梅文を描き、ダミ状の呉須を塗布する。外面文様は後述する566・567に共通する。552は関西系磁器小杯（薄手酒杯）である。高台内には「孝字生一」？と判読可能な染付を認める。553～555は瀬戸・美濃系陶器碗である。553は鎧茶碗で、体部外面に列点状の痕跡を認める。内面及び口縁部外面には緑釉、体部外面には錆釉を施釉する。554は柳茶碗である。胎土は淡黄色系の比較的緻密なもので、淡黄色系の灰釉を施釉する。外面には抽象化した柳を認める。555は刷毛目端反碗である。内面全面に白泥を塗布し、外面には直線的な刷毛目文を認める。556は京・信楽系陶器碗である。灰白色系の磁器質な胎土で灰色の灰釉を施釉する。外面には高松藩筆頭家老であり、後述するが絵図では調査地点がその屋敷地にも該当する大久保家の

家紋＝上り藤を上絵付けする。盛り上がりのある上絵で、現状での色調はオリーブ黒色を呈する。理兵衛焼の可能性を考慮しておきたい。557は軟質系施釉陶器碗である。見込みには文字の可能性もある下絵を暗褐色系の絵薬で描くが、素焼きのみで本焼きは行われていない。高台内中央には「破風高」の刻印を認め、理兵衛焼であることが窺える。558～560は萩焼である。558は口径7.2cmを測る小碗で、口縁部は直立し、端部のみ小さく外反する。底部は明瞭な渦高台である。内面には藁灰釉を施釉し、外面には灰釉と鉄釉のピラ掛けを行う。559・560は天目形の碗である。口縁部は強く外反し、外面体部下半のヘラケズリは深く、手際がよい。底部は渦高台となり、見込みにも強いナデ調整による渦状の痕跡を認める。施釉は内外面ともに灰釉と藁灰釉の掛け分けを行う。561は軟質施釉陶器小杯である。底部には回転糸切り調整を認め、底体部境に面を有し、口縁部は直立する。口縁部内面から外面には柿釉ないし透明釉を施し、口縁部外面には白泥による花文を認める。562は不明陶器碗である。胎土・器表面の質感等は前述した465に酷似する。外面には「池田名物　祖谷○　清月○」という文字を型押成形で表現する。見込みには重ね積み痕を認める。563・564は肥前系磁器皿である。563は見込みに草文を描く。19世紀初～幕末。564は蛇の目凹形高台(低)の皿である。見込みには三方割銀杏を描き、口縁部内面には丸文を均等割付する。外面には草花文を認める。18世紀末～19世紀第１四半期。565～567は瀬戸・美濃系磁器皿である。565は口縁端部が小さな玉縁状を呈し、見込みに楼閣山水文を描く。566・567は見込みに菱形文を描く同一意匠の皿であるが、前者は外面に圏線を認めるのに対し、後者は無文である。568は肥前系磁器瓶である。外面には草花文を描く。569は肥前系陶器鉢と考えた。見込みにはそれぞれの間隔が等しい足付きハマの目跡を５箇所認める。高台内には墨書を認めるが、判読できない。570は軟質系施釉陶器瓶であろう。上げ底を呈する底部から強く開き、明瞭な稜線をもって体部は反り気味に立ち上がる。外面全面には緑色に発色する釉を施釉する。胎土は灰白色系の色調を呈する粉っぽい緻密な素地である。571は軟質系施釉陶器台付鉢である。570と酷似する胎土を用い、内外面には灰黄色に発色する灰釉？を施釉する。内外面ともに明瞭なナデ調整を施し、体部下半には刻印(内容不明)を認める。572は軟質系施釉陶器蓋と考えた。内面は無釉で、外面には型押成形と考えられる花文を認め、灰釉を施釉する。軟質系施釉陶器把手と考えたが、京・信楽系陶器の可能性も高い。胎土は灰白色系の色調を呈し、外面には六弁花と唐草文を押印する。釉下彩として花文には黄色と赤色、唐草文には緑色の釉、全面に灰釉ないし透明釉を施釉する優品である。574は軟質系施釉陶器で角柱とした。一辺２cmの四角柱で、型成形と考えられる。浅黄橙色の緻密な胎土を用い、外面には緑色釉施釉後、赤漆を塗布する。575は京・信楽系陶器火入れであろう。外面には施釉前に白泥を塗布し、銹絵染付を認める高台は丁寧な刳り高台である。576・577は施釉陶器鉢で、セット関係となる。576は蓋で内面は顕著な指押さえ成形がなされ、天井部のみ施釉する。外面には布圧痕を認め、三方に延びる把手を有する。577は内外面ともに連続する指押さえ成形がなされ、口縁部と体部境を蓋受けとする。578は施釉陶器土瓶蓋である。外面全面に白泥を塗布し、銹絵による草文を描き、緑色釉を落とし掛けする。579・580は軟質系施釉陶器蓋である。579は円形のつまみを有し、かえりがつかない形態であろう。内外面ともに柿釉を施す。鉢ないし行平鍋の蓋か。580は土瓶蓋で、落とし蓋となる。外面のみ施釉し、天井部内面には回転糸切り痕を認める。581・582・586は備前灯明皿である。581は口縁部とほぼ等しい高さの仕切を有する。底部外面には回転ヘラケズリ調整に先行する回転糸切り痕を認める。586には仕切がなく、口径10.2cmとやや大型である。582は型により花形に成形する。底部は平底を呈し、内外面ともに塗土を認める。583は堺・明石系摺鉢である。口縁部は内面に明瞭な段を有し、顎をわずかに肥厚させる。白神編年Ⅰ型式の所産であろう。584は備前摺鉢である。乗岡編年近世３期の所産であろう。585は施釉陶器壷である。頸部は短く直立し、口縁部は外方へ強く屈曲する。外面にはオリーブ黒色の釉を流し掛けする。587は大甕である。口縁部は内傾する体部から「く」字形に屈曲し、端部をさらに内側に折り曲げ、口縁部内側には粘土を充填する。端部上端には２条の凹線を施す。588は土師質土器火鉢である。さなが一体化した二重構造となり、口縁部内面には舌状の受けを貼付する。口縁部外面には「○春花○」の刻印を認める。なお、外面全面には白泥の塗布を認める。589は土師質土器大甕である。口縁部は三角形状に肥厚し、口縁部下２cmには粘土帯を貼付し、断続指ナデを施す。胎土中には少量ではあるが、角閃石の含有を認める。590～592は土製品である。590は人物像で、前後型合わせによる成形後、剥落し前面のみが遺存する。591は亀である。外型成形であるが、型合わせは行われない。592は祠堂である。斜め方向の型合わせである。底部には穿孔、器表面には胡粉の塗布をそれぞれ認める。593は不明土製品である。円柱状を呈し、穿孔を認める。端面には「三十二文」の刻印を認める。用途は不明である。594は石製硯である。凝灰岩製か。595は簪である。ガラス製か。

596～598は軒丸瓦である。596は巴頭が円形をなし、尾は細く、短く巻き込む。597は巴頭が不明瞭で、尾は太く、短く巻き込む。598は巴頭が不明瞭で、尾は短く巻き込む。珠文数はそれぞれ12・11・９を数える。597にのみキラコの塗布を認める。599～608は軒平瓦である(605は軒桟瓦)。中心飾りには宝珠文(599・600)、菊

花文(601・608)、半裁花菱文(602～606)、幾何学的な文様(607)がある。半裁花菱文の一群は唐草を二重線で表現する602・603、一重線で表現する604、半肉状にレリーフする605・606に細分でき、いずれもキラコの塗布を認める。また、中心飾りを宝珠文とする599・600にもキラコの塗布を認める。609は丸瓦である。玉縁には丸内に「い」の刻印を認める。610は平瓦である。609と同じく丸内に「い」の刻印を認めるが、同一の刻印ではない。

## 6．Ⅵ区（Ａ１・２区）

**整地層（石垣関連**、第149～151図）

611～617、625～632、639～647は第67図19～32層（ＳＺｃ13に伴う整地層上層）、618～624、633～638は33～39層（ＳＺｃ13に伴う整地層下層）に対応する。

### Ⅵ区ＳＺｃ13に伴う整地層上層（Ａ区整地層ａ）

611は肥前系磁器薄手の半球形碗である。18世紀第２・３四半期。612・613は瀬戸・美濃系磁器である。612は端反碗である。端部は染付の口銹となり、外面には銅板転写による文様を認める。613は紅皿である。口径4.6cmを測り、逆台形状の器形を呈し、口縁部は小さく外反する。外面には銅板により牡丹・蝶文を転写し、「寒製紅」という商品名を認める。614は京・信楽系陶器蓋である。天井部には上絵による梅花文を描く。色絵は消失するがその痕跡より、梅花には緑、枝には青の絵薬を用いたと考えられる。615は瀬戸・美濃系陶器腰錆碗である。藤澤編年第７ないし８小期の所産であろう(藤澤1987)。616は施釉陶器鉢である。口縁部は玉縁状を呈し、残存部位全面に灰釉の施釉を認める。617は土師質土器焙烙である。口縁部は横方向に延び、端部は明瞭に垂下させる。

625～628は軒丸瓦である。625・626は比較的明瞭な巴頭から尾は細長く延び、圏線状をなす。625は珠文径がやや小さい。627・628は巴の尾が長く巻き込むが、圏線状にはならない。珠文数は626・627が12個を数え、625・628は復元では11個となる。629～632は軒平瓦である。中心飾りにはバリエーションを認め、巴文(629)、幾何学文(630)、菱形文(631)、木葉文？(632)がある。

### Ⅵ区ＳＺｃ13に伴う整地層下層（Ａ区整地層ｂ）

618・619は肥前系磁器小杯である。618は外面に草花文、高台内に「福」？の款銘を認める。1660～1680年代。619は高台脇形状が天目碗形を呈し、内外面青磁釉ないし透明釉を施釉するが、高台内は無釉となる。外面にはノミ彫り状の鎬を認める。1630～1650年代。620は肥前系陶器呉器手碗である。621は京・信楽系陶器碗である。高台径は5.1cmと大きく、口縁部は直線的に外傾する。渦高台。623・624は備前摺鉢である。いずれもスリメ間隔が狭く、スリメ端における間隔は前者が３mm、後者が８mm前後である。乗岡編年近世３期の所産であろう。624は土師質土器焙烙である。口縁端部は下方へ強く垂下させる。

633～636は軒丸瓦である。633は巴の尾が長く巻き込み、圏線状をなす。珠文数は10個に復元できる。634～636は巴の尾が圏線状に巻き込まない。637・638は軒平瓦である。中心飾りは637が菱形文、638が宝珠文である。

**Ⅵ区ＳＺｃ13に伴う整地層上層（Ａ区ＳＫ01）**

639は肥前系磁器端反碗であろう。焼成不良のため胎土は陶器質状を呈する。型紙摺りによって外面には団扇内に松竹梅文、青波文、見込みには花枝繋ぎ文（菊花か）を認める。

640～644は軒丸瓦である。巴の尾が圏線状をなす一群となさない一群に大別できるが、珠文数はいずれも12を数え、瓦当面にはキラコの塗布を認めない。645～647は軒平瓦である。645は中心飾りに上向きの三葉文を認め、唐草は細く、２転以上する。646は巴文の周囲に珠文を配した中心飾りを認める。647は明瞭な中心飾りがなく、唐草と連動する。瓦当面上端には幅８㎜を測る面取りを認める。

**土坑**

**Ⅵ区ＳＫｃ15（Ａ区ＳＫ03、第151図）**

648・649は肥前系磁器撥高台碗・蓋である。いずれも外面には同じモチーフの梵字崩れ文を描き、セット関係をなすと考えられる。1760～1790年代。650・651は瀬戸・美濃系陶器で、いわゆる太白手と呼ばれるものである。650は広東碗である。外面には簡略化した草花文（菊花文か）を認める。651は皿である。いずれも18世紀末～19世紀前半の所産である。652～656は京・信楽系陶器碗である。652は端反碗である。653は小杉碗で、高台内に二重菱形文の墨書を認める。654～656は灯明皿である。654は受け部がなく、見込みには足付きハマの目跡ないし３条１セットの櫛目を認める。655・656は受け部を有する形態であるが、胎土や器形が異なり、後者は富田吉金窯産の可能性が高い。657は施釉陶器瓶（徳利）である。胴部最大径は中位より下半に位置し、明瞭な稜を有する。外面には鉄釉を施釉するが、底面は無釉である。大谷焼の「棗」であろう。658は土師質土器焙烙である。口径40cm前後を測り、底部から直線的に開き、口縁部付近で短く直立し、口縁部は強く開く。内耳は小さく痕跡的となり、穿孔も貫通せず、その間隔も３cm弱と狭い。佐藤分類ＡⅠ－４型式に該当する。659は土師質土器火鉢である。脚を有し、窓を認める。外面には型成形による陽刻文を認めるが、内容は不明である。660は土製品・笠持ち僧である。前後型合わせによる成形がバリ痕から窺える。

661は軒丸瓦である。巴頭は円形をなし、尾は細長く延びる。珠文数は12個に復元でき、瓦当面にはキラコの塗布を認める。662は軒平瓦である。中心飾りは宝珠文で、唐草は３転する。瓦当面にはキラコの塗布を認める。

**Ⅵ区ＳＫｃ16（Ａ区ＳＸ02、第151図）**

663は瀬戸・美濃系磁器端反碗である。高台脇が肉厚で、底部は厚いが断面形状では高台内の抉り込みは深い。外面には丸文を描き、見込みには足付きハマの目跡を認める。664は瀬戸・美濃系陶器水甕である。

**不明遺構**

**Ⅵ区ＳＸｃ12（Ａ区ＳＸ07、第151図）**

665は瀬戸・美濃系磁器碗である。型紙摺りによる花文、輪宝繋ぎ文を認める。明治・大正期。

**Ⅵ区ＳＸｃ16（Ａ区ＳＸ08、第152図）**

666は肥前系磁器碗である。外面縁文様に一重圏線を認める。667は施釉陶器土鍋である。口径10cm前後の小型品で、外面の施釉範囲も狭い。668は口径、肩の張りが小さく、肩部に把手を有する点から施釉陶器瓶とした。口縁部内面には蓋受けを有する。外面には白泥塗布→鉄絵→透明釉施釉を認める。器形的には685のように復元できる。669は土師質土器七厘であろう。口縁部は直線的に内傾し、端部外側に粘土紐を貼り付け、口縁帯を形成する。体部上半には径７cm前後の円孔を認める。橙色の色調、雲母粒や赤色粒を一定量含む胎土は659に酷似する。

**Ⅵ区ＳＸｃ10（Ａ区ＳＸ09、第152図）**

670・671は肥前系磁器白磁碗である。670は外面三方に赤色の上絵による笹文を上絵付けする。18世紀前半。671は文字を外面に上絵付けする。上絵の色調は明赤褐色と赤黒色がある。672・673は肥前系陶器京焼風陶器鉢である。器形に顕著な差異は認められないが、前者の見込みに描く楼閣山水文の簡略化は著しい。672は18世紀前半、673は1690年代～18世紀初頭に位置付けられる。674～676は瀬戸・美濃系磁器である。674は端反碗である。コバルト呉須の使用を認め、明治・大正期の所産であることが窺える。675は小碗である。外面には銅板転写による易者・松文を認める。明治後半～大正期。676は瓶（徳利）である。外面には鳳凰・桐文を銅板により転写する。677～680は京・信楽系陶器である。677～679は京・信楽系陶器碗である。677は腰の張りが強い形態の碗で、高台は径の広い渦高台を呈する。胎土は灰白色の色調を呈し、黒色粒を多く含有する。内面及び外面高台脇には白泥の塗布を認め、銹絵染付により簡略化した草花文を描く。678は腰の張りが少なく、口縁部にわずかに内湾傾向を認める。外面には三葉文を緑色絵薬で上絵付けし、その脇に赤色絵薬による葉文？も認める。679は銹絵碗である。口縁部は比較的長く延び、口径に比して高台径はやや小さい。680は小碗である。外面施釉範囲は狭く、口縁部のみ確認できる。681は関西系陶器碗である。淡黄色の色調を呈する陶器質な胎土で、透明釉施釉前に内外面ともに白泥を塗布し、外面には草花文を描く（下絵）。体部には深い凹線を施し、器形を屈曲させ、高台脇には指押さえを認める。682は軟質系施釉陶器酒杯とした。見込みには二重線の「＋」の刻印を認め、口縁部内面には鳳凰・桐文

をヘラ彫りする。外面には顕著な指押さえ→ナデ調整を認める。内面にのみ施釉し、一部緑灰色を呈する箇所もある。なお、外面高台際には「○昇」の刻印がある。683は堺・明石系摺鉢である。顎がわずかに張り、内面に小さな段を有する点から、白神編年Ⅱ型式２段階に属すると考えられる。

**Ⅵ区ＳＸｃ15（Ａ区ＳＸ03、第152図）**

684は肥前系磁器皿である。底部は蛇の目凹形高台(高)の八角皿である。内面及び口縁部外面には型紙摺り、コバルト呉須による松竹梅文、青波文、唐草文を認める。明治・大正期。685は施釉陶器瓶であろう。口縁部内面には蓋受け、外面肩部上位には把手を有する。外面文様部には白泥を施し、呉須・銹絵・緑色絵薬を用いた文様を描く。

686は軒丸瓦である。瓦当面に占める文様区の比率が低く、周縁が幅広くなる。瓦当面にはキラコの塗布を認める。687は軒平瓦である。中心飾りは半肉状に盛り上がる半裁花菱文で、瓦当面を含め、ほぼ全面にキラコの塗布を認める。

**Ⅵ区ＳＸｃ13（Ａ区ＳＫ08、第153～158・161～168図）**

688～700は肥前系磁器碗類である。688～692はくらわんか手である。688・689は口径８㎝前後を測る小碗で、18世紀第２・３四半期に属する。690には雪輪を含む梅花文を描く。691・692の見込みには蛇ノ目釉剥ぎ後アルミナ砂を施し、重ね積みによる高台の溶着痕を認める。690～692は18世紀後半の所産である。693は薄手の半球形碗である。高台脇には鋸歯文、外面には草花文を描く。18世紀前半。694・695は高台が極めて高く、断面形状がU字形を呈する碗である。694は高台端部内面にはわずかながら面を認め、18世紀第２・３四半期の製作年代が与えられる。695は外面にデフォルメされた竜と虎を交互に認める。文様構成から有田以外の肥前系磁器であることが窺える。18世紀前半。696は白磁色絵碗である。外面３方に上絵付けで笹文を描く。723(蓋)とセットになろう。697～699は朝顔形碗である。697は高台脇に明瞭な段を有し、高台は細く、シャープである。外面には草花文を丁寧に描く。18世紀前半。698・699は青磁染付である。高台脇に凹線状の段を有し、見込みには印判による五弁花、後者の口縁部内面には四方襷文を施す。1740～1760年代。700は肥前系磁器蓋物である。腰部が張り、高台は径が広く、極めて低い。18世紀後半。701は肥前系陶胎染付碗である。18世紀前半。702は肥前系陶器猪口である。底部は体部から連続し、内部を削り込んだ碁笥底を呈する。体部外面及び外底面には白泥による直線的な刷毛目を認める。18世紀前半。

703～715は京・信楽系陶器碗である。器形は口縁部が内湾気味に立ち上がる704～707と口縁部が直立する709・710・712があり、胎土の特徴も703～708が陶器質、淡黄色系の色調であるのに対し、709・710・712は磁器質、灰白色系の色調を呈し、器形と胎土の差異がそれぞれ対応する。高台外端部に面取りを認める個体が大多数を占める。なお、711は平碗を呈し、口縁部はわずかに直立する。文様は703～711には上絵付けにより笹文、竹文、草花文、半裁菊花文、注連縄文、蕨手文を外面及び見込みに描き、712・713は簡略化した草花文を銹絵染付により描く。上絵付けは赤・緑を基調とし、わずかに青色(空色)を用いる。710の上絵付けは注連縄文である。ウラジロ、ユズリハ及びワラが確認できるが、その全体像が不明であり北條氏や日下氏が提示する注連縄文様類型に該当させることは困難である(北條1998・2001)。北條ゆう子氏より、器形と文様の組合せが初出例であるとのご教示を得た。また、内面を仔細に観察すると、茶渋の痕跡を認め、喫茶の風習を想起することができる(長佐古2002ａ)。709には螢手の技法を用い、螢手部分には赤による珠文ないし線描きの上絵付け、それ以外には緑色の上絵を面的に施す。712は渦高台の高台内に「高」の刻印を認める。「破風高」ではなく、「高」刻印の使用は３代理兵衛重治に限られるようであるが(豊田1982)、年代的にはやや矛盾する。713は外面に銹絵染付の草花文を描き、胎土・釉調は712に近似する。器高に比して口径が大きく、腰部がやや張る形態を呈する。見込み周縁には擦痕を認め、長佐古氏の碗内底面擦痕類型では、ＡないしＡ’類に該当し(長佐古2002ａ)、喫茶に使用された可能性が極めて高い。714は施釉前に白化粧土を内外に塗布し、釉下彩によりぼんやりとした釉調の草花文を描く。胎土は濃い灰色系の色調を呈し、緻密な素地が選択される。高台径が大きく、腰が張り、口縁部が直立する特徴的な器形である。高台は渦高台である。715は体部外面に入念な飛鉋を施し、口縁部及び内面には鉄釉、体部外面には錆釉を施釉する。京焼。716は関西系陶器碗である。二段口縁を呈し、高台は渦高台となる。高台脇には刻目状の圧痕を等間隔に認めるが、性格は不明である。外面には呉須の上絵付けにより草花文を描く。717は関西系の京焼風鉢である。見込みには先端に花ないし実が認められる枝束文を描き、花と枝を束ねる紐は呉須、枝は銹絵で表現する。

718～720は瀬戸・美濃系陶器碗である。718・719は腰錆碗である。藤澤編年第７～８小期の所産であろう。720は小碗である。高台内の削り込みは高台脇に比して浅い。藤澤編年第６～７小期の所産であろう。

721～735は肥前系磁器である。721～723は蓋である。721は把手内に渦福(二重枠)、見込みに手描き五弁花を認める。18世紀後半。722は青磁染付の蓋である。把手内には721より簡略化した渦福を二重枠内に描き、見込みには手描き五弁花を認める。18世紀後半。723は白磁である。外面には赤色の絵薬により笹文を上絵付けす

る。696とセット関係をなす。18世紀前半。724は青磁火入れである。底部は蛇ノ目高台である。1690年代～18世紀中葉。725は青磁仏花瓶である。口縁部は大きく開き、端部を上方へ強く摘み上げる。肩部には桃葉と実を形取った把手を貼付する。18世紀代。726は油壺である。18世紀前半。727～731は紅猪口である。727～730の外面には笹文を認める。732～734は仏飯器である。732は口縁部が直立し、外面に草花文を描く。18世紀第２・３四半期。733は口縁部が大きく開き、直立しない形態を呈する。18世紀前半～第３四半期。734は口縁部が直立する形態であろう。18世紀前半～第３四半期。735は小皿である。内面には印判による草文を認める。1690～1730年代。736は瀬戸・美濃系陶器蓋である。外面には銹絵染付の枝葉文を認める。

737は京・信楽系陶器土瓶と考えられる。内底部には輪状に砂が付着し、緑釉の落とし掛けを認める。外面無釉。外底部には「ケツ」の墨書描きがある。なお、739との接合関係を有する。738は産地不明の施釉陶器である。器種認定、天地、傾きが異なる可能性も残る。外面には亀甲繋ぎ文を下絵で描き、亀甲内に形骸化した花文を認める。灰色系の色調を呈する緻密な胎土で、灰白色系の厚く、ねっとりした灰釉を施釉する。理兵衛焼の可能性を考慮しておきたい。739～741は土瓶である。739・740は京・信楽系陶器であろう。739の外面には銹絵の枝に、白泥の花を配した繊細な梅花文を認める。741は瀬戸・美濃系陶器であろう。外面には灰釉、内面には鉄釉を施釉し、白泥による笹文、草花文を認める。

742～744は肥前系陶器鉢である。742は口縁部端部を丸く収め、高台脇に比して、高台内の削り込みは著しく深い。内外面には白泥による刷毛目文を認め、内面は波状、外面は直線文を呈する。見込みには蛇ノ目釉剥ぎと重ね積み痕跡を認め、高台端部には泥漿状の微砂(アルミナ砂と表現可能)を塗布する。18世紀中葉～末。743は小さな玉縁状の口縁部形態を呈し、高台脇に比して高台の抉り込みは深い。内外面には直線的な刷毛目文を認める。見込みは幅の広い蛇ノ目釉剥ぎがなされ、重ね積み痕跡を認める。18世紀中葉～末。744は口縁端部が「く」字形に屈曲し、端部を内上方に小さく摘み出す。内面には白泥による刷毛目文を認め、口縁部内外面には鉄釉を施釉する。18世紀代。

745～748は瀬戸・美濃系陶器である。745は火入れである。口縁端部は玉縁状を呈し、外面には丸ノミ彫りによる鎬を認める。746は香炉である。口縁端部は内側へ鋭く引き出し、外方には丸みを有する。外側には櫛描文状の沈線を施し、端部を除く口縁部外面及び口縁部内面上部に鉄釉を施釉する。4足の脚を貼付するが、同時期に属する香炉の大多数は3足である。747は鬢水入れである。両側面には緑釉状の銹絵により草花文を描く。748は水甕である。口縁部は内側へ垂直に折り返し、水平面を有する。体部外面にはヘラ彫り文を施し、緑釉を流し掛けする。高台は底部にV字状の切り込みを入れ、貼付する。内底部には胎土目積み痕があり、畳付にもその痕跡を認める。また、高台内には「四十六」と判読可能な墨書を認める。

749・750は堺・明石系摺鉢である。749は口縁端部内面に段を有し、顎は小さく張る。スリメ間隔はわずかに間隙を認め、スリメ端は丁寧にナデ消される。750は高台風の底部を呈し、見込みには「＊」のスリメを施す。いずれも白神編年Ⅱ型式の所産と考えられる。751は備前摺鉢であろう。口径19.2cmを測る小型品である。スリメ間隔に狭い間隙を認め、見込みのスリメは体部のそれに連続する。体部外面調整は回転ナデ調整を施し、スリメ端のナデ消しは行われない。乗岡編年近世４期の所産であろう。752は備前瓶(徳利)である。体部に顕著な凹みを認め、人形徳利である可能性が高い。753は備前鉢である。口縁端部には煤痕を認める。754は備前系の甕である。755は施釉陶器鉢である。口縁部は「く」字形に屈曲し、内外面に鉄釉を施釉する。756は軟質系陶器甕である。口縁部は短く直立し、外面肩部にはカキメを認める。把手の剥離痕跡を肩部に認める。外面及び口縁部内面には鉄釉を施釉する。

757～759は土師質土器羽釜である。口径20cm前後と11cmの二者を認めるが、形態に差異はない。口縁部は短く内湾し、端部を丸く収め、２対の縦方向の外耳を貼付する。内耳には明瞭に貫通する穿孔を認めるが、使用痕跡は確認できない。758の内面には鍔部貼付に伴うであろうヘラ状圧痕があり、鍔端にも不明圧痕が存在する。760～763は土師質土器焙烙である。法量は口径42cm前後と27cm前後の二者を認める。口縁端部がわずかに垂下する760・761・763と端部を下方に強く引き出す762があり、その差異は口縁部から体部への連続性に対応する。前者は底部から緩やかに内湾気味に立ち上がり、口縁部に連続するのに対し、後者は底部から直線的に開き、口縁部手前で短く直立し、口縁部に至る形態を呈する。佐藤分類では前者が口縁部１、後者が口縁部２に該当する。内耳は３個体で確認できる。760・763は片方の孔は貫通するが、もう一方は貫通せず、吊すという機能は認め難い。佐藤分類のＡＩ－２型式に相当する。

764は口径4.8cmを測り、口縁部は内湾して立ち上がる小皿で、底径と口径の差は少ない紅皿状の形態を呈する。底部切り離しは回転ヘラ切り調整で、糸切り痕は認められない。胎土は後述する同遺構出土の小皿と比べると、石英・長石の含有量が多く、その粒径も大きい。同様の器形の四国・瀬戸内海沿岸における報告例は少ない。管見では11cm前後の口径の小皿が土師質碗型土器として報告されているのみである。見込みには灯心油痕を認めるものが含まれ、灯明具としての用途が考えられるが、それが認められない小型法量の土

師質碗型土器が徳島県常三島遺跡で出土しており、京都・江戸の類例から小型の土師質碗型土器の用途を何らかの祭祀具であったと推測されている(日下1998)。

765～771は土師質土器小皿である。法量は7～8cm(765～768)と10～11cm(769～771)の2法量が存在する。前者は766のみやや異なる器形であるが、製作後の「へたれ」による器形の変形と考えられ、いずれも同様の器形を呈する。底部は小さく突出し、口縁部は内湾気味に立ち上がり、わずかに外端面を有する。見込み外縁には強いナデ調整を施し、見込み中央部も明瞭に窪む。底部には回転糸切り痕を認める。胎土は比較的緻密で、石英・長石、赤色粒を一定量含み、雲母粒は認められない。色調は橙色ないし浅黄橙色を呈する。後者は底部に差異を認め、底部が小さく突出する形態(770・771)と突出しない形態(769)に分類可能であるが、製作後の「へたれ」や摩耗状況を考慮すると、微細な差異である。口縁部形状は中位に強いナデ調整を施し、それに連続して外端面を形成する769・771と中位が肥厚し、口縁端部が先細る770がある。また、見込み外縁は強いナデ調整により明瞭に窪み、見込みには螺旋状の回転ナデ調整を認め、それによりわずかにへこむ。底部切り離し手法は回転糸切り調整で行われ、胎土・色調は前者に等しい。772は土師質土器蓋である。外面には丁寧なヘラナデ調整を施し、天井部と口縁部の境には同調整による面取りも確認できる。773・774は土師質土器火鉢であろう。773は最大径が中位よりやや下方に位置し、口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部を内側に小さく肥厚させる。脚部を有し、その貼付位置に刻目を施す。774は口縁部が直線的に外傾し、端部を内外へ拡張させる。脚部の有無は確認できない。775は土師質土器甕とした。口縁部は小さく屈曲し、端部を断面三角形に肥厚させる。776・777は焼塩壺である。776は器高の低い寸胴形を呈し、器高は7.5cmを測る。口縁部は印籠形の蓋受をわずかに認める。体部は板作り成形で、内面に明瞭な接合痕を認める。体部内面には縦方向のケズリ状圧痕を認めるが、布圧痕は確認できない。胴部外面には隅丸(隅切り)一重枠「泉湊伊織」の刻印を押捺する。底部成形は2ピースである。777は板作り成形で、体部内面2箇所に接合痕を認める。口縁部は印籠形を呈し、蓋受は776より幅が広く、安定する。底部は2ピースで、底部内面に限り布圧痕を認める。胴部外面には一重枠「サカイ　泉州磨生　御塩所」の刻印が押捺される。胎土中に粒径1cmを測る赤チャートを含有する特徴的な胎土である。778は焼塩壺蓋である。天井部は平坦で、内面に布圧痕を残す。胎土・色調・法量から判断して、776とセットになろう。

779～783は備前灯明皿である。法量は8.5cm、10.4cm前後、12.4cmの3法量を認める。仕切の有無によって細分でき、10.4cm前後の法量に限り、仕切の存在しない個体が存在する(782)。仕切頂部は口縁部より低い。いずれも底部回転ヘラケズリ調整に先行する回転糸切り痕は認められない。784は備前小皿である。形態はチャツに似る。底部は回転糸切り調整、口縁部外面は指押さえを施す。口縁端部に煤痕を認め、灯明具としての使用が窺える。

**Ⅵ区ＳＸｃ14(Ａ区ＳＫ09、第159～168図)**

前述したように、遺物の接合関係やその組成からＳＸｃ13と同一遺構である可能性が極めて高い。遺物抽出はＳＸｃ13を補完する形で行った。

785～789・791～801は肥前系磁器である。785は白磁碗である。上絵付けを認めるが、色絵は消失する。17世紀後半～18世紀第1四半期。786は白磁小杯である。胎土の色調が灰白色より白色に発色し、肥前系磁器の胎土とはやや異なる。18世紀代。787は青磁猪口である。口縁部は直線的に外傾し、端部が先細る。18世紀第2四半期～1770年代。788・789は碗である。788は径がやや小さく、低い高台を有し、腰部に張りを認める。口縁部が比較的長く直立するため、小丸碗とは呼称できない。外面には松竹梅文を認める。18世紀後半。789は外面に若松文を描き、見込みに傷隠しを認める。18世紀中葉～1780年代。791～793は紅猪口である。外面には笹文を描く。794は型押成形の餌猪口である。外面露胎部分にはシワを認める。18世紀後半～19世紀前半。795は青磁仏花瓶である。口縁部は大きく開き、端部を上方へ小さく摘み出す。18世紀前半～中葉。796～798は皿である。796は青磁皿で、蛇ノ目釉剥ぎを認める。高台脇から高台内は無釉である。17世紀後半。797は型打成形の輪花皿である。口縁部内面には(松)竹梅文を描く。18世紀第2・3四半期。798は見込みに印判五弁花、高台内に枠なしの渦福を認める。18世紀前半。799～800は碗蓋、801は合子類の蓋である。799は外面に染付による区画文、高台脇文様に「ヨ」を配し、さらに魚文、海草文を上絵付けする。天井部内面には梅花繋ぎ文を認める。1750～70年代。800は笹文を染付で1箇所のみに描き、さらに染付と同じモチーフの笹文を外面及び把手内に上絵付けする。上絵に金の使用を認める。18世紀前半に位置付けられる。801はかえりのある蓋で、外面に印判による桐葉文を認める。18世紀前半～第3四半期。

790は肥前系陶胎染付火入れである。胎土はにぶい赤褐色の色調を呈し、外面には青磁釉を施釉し、内面には青磁釉の釉垂れを認める。18世紀前半。

802～810は京・信楽系陶器碗である。器形は内湾気味に立ち上がる半球形碗(803・805・807・808)、口縁部に直立傾向を認める碗(802・804)、平碗(810)がある。胎土は淡黄色系の色調を呈し、陶器質な胎土(802・803・807～809)と灰白色系の色調を呈し、磁器質な胎土があり(804～806・810)、ＳＸｃ13で示したような器形と胎土の相関関係は認め難い。上絵付けは緑色、赤色を

基調とし、灰白色の絵薬も認め、笹文・菖蒲文・葉文・草花文を描く。804の見込みには花文を上絵付けにより描く。施釉前の下絵では、807の銹絵、810の銹絵染付による菖蒲文がある。また、807の見込みには足付ハマの目跡を認める。

811は陶器瓶であろう。碁笥底を呈し、高台内に超小型の「破風高」印を認める。内外面に白化粧土を施すが、本焼き前と考えられ、その剥落は著しい。理兵衛焼。812は瀬戸・美濃系陶器小碗である。内面及び外面上半には灰釉を施釉する。813は陶器香炉ないし火入れである。瀬戸・美濃系ないし京・信楽系陶器であろうが、判然としない。口縁端部を内側へ鈍く肥厚させ、外面には渦文が彫り込まれた三足を認める。口縁部内面及び外面には白化粧土を塗布し、透明釉を施釉する。814は肥前系陶器皿である。高台脇に比して高台内は深く抉られる。内面には波状の刷毛目文を認め、内外面に鉄釉を施釉する。見込みは蛇ノ目釉剥ぎされ、重ね積み痕を認める。18世紀第２・３四半期。815は備前鉢である。底面に火襷、窯詰め時の痕跡と考えられる圧痕を認める。816は備前摺鉢である。スリメ間隔にわずかな間隙を認める。乗岡編年近世４期の所産である。

817は土師質土器紅皿である。口径に比して器高が高く、口縁部は直線的に外傾し、端部を上方へ強く摘み上げる。内面には赤色顔料の痕跡を認め、紅皿ないし祭祀具としての使用が考えられる。818は土師質土器火鉢であろう。平面形は方形を呈し、口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部を内方へ強く、外方へ小さく引き出す。819は瓦質焼成の土師質土器羽釜である。口縁部は内湾し、端部手前で直立し、茶釜形を呈する。その屈曲は鈍く、不明瞭である。820は土師質土器焙烙である。口径34.1cmを測り、ＳＸｃ13で確認した２法量とは異なる(口径42cmと27cm)。口縁部形態は佐藤分類口縁部１に合致し、底部から緩やかな弧を描く。内面下半は板ナデ調整、上半はそれに後出する板ナデ・ヨコナデ調整、体部外面下半は板ナデ調整、上半はそれに先行する指押さえを認める。佐藤分類ＡＩ－２型式である。

821・822は焼塩壺である。体部は板作成形で、底部は２ピースである。底部内面には底部押圧時の工具先端に被せられた布痕跡を留める。外面には一重枠「サカイ　泉州磨生　御塩所」の刻印を認めるが、822は下半1/4を欠く。摩滅による消失ではなく、元来押捺されない。口縁部は印籠形を呈する。821の胎土中に粒径５㎜以上のチャートを含み、同じ刻印を押捺した777と同じ胎土である。823は焼塩壺蓋である。天井部は平坦で、内面に布圧痕を認める。法量・胎土・色調から821とセットになろう。

**Ⅵ区ＳＸｃ13出土土製品**

824～826は土製品である。824は屋根形土製品である。寄棟構造で、棟覆の表現がなされ、屋根の藁ないし茅葺きを縦刷毛で表現する。内面四隅には壁との取り付け用の突起がある。内面には顕著な指押さえを認める。外型成形。825は象であろう。外型成形による左右型合わせである。中空。826は土製飾馬である。外型成形。鞍、鐙、手綱、尻繋を陽刻表現する。827は陶製煙管雁首である。外面には透明釉を施釉し、脂返しを施釉前の鉄絵で表現する。828・829は銅製煙管である。830は銅製簪である。鏡表裏には羽を広げた鶴を丁寧に彫刻する。

**Ⅵ区ＳＸｃ14出土土製品**

831～839は土製品である。831・832は天神である。前後型合わせの外型成形で、台部に径１cmの穿孔がなされる。同じモチーフであるが、前者は精良な胎土を用い、細部まで丁寧に表現し、さらに表面に胡粉を塗布するが、後者は赤色粒を含む粗い素地により製作され、前者に比して細部の表現は甘い。833は親子立像である。前後型合わせの外型成形。底部に穿孔を認める。834は笠持ち僧であろう。外型成形。表面には胡粉を塗布し、一部に赤色顔料の痕跡を認める。底部に径１cmの穿孔がある。835は神将像の下半である。表面には胡粉を施し、底部に穿孔を有する。前後型合わせの外型成形。836は鳥である。鳩か。前後型合わせの外型成形。底部から頸部にかけて斜めに円孔を穿孔する。837も鳥である。鶏であろう。前後型合わせの外型成形。表面に胡粉を認め、底部には穿孔がある。838は猿であろう。前後型合わせの外型成形で、底部は中空である。右足を組み、右肘をそこに乗せる。表面には赤色味を帯びた胡粉を塗布する。839は着流しを着た猿である。前後型合わせの外型成形。表面にはわずかに胡粉が付着する。840は陶製の煙管吸口である。透明釉を施釉し、施釉前に鉄釉により帯状の表現を行う。827とセットであろう。841は陶製の犬(シーサー)である。前後型合わせの外型成形で、中空である。口部及び頸椎部に穿孔を認める。表面には透明釉を施釉し、目の部分のみ鉄釉を施釉する。842は銅製煙管雁首である。

**Ⅵ区ＳＸｃ13・14出土瓦**

ＳＸｃ13・14から出土した瓦は20Ｌ入りコンテナで10箱以上を数える。その抽出に際しては、高松城跡(西の丸町)Ｂ地区で抽出された同笵関係を基軸とした型式との対応関係を重視した(佐藤2003刊行予定)。その認定は佐藤竜馬氏と佐々木博子氏の手を煩わせた。当遺構出土の軒瓦の型式については、観察表備考欄に記載しているので、本文中では触れない。なお、レイアウトに関しては珠文数を第１軸とし、巴の尾の巻き方や右巻き、左巻きといった差異を考慮した。

843～887は軒丸瓦である。843は珠文数が14を数える。巴頭は扁平な円形をなし、尾は短く巻き込む。瓦当面

にはキラコの塗布を認める。

844～853は珠文数が13個を数える一群である。845～848は巴の尾が長く巻き込み、圏線状をなす。巴頭は明瞭に円形を呈する845・847・848と尾との識別が困難な844・846があり、後者は尾が重なった圏線の径が小さい傾向が窺える。848の瓦当面にはキラコの塗布を認める。849は巴の尾が極めて長く延びるが、圏線状をなさない。珠文径はやや大きい。なお、844・846～849は高松城跡(西の丸町)B地区では確認されていない型式である。850～852は巴頭と尾の境が不明瞭で、尾は太く、短く巻き込む。851は新型式である。

854～877は珠文数が12個を数える一群である。854～858は巴の尾が細長く、尾の先端が長く間延びする一群である。珠文径はいずれもやや大きく、巴頭と尾の識別も容易である。855にはキラコの塗布を認める。856は新型式。859～861は巴の尾が比較的長く延びる一群である。尾の先端は854～858で触れたように長く延びるものではない。860は新型式。862～871は巴の尾が太く、短く巻き込む一群で、先端のみ細くなる形状を呈する。尾は圏線状ではないが、径5㎝前後の円形を指向するように巻き込む。865・868のように巴頭が円形をなすものも含むが、尾との境が不明瞭な個体が多い。867・869にはキラコの塗布を認める。866～868・870は新型式である。872～874は巴頭と尾の境が極めて不明瞭で(「,」状の巴尾を呈する)、尾が短い一群である。872の巴頭の間には「建宗」の陽刻を認め、珠文径は小さい。873・874は珠文径が872に比してやや大きく、873にはキラコの塗布を認める。874は新型式。875～877は巴頭が扁平な円形を呈し、尾は短く延び、径6㎝前後の円形を指向する。珠文径は小さく、配置間隔も広い。いずれもキラコの塗布を認める。

878・879は珠文数11個を数え、巴の尾が短く巻き込む。879にはキラコの塗布を認める。878は新型式。880は珠文数が10個を数え、巴の尾は径4㎝前後の円形を指向して巻き込む。巴は盛り上がりを認めるが、扁平に仕上げる。

881～886は珠文数が9ないし8個を数える。881～883は巴頭が円形をなし、尾は細長く延びる。尾は円形を指向せず、先端部が巻き込むことはない。884は珠文径が極めて大きく、肥大化した巴頭から尾は短く延びる。885は巴頭が大きく、尾は短く、太い半肉状を呈する。尾はかろうじて円形を指向して巻き込む。882・885は新型式。886は細片ではあるが、珠文数は9個に復元できる。

以上、軒丸瓦の概要を述べたが、それぞれの出土量をまとめる必要がある。その際、新型式を数点確認した。高松城跡(西の丸町)B地区では数字で表現されているが、観察表備考欄に示したように新型式(軒丸瓦●)とし、●はアルファベットとした。

888～905は軒平瓦である。888～891は中心飾りを半裁花菱文とする一群である。888～890には2転する二重線の唐草文を認めるが、891は一重線である。890を除き、瓦当面にはキラコの塗布を認める。その差異は、瓦当や文様区縦幅の法量にも認める。892～895は宝珠文を中心飾りとし、キラコの塗布を認めない。896・897は中心飾りに四葉文を有し、、唐草は3転する。896は瓦当面上端に幅の広い面取りを認める。898は下向きの三葉文を中心飾りとし、唐草は2転する。新型式である。899～901は逆ハート文様を中心飾りとし、唐草は2転ないし2転以上する。899は弦深が極めて浅く、瓦当面上端は水平化が著しい。899にはキラコの塗布を認める。902は下向きの三葉文を中心飾りとする可能性が高く、文様区縦幅が極めて狭い。903・904は表現することが困難な中心飾りを有し、前者の瓦当縦幅ないし文様区縦幅は極めて狭い。905の中心飾りは上向きの三葉文の各先端に珠文を3点配する。弦深は深く、3.4㎝を測る。

以下、軒丸瓦と同じく、高松城跡(西の丸町)B地区では確認されていない新型式の軒平瓦がある。観察表備考欄に示したように新型式(軒平瓦●)とし、●はアルファベットとした。

906・907は軒桟瓦である。906は平瓦部の中心飾りが周囲の唐草に連動し(二葉文)、丸瓦部は巴文となる。907は丸瓦部の文様から、軒桟瓦31と同笵ないし同文関係にあるが、丸瓦部が取り付く方向が逆である。いずれもキラコの塗布を認める。

908は土塀瓦である。軒丸部は方形となり、菊花文を配する。弦深が極めて浅く、平部は直線的となる。キラコの塗布を認める。

909～911は軒込瓦である。いずれも菊花文様を認めるが、909は輪郭線により、菊花文を表現し、910・911はレリーフ状に盛り上がる。911は新型式。

912は海鼠瓦である。確認できる一辺に段を有し、両隅角に穿孔を認める。漆喰の痕跡は認められないが、段を持たない両側辺には幅2㎝前後の帯状に色調が異なる箇所を認め、穿孔の周囲にも同様の痕跡がある。

## 7．Ⅶ区（Ｄ４・５区）

**整地層**（第169・170図）

913～923は第71図Ａ－Ａ’間セクション６・７層、924～931は８～12層、932～936は36層からの出土遺物である。

**1.2～1.0m**　913・914は肥前系磁器である。913は青磁碗である。高台内にも施釉を認める。見込みには強い回転ナデ調整により生じた段を有する。1630～1650年代。914は皿である。見込みには牡丹文を認める。1024と器形・文様に共通性を認める。1630～1640年代。915・916は肥前系陶器皿である。915は底部と口縁部境に明瞭な段を有し、口縁部は内湾気味に開く。916は見込みに砂目を認める。917は京・信楽系陶器碗である。器形は天目形を呈し、口縁部は端部で小さく直立する。灰白色系の磁器質胎土で、内外面にはガラス質の質感を呈する灰釉を施す。外面高台脇は無釉となり、釉と露胎境は赤く発色する。外面には金と赤の絵薬による上絵付けを認める。918は瀬戸・美濃系磁器小杯（薄手酒杯）である。端部には口銹、口縁部内外面には１条圏線の縁文様を認める。919は備前摺鉢である。口縁部断面形状は三角形状を呈し、内面にはかすかな段を有する。スリメは８条１単位で、スリメ間隔はその端で0.5～１㎝を測る。乗岡編年近世３期の所産である。920は備前小壷であろう。底径4.8㎝を測る小型品で、底部には回転糸切り痕を認める。921は土師質土器小皿である。口縁端部には外端面を有する。端部には煤痕を認め、灯明皿としての使用が窺える。922は土師質土器坏である。底径は6.6㎝を測り、底部と口縁部境は極めて不明瞭である。底面には回転糸切り痕→板状圧痕を認める。923は有溝土錘である。粒径８㎜を越える石英・長石を多量に含む粗い胎土が選択される。

**1.0～0.8m**　924～926は肥前系磁器である。924・925は碗である。924は丸碗であるが、腰部の張りは小さく、口縁部は内湾気味に長く立ち上がる。925は腰が張り、口縁部は直立する。釉は畳付を除き全面施釉するが、その発色は呉須同様悪く、酸化気味の焼成不良品である。1610～1640年代。926は皿である。925同様に呉須・釉の発色は悪く、酸化気味である。1610～1640年代。927は産地不明磁器碗である。見込みに段を有し、中世前半の中国産磁器の可能性を考慮したが、高台内への施釉を認める。928は肥前系陶器碗である。口縁部は直線的に外傾し、口縁部は先細る。929は瀬戸・美濃系陶器内禿・折縁皿である。見込みには輪ドチ痕を認める。大窯３期の所産であろう。930・931は土師質土器小皿である。930は口縁部を玉縁状に肥厚させ、底部には回転ヘラケズリ痕を認める。下層遺構からの混入遺物であろう。931は底径が小さく、口縁部は直立気味に長く開く形態となろう。底面には静止糸切り痕を認める。

938は軒丸瓦である。巴頭は円形をなし、尾は長く巻き込み、圏線状ではないが、径６㎝前後の円形を指向する。珠文数は12個を数える。939は軒平瓦である。中心飾りは五葉文で、唐草は２転する。

**Ⅶ区ＳＺｃ01前面堆積土**　932は中国産白磁碗であろう。口縁部は直線的に開き、端部を丸く収める。口縁部下内面と見込みには段を有し、蛇の目釉剥ぎを認める。外面下半～高台内は無釉である。933は肥前系陶器碗である。口縁部は小さく外反する。17世紀前半。934は焼締陶器鉢である。内面ないし口縁部外面には塗土を施し、端部と内面に釉垂れ状に灰釉の施釉を認める。935は瓦質焙烙である。口縁部は大きく開き、端部に向けて漸次肥厚する。体部内面には板ナデ調整、外面には指押さえを認める。胎土はにぶい褐色の色調を呈し、粒径３～10㎜前後の赤色粒を多く含む。亀山系鍋の可能性も残る。936は土師質土器羽釜である。口縁部は直線的に外傾し、端部は水平に収める。外耳が付く形態となろう。937は漆器椀である。内面には赤漆、外面には黒漆を塗布し、高台内には「－」の釘掻きを認める。

940・941は軒丸瓦である。940は巴の尾が細長く延び、圏線状をなす。941は比較的明瞭な巴頭から尾は太く、短く延びる。珠文径は大きく、12個を数える。両者にはキラコの塗布を認める。

### 土坑

**Ⅶ区ＳＫｃ18（Ｄ４区ＳＸ01**、第170図）

942は石印である。背面と側面には丁寧な研磨による面を有し、印面に「忘形見之言」と彫り込まれる。「之」は隷書、他は篆書であり、両者が混在した状況である。さらに、「言」は彫り違えており、稚拙な観が否めない。印面には赤色顔料の付着を認める。

### 柱穴

**Ⅶ区ＳＰｃ315（Ｄ５区ＳＰ01**、第170図）　943は肥前系陶器砂目積みの皿である。畳付には回転糸切り痕を認める。944は備前鉢である。内外面にはそれぞれ連続する回転ナデ調整を施す。945は土師質土器小皿である。底部には回転糸切り→板状圧痕を認める。

**Ⅶ区ＳＰｃ316（Ｄ５区ＳＰ02**、第170図）　946は肥前系磁器碗である。口縁端部のみ小さく外反し、端部は先細る。外面には楼閣山水文を描く。1630～60年代。947は肥前系陶器皿である。内面に鉄絵を認める絵唐津である。948・949は肥前系磁器の可能性が高い碗である。前者は高台高が１㎝と高く、断面形態は方形を呈する。畳付を除く全面に白磁釉を施釉する。17世紀代。949は胎土が赤味を帯び、釉の発色も悪い焼成不良品である。高台断面は三角形状を呈し、見込みには明瞭な段を有する。950は肥前系磁器（内野山窯産）碗である。高台横断面形状はにぶいM字形を呈する。畳付を含め全面に白磁釉を施釉し、畳付には砂目痕を認める。1610～30

年代。951は京・信楽系陶器碗である。器形・絵付けから917と同一個体である可能性が高い。952は施釉陶器瓶とした。底部は碁笥底状を呈し、内外面には鉄釉を施釉する。953は土師質土器小皿である。底径5.5cmを測り、回転糸切り痕を認める。

**井戸**

**Ⅶ区ＳＥｃ01（Ｄ５区ＳＥ01**、第170図） 954は肥前系磁器小杯であろう。畳付を除き全面施釉した透明釉には無数の気泡を認める。17世紀後半。

**土坑**

**Ⅶ区ＳＫｃ20（Ｄ４区ＳＫ01・ＳＫ11Ｄ401**、第171図）

955～961は肥前系磁器である。955・956は碗である。955の外面には丸みのある一重網目文を認める。17世紀後半。956は腰部がやや張り、口縁部は直立し、端部が先細る。外面には蔓草文を認める。957は白磁小杯である。口縁部は外傾し、端部のみ強く外反する。高台内には「太明○」の款銘を認める。17世紀後半。958～960は皿である。958は口縁部輪花の型打成形皿である。見込みには草文を描く。959は見込みに魚文を認める。960は高台高が著しく高く、口縁部は緩やかに開く台皿であろう。口縁端部付近における立ち上がりを認めない特徴的な形態である。見込みには桐葉文、丸文、田文を不規則に配する。17世紀後半。961は白磁瓶である。高台は安定し、体部最大径は中位より下半に位置し、明瞭な稜を持つ。高台内無釉で、外面には鉄釉を点状に認める。17世紀後半か。962は肥前系陶器皿である。見込みには明瞭な段を認め、端部を上方に小さく摘み上げる。963～968は土師質土器小皿である。器形は大きく３群に分けられ、口縁部が内湾気味に立ち上がる963～965、短く鈍い966、中位が最も肥厚し、端部に僅かではあるが外端面を有する967がある。法量は口径8.5cm前後の一群（963・966）と10cm前後の一群（964・965・967）がある。胎土は赤色粒を含有する963～965と含まない966～968に大別できる。なお、底部の切り離し技法は963・965・968に回転糸切り痕を認める。器形と胎土等の相関関係は不明瞭である。969・970は土師質土器焙烙である。体部はボール状の形態とはいえず、幾分浅い形態を呈し、口縁端部は969は垂下気味に収め、970は上方へ小さく、下方へ強く肥厚する。内耳はいずれも遺存状況が悪く全容は不明であるが、比較的頑丈な構造となり、前者には明瞭な穿孔を認める。調整を970で確認すると、外面は体部上半には入念な指押さえ→縦刷毛調整、下半にはそれに後出する横方向の板ナデ調整→ナデ調整を施す。内面上半には顕著な横方向の板ナデ調整を認め、下半には板目を認めない板ナデ調整が後出する。法量は口径30cmと40cmの二法量が確認できる。いずれも在地における初現期の焙烙と理解でき、佐藤分類ＡＩ－１型式の基準となろう。

**Ⅶ区ＳＫｃ21**

**（Ｄ４区ＳＫ06・ＳＫ11Ｄ406**、第171・172図）

971・972・974は肥前系磁器である。971は白磁色絵碗である。色絵は消失するが、外面には桜花文と流水文を上絵付けする。17世紀後半。972は白磁小杯である。口縁部は端部のみ外反し、先細る。内外面の貫入は著しい。17世紀後半～18世紀前半。974は青磁皿である。口縁部は輪花を呈し、端部を水平に揃えるが、口銹ではない。見込みには片彫りと線彫りによる芭蕉文を認める（三股青磁窯産、中野1998）。973は内外面に鉄釉を施釉した施釉陶器碗である。975・976は肥前系陶器である。975は溝縁皿口縁端部片である。976は鉢と考えた。端部は玉縁状を呈し、口縁部内面には白泥による直線的な刷毛目文を認める。977～986は土師質土器小皿である。胎土・色調による分類後、器形・法量により細分できる。977～979は胎土中に雲母・赤色粒を少量ではあるが含有し、にぶい橙色系の色調を呈し、980～986は雲母・赤色粒を含まず（但し、982のみ赤色粒を含む）、浅黄橙色～灰白色系の色調となる。器形では前者は口縁部中位外面に横ナデ調整を加えることにより、端部にわずかではあるが外端面を作り出す。口径は９～10cmを測る。後者はさらに２群に細分できる。980～982は口縁部中位に横ナデ調整を加え、外端面を有し、口径10cm前後を測る。983は口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部を丸く収め、口径12cmを測る。底部のみであるが、胎土・色調から984～985は980～983の一群に帰属すると考えられる。なお、底部にはいずれも回転糸切り痕を認める。987は土師質土器焙烙である。口縁端部は明瞭に垂下させ、明瞭な端面を有する。988は土師質土器足釜である。脚部断面形状は方形を呈する。

989は軒丸瓦である。巴頭はやや不明瞭で、尾は極めて長く延び、径５cm強の圏線をなす。珠文数は12個に復元できる。

**柱穴**

**Ⅶ区ＳＰｃ323（Ｄ５区ＳＰ11**、第172図） 990は土師質土器小皿である。口縁部は分厚く、短い。底部には不明瞭ながら回転ヘラ切り痕→板状圧痕を認める。

**Ⅶ区ＳＰｃ329（Ｄ５区ＳＰ14**、第172図） 991は瀬戸・美濃系陶器溝縁皿であろう。

**Ⅶ区ＳＰｃ325（Ｄ５区ＳＰ17**、第172図） 992は見込みに胎土目積み痕跡を認める肥前系陶器碗である。畳付の摩耗は著しい。

**土坑**

**Ⅶ区ＳＫｃ23（Ｄ５区ＳＫ01**、第172図）

993・994は肥前系磁器碗である。993は腰部に張りを認めず、口縁部が直線気味に開き、外面に山水文を描く。口縁部内面縁文様には二重圏線を認める。995～1000は肥前系陶器である。995～997は碗である。995は

口縁部が直線的に立ち上がり、端部のみ小さく外反する。996は畳付から高台内に砂目痕を認める。釉はオリーブ黒色の色調を呈する濃い灰釉である。997は高台脇に比して、高台内の抉りが浅く、畳付には砂目痕を認める。釉は灰釉であるが、その色調は薄く、灰白色の色調を呈する。998～1000は溝縁皿である。胎土は998がにぶい橙色、999・1000が灰色系の色調を呈し、灰釉の色調も前者がにぶい赤褐色であるのに対し、後者は灰色系となる。998の見込みの釉は使用による消失ないし製作時のぬぐい取りにより、現状では認められない。1001は京・信楽系陶器碗とした。1011と器形・胎土・釉調が酷似する。1002～1006は土師質土器坏ないし小皿である。胎土・色調によって二群に分類できる。1002は胎土中に雲母・赤色粒を含有せず、灰白色系の色調を呈し、1003～1006は雲母・赤色粒を含み、にぶい橙色の色調である。1002は口縁部は直線的に開き、中位がわずかに肥厚し、端部は先細る。底部には回転糸切り→板状圧痕を認め、口縁端部内外面には煤が付着する。1003～1005は口縁部が直線的に外傾し、端部を上方へ強く摘み出し、明瞭な外端面を有する。さらに見込み周縁には回転ナデ調整による強い凹線を認める。口径10cm前後と8.5cm前後の二法量がある。底部はいずれも回転糸切りである。1006は口縁端部が肥厚し、上方へ強く引き出すことにより、外端面というよりは口縁帯に近い端部形状を呈する。1007は焼塩壷である。底部は剥落しているが、表面及び断面観察から、３ピース成形であることが窺える。内面のみ被熱痕を認める。

**Ⅶ区ＳＫｃ25（Ｄ５区ＳＫ02**、第172図）　1008は肥前系陶器碗であろう。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部を小さく摘み出す。1009は土師質土器小皿である。胎土中に赤色粒を含み、にぶい黄橙色の色調を呈する。口縁端部には痕跡的な外端面を有し、見込み周縁には強い凹線を認める。端部内外面には煤が付着する。

**Ⅶ区ＳＫｃ24（Ｄ５区ＳＫ03**、第172図）　1010は肥前系陶器溝縁皿である。にぶい黄橙色系の胎土で、浅黄色系の灰釉を施釉する。1011は京・信楽系陶器碗である。腰部の張りが強く、口縁部が直立する形態の筒形碗で、胎土は灰色の色調を呈し、その素地は粗く、内外面には緑色の釉の施釉を認める。1012は土師質土器坏である。口縁部と底部境が不明瞭で、口縁部はわずかに内湾気味に開く。胎土中に赤色粒・雲母を含まず、灰白色系の色調を呈する。底部切り離しは回転糸切り調整で、板状圧痕を認める。

## ８．Ⅷ区（Ｄ１～３区）

**整地層**（173～177図）

1013～1049は第77図９層ないし第78図８層、1050～1074は第77図９層ないし第78図８層の下端部分、1075～1079、1080～1087は中世包含層（第77図17層）直上からの出土遺物である。

**1.3～1.1m**　1013は瀬戸・美濃系磁器碗である。内外面には放射線状文を描く。1014～1016、1018～1028は肥前系磁器である。1014～1016は碗である。1014は口縁部が直立するように図化したが、傾きが異なる可能性も残る。外面には草花文を描く。1630～50年代。1015は広東碗である。二次焼成によるためか、器表面には黒色斑点、気泡を認める。1780～1820年代。1016は湯呑碗である。内外面縁文様に雷文、外面に丸文を描く。1820～1860年代。1018は白磁色絵碗である。ガラス焼継痕を認める。1019は鉢である。18世紀前半～中葉。1020は紅猪口である。外面には印判による丸文を認める。1690年代～18世紀前半。1021は小杯である。外面には蘭を描く。胎土は陶器質で、釉・染付の発色もやや悪い。1630～40年代。1022は猪口である。明瞭な高台を有し、口縁部は直線的に開く。18世紀後半。1023～1026は皿である。1023は小皿で、見込みに菊花文、草花文、口縁部外面に唐草文を認める。18世紀後半。1024は口径に比して高台径が小さく、口縁部は端部付近で短く直立し、さらに端部で小さく外反する。見込みには牡丹、雲文、口縁部内面には蝶を描く。なお、見込みに焼成時の溶着物を認める「傷モノ」である。1630～40年代。1025は青磁皿である。見込みには片彫り、線彫りによる芭蕉文を認める。波佐見窯産。1630～40年代。1026は型打成形の菊花皿である。高台は蛇の目凹形高台（高）である。19世紀初～幕末。1027・1028は蓋である。1027はかえり部を有し、その内側にはアルミナ砂の塗布を認める。1820～60年代。1028は碗蓋である。18世紀後半。1017は関西系磁器碗である。高台は細長く、八字形に開く。外面には細かい線描きにより草花文を描く。1820年代～幕末。1029・1030は軟質系施釉陶器土瓶である。橙色の胎土が選択され、外面上半には同じ色調を呈する釉を施釉する。肩部外面には飛鉋による施文を認める。1031は施釉陶器鉢である。京・信楽系陶器の範疇になろうが、胎土・釉調から富田焼（吉金窯産）の可能性を考慮しておきたい。1032・1033は京・信楽系陶器であろう。1032は小碗とした。外面には銹絵による草花文を認める。1033は火入れとしたが、内底部にも施釉を認める。1034は施釉陶器甕である。口縁部は短く直立し、端部を外側に折り返して端部を肥厚させる。内外面には鉄釉の施釉を認める。1035～1039は備前摺鉢である。1035・1036は板状の口縁部を呈し、乗岡編年近世１ｂ期の所産となる。1037は顎の張り出しが強く、断面形状は三角形を呈する。

スリメ間隔は広く、上端部間で3㎝前後を測る。乗岡編年近世2ａ期の所産となろう。1038は片口部であるため断面形状は変形するが、顎の突出は明瞭で、口縁部内面の段も不明瞭になる。スリメ間隔は狭く、0～0.8㎝前後である。乗岡編年近世3期まで下るであろう。1039は口径16㎝前後を測る小型品である。体部外面のナデ調整、スリメ端のナデ消しは行わないといった点から備前としたが、胎土がやや粗く、焼成も甘いという点に問題を残す。いわゆる“備前もどき”である。1040は肥前系陶器三島手の皿である。口径32㎝を測る尺皿で、内面には象眼による文様を認める。1041は京・信楽系陶器灯明皿である。見込みには足付きハマの目跡を認め、口縁端部内外面に煤が付着する。1042・1043は瓦質土器焙烙である。いずれも外型成形となり、口縁端部の特徴から1042は佐藤編年ＡⅡ－4系型式、1043はＡⅡ－2型式に該当する。1044は瓦質土器羽釜である。口縁部は内湾し、端部を丸く収める。1045は土師質土器火鉢である。脚部を有し、体部下半には窓を認める。外面には白泥を塗布し、器形、胎土、調整技法も588に酷似する。さながら一体化した上部構造となろう。1046は土師質土器浅鉢である。残存部位による限り、底部は平底を呈し、口縁部は直線的に外傾する。口縁部内面には煤痕が付着する。微細な雲母粒を一定量含む精良な胎土が選択される。1047は土師質土器甕ないし火鉢である。口縁部は直立し、端部内面に粘土帯を貼付し、内側に肥厚させる。1048は土師質土器火消壷の蓋である。

1049は軒込瓦である。輪郭線によって菊花文を表現する。

**1.1～1.0m**　1050～1055は肥前系磁器である。1050～1052は碗である。1050は高台高が高く、U字形の断面形状を呈する碗である。外面には樹木・草文を描く。1690～1730年代。1051は18世紀前半～中葉に位置付けられる。1052は外面に二重網目文、内面に一重網目文を認め、1700～1750年代の所産となる。1053・1054は皿である。前者は内面文様に墨弾きを認める。1054は口縁部内面に草花文、外面に唐草文を描くが、見込み中央には文様は存在しない。高台内には「太○年○」の款銘がある。いずれも1690年代～18世紀初頭。1055は瓶である。透明釉は水色の釉調を呈し、肩部には粗い筆致で渦巻文、草花文を描く。1630～40年代。1056～1058は肥前系陶器である。1056・1057は皿である。いずれもにぶい黄橙色系の胎土に灰白色の灰釉を施釉し、同一個体の可能性も残る。1058は二彩手の鉢である。内面には白泥による直線的な刷毛目→灰釉施釉→緑色釉の点掛けを認める。1059・1060は瀬戸・美濃系陶器碗である。1059は丸碗である。内面及び外面上半には鉄釉を施釉し、見込みには目跡を3箇所認める。高台内には「み○」の墨書書きがある。1060は天目碗である。口縁部は短く直立した後、端部のみ小さく外反する。1061は瀬戸・美濃系磁器型打皿である。高台は蛇の目高台状を呈するが、外縁のみ突出し、変形蛇の目凹形高台となる。端部は口銹で、見込みには山水文、草花文を認める。19世紀後半。1062は備前瓶肩部である。外面には黄ゴマが顕著に降灰し、記号化したヘラ彫り文を認める。1063・1064は備前摺鉢である。口縁部は断面三角形状を呈し、内面の段は消失する。スリメは1単位13条を数え、スリメ間隔は上端で1～1.5㎝を測る。体部外面中位に重ね積み痕跡と色調の差異を認める。乗岡編年近世3ａ期の所産であろう。1064は顎に張りをわずかに認めるが、口縁部は板状を呈し、内面にかすかな段を認める。スリメ間隔は上端部で0.7㎝を測る。乗岡編年近世2ａ期の所産か。1065は土師質土器坏である。口径13.6㎝を測り、不明瞭な底部境から口縁部は内湾気味に開く。底部切り離しは回転糸切りである。雲母・赤色粒を含まない灰白色系の色調を呈する胎土である。1066は京・信楽系陶器灯明皿である。口縁部内面には煤痕跡、外面には煤が付着する。1067・1068は土師質土器摺鉢である。口縁部は内湾気味に開き、端部を「く」字形に内側に折り返し、口縁帯を作り出す。スリメは3ないし4条を一単位とする。1069は土師質土器浅鉢である。1070・1071は瓦質土器焙烙である。いずれも型成形により、外面は未調整、剥離材(離れ砂)が付着する。後者の口縁部内面には一重枠内に「勇」の可能性が高い刻印を認める。1072は焼塩壷である。口縁部は印籠合わせとなり、その突出は極めて高い。体部は板作り→ナデ調整であり、一重枠「御壷塩師堺湊伊織」の刻印を認める。底部は剥落するが、断面観察から3ピースによる成形であることが窺える。胎土中にはごく少量ではあるが、チャートを含有する。1073・1074は瓦質土器火鉢である。1073は方形の平面形を呈し、口縁部は直線的に外傾し、端部を内方へ肥厚させる。外面には丁寧な板ナデ調整→ヘラミガキ、内面には粗い縦方向の板ナデ調整→ナデ調整をそれぞれ施す。両側辺がなす隅角には幅8㎜前後の面取りを認め、脚は未確認で、少なくとも隅角には存在しない。1074は器形は1073に共通するが、小型で、隅角に脚を有する。

**1.1～0.9m**　1075は肥前系磁器皿である。1024と同器形、同文様である。見込みには牡丹文、口縁部内面には蝶を描く。1630～40年代。1076は肥前系陶器刷毛目碗である。口縁部は緩やかに外反する。内外面には白泥による波状刷毛目文を認める。胎土は灰褐色の赤黒い色調を呈する。1077は瀬戸・美濃系陶器ひだ皿である。口縁端部は波状を呈し、煤がわずかに付着する。畳付には胎土目ないしその痕跡を4箇所認める。1078は中国産白磁皿である。底径は小さく口縁部は端部付近で小さく直立する。見込み周縁に段を有するが、片

彫りによる文様は確認できない。横田・森田分類白磁皿Ⅵ類に該当するか(横田・森田1978)。1079は土師質土器坏である。口縁部は直線的に開き、端部を小さく直立させる。底部の摩滅は著しいが、その調整は回転糸切り→板状圧痕と考えられる。なお、口縁部内外面には連続して煤痕が付着する。

**1.1m以下**　1080～1082は肥前系磁器である。1080・1081は碗である。1080は直線的に開いた後、端部手前でわずかに直立する。外面には草花文を描き、さらに口縁端部及び体部下端にそれぞれ2条の陰刻沈線を認める。17世紀前半？。1081は腰部の張りが少なく、丸みをもって立ち上がる口縁部で、見込みは明瞭に窪む。高台高が高く、その断面形状は方形ないし逆台形を呈する。1082は青磁火入れないし香炉である。口縁部は直線的に外傾し、端部を内側に折り曲げ、上端部に水平面を作り出す。外面には2条1対の突帯を上下2段削り出す。1083は軟質系施釉陶器碗である。高台高は1cm以上と細長く、断面形状は方形を呈する。口縁部外面下半は回転ヘラケズリ、上半には回転ナデ調整を認める。畳付を含め、全面に鉄釉を施釉する。1084は肥前系陶器皿である。口縁部は大きく開き、見込み周縁には段を有する。高台内の削り込みは極めて浅いが兜巾をなし、畳付には回転糸切り痕を認める。見込みには鉄絵によって草花文を描く。窯詰めは砂目積みで、見込みには3箇所の砂目痕跡を認める。1085は信楽焼鉢と考えた。口縁部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部を四角く収める。底面には粗いヘラ切り痕、口縁部下半には回転ヘラケズリ、上半及び口縁部内面には回転ナデ調整をそれぞれ認める。1086は土師質土器鍋である。口径は30cm弱に復元できるが、器高は10cm以下と浅い。口縁部は内湾し、端部手前でさらに内側へ屈曲させ、その外面境に縁帯状の段を作り出す。さらに縁帯上下を繋ぐように孔径7mmの孔を7cm間隔で穿つ。佐藤分類土師質土器鍋C形式。当遺跡では1576と合わせ、2点のみの出土である。

1087は軒丸瓦である。珠文数が極めて多く、復元では20個前後を数える。巴頭は比較的明瞭で、尾は長く延びるが、圏線をなさない。一部、珠文との間隔が極めて狭くなる箇所も認める。瓦当面には剥離材に用いられた離れ砂が付着する。

### 石垣関連

**Ⅷ区ＳＺｃ01関連**(第178～187図)

1088～1098は**護岸構築以前の堆積層**(第79図Ｄ－Ｄ'２層)出土遺物である。

1088は中国産白磁碗である。口縁端部を外方に小さく引き出し、水平面を有する。横田・森田分類白磁碗Ⅴ類。1089は肥前系陶器筒茶碗の可能性が高く、17世紀代に位置付けられる。1090・1091は土師質土器小皿である。1090は口縁端部に明瞭な端面を有し、1091は口縁部長が短く、底部は回転ヘラ切り調整である。1092は土師質土器甕である。1093は土師質土器鍋(外耳付き)であろう。口縁部の折り返しは強く、外面に強い指押さえ、口縁端部に横ナデ調整を加え、鍔部は小さく突出する。1094は口縁部が短く直立する形態を呈する土師質土器羽釜である。1093・1094は胎土中に多量の雲母を含有する。1095は土師質土器摺鉢である。口縁部はわずかに内湾し、断面観察では端部に粘土紐を貼付し、内側に屈曲する口縁端部を形成する。1096は下端に面を認め、五徳の可能性を考慮したが、当該部分は削り取った感が否めず、土師質土器移動式竈の窓と判断した。表面は瓦質化する。1097は須恵器高坏である。口縁端部は丸みを有し、口縁部と体部との境に明瞭な沈線を有する。1098は須恵器瑤である。頸部と口縁部境に突帯を巡らし、文様帯を創出し、細かいピッチの波状文を施す。1097・1098はいずれも表面に顕著な摩耗が認められる。

以上、ＳＺｃ01構築以前の堆積層出土遺物のうち、最も新しい様相を示す遺物は17世紀代に位置付けられる1089の肥前系陶器筒茶碗である。しかし、後述するＤ区護岸築造時期を示す層位からの出土遺物は16世紀第4四半期に位置付けられ、混入と考えておきたい。

1099～1103は**Ⅷ区ＳＺｃ01裏込め礫中**からの出土遺物である。第79図Ｄ－Ｄ'間6層出土遺物である。

1099は景徳鎮窯系白磁皿である。口縁部は大きく外反する。16世紀後半～17世紀初頭。1100は瀬戸・美濃系陶器天目碗である。器高は低く、全体に厚手である。口縁部はわずかに外反し、体部下半に錆釉を認める。大窯3期前半(第5小期)の所産であろう。1101は土師質土器坏である、椀の可能性も残る。下層遺構からの混入であろう。1102は土師質土器鍋(外耳付き)である。口縁部は内側へ強く折り返し、鍔部は口縁部と一体化する。外耳は鍔部から連続し、斜め上方に延びる。胎土中には多量の雲母を含む。1103は凹石である。ほぼ全面に研磨痕を認めるが、凹部のそれは著しい。

以上、裏込め礫中出土遺物は1100が16世紀中葉に位置付けられる。

1104～1107は**護岸構築に伴う整地層**(第79図Ｄ－Ｄ'４・７層)出土遺物である。

1104は中国産磁器皿(景徳鎮窯系)である。青味の強い釉調を呈し、外面には牡丹文、見込みには草花文を認める。16世紀後半。1105は肥前系陶器溝縁皿である。1620～1630年代。1106・1107は備前摺鉢である。1106は板作りを留める口縁部形態を呈し、内面には突線状の稜を有する。乗岡編年近世1ｂ期に位置付けられよう。1107はスリメ間隔がなく、ほぼ全面にスリメを認める。乗岡編年近世2ｂ期以降の所産である。

以上、Ｄ１区護岸に伴う整地層出土遺物のなかで、最も新しい様相を示す遺物として、1105の肥前系陶器溝縁皿と1107の備前摺鉢が挙げられ、前者は1620～30年代に位置付けられる。後者は混入の可能性を考慮する必要がある。さらに、1105・1107が出土した土層観察用の畦の土層を再検討すると、護岸構築に伴う整地層というよりは、Ｂ区護岸構築に伴う整地層最上層の可能性が高いと考えられ、ここでは除外して考えたい。中国産磁器(景徳鎮窯系)が16世紀後半、備前摺鉢が16世紀第４四半期に位置付けられ、護岸構築時期も護岸前面堆積土最下層(黒灰色粘質土)出土遺物の対比から、16世紀第４四半期に位置付けたい。

1108～1138・1270は**黒灰色粘質土(最下層**、第79図Ｄ－Ｄ’24層)出土遺物である。ＳＺｃ01機能時に堆積した層位と考えられる。

1108・1109は中国産磁器皿(景徳鎮窯系)である。1109は白磁である。畳付は無釉で、内面に粗い砂が付着する。いずれも16世紀末～17世紀初頭に位置付けられる。1110・1111は中国産磁器(漳州窯系)である。1110は皿で、見込みに人物像を認める。高台は畳付が尖り、無釉である。16世紀末～17世紀初頭。1111は白磁碗である。黄色味を帯びた釉調を呈する。16世紀後半～17世紀初頭。1112は朝鮮王朝白磁茶器である。内外面ともに貫入が激しく、ピンホールには茶褐色を呈する上絵を認める(傷隠しか)。16世紀末～17世紀初頭。1113は白磁碗である。端部は先細り、口禿となる。産地不明。1114・1115は肥前系陶器皿である。いずれも内湾して立ち上がる形態を呈し、にぶい褐色系の胎土にオリーブ色系の濃い釉を施釉する。1116～1118は瀬戸・美濃系陶器である。1116は天目碗である。口縁部は端部手前で短く直立し、端部のみ小さく外反する。1117は内禿皿である。口縁部は外反するが、折縁皿にはならない。高台内には輪ドチ痕を認める。大窯３期。1118は灰釉丸皿である。口縁部はわずかに外反する。1119～1123は土師質土器小皿である。口縁部が長く、大きく開く形態を呈する1119～1121と器高が高く、坏とも呼称可能な1123がある。前者の底部調整は静止糸切りである(1119・1120)。いずれも口縁端部に煤痕を認め、灯明皿としての使用が窺える。1124は土師質土器鍋である。体部はボール状を呈し、口縁部は大きく開く。内耳の一部が遺存し、径が大きく、明瞭に貫通した孔を認める。亀山系鍋に近い形態を呈するが、器壁厚が全体に厚手であり、口縁端部を上方にかすかに摘み上げる形態、外面に刷毛調整が認められない点から亀山系鍋を模倣した在地産土師質土器鍋と考えたい。1125は瓦質土器亀山系鍋である。ボール状の体部から口縁部は強く屈曲し、端部は上下に肥厚する。内耳は内側へ強く突出し、径１cmを測る穿孔を認める。体部内面には明瞭な横刷毛調整、外面には縦刷毛調整を施す。1126は土師質土器深鉢口縁部であろう。外耳付き鍋の可能性も考慮したが、口縁端部がやや間延びしており深鉢と判断した。1127は土師質土器把手付き鍋である。口縁部は内側へ強く折り返し、鍔部は口縁部と一体化する。1128は土師質土器羽釜である。口縁部は短く直立し、端部内側に面を有する。1261で器形を窺うことができる。1126～1128の胎土中には多量の雲母を含む。1130は土師質土器足鍋脚部である。体部も一部残存し、内面には顕著な刷毛調整を施す。脚部は断面四角形を呈する。1129は土師質土器摺鉢である。底径11.6cmを測る。1131は有溝穿孔土錘である。1132・1133は備前摺鉢である。積極的に同一個体であると判断できる材料に乏しく、内外面及び断面の色調が近似する程度である。1132は片口を有し、端部は横ナデ調整により先細り、内面にかすかな段を認める。なお、残存部位にスリメは認められない。1133は底部片である。放射状スリメに加え、斜めないし横方向にもスリメを付加する。乗岡編年近世１ｂ期の所産であろう。1134は備前甕ないし壷底部片である。1135・1136は備前(小)壷片である。1137・1138は備前注口付き鉢である。口縁部が強く内湾する形態(1137)と体部から緩やかに開き、口縁部に連続する形態(1138)を認める。いずれも口縁部外面に重ね積みによる痕跡ないし色調の変化を認める。時期差、形態のバリエーションのいずれに起因するかは不明であるが、1138には後出的な要素であろう塗土を口縁部外面に認める。

1270は軒平瓦である。幾何学的な中心飾りを有し、唐草は４転する。二次焼成を被る。

以上、黒灰色粘質土出土遺物は、輸入磁器がおおむね16世紀後半～17世紀初頭、瀬戸・美濃系陶器が16世紀後半、備前摺鉢が16世紀第４四半期の所産であり、出土遺物からの最終埋没時期は16世紀第４四半期に位置付けられ、16世紀末の埋没が想定できよう。その年代観は肥前系陶器が全く確認できない点とも呼応する。

1139～1163は**暗青灰色砂質土**から出土した遺物である。第79図Ｄ－Ｄ’20～22層出土となる。

1139～1144は中国産磁器(景徳鎮窯系)である。1139は小杯である。外面には唐子を認める。16世紀末～17世紀初頭。1140・1142～1144は皿である。1142は高台内を中心に茶褐色を呈する粗い砂の付着を認め、高台内に顕著な鉋痕が残る。見込みの文様モチーフは不明である。16世紀末～17世紀初頭。1143は端反の口縁部形態を呈し、出土層位は異なるが、1179と同一個体ないし同一器種である。口縁部端部内面には渦巻文、見込みには如意雲文を認め、口縁部外面には青海文を透彫りする(陰刻沈線)。畳付は無釉で、高台内には鉋痕跡を放射状に認める。1144は圏線は一切なく、見込みに不明文様を描く。畳付は無釉である。1143・1144は16世紀中葉～後半の製作年代が与えられる。1141は碗

である。16世紀第４四半期～17世紀初頭。1145は中国産(福建・漳州窯系)白磁端反碗である。釉調は淡黄色を呈し、見込みに段を有する。1111に酷似する。16世紀後半～17世紀初頭。1146は朝鮮王朝白磁皿である。1147～1150は瀬戸・美濃系陶器である。1147・1148は天目碗である。前者の口縁部は直立し、端部のみ小さく外反する。体部外面下半に錆釉を認める。大窯３期(第６小期)の所産であろう。1148の外面下半には錆釉は確認できず、大窯４期になろう。1149・1150は内禿皿である。1149は口縁部が内湾し、全体に厚手であるが、1150は薄作りである。釉調は前者が淡黄色系を呈するのに対し、後者は緑灰色である。いずれも高台内には輪ドチ痕を認める。大窯３期に位置付けられ、1150は第６小期の所産になろう。1151・1152は肥前系陶器である。1151は碗、1152は皿である。いずれもにぶい赤褐色系の色調を呈する胎土に、オリーブ灰色の濃い釉を施釉する。1153・1154は土師質土器小皿である。1153は口縁部が長く、大きく開き、口縁部内外面に煤痕の付着が認められる。1154は口縁端部が「て」の字状に屈曲する形態を呈する。底部調整は回転ヘラ切り(R)である。京都系土師器小皿の口縁部を模倣した在地産の土師質土器と考えられる。下層遺構からの混入遺物。1155は瓦質土器鍋である。ボール状の深い体部から口縁部は強く屈曲し、内面体部境に鋭い稜を認める。端部は丸みを有する。内外面ともに丁寧な板ナデ調整を施し、体部外面下半にのみ粗い縦方向の板ナデ調整ないし平行叩き調整を認める。亀山系鍋を模倣した在地産と考えられる。また、口縁部内面に付着する煤痕がほぼ円形に認められ、蓋の存在を想定することができる。さらに蓋の痕跡には、幅４㎝を測る突出した部分があり、把手付きである可能性が高い。後述する1269が示すように、二孔一対の穿孔を認める内耳を有する器形となる。1156は土師質土器摺鉢である。口縁部は「く」の字状に内湾し、幅６㎝前後を測る片口部を認める。1162は瓦質土器風炉脚部片である。丁寧に面取りした脚部を有し、体部には雷文、蓮弁文を認める。内面は瓦質化する。1163は飯蛸壷である。1157・1158は備前摺鉢である。1157は口縁部内面に明瞭な段を認め、顎は小さく張り出す。口縁帯凹線は１条ないし２条である。乗岡編年近世１ｂ期の所産である。1158は口縁部断面が三角形を呈し、矮小化が著しい。口縁帯凹線は２条である。乗岡編年近世２ａ期に位置付けられる。1159は備前注口付き鉢である。口縁部が強く内湾する形態を呈し、注口を有する。体部中位には重ね積み痕跡を認める。1160は備前筒物である。1161は焼締陶器大甕である。口縁部は大きく外反し、端部には沈線を有する。外面及び断面は灰色を呈するが、内面は暗赤灰色を呈する。常滑焼の可能性が高く、そうであれば下層遺構からの混入となる。

以上、暗青灰色砂質土層から出土した遺物は、中国産磁器がおおむね16世紀後半～17世紀初頭、瀬戸・美濃系陶器が16世紀中葉～後半、肥前系陶器が16世紀末～17世紀初頭を示す。しかし、備前摺鉢は乗岡編年近世２ａ期に位置付けられ、1620～1650年の製作年代が与えられる。1158を除くと17世紀第１四半期に位置付けられるが、その存在を重視すると、暗青灰色砂質土の最終埋没時期は17世紀第２四半期となる。

1164～1177は**暗青灰色砂質土層と赤灰褐色砂層**から出土した遺物である(第79図Ｄ－Ｄ’11～19層)。

1164～1166は中国産磁器(景徳鎮窯系)である。1164は碗である。高台脇に比して、高台内の抉り込みは深い。見込みには折菊文を認める。15世紀中葉～後半。1165・1166は皿である。1166は白磁で、端反口縁となる。釉調は灰白色を呈する。16世紀後半～17世紀初頭。1167は朝鮮王朝白磁皿である。見込みには段(鏡)を有する。16世紀後半～17世紀初頭。1168～1170は瀬戸・美濃系陶器である。1168は天目碗である。口縁部は短く直立し、端部のみ小さく外反する。外面下半に錆釉はなく、大窯４期に位置付けられる。1169は折縁皿である。大窯３期(第６小期)に位置付けられる。1170は口縁部が波状を呈し、刻文(ソギ)を認める。定林寺東洞１号窯に類例を認め、大窯３期(第６小期)に位置付けられよう。1171は肥前系陶器皿である。見込みに砂目を認めるが、釉調(灰釉)が濃く、胎土目積み製品と併焼した可能性が高い。1600～1620年代。1172・1173は土師質土器小皿である。1172は口縁部が大きく開き、底部は小さく突出する。1173は底径が広く、口縁部は中位が最も肥厚する。底部調整は1172が静止糸切り、1173が回転糸切りである。1174は土師質土器坏である。口縁部は内湾気味に立ち上がり、底部に板状圧痕ないし静止糸切り調整を認める。1175は土師質土器甕である。全体的に厚手で、口縁部は短く開く。1176は瓦質焼成の亀山系鍋である。ボール状の体部から口縁部は大きく開き、端部は上下に肥厚する。体部内面には顕著な刷毛調整、外面上半は指押さえ、下半は縦方向の板ナデ調整を認める。内耳の一部が遺存し、径８㎜前後の明瞭に貫通する穿孔を認める。1177は土師質土器深鉢(火鉢)と考えられる。棒状の脚部を有する。1178は土師質土器羽釜である。口縁部は「く」字形に屈曲し、端部を上方へ摘み上げる。胎土は比較的精良で、淡黄色の色調を呈する。大和Ⅰ$_2$型、Ⅲ－１型式と考えられる搬入品である(川口1990)。

以上、暗青灰色砂質土と赤灰褐色砂層が混在した層位からの出土遺物は、中国産磁器が15世紀中葉～17世紀初頭、瀬戸・美濃系陶器が16世紀中葉～17世紀初頭、肥前系陶器が1600～1620年代の製作年代が与えられ、出土遺物による限りは、17世紀第１四半期に位置付けられる。

1179～1213・1271～1274は**赤灰褐色砂層**からの出土遺

物である(第79図D－D’ 8～10層)。

1179・1180は中国産磁器(景徳鎮窯系)皿である。1179は1143と同一個体ないし同一器種である。口縁端部内面には渦巻文を描き、口縁部外面には青海文を透彫りする。16世紀中葉～後半。1180は白磁である。1181は中国産白磁端反碗である可能性が高い。中国産であれば、明末(16世紀中葉)に位置付けられる。1182・1183は中国産磁器(漳州窯系)である。釉を厚く施し、露胎の色調はにぶい黄橙色を呈する。1182は碗である。外面には花卉文を認める。1183は皿である。見込みの圏線は完周せず、渦巻き状を呈する。いずれも16世紀末～17世紀初頭。1184は朝鮮王朝白磁皿である。高台は安定し、畳付ないし見込みに9箇所の砂目に復元可能な砂目を認める。1185・1186は肥前系陶器である。1185は皿である。口縁部は二段階に開き、端部を四角く収める。釉は灰白色の色調を呈する灰釉である。17世紀末に位置付けられ、18世紀まで下る可能性も残す。1186は片口鉢である。口縁端部は玉縁状を呈し、片口部を有する。内面及び外面上半には釉調が極めて濃い鉄釉を施す。1590～1630年代。1187～1197は瀬戸・美濃系陶器である。1187～1191は天目碗である。1187・1188は外面下半に錆釉を認め、1187は体部から緩やかに口縁部に連続し、端部のみ小さく外反する。大窯3期の所産である。1189は体部下半の錆釉を認めず、口縁部は短く直立した後、小さく外反する。下半は遺存しないが、1190は1189に口縁部形態が酷似しており、ともに大窯4期に位置付けられよう。1191は口縁部が短く内傾し、端部のみ強く外反する。錆釉の有無は不明であるが、大窯4期の所産であろう。1192～1197は皿である。1192は灰釉丸皿である。口縁部は内湾し、高台内に輪ドチ痕を認める。1193は内禿皿である。高台の抉りは極めて浅く、削り出し高台である。大窯3期に位置付けられる。1194～1197は折縁皿である。1194・1195は刻文(ソギ)を認める。大窯4期(第7小期)。1196は刻文(ソギ)を有し、見込みに菊花を押印する。大窯3期(第6小期)に位置付けられる。1197には刻文は認められない。高台は削り出し高台であるが、矮小化が著しい。見込み及び高台内に輪ドチ痕を認め、高台内にはその一部が熔着する。大窯4期(第7小期)に位置付けられよう。1198は磁器であろう。外面にのみ明緑灰色の色調を呈する釉を施釉する。器種・器形ともに不明。1199は関西系磁器染付皿である。内面に指押さえ痕、外面に貝状の型痕ないしシワを認め、型押成形であることが窺える。外面は無釉、内面には染付→透明釉を施す。1820～1860年代。1200～1202は備前摺鉢である。1200は口縁端部内面に稜を認め、口縁帯の凹線は3条である。顎の張りは小さく、丸みを認める。乗岡編年近世1b期の所産である。1201は口縁端部を摘み上げ、内面に段とも表現可能な稜を有する。口縁帯には2条の凹線が施され、顎は断面三角形状に小さく張り出す。乗岡編年近世1b期の所産であろう。1202は底体部片である。放射線状に施すスリメに後出し、斜め方向のスリメも付加される。1203は備前瓶である。平底、筒形を呈し、底面にヘラ記号が記される。1204は備前注口付き鉢である。注口の一部が遺存する。体部に穿孔した後、粘土板により注口部を形成する。底面にはヘラ記号を施す。1205は備前瓶口縁部である。口縁端部は肥厚し、玉縁状を呈する。鷺口。1206は備前系陶器瓶底部片である。高台は碁笥底状を呈し、高台内の削り込みは極めて浅い。1207は土師質土器小皿である。口縁部は長く、大きく開き、底部は小さく突出する。底部調整は不明であるが、静止糸切り調整である可能性が高い。1208・1209は土師質土器坏である。1209は口縁部が直線的に開き、口径に比して器高が高い器形を呈する。底部に静止糸切り痕を認める。1210は土師質土器小皿であるが、瀬戸・美濃系陶器内禿皿の器形に酷似する。底部には回転ヘラ切り→板状圧痕を認める。1211は土師質土器足釜である。口縁部の矮小化が著しく、小さな鍔部を認める。佐藤分類足釜BⅣ型式に該当する。1212は内外面ともに瓦質化する亀山系鍋である。体部はボール状を呈し、口縁端部は上下に肥厚し、断面三角形を呈する。内耳の一部を認める。1213は土師質土器火鉢である。口縁部は内湾し、端部を内方へ摘み出し、水平面を有する。

1271・1272は軒丸瓦である。1271は巴頭と尾の境が不明瞭で、尾は太く、短く巻き込む。珠文径は小さく、復元では12個を数える。1272は比較的明瞭な巴頭から尾は細長く延び、径6㎝強の円形を指向する。珠文径は小さく、その数は17個と多い。1273・1274は軒平瓦である。中心飾りは不明であるが、唐草は細長く、流線状に延びる。いずれも二次焼成を被る。

以上、赤灰褐色砂層出土遺物は、輸入磁器が16世紀中葉～17世紀初頭、肥前系陶器16世紀末～17世紀末、瀬戸・美濃系陶器が16世紀中葉～17世紀初頭、備前摺鉢が16世紀第4四半期の製作年代が想定でき、17世紀第1四半期の最終埋没を想定したい。その際、1185の肥前系陶器皿と1199の関西系磁器染付皿は混入と理解する。

1215～1237・1275は**暗青灰色砂質土、暗青灰色砂質土と赤灰褐色砂層、赤灰褐色砂層**から出土した遺物である。B区護岸構築に伴う整地層と考えられる。第79図D－D’ 8～22層出土遺物である。

1215・1216は中国産磁器(景徳鎮窯系)である。1215は碗である。外面には柘榴を認める。1216は小坏で、外面には小鳥を描く。いずれも16世紀末～17世紀初頭。1217・1218は肥前系陶器である。1217は碗である。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は小さく直立し、丸みを有する。底部は残存しないが、胎土目積み段階の所産である可能性が高い。1218は皿である。見込み

に砂目を認め、高台は削り出し高台である。釉調が濃く、17世紀前半に位置付けられよう。1219～1224は瀬戸・美濃系陶器である。1219・1220は天目碗である。口縁部はわずかに直立し、端部のみ小さく外反する。前者の体部外面下半には錆釉を認めるが、1220は施釉されない。それぞれ大窯３期(第６小期)、大窯４期(第７小期)の所産と考えたいが、1219は４期まで下る可能性も残る。1221は内外面に鉄釉を施釉した皿である。大窯３期の所産である。1222・1223は内禿皿である。底部は碁笥底状を呈し、高台内の削り込みは極めて浅い。1222は見込み段内側の釉を剥ぎ、高台内も含めて施釉するが、1223は見込み段の内側だけでなく、外側高台脇以下も無釉である。前者は大窯第６及び７小期、後者は大窯４期(第７小期)の所産と考えられる。1224は皿底部細片である。高台は削り出し高台である。1225は軟質系施釉陶器筒形碗である。外面は白化粧土を塗布した後、緑灰色の釉調を呈する下絵を描き、透明釉を施す。一方、内面には虹色の光沢を放つ釉を認める。楽焼の可能性が高い。1226・1227は備前摺鉢である。1226は口縁端部に強いヨコナデ調整を加え、内面に稜を残す。顎は断面三角形を呈するが、その張りは強くない。乗岡編年近世１ｂ期の所産であろう。1227は底体部片である。放射状スリメに加え、斜めないし横方向のスリメを施す。見込みのスリメはウールマーク状に復元できる。1228～1232は土師質土器小皿である。1228の底部には回転糸切り痕を認める。1229～1231は底径が小さく、口縁部は大きく開き、底部は小さく突出する。1232は底径が広く、口縁部長はやや短い。底部調整はいずれも静止糸切りである。1229・1232の口縁端部に煤痕を認め、灯明具として用いられたと考えられるが、1230の底部中央には径５㎜を測る孔が穿孔され、用途が異なる。1233は土師質土器鍋である。鍔部は口縁部と一体化するが、小さく突出する。1234は土師質土器摺鉢である。1235は土師質土器火鉢であろう。口縁部は内湾し、端部に粘土紐ないし粘土帯を追加し、内方へ強く屈曲させて貼付する。同様の貼付法は1095(土師質土器摺鉢)にも認められる。1236は有溝穿孔土錘である。1237は犬形土製品である。型成形は行われていない。

1275は軒丸瓦である。巴頭は大きく、尾は細長く延びる。瓦当面には離れ砂の付着を認める。

以上、Ⅱ期護岸に伴う整地層出土遺物は、輸入磁器が16世紀末～17世紀初頭、肥前系陶器が16世紀末～17世紀前半、瀬戸・美濃系陶器が16世紀中葉～17世紀初頭、備前摺鉢が16世紀第４四半期の製作年代が想定できる。1218にやや新しい様相を認めるが、おおむね17世紀第１四半期の埋没が想定できる。

1238～1246は**護岸前面堆積土下層**出土遺物である。下層は第79図Ｄ－Ｄ’24層にほぼ対応する。

1238は中国産磁器染付皿(景徳鎮窯系)である。口縁部は端反り、外面には花卉文を認める。16世紀前半～中葉。1239は朝鮮王朝白磁皿である。見込みには段(鏡)を有する。16世紀。1240～1243は土師質土器小皿である。1240は底径3.4㎝を測り、突出した底部形態となる。1241は全体に摩耗が著しく、底体部境は丸みを有し、不明瞭である。いずれも底部調整は静止糸切りである。1242・1243は底径に比して口径が大きく開き、底部は小さく突出する。底部調整は静止糸切りである。1243の内面には点状に煤痕を認め、鉄片が付着する。鉄片は軸の痕跡と考えられる。1244は土師質土器摺鉢である。1245は瓦質土器火鉢であろう。口縁端部は断面三角形を呈し、形骸化した鍔部を有する。1246は有溝土錘である。拳大より小さく、溝は完周しない。

以上、下層出土土器は輸入磁器が16世紀前半～中葉に位置付けられるが、年代を想定できる資料に乏しい。

1247～1250は**護岸前面堆積土上層(赤灰褐色砂層)**出土遺物である。上層は赤灰褐色砂層にほぼ対応する。第79図Ｄ－Ｄ’８～10層出土となる。1247は白磁碗である。口縁端部は外反し、水平面を有する。内面には櫛状工具により花文を施す。横田・森田分類Ｖ－４ｂ類。1248は龍泉窯系青磁碗である。体部外面に鎬のない蓮弁文様を配する。横田・森田分類Ⅰ－５ａ類。1249は中国産磁器染付皿(景徳鎮窯系)である。1250は瓦質土器甕底部である。内外面には二次焼成痕跡を認める。

1251は**護岸前面堆積土、標高0.7～0.4ｍ掘り下げ中**に出土した遺物である。瀬戸・美濃系陶器溝縁皿。内面には刻文(ソギ)を有する。大窯４期(第７小期)の所産である。

1252～1259・1276・1277は**護岸前面堆積土、標高1.0～0.65(0.6)ｍ掘り下げ中**に出土した遺物である。1252～1254は肥前系磁器である。1252は碗である。外面には印判による松文を押印する。18世紀前半。1253・1254は蓋である。1253は外面に青海文と兎、丸文を描き、端部外面にアルミナ砂の塗布を認める。18世紀後半～19世紀初頭。1254は外面に手描きによる蛸唐草文を描く。1780～1820年代。端部外面にアルミナ砂を塗布する。1255は中国産磁器染付碗(景徳鎮窯系)である。1256は朝鮮王朝白磁皿と考えられるが、北九州産の可能性も残る。朝鮮王朝産であれば、16世紀の製作年代が与えられる。1257は軟質系施釉陶器皿ないし鉢である。口縁部は型打成形により輪花を呈し、内面には稜、外面には鎬を認める。1258は備前瓶である。1259は土師質土器摺鉢である。口縁部は短く、「く」字形に内側へ屈曲する。片口の一部を認める。

1276は軒丸瓦である。巴頭は円形をなし、尾は径５㎝前後の円形を指向して巻き込む。珠文径が大きく、

12個を数える。筒部には2孔の釘穴を認める。混入遺物か。1277は軒平瓦である。中心飾りは扇文で、唐草は2転する。

1260は**護岸前面堆積土、標高1.0〜0.1m掘り下げ中**に出土した遺物である。瀬戸・美濃系陶器内禿皿である。削り出し高台で、高台内まで施釉する。見込み及び高台内には輪ドチ痕を認め、その熔着も一部みられる。大窯3期(第6小期)の所産である。

1261は**護岸前面堆積土、標高0.65m**から出土した遺物である。土師質土器羽釜である。口縁部は短く直立し、穿孔を有する2個1対の外耳を認める。

1262〜1269は**護岸前面堆積土**から出土した遺物であるが、層位不明である。参考までに提示する。1262は中国産磁器染付碗(景徳鎮窯系)である。17世紀初頭。1263・1264は中国産磁器染付皿(漳州窯系)である。16世紀後半〜17世紀初頭。1265は華南彩釉陶器である。型打成形により、外面は凹凸を認める。外面には鮮やかな水色の色調を呈する瑠璃釉(翡翠釉)を施す。1266は軟質系施釉陶器碗である。楽焼。1225と同一個体であろう。1267は瀬戸・美濃系陶器天目茶碗である。体部下半には錆釉を認める。大窯3期。1268は瀬戸・美濃系陶器志野(灰志野)丸皿である。大窯4期の所産である。1269は瓦質土器鍋である。1124・1155と同様に亀山系鍋を模倣した在地産土器である。重厚な内耳を有し、径1cm前後を測る2孔1対の穿孔を有する。胎土中には雲母微粒を多量に含有し、1124・1155に共通する。

1278〜1280は**護岸裏込め**に用いられた石製品である。

1278・1279は五輪塔である。1278は球体形を呈し、わずかに肩部の張りを認める。上面には窪みを認めるが、下面は水平である。材質は角礫凝灰岩であるが、含有する礫は1cm以下と小さい。1279は肩部に張りを認め、逆台形状を呈する。上面には径10cm弱の窪みがあり、下面は側面との境に明瞭な稜を有して凹む。材質は角礫凝灰岩であるが、含有する礫は粗く、粒径が4cmを越えるものも存在する。1280は石臼(上臼)である。横打込穴を認めるが、下辺は使用による摩耗で消失しつつある。材質は角礫凝灰岩である。含有礫の最大粒径は2cm前後を測り、1278・1279の両者とは異なる内容を示す。

1281は下駄である。歯が台部と同じ一木から取り出した連歯下駄となる。鼻緒孔の位置から左足用と考えられる。前歯に比して、後歯の摩耗は著しい。

**柱穴**(第188図)

**Ⅷ区ＳＰｃ348(ＳＡｃ06)(Ｄ１区ＳＰ11(ＳＡ01))**

1282は肥前系陶器皿である。畳付には砂目ないしその痕跡を3箇所認める。釉は灰釉で、「テラテラ」した釉肌を呈する。1590年代〜。

**Ⅷ区ＳＰｃ372(Ｄ１区ＳＰ14)** 1283は肥前系陶器溝縁皿である。見込み及び高台内には砂目(痕跡)を認める。内面のみ二次焼成を確認することができる。

**Ⅷ区ＳＰｃ367(Ｄ１区ＳＰ04)** 1284は土師質土器小皿である。口縁部は直線的に開き、中位が最も肥厚する。見込み周縁にはかすかに凹線を認める。端部には煤痕が付着し、灯明皿としての使用が窺える。

**Ⅷ区ＳＰｃ463(Ｄ２区1.1mＳＰ01)** 1285は瓦質焼成の焙烙である。体部は口縁部手前で短く直立し、口縁部は垂下気味に開く。

**Ⅷ区ＳＰｃ388(Ｄ２区1.1mＳＰ09)** 1286は肥前系陶器碗である。口縁部は直立し、端部のみ小さく外反する。胎土は灰白色を呈し、灰白色の灰釉を施釉する。呉器手碗になろう。

**Ⅷ区ＳＰｃ405(Ｄ２区1.1mＳＰ10)** 1287は肥前系陶器注口付き鉢である。口縁部は玉縁状を呈し、内外面には白泥による刷毛目を認める。遺存状況はよくないが、注口を有する。

**Ⅷ区ＳＰｃ392(Ｄ３区0.9mＳＰ29)** 1288は土師質土器小皿である。口径8.8cmを測り、口縁部はかすかに外反する。底部切り離しは回転ヘラ切りにより、板状圧痕を認める。中世前半に属する。

**Ⅷ区ＳＰｃ381(Ｄ２区1.1mＳＰ03)** 1289は土師質土器小皿である。口縁部は端部のみ小さく外反し、中位やや下半が最も肥厚する。

**Ⅷ区ＳＰｃ455(Ｄ２区1.1mＳＰ11)** 1290は瀬戸・美濃系磁器碗である。内面には透明釉、外面には緑釉を施釉し、上絵による草文を認める。明治・大正期。

**Ⅷ区ＳＰｃ430(Ｄ２区1.1mＳＰ14)** 1291は施釉陶器火入れである。口縁部は直線的に外傾し、端部には水平面を認める。外面及び口縁部内面には鉄釉を施釉する。

**Ⅷ区ＳＰｃ459(Ｄ２区1.1mＳＰ25)** 1292は肥前系陶器皿である。口縁部は直線的に開き、内面及び口縁部外面に灰釉を施釉し、端部には鉄釉の流し掛け？を認める。

**Ⅷ区ＳＰｃ471(Ｄ３区1.1mＳＰ06)** 1293は施釉陶器火入れであろう。1294は備前摺鉢である。口縁部は厚手になり、板作りとは言い難いが、内面には明瞭な段を認める。顎の張りは強く、口縁帯には2条の凹線を施す。乗岡編年近世2期の所産。

**溝状遺構**

**Ⅷ区ＳＤｃ13(Ｄ２区1.1mＳＤ02**、第188図)

1295は肥前系陶器皿である。口縁部は内湾気味に開き、内面及び口縁部外面には釉調の濃い灰釉を施釉する。胎土は緻密で、灰色系の色調を呈する。

**井戸**

**Ⅷ区ＳＥｃ02（Ｄ２区ＳＥ04、第188図）**

1296は土師質土器井戸枠である。口径は75.4cm前後を測る。外面口縁部下には文様帯を有し、縦方向の刷毛目を配する。口縁端部の上部には井戸枠接合時に用いたモルタルが付着する。

**Ⅷ区ＳＥｃ03（Ｄ２区ＳＥ03、第188図）**

1297は土師質土器井戸枠である。口縁部は三角形に肥厚し、外面口縁部下に文様帯を創出し、板状工具の小口を押し当てて斜格子文を描く。

**Ⅷ区ＳＥｃ04（Ｄ３区ＳＥ01、第188図）**

1298は軟質系施釉陶器土瓶蓋である。乳頭状の把手を有し、天井部に穿孔を認める。天井部内面には二重枠内「屋島」の刻印を押印し、「平」の墨書もある。

**Ⅷ区ＳＥｃ05（Ｄ２区0.9ｍＳＥ01、第188図）**

1299～1301は肥前系陶器碗である。いずれも赤味を帯びた灰色系の色調を呈する胎土で、オリーブ灰色系の濃い釉を施釉する。1299は内湾気味に立ち上がる口縁部形態となる。1300・1301はいずれも兜巾を有し、後者は見込みないし畳付に胎土目を認める。1302は備前大平皿である。口縁端部を「く」字形に屈曲させるが、破損する。口縁部外面には重ね積み痕跡を認める。1303は土師質土器把手付き鍋である。口縁部は強く内湾し、外面には短く突出する鍔部を認める。

1304は軒平瓦である。中心飾りは上向きの三葉文で、支枝を認める。唐草は３転以上。

**不明遺構**

**Ⅷ区ＳＸｃ17（Ｄ２区0.9ｍＳＸ06、第189図）**

1305は瀬戸・美濃系陶器丸皿である。見込み及び高台脇の釉は厚く施釉する。1306は土師質土器把手付き鍋である。口径23.3cmを測り、器高は10cm前後に復元できる。口縁部は内湾して立ち上がり、端部外面下に鍔部を有する。鍔部の突出はにぶく、不明瞭である。外耳は鍔部に連続し、外側から内側に穿孔するが、その使用痕は確認できない。胎土中には多量の雲母粒を含有する。外面鍔部下２cm前後から下半には顕著な被熱痕を認め、褐色に変色する。底部には体部の被熱痕跡とは異なる二次焼成痕跡を認め、赤紫色の色調を呈する。

**土坑**

**Ⅷ区ＳＫｃ26（Ｄ１区ＳＫ04、第189図）**

1307・1308は景徳鎮窯系磁器である。1307は白磁皿である。畳付は無釉。1308は青花皿である。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は尖る。見込みには青花を認める。1309は肥前系陶器皿である。灰色系の胎土に濃い緑色の灰釉を施釉する。1310は焼塩壷蓋である。内外面は二次焼成を受け、にぶい橙色に変色し、一部煤も付着する。1311は土師質土器小皿である。口縁部は直線的に開き、中位が最も肥厚する。底部には回転糸切り痕を認める。胎土中には赤色粒を含有し、にぶい橙色の色調を呈する。1312は瓦質焼成の亀山系鍋である。体部はボール状を呈し、口縁部は水平に開く。端部は上方へ摘み上げて小さく拡張する。

**Ⅷ区ＳＫｃ27（Ｄ２区1.1ｍＳＫ02、第189図）**

1313～1315は肥前系磁器である。1313は外面に二重網目文碗である。18世紀後半。1314はかえり部を有する蓋である。外面には菊花散らしを認め、地詰文に斜格子を施す。かえりにはアルミナ砂を塗布する。18世紀後半～1810年代。1315は蓋であろう。18世紀末～幕末。1316・1317は京・信楽系陶器である。1316は京・信楽系陶器小杉碗状の器形の小杯である。渦高台を呈し、高台には残存部位で２箇所の切り込みを認める（復元すると３箇所か）。高台脇には幅の狭い削りによる段を有する。外面には銹絵により植物文様を描き、白乳色の灰釉を施す。1317は瓶ないし甕であろう。底部は碁笥底を呈し、畳付は0.5cmと幅広い。外面には化粧土（白泥）塗布後、灰釉を施す。内底部には油滴状に白泥が落ち、さらに重ね積みによる高台痕跡を認める。1318は瓦質土器火鉢の可能性が高い。体部は直立し、下端部上1.5cmの位置に底部を認めるが、底部をなすのか、縁状に幅狭く配されたものかは判断できない。外面にはその単位が識別できないヘラミガキ調整によって、丁寧に研磨される。

**Ⅷ区ＳＫｃ28（Ｄ２区1.1ｍＳＫ04、第189図）**

1319は瀬戸・美濃系磁器端反碗である。口縁部内面縁文様及び外面に陰刻沈線を配し、薄ダミを施す。1320は肥前系青磁碗である。口縁部は内湾気味に開き、端部のみ小さく外反する。

**Ⅷ区ＳＫｃ29・30（Ｄ１区ＳＫ02・03、第189図）**

1321は肥前系陶器皿である。見込みに段を有し、口縁部は直線的に開く。口縁部内面には鉄絵による区画文？を認める。胎土は灰色系を呈し、釉は濃い緑色である。1322は土師質土器小皿である。底径が小さく、口縁部は大きく開く形状となろう。底部には静止糸切り痕を認める。

**不明遺構**

**Ⅷ区ＳＸｃ18（Ｄ１区ＳＸ03**、第189～191図）

1323は肥前系磁器碗である。1630～60年代。1324・1325は土師質土器皿である。口径13.5cm前後を測り、口縁部は内湾気味に開く。底部は回転糸切り痕を認める。胎土中に雲母の含有はなく、灰白色系の色調を呈する。1326は焼塩壷である。内面には布圧痕を認め、口縁部内面に強いナデ調整を施すことにより、端部断面形は三角形になる。内面のみ顕著な二次焼成を認める。1327～1331はちゅう木である。全長15cm前後を測り、板状の断面形状となる一群（1327・1328）と全長21cm前後を測り、割箸状を呈する一群（1329～1331）に大別できる。前者は1327が示すように先端部が肥厚するものを認めるが、個別の特徴なのか、一形式として認定できるかは不明である。後者は一端が先細り、基部と先端部として識別できる。

1332～1336は軒丸瓦である。1332・1333は比較的明瞭な巴頭から尾は細長く延び、圏線状をなす。1332は珠文径が小さく、1333はやや大きいが、いずれもその数は12個を数える。1334・1335は円形をなす巴頭から尾はやや長めに延び、径の大きい珠文が８ないし９個配置される。1336は珠文数が12個前後を数える。1337は軒平瓦である。中心飾りは扇文で、唐草は２転する。1338は鬼瓦である。幅３cmの段による外縁を有し、宝珠文が付く。背面の宝珠文裏には吊り手を認める。

**Ⅷ区ＳＸｃ50（Ｄ２区1.1ｍＳＸ02**、第191・193図）

1339は京・信楽系陶器碗である。高台は刳り高台である。見込み周縁にわずかな段を有し、外面には面取りを認める。1340は備前灯明皿である。口径８cm前後に復元でき、口縁部より低い仕切を有する。

1341は軒平瓦である。中心飾りは宝珠文で、脇に子葉を認める。1348は壁材に用いられた漆喰であろう。３方に面を有し、もう一面には棒状部材の圧痕を認める。

1362は大甕とした。口縁部は直立し、端部を三角形に肥厚させる。胎土中には角閃石を少量含む。1363・1364は大甕底部である。

**Ⅷ区ＳＸｃ20（Ｄ２区0.9ｍＳＸ04**、第191図）

1342は京・信楽系陶器平碗である。灰色系の色調を呈する磁器質胎土で、畳付付近まで灰釉の施釉を認める。口縁部外面には不明溶着痕があり、同遺構から出土した同一個体と考えられる見込み片には胎土目が付着する。1343は肥前系陶器水指と考えた。体部は直線的に外傾し、口縁部は内側に強く屈曲させる。内外面には白泥による直線・波状刷毛目文を認め、緑釉を施釉する。さらに外面には鉄釉を流し掛けする。1344は軟質系施釉陶器碗である。口縁部は直線的に開く。胎土は灰白色系の色調を呈し、緻密で含有鉱物が混じらない精良な胎土が選択される。外面には灰オリーブ色と黄色に発色する絵薬により星形文を描き、灰釉を施釉する。1345は京・信楽系陶器灰吹きとした。浅黄色系の陶器質胎土で、淡黄色系の灰釉を残存部位全面に施釉する。外面には赤褐色の絵薬により斜格子文を上絵付けする。1346は備前摺鉢である。口縁部断面形状は三角形を呈し、内面に明瞭な段を有する。スリメ端がわずかに確認できるが、その間隔は不明である。乗岡編年近世２ａ期の所産であろう。1347は土師質土器小皿である。口縁部はわずかに外反し、外端面を有する。胎土中には雲母粒・赤色粒を含有し、にぶい橙色の色調を呈する。端部には煤が付着し、口縁部内外面には煤痕を認める。

**Ⅷ区ＳＸｃ21（Ｄ２区1.1ｍＳＸ05**、第191・192図）

1349は瀬戸・美濃系磁器端反碗である。1820～60年代。1350は京・信楽系陶器の可能性が残る瓶である。口縁部は波状に呈し、注口を有する。内面及び外面には白泥を塗布し、胴部上半より上に灰釉を施釉し、端部及び注口付近のみ緑釉を認める。口縁部外面には暗赤褐色の絵薬により斜格子文を絵付けする。1351は軟質系施釉陶器土瓶蓋である。落とし蓋で、天井部内面には回転糸切り痕を認める。1352は瓦質焼成の焙烙である。外型成形により、佐藤分類ＡⅡ－１ないし２型式に該当する。

1353～1355は軒丸瓦である。1353は不明瞭な巴頭から尾は極めて長く延びるが、圏線状をなさず、かろうじて円形を指向して巻き込む。珠文径は小さく、16個を数える。1354は円形に肥厚した巴頭から尾は細長く巻き込み気味に延びる。珠文径は小さく、その数は12個を数える。1355は明瞭な巴頭から尾は細長く延びる。珠文径が大きく、10個を数える。瓦当面に占める文様区の割合が低く、円形を指向する巴径も3.5cm前後と小さい。キラコの塗布を認める。1356は鬼瓦である。前面に高さ５cm、幅１cmの外縁を認め、内面には起伏の激しいケズリ調整を認める。外面には同一工具による刻目が顕著に残る。

**Ⅷ区ＳＸｃ22（Ｄ１区ＳＸ01**、第192図）

1357・1358は肥前系磁器広東碗である。1357は外面に柳文、草花文を描き、内面縁文様には二重圏線を認める。18世紀前半。1358は1780～1820年代。1359は土師質土器土管である。1360は窯構築部材であろう。隅丸三角錐状を呈し、三側面には上下２箇所に斜め方向の刻目を施す。なお、端面は一方のみ顕著に焼き締まり、小口面を窯体内に向けていたことが窺える。

1361は軒桟瓦である。平瓦部の中心飾りは半肉状に盛り上がる半裁花菱文である。瓦当面を含め、ほぼ全面にキラコの塗布を認める。

## 9．Ⅸ区（Ｅ区）

**整地層**（第194～196図）

1365は第89図６・７層(第１面構成層)、1366～1389、1413・1414は８・９・11層(第２面構成層)、1390～1394、1415は10・12～15層（第３面構成層）、1395～1412、1416は16～19層直上層位（第４面構成層＝中世土器包含層直上層位）からの出土遺物である。

**第１面構成層**　1365は肥前系青磁染付碗蓋である。18世紀後半。

**第２面構成層**　1366は漳州窯系白磁皿である。口縁部は大きく外反し、端部は先細る。白色系の磁器質の胎土で、厚く施釉する。16世紀後半～17世紀初頭。1367・1368は景徳鎮窯系青花である。1367は碗である。見込みは饅頭心状に盛り上がり、十字花を認める。高台内には「大明年造」の款銘を認める。16世紀後半。1368は皿である。高台内には鉋痕が残る。16世紀末～17世紀初頭。1369～1373は肥前系磁器である。1369・1370は碗である。1369は撥高台碗で、外面高台脇には蓮弁文、口縁部外面には牡丹文、見込みには梅花繋ぎ文を認める。1370は波佐見窯産の丸碗である。見込みには蛇の目釉剥ぎ後、アルミナ砂の塗布を認め、さらにその上部に重ね積みによる高台痕跡がある。18世紀後半。1371～1373は皿である。1371は口縁部口銹を呈し、内面には印判による紅葉文、外面には唐草文を認める。1690年代～18世紀第１四半期。1372は高台径が比較的大きく、口縁部は大きく開き、端部付近で短く直立する。見込みには魚文と水草文を描く。1640～60年代。1373は底部片である。見込みには牡丹文？、高台内には款銘を認める。1374・1375は肥前系陶器である。1374は刷毛目碗である。胎土はにぶい赤褐色の色調を呈し、内外面には暗オリーブ色の灰釉を施釉する。外面には波状刷毛目、内面には打刷毛を認める。1375は皿ないし鉢である。見込みには白泥による刷毛目を認める。1376は京・信楽系陶器鬢盥（鬢水入れ）である。外面には銹絵による草花文を認める。1377は瀬戸・美濃系陶器（志野）向付である。内面には布圧痕を認め、内外面には赤褐色の絵薬により丸文ほかを下絵付けする。1378・1379は備前摺鉢である。1378は板作りの口縁部形態を呈し、乗岡編年近世１ｂ期の所産であろう。1379は見込みに「＊」、内面全面にそれぞれスリメを施す。外面には窯詰めに用いた緩衝材が付着する。1380・1381は備前大平鉢である。口縁部は大きく開き、端部のみ小さく直立する。1382は備前灯明皿である。口縁部とほぼ同じ高さの仕切を有する。1383は焼締陶器摺鉢である。口縁端部を内上方へ鋭く、横方向へ強く引き出し口縁帯を創出する。片口部。1384は不明鉄器である。長さ17.2cm、両端部幅は2.4cmと0.8cmを測り、厚みは0.8cmを測る。使用痕はなく、用途は不明であるが、楔状鉄器に近い機能を想定しておきたい。1385・1386は土師質土器鍋である。体部から内湾気味に立ち上がり、口縁部は「く」字形ににぶく屈曲する。口縁部と体部境には痕跡的な鍔部（縁帯）を認める。1387は土師質土器摺鉢である。口縁部は「く」字形に屈曲する。胎土中に雲母粒を含み、それを含まない1385・1386とは胎土を違える。1388は土師質土器足釜である。鍔部を強く引き出し、外上方へ突出する。1389は瓦器椀である。端部に沈線を認めないが、口縁部下1.5cmが最も肥厚する断面形状や幅の狭いヘラミガキから楠葉型瓦器椀と判断できる。

1413は軒丸瓦である。巴頭は肥厚し、尾は長く巻き込む。珠文径は大きく、その数は11に復元できる。1414は軒平瓦である。中心飾りは上向きの三葉文の可能性が高く、唐草は上下に２転する。

**第３面構成層**　1390・1391は肥前系磁器である。1390は碗である。18世紀前半。1391は肥前系青磁鉢とした。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は内方へ小さく引き出す。口縁部は水平とならず、部分的な刳り込みを認める。外面には明瞭な凹線を数条施し、口縁端部外面には赤褐色の絵薬による口銹、内面には幾何学文を上絵付けする。胎土から瀬戸・美濃系磁器の可能性も残る。1392は肥前系陶器絵唐津皿である。1393は土師質土器摺鉢である。口縁部を「く」字形に屈曲させ、体部より厚く肥厚させる。1394は備前大平鉢である。

1415は軒丸瓦である。巴頭が明瞭に円形をなし、尾は細長く延びる。珠文径は大きく、９個を数える。

**第４面構成層**　1395は景徳鎮窯系青花皿である。16世紀末～17世紀前半。1396は漳州窯系青花皿である。口縁部は内湾気味に開き、底部は碁笥底となろう。16世紀後半。1397～1399は肥前系磁器である。1397は碗である。1398・1399は段重である。1398は口縁部が直立し、底部との境は明瞭に屈曲し、当該箇所にも施釉することから最下段であることが窺える。外面には草花文を窓内に認める。18世紀末～19世紀前半。1399は口径5.1cmを測る小型品で、化粧道具（白粉入れ）と考えられる。口縁部は直立し、底部重ね合わせ部にはアルミナ砂の塗布を認める。外面には染付圏線内に赤色絵薬により矢羽状文を上絵付けする。18世紀末～19世紀前半。1400は肥前系陶器皿である。内面には鉄絵を認める。1401は施釉陶器碗である。灰白色系の胎土に釉表面の光沢が強い灰釉を施釉する。口縁部は直線的に開き、端部は内外面にそれぞれ水平面を有する。肥前系陶器か。1402は京・信楽系陶器である。平面形は半月形を呈し、半円側には直角に折れる立ち上がり部を有する可能性が高い。外面には型成形により草花文を表現する。灰白色系の磁器質胎土で、薄緑色を帯びた灰白色の色調を呈する灰釉を施釉する。1403・1404は瀬

戸・美濃系陶器である。1403は天目碗である。口縁部は短く直立した後、小さく外反する。1404は皿とした。口縁部には強い回転ナデ調整を施し、緩やかに外反する。内外面には灰釉の施釉を認める。1405は施釉陶器瓶ないし火入れであろう。口縁部は内側に強く拡張し、口縁部内面及び外面には鉄釉を施す。1406は土師質土器小皿である。底径は小さく、口縁部は大きく開く。底部には静止糸切り痕を認める。口縁部内外面には煤痕が付着する。1407は瓦質焼成の亀山系鍋である。径0.8cmを測る穿孔が2孔ある内耳を有する。1408は土師質土器摺鉢であろう。スリメは認められない。1409は移動式竈であろう。体部からL字状に屈曲する鍔部を認める。内外面ともに顕著な被熱を受け、赤色から明赤褐色に変色し、一部煤痕も付着する。1410は土師質土器七厘とした。底部残存部位には円孔を認め、脚部を有する。底部外面に被熱痕ないし煤痕の付着は認められないが、内面には激しく付着する。胎土中に多量の雲母粒を含む。1411は漆喰である。1面のみ平滑に仕上げられ、その逆面には若竹の可能性がある木質痕跡を認める。1412は碁石である。

1416は軒丸瓦である。比較的明瞭な巴頭から尾が延び、径6cm弱の円形を指向して巻き込む。筒部外面には顕著な板ナデ調整、内面には布目→鉄線切りを認める。

**不明遺構**

**Ⅸ区ＳＸｃ24（Ｅ区ＳＫ05、第197図）**

1417は和泉型瓦器椀である。内外面ともに顕著な二次焼成を受け、器表面の剥落は激しいが、外面には分割ヘラミガキを認める。尾上編年Ⅱ－1ないしⅡ－2期の所産か（尾上1983、以下和泉型瓦器椀の年代観はこれに依拠する）。1418は瀬戸・美濃系陶器天目碗である。露胎部分に錆釉は認められない。大窯4期か。1419は同安窯系青磁碗である。内面には片彫りによる抽象化した花文及び櫛状工具による施文、口縁部下2cmには沈線を認める。横田・森田分類Ⅰ－1ａ類に該当する。1420は石仏頭である。背面は欠損しており、その剥離痕から元来は後背を有するか、浮き彫りされた石仏であった事が窺える。また、その剥離面を含め残存部位全面に被熱痕を認め、赤灰色に変色する。材質は凝灰岩製である。高麗系石仏の可能性が高いという指摘を受けた。1421は青銅鏡（和鏡）である。面径11.1cm、縁高1.0cmを測る。1／4程度は欠損し、錆化が激しく肉眼では構図を窺うことはできない。X線撮影によると、鏡面は界線により内区と外区に分けるが、構図はこれを無視して展開する。下半には垣根を表現し、上半にかけて蔓草文、草花文が流れるような曲線で表現する。

**柱穴**

**Ⅸ区ＳＰｃ494（Ｅ区ＳＰ21、第197図）** 1422は土師質土器深鉢であろう。底部の可能性も考慮したが、屈曲状況から口縁部とした。直線的に内傾し、端部を内側に屈曲させる。外面には左上がりの平行叩き、内面は板ナデ→ナデ調整を認める。

**Ⅸ区ＳＰｃ486（Ｅ区ＳＰ34、第197図）** 1423は備前摺鉢である。内面には斜め方向に走るスリメを認める。乗岡編年近世1期。

**Ⅸ区ＳＰｃ483（Ｅ区ＳＰ53、第197図）** 1424は足鍋鍔部片である。

**土坑**

**Ⅸ区ＳＫｃ31（Ｅ区ＳＫ07、第197図）**

1425は瀬戸・美濃系陶器天目碗である。口縁部は短く直立し、口縁端部を強く外反させる。1426は口径64.4cmを測る備前大甕である。口縁部は外側に折り曲げ、口縁帯を作り出し、3条の凹線を施す。端部を中心に顕著な黄ゴマの降灰を認める。天正から文禄期の口縁部形態に類似する（備前市教育委員会1998）。1427は土師質土器鍋である。外耳が付く形態となろう（1306ほか）。端部を「く」字形に強く屈曲させ、外面に縁帯を設ける。胎土中には雲母粒を一定量含み、当遺跡出土の大多数の外耳付き鍋の胎土に共通する。外面は縁帯（形骸化した鍔部）から下半のみ煤痕の付着を認める。

**Ⅸ区ＳＫｃ32（Ｅ区ＳＫ10、第197図）**

1428は中国産磁器皿である。明末。1429は備前甕底部片であろう。

**Ⅸ区ＳＫｃ33（Ｅ区ＳＫ06、第198図）**

1430は肥前系磁器皿である。口縁部は端反り形態を呈し、釉肌に無数の気泡を認める。17世紀代。1431は肥前系陶器皿である。見込み周縁には明瞭な段を有し、口縁部は大きく開き、端部を上方に小さく摘み上げる。口縁部内面には鉄絵を認める。1432は瀬戸・美濃系陶器鉄釉ひだ皿である。見込みには鏡状の段、外面底口縁部境には稜を認める。見込みには胎土目痕を3箇所、高台内には輪ドチ痕が残る。大窯3期。1433は備前甕であろう。口縁部内面及び外面には灰赤色の色調を呈する塗土を塗布する。1434は備前摺鉢である。内面には斜め方向のスリメを認める。乗岡編年近世1期の所産であろう。

1435は軒丸瓦である。珠文数は不明であるが、その径はやや小さい。1436は軒平瓦である。中心飾りは不明であるが、唐草は流線状に細長く延びる。1437は平瓦である。狭端面に「丸に一」の刻印を認める。

**柱穴**

**Ⅸ区ＳＰｃ520（Ｅ区ＳＰ08**、第198図）　1438は土師質土器深鉢であろう。内外面には煤痕の付着を認め、外面器表面の剥落は著しい。

**Ⅸ区ＳＰｃ517（Ｅ区ＳＰ12**、第198図）　1439は軒平瓦である。

**Ⅸ区ＳＰｃ505（Ｅ区ＳＰ37**、第198図）　1440は軒平瓦である。

**土坑**

**Ⅸ区ＳＫｃ34（Ｅ区ＳＫ12**、第198図）

1441・1442は土師質土器小皿である。いずれも底径が小さく、底面に静止糸切り痕を認める。1441は全面に二次焼成を受け、橙色から赤灰色に変色する。

**不明遺構**

**Ⅸ区ＳＸｃ26（Ｅ区ＳＸ04**、第198図）

1443は漳州窯系青花皿である。碁笥底形態となろう。一部断面が赤化しており、二次焼成を受ける。16世紀後半。1444は肥前系陶器皿である。口縁部は二段階に開き、端部を上方へ小さく摘み上げる。内面には赤色の色調を呈する鉄絵を認める。1445・1446は備前底部片である。

1447は軒平瓦である。中心飾りは不明であるが、唐草は流線状に細長く延びる。

**Ⅸ区ＳＸｃ27（Ｅ区ＳＸ05**、第198図）

1448・1449は備前摺鉢である。口縁部は極めて薄い板作りで、内面には放射状スリメに後出する斜め方向のスリメを認める。乗岡編年近世１ｂ期。

**Ⅸ区ＳＸｃ25（Ｅ区ＳＸ06**、第198図）

1450は備前摺鉢である。口縁部は板作りで、口縁端部内面に段を有し、端部は細長く延びる。乗岡編年中世６ｂ期まで下る可能性がある。

**柱穴**

**Ⅸ区ＳＰｃ537（Ｅ区ＳＰ06**、第198図）　1451は土師質土器小皿である、底径は3.8cmと小さく、底部に静止糸切り痕を認める。1452は土師質土器鍋としたが、口縁部が細長く間延びし、体部が直立する点から深鉢の可能性も考慮する必要がある。

**Ⅸ区ＳＰｃ534（Ｅ区礎石７**、第198図）　1453は土師質土器摺鉢である。スリメは下端付近を中心に摩耗が著しく、使用頻度の多寡が窺える。なお、使用段階ではなく、破損後に二次焼成を受けており、遺存部位上部断面に煤が付着する。

**Ⅸ区ＳＰｃ533（Ｅ区ＳＰ27**、第199図）　1454・1455は瀬戸・美濃系磁器である。1454は端反碗である。染付は全体的に不明瞭な輪郭となり、淡青色の不鮮明な呉須を用いる。1820～60年代。1455は型打皿である。口縁部は輪花を呈し、端部は口銹となる。見込みには楼閣山水文を描き、目跡を４箇所認める。19世紀初頭～幕末。1456は備前瓶であろう。口縁端部は玉縁状に肥厚し、内外面には鉄釉を施釉する。

**土坑**

**Ⅸ区ＳＫｃ39（Ｅ区ＳＫ09**、第199図）

1457～1459は肥前系磁器である。1457・1458はそれぞれ撥高台碗、広東碗である。1457は見込みに抽象文、高台脇に「∈」の文様を認める。1458は口縁部内外面に捻文、見込みには十字花の周縁文様を描く。1780～1820年代。1459は紅猪口である。外面には笹文を描く。1460は瀬戸・美濃系陶器の可能性が高い鉢である。残存部位から直線的に外傾する体部が想定でき、植木鉢のような器形に復元できる。1461は焼締陶器甕とした。口縁部は短く直立し、端部を内外方へ拡張する。外面にはカキメを施し、口縁部内面及び外面には塗土を認める。1462は堺・明石系摺鉢である。口縁部は厚く肥厚し、口縁部内面にはかろうじて沈線を認める。片口部。白神編年Ⅱ型式１段階の所産であろう。1463は土師質土器台皿とした。台部高さは５cm以上は測る。ほぼ全面に被熱痕を認め、赤灰色から灰黄色に変色する。

1464は軒丸瓦である。尾は太く、短く延び、円形を指向して巻き込む。珠文径は大きく、復元では12個を数える。瓦当面にはキラコの塗布を認める。1465は軒平瓦である。

**井戸**

**Ⅸ区ＳＥｃ07（Ｅ区ＳＥ02**、第199・200図）

1466は肥前系磁器小広東碗である。外面にはシダ文、口縁部内面縁文様には二重圏線文を認める。1770～1810年代。1467は瀬戸・美濃系磁器小杯である。クロム青磁を用い、 明治・大正期の所産であることが窺える。1468は肥前系陶胎染付碗である。口縁部は直線的に外傾し、外面には簡略化した草花文を認める。18世紀前半。1469・1470は土師質土器大甕（井戸枠）である。口縁部は直立し、端部内側に粘土板を貼付し、肥厚させる。外面口縁部下の文様帯にも粘土板を貼付し、1469は断続ナデ調整、1470は斜格子文をそれぞれ施す。いずれも胎土中に角閃石の含有を認める。

1471は軒丸瓦である。巴頭は肥大化し、尾は短く延びる。珠文径は大きく、復元では11個を数える。瓦当面にはキラコの塗布を認める。1472～1478は軒込瓦である。いずれも菊花文を主文様とし、輪郭線によって表現する1472～1475とレリーフ状に盛り上がる1476～1478に大別できる。さらに菊花の花弁数による細分が

可能であり、1472～1475の一群は、1472が16枚、1473が13枚、1474・1475が12枚を数える。いずれもキラコの塗布は確認できない。1476～1478も1476が16枚、1477・1478が12枚を数え、1478のみにキラコの塗布を認める。

**Ⅸ区ＳＥｃ08（Ｅ区ＳＥ03、第201図）**

1479は肥前系磁器盃洗であろう。口縁部内外面縁文様には掻き落とし技法を認め、外面には楼閣山水文を描く。1480は土師質土器大甕（井戸枠）である。口縁部は直立し、内側には井戸枠接合時に用いたモルタルが遺存する。胎土中には角閃石を含まない。

**Ⅸ区ＳＥｃ09（Ｅ区ＳＥ04、第201図）**

1481は土師質土器井戸枠である。口縁部は直立し、外面に三角形の粘土帯を貼付する。胎土中には角閃石は含まないが、多量の雲母微粒を含有する。1482は土師質土器大甕底部である。平底の底部から体部へ強く開く。底面には不定方向の粗い板ナデ調整を認め、内面には付着物が遺存する（糞尿か）。遺構は井戸であるが、機能停止後に廃棄された遺物であろう。

1483～1485は軒込瓦である。いずれも菊花文を認め、輪郭線により菊花を表現する1483・1484と半肉状に盛り上げる1485に大別でき、前者は瓦当面径、菊花形、花弁枚数に差異を認める。1484にのみキラコの塗布を認める。

1486・1487は曲物である。いずれも口径14cm前後、器高は前者が７cm、後者が11cmを測る。綴じ合わせ部には桜の樹皮を用い、その方法は微妙に異なる。1486には底板が遺存し、印籠合わせで接合した後、側面から木ビスを打ち込む。1487は底板が遺存しないが、木ビスの痕跡を数カ所確認できる。さらに側面には一重枠内に「獄署」の焼印を認める。当遺構が明治期に当該箇所に設置された高松監獄署に関連することが分かる。

## 10. Ｘ区（Ｊ区）

**整地層**（第202・203図）

1488～1493はＣ層、1494～1498はＡ層、1499は第97図Ａ－Ａ’12層、1500～1503は同９層、1504～1512はＤ層、1513～1520はＥ層からの出土遺物である（いずれも調査時の取り上げ単位に基づく）。

**Ｘ区Ｃ層**　1488は肥前系磁器皿である。内面縁文様には墨弾きの技法を認める。1489は瀬戸・美濃系陶器折縁皿である。ソギ入りである。大窯４期（第７小期）の所産であろう。1490は備前摺鉢である。口縁部を欠くが、残存部位から板作りであることが窺える。体部内面には放射状のスリメを認める。1491は備前瓶（徳利）である。1492は土師質土器摺鉢である。口縁端部を内側に折り曲げ、肥厚させる。胎土中には多量の雲母粒を含む。1493は瓦質焼成の亀山系鍋である。頑丈な内耳を有し、明瞭に貫通する穿孔を認める。口縁部は端部に向かい漸次肥厚し、上方へ小さく摘み出す。

**Ｘ区Ａ層**　1494・1495は肥前系陶器砂目皿であろう。いずれも口縁部は底部から短く立ち上がった後、内湾気味に大きく開き、端部を上方へ軽く摘み上げる。見込みには砂目を認める。1496は土師質土器小皿である。口径のほぼ１／２程度の径を測る底部から口縁部は緩やかに開く。底部には回転糸切り痕を認め、小さく突出する。1497は焼塩壷蓋である。胎土中には特徴的な鉱物として、チャートを認める。

1498は軒丸瓦である。比較的明瞭な巴頭から尾は長く延び、径６cm前後の円形を指向して巻き込む。珠文数は12個を数える。

**Ｘ区第97図Ａ－Ａ’12層**　1499は瓦質焼成の亀山系鍋である。口縁部は大きく開き、端部に向かい漸次肥厚する。内耳を有し、径１cm前後を測る穿孔を認める。

**Ｘ区第97図Ａ－Ａ’９層**　1500は中国産白磁皿である。景徳鎮窯系か。1501は漳州窯系青花皿である。陶器質な胎土で、橙色の色調を呈する。口縁部内外面縁文様には一重圏線を認める。1502は土師質土器小皿である。静止糸切り痕を認める突出した底部から口縁部は大きく開く。見込み周縁には強い横ナデ調整を加え、明瞭に窪む。1503は瓦質焼成の鍋である。体部はボール状の形態をなさず、焙烙と同じく浅い器高となる。端部は上方へ強く摘み上げ、肥厚させる。内耳を有し、明瞭な穿孔を認める。当遺跡出土の亀山系鍋はこの１点を除き、ボール状の深い体部形状を呈する。

**Ｘ区Ｄ層**　1504・1505は和泉型瓦器椀である。1504は外面にヘラミガキをわずかに認め、見込みに連結輪状文ヘラミガキを施す。尾上編年Ⅱ－３期ないしⅢ－１

期の所産であろう。1505は外面のヘラミガキが稀薄であり、見込みには平行線状ヘラミガキを施す。尾上編年Ⅲ－２期の所産か。1506・1508は須恵器椀である。外面には回転ナデ調整により生じた稜線部分に回転ヘラミガキを施す。内面には回転ヘラミガキをかすかに認める。西村産須恵器椀。1508は断面形状が丸い高台を貼付する。西村産須恵器椀か。1507は須恵器小皿である。底部には回転糸切り痕を認める。1509は須恵器鉢である。口縁部は直線的に開き、端部をわずかに肥厚させる。1510は土師質土器坏ないし椀である。灰白色の色調を呈する比較的精良な胎土である。1511は土師質土器椀である。高台は細く、高い。二次焼成によるためか、白色の色調を呈し、粒径４㎜前後の赤色粒を少量含む胎土である。1512は土師質土器鍋である。口縁部はにぶく開き、端部を横方向に引き出す。体部内面には入念な板ナデ、外面には指押さえ→縦方向の板ナデ調整を認める。吉備系土師器鍋。

**Ｘ区Ｅ層**　1513～1515は和泉型瓦器椀である。1513は外面に散漫なヘラミガキを認め、尾上編年Ⅲ－１期の所産であろう。1514の外面にはヘラミガキはなく、口径に比して器高は極めて低い。尾上編年Ⅲ－２ないしⅢ－３期の所産となろう。1516・1517は西村産須恵器椀である。1516は外面に回転ヘラミガキ、内面にもコテ当てに後出して回転ヘラミガキ調整を認める。1518は須恵器甕である。外面にはナデ調整に先行する右上がりの平行叩きを認め、十瓶窯産須恵器と考えられる(佐藤1998)。1519は中国産白磁碗である。口縁部は玉縁状を呈し、横田・森田分類白磁碗Ⅳ類に該当する。1520は吉備系土師器椀と考えた。高台は細長く、粒径がやや大きい石英・長石が少量含有する灰白色系の胎土である。

**柱穴**

**Ｘ区ＳＰｃ599(Ｊ区ＳＰ43**、第203図)

1521は土師質土器甕である。口縁部は「く」字形に屈曲し、内面には明瞭な稜を有する。胎土中には多量の雲母粒を含有する。

**Ｘ区ＳＰｃ557(Ｊ区ＳＰ46**、第203図)

1522は土師質土器小皿である。底部には回転ヘラ切り→板状圧痕を認める。

**溝状遺構**

**Ｘ区ＳＤｃ14(Ｊ区ＳＤ02**、第203図)

1523は肥前系陶器刷毛目碗である。胎土はにぶい褐色系の色調を呈し、内外面には直線的な刷毛目を認める。1524は瀬戸・美濃系陶器天目碗である。残存率は低いが、扁平な器形であることが窺える。口縁部は小さく直立した後、大きく端反る。鉄釉はオリーブ褐色系の色調である。1525は備前短頸壷であろう。口縁部は直線的に外傾し、端部を外方へ丸く肥厚させる。口縁端部上面には黄ゴマの降灰を認める。

**井戸**

**Ｘ区ＳＥｃ11(Ｊ区ＳＥ02**、第203図)

1526は瀬戸・美濃系陶器丸皿である。内外面には鉄釉を施釉する。

**土坑**

**Ｘ区ＳＫｃ40(Ｊ区ＳＫ03**、第203～205図)

1527は中国産磁器碗である。口縁部は内湾気味に立ち上がり、内面縁文様に二重圏線文、外面には草花文を描く。1528は中国産白磁皿である。口縁部は緩やかに外反し、見込みにかすかな段を認める。景徳鎮窯系。1529・1530は肥前系磁器である。1529は小杯である。外面には蘭を描く。1530は青磁皿とした。見込み周縁には沈線を認める。遺構の所属時期を判断する上で重要な組成であるため、細片ではあるが図化した。1531～1547は肥前系陶器である。1531～1540は碗である。口縁部形状から４形態に分類できる。1531はわずかに内湾傾向を認め、灰オリーブ色の濃い灰釉を施釉する。1532・1533は口縁端部が小さく外反し、前者には灰黄色、後者には灰白色の色調の灰釉を施釉する。1534は緩やかに外反する口縁部から、端部はわずかに直立する。1533に近似する灰白色を呈する灰釉を施釉する。1535・1536は直線的に外傾する口縁部形態を呈し、前者は灰白色のやや粗い胎土にかすかに青味を帯びた灰白色の灰釉、後者はにぶい黄橙色の胎土に灰黄褐色に発色する灰釉を施す。1536の見込みには砂目を２箇所認める。1537～1539は底部片である。1537・1538は小さな兜巾を認め、口縁部下半以下は基本的には施釉されない。1539は高台内の削り込みが深く、高台脇と等しい。断面形状は方形を呈し、畳付も含め全面施釉する。1540は黄味を帯びた灰白色系の色調を呈する胎土に淡黄色系の灰釉を施し、口縁端部はかすかに端反る。呉器手碗となろう。1541～1546は皿である。1541は口縁部が内湾し、碁笥底を呈する胎土目積みの皿である。口縁部外面には窯詰め時に付着した粗い砂が付着し、口縁端部から内面にかけて釉調の厚い部分を認める。また、見込みに残る胎土目には煤が付着し、口縁部外面の灰釉も上半と下半では色調を違えるため、内面及び上半に二次焼成を受けた可能性を考慮する必要がある。1542は口縁部が強く内湾し、端部を上方へ強く摘み上げる。1543は直線的に開く口縁部内面に鉄絵を認める。1544は口縁部が緩やかに外反し、端部を強く上方へ引き出す。見込みには砂目を認める。散漫な煤痕の付着を認め、灰釉の色調の差異を考慮するとほぼ全面に二次焼成を受けた可能性が高い。1545も砂目皿である。見込み及び高台内外に砂目を認め、見込みには

重ね積みによる高台痕が溶着する。1546は溝縁皿口縁部細片である。1547は鉢である。口縁部は大きく開き、端部手前内面に稜を残してさらに開く。内面には鉄絵及び胎土目を認める。橙色の色調を呈する胎土に、赤味が強いにぶい褐色系の灰釉を施釉する。1548・1549は瀬戸・美濃系陶器である。1548は天目碗である。外面下半の露胎部分には錆釉の施釉を認める。大窯３期。1549は瓶(徳利)とした。1550・1551は軟質系施釉陶器碗である。いずれも灰白色の瀬戸・美濃系陶器に酷似する胎土が選択され、釉肌に光沢を有する透明釉？を施釉する。1550は口縁部が直線的に内傾し、端部内面に面を認める。内外面には暗緑灰色、にぶい黄褐色、黄色の３色の絵薬を上絵として流し掛けする。1551は見込みににぶい橙色、暗緑灰色の絵薬により草花文？を上絵付けする。両者は接合関係はないが、同一個体と考えられる。楽焼系の初期京焼の可能性が高いであろう。1552は不明施釉陶器瓶とした。強いナデ調整により激しい凹凸を認め、端部は外方へ小さく引き出す。胎土はやや緻密さを欠き、色調は黄灰色を呈する。内外面には灰釉を施釉し、その釉肌・色調は萩焼に似る。1553は備前摺鉢である。口縁部はやや肥厚するが、内面には明瞭な段を有し、口縁帯外面には２条凹線を施す。乗岡編年近世１ｃ～２ａ期の所産であろう。1554は備前瓶とした。口縁部は直角に開いた後、直立する。1555は備前壷(無頸壷)であろう。肩部の張りは顕著で、口縁部は極めて短く直立する。1556～1574は土師質土器小皿ないし坏である。器形・成形技法・胎土等による分類が可能である。1556・1557は底部は遺存しないが、底径の小さな底部から、口縁部は直線的に小さく開き、端部外面に端面を認める。いずれも胎土中には雲母粒・赤色粒を含有する。器表面の色調はにぶい橙色を呈するが、1556は二次焼成を受け、現状では灰白色を呈する。1558・1559・1561は口縁部が比較的長く延び、中位に強いナデ調整を加えることにより、口縁端部に外端面を作り出し、さらに見込み周縁にも強いナデ調整を加える。口径は10cm前後を測る。底部切り離しは糸切り調整によるが、回転力が弱く、同心円状にはならない。胎土中に雲母・赤色粒を含有し、にぶい橙色の色調を呈する。1560の胎土・色調は1558ほかに酷似するが、口径が８cmとやや小さく、口縁部形態にやや差異を認める。口縁部は内湾気味に立ち上がり、鋭く明瞭な外端面を認める。底部には回転力の弱い糸切り調整を認める。法量による器形のバリエーションと考えられ、ここでは1558～1561を同分類としておきたい。1562～1569は突出したやや小さい底部から、口縁部は内湾気味に大きく開く。底部切り離しは回転糸切りではあるが、やはりその回転力は弱く、静止糸切り状となる。胎土には赤色粒を含むが、雲母粒の含有は認めない。にぶい橙色から灰白色の色調を呈し、安定しない。なお、1565の端部内外面には煤痕が付着する。1570は口縁部が短く開き、その中位が最も肥厚する。口径は8.9cmを測る。見込み周縁には強い回転ナデ調整が加わり、凹凸が激しい。底部は回転糸切りによる切り離しで、小さく突出する。胎土中には雲母粒の含有を認めず、1560とは区別した。なお、端部外面及び口縁部内面には煤が顕著に付着する。1571は口径10cm前後を測り、口縁部は外反気味に開き、端部付近は極めて薄い。見込み周縁は強い回転ナデ調整により、明瞭に窪む。底部には回転糸切り痕を認める。底部付近の径７cm前後から口縁部は立ち上がるが、さらにその内側には糸切り痕を認め、わずかに突出した底部がある(径5.6cm前後)。見込み周縁に施した強い回転ナデ調整との前後関係により、こうした底部形態となる可能性もあるが、詳細な観察は行えていない。胎土中には雲母・赤色粒の含有はなく、その色調は浅黄橙色から灰白色を呈する。1572・1573は口縁部がかすかに内湾して開き、底部には回転糸切り痕を認める。見込み周縁には明瞭な凹線を残す。胎土には雲母・赤色粒を含まず、灰白色系の色調を呈する。諸属性において1571に酷似するが、底部形態に差異を認める。口縁部と底部の境には明瞭な稜を有し、底径６～6.5cmを測り、底部外周の１cm前後がかすかに凹む点に差異を見い出せる。1573は底部片であるが、にぶい黄橙色の色調を呈し、胎土中に赤色粒を含むため、1571～1574とは異なる一群であることを明記しておくことに留めたい。1575は土師質土器鉢である。口縁部は「く」字形に内側に屈曲し、口縁帯を形成する。口縁帯には叩き成形による格子目を残すが、成形段階の痕跡ではなく、意図的な加飾であろう。胎土中には赤色粒を含むが、雲母粒はなく、浅黄橙色から灰白色の色調を呈する。1576は土師質土器鍋である。口径45cmを測り、器高は不明であるが、10cm以下となり、広く、浅い器形に復元できる。口縁部は体部から連続して、強く内湾し、口縁部と体部境外面には縁帯(形骸化した鍔)を設け、上方から斜め下方に穿孔する。穿孔は径５㎜以下で、ほぼ７～８cm間隔で認める。仔細に観察しても使用痕は確認できず、過飾を意図した穿孔であることが窺える。胎土には雲母粒・赤色粒を含有し、浅黄色の色調を呈する。佐藤分類土師質土器鍋Ｃ形式。1577は瓦質焼成の羽釜とした。口縁部は短く直立し、端部を内側に鋭く引き出す。

1578は軒丸瓦である。瓦当面形はわずかに楕円形を呈し、径11.2～11.7cmを測る小型品である。植物文様をモチーフとし、焼成は良好で堅緻に焼き締まる。

1579は鉄釘である。錆化が著しく、周囲には砂も多く付着する。

**Ｘ区ＳＫｃ41(Ｊ区ＳＫ04、第205図)**

1580は肥前系青磁皿である。1581・1582は軒丸瓦である。1581は円形をなす巴頭から尾は極めて細長く延

び、圏線状を呈する。珠文径は小さく、その数は12個を数える。1582は明瞭な巴頭から尾は長く延び、円形を指向して巻き込む。珠文径はやや大きく、12個に復元できる。

**X区ＳＫｃ42（Ｊ区ＳＫ05、第206図）**

1584は朝鮮王朝白磁碗である。口縁部は小さく外反し、端部を丸く収める。1585～1589は肥前系陶器である。1585は小杯である。口縁部は直線的に開き、端部を上方へ小さく摘み上げる。灰色系の緻密な胎土に灰オリーブ色の濃い灰釉を施釉する。1586～1589は皿である。1586は方形の平面形と考えられ、屈曲箇所の端部は窪む。1587は底部から短く開いた後、内面に明瞭な稜を残し、口縁部は強く内湾して立ち上がる。1588・1589は砂目皿である。前者は蛇の目状の高台を呈し、畳付幅は１～1.5cmを測る。1589は短く立ち上がった後、直線的に開く口縁部形態を呈し、端部を丸く収める。砂目は見込みに４箇所、高台内及び畳付にも復元すると、４箇所を認める。1590は肥前系磁器皿である。口径20cmを測り、口縁部は大きく開き、端部を小さく外反させる。高台径は8.8cmを測り、口径に比して１／２をやや下回る。見込み及び口縁部内面には力強い筆致により同一意匠の草花文を描く。1591は施釉陶器碗である。朝顔形碗に似た底部形態を呈し、畳付を除く全面に鉄釉を施釉する。灰白色の色調を呈する緻密な胎土である。1592は焼塩壷蓋である。胎土中にはチャートを含み、1497に酷似する。1593～1599は土師質土器小皿ないし坏である。器形・胎土・色調等による分類が可能である。1593～1595は見込み周縁に極めて強いナデ調整を加えて口縁部下位を短く直立させ、そこから口縁部は直線的に開く。口径は10～11cmを測る。底部調整は回転ヘラ切りか糸切り調整かは判断できない。胎土中には石英・長石に混じり、雲母粒・赤色粒を含有し、にぶい橙色の色調を呈する。1596～1598は底部が強く突出し、口縁部は内湾気味に大きく開く。底部には回転力の弱い回転糸切り痕を認める。胎土中には赤色粒を含むが、雲母粒は含有せず、色調は浅黄橙色を呈する。前述した1562～1569と同じ一群である。1599は口径13.8cmを測り、口縁部は直線的に開き、端部を丸く収める。見込み周縁はわずかに凹み、中央部には回転ナデ調整に後出するナデ調整を施し、窪ませる。底部には回転糸切り痕を認め、口縁部境が不明瞭な形態となる。前述した1572に通ずる一群であろう。1600は土師質土器火鉢とした。口縁部は直立し、端部を四角く収める。1601は軒込瓦である。

**X区ＳＫｃ43（Ｊ区ＳＫ07、第206図）**

1602・1603は肥前系磁器である。1602は小杯である。青味の強いくすんだ透明釉を施す。1603は皿とした。口縁部は輪花をなす。1604は瀬戸・美濃系陶器内禿皿である。口縁部は大きく開き、底部は碁笥底である。鉄釉を施し、高台内には輪ドチ痕を認める。

1605は軒丸瓦である。巴の尾はきわめて細長く延び、珠文径も小さい。1606・1607は軒平瓦である。いずれも中心飾りは宝珠文の可能性が高い。1608・1609は軒込瓦（小菊瓦）である。

**X区ＳＫｃ44（Ｊ区ＳＫ06、第207図）**

1610は肥前系陶器皿である。灰白色を呈する極めて緻密な胎土に淡黄色の色調を呈する灰釉を施釉する。見込みには砂目を２箇所認める。

**X区ＳＫｃ46（Ｊ区ＳＫ09、第207図）**

1611は瀬戸・美濃系陶器天目碗である。口縁部は直立し、端部のみ小さく外反する。大窯４期の所産か。1612～1614は土師質土器小皿である。底径６cm弱、口径８cm前後を測り、コップ状の形態を呈する。口縁部は底部から直線的に外傾し、端部は先細る。底部は回転ヘラ切りである。胎土中には赤色粒を含み、雲母粒の含有は認められない。色調は浅黄橙色からにぶい橙色である。1615は土師質土器摺鉢である。口縁部は「く」字形に内湾し、外面には稜を認める。胎土中には微細な雲母粒を多量に含む。端部及び内面には煤痕を顕著に認める。

**X区ＳＫｃ45（Ｊ区ＳＫ08、第207図）**

1616は瀬戸・美濃系陶器天目碗である。口縁部は小さく直立し、端部をかすかに外反させる。外面下半の露胎部分に錆釉は認められない。1617は土師質土器摺鉢である。内面のスリメは顕著な使用により、消失しかかる。1615と同じく、胎土中には微細な雲母粒を多量に含有する。

**X区ＳＫｃ48（Ｊ区ＳＫ12、第207図）**

1618は備前摺鉢である。内面には放射状スリメに後出する斜め方向のスリメを認める。乗岡編年近世１期の所産である。1619は土師質土器足釜とした。口縁部は内湾し、外面体部境には鍔部を有し、口縁帯を形成する。外面のみ被熱を受け、明褐灰色に変色する。

**X区ＳＫｃ50（Ｊ区ＳＫ13、第207図）**

1620は土師質土器摺鉢である。雲母の含有を多量に認め、端部には煤痕が顕著に付着する。1615と同一個体かもしれない。

**X区ＳＫｃ51（Ｊ区ＳＫ15、第207図）**

1621は管状土錘である。端面は平滑に仕上げられる。

## 11. Ⅺ区（97年度調査区）

### 柱穴

**Ⅺ区ＳＰｃ607（97年度調査区ＳＰ9702、第208図）**

1622は瀬戸・美濃系陶器ソギ入りの溝縁皿である。内禿を呈し、高台内には輪ドチ痕を認める。1623は土師質土器小皿である。口径7.2cmを測り、口縁部は底部から直線的に外傾する。胎土中には赤色粒を含有するが、雲母は認められない。色調は橙色を呈する。

**Ⅺ区ＳＰｃ627（97年度調査区ＳＰ9707、第208図）**

1624は土製紡錘車ないし土錘である。断面形状は算盤玉状を呈し、径１cm弱の穿孔を認める。

**Ⅺ区ＳＰｃ630（97年度調査区ＳＰ9709、第208図）**

1625は瀬戸・美濃系陶器折縁皿である。

### 溝状遺構

**Ⅺ区ＳＤｃ15（97年度調査区ＳＤ9701、第208図）**

1626は管状土錘である。にぶい黄橙色の色調を呈し、胎土中には角閃石を少量含む。

### 井戸

**Ⅺ区ＳＥｃ13（97年度調査区ＳＥ9701、第208図）**

1627・1628は中国産白磁碗である。高台は方形ないし逆台形の安定した断面形状を呈する。見込みには蛇の目釉剥ぎを認め、外面高台脇以下は無釉となる。横田・森田分類白磁碗Ⅷ類に該当する。1629・1630は肥前系陶器である。1629は碗である。高台は碁笥底状を呈し、明瞭な高台をなさない。1630は皿である。口縁部は端部手前で小さく屈曲し、端部は上方へかすかに摘み出す。1631は焼締陶器瓶とした。底部は碁笥底を呈し、畳付幅は１cmと広い。内底部には黄ゴマの降灰を認める。備前焼の可能性が高い。1632は土師質土器鍋である。外耳を有する形態であろう。口縁部は体部から連続して内湾し、外面体部境はにぶく突出し、縁帯をなす。胎土中に雲母粒の含有を認めるが、極少量である。外面全面には煤痕の付着を認める。

### 土坑

**Ⅺ区ＳＫｃ52（97年度調査区ＳＫ9702、第208図）**

1633は管状土錘である。

### 井戸状遺構

**Ⅺ区ＳＥｃ14（97年度調査区ＳＫ9701、第208・209図）**

1634～1638は肥前系磁器である。1634～1637は碗である。1637は筒形碗であるが、口径には歪みを認める。外面には雷文、内面には二重圏線を縁文様とし、口縁部外面には円窓内に薄、地詰文に青海文を描く。1610～30年代。1635は端部内外に面を有する高い高台を有し、口縁部は直線的に開く。外面には柳文？を認める。1640～50年代。1636は白磁碗である。口縁部は端部のみ外側に小さく摘み出す。1630～50年代。1637は青磁碗である。口縁部は直線的に外傾し、端部はかすかに開く。1630～50年代。1638は香炉である。内面には透明釉、端部内面から外面には鉄釉を施釉し、外面高台脇以下は無釉となる。口縁部は無花果状を呈し、端部のみ小さくかつ強く外反する。1630～50年代。1639は備前摺鉢である。見込みのスリメは体部から断絶し、Ｔ字形に施す。底部外面には使用による著しい摩耗を認め、体部内面のスリメにもわずかな摩耗を認める。内底部を中心に煤痕が付着する。斜め方向のスリメはなく、乗岡編年近世２ａ期の所産と考えられる。1640～1646は土師質土器小皿ないし坏である。1640は底径が小さく、静止糸切り痕を認める。口縁部が長く、大きく開く形態となろう。1641・1642・1644は底部が強く突出した形態を呈し、底面には回転力の弱い回転糸切り痕を認める。口縁部は内湾気味に大きく開く形態となろう。1643は口縁端部に強い回転ナデ調整を施し、端部外面に端面を形成し、見込み周縁に明瞭な凹凸を認める。口径10cm。胎土中には雲母粒・赤色粒を含み、にぶい橙色の色調を呈する。前述した1560と同じ一群であろう。1645は口径11.2cmを測り、口縁部は大きく開き、端部が先細る。底部には回転糸切り痕を認め、口縁部との境が極めて不明瞭である。見込みにはナデ調整を不定方向に施し、見込みを凹まし、見込み周縁には回転ナデ調整を加え、底部内径を広くする。胎土中に雲母粒はなく、灰白色の色調を呈する。前述した1571と同じ一群となろう。1646は底部から内湾して立ち上がり、口縁端部を丸く収める。見込みは不定方向のナデ調整により明瞭に窪み、見込み周縁にはそれに先行する回転ナデ調整を施す。底部には回転糸切り→板状圧痕を認め、口縁部との境は明瞭である。外周１cm付近のみわずかに上げ底を呈する。胎土中には雲母を認めず、浅黄橙色の色調を呈する。前述した1572・1573と同じ一群になろう。なお、見込みには煤痕の付着を認める。1647は土師質土器鍋である。口縁部は体部から連続して内湾し、端部を丸く収める。外面体部は小さく突出し、口縁帯を形成する。胎土中には雲母粒を多量に含み、同器形の鍋でもその含有量には差異を認める（例えば、1632には少量の含有に留まる）。口縁部内面及び外面全面には煤痕が付着し、さらに外面器表面は被熱による剥落を認める。1648は有溝土錘である。拳大より一回り小さく、残存最大長8.7cm、最大幅6.7cmを測る。胎土は極めて粗く、石英・長石の粒径は５mm以上を測るものが大半を占める。1649は備前鉢である。焼き歪みが著しく、口縁部は強く内傾し、端部は玉縁状を呈する。

1650・1651は鉄製鏃である。稜端部はにぶく折り返し、先端は扇状に開く形態を呈する。1652は鉄釘である。1653は銅製煙管吸口である。1654は銅銭である。

洪武通実(宝)である。1655は石製硯である。墨堂か海に該当するためか、顕著な窪みを認める。材質は緑色泥岩であろう。

**不明遺構**

**Ⅺ区ＳＸｃ29(97年度調査区ＳＸ9701**、第209図)

1656は土師質土器鍋である。口縁部は体部から連続して内湾し、外面体部境にはかすかな突出を認める。胎土中には少量の雲母粒を認める。突出部以下には煤痕の付着を認める。

## 第７節　中世遺物

**Ⅹ区ＳＸｃ30(Ｊ区ＳＸ1100**、第210・218図)

1657・1658は土師質土器小皿である。口縁部は短く外反し、底部には回転ヘラ切り痕を認める。1659は土師質土器坏である。明瞭な底部を認めず、椀になる可能性も残る。端部は外反し、口縁部下半には明瞭な変化点を認める。胎土は灰白色の色調を呈する。1660は西村産須恵器椀である。外面は回転ナデ調整により生じた凸部に回転ヘラミガキを施す。1661は吉備系土師器椀とした(山本1993、以下吉備系土師器椀に関してはこれに依拠する)。高台は細長く、径も7.6cmと大きい。1662～1666は瓦器椀である。1662は楠葉型瓦器椀である。口縁部断面形状は端部下1.5cmが最も肥厚する。1663～1665は和泉型瓦器椀である。外面のヘラミガキをわずかに認める1663・1664とそれを認めず、内面のヘラミガキが稀薄な1665があり、前者は尾上編年Ⅲ－１ないしⅢ－２期、後者はⅢ－３期の所産である。1666は底部片である。見込みには斜格子状ヘラミガキを認める。全面に二次焼成痕を認め、赤色～にぶい黄橙色に変色する。1667・1668は須恵器鉢である。1667は端部を上下に小さく突出させ、重ね積みにより、内面と口縁端部及び外面の色調が異なる。1668に比して含有鉱物量が多く、粗い胎土が選択される。1668は端部を上方へ軽く摘み上げ、口縁部外面にはナデ調整に先行する左上がりの平行叩き痕跡を認める。胎土は緻密で、器表面は瓦質化する。十瓶窯産。1669は土師質土器甕口縁部細片である。口縁部内面は平滑に仕上げられ、端部との境に稜を有する。胎土は粗く、石英・長石の他、多量の赤色粒を含有する。

1843は不明木製品である。基部から二股に分かれ、「レ」状の側面形を呈する。全長は90cmを測り、断面形状は５×６cmの方形である。分かれて延長する側の長さは基部から48cm前後を測り、５×５cmの方形断面となる。基部は土筆状に肥厚し、側面にはちょうな痕を認める。その用途に関しては、木碇ないし碇石を固定する装着部材の可能性が高いと考えられる。

**Ⅸ区ＳＸｃ31(Ｅ区ＳＸ02**、第210～212図)

1670～1675は土師質土器小皿である。1670は口径8.4cmを測り、口縁部は短く開き、端部を丸く収める。1671は口縁部が強く外反し、端部を丸く収める。径８cm。1672は底部から丸みをもって立ち上がり、口縁部は外反する。口径８cm。1673は口縁部が短く開き、端部に向かい漸次先細る。径7.5cm。1674・1675は底部と口縁部境に明瞭な稜を認め、口縁部は短く開く。径８cm前後を測る。以上、小皿はいずれも底部切り離しは回転ヘラ切りである。なお、1675は全面に被熱痕を認める。1676・1677は瓦器皿である。1676は口縁部は直線的に開き、端部のみ強く外反する。1678は土師質土器坏である。口径13.9cmを測り、口縁部は小さく外反する。内

外面に顕著な被熱痕を認め、一部器表面も剥落する。1679～1681は土師質土器椀である。1679は正三角形の高台を有し、底部は高台より突出する。胎土には灰白色の精良な胎土が選択される。1680は細長い高台を有するが、胎土中にはチャートを含有する。全面に被熱痕を受け、調整は不明瞭であるが、外面には指押さえのみ認める。1681は三角形に矮小化した三角形の高台が付く。口縁部外面は指押さえのみの調整であり、瓦器椀の可能性も残る。1682・1683は黒色土器(Ａ類)椀である。1682は口径14.5cm、高台径７cm、器高4.2cmを測り、器高に比して口径の大きい器形を呈する。内面には板ナデ→散漫なヘラミガキ、外面にはヘラミガキを認める。非西村産。1683は外方へ踏ん張る高台を認める。1684は須恵器椀である。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部のみ小さく外反する。内面には４分割ヘラミガキ、外面には回転ヘラミガキを施す。見込みには重ね積みによる高台痕があり、それに伴う色調の変化を口縁端部内外面に認める。1686は吉備系土師器椀である。口径17cmを測り、内面にはコテ当て痕を認める。1685・1687～1690は和泉型瓦器椀である。1685・1687～1689は口縁部が内湾気味に立ち上がり、器高が５～６cmを測る。内外面にはヘラミガキを認め、尾上編年Ⅱ－１～３期に属する。1690は口径16.6cmを測り、器高は４cmを測る。前者より口径がやや大きく、器高は低くなる。外面のヘラミガキも消失し、高台も矮小化が著しい。尾上編年Ⅲ－３期まで下る可能性が高い。1691～1697は中国産磁器である。1691～1693は白磁碗である。1691は高台が細長い逆台形を呈し、見込みには櫛状工具による施文を認める。横田・森田分類白磁碗Ⅴ－４ｂ類。1692は口縁端部が小さく肥厚し、横田・森田分類白磁碗Ⅰ－４類ないしⅡ類に該当する。1693は端部が玉縁状を呈する白磁碗Ⅳ類である。1694は白磁皿である。口縁部は大きく開き、端部のみさらに外反する。見込みには蛇の目釉剥ぎを認め、周縁には段を有する。横田・森田分類白磁皿Ⅲ類。1695～1697は同安窯系青磁碗である。外面には櫛状工具による施文、内面には同工具を用いたジグザグ状文を認める。横田・森田分類同安窯系青磁碗Ⅰ－１ｂ類。1698・1699は須恵器である。1698は十瓶窯産の鉢である。口縁部は内湾気味に開き、端部手前で小さく外反する。端部は上方に強く摘み上げ、口縁帯を認める。外面には平行叩き後、回転ナデ調整を認め、底部外縁のみケズリ状の強いナデ調整を施す。1699は十瓶窯産甕底部片である。外面調整は左上がりの平行叩き後にナデ調整を認め、底部外縁にはケズリ状の強いナデ調整を施す。1698がやや瓦質化するのに対し、1699は堅緻に焼き締まる。1700は亀山系須恵器甕である。底部は平底を呈し、体部は丸みをもって立ち上がる。外面調整には平行叩き、内面調整には指押さえ、横ナデ調整を認める。外面叩きを仔細に観察すると、平行叩きに後出した格子叩きを認める。内面の当て具痕は後出する調整により消失して不明であるが、現状では同心円文は確認できない。なお、底部外縁に施されるケズリ状のナデ調整は認められない。1701は土師質土器甕である。口縁部は「く」字形に屈曲し、端部を四角く収める。胎土中には多量の雲母粒を含み、器表面の光沢を帯びる。1702は土師質土器鍋である。口縁部は体部からにぶく屈曲し、外反する。内面には入念な板ナデ調整、外面には指押さえ後、縦刷毛調整を認める。精良な胎土が選択され、吉備系鍋の可能性が高い。山本編年Ⅱ期の所産であろう(山本1997、以下吉備系土師器鍋に関してはこれに依拠する)。1703は土師質土器鍋である。口縁部は「く」字形に屈曲し、端部を上方に強く、下方に小さく拡張する。内外面には被熱痕を認める。

**Ⅺ区ＳＸｃ33(Ｈ９年度調査区ＳＸ9702、例の落ち込み、**第212・213図)

1704～1709は土師質土器小皿である。口縁部形態にバリエーションを認め、1704は口縁部が長く外反し、1705～1707は短く外反し、1708・1709は短く直立する。底部切り離しはいずれも回転ヘラ切りで、1704・1705・1707・1709に板状圧痕を認める。1710は東播系須恵器坏である。底径4.6cmを測る小さな底部から口縁部は大きく開く。底部には回転糸切り痕を認める。胎土は緻密さを欠き、粒径２mm以下の石英・長石を一定量含む。1711～1713は土師質土器坏である。1711は口縁部が直線的に開き、端部をわずかに外反させる。底部には回転ヘラ切り痕を認める。1712は口縁部は直線的に延びる口縁部であるが、底部との境は極めて不明瞭である。両者の胎土には顕著な差異はないが、前者は浅黄橙色、後者は灰白色の色調を呈する。1713は底部と口縁部境が不明瞭で、見込み周縁はにぶく肥厚する。底部には回転ヘラ切り痕→板状圧痕を認める。1711と同じく、浅黄橙色からにぶい橙色の色調を呈する。1714は黒色土器(Ｂ類)椀である。口径13.2cm、器高4.2cmを測り、口縁部は直線的に開き、口縁部下２cm前後の位置で明瞭に屈曲する。口径に比して、器高が極めて低い形態を呈し、非西村産黒色土器と考えられる。1715～1718は須恵器椀である。口縁部に内湾傾向を認めず、直線的に開く。外面調整は回転ナデ調整により生じた凸部に回転ヘラミガキを施す。高台は断面三角形ないし方形で矮小化し、粗く貼付する。1715・1716は西村産須恵器椀であろう。なお、1715の内面には煤痕の付着を認める。1718は焼成不良により、灰白色から淡黄色の色調を呈し、須恵器椀の可能性を考慮しておきたい。口縁部は直線的に大きく開き、外に踏ん張る高台を有する。1719～1721は吉備系土師器椀である。灰白色の色調を呈する精良な胎土で、粒径３mmを越える石英・長石を少量認める。山本編年Ⅱ期～Ⅲ－１期の所産であろう。1722・1723は和泉型瓦器椀である。

器高は浅く、口縁部の内湾、深椀傾向は認められない。高台の矮小化は著しく、1723は高台径3.4cmと極めて小さい。外面のヘラミガキは消失ないし口縁部付近に数条認める程度であり、内面も同じく簡略化は著しい。尾上編年Ⅲ－２ないしⅢ－３期の所産となろう。1724～1730は中国産磁器である。1724～1728は白磁碗である。1724は口縁端部のみ小さく外反させ、水平面を認める。横田・森田分類白磁碗Ⅴ－４ａ類。1725は口縁部が直線的に開き、端部内外には面を有する。口縁部下内面には沈線を１条認める。横田・森田分類白磁碗Ⅷ－２類。1726・1727は白磁碗Ⅳ類である。口縁部は玉縁状を呈し、底部内面の削り込みは極めて浅く、見込みに段を有する。1728は高台が細長く、逆台形を呈し、見込みには段を有する。横田・森田分類白磁碗Ⅶ類ないしⅧ類。1729・1730は青磁碗である。1729は口縁部外面に櫛状工具による施文、内面には同工具を用いたジグザグ状文、片彫りによる花文を認め、さらに口縁部下２cmには幅広の沈線がある。
横田・森田分類同安窯系青磁碗Ⅰ－１ｂ類に該当する。1730は口縁部は直線的に開き、内面には片彫りによる花文を認める。横田・森田分類龍泉窯系青磁碗Ⅰ－２類。1731～1733は須恵器である。1731は鉢である。口縁部は直線的に開き、端部を極めて小さく外反させる。外面には回転ナデ調整に先行する左上がりの叩き痕跡を認める。十瓶窯産か。1732は東播系捏鉢である。口縁部は玉縁状をなし、砂粒を多く含む粗い胎土が選択される。森田編年第Ⅱ期第２段階の所産になろう(森田1995、以下東播系捏鉢の年代観に関してはこれに依拠する)。1733は鉢とした。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部手前で直立し、四角く収める。底部は平底、未調整である。外面調整は下半に不連続なケズリ調整、上半に回転ナデ調整後のヘラミガキ、内面は回転ナデ調整後に、散漫な間隔でヘラミガキを施す。十瓶窯産の可能性が高い。1734は土師質土器甕である。張りの弱い肩部から口縁部は「く」字形に屈曲し、内湾気味に立ち上がる。端部付近にはわずかに直立傾向を認め、端部を内側に小さく肥厚させる。胎土は粗く、雲母微粒を多く含有し、1701に酷似した胎土である。1735は土師質土器鍋である。逆台形状を呈するであろう体部から口縁部は強く開き、端部を上下に小さく拡張する。内面には顕著な板ナデ調整を認め、口縁端部外面にも同工具を用いた板ナデ調整をかすかに認める。内外面には顕著な被熱痕を認め、煤が付着し、にぶい橙色から明赤褐色に変色する。1736は吉備系土師器鍋である。口径33.6cm、器高は復元では14cm前後を測る。口縁部はボール状の体部から「く」字形に屈曲し、端部を横方向に引き出す。体部内面には入念な板ナデ調整、外面上半には指押さえ→縦刷毛、下半には指押さえ→横刷毛調整を認める。口縁部外面にも縦刷毛を認めるが、口縁部を整形するナデ調整により消失しつつある。その前後関係から、口縁部を屈曲させた段階は外面調整後であることが窺える。灰白色の比較的精良な胎土が選択される。外面全面には煤が付着する。山本編年Ⅲ－１期の所産である。1737は土師質土器移動式竈とした。口縁部は直線的に内傾し、端部を丸く収める。胎土中には多量の雲母粒を含み、1701・1734の胎土に酷似する。内面を中心に煤が付着し、端部から口縁部下2.5cmまでに多く認める。外面には煤痕は認められないが、一部赤化する。

**Ⅷ区ＳＸｃ34・41(Ｄ２・３区中世護岸**、第213～215図)
出土遺物の整理不足から、ＳＸｃ34と41が混在したレイアウトとなった。ＳＸｃ41出土遺物は、1745・1752・1753・1759・1761～1764・1766・1773・1775となり、それ以外がＳＸｃ34となる。

1738～1748は土師質土器小皿である。1738は口縁部が底部から内湾気味に短く立ち上がり、端部を丸く収める。回転力を利用するが、器壁は厚く、端部成形は甘い。1739は底部からにぶく屈曲し、口縁部は強く開く。見込み周縁には明瞭な窪みを認める。1740は口縁部がやや長く外反し、見込み周縁に強い回転ナデ調整を加え、内面断面形状は箱形を呈する。1741・1742は口縁部が短く外反し、見込み周縁が盛り上がる。1743～1748は外面底口縁部境に明瞭な稜を認め、口縁部は比較的長く外反する。底部にはいずれも回転ヘラ切り痕を認め、1740・1744・1745・1748には板状圧痕を認める。1749～1751は瓦器皿である。口径は８cm代を測る。1752～1755は土師質土器坏である。含有鉱物に顕著な差異は認められないが、1752・1753は浅黄橙色、1754・1755は橙色の色調を呈する。前者は口径14.6cm、8.5cm前後、器高3.5～3.8cmを測り、口縁部は直線的に開く。底部には回転ヘラ切り痕を認め、1753には板状圧痕を残す。1754は口径14cm、底径5.7cm、器高3.6cmを測り、口縁部は直線的に開き、端部のみ小さく外反する。法量・器形は前者に近似するが、口縁端部形態や口縁部の回転ナデ調整の凹凸が強い点に差異を見い出せる。底部には回転ヘラ切り→板状圧痕を認める。1755は底部と口縁部境が極めて不明瞭で、底部には静止糸切り痕を認める。1756は土師質土器椀である。口縁部は直線的に開き、端部を丸く肥厚させる。高台断面形状は方形を呈し、径5.6cmを測る。見込み及び口縁部外面、口縁端部内面には重ね積み痕を認め、赤く発色する。吉備系土師器椀と考えられるが、粒径の大きい石英・長石は認められない。色調は淡黄色を呈する。1757は黒色土器(Ａ類)椀である。高台は外方へ踏ん張り、断面形状はやや丸みを帯びる。見込みにはヘラミガキを認める。1758は須恵器椀である。外面には被熱痕を認め、一部赤化する。1759は吉備系土師器椀である。端部は丸く肥厚し、口縁部下３cmに明瞭な屈曲点を認

める。高台高は１㎝を測り、断面形状は細く長い。内外面にはヘラミガキ、見込みには重ね積み痕跡を認める。胎土中には粒径５㎜を上回る石英・長石を少量含み、浅黄橙色の色調を呈する。山本編年Ⅰ－３期の所産であろう。1760は楠葉型瓦器椀である。口縁部は直線的に開き、端部内面に沈線を認める。高台は矮小化が著しく、断面三角形を呈する。内外面にはヘラミガキ、見込みには連結輪状ヘラミガキを認め、その幅は１㎜以下と極めて細い。1761～1766は和泉型瓦器椀である。外面ヘラミガキの有無によって、1761～1764と1765・1766に大別でき、器形は前者が内湾傾向をかすかに指向し、器高も５㎝前後を測るのに対し、後者は器高が浅く、口縁部が大きく開く形態を呈する。さらに前者は外面ヘラミガキ範囲による細分が可能である。1761・1763はヘラミガキは下半には及ばず、1762・1764は散漫ではあるが、ほぼ全面に認める。器形・外面ヘラミガキの範囲を重視すると、1762・1764が尾上編年Ⅱ－２ないしⅡ－３期、1761・1763がⅡ－３ないしⅢ－１期、1765・1766はⅢ－２ないしⅢ－３期の所産であろう。1767～1770は中国産白磁碗である。1767は口縁部が外反し、内面端部下に沈線を認める。横田・森田分類Ⅴ－１類。1768は口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部を小さく横方向に引き出す。内面口縁部下には沈線を認め、残存部位全面に白磁釉を施釉する。横田・森田分類Ⅴ－４ａ類。1769・1770は口縁部が玉縁状をなし、高台は厚く、削り込みは極めて浅い。見込みには明瞭な段を認める。1769は外面下半に特異な回転ヘラケズリを認める。器壁に当てるヘラ状工具の角度に起因し、そのケズリ痕跡が口縁部中位と下位において傾きを違え、矢羽状を呈する結果となる。なお、轆轤回転方向に変化は認められない。横田・森田分類白磁碗Ⅳ－１ａ類。1771・1772は十瓶窯産須恵器である。1771は鉢である。体部は直線的に開き、口縁端部を四角く収める。外面には回転ナデ調整に先行する格子叩きを認め、底部外縁にはケズリ状の強いナデ調整を施す。焼成は良好であるが、須恵質焼成ではなく、瓦質化する。片口部を有し、内底部を中心に摩耗する。1772は甕である。肩部の張りの弱い体部からにぶく屈曲し、口縁部は大きく開く。外面調整は体部には横方向の格子叩き、口縁部には回転ナデ調整に先行する右上がりの格子叩きを認める。焼成は良好で、堅緻に焼き締まる。1773・1774は土師質土器甕である。1773は直線的に外傾する体部から「く」字形に屈曲し、口縁部は内湾気味に開く。内面には明瞭な稜を認め、端部を丸く収める。胎土中には夥しい量の雲母粒を認める。同様の胎土は前述した限りでは、1701・1734・1737で確認できる。1774は体部はボール状を呈し、口縁部は「く」字形に屈曲する。体部外面上半には縦刷毛、下半には同一工具による横刷毛を認める。縦刷毛は口縁部まで及ぶが、後出するナデ調整により消失しかかる。胎土は極めて粗く、粒径２㎜前後の石英・長石を多量に含む。全面に被熱痕を認め、赤黒色に変色する。1775は管状土錘である。

**ＳＸｃ35（Ｄ１区中世護岸**、第215図）

1776・1777は土師質土器小皿である。底部と口縁部境が明瞭で、口縁部は内湾気味に開く。底部は回転ヘラ切りによる切り離しで、1777には板状圧痕も認める。1778は和泉型瓦器椀である。口縁部はわずかに内湾し、復元による限り底部径は極めて小さい。外面ヘラミガキは疎らで、数条認めるに過ぎない。尾上編年Ⅲ－１期の所産であろう。1779は中国産白磁碗である。口縁部は直線的に開き、端部を横方向に強く屈曲させる。横田・森田分類白磁碗Ⅴ類。1780は東播系捏鉢である。端部を内上方に強く突出させ、口縁帯を形成する。重ね積みにより、口縁帯外面のみ色調に差異を認める。森田編年第Ⅱ期第１段階の所産であろう。

**Ⅷ区ＳＸｃ42（Ｄ１区ＳＫ07**、第215図）

1781は土師質土器小皿である。口縁部は長く外反し、外面底口縁部境は明瞭である。底部には回転ヘラ切り痕を認める。1782は瓦器皿である。底部が強く突出し、口縁部は大きく外反する。見込みには平行線状ヘラミガキを認める。1783は土師質土器椀とした。高台径は７㎝と広く、高台は外方へ強く踏ん張る。内面には被熱痕を認め、煤がわずかに付着する。土師質土器椀としたが、この煤痕を評価すると、黒色土器（Ａ類）椀の可能性も残る。1784・1785は和泉型瓦器椀である。1784は内湾傾向を認め、口径に対し器高が高い形態を呈する。高台径は5.9㎝と広く、断面三角形を呈する。外面全面には疎らではあるが、ヘラミガキを認める。1785は口径が大きく、器高が浅い形態を呈し、外面のヘラミガキは認められない。1784は尾上編年Ⅱ－２ないしⅡ－３期、1785はⅢ－２ないしⅢ－３期の所産であろう。

**Ⅷ区ＳＸｃ38（Ｄ３区ＳＸ01**、第215図）

1786は須恵器椀である。内外面にはヘラミガキを認める。

**Ⅷ区ＳＸｃ39（Ｄ３区ＳＸ02**、第215図）

1787は土師質土器小皿である。底部は厚みを有し、明瞭に突出する。口縁部は強く外反し、外面底口縁部境に明瞭な稜線を認める。

**Ⅷ区ＳＸｃ40（Ｄ２区ＳＸ03**、第215図）

1788は器壁厚がやや厚いが瓦器椀と考えた。残存部位が小さく、元来の形状を正確には示さないであろうが、口径が大きく、器高が低い形態となる。口縁部は内湾気味に大きく開き、内外面にはヘラミガキを認め

る。

**Ⅶ区ＳＸｃ42（Ｄ４区ＳＫ07**、第216図）

1789は土師質土器小皿である。口縁部は短く開き、端部は先細る。1790～1793は土師質土器坏である。いずれも口径13cm代、器高は３cm前後を測る。口縁部形態は1790・1791が内湾するのに対し、1792・1793は直線的に開き、端部のみ小さく外反する。前者は二次焼成を受け、元来の色調を留めないが、後者は灰白色の色調を呈する。いずれも底部には回転ヘラ切り痕→板状圧痕を認める。1794・1795は須恵器椀である。1794は口径に比して器高が低い器形を呈する。外面には回転ヘラミガキ、内面にはヘラミガキを認め、端部内外面には重ね積み痕跡を残す。腰部から底部にかけての器壁は厚く、西村産須恵器椀とするには躊躇を覚える。1795は器高に比して、口径がやや大きいが、口縁部にはかろうじて内湾傾向を認める。径口指数34。内面のヘラミガキの有無は不明であるが、外面には回転ナデ調整により生じた凸部にのみ回転ヘラミガキを認める。佐藤分類ＡⅡ－７型式に該当する西村産須恵器椀であろう。1796は瓦器皿である。口縁部の歪みは著しく、平面形は楕円形を呈する。1797は瓦器椀である。高台は断面三角形に矮小化し、見込みには平行線状ヘラミガキを認める。1798は土師質土器移動式竈である。口縁部は直線的に外傾し、端部を内側に小さく肥厚させる。外面には指押さえ→縦刷毛調整を施し、端部のみナデ調整を認める。内面には横方向の板ナデ調整を全面に認める。胎土中には多量の雲母微粒を含有する。

**Ⅶ区ＳＸｃ48（Ｄ４区ＳＫ08**、第216図）

1799は土師質土器小皿である。口径8.3cmを測り、口縁部は小さく外反する。見込み周縁には凹凸の激しいナデ調整、底部には回転ヘラ切り痕を認める。

**Ⅶ区ＳＸｃ44（Ｄ５区中世護岸**、第216図）

1800は土師質土器小皿である。口縁部は内湾し、外面に段を有する。底部切り離しは回転糸切り痕により、見込みにも回転糸切り痕らしき痕跡を認める。1801は土師質土器坏である。口縁部は直線的に開き、端部を丸く収める。底部調整不明。1802は吉備系土師器鍋である。口縁部は「く」字形に屈曲し、外反気味に開く。端部は上方に小さく引き出し、下方を肥厚させる。内面には顕著な板ナデ調整、外面には指押さえ後、縦刷毛調整を認める。胎土中には角閃石の可能性が高い光沢のある方柱状の黒色の鉱物を一定量認める。端部の特徴から山本編年Ⅱ期の所産と考える。1803は土師質土器移動式竈と考えた。断面形状はＬ字形を呈し、外側のみ煤の付着を認める。竈前面の鍔部と体部の接合部分である可能性が高い。胎土には多量の雲母粒を含有する。

**Ⅶ区ＳＸｃ45（Ｄ５区ＳＸ02**、第216図）

1804・1805は中国産青磁椀である。1804は外面に櫛状工具による放射線状文、内面端部下2.3cmの位置に沈線を認める。同安窯系青磁椀Ⅰ－１ｂ類。1805は外面に鎬のない蓮弁文を認め、龍泉窯系青磁椀Ⅰ－５ａ類に該当する。1806は瓦質焼成の土鈴である。鈴部は円形をなし、底部に平坦面を有する。円錐状の吊り手に穿孔を認め、底面には線上の切り込みを入れ、その両端には円孔が連続する。外面には縦方向のヘラミガキを認める。混入品か。

**Ⅶ区ＳＸｃ46（Ｄ５区ＳＫ06**、第216図）

1807は瓦器皿である。1808は西村産須恵器椀であろう。高台は外方へ踏ん張り、外面には回転ヘラミガキを認める。焼成不良のため、灰白色の色調を呈する。1809・1810は瓦器椀である。1809は口縁部が大きく開き、器高が浅い器形を呈する。外面上半にヘラミガキを認め、尾上編年Ⅲ－１ないしⅢ－２期の所産となろう。1810は底部片である。見込みは広く、斜格子状ヘラミガキがあり、外面にも分割の可能性も残るヘラミガキを認める。1811は土師質土器甕である。直立する体部から「く」字形に屈曲し、口縁部は内湾気味に開く。端部のみ小さく外反し、四角く収める。器形的には1701に通じるが、胎土中の雲母含有量は多くない。外面には被熱痕を認め、黄灰色に変色する。

**Ⅶ区ＳＸｃ47（Ｄ５区ＳＸ01**、第217図）

1812は吉備系土師器椀である。口縁端部には横ナデ調整が加えられ、端部下1.5cmに不明瞭ながら屈曲点を認め、端部を小さく外方へ引き出す。高台径は5.5cmを測り、断面形状は細く、高い三角形を呈する。内外面にヘラミガキは認められず、山本編年Ⅱ期の所産となろう。内外面に煤痕を認め、被熱を受けていることが窺える。1813は和泉型瓦器椀である。口縁部は大きく開き、器高は低い。径口指数は32。高台は矮小化が著しく、断面形状は小さな三角形を呈する。外面のヘラミガキは省略されつつあり、上半にのみ認める。なお、高台内には釘描きによる「×」を認める。尾上編年Ⅱ－３ないしⅢ－１期の所産である。1814は中国産白磁椀Ⅳ類である。

**Ⅰ区ＳＸｃ50（Ｃ区赤石**、第217図）

1815～1821は土師質土器小皿である。口縁部形態を中心にバリエーションを認める。1815は底部からにぶく屈曲し、口縁部は短く開く。1816・1817は底部が小さく突出し、口縁部は内湾気味に開く。1818は外面底口縁部境が明瞭で、口縁部は短く外反し、端部は先細る。1819は底部が突出し、口縁部は細く、内湾する。1820・1821は口縁部が分厚く、長く開く。いずれも底部切り離しは回転糸切りにより、1819には板状圧痕を

認める。1822・1823は瓦器皿である。1822は見込みの遺存状況は良好であるが、ヘラミガキは認められない。1824・1825は土師質土器坏である。1824は底部からにぶく立ち上がり、口縁部は内湾気味に開き、端部を丸く肥厚させる。口径に比して底径が小さく、口縁部と底部境が不明瞭である。1825は破片が小さく径復元に問題を残すが、口径が比較的大きく、底径も広い。口縁部は底部からにぶく立ち上がり、小さく外反する。いずれも回転ヘラ切りにより底部切り離し手法で、1824には板状圧痕も認める。1826～1828は須恵器椀である。1826・1827はわずかに内湾傾向を認めながらも口縁部は大きく開く。後者は全面に被熱痕を認め、前者の外面には回転ヘラミガキを認める。西村産須恵器椀。1828は底部片である。断面四角形の高台を粗く貼付し、見込みには板ナデ、外面には回転ヘラミガキを認める。西村産須恵器椀の可能性も残すが、胎土に緻密さを欠く。1829～1831は和泉型瓦器椀である。1829・1830は口縁部が大きく開き、器高が低い形態を呈する。いずれも高台の矮小化が著しく、外面のヘラミガキも確認できない。尾上編年Ⅲ－２ないしⅢ－３期の所産である。1831は底部片である。見込みは広く、口縁部が大きく開く形態となろう。残存部位外面にはヘラミガキは確認できない。1832・1833は土師質土器椀である。1832は口縁部が大きく開き、端部下2.5cm付近に明瞭な屈曲点を認める。口径に比して、器高が浅い形態を呈し、高台は細く、高い。胎土は灰白色の色調を呈するが、石英・長石の量がやや多い。見込みには重ね積み痕跡を認める。吉備系土師器椀の可能性を考えたいが、胎土に問題を残す。吉備系土師器椀ならば、山本編年Ⅲ－１期の所産になろう。1833は高台径6.6cmとやや広く、細長い形状を呈する。胎土は在地産の土師質土器小皿に酷似する。1834は吉備系土師器椀である。高台は細長く、見込みには重ね積みによる赤化した高台痕を認める。粒径５mm前後の石英・長石をごく少量含み、吉備系土師器椀であることは疑いない。1835～1837は中国産磁器である。1835は白磁碗である。口縁部は直線的に開き、端部を横方向に小さく引き出す。内面には花文を彫り込む。白磁碗Ⅴ－４ｂ類。1836は白磁碗である。見込みには段を認め、高台の削り込みはやや深い。Ⅳ－１類。1837は青磁碗である。内面には蓮葉文の片彫りを認め、龍泉窯系青磁碗Ⅰ－２ｂ類に該当する。1838・1839は須恵器甕である。1838は口縁部が大きく外反し、端部を横方向に引き出す。外面には回転ナデ調整に先行する格子叩きを認める。須恵質に還元し、内外面には自然釉が降灰する。1839は直線的に開き、端部を上方へ摘み上げ、下方に引き出して拡張する。外面にはナデ調整に先行する左上がりの平行叩きを認める。焼成は瓦質焼成である。亀山系須恵器の可能性が高い。1840は土師質土器甕である。口縁部は強く外反し、端部に向けて漸次先細る。1841は吉備系土師器鍋である。口縁部はにぶく屈曲し、端部を横方向へ引き出す。内面には顕著な板ナデ調整を認め、外面は指押さえ後、縦刷毛を粗く施す。山本編年Ⅲ－１期の所産である。1842は土師質土器鍋である。体部は口縁部手前で短く直立し、口縁部は大きく開く。口縁部と体部境内面には明瞭な凸部を認める特徴的な器形である。端部は上下に小さく肥厚させ、端面には板ナデ調整を認める。外面には煤が付着する。

## 第8節　攪乱出土遺物(第219・220図)

1844～1851は攪乱土坑出土遺物である。1844は肥前系磁器碗である。外面及び口縁部内面には鉄釉、内面には透明釉を施釉する。1845は土師質土器坏である。口縁部は内湾気味に立ち上がり、外面底部と口縁部境が極めて不明瞭である。見込み周縁にはナデ調整による明瞭な凹線を認める。底部切り離しは回転糸切りにより、「わ」の墨書を認める。

1846～1850は軒丸瓦である。1846・1849は珠文径が大きく、明瞭な巴頭から尾は細く延びる。1847はやや不明瞭な巴頭から尾は円形を指向して巻き込む。珠文数は12個を数える。1848は肥大化した巴頭から尾は「,」状に延び、径5.5cm前後の円形を指向する。1850は明瞭な巴頭から尾は細長く延びる。珠文数は9個と少ない。

1852～1877は攪乱ほか出土遺物である。焼塩壷、中国産磁器、在地産陶磁器、石製品を中心に図化した。出土遺構については観察表に記載しているため、ここでは遺物のみの観察を行う。

1852～1855は焼塩壷である。1852・1853は輪積み成形により、口縁部内面に強いナデ調整を加え、外面はわずかに窄まる。体部外面にはわずかに縦方向の面を認め、内面には布圧痕が残る。いずれも胎土は橙色の色調を呈し、特徴的な鉱物として、チャートを含有する。1852は2ピースによる底部成形がなされ、外面に刻印を認める。刻印の内容は判読できないが、一重枠内に「天下一堺ミなと藤左衛門」銘である可能性が高い。1853の底面には布圧痕を認める。1854・1855は板作りにより、口縁部は印籠形を呈する。胎土中には雲母細粒を一定量含有し、にぶい橙色の色調を呈する。1854の体部外面には一重枠に「泉湊伊○」の刻印を認める。1856～1859は焼塩壷蓋である。1856・1857は小皿を天地逆にしたような器形を呈し、1856の天井部内面には布圧痕を認める。1858・1859は円盤状を呈し、下方の外周を短く突出させ、天井部外面は水平に仕上げる。内面には布圧痕を認める。1859の胎土中には雲母粒を一定量含む。1860～1862は漳州窯系五彩手鉢ないし盤である。いずれも灰色の色調を呈する磁器質な胎土に青味を帯びた透明釉を厚く施釉する。1860は内外面に花弁文が赤・緑・黒の上絵具を用いて上絵付けする。1861は内面にのみ上絵を認め、赤・緑・黒による花弁文を認める。1862は底部片である。底面には同心円状のケズリ痕を認め、粗い砂が付着する。見込みには赤・緑・黒？の絵薬により鳳凰文らしき文様を上絵付けする。1863は漳州窯系磁器皿ないし鉢底部片である。高台は頑丈で、口縁部は大きく開き、見込みに明瞭な段を認める。畳付を含め、内外面全面に緑灰色を呈する透明釉を厚く施釉し、外面には虫喰い(ピンホール)が目立つ。畳付から高台内には粗い砂(籾殻か？)が付着する。仔細に観察したが、上絵は確認できない。1864は肥前系磁器碗である。高台は高いU字形を呈し、底部の厚みは9㎜と分厚い。畳付内外を中心に砂が多く付着する。外面には圏線、見込みには花弁文を赤を主体とした絵薬で上絵付けし、一部緑の可能性が高い絵薬も認める。1865は磁器鉢である。口縁部は二段階に立ち上がり、端部を丸く収める。内外面縁文様には赤黒い絵薬による圏線、口縁部外面には柿色の絵薬による丸文と四方襷文をそれぞれ上絵付けする。産地不明。1866・1867は瀬戸・美濃系陶器(志野)向付である。1866は口縁部片である。口縁部は直立し、外面には鉄絵による下絵を認める。1867は底部片であろう。厚みは0.8cmを測り、内外に長石釉を厚く施釉する。底面にはケズリ調整による稜を認める。1868は瀬戸・美濃系陶器皿である。口縁部は短く直立し、端部を小さく外反させる。1869～1873は軟質系施釉陶器である。いずれも極めて緻密な粉状を呈する胎土で、白色の色調を呈する。1869は異形器形である。外面には型成形による花文と斜格子文、格子文を認め、全面に薄く緑釉を施釉する。1870は碁笥底を呈する皿であろう。内面には型成形による花唐草を陽刻し、全面に緑釉と黄色の釉を施釉する。1871は浅鉢状の器形の口縁部として図化した。体部は直立し、幅1cm強を測る面取り部分を経て、口縁部は内側に直角に屈曲する。口縁部上面には蓮弁文を型成形による陰刻で表現する。全面に緑釉の施釉を認める。1872は大皿とした。型成形の焙烙に似た器形を呈し、外面口縁部と体部境には2条以上の突線を認める。内面及び体部外面には黄色釉、端部外面及び口縁部外面には緑釉を施釉する。以上、1869～1872は源内焼の可能性を考えておく必要があろう。1873は軟質系施釉陶器把手付き皿である。平面形は六角形を呈し、口縁部は小さく内湾する。残存部位では1箇所のみ端部に取り付く把手を認め、対置部にも把手を有する可能性が高い。見込みには黄色釉を基調とし、輪郭には緑釉を用いた火焔文を3箇所に認め、さらに菊花文・ジグザグ状文をスタンプにより刻印する。畳付を除く全面に淡黄色の色調を呈する灰釉を施釉し、釉肌の光沢は著しい。産地不明。1874は備前小壷である。肩部に明瞭な張りを認め、口縁部は短く直立する。内面に付着物を認め、お歯黒壷の可能性が高い。1875はミニチュア土製品蓋である。径3.3cmを測り、上面には「キ」状の突起があり、羽釜の蓋になろう。型成形により、器表面には胡粉の塗布を認める。1876は石製硯である。海から墨堂にかけての部分で、墨痕跡を認める。底面には釘描きによる「中井」という文字を認める。1877はチャート製の火打ち石である。全面に剥離痕、敲打痕を認める。

**攪乱ほか出土京・信楽系陶器**(第221～223図)

**Ⅵ区攪乱(路床下)**　1878・1879はいずれも灰白色の色調を呈する磁器質な胎土を選択し、緑灰色の灰釉を施す。前者には笹葉文、後者には草文＋井桁文の上絵付けを認める。

**Ⅵ区1.5m精査**　1884は文様パターンが1879に酷似する。1885は小杉碗である。外面には銹絵による根無し若松文を認める。やや大振りで、渦高台をなす。胎土は陶器質な質感を呈し、黄色系の色調となる。

**Ⅵ区ＳＸｃ13**　1889は異形器形とした。口縁部は大きく開き、端部に口銹を施す。内面には銹絵染付による草花文を認める。胎土は灰白色の色調を呈し、その素地は緻密な“まったり”胎土となる。1890・1891は銹絵染付碗である。前者には松文、後者には草花文(葡萄か)を認める。1894・1895は平碗である。見込みには意匠不明の草花文を描き、上絵には緑・赤色＋「金」の使用を認める。1896は碗である。肥前系磁器と識別できない灰白色の緻密な胎土が選択され、内外面にはガラス質状を呈する釉を施す。1897は高台径が著しく小さい碗である。

**Ⅱ区側溝中**　1912は銹絵染付碗である。外面には草花文を認める。

**Ⅱ区攪乱**　1915は灰白色の色調を呈する“まったり”した質感の胎土で、灰白色の釉を厚く施す。外面には赤色絵薬による草花文を認める。1916は碗である。濁黄白色系の色調を呈する灰釉を厚く施す。外面には三方に「三葉葵」を認め、上絵は消失気味であるが、「金」の絵薬による輪郭線を留める。1917は天目碗形を呈する碗である。灰色の色調を呈する“まったり”した質感の胎土で、灰白色の灰釉を厚く施す。高台脇には連続する鎬を認め、灰釉に先行する鉄釉を施す。1920は銹絵染付碗である。外面に草花文を認める。1911と同一個体の可能性が高い。1924は灰白色の色調を呈する“まったり”した質感を呈する胎土で、灰白色の釉を厚く施す。外面には赤黒い絵薬による宝珠文を認める。

**Ⅲ区攪乱**　1923は銹絵染付碗である。灰白色の磁器質な胎土が選択される。

**Ⅷ区1.1m精査**　1925は小型の碗である。高台脇には明瞭な段を認め、外面には銹絵により草花文？を描く。顕著な渦高台となり、畳付には切り込みを認める。

**Ⅷ区攪乱**　1926は火入れである。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部を内側へ小さく肥厚させる。外面及び口縁部内面には灰釉、外面には緑色の垂れ掛けを認める。1928は碗である。腰部に張りを認め、口縁部が外反する形態を呈する。胎土中にわずかな間隙を認め、灰黄色の色調を呈する。内外面には灰黄色の灰釉を薄く施し、外面には橙色の絵薬による「三葉葵」を認める。

**Ⅶ区攪乱**　1930・1931は灰白色の色調を呈する“まったり”した質感を呈する胎土で、灰白色の釉を厚く施す。1930は瓶で、口縁部に花弁状の加飾を施す。1931は香炉で、把手の破損痕跡を認める。1932は異形器形、宝珠の置物であろう。胎土は間隙を認める素地で、灰黄色の色調を呈する。外面にはガラス質状を呈する灰釉を薄く施す。上下別作り。1933は香炉である。灰白色の色調を呈する“まったり”した質感を呈する胎土で、灰白色の釉を施す。赤・青・緑色＋「金」の絵薬による繊細な描写の草花文を認める。

**Ⅶ区壁面中**　1934は火入れである。

**Ⅰ区攪乱**　1936は碗である。腰が張り、口縁部が直立する形態の碗である。胎土は灰白色の色調を呈する“まったり”した質感となり、内外面には白泥の塗布を認める。1937は碗である。高台脇までの施釉を認め、露胎部分は赤く発色する。

**Ⅸ区攪乱**　1939は茶入れである。底部には回転糸切り痕、底部外縁には超小型の「破風高」印を認める。外面には鉄釉を厚く施す。理兵衛焼。露胎部分は赤く発色するが、素地は灰色の色調を呈する“まったり”胎土である。

**Ⅵ区　整地層(0.8～1.4m)**　1952は瓦葺き屋根の置物である。胎土は黄橙色の色調を呈し、素地は通常の土器の胎土と大差はない。瓦葺き屋根は、軒丸瓦と軒平瓦を組み合わせたもので、軒桟瓦は認められない。軒丸瓦瓦当面には巴文、軒平瓦には左右に一転する簡略化した唐草文を認め、瓦当面にのみ緑色の釉を釉下彩として施す。屋根には透明釉ないし灰釉を薄く施釉する。軒には垂木を粘土帯を貼付することにより表現し、その剥落痕には刻目を認める。軒部は無釉であるが、黒色の不明材を塗布する。類例として、栗林公園にある『九重塔』が挙げられ、細部の微細な構造を含めて酷似する。

# 第３章　総括

## 第１節　中世礫敷遺構について

第２章第４・６節では、各調査区で検出した遺構について個別に報告した。ここでは、それを踏まえ高松城跡(西の丸町地区)における中世礫敷遺構について検討する。なお、西の丸町Ｂ地区でも同様の遺構が確認されている(佐藤2003刊行予定)。方形状に張り出した旧地形の緩斜面部に安山岩板石を張り付けるように敷設した遺構で、その脇には数列の横木を杭で固定した木組みも存在する。報告者によって詳細な検討が加えられており、合わせて参照していただきたい。

### １．遺構

第225図に西の丸町地区における中世礫敷遺構の分布を示した。面的に安山岩板石の広がりを認める遺構を礫敷遺構、土坑状の掘方を有するものを不明遺構として報告した。それぞれ不規則に分布するように見えるが、旧地形を考慮すると、極めて興味深い配置状況となる。不明遺構はⅦ・Ⅷ区とⅨ区中央部で確認でき、その検出面は中世段階の基盤層となる(基本層序Ⅰ層)。礫敷遺構はⅧ区では北端部と南端部に位置し、Ⅸ区も同じく北端部と南端部にあり、南端部の礫敷遺構はⅩ区に連続する。さらに、Ⅰ区西端部やⅪ区北東隅にも分布する。その検出レベルは、Ⅷ区北端部では北へ傾斜し、南端部はわずかではあるが南に傾斜する。Ⅸ区南端部は北西へ、Ⅸ区南端部からⅩ区は南にそれぞれ傾斜する。Ⅰ区では北西方向へ傾く。つまり、礫敷遺構はいずれも旧地形の斜面地に分布することになる。一方、不明遺構は低地に挟まれた現状での平坦地に分布し、いずれも検出面は基盤層となる。こうした状況を考慮して、第225図では礫敷遺構を破線で繋いだ。不明遺構が分布する破線の内側は比較的安定した旧地形の高い箇所に位置し、礫敷遺構は緩やかに傾斜する斜面部に分布するという旧地形の復元が可能である。同図には、西の丸町Ｃ地区で検出した最も南に位置するＳＺｃ01の石垣前面ラインを表現した。高松に入部した生駒氏が高松城築城時に構築した石垣に該当し、16世紀末の構築年代が付与できる。高松城は第４図の『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』にあるように海に北面し、西外曲輪の北辺をなすＳＺｃ01の北部が海域であったことは疑いない。ＳＺｃ01と復元した旧地形の北辺ラインが合致する点は極めて示唆的であり、復元した旧地形は、当時の汀線に該当すると考えられる。Ⅷ区からⅦ区南半部には、細長く延びる砂州状の突出部を認め、Ⅸ区中央部でも短く西に突出する。Ⅹ区南半やその南に位置する高松城跡(西の丸町Ａ地区)では、礫敷遺構は確認できず、北東にわずかに突出するＢ地区ＳＸｂ16が最南端に位置する礫敷遺構となる。おそらくは、ここから内湾気味に湾入した旧地形であったと推され、Ｂ地区ＳＸｂ16とＣ地区礫敷遺構群は水域により画されていたと考えられる。時代はやや下るが、1650年代前半に描かれた『高松城下図屏風』では、西外曲輪の中央に位置する鍵形街路の直上にＢ地区ＳＸｂ16が位置し、西外曲輪北辺に描かれた屋敷の南付近が礫敷遺構北辺の汀線に相当する(第６図)。この絵図では、外堀内側の城内は区画整備が進み旧地形を窺うことはできないが、城外にはかろうじて旧地形を確認できる。なかでも、外堀の西側に広がる汀線は示唆的である。潟とは呼称できないが、内湾気味に入り組んだ状況が窺え、海域には砂州状に細長く延びる地形も認める。こうした内容は、西の丸町地区で検出した中世段階の旧地形を少なからず反映するものと考える。

### ２．出土遺物

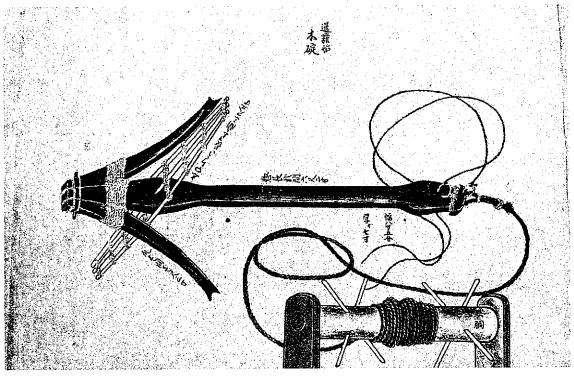
出土遺物の年代観は、和泉型瓦器椀は尾上編年Ⅲ－１期～Ⅲ－３期(尾上1983)、東播系捏鉢は森田編年第Ⅱ期第２段階(森田1995)、吉備系土師器椀は山本編年Ⅱ期～Ⅲ－１期(山本1993・1997)、輸入磁器は龍泉窯系青磁碗・同安窯系青磁碗ともにⅠ類碗を認め、山本氏のＣ期後半が主体を占め、Ｄ期の後半の標識磁器である龍泉窯系青磁碗Ⅰ－５類も認める(山本1995)。よって、おおむね12世紀後半～13世紀前葉を主体とした所属時期を想定することができる。Ｂ地区ＳＸｂ16では、12世紀前半が主体となり一部12世紀後半まで及び、明瞭に所属時期が分かれる。

第２表に一定量の遺物量を認める礫敷遺構、不明遺構からの出土遺物の産地別器種組成をまとめた。破片数計測を行い、鍋や甕といった大型品の比率が高くなる可能性も残すが、出土遺物の様相を考える有効な手段と考える。また、出土遺物の特徴を明確にするため、松並・中所遺跡Ⅲ区Ｂ・ＣＳＤ01出土遺物との比較を第226図で行った。松並・中所遺跡は、高松平野の北部に位置し、高松城跡(西の丸町地区)から直線距離で3.5㎞しか離れていない(松本2000)。Ⅲ区Ｂ・ＣＳＤ01は屋敷地を区画する溝で、出土遺物は12世紀末～13世紀前葉に位置付けられる。以下、Ｃ地区礫敷遺構と松並・中所遺跡出土遺物を比較しつつ、その特徴について検討する。産地別器種組成では、在地産と考えられる土師質土器の比率が少なく、逆に搬入品がそれを確実に上回る組成を占める。遺物組成２において、供膳具における在地系土器と搬入品の比較を行っているが、松並・中所遺跡とは正反対の内容となる。ここに礫敷遺構出土遺物の最大の特徴を認める。なかでも、瓦器椀・Ⅲの比率は37.4％を数え、松並・中所遺跡の２倍近い数値を占める。その大多数は和泉型瓦器椀となり、Ｂ地区ＳＸｂ16で一定量確認されている楠葉型瓦器椀は皆無に等しく、時期差を反映すると考える。また、吉備系土師器も椀・鍋を中心に一定量確認でき(６％)、松並・中所遺跡に比して高い数値を占める。一方、中

国産輸入磁器は約２％を占め、白磁が青磁の比率を上回る。松並・中所遺跡では0.6％と低いが、青磁を上回る白磁の組成や搬入される器種に差異は見出せない。東播系須恵器も同様にＣ地区では捏鉢のみの確認に留まる(Ｂ地区ＳＸｂ16では小皿・坏・甕が確認される)。その比率も0.7％となり、松並・中所遺跡よりわずかに高いに過ぎない。須恵器椀では既に指摘されているように(古野ほか2000)、十瓶・西村産須恵器椀が一定量確認できるが、非十瓶・西村窯の椀もあり、両者が混在した状況を示す。松並・中所遺跡との比較では、高い数値を示すが、黒色土器を加えた比率では、ほぼ同数となり、消費された状況を想定したい。

遺物組成３として、機能別組成をまとめた。松並・中所遺跡に比して、供膳具比率がわずかに高く、煮沸具組成が低い傾向を認めるが、顕著なものではない。

また、土器・陶磁器以外に注目すべき出土遺物が２点ある。第１はＸ区ＳＸｃ30で検出した報文番号1843として図化した木製品である。基部から二股に分かれ、「レ」状の側面形態を呈する。その用途については不明な点が多いが、「木碇」ないし石を装着する碇部材と考える。前者は松浦資料博物館蔵の『外国船具図巻』に所載された碇に類例を認める(小川2001)。後者の類例は民俗例として散見できる。なお、舟を着岸させる際に用いるフックの可能性も残る。いずれにしても、舟に関連した遺物と考えられる。第２はⅨ区ＳＸｃ24で検出した和鏡と石仏頭部片である。掘方を有する土坑状の不明遺構から、和鏡、石仏頭部が出土し、共伴遺物として、同安窯系青磁碗、和泉型瓦器椀を認める(1418の瀬戸・美濃系陶器天目碗は混入と判断した)。出土遺物の年代観より、12世紀中葉の所産と考える。第225図に示したように、南側の砂州状地形の先端部付近に位置し、周辺には北側の砂州状地形で検出した不明遺構は確認できない。ＳＸｃ24は出土遺物から墓としての性格も付与できるが、石仏頭部の存在は問題を残す。類例は確認し得ていないが、ここでは何らかの埋納行為が行われたと考えておきたい。




**第227図『外国船具図巻』所載の「木碇」(小川2001より抜粋)**

## ３．礫敷遺構の性格

以上、Ｃ地区礫敷遺構について、遺構では礫敷遺構が中世段階の汀線に沿った箇所に位置することを確認し、遺物では瓦器椀・皿の多量出土といった特徴を抽出した。以下、その性格について検討したい。

礫敷遺構の類例として福岡市博多遺跡群第89次調査区第２期遺構護岸跡(16世紀後半)、佐賀県唐津市徳蔵谷遺跡Ｄ区石列遺構と杭列(13世紀前半～15世紀)、青森県市浦村十三湊遺跡121次調査区(15世紀)が挙げられる(佐藤2003刊行予定)。いずれの遺跡も海岸や後背湿地の汀線に礫敷きを敷設したもので、海運を主体とした港湾都市として著名な遺跡である。西の丸町地区で検出した礫敷遺構は、汀線に沿って位置し、容易に海岸線の保護＝護岸を目的とした敷設を想定することができる。しかし、わずかな傾斜を認める斜面部に敷設された礫敷は、石材を丁寧に積み重ねたり、敷き詰めたものではなく、無造作に設置したものである(佐藤氏は「積み上げる」のではなく、「貼り付ける」と表現)。使用時における乱れも想定しなければならないが、元来から乱雑に敷設された状況が想定できる。加えて、礫敷上端レベルはわずかに旧地形を反映した傾斜を認めるがほぼ水平となり、斜面を平坦化した状況が看取できる。つまり、汀線の保護を意図したというよりは、砂地における安定した足場を確保するために、安山岩板石を敷設したと評価できる。さらに博多遺跡群や十三湊遺跡では、舟底を安定させるための施設に伴う杭列を認め、Ｂ地区ＳＸｂ16の木組み遺構との関連が注目でき、舟を係留させる船着き場ないし小型の船蔵的な施設と評価される(佐藤2003刊行予定)。Ｂ地区では、こうした船着き場的な施設は確認できないが、Ｘ区ＳＸｃ30で出土した「木碇」ないし碇部材の一部であろう木製品も船着き場としての性格を反映すると考える。

こうした状況を考慮すると、西の丸町地区で検出したこれらの礫敷遺構は、12世紀～13世紀前葉にかけての船着き場、湊であった可能性が高い。礫敷遺構出土遺物は搬入品比率が高いという特徴、なかでも和泉型瓦器椀・皿の出土量が消費地では考えがたい40％に近い数値を占める状況はそれを補強する。既に佐藤竜馬氏によって、西の丸町地区は和泉型瓦器椀にかんしては「二次集積地」としての位置付けが想起されており(佐藤2003刊行予定)、筆者もそれに同調する。一方、東播系須恵器・中国産輸入磁器は松並・中所遺跡に比して高い組成を占めるが、顕著なものではなく、地理的条件に起因した内容を示す可能性が高く、流通ルートが異なる可能性が高い。吉備系土師器に関しては、約６％を数え、松並・中所遺跡に比して著しく高い数値を示し、完形に復元できる椀も一定量認める。地理的要因によるものか、主要な搬入品目であったのかは判断できない。県内の吉備系土師器椀の動向は、山本編年Ⅱ－２期～Ⅲ－２期にかけて漸次増加する傾向が

第225図　高松城跡（西の丸町地区）中世礫敷遺構分布図（S＝1／500）

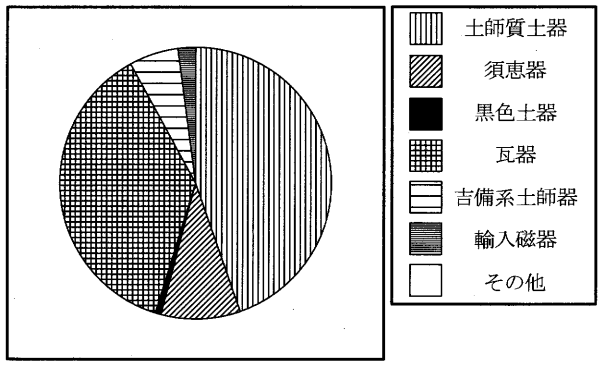
指摘されており(片桐1992)、C地区はまさにその増加する段階に位置付けられる点は留意すべきであろう。

こうした港湾施設との関連が指摘できる状況を踏まえると、ＳＸｃ24から出土した和鏡と石仏頭部は鏡背を上に向けた出土状況を考慮すると、埋納された可能性が高い。出土遺物の年代観も12世紀中葉に位置付けられ、C地区における礫敷遺構との年代差もなく、礫敷遺構の港湾施設としての性格を考慮するならば、ＳＸｃ24は航海の安全ないし繁栄を祈願して、和鏡と石仏頭部及び輸入磁器を埋納した遺構の可能性を想定することができる。

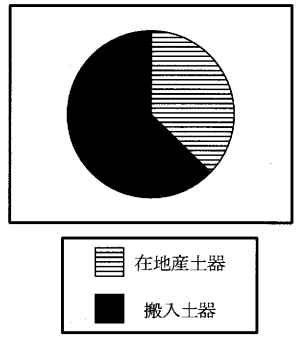
また、ＳＺｃ01と旧地形の北端が一致する点は、高松城築城時の旧地形を考える上では、看過できない。C地区礫敷遺構群の出土遺物は12世紀後半～13世紀前葉、B地区ＳＸｂ16は12世紀前半の年代観を示す。当初B地区ＳＸｂ16に船着き場が存在したが、湾入した潟内の埋積作用の進行に伴い、C地区へ移動した可能性が想定されている(佐藤2003刊行予定)。C地区では13世紀中葉から築城段階までの遺構は確認できず、潟内の埋積はさらに進展した状況が窺える。さらに、西の丸町地区では、最も古く位置付けられる近世遺構面の直下層は自然堆積土であり、築城時には潟内は完全に埋没していたようである。しかし、ＳＺｃ01の前面に堆積した層位には、17世紀初頭前後の遺物を多量に含有しており、少なくともＳＺｃ01の前面まで埋積作用は進行していない。つまり、築城段階まで礫敷遺構の北辺部は汀線であったと考えられる。こうした状況を考慮すると、ＳＺｃ01と礫敷遺構北端部の一致は、築城に際して旧地形を最大限生かし、海域を埋め立てるという大規模な土木工事の最小化を意図した縄張りの設定が看取でき、築城時の状況を考える上でも意義深い内容となろう。

| 種類 / 遺構名 上段:点数(点) 下段:比率(%) | 土師質土器 | | | | | | 吉備系土師器椀 | 吉備系土師器鍋 | 黒色土器・A類椀 | 須恵器 | | | | | 瓦器椀・皿 | 中国産白磁 | | 中国産青磁 | 東播系捏鉢 | 移動式竈 | その他 | 総点数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 小皿 | 坏 | 椀 | 甕 | 鍋 | 不明 | | | | 椀 | 小皿 | 坏 | 壷・甕 | 鉢 | | 碗 | 皿 | | | | | |
| SXc33 | 73 | 43 | 44 | 21 | 51 | 169 | 6 | 42 | | 41 | 2 | | 5 | 20 | 76 | 7 | | 7 | 2 | 10 | | 619点 |
| | 11.8 | 7.0 | 7.1 | 3.4 | 8.2 | 27.4 | 1.0 | 6.8 | | 6.6 | 0.3 | | 0.8 | 3.2 | 12.3 | 1.1 | | 1.1 | 0.3 | 1.6 | | 100% |
| SXc31 | 103 | 43 | 74 | 70 | 87 | 180 | 26 | 3 | 10 | 65 | | | 46 | 22 | 327 | 11 | 11 | 4 | 1 | 5 | 2 | 1090点 |
| | 9.4 | 3.9 | 6.8 | 6.4 | 8.0 | 16.5 | 2.4 | 0.3 | 0.9 | 6.0 | | | 4.2 | 2.0 | 30.0 | 1.0 | 1.0 | 0.4 | 0.1 | 0.5 | 0.2 | 100% |
| SXc34 | 92 | 54 | 64 | 72 | 38 | 94 | 65 | | 1 | 37 | 2 | 6 | 3 | 19 | 764 | 23 | | 2 | 7 | | | 1343点 |
| | 6.9 | 4.0 | 4.8 | 5.4 | 2.8 | 7.0 | 4.8 | | 0.08 | 2.7 | 0.15 | 0.4 | 0.22 | 1.4 | 57.0 | 1.7 | | 0.15 | 0.5 | | | 100% |
| SXc35 | 10 | 1 | 7 | | 9 | 17 | | | | 6 | | 2 | 3 | | 50 | 2 | | 1 | 1 | 1 | | 110点 |
| | 9.0 | 0.9 | 6.4 | | 8.2 | 15.5 | | | | 5.5 | | 1.8 | 2.7 | | 45.5 | 1.8 | | 0.9 | 0.9 | 0.9 | | 100% |
| SXc49 | 41 | 23 | 32 | 16 | 42 | 88 | 14 | 78 | 9 | 32 | | | 10 | 13 | 159 | 7 | | 1 | 17 | 14 | | 596点 |
| | 6.8 | 3.9 | 5.4 | 2.7 | 7.0 | 14.8 | 2.3 | 13.1 | 1.5 | 5.4 | | | 1.7 | 2.2 | 26.7 | 1.2 | | 0.2 | 2.8 | 2.3 | | 100% |
| SXc36 | 10 | | 5 | | | | | | | 2 | | | 1 | | 13 | | | | | | | 31点 |
| | 32.3 | | 16.1 | | | | | | | 6.5 | | | 3.2 | | 41.9 | | | | | | | 100% |
| SXc38 | 8 | | | | | | | | | 4 | | | | | 32 | | | | | | | 44点 |
| | 18.2 | | | | | | | | | 9.1 | | | | | 72.7 | | | | | | | 100% |
| SXc39 | 3 | | 5 | | | 2 | | | | 1 | | | | | 16 | | | | | | | 27点 |
| | 11.1 | | 18.5 | | | 7.4 | | | | 3.7 | | | | | 59.3 | | | | | | | 100% |
| SXc42 | 5 | 18 | 2 | 2 | | 7 | | | | 6 | | | 1 | | 23 | | | | | 4 | | 68点 |
| | 7.4 | 26.5 | 2.9 | 2.9 | | 10.3 | | | | 8.8 | | | 1.5 | | 33.8 | | | | | 5.9 | | 100% |
| SXc47 | 2 | | 6 | | 5 | 9 | | | 2 | | | | 1 | | 16 | 1 | | | | 1 | | 43点 |
| | 4.7 | | 14.0 | | 11.6 | 20.9 | | | 4.7 | | | | 2.3 | | 37.2 | 2.3 | | | | 2.3 | | 100% |
| SXc46 | 1 | 2 | 4 | 4 | | 2 | 2 | | | 4 | | | 1 | | 26 | | | | | | | 46点 |
| | 2.2 | 4.3 | 8.7 | 8.7 | | 4.3 | 4.3 | | | 8.7 | | | 2.2 | | 56.6 | | | | | | | 100% |
| 合計 | 348 | 184 | 243 | 185 | 232 | 568 | 113 | 123 | 22 | 198 | 4 | 8 | 71 | 74 | 1502 | 51 | 11 | 15 | 28 | 35 | 2 | 4017点 |
| | 8.7 | 4.6 | 6.0 | 4.6 | 5.8 | 14.1 | 2.8 | 3.1 | 0.5 | 4.9 | 0.1 | 0.2 | 1.8 | 1.8 | 37.4 | 1.3 | 0.25 | 0.4 | 0.7 | 0.9 | 0.05 | 100% |

**第2表　高松城跡(西の丸町C地区)礫敷遺構出土遺物組成一覧**

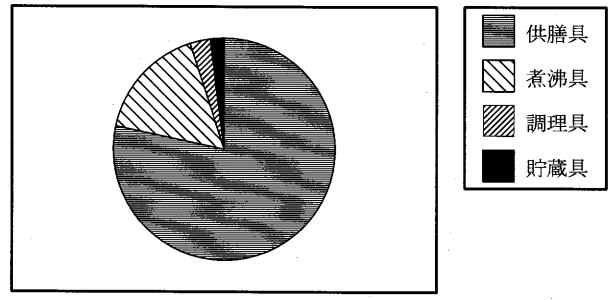



高松城跡（西の丸町）　遺物組成１



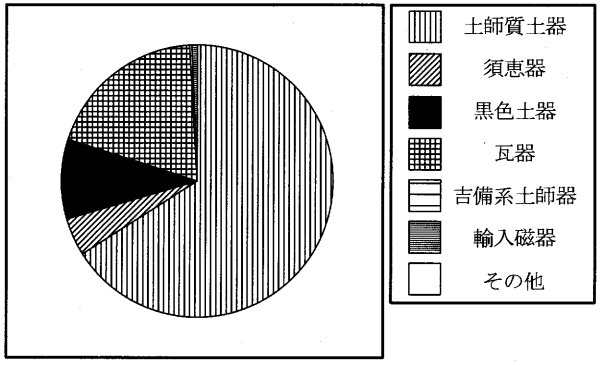

高松城跡（西の丸町）　遺物組成２

～供膳具における在地系土器・搬入品組成～

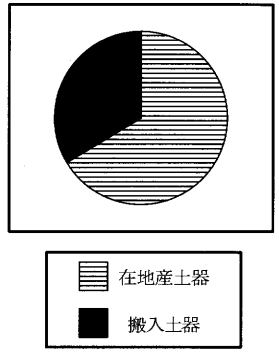



高松城跡（西の丸町）　遺物組成３

～機能別組成～

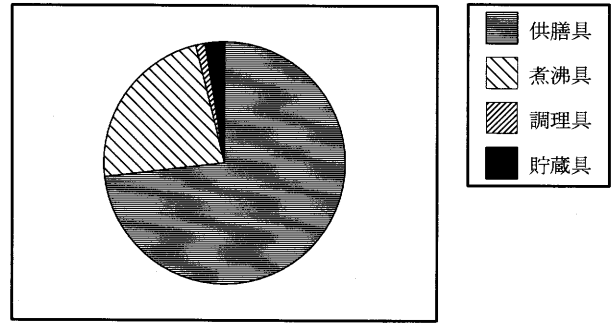



松並・中所遺跡　遺物組成１




松並・中所遺跡　遺物組成２

～供膳具における在地系土器・搬入品組成～




松並・中所遺跡　遺物組成３

～機能別組成～

松並・中所遺跡の組成は松本2000より抜粋

第226図　遺物組成比較

## 第２節　各石垣の所属時期について

Ｃ地区における遺構変遷を理解する上では、石垣の構築年代を明確にする必要があり、ここでは、出土遺物や遺構の重複関係から各石垣の構築年代を検討する。

### １．ＳＺｃ01

**①出土層位**

事実報告では調査時の遺物取り上げに依拠し、第79図２層を構築以前の堆積層(1088～1098)、６層を裏込礫中(1099～1103)、４～７層を裏込礫中ないしＳＺｃ01構築に伴う整地層(1104～1107)、23・24層を黒灰色粘質土(最下層、1108～1138)、20～22層を暗青灰色砂質土(下層、1139～1161)、11～19層を暗青灰色砂質土と赤灰褐色砂層混在層(中層、1164～1177)、８～10層を赤灰褐色砂層(上層、1179～1213)として報告した。概報段階では、肥前系陶器溝縁皿(1105)の年代観に従い、その構築年代を17世紀前葉と想定した(古野ほか2000)。しかし、整理の進捗に伴い、概報時とは異なる想定を行った。ここでは、各層位からの出土遺物を再検討する。検討に際し各層位名やその性格について下表のようにまとめる。事実報告で記したように、Ａ層はＳＺｃ01構築に伴う層位であり、構築年代を示す。Ｂ層はＳＺｃ01前面堆積土最下層位で、粘性の高い埋土となる。ＳＺｃ01が機能中に堆積した層位と理解できる。Ｃ～Ｅ層は色調は異なるが、土質が極めて酷似しており、比較的短期間に形成された一連の堆積土と理解できる。ＳＺｃ01の北約20mにＳＺｃ02が位置し、その構築に伴う整地層＝海域の埋め立て土と判断した。但し、前記した層位理解は、第79図Ｄ－Ｄ’間セクションでは整然と説明できる。しかし、Ｅ－Ｅ’間セクションではやや問題を残す。調査時には、８～15層をＳＺｃ01構築に伴う整地層として捉えていた。前述した肥前系陶器溝縁皿(1105)も同層位からの出土となる。しかし、裏込土である16・17層を明瞭に切り込み、さらに前面堆積土上層である18層(赤灰褐色砂層)やＳＺｃ01石材の上位に堆積した30～31層に連続する堆積状況を示す。よって、本報告では８～15・18・30～31層をＳＺｃ01前面堆積土上層である赤灰褐色砂層(Ａ層)と判断した。

| 新層位 | 上段：層位名、下段：層位の性格 |
|---|---|
| Ａ層 | ＳＺｃ01構築に伴う整地層、裏込礫中<br>**ＳＺｃ01構築関連** |
| Ｂ層 | ＳＺｃ01前面堆積土黒灰色粘質土(最下層)<br>**ＳＺｃ01機能中の堆積土** |
| Ｃ層 | ＳＺｃ01前面堆積土暗青灰色砂質土(下層)<br>**ＳＺｃ02に伴う整地層** |
| Ｄ層 | ＳＺｃ01前面堆積土Ｃ・Ｅ層混在層(中層)<br>**ＳＺｃ02に伴う整地層** |
| Ｅ層 | ＳＺｃ01前面堆積土赤灰褐色砂層(上層)<br>**ＳＺｃ02に伴う整地層** |

**②各層位出土遺物**

次に、各層位から出土した遺物について検討する。第３表にＳＺｃ01層位別遺物組成をまとめた。横軸に前記した層位、縦軸に生産地を設定し、器種別にその点数及び比率を積算した。積算に際しては、いずれも破片数計測を採用し、それを第228図にグラフ化した。また、第４表には、縦軸に層位、横軸に生産地別を設定し、出土遺物の所属時期を明記した。土器編年は、瀬戸・美濃系陶器は藤澤編年(藤沢1993)、肥前系陶器は大橋編年(大橋2000)、備前系陶器は乗岡編年(乗岡2000)にそれぞれ依拠し、中国産磁器の年代観は大橋康二氏のご教示による。以下、これに基づき各生産地別に組成、生産地編年からの検討を加える。

**中国産磁器**

景徳鎮窯系と漳州窯系磁器の顕著な組成差は認められない。層序の堆積状況に呼応して、出土遺物が新しくなる傾向は認められないが、Ａ層には16世紀後半に属する景徳鎮窯系青花皿(Ｅ群)を認め、Ｂ～Ｅ層から出土する16ｃ末～17ｃ初頭に属する遺物は含まれない。よって、Ａ層／Ｂ～Ｅ層という構図が描ける。

**瀬戸・美濃系陶器**

Ａ・Ｂ層は藤澤編年３期のみで構成されるが、Ｃ～Ｅ層には４期が含まれ、Ａ・Ｂ層／Ｃ～Ｅ層という構図が描ける。

**肥前系陶器**

Ａ層には確認できないが、Ｂ～Ｅ層からは各層１～５点前後出土する。Ｉ－２期(1590～1610年代)に属する遺物が大半を占めるが、砂目積み皿(Ｄ層出土1171：胎土目積み併焼時期(1600～1620年代))、Ｃ～Ｅ層出土1218：17世紀前半)、溝縁皿(Ｅ層出土と判断1105：1620～30年代)に新しい傾向を認める。これにより、Ａ層／Ｂ・Ｃ層／Ｄ・Ｅ層という構図を描くことができる。

なお、Ｅ層から出土した皿(1185)は17世紀末に位置付けられ、18世紀まで下る可能性も残し、ここでは混入と理解した。

**備前系陶器(摺鉢)**

Ｃ層を除く、各層から乗岡編年近世１ｂ期(16ｃ第４四半期)の摺鉢が出土。但し、Ｃ層から１ｃ期～２ａ期に属する摺鉢が出土する(1158)。よって、Ａ・Ｂ層／Ｃ層という構図を描くことができる。

**その他**

亀山系鍋はＡ層を除く各層から出土しているが、形態差や出土点数に差異を認めることはできない。朝鮮王朝白磁は各層から少量ながら出土する。また、Ｄ層から大和Ｉ$_2$型羽釜が出土している(1178、16ｃ第４四半期)。淡黄白色の色調を呈する緻密な胎土が選択され、大和からの搬入品と考えられる。同じく搬入品として、Ｃ～Ｅ層を含む層位から出土した犬形土製品がある(1237)。細部表現まで含めた形状・規模は、大坂城出土の犬形土製品Ａｉタイプに酷似し(江浦2000)、搬入

品の可能性が高い。

**③各層位生産地別組成**

一方、層位別出土遺物産地組成について検討する。第228図では各層の横のかっこ内に出土遺物総点数を記載したが、A層は15点と少なく実態を反映するものではない可能性も残る。これによると、C～E層は極めて酷似した組成を示し、瀬戸・美濃系陶器の出土量がやや少ないが、B層もC～E層に近似した内容を示すことが窺える。出土点数が少ないため、過大評価することはできないが、A層では肥前系陶器が未確認となり、遺物組からはA層／B～E層という構図を想定することができる。

**④各層位の形成年代**

次に、上記の検討・各層位の性格を踏まえ、各層位の形成年代について言及したい。

**A層**

ＳＺｃ01構築に関連した層位であり、そこからの出土遺物は構築年代を示す。輸入磁器が16世紀後半、瀬戸・美濃系陶器が大窯３期、備前摺鉢が乗岡編年近世１ｂ期にそれぞれ位置付けられ、16世紀第４四半期の形成年代を付与することができる。高松城は、天正15(1588)年に高松に入部した生駒親正により、その翌年から築城が開始されており、出土遺物の年代観から、ＳＺｃ01は生駒氏入城時に構築された石垣であることが指摘できる。なお、総点数は少ないが、肥前系陶器は未確認であり、B層とは時期差を設けることができる。

**B層**

ＳＺｃ01の前面に堆積した層位であり、その構築以降、存続期間中に堆積した層位と理解できる。輸入磁器が16世紀後半～17世紀初頭、瀬戸・美濃系陶器が大窯３期、肥前系陶器が大橋編年Ｉ－２期に該当する。A層とは肥前系陶器の有無によって識別でき、出土遺物が示す年代観は16世紀第４四半期～17世紀初頭となり、おおむねＳＺｃ01の存続期間を示すと考える。但し、出土遺物の年代観は、生産地における年代観であり、高松城跡(西の丸町地区)までの流通のタイムラグや使用期間には問題を残す。また、瀬戸・美濃系陶器は３期(1555～1585)のみで構成されるが、出土点数は３点と少なく、過大評価すべきではない。後述するC～E層との関連から、大窯４期に属する遺物は存在していた可能性を想定したい。

**C～E層**

比較的短期間に形成された層位で、ＳＺｃ02に伴う整地層と判断できる。よって、出土遺物の年代観はＳＺｃ02の構築年代を示す。輸入磁器は16世紀後半～17世紀初頭、瀬戸・美濃系陶器は大窯３・４期がほぼ同量、肥前系陶器は大橋編年Ｉ－２期が主体を占め、Ⅱ期まで下るものも存在する。D層砂目皿が1600～20年代(1171)、E層溝縁皿が1620～30年代(1105)、片口鉢が1590～1630年代に属する(1186)。備前摺鉢では、乗岡編年近世１ｂ期が主体を占めるが、1158は近世１ｃ～２ａ期まで下る。C～E層出土遺物の主体は16世紀第４四半期～17世紀初頭に属するが、上記した1620～30年代まで下る時期に属する遺物が問題となる。C～E層はＳＺｃ02に伴う整地層であり、ＳＺｃ01の機能段階の堆積土であるB層とは時期差を想定しなければならない。こうしたやや新しい傾向を示す一群はＳＺｃ02の構築時期を示すとして重視すべきである。よって、その形成時期を1630年代前後とする。一方、こうした新しい傾向を示す遺物はごく一部に留まり、その大多数はB層出土遺物との差異を見出すことはできない。その要因として、整地層としての性格を挙げることができる。ＳＺｃ01から02への拡張は海域を埋め立てる行為であり、約20m北側に位置することを考慮すると、相当量の埋め立て土が必要となる。埋土中に限定された時間幅を有し、かつ一定量の遺物を包含する点を考慮すると、それ以前に生活面であった整地層の削平土を転用した可能性を想定することができる。つまり、C～E層は生駒氏が入部してＳＺｃ01を構築した段階からＳＺｃ02を構築するまでの期間の遺物を含むことになる。B層もＳＺｃ01を構築以降、ＳＺｃ02構築段階までの堆積土であり、前者に構築段階の遺物を含む以外は、両者は同じ内容を示す層位と理解できる。よって、C～E層に含まれるＳＺｃ02の構築段階を示すやや新しい傾向を示す土器を除く、その他大多数の遺物がB層と近似した状況を呈することになる。さらに、C～E層における瀬戸・美濃系陶器が、大窯３期と４期がほぼ同数認められる点を考慮すると、B層には大窯４期に属する遺物が認められない点は時期差を示すものではなく、瀬戸・美濃系陶器大窯４期の有無によるB層とC～E層識別は妥当なものではないと考える。

**⑤高松城様相把握との比較**

各層位出土遺物を高松城様相把握と対比すると(松本・佐藤2001、松本2002ａ、第３章第４節)、A層は肥前系陶器の欠落と瀬戸・美濃系陶器大窯３期のみといった点から17世紀初頭に属する様相１に先行する16世紀第４四半期(1589～)となり、様相０に位置付けられる。B層は様相１、C～E層の大多数も様相１となるが、新しい傾向を示す一群は様相２と判断できる。

**⑥出土遺物が示す諸問題**

B～E層は肥前系陶器が確実に共伴するが、瀬戸・美濃系陶器の出土量を上回ることはない。大坂城では、豊臣前期(16世紀末)に肥前系陶器は出現し、16世紀末～17世紀初頭(豊臣後期)には、その出土量は激増し、

それまで主要な組成を占めていた瀬戸・美濃系陶器の出土量を凌ぐようになる。筆者が理解した大坂城編年を第229図にまとめた。積山氏による編年を基軸とし(積山1994)、鋤柄・森両氏による細分(鋤柄・森1999)、難波氏による編年(難波1992)を参考とした。以下これに基づき、ＳＺｃ01の各層位出土遺物と大坂城出土の土器・陶磁器組成を比較する。

Ａ層は瀬戸・美濃系陶器が大窯３期のみで構成され、一定量の輸入磁器を認め、豊臣前期に併行すると考える。肥前系陶器の欠落については、出土総点数が少ない点もあり、その有無を議論することは困難であるが、流通状況の差異を示すかもしれない。Ｂ層及びＣ～Ｅ層の大多数は、豊臣後期～徳川初期にかけて併行する資料と考えたい。しかし、瀬戸・美濃系陶器を凌ぐ肥前系陶器組成は認められず、瀬戸・美濃系陶器も大窯３期と４期の比率がほぼ同数となり、大坂城の陶磁器組成とは異なる状況を示す。こうした組成が、遺構の一括性の低さに起因するものか、高松城跡(西の丸町地区)における流通状況を反映したものかは即断できない。様相１基準資料のＢ地区ＳＸｂ192では(17世紀初頭)、胎土目積みのみで構成される肥前系陶器を認め、その出土量は明らかに瀬戸・美濃系陶器を凌駕し、大坂城編年における豊臣後期～徳川初期に酷似した遺物組成を示す。一方、Ｂ～Ｅ層に酷似した内容を示す資料として、東ノ丸(香川県歴史博物館地点)の第４遺構面上層がある(北山1999)。整地層資料で、出土遺物による限りその一括性は高い。第４章で再度検討するが、中国産磁器では、景徳鎮窯系青花・白磁皿、漳州窯系青花・白磁皿、瀬戸・美濃系陶器では大窯３・４期を認め、やや３期の比率が高いようである。志野・(青)織部向付、瀬戸黒碗もある。その組成は、肥前系陶器を明らかに上回る。肥前系陶器では、砂目積み製品を少量認めるが、胎土目積みが主体となり、溝縁皿は確認できない。備前系陶器では、摺鉢(乗岡編年近世１ｂ・ｃ期主体)・注口付き鉢・坏を認める。その他、朝鮮王朝白磁皿、華南彩釉陶器、丹波摺鉢、亀山系鍋、関西系焙烙も少量ながら出土する。出土遺物の様相として、17世紀初頭(～1620年代)に収まる内容を示し、肥前系陶器が出現するにも係わらず、瀬戸・美濃系陶器に優位性を認める。Ｂ～Ｅ層、第４遺構面上層はいずれも包含層資料、ＳＸｂ192は遺構資料であり、こうした差異を反映する可能性が高いと考えられる。しかし、陶磁器の流通状況や使用期間に関連した重要な問題を提起しており、資料の増加を待って再度検討する必要が残る。

## ２．ＳＺｃ02

ＳＺｃ02は前述したＳＺｃ01の北側約20mに位置し、その構築時期はＳＺｃ01前面堆積土Ｃ～Ｅ層出土遺物が示し、その形成年代は1630年代前後と考える。

寛永４(1627)年に記載された『讃岐探索書』には、築城から40年近く経過し、石垣や塀が崩れていた状況が記され、寛永13(1636)年に幕府老中より石垣の修築が許可されたという文献記載から(『生駒家文書』、香川県1988)ＳＺｃ02の構築は寛永13年以降である可能性が高く、ここでは1630年代後半の構築を想定しておきたい。

遺構との重複関係では、18世紀前半に位置付けられる石組溝(ＳＤｃ07・09)がＳＺｃ02より北まで延長する状況が窺え、少なくとも18世紀前半以前の所産であることは明白である。

## ３．ＳＺｃ03

ＳＺｃ03はＳＺｃ02の北約40mに位置する。報文番号375～385にその裏込埋土から出土した遺物を提示したが、出土遺物には瀬戸・美濃系磁器を含み、これによる限り19世紀までその構築が下ることになる(概報では遺物の混乱により、381をＳＺｃ12の裏込から出土した遺物として報告し、ＳＺｃ12の構築年代を幕末頃と想定した。しかし、381はＳＺｃ03裏込出土遺物であり、ここで訂正しておきたい)。その他の出土遺物の所属時期にも混在した状況を認めるが、17世紀前半に属する遺物がやや多い。裏込石材には人頭大からその２倍前後の石材が用いられ、石材間には間隙を多く認める。本来であれば、裏込出土遺物は遺構の構築年代の決定を担うものであるが、石垣に関しては信憑性を欠くものと理解したい。ここで重視すべきは、Ⅳ区西端部における遺構の重複関係である。ＳＺｃ03には構築時に石垣内に埋設された階段状施設であるＳＺｃ06とその脇から連続し、北側に突出する立石群(ＳＺｃ05)が伴う。当該箇所では、ＳＺｃ03前面石材は失われているが、その前面に沿って打設された杭列(ＳＺｃ07)から第49・60図のような復元が可能である。ここで注目すべきは、ＳＤｃ11である。ＳＺｃ03手前で「く」字形に屈曲し、北端部は確認できないが、海域へ排水する。屈曲する要因として、ＳＺｃ03に伴うＳＺｃ05・06を避けた可能性が高く、少なくともＳＺｃ03の構築はＳＤｃ11の構築以前であったことが指摘できる。よって、ＳＺｃ02が構築された1630年代後半～18世紀前半までに築造されたと判断できる。なお、ＳＤｃ11はＣ地区Ⅰ・Ⅱ区から連続し、さらにＢ地区にも確認でき、西外曲輪を南北に縦断する広域地割であり、『高松城下図』に記載された大久保家屋敷地と西御屋敷を区画する施設と評価されている(佐藤2003刊行予定)。

ＳＺｃ02の構築は、出土遺物の所属時期より生駒氏によることが窺え、生駒氏はその直後の寛永17(1640)年に生駒騒動により改易される。高松城には、寛永19(1642)年に松平頼重氏が入城する。入部後頼重は、石垣の修築、天守閣の改築、東ノ丸・北ノ丸の増設といった城下の整備に着手し、高松城の普請は延宝５(1677)

年には完成する。こうした歴史事象や裏込出土遺物から、ＳＺｃ03の構築は松平頼重が入城した1642年以降、17世紀中葉前後であった可能性が高いと考えたい。

さらに絵図との比較では、『讃岐高松丸亀両城図　高松城下図』と『高松城下図屏風』の差異に注目したい。前者に製作年代の記載はなく、正確な製作時期は不明であるが、『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』(1638～39年)には描かれない西浜舟入の侍屋敷の西側に町人屋敷や東浜の海岸部の石垣が描かれている。こうした普請を数年で行うことは困難であり、松平氏が入城した寛永19(1642)年以降の所産である可能性が指摘されている(森下1996)。さらに、『高松城下図屏風』は明暦２(1656)年に成願寺の南東に移転した無量寿院が西浜舟入の西に描かれていることから、それ以前の製作年代が想定されており(森下1996)、本報告では1650年代前半とした。両者を比較すると、『高松城下図屏風』には西外曲輪北辺に鍵形道路に規制されない独立した屋敷地が新たに追加されていることが窺える。さらに、この屋敷地を除く西外曲輪の屋敷割が近似した状況も窺え、鍵形街路も両者に描かれる。さらに、西外曲輪北西隅から延びる突堤状施設の位置関係もほぼ等しい。こうした状況を考慮すると、『高松城下図屏風』と『讃岐高松丸亀両城図　高松城下図』の西外曲輪における差異は、北端に設置され屋敷地の存在となる。ＳＺｃ03はＳＺｃ02から40ｍも北に位置し、まさに『高松城下図屏風』に描かれた西外曲輪北端の石垣であった可能性が高い。『讃岐高松丸亀両城図　高松城下図』の北端部には石垣の表現はなされないが、その北辺はＳＺｃ02に対応する。つまり、ＳＺｃ03の構築年代は、『讃岐高松丸亀両城図　高松城下図』の製作年代以降『高松城下図屏風』製作年代までとすることができる。よって、頼重入城時の寛永19(1642)年以降の1640年代～50年代前半という構築年代を想定することができる。

### ４．ＳＺｃ12

ＳＺｃ03の北側約５ｍに位置する。事実報告で記したように、ＳＺｃ03には明らかに後出する時期の所産である。５ｍの拡張をどう評価するかは問題であるが、「拡張」と称するよりは、「修繕」ないし「修築」とした方が妥当かもしれない。その構築時期を示す裏込出土遺物(386～392)の年代観は、おおむね1630～40年代に位置付けられる。しかし、想定したＳＺｃ03の構築年代とは矛盾をきたす。遺構の重複関係では、前記したように、18世紀前半に属する石組溝(ＳＤｃ11)がＳＺｃ03に付設するＳＺｃ05・06を避けるために、屈曲させた状況があり、ＳＺｃ03は石組溝の構築時期まで存続し、かつＳＤｃ11が機能した18世紀前半代まで継続使用されていた可能性が高い。それを示すように、補修痕跡と判断したＳＺｃ07を確認しており、ＳＺｃ03の存続時期幅を比較的長く見積もることは可能である。さらに、ＳＺｃ12の前面堆積土からの出土遺物には、18世紀末～19世紀前半に属する陶磁器を認める。こうした状況から、ＳＺｃ12の構築時期を18世紀後半と考えておきたい。

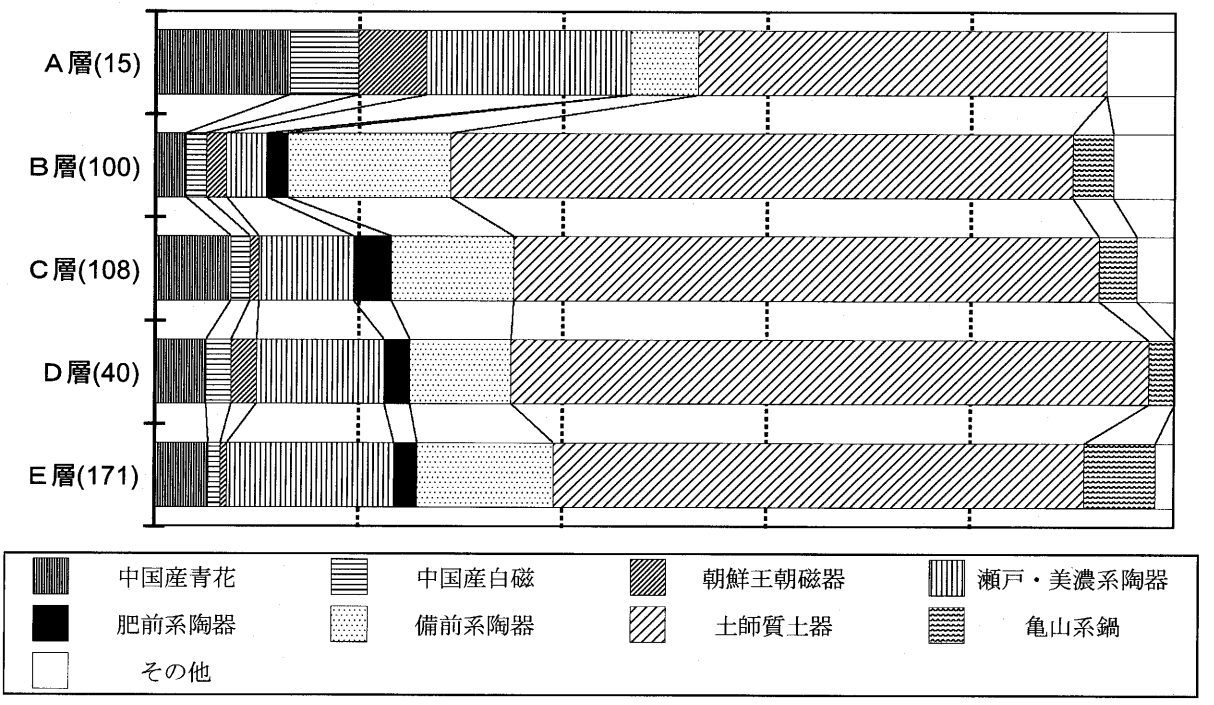
### ５．ＳＺｃ13

ＳＺｃ13はＳＺｃ12の約20ｍ北にあり、Ｃ地区で確認した石垣のなかでは最北端に位置する。裏込出土遺物が示すように(456・459・470・473)、コバルト呉須＋型紙摺りの肥前系磁器を認める段階であり、明治期の所産と考えられる。さらに、ＳＺｃ13が機能を停止し、再度拡張が行われた段階に施行されたＳＺｃ13上面堆積土からの出土遺物にも同様の陶磁器を認める。さらに、その上面で捉えた遺構面(想定第０面)は本報告は行っていないが、それに伴う遺構埋土よりゴム判の使用を認める肥前系磁器皿、珉平焼コップ状碗が共伴しており、大正８年(1919年)以降の所産であることが窺える。

| 出土層位 / 名称 | | | A層 | B層 | C層 | D層 | E層 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 裏込め・整地層<br>SZc01構築に伴う整地層 | 黒灰色粘質土<br>SZc01岸機能中の堆積層 | 暗青灰色砂質土<br>SZc02に伴う整地層 | C層＋E層（混在）<br>SZc02に伴う整地層 | 赤灰褐色砂層<br>SZc02に伴う整地層 |
| 中国産磁器 | 景徳鎮窯系青花 | | 1 (6.7%) | 2 (2.0%) | 7 (6.6%) | 2 (5.0%) | 5 (2.9%) |
| 中国産磁器 | 漳州窯系青花 | | 1 (6.7%) | 1 (1.0%) | 1 (0.9%) | | 4 (2.3%) |
| 中国産磁器 | 中国産青花合計 | | 2 (13.2%) | 3 (3.0%) | 8 (7.4%) | 2 (5.0%) | 9 (5.3%) |
| 中国産磁器 | 青磁 | | | | | | |
| 中国産磁器 | 白磁 | | 1 (6.7%) | 2 (2.0%) | 2 (1.9%) | 1 (2.5%) | 2 (1.2%) |
| 朝鮮王朝白磁 | | | 1 (6.7%) | 2 (2.0%) | 1 (0.9%) | 1 (2.5%) | 1 (0.6%) |
| 産地不明磁器 | | | | 1 (1.0%) | | | 2 (1.2%) |
| 瀬戸・美濃系陶器 | 鉄釉　天目碗 | | 2 (13.2%) | 2 (2.0%) | 4 (3.7%) | 1 (2.5%) | 11 (6.4%) |
| 瀬戸・美濃系陶器 | 鉄釉　皿 | | | | | | |
| 瀬戸・美濃系陶器 | 鉄釉　その他 | | | | | 1 (2.5%) | |
| 瀬戸・美濃系陶器 | 灰釉　皿 | | | 2 (2.0%) | 5 (4.6%) | 3 (7.5%) | 16 (9.3%) |
| 瀬戸・美濃系陶器 | 灰釉　その他 | | 1 (6.7%) | | 1 (0.9%) | | 1 (0.6%) |
| 瀬戸・美濃系陶器 | 志野 | | | | | | |
| 瀬戸・美濃系陶器合計 | | | 3 (20.0%) | 4 (4.0%) | 10 (9.3%) | 5 (12.5%) | 28 (16.4%) |
| 肥前系陶器 | | | | 2 (2.0%) | 4 (3.7%) | 1 (2.5%) | 4 (2.3%) |
| 施釉陶器 | | | 1 (6.7%) | | | | |
| 備前系陶器 | 擂鉢 | | 1 (6.7%) | 3 (3.0%) | 3 (2.8%) | 3 (7.5%) | 5 (2.9%) |
| 備前系陶器 | 注口付き鉢 | | | 5 (5.0%) | 1 (0.9%) | | 3 (1.8%) |
| 備前系陶器 | その他 | | | 8 (8.0%) | 9 (8.4%) | 1 (2.5%) | 15 (8.8%) |
| 備前系陶器合計 | | | 1 (6.7%) | 16 (16.0%) | 13 (12.0%) | 4 (10.0%) | 23 (13.4%) |
| 焼締陶器（産地不明） | | | | 1 (1.0%) | | | |
| 土師質土器　亀山系鍋 | | | | 4 (4.0%) | 4 (3.7%) | 1 (2.5%) | 12 (7.0%) |
| 土師質土器 | 小皿・坏 | | 3 (20.0%) | 35 (35.0%) | 36 (33.3%) | 17 (42.5%) | 57 (33.3%) |
| 土師質土器 | 羽釜 | | | 1 (1.0%) | | | 1 (0.6%) |
| 土師質土器 | 擂鉢 | | 1 (6.7%) | 11 (11.0%) | 13 (12.0%) | 2 (5.0%) | 16 (9.3%) |
| 土師質土器 | 外耳付き鍋 | | 2 (13.2%) | 9 (9.0%) | 1 (0.9%) | 1 (2.5%) | 2 (1.2%) |
| 土師質土器 | 足鍋 | | | 2 (2.0%) | 3 (2.8%) | 1 (2.5%) | 3 (1.8%) |
| 土師質土器 | 亀山系鍋模倣鍋 | | | 2 (2.0%) | 5 (4.6%) | | |
| 土師質土器 | その他 | | | 1 (1.0%) | | 2 (5.0%) | |
| 土師質土器 | 火鉢 | | | | 4 (3.7%) | 2 (5.0%) | 10 (5.9%) |
| 土師質土器合計 | | | 6 (40.0%) | 61 (61.0%) | 62 (57.4%) | 25 (62.5%) | 89 (52.0%) |
| その他 | | | | 土錘 4<br>(4.0%) | 土錘 3 (2.8)<br>蛸壷 1 (0.9) | | 坩堝？1<br>(0.6%) |
| 明らかな混入遺物（中世ほか） | | | 239 | 99 | 166 | 25 | 169 |

（点数記載，（）内には各層位別の比率を表示）

**第３表　Ⅷ区ＳＺｃ01層位別遺物組成**




**第228図　Ⅷ区ＳＺｃ01層位別の産地組成**

| 種類 / 層位及び性格 | 中国産磁器 | 瀬戸・美濃系陶器（藤澤大窯編年） | 肥前系陶器（大橋編年） | 備前擂鉢（乗岡編年） | その他 |
|---|---|---|---|---|---|
| A層<br>裏込・整地層<br>（ＳＺｃ01構築に<br>に伴う整地層他） | 景徳鎮系青花１点<br>漳州窯系青花１点<br>景徳鎮系白磁１点 | 天目碗１点（３期） | なし | 近世１ｂ期<br>（16ｃ第４四半期） | 1105・1107は混入 |
| B層<br>黒灰色粘質土<br>（ＳＺｃ01機能中の堆積土） | 景徳鎮系青花２点<br>漳州窯系青花１点<br>景徳鎮系白磁１点<br>漳州窯系白磁１点 | 天目碗２点（３期？）<br>内禿皿１点（３期） | 皿２点（細々片）<br>Ｉ－２期？ | 近世１ｂ期<br>（16ｃ第４四半期） | 朝鮮白磁１点<br>亀山系鍋 |
| C層<br>暗青灰色砂質土<br>（ＳＺｃ02構築に伴う<br>整地層） | 景徳鎮系青花７点<br>漳州窯系青花１点<br>景徳鎮系白磁１点<br>漳州窯系白磁１点 | 天目碗２点<br>（３・４期各１点）<br>内禿皿３点（３期） | 皿１点（1152）<br>Ｉ－２期<br>（1590～1610年代）<br>碗１点 | 近世１ｂ期<br>（16ｃ第４四半期）<br>近世１ｃ～２ａ期<br>（1158、17ｃ前半） | 朝鮮白磁１点 |
| D層<br>C層＋E層（混在）<br>（ＳＺｃ02構築に伴う<br>整地層） | 景徳鎮系青花２点<br>景徳鎮系白磁１点 | 天目碗１点（４期）<br>内禿皿１点（３期）<br>折縁皿１点（３期） | 皿１点（1171）<br>砂目積み<br>（胎土目積み併焼段<br>階の所産） | なし | 亀山系鍋<br>大和Ｉ$_2$型羽釜<br>（1178） |
| E層<br>赤灰褐色砂層<br>（ＳＺｃ02構築に伴う<br>整地層） | 景徳鎮系青花５点<br>漳州窯系青花４点<br>景徳鎮系白磁１点<br>不明白磁１点 | 天目碗８点<br>（３期４点，４期４点）<br>内禿皿３点（３期）<br>折縁皿６点<br>（３期２点，４期４点） | ２点（1105・1186）<br>溝縁皿（1105）<br>（1620～1630年代）<br>片口鉢（1186）<br>（1590～1630年代） | 近世１ｂ期<br>（16ｃ第４四半期） | 朝鮮白磁１点<br>亀山系鍋 |

**第４表　Ⅷ区ＳＺｃ01層位別出土遺物**

| | | 実年代 | 基準資料 | 中国産磁器 | 瀬戸・美濃系陶器 | 肥前系陶器 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 石山本願寺期 | | (1469～)<br>16ｃ後葉<br>(～1580) | ＯＳ83ー15次<br>第Ⅷ遺構面・第８層<br>石山本願寺滅亡1580 | 碗Ｅ群(字款を伴う)<br>皿Ｃ群(碁笥底)多い<br>青・白磁碗の比率高い | 大窯２・３期<br>折縁ソギ皿・内禿皿なし | **存在しない** | 備前擂鉢(斜めスリメ有) |
| 豊臣前期 | 古 | (1580～)<br>16ｃ末 | 旧中体ＳＫ507・508<br>墨書；卯の年銘(1591)<br>(旧中体ＳＫ513，515) | ４割を越える比率<br>碗・皿Ｅ群が大半<br>粗製品；高台露胎，太いタッチの花文 | 大窯３期主体(４期少量含む)<br>折縁ソギ皿・内禿皿出現<br>黄瀬戸・瀬戸黒なし | ＳＫ515に１点のみ<br>なぶり口縁皿<br>胎土目積み | 楽系の施釉陶器少量<br>朝鮮白磁増加<br>備前擂鉢(斜めスリメ有) |
| | 新 | (～1598) | 旧中体ＳＥ520<br>木簡共伴；1594<br>(ＯＳ88ー113第４層) | ４割弱(37.2%)の比率<br>中国磁器に占める漳州窯系の比率は低い | 大窯３期主体(４期比率多い?)<br>黄瀬戸有り(ごく少量) | ＳＥ520には無し | 黒楽<br>朝鮮白磁一定量存在<br>備前擂鉢近世１ａ・ｂ期 |
| 豊臣後期 | 前 | 16ｃ末<br>～<br>17ｃ初 | ＯＪ92ー18次ＳＫ505<br>(船場の町屋) | **減少**<br>唐津＋瀬・美＞中国<br>青磁減少 | 大窯４期主体<br>黄瀬戸・瀬戸黒・志野有り<br>織部なし | **出土量激増**<br>**(瀬・美と比率逆転)**<br>胎土目・絵唐津 | |
| | 後 | (～1615) | 大坂の陣焼土層<br>(1614・1615)<br>旧体中ＳＫ569 | 減少<br>**碗Ｆ類，芙蓉手**<br>青磁ごく少量 | 大幅に減少<br>志野・織部有り | 瀬・美を**大きく凌駕**<br>胎土目積み | 焼塩壺(渡辺Ａ類)<br>備前擂鉢近世１ｂorｃ期 |
| 徳川初期 | | 17ｃ初<br>～前葉<br>(～1622) | ＡＺ87ー５次ＳＸ201<br>木簡；1620・1621<br>魚市場；1622まで<br>ＯＳ83ー５次３下層 | さらに減少<br>**肥前系磁器**<br>存在しない | **瀬・美：唐津＝２弱：８強** | **胎土目積み主体**<br>砂目積み;刷毛目唐津に先行導入<br>典型折縁・溝縁皿なし | |
| 積山２ | | 17ｃ前葉 | ＯＪ92ー18次ＳＫ330<br>ＯＪ91ー２次ＳＫ004<br>ＯＳ93ー28次ＳＥ01<br>(ＡＺ87ー５次ＳＸ205) | **出現** | | **砂目積み主体**<br>**砂目積み溝縁皿出現** | |
| 積山３ | | 17ｃ前葉<br>～中葉 | 旧体中ＳＫ797<br>ＯＪ99ー２次ＳＫ601<br>ＯＳ92ー24次ＳＫ62 | Ⅱ期主体 | **ごく少量**<br>志野・織部含む | 瀬・美を圧倒<br>Ⅱ期主体<br>(Ⅲ期まで下る碗？) | 擂鉢は丹波焼主体<br>備前擂鉢近世１ｂ期<br>東南アジア産陶器<br>難波Ｃ類焙烙 |
| 積山２・３ | | ～1650 | ＯＳ83ー５次３中層 | **瀬・美，唐津を凌駕**<br>Ⅱー２期主体<br>(Ⅱー１期も含む) | 量は極めて少ない<br>**瀬・美：唐津＝１弱：９強**<br>(実測図から積算) | 砂目積み溝縁皿主体<br>Ⅱ期主体(Ⅱー１期)<br>器種豊富 | 擂鉢は丹波が備前を凌駕<br>備前擂鉢近世２ａ期 |

豊臣前期古；漳州窯磁器小皿や底部露胎を残す碗が目立つ　(藤澤編年)　(大橋編年)　(備前擂鉢は乗岡編年)

豊臣前期　；ＯＳ83ー15次第Ⅵ遺構面・第６層・・・唐津５点あり(胎土目積み)

**第229図　大坂城における陶磁器組成(積山編年を基軸に、鋤柄・森1999、難波1992を加筆)**

## 第３節　遺構変遷について

Ｃ地区では複数の整地面を検出した調査区は一部に留まり、大多数の調査区では２面ないし１面で複数時期の遺構を確認する結果となった。しかし、前章で述べたように、Ｃ地区では築城時から明治期まで５列の石垣を確認し、その変遷を捉えることができる。基本層序を提示する際に、海域を埋め立てて構築された石垣に伴う想定整地面という概念を用いて、その変遷を示した(第16図)。そこで想定した整地面は石垣の変遷のみに立脚したもので、石垣に伴う整地面があるであろうという概念的な把握であり、方法論としては正しくない。南接するＢ地区では６面の近世整地面が捉えられ、Ｃ地区においても呼応した変遷は存在したと考えられる。わずかに確認した遺構面変遷や遺構出土遺物の年代観から、Ｂ地区の各整地面に対応した遺構変遷を提示することもできるが、出土遺物からの年代決定には限界があり、出土点数が少ない遺構の時期決定は困難を極める。こうした状況を考慮すると、Ｃ地区では石垣の変遷を基軸とした変遷で遺跡を評価することが妥当であろう。

第16図で示した想定整地面は石垣の所属時期のみに立脚した変遷で、各調査区で検出した遺構面や遺構の内容は勘案していない。一部、第２章第２節でも先行して、その内容を記したが、Ⅰ・Ⅱ区における遺構面変遷とⅠ・Ⅱ・Ⅳ区に跨り、さらにＢ地区まで連続する石組溝の検出面を考慮すると、石垣の変遷による想定面を細分することができる。第230図に最終的な整地層概念図を提示した。縦軸には想定整地面、横軸には各調査区を配置した。想定整地面は、第16図に遺構面変遷や遺構の重複関係等を加え、想定第２面と第３面を、２ｂ面・２ａ面、３ｂ面・３ａ面に細分した。それぞれの整地面に伴う石垣を検出した調査区の位置に配置した。また、調査区は図面の右側を北側(海側)として配置しており、順次海域へ拡張する石垣は、右上がりの配置となる。第２章第３節では各調査区で検出した遺構面に従い報告しており、各調査区の遺構面を想定整地面に対応させた。例えば、想定第２ｂ面は図面右端に配置したＳＺｃ12に伴う整地面で、Ⅹ区では同一遺構面、Ⅸ区では第２面、Ⅱ区では第１面上位、Ⅲ区では第１面、Ⅳ・Ⅴ区では第２面に対応することになる。なお、各調査区で捉えた遺構面が複数の想定整地面に該当する場合は、縦方向に区切りを設けない枠として表現した。例えば、Ⅸ区第２面は想定第２ｂ・２ａ・３ｂ面を同一面で検出したことになる。

なお、左端には高松城跡(西の丸町Ｂ地区)で確認された整地面を配置した。対応関係を想定するに際し、まずＢ・Ｃ地区に跨る石組溝を基軸として、Ｂ地区第４面を想定第３ｂ面に対応させた後、Ｂ地区の各整地面の年代とＣ地区で検出した石垣の構築年代との関係を考慮して対応関係を把握した。整地面の土質、火災に伴う焼土・炭化物層、検出した標高での対比も試みたが、これによる明確な対応関係を捉えることはできなかった。以下、各想定整地面の内容について記す。なお、絵図との対比を試みるが、その出典ないし絵図の年代観は、註釈がない限り、森下1996に依拠する。

### １．想定第５面(付図３左)

16世紀末に構築されたＳＺｃ01に伴う想定整地面であり、検出した遺構もＳＺｃ01以南に位置する。ＳＺｃ01は高松に入部した生駒氏がその築城時に構築した石垣と考えられ、検出した石垣のなかでは最南端に位置する。想定第６面は、ＳＺｃ01構築段階からその北側約20ｍに位置するＳＺｃ02の構築時期までとし、石垣の構築年代から16世紀末～1630年代前半までの年代を付与できる。高松城の変遷を考慮すると、生駒氏前期に帰属することになる。但し、想定第５面のみに帰属する遺構面は確認できず、次段階の想定第４面に伴うＳＺｃ02の構築年代を下限とし、ＳＺｃ01以南に位置する遺構という前提を踏まえ、出土遺物の年代観に基づき抽出した。井戸や土坑を中心に確認し、一部には区画施設の可能性も残る柵列も認める(ＳＡｃ14)。井戸は一定の間隔を保ち、Ⅷ区ＳＥｃ05・06はほぼ同一地点に位置する。ＳＥｃ06の石材が消失している点を考慮すると、ＳＥｃ05の構築にはその石材を転用した可能性が高い。短期間における重複関係は、この位置に井戸を築く必要性を示し、屋敷地割を復元する示唆的な材料となろう。Ｂ地区整地面との対応関係では、Ｃ地区想定第５面を第６面に対応させた。調査区中央に位置する鍵形街路とその両脇に展開する複数の屋敷地を認める。

絵図との比較では、その想定時期と絵図の製作時期との関係から、かろうじて『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』(寛永15～16(1638～39)年、第４図)との比較が可能である。西外曲輪は道路により東西に二分され、南北は５区画に区切られるが、拝領者名の記載に主眼が置かれたことに起因して地割は均等割りとなる。鍵形道路は表現されていないが、松平初期の1650年代前半に描かれた『高松城下図屏風』では、西外曲輪を南北に縦断する鍵形道路を認め、規模の異なる複数の屋敷地が展開する(第６図)。1650年代前半以前と考えられる『讃岐高松丸亀両城図　高松城下図』(第５図)にも屈曲する街路を認め、絵図では鍵形道路は松平初期に確認できる。Ｂ地区第６面は生駒氏入城時から松平初期に属し、検出した鍵形道路は松平初期に帰属することになる。しかし、道路屈曲部の南東隅に位置するＳＫｂ152(ＳＸ８Ｄ206)やＳＫｂ192(ＳＸＡ05)が鍵形に沿った平面形を呈し、その出土遺物が17世紀初頭の年代観を示すことから、鍵形街路ないしその前身となる鍵形地割は生駒期初期まで遡ることは明白である。こうしたＢ地区の成果から、『生駒家時代讃岐高松城屋

敷割図』との比較では、XI区で検出したＳＡｃ14が「上坂丹波」の屋敷地の北限である可能性が想定されている(佐藤2003刊行予定)。よって、鍵形道路の屈曲部が「上坂丹波」・「松山斉宮」と「入谷小浜衛」・「橋本伝左衛門」付近となろう。しかし、絵図では西外曲輪の北端に位置する石垣までに「入谷小浜衛」・「入谷角太夫」・「蔵」の３区画が存在するが、ＳＡｃ14からＳＺｃ01までは50m前後しかない。絵図の年代観は1638～39年であり、想定第５面段階の西外曲輪北端としたＳＺｃ01の構築年代とは齟齬を認め、むしろ後述するＳＺｃ02の年代観に呼応する。こうした状況を考慮すると、想定第５面と『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』との対比は困難であり、それ以前の絵図と対比する必要がある。『讃岐探索書』(寛永４(1627)年)が唯一の絵図であるが、西外曲輪北辺には石垣表現がなされていない。発掘調査では16世紀末に構築されたＳＺｃ01を確認しており、矛盾が生じる。1627年までに崩壊し、砂に埋もれていた可能性も想定できるが、絵図の性格や精度に起因するものと理解したい。

## ２．想定第４面(付図３右)

1630年代後半に構築されたＳＺｃ02に伴う想定整地面である。ＳＺｃ02の北側約40mに位置するＳＺｃ03の構築年代を考慮すると、1630年代後半～17世紀中葉前後に属する整地面であり、生駒氏末期～松平氏初期の年代が想定できる。ＳＺｃ02はＳＺｃ01の20m北に位置し、想定第５面段階では海域であった箇所を埋め立て、城下を拡張した様子が窺える。想定第４面に属する遺構は、ＳＺｃ02以南に位置し、ＳＺｃ03の構築年代を考慮すると、1640年代以前という前提条件を付与することができる。加えて、ＳＺｃ02に伴うII区第２面で検出したＳＸｃ04とそれに構造が酷似するＩ区第２面ＳＸｃ02とＳＸｃ01を抽出した。

ＳＸｃ02とＳＸｃ04は拳大からその２倍前後の石材を列状に配置したもので、両者の主軸方位は等しいが、同一線上に並ばず、約１mの間隔を認める。一方に面を認める構造ではなく、Ｂ地区第５面で確認された鍵形路地を構成する石列とは性格を違える。その検出位置もＢ地区第５面の石列ではなく、第６面で検出されている鍵形街路の東側柵列に連続する位置関係を示し、鍵形道路に関連した性格を想定しておきたい。また、VIII区東端部で検出した柵列を検出したが(ＳＡｃ06～08)、出土遺物が稀薄であり、遺構面の変遷からの想定も困難である。当該整地面に帰属するのか、次段階の想定第３ａ面とすべきか判断できないため、両整地面に配置した。屋敷地の東辺を画する施設となり、後述するＳＺｃ04(突堤)から復元できる中堀の西側石垣からの距離は８m前後を測る。ＳＡｃ06では礎板を認めるが、ＳＡｃ07・08では確認できず、所属時期が異なる可能性も否めないが、両者を境として屋敷地が異なる可能性を指摘することもできよう。

絵図ではＳＺｃ02の構築年代から、『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』との比較が可能である(第４図)。その内容に関しては前述したため、ここでは省略するが、西外曲輪中央を縦断する道路の両脇に複数の屋敷地が展開し、北辺には石垣が表現される。ＳＺｃ02はその所属時期から、ここに描かれた石垣に対応する可能性が極めて高い。石垣の前面には砂浜と判断できる白抜き部分があり、ＳＺｃ02使用石材に蛎殻等の付着を認めない状況から推される海水に浸かっていない見解に一致する(古野ほか2000)。さらに、西外曲輪東西縁部にも道路が記載されている。絵図では中央部と東側の道路幅は等しく、Ｂ地区で確認された道路幅が８m前後を測り、VIII区ＳＡｃ06～08と推定中堀の西側石垣の幅に共通しており、VIII区の柵列が屋敷境を示す蓋然性は高い。また、前述したＢ地区の成果から、ＳＡｃ14が「上坂丹波」の屋敷地の北限に該当する可能性が高く、鍵形街路屈曲部は「上坂丹波」・「松山斉宮」と「入谷小浜衛」・「橋本伝左衛門」付近となる。ここからＳＺｃ02までの距離は約70mを測り、絵図では中央道路に東側に「入谷小浜衛」・「入谷角太夫」・「蔵」の３区画が存在する。VII・VIII区北端部はＳＺｃ02に近接しており、「蔵」と記載された地点に該当するが、それを示す遺構・遺物の確認は行えていない。「入谷小浜衛」の屋敷地はIX・XI区となり、「入谷角太夫」の屋敷がVIII・VII区南端部及びＩ区東半付近にそれぞれ該当する。想定第４面に帰属し得た遺構は稀薄で、屋敷地割を復元する材料は皆無に等しい。しかし、ＳＡｃ06の礎板の存在を重視すると、ＳＡｃ06とＳＡｃ07・08の境に「入谷角太夫」と「蔵」の屋敷境を設けることもできる。ここで注意すべきは、『讃岐高松丸亀両城図　高松城下図』である。それぞれの年代観やその差異に関しては、第３章第２節で述べたように、『讃岐高松丸亀両城図　高松城下図』は松平氏入城直後に描かれた絵図であるが、生駒氏末期の状況を色濃く残した絵図という評価ができる。西外曲輪の屋敷割は、『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』に示されたような均割ではなく、異なる規模で表現される。さらに、『高松城下図屏風』では屋敷地の分割を認めるが、近似した屋敷割が表現される。つまり、松平初期に描かれた『讃岐高松丸亀両城図　高松城下図』と『高松城下図屏風』から生駒期の地割ないし屋敷割が踏襲された松平初期の様子を窺うことができる。一方、『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』では、西外曲輪は東西に二分、南北に５区画を認めるが、『讃岐高松丸亀両城図　高松城下図』では４区画しか認められない。屋敷地の統合ほか多様な要因を想定できるが、詳細は不明である。こうした絵図の比較・検討を踏まえ、検出した遺構との対応関係について言及しなければならないが、遺構密度の稀薄性から、その作業は行えていない。

### 3．想定第３ａ面(付図４左)

前項での検討では、『讃岐高松丸亀両城図　高松城下図』(第５図)の製作年代以降、『高松城下図屏風』(第６図)が描かれた1650年代前半以前の構築年代を想定できるＳＺｃ03に伴う想定整地面である。ＳＺｃ03に伴う遺構面では、18世紀前半期に属する石組溝(Ⅳ区ＳＤｃ11)を確認し、ＳＺｃ03に伴う階段状施設であるＳＺｃ06を避けるために、屈曲させた状況を確認した。こうした遺構の重複関係から、ＳＺｃ03は少なくともＳＤｃ11構築段階までは機能していた可能性を想定した。加えて、ＳＺｃ03の北約５ｍの箇所に位置するＳＺｃ12の構築年代を18世紀後半に想定したため、ＳＺｃ03に伴う想定整地面の存続時期幅が150年近くになる。こうした状況から、想定第３面をＳＺｃ03構築段階～ＳＤｃ11(石組溝)構築以前の段階とＳＤｃ11構築～ＳＺｃ12構築段階までの２時期に細分し、前者を想定第３ａ面、後者を想定第３ｂ面とした。よって、想定第３ａ面は(1640年代～50年代前半)～18世紀初頭、３ｂ面は18世紀前半～18世紀後半までに属する。さらに、Ｂ地区における整地面の変遷を考慮すると、石組溝による広域地割は、それ以前の鍵形道路を基軸とした地割との断絶を認める。石組溝を検出したＢ地区第４面構成土中に焼土・炭化物を認め、出土遺物の年代観を考慮すると、第５面から第４面への整地の契機は享保３(1718)年の高松大火によるものと理解される(佐藤2001ａ)。これに従うと、想定第３ａ面は(1640年代～50年代前半)～1718年となる。よって、想定第３ａ面に帰属する遺構は、ＳＺｃ03以南に位置し、出土遺物は(1640年代～50年代前半)～1718年に属するという前提条件を付与することができる。Ｉ区第２面は石組溝検出面(Ｉ区第１面、想定第３ｂ面)の下位面となり、さらに想定第４面に伴うＳＺｃ02構築段階の整地土直上に設置された整地層上面で確認しており(第18・19図基本層序Ⅸ層)、想定第３ａ面と判断した。Ｂ地区では年代観より第５面を対応させた。

想定第３ａ面に属する遺構には、石垣に関連する施設のほか、様相４の基準資料であるⅦ区ＳＫｃ20・21、Ⅺ区ＳＥｃ14を出土遺物の年代観から抽出した。Ⅷ区東端で検出した柵列は(ＳＡｃ06～08)、前述した想定第４面ないし当該面に帰属する可能性が高い。

ＳＺｃ03はⅣ区ほぼ中央部でわずかに屈折し、Ⅴ区東半では検出されていないが、西半には認める。ＳＺｃ03に組み込まれた階段状施設(ＳＺｃ06)の下段に配された花崗岩切石の設置角度から、Ⅳ区西端部でやや明瞭に屈曲し、Ⅴ区東半中央付近で再度屈曲する復元が可能である。Ⅳ区東端部においてＳＺｃ03に連続する突堤を確認した(ＳＺｃ04、図版22・23)。その連結箇所は調査区外へ延長するため未確認であるが、想定第３ｂ面で後述する杭の存在からＳＺｃ03と同時期の所産であると判断した。復元では、19ｍ以上の長さで北に突出し、その東端石積みは中堀の西側石垣に繋がる可能性が高い。さらに、ＳＺｃ03に付随する施設として、ＳＺｃ05・06がある。ＳＺｃ06はＳＺｃ03の内部に組み込まれた階段状施設であり、石垣の構築段階から存在していたと考える。その脇から北側へ突出する立石群(ＳＺｃ05)とセット関係を呈する水面への昇降施設であった(図版24)。前節で述べたように、ＳＺｃ03は『高松城下図屏風』に描かれた西外曲輪北辺の石垣に該当し、絵図の製作年代から1640年代～50年代前半の構築年代を想定した。ＳＺｃ03の西側は調査区外へ延長し、屈曲部は確認できないが、Ⅴ区西端部から40ｍ前後西において南に屈曲する可能性が高い。なお、『高松城下図屏風』では、突堤も階段状施設も描かれず、屈折する状況も表現されていない。

屋敷割を復元するに際し、『讃岐高松丸亀両城図　高松城下図』と『高松城下図屏風』の差異は示唆的である。前者の西外曲輪北端はＳＺｃ02、後者の北端部石垣はＳＺｃ03にそれぞれ対応する。つまり、『高松城下図屏風』における西外曲輪北端に位置する広大な屋敷地が拡張により追加されたと考えることができ、ＳＺｃ02からＳＺｃ03までの範囲がこの屋敷地に対応することになる。この屋敷地は「西御屋敷」であるという説もあり、注目できる。しかし、調査ではこれに関連した遺構を確認することはできなかった。絵図では土塀により南北に区画された状況が窺え、それを境として石垣の色彩が異なる(第６図)。色彩が異なる箇所の前面は拡張された石垣に該当し(ＳＺｃ03)、それより南と北端部屋敷地の中央に位置する東西土塀の下に位置するであろう石垣をＳＺｃ02とみなすこともできる。しかし、絵図に描かれた鍵形街路の屈曲部とＢ地区で検出した鍵形道路の位置関係から、その蓋然性は低いと考えられる。また、『高松城下図屏風』では、西外曲輪北端部屋敷地の東端土塀は中堀西側に合致する。Ⅷ区東端部で検出した柵列は中堀西側から８ｍ前後の間隔を認め、絵図に認める道路の存在が想定でき、西外曲輪北端部の屋敷の東土塀ではなく、その南に位置する屋敷地の東を画する施設の可能性が高い。ＳＺｃ04(突堤)から復元できる中堀西側に北端部屋敷地の東土塀が存在すると考えられるが、現道路の下位に位置する。

上記した内容は『高松城下図屏風』に描かれた景観に対応する内容である。Ｂ地区では第６面で検出した幅８ｍ前後を測る鍵形街路を基軸とした地割が第５面にも継続する状況が確認されている(佐藤2003刊行予定)。しかし、その幅は１～２ｍと狭くなり、路地的な内容に変化し、さらに公的施設の可能性が高い甕倉が鍵形地割を超過して存在する。つまり、Ｂ地区第５面の機能した17世紀中葉～享保３(1718)年のいずれかの時期には鍵形道路を基軸とした地割が解消された可能性が高い。Ｃ地区想定第３ａ面では、Ｉ区においてその状

況が確認できる。Ⅰ区ＳＢｃ01とそれに伴う施設と考えられるＳＤｃ01は、Ｂ地区の鍵形路地の延長線上に位置し、鍵形地割が解消された以降の所属時期が想定できる。なお、ＳＫｃ20・21は17世紀後半に属する土器・陶磁器を認め、第３ａ面のなかでも後出した所属時期を示す。一方、ＳＥｃ14は17世紀中葉前後の陶磁器を多く認め、『高松城下図屏風』に近い時期の所産である可能性が高い。鍵形街路との位置関係から、北辺に位置する大型屋敷地を含め、北から３区画目の屋敷地に該当するが、絵図には井戸の記載は認められない。

### ４．想定第３ｂ面（付図４右）

ＳＺｃ03に伴う想定整地面であり、前記した細分により、石組溝の構築時期～ＳＺｃ12構築時期までとなり、実年代では1718年～18世紀後半の年代観が付与できる。ＳＺｃ03の前面に沿って、石垣の補修を示す可能性の高い杭がほぼ１ｍ間隔で列状に打設された状況を確認しており、さらに一部ＳＺｃ03の根石を外した箇所にも打設されることから、それに後出することは明白である。想定整地面から導き出したＳＺｃ03の機能時期は長く、長期間の使用に伴う補修痕跡として理解できよう。杭が打設された正確な時期は不明であるが、想定３ｂ面に伴う可能性を想定しておきたい。

３ｂ面の主要遺構は石組溝となる。Ⅰ区ＳＤｃ02、Ⅱ区ＳＤｃ09・10、Ⅳ区ＳＤｃ11は連続する一連の石組溝で、南接するＢ地区ＳＤｂ28まで続く。その総延長距離は120ｍを超過し、西外曲輪を縦断する広域地割として評価される（佐藤2003刊行予定）。享保年間に描かれた『高松城下図』では、西外曲輪が東西に区画され、西側に「大久保飛騨」、北東側に「西御屋敷」の記載を認め（第７図）、西外曲輪の西半は大久保家屋敷地、北東部は藩主の居住域であったことが窺える。ここで検出した石組溝は両者を画する施設である。よって、想定第３ｂ面では、石組溝以西には大久保家屋敷、石組溝北東部は「西御屋敷」に該当することになる。

前述したように、広域地割となる石組溝は、Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ区において、同一線上に直線的に延び、ＳＺｃ03に取り付く手前で「く」字形に屈曲する。連続する石組溝であるが、その構造は地点により異なる。Ⅰ区北端とⅡ区では、当初1.1～1.2ｍ前後を測る内法が、0.4～0.5ｍの内法に規模を縮小した状況が確認できる。Ⅰ区北端ではＳＤｃ02西側石とＳＤｃ03で構成される段階から、ＳＤｃ02の東西側石へ、Ⅱ区ではＳＤｃ02の東西側石から、西側石と中側石で構成する段階へと変化する。こうした石組溝の組み替えは、当然時期差ないし段階差を反映するが、Ⅱ区ＳＤｃ09出土遺物は上層からの混入遺物を除くと、ほぼ18世紀前半に収まる。西の丸町Ｂ地区における調査成果から、石組溝による区画は高松大火を契機としたものであり、上限は享保３（1718）年となる。よって、出土遺物からは1718年以降、18世紀前半代における石組溝の改築としか判断できない。改築を確認した位置は、Ⅰ区北端部～Ⅱ区となり、Ⅰ区南端部やⅣ区では確認できない。付け替えの痕跡としたⅠ区ＳＤｃ03は遺存状況に起因して南には延長しない。しかし、Ⅰ区南端部には、ＳＤｃ03とは異なる構造を呈するＳＤｃ04が存在する。ＳＤｃ04はＳＤｃ03とは異なる延長線上に位置し、広域地割であるＳＤｃ02に西側側石を接するように設置しており、同時構築であった可能性が高い。北端部は後出する東西主軸のＳＤｃ05により破壊されるが、両者の境をⅠ区中央部に設けることができ、ＳＤｃ05はそれを反映した施設と評価することもできる。『高松城下図』の「西御屋敷」とその南に位置する区画との境は、内堀の南側を延伸した位置となり、Ｃ地区ではＸ区付近が該当する。よって、「西御屋敷」はⅠ・Ⅱ区東半、Ⅲ区、Ⅳ区南半、Ⅶ～Ⅸ・Ⅹ区に相当し、東西主軸のⅠ区ＳＤｃ05は、「西御屋敷」内における施設と評価できる。こうした状況から、広域地割の石組溝の改築は、西御屋敷内のほぼ中央部分のみに限られ、何らかの突発的な要因を想定する必要がある。一方、文化年間の『高松市街古図』では、「西御屋敷」部分は「原」へ変化し、その南には「籾蔵」が出現する（第８図）。さらにその南には、Ｌ字形に屈曲する施設を認める区画があり、『高松城下図』の「西御屋敷」の南に位置する区画に対応する。つまり、両絵図のこの区画が同一区画であれば、『高松市街古図』に登場する「原」と「籾蔵」は、『高松城下図』の「西御屋敷」の区画を分割したものであり、Ⅰ区ＳＤｃ05を「原」と「籾蔵」を画する施設という評価も可能である。所属時期、絵図の年代やその精度といった多岐におよぶ問題を残すが、一仮説として提示しておきたい。

また、Ⅱ区ＳＤｃ07・08はⅠ区ＳＤｃ02・Ⅱ区ＳＤｃ09にほぼ平行する石組による溝である。北端部では西にわずかに曲がり、その延長部は確認できない。南はⅡ区南端部において集水枡状の施設を形成するか、西に屈曲してＳＤｃ09に取り付くかは判断できない。その位置は、「西御屋敷」に該当し、その排水施設と評価できる。

なお、『高松城下図』では南東部にＬ字形に屈曲する建物が表現され、『高松市街古図』（文化年間、第８図）、『天保15年高松之図』（1844年、第９図）にもほぼ同位置で描かれ、幕末頃の製作年代を想定できる『高松城全図』では、「腰掛」と記載されている（第10図）。こうした状況から、石組溝の南東部には腰掛建物が存在すると考えられる。想定第３ｂ面では、腰掛建物を示す建物は確認できなかったが、Ｘ区東端部では南北方向の溝とそれに沿った箇所に位置する柵列を認める（ＳＤｃ14、ＳＡｃ13）。ＳＡｃ13はＳＤｃ14埋没後に設置された柵列とし、布堀の柵列ではないと判断している。ＳＡｃ13からの出土遺物はないが、ＳＤｃ14からは第203

図に示したような陶磁器が出土する。報文番号1523は18世紀前半、1524・1525は17世紀初頭前後の年代観を示す。推測の域を出ないが、後者は溝の埋没時期、前者は柵列の時期を示す可能性が高い。西の丸町C地区の南には、A地区が位置する(古野2001)。A地区では、C地区SDc14と同一線上に位置する溝状遺構があり(SDa01)、やはりその上位に柵列が位置する(SAa01、古野2001)。柵列は杭によるもので、担当者により布堀の可能性は否定されている。SDa01の出土遺物は、17世紀初頭前後の位置付けられる一群と18世紀前半に属する一群があり、C地区に呼応した状況を示す。おそらく、SDa01は17世紀初頭段階の区画溝であり、SAa01は18世紀前半の区画施設となる。いずれも同位置にあることから、基軸となる地割線であったと推される。検出位置・出土遺物の様相から、C地区で検出したSDc14とSAc13はA地区SDa01とSAa01に対応した施設である可能性が高い。こうした点から、ここで検出した柵列(SAc13)は、18世紀前半に属し、『高松城下図』にある「西御屋敷」の南に位置するL字形建物を含む区画に関連した施設であったと考えられる。

また、高松大火以降、C地区の大多数は、『高松城下図』に記載された「西御屋敷」に該当するが、区画施設や一部で確認した石組溝を除き、それに関連した施設は検出できなかった。その要因を後世における土地利用の在り方にも想定できるが、「三葉葵」をモチーフとした鬼瓦を廃棄する際には、家紋を削り落とす状況と同じく、藩主の居住施設の移転に際しては、その痕跡すら残さなかった状況を推測しておきたい。

## 5．想定第2a面(付図5左)

18世紀後半前後に構築されたSZc12に伴う想定整地面を2面とした。18世紀後半～幕末までの年代が想定できる。大型礎石建物を主要遺構とし、Ⅲ区においてその下位に属する遺構面を確認したため、想定第2面は細分できることになる。B地区における整地面の変遷では、2面から1面への整地の契機として、文政4(1821)年の火災が想定されている(佐藤2001a)。当調査区では、火災の痕跡を示す証左は得られなかったが、大型礎石建物を検出した整地層(第18・19図基本層序Ⅺ層)出土遺物の年代観が、19世紀前半となり、大型礎石建物はそれに後出することが窺える。よって、18世紀後半～1821年に属する遺構面を想定整地面2a面とし、1821年～幕末までを2b面とした。

想定第2a面の状況を示す絵図として、『高松市街古図』がある(文化年間(1804～1818)、第8図)。西外曲輪の西半には「大久保飛騨頼都」、北東部には「原」、東部中央には「籾蔵」、南東部には「西下馬」と記載される。想定第3b面に関連した『高松城下図』からの地割の変化はなく、「西御屋敷」が「原」に変化し、「籾蔵」が新たに設定された状況が窺える。「原」とは防火対策用の緩衝地を示し、建物等がない空き地であったと考えられる。

前段階の想定3b面では石組溝を確認し、大久保家の屋敷地と「西御屋敷」を区画する施設であると判断したが、その出土遺物はいずれも18世紀前半代に収まり、出土遺物の年代観に限れば、当該想定整地面までは継続しない。しかし、絵図では西外曲輪の西半分には大久保家の屋敷地が継続して設置されており、何らかの区画施設を想定する必要がある。前記したように、想定整地面は層位的な整地面の変遷に基づくものではなく、石垣の変遷や一部で確認した複数の遺構面、複数の調査区に跨る遺構から導き出した概念的な想定面である。石組溝検出面を主体的に想定第3b面に位置付けた机上での作業があり、出土遺物の年代観により当該想定面まで石組溝を継続させていない。B地区第3面では(18世紀前半～中頃)、第4面から継続する石組溝があり、大久保家の屋敷地の東端を画する。B地区における整地面の変遷では、石組溝は文政4(1718)年の火災を契機とした第2面から第1面へ整地された段階に消滅し、同位置で土塀の基礎が確認されている(佐藤2003刊行予定)。こうした状況を考慮すると、C地区においても石組溝は、想定2a面まで継続する可能性が高いが、出土遺物の年代観等から敢えて想定2a面に帰属させることを避けた。

想定第2a面に帰属する遺構は、Ⅰ・Ⅲ・Ⅹ区を中心に確認した。Ⅰ区SDc06は、想定第3b面のSDc02に後出する重複関係を有し、想定第2面に帰属する遺構と判断した。素掘り溝に礫を充填した溝状遺構で、暗渠施設となるが、関連する建物等は確認できない。その検出箇所は絵図では大久保家の屋敷地に位置する。Ⅲ区は『高松市街古図』では「原」と記載された箇所に該当するが、東西主軸の柵列ないし建物基礎の可能性の高い石敷遺構を検出している。『天保15年高松之図』(1844年、第9図)ではこの地点には「籾倉・長屋アリ」と記載されており、その関連も想定できるが、想定第2a面はⅢ区における遺構面の変遷を踏まえて設定しており、Ⅲ区第1面の大型礎石建物を想定第2b面として捉え、Ⅲ区第2面を出土遺物の年代観を考慮して、想定第2a面に位置付けた。『天保15年高松之図』は1844年に製作された絵図で、その年代観は想定2b面の時期となり、矛盾をきたす。『高松市街古図』では、「原」とあるが、簡易な建物が存在していた可能性を想定しておきたい。

また、前述したように想定2a面は18世紀後半～文政4(1821)年に属する遺構面とした。しかし、Ⅵ区SXc13・14からは、高松城様相把握における様相6の基準資料としても用いるほど、一括性の高い土器・陶磁器が出土している(様相6、18世紀第3四半期)。その検出箇所を点線で示したが、18世紀後半に築かれた

石垣(ＳＺｃ12)の北に位置する。つまり、出土遺物が示す時期には、海域であった箇所に位置し、Ｖ区で確認されていないＳＺｃ12が北へ突出する状況も想定した。しかし、ＳＺｃ12の北に位置するＳＺｃ13に伴う整地面上層で検出しており、その構築時期である明治期以降の所産であることは明白である。出土遺物の総破片点数2147点のうち、７点のみ明治期まで下る遺物を認め、通常であれば混入遺物として排除する出土量であるが、これを重視し、明治期における廃棄と判断した。

### ６．想定第２ｂ面(付図５右)

ＳＺｃ12に伴う想定整地面である。想定第２面を前述したように細分し、当該想定面には文政４(1821)年～幕末までの年代を付与できる。『天保15年高松之図』(1844年)の絵図では、『高松市街古図』(1804～1818年)からの地割の変化は認められない。しかし、西外曲輪の西半には「西御屋敷」、北東部には「籾蔵・長屋アリ」と記載され、南東部にはＬ字形配置の建物が描かれる。「西御屋敷」という記載は大久保家が藩主の公族であった点に起因したと考えられ、同時期の絵図である『東讃高松絵図』では「大久保」と記載されている(弘化年間(1844～1848)、森下1996)。なお、幕末頃の製作と考えられる『高松城全図』には、西外曲輪の東半部が描かれ、北東部には「畑地」、中央部には「御籾倉」、南東部にはＬ字形建物である「腰掛」が描かれる(第10図)。一部描かれた西半には「西御屋敷」とあり、大久保家屋敷地が設置されていたようである。よって、絵図の変遷では、高松大火(享保３(1718)年)～幕末まで、西外曲輪の西半には大久保家の屋敷地が設置され、北東部は「籾倉・長屋アリ」→「畑地」、北東部にはＬ字形の「腰掛」建物が設置されていることが窺える。さらに、『高松城全図』には、東半部中央に「御籾倉」とあり、『天保15年高松之図』では、北東部を含め、「籾倉・長屋アリ」と簡略化された記載であったことが窺える。

想定第２ｂ面では大型礎石建物を中心に確認している。建物はⅡ～Ⅳ区で検出した。Ⅱ区中央部に大久保家屋敷地の東端を画する地割が位置する。西の丸町Ｂ地区の調査成果を考慮すると、土塀による区画が想定できるが、前段階と同様に区画施設は確認できない。ここで留意すべきは、Ⅱ区ＳＢｃ02・03の検出箇所である。その東端部は想定第３ｂ面で確認した石組溝の上位に位置し、石組溝の廃絶後に構築された建物となる。石組溝は西外曲輪を縦断する広域地割であり、Ｂ地区では、この段階に石組溝に代わり、土塀が同位置で設置されている。Ｃ地区で検出したＳＢｃ02・03はその地割に一部重複するため、明治期以降の所産である可能性も否定できない。しかし、Ⅱ区における遺構面の変遷と出土遺物の年代観から、当該整地面に位置付けた。Ⅰ区で検出したＳＤｃ06も同様に、広域地割である石組溝に重複する。こうした状況を考慮すると、石組溝を区画施設とした段階には、西の丸町Ｂ地区からＣ地区まで直線的に縦断する地割であったが、この段階には、Ｂ・Ｃ地区間で鍵形に屈曲する状況を想定しておきたい。一方、Ⅲ区からⅣ区では大型礎石建物を検出した。ＳＡｃ04には２石の大型石材を礎石としており、門の可能性が高く、その北にＳＢｃ07・08が位置する。当初、その検出位置や規模から、『高松城下図屏風』に描かれた西外曲輪北端にある広大な屋敷地に描かれた建物である可能性を想定していたが、出土遺物には、肥前系磁器小広東碗(報文番号333)、大谷焼瓶(報文番号341)を含むことから、19世紀第２四半期以降の所産と判断した。『天保15年高松之図』では、「長屋・籾倉アリ」と記載され、『高松城全図』の記載内容から、西外曲輪北東部の区画の北に長屋、南に籾倉がある可能性を想定した。検出箇所は、北東部北側に位置し、絵図に記載された長屋の可能性が想定できる。しかし、その構造や規模は長屋構造ではなく、問題を残す。

なお、Ｘ区では東西主軸を呈する２列の柵列を確認した。絵図では、Ｌ字形の「腰掛」建物がある区画に位置し、それに関連した施設と考えられる。

### ７．想定第１面(付図６左)

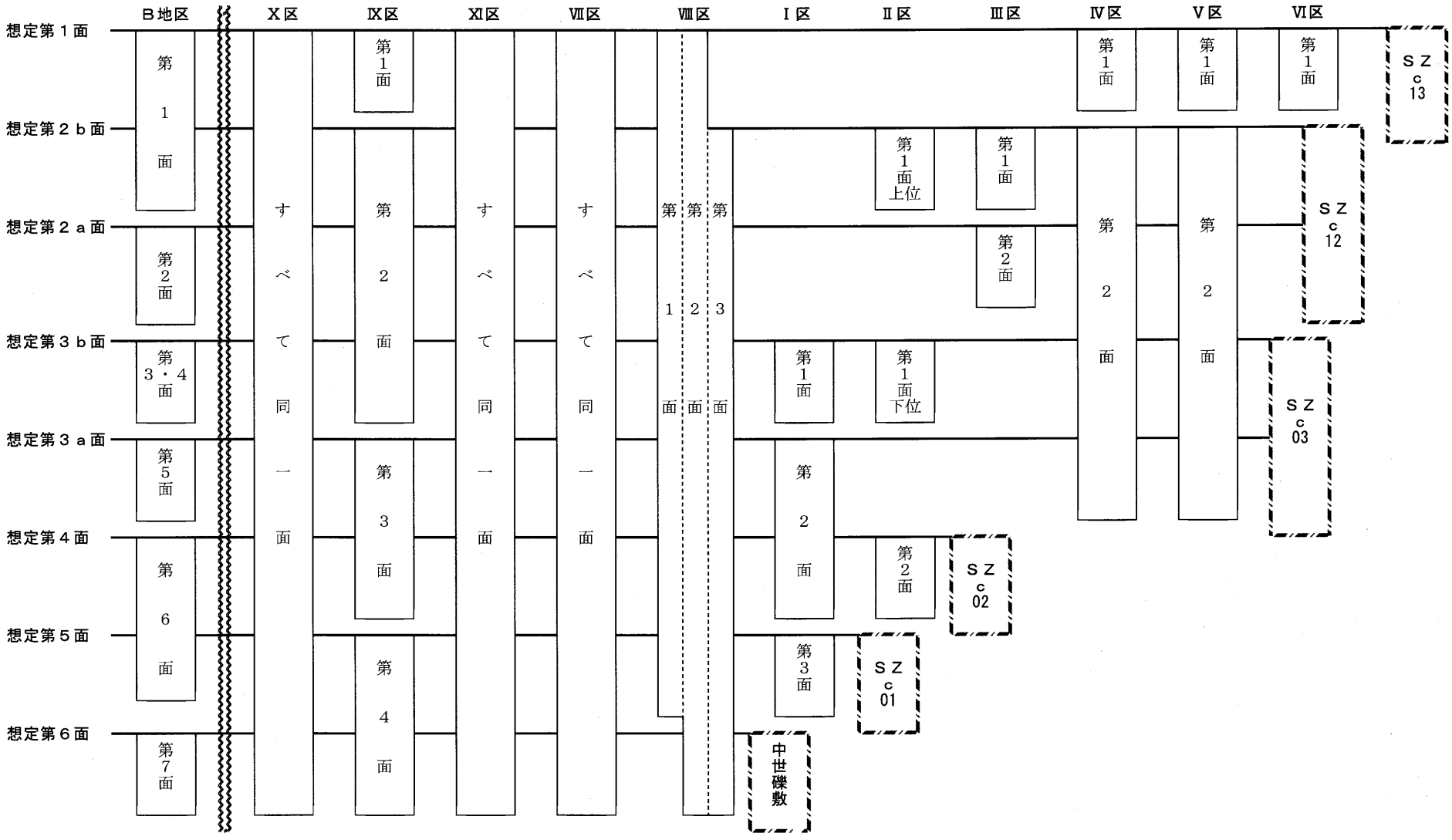
明治期に構築されたＳＺｃ13に伴う想定整地面で、出土遺物の年代観より明治期に属する整地面であることが窺える。ＳＺｃ13上面堆積土の上面で検出した遺構面は今回報告しなかったが(想定第０面)、ゴム印を使用した磁器皿と珉平コップ状碗が共伴する柱穴を認め、大正期の所産と考えられる。よって、想定第１面には明治期の年代が付与できる。但し、検出した遺構を出土遺物のみで想定第１面ないし第０面に帰属させることは困難であり、今回提示した想定第１面には両者が混在する。

明治28年に作成された『高松市街明細全図』(第11図)では、西外曲輪全域が一区画として統合され、「監獄署」が設置されている。明治15年の『讃岐高松市街細見新図』では、「懲役バ」と記載され(森下1996)、ここで検出した遺構は監獄署に伴う施設であった可能性が高い。それを示すように、Ⅸ区ＳＥｃ09からは、「獄署」銘の焼き印を認める曲物が出土している(報文番号1487)。なお、Ｂ地区ではＳＸｂ02より「重禁錮」と記載された木札や「カンゴク」と刻まれた人形外型が出土している(佐藤2003刊行予定)。

第１面で注目すべきは、Ｖ区ＳＸｃ09の存在である。ほぼ南北を指向する石積遺構で、南寄りでは西に面を認める石垣状を呈する箇所があり、出土遺物の大多数が18世紀末～幕末までに属することから、当初は近世遺構の可能性を想定していた。しかし、ＳＺｃ03との関連やＳＢｃ09との位置関係及びわずかに認める明治

期に属する出土遺物から、想定第１面に伴う遺構と判断した。

なお、Ⅵ区ＳＸｃ13・14から出土した土器・陶磁器は高松城様相把握の基準資料として用いるほど、極めて一括性の高いものである(18世紀第３四半期、松本・佐藤2001、松本2002ａ、本報告書第３章第４節)。しかし、その検出位置は18世紀後半に構築されたＳＺｃ12の北側に位置し、遺構出土遺物が示す18世紀第３四半期には、検出箇所は海域であった。ＳＺｃ12はⅤ区では未確認であり、Ⅳ区西端部から北に突出する可能性も考慮したが、ＳＸｃ13・14はＳＺｃ13に伴う整地層上面で検出しており、その可能性は低い。しかし、Ⅵ区で検出した遺構は石垣の変遷からすべて想定第１面に帰属する遺構となるが、各遺構からは所属時期である明治期に属する遺物の出土量を圧倒的に凌ぐ量の18世紀後半～19世紀前半の土器・陶磁器を認める。その要因について言及することはできないが、筆者が認識できない内容を示す可能性もあり、ここに明記しておきたい。




第230図　高松城跡(西の丸町Ｃ地区)整地層概念図

## 第4節　西の丸町地区出土の陶磁器について

Ｂ地区では６面に及ぶ近世遺構面が確認され、各整地面ないし整地層構成土から火災廃絶資料や紀年銘資料を含む良好な土器・陶磁器が出土している。これら一括性の高い土器・陶磁器に高松城跡(西の丸町Ｂ地区)における遺構面変遷を踏まえて時間軸を付与し、様相というかたちで捉えた。欠落する箇所は、Ｃ地区における一括性の高い資料で補った。その内容については、高松城様相把握として既に紹介しているが(松本・佐藤2001、松本2002ａ)、ここで再度検討を加えておきたい。

### １．基準資料とその概要

第５表に基準資料についてまとめた。報告書遺構名の後にかっこ付きで調査時遺構名を掲載している。後述するが、様相１は17世紀初頭、様相８は1821年～1872年までの実年代となり、ほぼ同一地点における江戸時代を通じた変遷を捉えることが可能である。なお、様相６のＳＸｃ13・14に関しては、二次移動に伴う土器・陶磁器であり、暫定的な基準資料として用いる。近年、高松市教育委員会の調査によって、様相６併行ないしわずかに後出するが、様相７までは下らない一括資料が確認されている(大嶋2002)。

なお、基準資料の土器・陶磁器消費者層は様相１～４は比較的上級クラスの武家屋敷、様相５～８に関しては高松藩筆頭家老(大老)である大久保家屋敷からの出土遺物である。

以下、各様相についてその概要を記す。

| | 基準資料 |
|---|---|
| 様相１ | ＳＫｂ192(ＳＸ８Ａ05)<br>ＳＫｂ152(ＳＸ８Ｄ209) |
| 様相２ | ＳＫｂ255(ＳＤＢ17中～最下層) |
| 様相３ | ＳＫｂ229(ＳＫ８Ｂ30)<br>ＳＫｂ170・171(ＳＫ８Ａ33・34)<br>ＳＫｂ178(ＳＸ８Ｃ203) |
| 様相４ | ＳＫｃ20・21(ＳＫ11Ｄ401・406) |
| 様相５ | ８Ａ・Ｃ区Ⅱ層(第１遺構面直下層)<br>ＳＫｂ65(ＳＸｃ04・05) |
| 様相６ | ＳＸｃ13・14(Ａ区ＳＫ(ＳＸ)08・09) |
| 様相７ | ＳＸｂ06(ＳＸ８Ｃ200)<br>ＳＫｂ63(ＳＫ８Ｄ206) |
| 様相８ | ＳＤｂ04(ＳＤ05･ＳＤ８Ａ01･ＳＤ８Ｃ001) |
| 様相９ | ＳＸｂ01・02(ＳＸ８Ａ01・02) |

**第５表　各様相基準資料**

**様相１　ＳＫｂ192：17世紀初頭**

肥前系磁器(伊万里)出現以前の段階で、磁器は輸入磁器のみで構成される。肥前系陶器(唐津)は大橋編年Ⅰ期で構成され(大橋2000)、碗・絵唐津を含む皿等がある。窯詰めはすべて胎土目積み。その他、瀬戸・美濃系陶器ソギ入り折縁皿、志野向付・丸皿、備前陶器摺鉢・大平鉢・注口付き鉢等が伴う。基準資料における肥前系陶器と瀬戸・美濃系陶器の比率は、明らかに前者が後者を凌ぐ出土量を占める。

様相１に併行する資料として、高松城跡(東ノ丸跡、歴史博物館建設地点)ＳＥ06、第４遺構面上層出土遺物がある(北山1999)。後者は整地層中からの一括出土遺物？で、明瞭な混入遺物を除くとその一括性は高い。磁器は輸入磁器のみで構成される(景徳鎮窯系・漳州窯系・朝鮮王朝白磁)。肥前系陶器には(天目)碗・皿があり、窯詰めは胎土目積みが主体を占め、少量の砂目積みを認める。また、明らかに肥前系陶器を凌駕する瀬戸・美濃系陶器(天目碗、鉄釉丸皿、灰釉丸皿、内禿皿、折縁皿、志野、(青)織部、瀬戸黒)には注意する必要がある。その他として備前系陶器(摺鉢、注口付き鉢、大平鉢、坏)・丹波摺鉢、亀山系鍋、関西系焙烙、華南彩釉陶器瓶が伴う。西の丸町Ｃ地区のⅧ区ＳＺｃ01の前面堆積土出土資料も瀬戸・美濃系陶器の優位性を認め、ＳＫｂ192とは異なる様相を示す。いずれも包含層資料であり、形成年代は17世紀初頭であるが、廃棄土坑とは異なる形成過程に起因したものと理解したい。

なお、第３章第２節で検討したように、ＳＺｃ01裏込めないしＳＺｃ01構築に伴う整地層出土遺物は、輸入磁器、瀬戸・美濃系陶器、備前摺鉢のみで構成され、肥前系陶器は確認できない。出土総点数が少なく現時点では高松城跡(西の丸町地区)で普遍化できるものではないが、様相１に先行する仮称様相０として捉えることができるかもしれない。

**様相２　ＳＫｂ255中～最下層：1620～1630年代**

元和10年(寛永元年：1624年)銘木簡が共伴する紀年銘資料である。肥前系磁器では1630～40年代に属する碁笥底の瓶(と碗)を認めるが、陶磁器の主体は肥前系陶器が占め、碗・皿・鉢を認める。窯詰め法は砂目積みが主体をなし、畳付が摩耗した胎土目積みの絵唐津を少量含む(長期間の使用)。輸入磁器、瀬戸・美濃系陶器も一定量認めるが、その出土量は様相１に比して、減少する。

**様相３　ＳＫｂ229・ＳＫｂ178：1640～50年代**

肥前系磁器の出土量が激増し、肥前系陶器と同量ないしそれを凌ぐ組成を占めるようになる。肥前系磁器には、初期伊万里碗、高台内無釉碗、高台径の小さい皿、鎬入福寿染付小坏に加え、三股青磁窯産の青磁皿(芭蕉文片彫り、中野1998)、白磁皿を認める。肥前系陶器では灰釉溝縁皿(砂目積み)が出現し、主体を占めるようになる。備前陶器は摺鉢を中心に一定量の組成を占めるが、輸入磁器、瀬戸・美濃系陶器は激減する。

**様相４　ＳＫｃ20・21：17世紀後半**

肥前系磁器では高台断面三角形碗、端反小坏、高台径がやや小さい皿、台皿、芭蕉文を片切り・線彫りした三足付き青磁皿を認める(三股青磁窯産、中野1998)。大橋編年Ⅲ期(17世紀後半)に属する肥前系磁器が主体を占める。肥前系陶器では溝縁皿や刷毛目鉢をごく少量認めるが、出土量は減少する。輸入磁器や瀬戸・美濃系陶器は完全に姿を消す。土師質土器小皿も様相３からの連続性や様相５への継続性に合致した内容を示し、基準資料として用いた(松本2002ａ)。

**様相５　８Ａ・Ｃ区Ⅱ層：18世紀前半(1718～1747年)**

西の丸町Ｂ地区の８Ａ・Ｃ区Ⅱ層は延享４(1747)年に藩主の子息である松平頼辰が大老大久保家の家督を相続したことを契機とした３面から２面への整地に伴う出土遺物であり、1747年を下限として捉えることができる。上限は３・４面の存続幅とも関連するが、高松大火(享保３(1718)年)を契機とした５面から４面への整地年代を想定しておきたい。

肥前系磁器碗では、高台断面三角形・Ｕ字形の碗、薄手の半球形碗、印判を認める碗が主体を占める。皿では深手＋口縁部端反皿、浅手の丸皿、蛇ノ目釉剥ぎ＋底部無釉皿を認める。その他、紅皿、仏飯器、蓋物、鉢、香炉・火入れといった器種も一定量を占め、多様な器種構成を示す。装飾技法として、コンニャク印判の使用が目立ち、わずかに型紙摺り、墨弾き、掻取が確認できる。肥前系陶器では、呉器手碗、京焼風陶器碗・鉢、刷毛目碗が目立ち、銅緑釉皿も少量出土する。また、陶胎染付碗も若干量確認できる。備前陶器は摺鉢・灯明皿を中心に一定量の組成を占めるが、様相５では堺・明石系摺鉢が萌芽的に出現し、これ以降、摺鉢に占める出土量は減少傾向にある。京・信楽系陶器も様相５から出現するが、その出土量は稀薄である。なお、様相１に併行する西の丸町Ｃ地区Ⅷ区ＳＺｃ01前面堆積土や東ノ丸(香川県歴史博物館建設地点)第４遺構面上層からは、楽焼系の初期京焼の出土を認める。

**様相６　ＳＸｃ13・14：18世紀第３四半期**

主軸方位を揃え、隣接する２基の土坑である。出土遺物の年代観から一括性を認めたいが、ＳＺｃ12の北に位置し、明治期に構築されたＳＺｃ13に伴う整地層上面で検出しており、明治期に二次移動に伴い廃棄された遺構と判断できる。しかし、当該期の基準資料を欠き、ある程度の一括性を認めることから、暫定的な基準資料として用いる。

肥前系磁器碗では薄手の半球形碗、高台断面Ｕ字形碗、くらわんか手の碗(梅樹文)、青磁染付の朝顔形碗等を認める。皿の出土量は少ないが、深手の端反皿、蛇の目釉剥ぎの皿を認める。その他、様相５から引き続き、紅皿、仏飯器、蓋物、鉢、香炉・火入れも一定量の組成を占める。肥前系陶器は量的に減少し、陶胎染付碗・刷毛目鉢等をわずかに認める。また、様相５では確認できない瀬戸・美濃系陶器が再出現する。碗形態では腰錆碗、灰釉丸碗が主体を占め、香炉・火入れ、鬢水入れ、土瓶、水甕を認める。備前系陶器では、灯明皿が主体を占める。摺鉢では堺・明石系摺鉢が備前系陶器をわずかに凌駕する出土量となる。

また、様相６の特徴として京・信楽系陶器が肥前系磁器を凌ぐ組成を占める点が挙げられる。丸碗を主体とし、平碗、鉢・皿、瓶、土瓶等を認め、陶磁器組成に占める比率は、30.6％を数える。

ＳＸｃ13・14はＢ地区における整地面変遷から導き出した様相ではないが、小広東碗や撥高台碗がなく、東大編年Ⅵａ期に併行すると考える(堀内1997)。様相５・７の年代観や出土遺物から18世紀第３四半期の年代を付与し、暫定的な基準資料として捉えておきたい。

**様相７　ＳＸｂ06・ＳＫｂ63：1821年火災廃棄資料(18世紀第４四半期～19世紀初頭)**

外堀に近接した大型土坑である(水溜状の施設)。埋土に炭化物や焼土を含み、遺構検出面が火災により廃絶する点を考慮すると、火災後に一括廃棄された遺物群と考えられる。出土土器・陶磁器の年代観は18世紀第４四半期～19世紀初頭を示し、文政４(1821)年の火災による廃棄土坑と理解する。

肥前系磁器では、前様相からの薄手の半球形碗、くらわんか手の碗、朝顔形蓋付碗(青磁染付)に加え、小広東碗、撥高台碗、広東碗、小丸碗を認め、多様な碗形態を示す。皿では深手の端反皿・浅手の丸皿に加え、型打輪花の見込みに一枚絵を描く皿や蛇ノ目凹形高台(低)を認め、ＳＫｂ63では１点のみではあるが、蛇ノ目凹形高台(高)の皿も確認できる。肥前系陶器は皆無に等しい。瀬戸・美濃系陶器も様相６の組成に加え、碗形態のバリエーションが豊富になり、拳骨碗、刷毛目碗が加わる。京・信楽系陶器は様相６から引き続き、丸碗を中心に高い組成を占める(12～13％)。焼締陶器では備前摺鉢が激減し、堺・明石系摺鉢が主体を占めるようになる。備前系陶器は様相５以降、灯明皿を生命線として、12～17％の組成を保持する。

なお、ＳＸｂ06出土遺物には17世紀後半に属する遺物も一定量含まれる。

肥前系磁器における小広東碗、撥高台碗、広東碗の存在や典型的な肥前系磁器端反碗・湯呑碗、瀬戸・美濃系磁器、京・信楽系陶器端反碗の欠落といった遺物の器種構成は、東大編年Ⅶ期に対応する(堀内1997)。しかし、整地面変遷の解釈から、前述したように文政４(1821)年の火災により一括廃棄された遺物群であると理解したい。所属時期を下げる根拠として、肥前系磁器菊皿、一枚絵を描く型打輪花皿が主体を占める点、蛇ノ目凹形高台(高)の存在を挙げたい。

**様相８　ＳＤｂ04：1821年～1872年**

第１面で検出した遺構で、整地面の変遷から判断すると、明治５(1872)年の監獄署の設置による廃絶時期を下限とし、上限は文政４(1821)年の火災とする。

前代までには認められなかった肥前系磁器端反碗、瀬戸・美濃系磁器(端反碗)、京・信楽系陶器端反碗が出現し、様相８の指標となる。磁器の比率では肥前系磁器が主体を占め、瀬戸・美濃系磁器の出土量はさほど多くない。また、前様相まで多様な内容を示した瀬戸・美濃系陶器や京・信楽系陶器は稀薄となり、肥前系陶器は長期間の使用ないし混入を除くと、完全に姿を消す。また、様相７において萌芽的に出現し、本様相で激増する京・信楽系陶器灯明皿の盛行により、備前系陶器・灯明皿の出土量は減少する。

**様相９　ＳＸｂ01・02：19世紀末**

大型の堀状の落ち込みで、一部に石積みを伴う。落ち込み内の埋土下位からは、焼け歪んだ陶磁器や匣鉢・輪トチン・トンバリ等の窯道具・構築材が多量に出土する。明治５(1872)年に設置された高松監獄における窯業生産に伴う一括廃棄(物原)で、ＳＸｂ02には明治26(1893)年銘の木簡が伴う。明治27～31年に10代目理平衛が監獄での陶磁器生産を指導しており(森下2002)、それに伴う遺物群と理解できる。それを示すように、「カンゴク」と掘り込まれた土製品外型が出土する。

肥前系磁器では端反碗・型紙摺りの丸碗を認める。なお、高松監獄産の製品には磁器盃・煎茶碗・蓋付碗・鉢・角鉢・徳利・急須・コーヒーカップ(？)、軟質系陶器急須・土瓶・行平・火入れ・植木鉢、土師質土器焙烙・火鉢・蛸壺があり、蛸壺の外型や土製品外型も出土する。

## ２．様相別組成

第６・７表に様相別の器種組成を考える礎となる土器・陶磁器の生産地別、各器種の出土点数をまとめた。いずれも破片数計測によるカウントを実施した。さらに、Ａとして陶磁器組成に占める各器種の比率、Ｂとして土器・陶磁器組成に占める各器種の比率をそれぞれパーセントで示した。以下、これに基づき様相別の各組成について検討する。

**様相別材質組成**

第231図・第８表に土器／陶器／磁器／軟質施釉陶器／その他の材質別組成をまとめた。出点数が稀薄な様相４基準資料ＳＫｃ20・21は実態を反映するものではないが、その動向を窺うことができる。土器は40％前後の組成を占める。微細な変化について言及できないが、様相７・８では20％以下まで落ち込む(18世紀第４四半期～幕末)。様相５に萌芽的に出現する軟質系施釉陶器の存在による相対的な出土量の減少と理解できる。陶器は、様相１には瀬戸・美濃系陶器、肥前系陶器、備前系陶器を中心に50％を越える組成を示すが、それ以降肥前系磁器の普及に伴い減少し、様相４では10％以下まで落ち込む。様相５には肥前系陶器の刷毛目碗、京焼風陶器の出現に伴い、30％まで増加し、様相６以降も京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器、鉄釉を施す鉢等の盛行によって、安定した組成を示す(30～40％)。磁器は、様相１では中国産磁器により９％前後の組成を占め、様相２には肥前系磁器の出現を認めるが、その比率は２％に留まる。様相３以降、肥前系磁器が急速に普及し、安定した組成を示す。しかし、様相６では京・信楽系陶器の普及により、14％まで落ち込む。様相７には20～30％まで増加し、様相８では瀬戸・美濃系磁器の出現もあり、30％の組成を維持する。

**様相別器種組成(土師質土器)**

土師質土器の組成は様相１～５まで小皿・坏類が50％を越える組成を占めるが、様相６以降その出土量は激減する。灯明具としての用途が想定でき、備前系ないし京・信楽系陶器の陶器灯明皿の動向との関連が想起される。後述するが、陶器では様相５において備前系陶器灯明皿が出現・盛行し、11％の組成を示し、続く様相６・７においても20％を越える。様相７には萌芽的な京・信楽系陶器灯明皿の出現を認め、様相８には両者の組成は逆転し、12％前後の組成を占める。土師質土器小皿・坏類は、様相６以降減少しており、陶器における灯明具の出現とは連動しない。しかし、様相６以降、羽釜、焙烙、深鉢が盛行し、それにより小皿・坏類の数値が減少する可能性が高く、相対的な出土量では、陶器灯明具の出現により緩やかに減少する。しかし、その変化はドラスティックなものではなかったと考えたい。外耳付き鍋は様相１では33％と高い数値を示すが、その後は減少し、様相４以降は確認できない。その後、煮沸具形態は焙烙に転換し、様相４以降20％を越える組成を示し、様相７では50％に近い数値となる。一方、同じく煮沸具である羽釜は様相１～７まで認めるが、その形態は大きく変化する。様相１～３の羽釜は外耳付きの羽釜で、中世後半からの系譜を認める形態である(報文番号1261)。外耳には穿孔を認めるが、吊すという機能的なものではなく、形骸化する。様相５～７では器壁は薄くなり、瓦質化し、口縁部が茶釜形を呈する一群(報文番号819)と内湾する一群が存在する(報文番号757)。外耳には穿孔を認めるが、やはり穿孔に使用痕は認められない。焙烙との製作技法、焼成に共通性を認める。その動向は、前者は様相１において2.3％、様相３において２％前後の数値を示し、それ以降は後者に転換する。中世後半からの系譜を認める摺鉢、外耳付き鍋も様相３から様相４にかけて消滅し、17世紀後半は土師質土器における画期と評価できる。後者は様相５ではわずかに2.6％の数値を示

すが、様相６では40％近くまで激増し、様相７には姿を消す。様相７における陶器土瓶、行平鍋の増加に連動した現象と理解したい。また、摺鉢は前記したように、中世後半からの系譜を引き、様相４には消滅する。出土量は10％を前後する組成を示す。スリメが顕著に摩耗する個体もあり、摺るという用途は明白であるが、被熱痕、煤痕の付着を認める個体も一定量認め、一部には煮沸具として用いられた可能性が高い。最後に深鉢の動向であるが、貯蔵具、煮沸具、暖房具、植木鉢といった様々な用途に用いられ、それを包括して深鉢としており、問題を残す。その出土量は江戸時代を通じて一定の組成を占めるが、微細な動向については言及できない。

**様相別器種組成（陶器）**

陶器組成には、軟質系施釉陶器も含め積算した。

陶器の様相別器種組成をみると、様相５に画期を見出すことができる。様相１～４では、碗、皿・鉢、摺鉢、瓶類で構成されるが、様相５以降、香炉・火入れ類、土瓶、灯明皿が組成に加わり、多様な器種組成を示し、さらに様相７には行平鍋が出現する。これにより、様相５以降、様相１～３で主体を占めた碗、皿・鉢類の比率は相対的に減少する傾向にある。

碗は、様相１～３では肥前系陶器、瀬戸・美濃系陶器の盛行により組成の中心をなす。様相５には京・信楽系陶器が出現し、様相６では肥前系磁器を凌ぐ比率を占めるが、様相７には軟質系施釉陶器の土瓶類の出現・盛行によって、相対的な出土量は減少することになる。なお、様相６・７における京・信楽系陶器丸碗（半球形碗）・小杉碗、瀬戸・美濃系陶器腰錆碗といった小型陶器碗や小型磁器碗（小広東碗等）の増加の背景には、喫茶（点てない茶）の普及が想定でき（長佐古2002ｂ）、土瓶の出現・盛行とも連動した動向と理解できる。なお、急須は明治期まで未確認である。

**様相別器種組成（磁器）**

磁器の様相別器種組成の動向は、陶器と同じく、紅皿・仏飯器の出現により様相５に画期を見出すことができる。碗では、江戸時代を通じて60％前後の安定した組成を示す。しかし、その生産地や用途は大きく異なる。様相１・２では輸入磁器が主体をなし、見込み周縁に螺旋状の擦痕を認める個体が存在することから（茶筅擦れ）、「点てる」茶への使用が想起できる。同時期の陶器碗には瀬戸・美濃系陶器天目碗や肥前系陶器碗を認める。口径に比して、器高が高い形態を呈し、喫茶への使用が想定できる。様相２には肥前系磁器を認めるが、その普及は続く様相３からであり、激増するという表現が妥当である。様相３では、やはり器高が高い碗が主体を占める。漆器碗の動向は明らかではないが、様相５には口径が広い大振りの碗や粗製のくらわんか碗を多量に認め、一部には飯碗への使用が考えられる。様相５には器種構成が多様になるにも係わらず、碗組成は60％前後の数値を示す。こうした動向は様相８まで認め、様相６には青磁染付の朝顔形蓋付き碗、様相７には腰張＋八字高台碗（撥高台碗）、広東碗といった飯碗に用いる大振りの蓋付き碗が盛行する。一方で、薄手の半球形碗、小碗、小広東碗も一定量の出土を認め、18世紀前半以降、陶器小型碗とともに「点てない」茶に用いられたと考えられる。

**様相別産地組成（陶磁器）**

朝鮮白磁、軟質系施釉陶器、施釉陶器、産地不明陶器等に関してはその他陶器とし、関西系磁器は瀬戸・美濃系磁器に、在地窯の理兵衛焼は京・信楽系陶器に含めた。また、富田吉金窯に関しては、肥前系磁器、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器に酷似した製品を生産しており、それぞれに含めた。

以下、陶磁器組成を概観する。

**中国産磁器**　様相１では12％前後を占めるが、様相２では４％前後まで減少する。さらに様相３では肥前系磁器の急速な普及に伴い、未確認の遺構も存在し、様相４には完全に姿を消す。

**肥前系陶器**　様相１・２では40～60％と陶磁器の主体を占めるが、様相３には肥前系磁器の普及によりその組成は逆転し、様相４では肥前系磁器の１／５以下にまで激減する。続く様相５では刷毛目碗・鉢、呉器手碗、陶胎染付碗、京焼風碗・鉢の出現・盛行により、その組成を維持するが、様相６以降、５％以下まで激減する。

**肥前系磁器**　様相２に萌芽的な出現を認め（碁笥底の瓶）、様相３には激増し、ＳＫｂ229では61％を占め、肥前系陶器に代わり陶磁器組成の主体となる。様相４の基準資料であるＳＫｃ20・21の遺物総点数が少ない点を考慮しても、様相４・５では50％以上の組成を占めることは明白である。しかし、様相６・７では京・信楽系陶器の普及に伴い、35％以下まで減少する。

なお、様相８では27％を占め、瀬戸・美濃系磁器の出現・普及に伴う顕著な減少傾向は認められない。その要因として、在地産の富田吉金窯ないし愛媛県砥部焼製品を肥前系磁器に含めてカウントを行ったことが挙げられよう。

**瀬戸・美濃系陶器**　様相１では８％前後の組成を占め、様相２・３ではわずかに増加する。しかし、様相４・５では４％以下まで激減する。続く様相６では腰錆碗・灰釉丸碗、香炉類、水甕を中心とした器種が出現することにより６％前後まで増加し、様相７でも刷毛目碗・拳骨碗が出現し、一定量の組成を維持する。

**京・信楽系陶器**　様相５から碗類を中心に９％の数値を示し、様相６では31％まで激増し、肥前系磁器を凌ぐ比率を占める。様相７では、軟質系施釉陶器土瓶の

盛行により、13%前後と相対的な出土点数は減少するが、その出土量は極めて多い。様相８では灯明皿の普及を認めるが、前様相と同等の数値に留まる。

**備前系陶器**　様相１～３までは摺鉢、大平鉢、注口付き鉢、徳利、甕、壷等を主要器種として、20%以上の高い数値を示す。様相５～７には灯明皿を生命線とし、15%前後を維持するが、摺鉢に限ると様相５において初現的に出現した堺・明石系摺鉢が、様相６・７において摺鉢組成の主体を占めるようになる。さらに様相８には灯明皿も京・信楽系陶器に圧倒され、その出土量は６%まで減少する。

## ３．各生産地別陶磁器の変遷について

第236～253図に各陶磁器を様相別に配置した変遷図を作成した。編年表とは呼称できないが、高松城跡(西の丸町地区)における陶磁器変遷を考える指標となるべく作成したものである。以下、これに基づき各陶磁器の動向について概観する。

**中国産磁器**(第236図)

中国産磁器は様相１～３まで認める。生産地を単位として、漳州窯系、景徳鎮窯系、青磁・白磁の３者に大別した。青磁・白磁については、築城以前の中世前半に属する白磁碗Ⅳ類や同安窯系青磁碗を認め、混入と理解できる。一方、青磁碗には見込みに印花文の押印ないし陰刻により花弁文を施す中世後半の碗を認める。混入品か、伝世品かについては言及できないが、調査地点では中世後半に属する遺構は確認できない点を明記しておきたい。

青花では漳州窯系青花と景徳鎮窯系青花を認める。両者の比率は、ＳＫｂ192では漳州窯：景徳鎮窯＝10点：１点、ＳＫｂ152では２点：３点、ＳＫｂ255では２点：３点、ＳＫｂ229では１点：１点、ＳＫｂ170では０点：３点、ＳＫｂ178では４点：６点と多様な様相を示す(第６・７表)。様相１基準資料ＳＫｂ192において漳州窯系青花が突出するが、様相１に併行する第237図に挙げたⅧ区ＳＺｃ01前面堆積土出土遺物では、漳州窯：景徳鎮窯＝７点：17点(第３表)、東ノ丸(歴史博物館建設地点)の第４遺構面上層出土遺物では、漳州窯：景徳鎮窯＝46点：34点となる。こうした出土遺物の組成から、両者の搬入状況を検討することは困難である。

碗ではＦ群や高台内を蛇の目釉剥ぎするＥ群が目立ち、皿ではＢ・Ｅ群が主体を占め、Ｆ群をわずかに認める。

Ⅷ区ＳＺｃ01前面堆積土出土遺物では、白磁皿Ｃ群、染付皿Ｂ・Ｅ群が主体をなし、Ｃ群をわずかに認める。碗ではＥ群の出土が目立つほか、唐子や鳥を描く小杯も一定量認める。

その他中国産陶磁器として、華南彩釉陶器の出土を様相１に併行する資料で確認できる。Ⅷ区ＳＺｃ01前面堆積土出土の報文番号1265は、連続する鎬状の起伏を有する瓶で、外面には鮮やかな瑠璃釉を施釉する。同様の製品は、東ノ丸(歴史博物館建設地点)の第４遺構面上層未報告遺物にも確認できる。

**朝鮮王朝白磁**

基準資料からの出土は確認できないが、大多数が様相１に併行するＣ地区Ⅷ区ＳＺｃ01前面堆積土出土遺物には、見込み周縁に鏡と呼称される段を有し、複数の砂目積みの皿を認め(報文番号1112・1167・1184等)、様相２に併行するＳＫｃ42には碗を認める(報文番号1584)。さらに、様相１に併行する東ノ丸(歴史博物館建設地点)第４遺構面上層出土遺物にも、口縁部が大きく開き、端部をわずかに外反させる皿を認める。口径は16cm前後を測り、見込みには複数の砂目を認める(北山1999、報文番号504～509)。全陶磁器に占める朝鮮王朝白磁の組成は2.9%を数える。

**肥前系陶器**(第238～240図)

肥前系陶器は大きく様相１～３と様相５、様相６に大別できる推移を示す。なかでも様相１～３では陶磁器組成の中心となる組成を示し、その変化の方向性も極めてスムーズである。

様相１は肥前系陶器の出現期に位置付けられる(大橋編年Ⅰ期、大橋2000)。碗・皿・鉢・瓶を認め、摺鉢や甕は皆無に等しい。基準資料ではいずれも胎土目による窯詰めがなされ、区画文を中心とした絵唐津を一定量認める。碗では、底部から直線的に外傾する形態が主体を占め、一部には天目碗も認める。釉調は暗緑灰色の色調が中心となり、藁灰釉は認められない。皿では絵唐津、胎土目積み皿のほか、なぶり口縁を呈するものも認める。なお、様相１に併行する資料には胎土目積みが主体をなし、わずかに砂目による窯詰めを認める。釉調は暗緑灰色を呈し、大橋編年Ⅱ期のなかでも初期の製品と考えられる。

様相２は、砂目積みによる窯詰めが主体をなし、胎土目積み製品は、畳付の摩耗が著しく、伝世的な使用が想定される(松本・佐藤2001)。

様相３では、胎土目積み製品が姿を消し、砂目積みが窯詰めの主体となる。溝縁皿の出現・盛行を指標として捉えることができる。碗では腰部に屈曲点を有し、そこから直線的に外傾する形態の碗に加え、淡黄色の色調を呈する極めて精良な胎土の碗が出現する(内野山窯系)。鉢類は確認できない。

続く様相４は、出土総点数が少なく、実態を示していない可能性を残すが、肥前系陶器は激減し、わずかに、溝縁皿や砂目皿を認めるに留まる。しかし、次段階の様相５に盛行する白泥による刷毛目を施す鉢が出現する。

様相５では、それ以前の肥前系陶器とは胎土・釉調・器形等において、著しい隔たりを認める。碗類では、

刷毛目碗、呉器手碗、京焼風陶器鉢が出現・盛行する。刷毛目碗は内外面ともに直線的な刷毛目が主体をなし、わずかに波状文を認める。京焼風陶器鉢は17世紀後半には出現するが、基準資料では様相５からの確認となる。見込みにはやや抽象化・簡略化が進行した楼閣山水文を認め、高台内に「清水」・「柴」の刻印を押印する。一方、鉢では刷毛目を主体とした二彩手製品や三島手の鉢を認め、瓶類にも刷毛目製品が盛行する。こうした器種構成は、様相１～３から様相４～５にかけて緩やかに進展したものと考えられる。

なお、農村部における様相５併行資料の様相と比較すると、農村部では京焼風陶器鉢は皆無に等しく、西の丸町地区でも多く認める刷毛目碗や呉器手碗を一定量有し、さらに城下では稀薄な出土である陶胎染付碗・銅緑釉皿が盛行するという搬入状況の差異を指摘できる(松本2002ａ)。

続く様相６は、碗では陶胎染付碗、鉢では刷毛目鉢(蛇の目釉剥ぎ→アルミナ砂塗布)の出土を認めるが、その出土量は激減し、様相７・８では伝世的な使用ないし混入遺物をわずかに認める程度になる。

**瀬戸・美濃系陶磁器**(第241図)

瀬戸・美濃系陶磁器は大窯製品で構成される様相１～３と空白期を経て再出現した様相６・７、さらに磁器が出現する様相８という画期を設定できる。

様相１は、基準資料では天目碗、灰釉丸皿・折縁皿、志野向付を認める。東ノ丸(歴史博物館建設地点)の第４遺構面上層出土遺物では、天目碗、灰釉丸皿・折縁皿・折縁ソギ皿、内禿皿、鉄釉丸皿、志野向付・菊皿、(青)織部向付、織部黒碗の出土を認める。出土遺物は、藤澤編年大窯３段階後半～４段階が主体を占める(藤澤1993)。様相２・３においても基本的な器種構成や出土遺物の年代観は様相１と大差はなく、伝世的な使用に伴う廃棄と理解できる。

続く様相４・５では瀬戸・美濃系陶器は確認できず、18世紀第３四半期に属する様相６に再出現する。腰錆碗、灰釉丸碗、香炉・火入れ、水甕、土瓶、鬢水入れ、蓋を認める。藤澤編年第７・８小期に属するものが主体を占める(藤澤1987)。様相７では、新たに拳骨碗、刷毛目碗(内外面打ち刷毛)、柳茶碗、鎧手碗、片口鉢が加わり、碗形態は多様性を帯びる。出土遺物の年代観は藤澤編年第８・９小期に属する。なお、様相６・７では京・信楽系陶器色絵丸碗(半球形碗)が盛行するが、瀬戸・美濃系陶器色絵丸碗の出土は皆無に等しい。

さらに、様相８では瀬戸・美濃系磁器が出現する。端反碗や、陰刻沈線を認める皿、木型打込皿、瓶、薄手酒杯等を認めるが、その出土量は肥前系磁器を凌駕するものではない。

以上、瀬戸・美濃系陶磁器の変遷を概観したが、その組成・流通に関して若干の問題点を指摘しておきたい。高松城は大窯製品がほとんど出土しない中国地方以西の第三次流通圏に該当する。しかし、摺鉢を除く、碗＋小皿のセット関係は第二次流通圏にも通ずる組成を示す。その要因として、第３段階後半に第三次流通圏における流通上の画期が想定され(藤澤1993)、背景には豊臣系大名の進出に伴う大窯製品の流通と指摘される(藤澤2000)。高松城を築城した生駒氏は豊臣系大名であり、第三次流通圏における碗・小皿の出土要因を明確に示している。また、西の丸町地区出土遺物や東ノ丸(歴史博物館建設地点)の第４遺構面上層出土遺物では、藤澤編年大窯３・４期がほぼ同数確認できる。その埋没時期は17世紀初頭(1620年代)となり、廃絶時期より１段階以前に属するものが主体を占める状況が指摘できる(第３章第２節)。同様の傾向は、安土城や大坂城でも確認されている(藤澤2000、鈴木2001)。それは、陶磁器への価値観の差異を反映するものと理解でき、大窯製品については、他の陶磁器より高い価値観が見出されていた可能性が高く、長期間の使用ないし保管を示すものと理解したい。同様の傾向は、中国産磁器においても確認できる。Ⅷ区ＳＺｃ01前面堆積土出土遺物では、16世紀中頃～後半に属する景徳鎮窯系青花を一定量認め、最終埋没時期との齟齬を認める。

**備前系陶器**(第242・243図)

様相１基準資料では、摺鉢と小壷類に限られるが、東ノ丸(歴史博物館建設地点)の第４遺構面上層、西の丸町Ｃ地区Ⅷ区ＳＺｃ01前面堆積土出土遺物には、坏・摺鉢・大平鉢・注口付き鉢(報文番号1137・1138・1159)・瓶・小壷類を認め、様相１・２における基本的な器種構成となる。精緻な編年案が提示されている摺鉢では(乗岡2000・2002)、様相１では乗岡編年近世１ｂ期、様相２では近世１ｂ・ｃ期、様相３では近世１ｃ～２ａ期に属するものが主体を占める。様相３では、口縁部が直立する形態の鉢を新たに認めるがその上限は明らかではない。様相４は資料上の制約から、その動向を窺うことはできないが、様相５では灯明皿が出現・盛行する。摺鉢は近世２ｂ期～３期に属する。様相６では、堺・明石系摺鉢の盛行により、摺鉢に占める備前摺鉢の比率は減少する。堺・明石系摺鉢は様相５において萌芽的に出現し、備前：堺・明石＝87.5：12.5％、様相６では40：60％、様相７では６：94％となり、堺・明石系摺鉢との競合により、様相６以降急激な衰退化傾向を示す。一方、様相５に出現した灯明皿は、続く様相６・７に盛行し、備前系陶器の生命線となるが、様相７においてわずかに出現し、様相８に盛行する京・信楽系陶器灯明皿に圧迫されていく状況も窺える。様相７では備前：京・信楽＝98：２％であるが、様相８では、備前：京・信楽＝53：47％という数値を示す。様相８における型成形により内面に草花文を陽刻表現した備前灯明皿は、京・信楽系陶器との

競合への対抗手段の一つと評価できる。

**肥前系磁器**(第244～247図)

西の丸町地区における肥前系磁器は様相２に出現する(ＳＫｂ255)。同遺構は元和10(1624)年銘の木簡が共伴する紀年銘資料である。出土した肥前系磁器は瓶で、大橋康二氏より、1620～30年代の所産であるとのご教示を得た。これ以外に未報告遺物に初期伊万里碗を確認している。陶磁器の占める組成は極めて低く、西の丸町地区における肥前系磁器の出現期を示すものと理解できる。続く、様相３では激増し、陶磁器組成の30％を越える数値を示す(第235図、第12表)。器種には、碗・小杯・皿・瓶を認める。碗では高台内無釉碗、外面に鉄釉を施釉する碗が主体となり、小杯は高台内無釉で、外面に蘭を描く。皿では、口径に比して高台径の小さい形態で構成され、型打成形の製品も含む。青磁では三股青磁窯産の芭蕉文を片彫りした皿を認める(中野1998)。いずれも1640～50年代の製作年代が想定でき(Ⅱ－２期、大橋2000、九州陶磁学会2000)、Ⅲ期まで下るものは認められない。

様相４では、出土遺物が少なく全容を示すものではないが、その動向をおおむね窺うことができる。碗では、それまで確認できなかった高台断面が三角形を呈する薄手の碗が出現・盛行する。染付では丸味を有する一重網目文を認め、色絵も盛行する。小杯は口縁部が鋭く外反する形態を呈し、高台内に「太明年製」の銘款を認める白磁小杯が目立つ。皿は口径に占める高台径が様相３に比してやや大きく、見込み文様は草花文・魚文が主体となる。芭蕉文を片彫り・線彫りした三股青磁窯産の青磁皿も継続的に認める。また、底部から大きく開き、高台高が著しく高い台皿も確認できる。素地は白く透き通り、透明感のある釉で、各部位がシャープに成形され、様相３までの皿とは一線を画する。いずれも大橋編年Ⅲ期に位置付けられる(大橋2000)。

様相５では、器種構成が多様になり、紅皿・仏飯器・蓋物といった新たな器種が出現する。碗では高台断面三角形碗に加え、Ｕ字形の碗が盛行し、薄手の半球形碗、粗製の碗を認める。染付には草花文・注連縄文・花唐草文・雨降り文(手描き、印判)、外面二重網目文＋内面一重網目文・菊花文(印判)・井桁文(印判)を認め、コンニャク印判が盛行する。高台内の銘款には、渦福文・「大明年製」・「大明成化年製」を認める。小杯は高台を有し、口縁部が緩やかに外反する形態が主体を占め、一部に口縁部輪花・口銹を呈し、端部付近で明瞭に屈曲する特徴的な形態の白磁小杯も認める。紅皿・紅猪口では、薄手でシャープな成形と厚手の粗製品、型押成形による製品を認め、文様構成や装飾技法は碗形態に共通する。皿では、口径に対して高台径が大きい形態が主体を占め、様相４からその形態は大きく変化する。成形ではロクロ成形ないし型打成形が主体を占め、高台径の大形化に伴い、高台内にはハリ支えの痕跡を認める。器形はバラエティーに富み、底部から緩やかに内湾する形態、端部が小さく端反る形態、口縁部輪花をなす形態、底部と口縁部境が明瞭に屈曲し、口縁部が大きく外反する形態と多様である。その他、高台径が小さく、見込みは蛇の目釉剥ぎし、底部無釉の粗製の皿も一定量認める(口縁部内面には折松葉文を描く)。文様構成では、前様相から器形的な特徴を引く製品には見込みに一枚絵を描くが、主体は、見込み周縁に二重圏線を施し、口縁部内面に草花文・花唐草文ほかを描き、見込み中央部にワンポイントの文様、外面には唐草文を描く製品となる。見込みのワンポイントは、手描きの五弁花が主体となり、一部には水仙等の草花文も認める。様相５から出土した肥前系磁器は大橋編年Ⅳ期前半で構成される(1690～1740年代)。

様相６は、前様相からの器種構成に大きな変化は認められない。碗では、高台断面三角形・Ｕ字形碗、薄手の半球形碗に加え、外面に梅花文を描く粗製のくらわんか碗、朝顔形碗を認める。染付には、草花文・若松文・竹文・龍文・梅樹文・花唐草文の他、笹葉文の色絵も認める。装飾では様相５で盛行したコンニャク印判の使用は少なくなり、見込みのワンポイント五弁花に限られる。また、新たに青磁染付が出現する。小杯は碁笥底をなし、底部から直線的に外傾する形態を認める。紅皿は、笹葉文を描く定型化した形態のほか、型押成形による箱形の形態も認める。皿では前様相に確認できるもの以外に、端部が小さく外反する深手の皿を認める。出土遺物の大多数は大橋編年Ⅳ期後半に属する遺物で構成される(1740～80年代)。

様相７は前様相から器種構成に顕著な差異は認められないが、碗形態が豊富になる。薄手の半球形碗、粗製のくらわんか碗に加え、小型碗の広東碗、小丸碗、大型の蓋付き碗の腰張＋八字形高台碗(撥高台碗)、広東碗が出現する。それに伴い、染付文様も大きく変化し、七宝繋ぎ文・矢羽根文・梵字文・算木文・不賊文が主体となり、見込みの五弁花も鷺文や形容し難い抽象文等を多く認めるようになる。また、典型的なものではないが(1820～60年代)、端反碗を確認している。小型の蓋付き碗で、高台内に「清」の款銘を認める(1760～80年代)。小杯では、口縁部が外反し、高台をなす形態に加え、底部から直線的に開く形態を認める(そば猪口)。また、紅皿に加え、餌猪口も認める。皿では蛇の目凹形高台(低)と(高)を確認できるが、様相６の基準資料の皿組成が稀薄なため、その動向について言及することはできない。その他、見込み中央に五弁花以外の文様を施すものや見込み全面をキャンパスとして一枚絵を描く型打成形皿や菊皿（へそ皿）も出現する。様相７では、大橋編年Ⅴ期前半に属する遺物が大多数を占める（1780～1820年代)。

様相８では、端反碗が新たに出現し、大橋編年Ｖ期後半に位置付けられる(1820～60年代)。

**京・信楽系陶器**(第13表、第248～252図)

当地域において、京・信楽系陶器を考える上では、御用窯である理兵衛焼を看過することはできない。理兵衛焼の抽出及び西の丸町地区における京・信楽系陶器の動向については、第４回四国城下町研究会においてまとめ(松本2002ｂ)、そこで様々なご指摘を受けて見解を改めた(松本2002ｃ)。ここで、再度その概要について述べる。

**(１)理兵衛焼の抽出**

まず、理兵衛焼の抽出を行いたい。その抽出方法としては、調査地点である大久保家の家紋入りの碗を抽出し、さらに伝世品の研究(豊田1982)や高松藩江戸上屋敷である東京都飯田町遺跡の出土例から(飯田町遺跡調査会1995、千代田区飯田町遺跡調査会ほか2001)、「破風高」・「高」の刻印、「三葉葵」上絵付けを認める個体を理兵衛焼の可能性のある一群として捉えた。その後、それらに認める胎土・釉調・絵薬・絵付け・器形といった諸属性を検討し、理兵衛焼の特徴を示す属性を導き出し、再抽出を行うという方法を採った。

**①「大久保家」家紋入り碗**(第248図１～３)

１は端反碗である。胎土・釉調は「灰白色系の色調を呈する“まったり”胎土＋灰白色の色調を呈する灰釉を厚く施す“ねっとり”釉調」である。上絵には青色絵薬を用い、盛り上がる絵付けとなる。色調は不明であるが、縁取りを認める。２は口縁部が直線的に開き、腰部が細い丸碗である。胎土は灰白色の色調を呈する磁器質胎土で、灰黄褐色系の灰釉を薄く施す。上絵には暗褐色の絵薬を用いる。３は丸碗である。灰白色の磁器質な胎土に、灰白色の色調を呈する灰釉を薄く施釉し、釉肌はガラス質状の質感を呈する。高台へ移行する屈曲部が遺存し、その部分も含めた範囲に施釉を認める。上絵には暗灰色の絵薬を用い、盛り上がりのある絵付けとなる。

**②「破風高」・「高」刻印**(第248図４～８)

「破風高」・「高」刻印を認める一群である。高松城跡(西の丸町地区)では５例確認できる。４は高台内中央の小さな渦高台の脇に「破風高」印を認める。高台は細く、高い。外面の施釉範囲は高台側面まで及ぶ箇所を認める。５は銹絵染付碗である。器高は深く、口縁部は直立する。渦高台で、高台内に「高」印を認める。外面には銹絵染付による簡略化した草花文を認める。６は素焼き製品である。見込みには文字であろう文様を下絵として描く。７は碁笥底の瓶とした。高台内縁部に小型の「破風高」印を認める。内外面に白泥を塗布するが、本焼きはなされない。５は茶入れとした。底部に回転糸切り痕を認め、外面には鉄釉を厚く施す。外面下端は無釉で、小型の「破風高」の刻印を認める。

**③「三葉葵」を上絵付けする一群**(第248図９～18)

９～12は端反碗である。腰部の張りが少なく、口縁部は端部手前で小さく外反する。９・10は丸枠内に「三葉葵」の上絵付けを認め(前者は赤色絵薬、後者は青色絵薬)、「金」の絵薬による縁取りを行う。青色絵薬は盛り上がるが、赤色絵薬は薄く、凹凸はない。11は９・10に比して器壁厚が薄く、体部中位から腰部にかけて厚みを減じる(腰細碗)。外面には赤色絵薬による丸枠があり、「金」の縁取りを認める。「三葉葵」である可能性が高い。12は腰部の張りが強く、下膨れ気味の形態を呈する。外面には赤橙色絵薬による「三葉葵」を認める。13は丸碗である。外面には青色絵薬による丸枠を認め、その内側に「三葉葵」を認める。絵薬には盛り上がりを認める。胎土は陶器質で、淡黄色系の色調を呈し、釉調は濁浅黄色系の灰釉である。14・15は丸碗である。淡灰黄色の色調を呈する胎土に、濁黄白色の灰釉をやや厚く施す。外面には赤の絵薬による「三葉葵」の上絵付けを認め、「金」の縁取りがある。16・17は外面に「三葉葵」の上絵を認める。16は青色絵薬を主体とし、赤色絵薬による縁取りを認める。胎土・釉調は１に酷似し、腰部がわずかに細くなる。17の上絵は灰色(元来は青色)の絵薬を用い、盛り上がりを認める。灰白色の磁器質な胎土で、ガラス質状の釉肌を呈し、３に共通する。18は盤とした。胎土は灰白色の色調を呈し、素地は緻密で“まったり”した質感となる。釉調は灰白色の色調を呈する灰釉をやや厚く施し、“ねっとり”した質感を呈する。上絵は消失するが、内底部に「三葉葵」の上絵付け痕跡を認め、縁取りも確認できる。

**④「六葉葵」を上絵付けする碗**(第248図19)

「六葉葵」は高松藩松平家の裏家紋とされる。口縁部は直線的に開き、腰部が細くなる。胎土は灰色の色調を呈し、緑灰色の灰釉を厚く施す。上絵は透き通る色調を呈し、消失しかかる緑色絵薬を用いる。

**⑤型成形の蓮碗**(第248図22～25)

いずれも同一意匠の蓮を型成形で表現した碗である。全国的に見てもこれらの一群の出土例は管見による限りない。20は胎土・釉調が理兵衛焼として抽出した１(16・18)に酷似し、理兵衛焼の可能性が高い一群として抽出した。21～23には蓮の葉脈が表現され、21の端部には刻目を認める。器壁の厚みが20に比して薄いが、釉調は酷似する。21は外面畳付際まで、23は残存部位全面に施釉を認め、高台断面形状は細長い。

**⑥「まったり胎土＋ねっとり釉調」**(第249図24～40)

いずれも胎土・釉調が１(16・18)に近似する一群である。香炉類や器形の復元が困難な製品が多く、特異な一群と評価できる。なお、胎土はほぼ合致するが、釉調にばらつきを認め、34が黄灰白色の色調を呈し、24～26・37・39・40は釉の厚みがやや薄い。

24は香炉で、赤・青・緑＋「金」色の絵薬を用いて

草花文を上絵付けする。25は外面に巴文・唐草文を上絵付けした瓶である。赤・緑・青色絵薬を用い、青色絵薬は盛り上がる。26は外面に突帯を有し、上部に円窓を認める。香炉の可能性が高い。27は脚とした。外面には突帯を認める。28は二重構造を呈する。29～31は瓶である。29は剥落するが把手を有する。30は口縁部下に花弁状の加飾を施す。31は亀甲繋ぎ文内に花文を配した文様を銹絵として描く。32～34は異形器形である。32は反りを認める蒲鉾板状の形態を呈する。残存部位一端には内外面ともに釉が肥厚する箇所を認め、円孔を有する可能性が高い。外面には赤色の絵薬により紅葉文の上絵付けを認める。33は反りのある蒲鉾板状の形態を呈し、遺存する先端部は無釉で、凸形形態となる。34は断面方形を呈する。35・36は碗である。35は天目碗形の形態を呈し、高台脇には連続する鎬状の抉りを認める。36は丸碗であろう。外面には赤色絵薬により宝珠文を上絵付けする。37～40は香炉である。39の外面には唐草文の絵付け痕跡を認める。40は向付器形を呈する。

**⑦手桶水指**(第249図41)

胎土は灰色の色調を呈し、やや緻密さを欠く。釉下彩として青色絵薬の垂れ掛けを認め、全面に灰釉を厚く施す。「“まったり”胎土、“ねっとり”釉調」とはやや異なるため、別分類とした。器形、垂れ掛けは滴翠美術館所蔵の『白磁流釉手桶水差』に酷似する(佐藤編1968)。内箱の蓋表には「仁清写　手桶水差」とあり(林屋編1989)、2代理兵衛の作品とみる研究者もある(佐藤編1968)。

**⑧異形器形Ⅱ**(第249図42～44)

胎土は黄灰色ないし黄灰白色の色調を呈する陶器質な素地である。胎土中には練りが足りないため、もしくは型成形に起因するであろう間隙が目立つ。同様の胎土は「三葉葵」を上絵付けした第248図9・10、飯田町遺跡Ⅰ－837号遺構出土の「三葉葵」を絵付けした碗・鉢、同じく飯田町遺跡Ⅰ－735号遺構の一部にも確認できる(飯田町遺跡調査会1995)。

42は宝珠の置物であろう。上下が別作りとなり、内面には顕著な接合痕跡を認める。脚端部、脚部には突帯を有する。釉肌はガラス質状を呈する。43は香炉である。釉は濁灰黄色の色調を呈し、やや厚く施す。外面には草花文の上絵付けを認め、赤・青・緑＋「金」色の絵薬を用いる。絵薬の特徴、選択色調は第249図24に共通する。44は鉢として図化した。端部は肥厚し、口縁帯を形成する。内外面には灰白色の釉を薄く施す。

**⑨その他**(第250図45・46)

軟質系施釉陶器の瓦葺き屋根置物である。45は隅棟部周辺部である。瓦当は軒丸瓦に巴文、軒平瓦に左右にそれぞれ一転する唐草文を配する。屋根上部のみ灰釉？を施し、瓦当面は施釉前に緑色絵薬による下絵付けを行う。軒の隅木に粘土板を貼付し、その脇には剥落した垂木痕跡を認める。46は隅棟部周囲片である。隅棟は一段高く表現され、先端部には隅巴瓦を認める。瓦当面には青色絵薬による釉下彩を認め、灰釉？の全面施釉を認める。栗林公園に古理兵衛焼製品として伝世する九重塔に酷似する(森下2002)。

以上、理兵衛焼の可能性のある一群を抽出した。しかし、理兵衛焼の定義が極めて不明瞭な点に起因して、その抽出方法は妥当なものではない。①とした大久保家家紋入りの碗は理兵衛焼である蓋然性は極めて高く、②も理兵衛焼と考えたい。③は前提として、理兵衛焼と考えていたが(松本2002ｂ)、多くの指摘を受けた。なかでも、14・15は胎土・釉調において、京・信楽系陶器との識別が困難な一群であり、そこから多くの問題が派生する。例えば、14・15を理兵衛焼とするならば、京・信楽系陶器として捉えた一群にも理兵衛焼が含まれる可能性があり、理兵衛焼ではないと仮定すると、少なくとも③とした「三葉葵」を上絵付けするという属性のみをもって理兵衛焼と判断することはできないことになる。多くの研究者より、これは京焼であるとのご教示を頂いたが、理兵衛焼として考えておきたい。よって、確実な理兵衛焼として、①・②、その可能性が高い一群として③(④)の抽出が可能になる。これに基づき、理兵衛焼の特徴をまとめたい。

**(2)抽出した理兵衛焼の特徴**

**①絵薬**　青色の絵薬は盛り上がりを認める上絵付けとなり(1・3・10・13・16・17)、赤色絵薬は薄く、凹凸はなく、赤黒い色調を呈する(9・11・14)。緑色絵薬は透き通るモスグリーン色の色調を呈し、消失気味となる。京・信楽系陶器丸碗に認める緑色絵薬とは一線を画する(19)。

**②胎土**　胎土・釉調では、大久保家家紋の上絵を認める1を出発とし、「灰白色系の色調を呈する“まったり”した胎土＋灰白(乳)色の色調を呈する灰釉を厚く施す“ねっとり”した釉調」が理兵衛焼である可能性を指摘した。「三葉葵」の上絵を認める1・16・18も同様の胎土・釉調である。伝世品では香川県さぬき市極楽寺所蔵の『葵文入香炉』に酷似する胎土・釉調を認める(豊田1982、森下2002)。この胎土・釉調を基軸として抽出したのが、蓮碗(20～23)や24～40である。5代理兵衛弥助惟久は一時富田西吉金に窯を移したといわれ、「破風高」印を認める素焼きの碗が出土した富田吉金窯は弥助惟久によって築かれた窯と評される(森下2000)。吉金窯でもこうした胎土を認め、ここで抽出した“まったり”胎土には近隣の富田丸山の陶土(流紋岩風化土)が使用された可能性が高い。紀年銘から3代理兵衛重治の作品と推される『葵文入香炉』の存在から、少なくとも3代理兵衛重治はこの富田丸山の陶土を使用したことが窺える(1678～1704年)。

**③施釉範囲**　飯田町遺跡出土の理兵衛焼碗では、細く

高い高台に関しては、外面畳付際までの施釉を認め、露胎部分が赤く発色する。西の丸町地区出土遺物では、第248図21に確認できる。

**④器形**　碗形態では、2・11・16・19に腰部が細い傾向を認め、理兵衛焼の特徴になるかもしれない。

上記した特徴のなかで、第248図1・16・18・20は筆者が注目した「灰白色系の色調を呈する“まったり”胎土＋灰白色の色調を呈する灰釉を厚く施す“ねっとり”釉調」である。特徴的な胎土・釉調として、他地域ではあまり認められないものである。しかし、この胎土・釉調を理兵衛焼に直結させることは問題を残す。つまり、富田丸山の陶土の使用は、その周辺に所在する複数の地方窯でも確認でき(吉金窯・斉藤窯)、すべて理兵衛焼とは限らない。さらに、富田吉金窯は5代理兵衛弥助が築いた窯であり、吉金窯出土遺物には理兵衛焼製品も含むという極めて複雑な状況を示す。藤本氏が指摘するように、工人の技術系譜が同じで、同陶土・陶石を原料として使用する限り、刻印がなければ消費地では両者を区別することは困難な状況である(藤本2002)。こうした状況を踏まえると、「灰白色系の色調を呈する“まったり”胎土」を理兵衛焼とみなすことはできず、富田丸山の陶土を用いた一群とし、そこから理兵衛焼を再抽出するという過程が必要となる。その際には、絵薬の特徴を指標とすることができる。⑥として抽出した一群は、「灰白色系の色調を呈する“まったり”胎土＋灰白色の色調を呈する灰釉を厚く施す“ねっとり”釉調」を認める一群であり、富田丸山の陶土を用いたと考える一群である。香炉類や異形器形を多く認める。このなかで、上絵や絵付けから、24・25は理兵衛焼である可能性が高く、32・36もその可能性は高い。一方、理兵衛焼として抽出した24に、上絵種類(選択した色調やその特徴)・絵付け描写が酷似するものとして、第249図43がある。その胎土に着目すると、黄灰色ないし黄灰白色の色調を呈する陶器質な素地で、胎土中には練りが足りないため、もしくは型成形に起因した間隙が目立ち、先に触れた特徴的な胎土とは異なる。同様の胎土を飯田町遺跡出土の理兵衛焼でも確認でき、⑧を理兵衛焼の可能性のある一群と考えた。

以上、その抽出方法に問題を残すが、西の丸町地区出土遺物から理兵衛焼の可能性のある一群の抽出を行った。理兵衛焼は、京・信楽系陶器の系譜を引き、京・信楽系陶器そのものであると評価しても、過言ではない。従来、伝世品や文献を中心とした研究が主であったが、今回考古学的な検討を試みた。しかし、技術のみならず、陶土の移動といった複雑な状況があり、必ずしも有意義な検討が行えたとは言い難く、今後も追求を重ねる必要がある。

以上、理兵衛焼の抽出を行った。次にこうした存在を踏まえつつ、西の丸町地区における**京・信楽系陶器の変遷**について、その概要を記す。

前述したように、西の丸町地区における京・信楽系陶器の出現は様相5からであるが、様相1に併行するC地区Ⅷ区ＳＺｃ01前面堆積土からは、楽焼系の初期京焼の出土を認める(報文番号1225・1266)。資料数の制約もあり、ここでは取り扱わないが、明記しておきたい。

器種構成では、大多数を占める丸碗、少量ながら存在が確認できる小杉碗(若松碗、枡形碗)や平碗に対して、半筒形碗・筒形碗の出土が提示した基準資料に限らず、極めて少ないという特徴が指摘できる。

次に各器種の様相別の特徴をまとめ、その動向について概観する(第251・252図)。Ⅰ～Ⅲ類に色絵丸碗を挙げた。Ⅰ類は黄灰色の色調を呈する陶器質な胎土に緑色ないし黄色系の灰釉を施釉し、Ⅱ類は灰白色の磁器質な胎土に灰釉を施す一群である。Ⅲ類は灰色の色調を呈する陶器質な胎土で緑色の灰釉を施釉する。Ⅰ・Ⅱ類に比して、胎土に緻密さを欠き、ぼそぼそとした質感を呈する。Ⅳ・Ⅴ類は便宜上、銹絵染付碗・銹絵碗とした。Ⅵ類は肥前系磁器との識別が困難な白色の磁器質な胎土にガラス質の釉を施す一群である。また、理兵衛焼ないしその可能性のある一群も掲載した。

様相5は、色絵丸碗ではⅢ類が主体をなし、Ⅲ類は様相6へと後続しない。腰部に張りを認めるやや大振りの碗で、上絵付けの線種は細く、繊細な描写がなされる。絵薬には赤・青・緑・白色に加え、「金」の使用を認める。Ⅵ類は1点のみ確認できる。口縁部が直立し、腰部が著しく細く、外面には赤色絵薬による意匠不明の上絵付けを認める。形態から理兵衛焼の可能性も考慮したが、“たて碗”と呼ばれる形態のようである。また、理兵衛焼も確認できる。その出土量は少なく、陶磁器に占める組成は、8.8%に過ぎない。

様相6では、小型丸碗(半球形碗)を中心に爆発的に増加し、陶磁器組成の31%を数える。色絵碗では(Ⅰ・Ⅱ類)、口縁部が直立する形態に加え、腰部に丸味を有し、内湾気味に立ち上がる碗が主流を占める。上絵付けは、笹葉文、竹文、菖蒲文、(半裁)菊花文を認め、絵薬では「金」絵薬の使用がなくなり、緑・赤色絵薬が主流となる。絵付けも細い線種から太い線種に変化する。Ⅳ類の銹絵染付碗は、様相6から確認できる。様相5の基準資料には認めないが、その併行期には既に存在する。器形・胎土・釉調・文様パターンは多様であり、高台内に「高」印を押印する理兵衛焼製品も認める。Ⅴ類の銹絵丸碗も様相6からの確認となるが、小杉碗には様相5から銹絵付けを認める。様相6では腰の張りが強く、わずかに内湾傾向を認める形態を呈する。文様パターンは定型化した草花文である。Ⅵ類では注連縄文を絵付けした大振りの碗を1点のみ認める。高台径は大きく、口縁部は長く直立する。内面には茶渋の痕跡を認め、喫茶との関連を示す。また、碗

類以外の器種構成も豊富になり、皿・鉢・瓶・土瓶を認める。

様相７では、13％前後まで数値を下げるが、当該期に出現・盛行する軟質系施釉陶器土瓶が15％前後の組成を占めることに起因すると考えられ、相対的な出土量の顕著な減少とは考えられない。色絵丸碗では、小さく直立する口縁部形態の碗に加え、口縁部がわずかに内湾し、腰の張りの少ない碗が出現し、高台径も小さくなる。上絵付けは笹葉文にほぼ統一され、絵薬も緑・赤色のみとなる。Ⅳ類(銹絵染付碗)は、多様な前様相とは異なり、やや定式化する。様相６において、Ⅴ類とした銹絵碗に共通した器形を呈し、色絵丸碗と同じく、腰部の張りを減じる傾向にある。小杉碗も一定量認めるが、多様な様相を示す。その他として、２点挙げた。端部のみ小さく端反り、高台は細く高い形態を呈する。胎土は灰色の色調を呈し、灰色の釉をやや厚く施す。外面には暗褐色絵薬により若松文を上絵付けし、その色調は大久保家の家紋を上絵付けした第248図２に酷似する。理兵衛焼の可能性も残るが、今回は検討することができなかった。また、１点のみではあるが、灯明皿の出土を認める。内外面に鉄釉を施釉したもので、初現的な様相を示す。

様相８は色絵丸碗の伝世的な使用を認めるが、端反碗が出現・盛行する。さらに、様相７に初現的に出現した灯明皿が盛行し、備前陶器灯明皿とほぼ同程度の組成を示す。

以上、高松城跡(西の丸町地区)における京・信楽系陶器の動向を丸碗を中心に概観した。京・信楽系陶器から画期を求めると、様相５／様相６・７／様相８となる。様相５は京・信楽系陶器の出現期として捉えられる。続く様相６にはその出土量は飛躍的に増加し、多様な器種構成を示すようになる。様相７では灯明皿の萌芽的な出現を認めるが、様相６の器種構成に比して明瞭な変化は認められない。様相６・７は普及期ないし展開期と捉えることができる。様相８には端反碗の出現、灯明皿の急速な普及といった画期を認める。一方、形態や絵薬種類・絵付け内容に関する変化の方向性を述べたが、あくまでも各様相における主要な顔つきを示すものであり、京・信楽系陶器の変化の方向性を示すものではない。

**堺・明石系陶器**(第253図)

堺・明石系陶器は、摺鉢のみの確認となる。様相５には萌芽的な出現を認め、様相６では備前摺鉢をわずかに上回り、様相７には大きく凌駕する組成を示す。白神編年との対比では、様相５では口縁部内面は体部からの連続性を認め、上端に突出部を認める。Ⅰ型式の所産となる。様相６では、底部を高台風に仕上げるⅠ型式のものと、口縁帯の張りがやや大きくなり、口縁部内面に段を認めるⅡ型式が共伴する。様相７では、口縁帯が薄く、内側に段を認めるⅠ型式と口縁帯下端を下方へ強く引き出し、内面に段を有するⅡ型式がやはり共伴し、後者が上回る比率を示す。様相８では口縁帯がさらに肥大し、断面は三角形状を呈する。Ⅲ型式に該当する。

**その他**

以上、主要陶磁器については、その概要を述べた。ここでは、少数ながら確認できるその他の陶磁器について、触れたい。

**丹波系陶器**　基準資料では確認できないが、東ノ丸(歴史博物館建設地点)の第４遺構面上層出土遺物には丹波摺鉢を認める。未報告遺物を含め、４点ほど確認できる。いずれも一本引きのスリメとなる。

**大谷焼**　様相８併行資料から確認できる。コップ形の碗・鉢・徳利・火入れ・土瓶・甕・大甕を認める。数値として示し得ないが、城下より農村部において、多く確認できるようである。

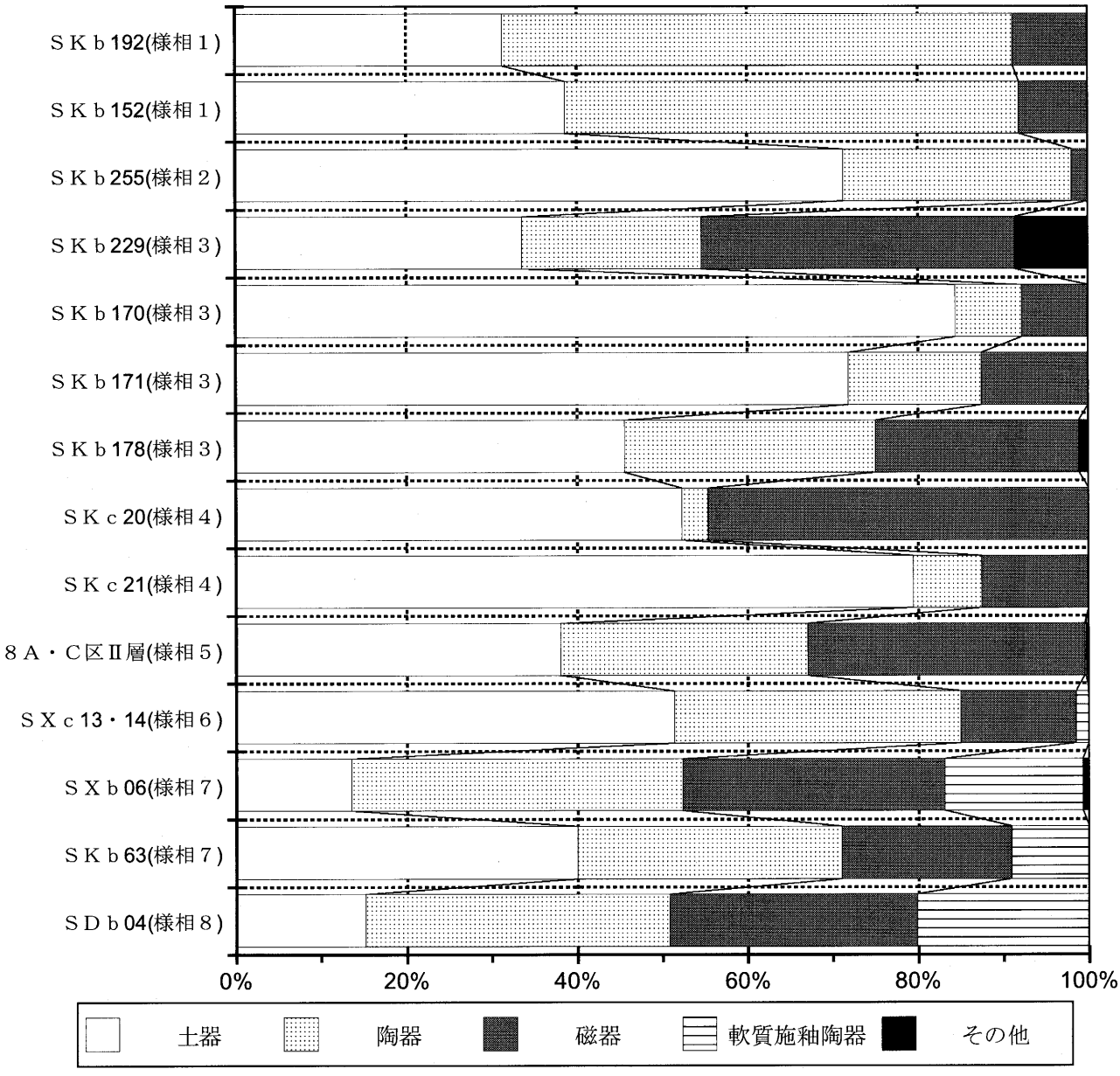
**軟質施釉陶器**　ここでは土瓶の動向を明記しておきたい。その出現は様相７から確認でき、陶磁器組成の12～17％、様相８では20％近い数値を示し、出現と同時に爆発的に普及するという状況が窺える。一部には、源内焼の可能性のある土瓶も認めるが(型成形により花文ほかを表現し、緑色釉と黄色釉を施した後、透明釉を施釉する)、大多数は緑色釉の流し掛けないしイッチン掛け後に透明釉を施釉するものである。同様に把手付き鍋、行平鍋、鉢にも存在し、産地は不明であるが、その出土量は極めて高い。理兵衛焼について、前記したが、第４回四国城下町研究会において、『四国・淡路の陶磁器Ⅱ－理兵衛焼と京焼－』というテーマで研究会が開催され、その討議において、興味深い指摘を得た。理兵衛は２代重利が二人扶持で召し抱えられ、幕末まで三～十人扶持を給しており、御用品以外に副業的な生産を行わないと、その工人集団を維持することはできないと指摘を受けた。さらに『栗林荘図』(弘化元(1844)年)に描かれた理兵衛焼窯は４房の連房式登窯であり、その容量を満たすには多量の製品を必要とする。つまり、副業的に何かを生産していた可能性が高いことになる。推測の域を出ないが、この軟質施釉陶器土瓶や行平鍋はその候補となろう。(以上、松本)

| | | | 様相1 | | | | | | 様相2 | | | 様相3 | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | SKb192 | | | SKb152 | | | SKb255 中～最下層 | | | SKb229 | | | SKb170 | | | SKb171 | | | SKb178 | | |
| | | | 点数 | A | B | 点数 | A | B | 点数 | A | B | 点数 | A | B | 点数 | A | B | 点数 | A | B | 点数 | A | B |
| 中国産磁器 | 景德鎮 | 青花碗 | | | | 2 | 5.3 | 3.2 | 1 | 1.1 | 0.3 | 1 | 1.3 | 0.8 | | | | | | | 3 | 2.9 | 1.6 |
| | | 青花皿 | 1 | 1.1 | 0.7 | | | | 1 | 1.1 | 0.3 | | | | 3 | 16.6 | 2.6 | | | | 3 | 2.9 | 1.6 |
| | | 白磁皿 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 漳州窯 | 青花碗 | 8 | 8.5 | 5.9 | 2 | 5.3 | 3.2 | 2 | 2.2 | 0.6 | 1 | 1.3 | 0.8 | | | | | | | 3 | 2.9 | 1.6 |
| | | 青花皿 | 1 | 1.1 | 0.7 | 1 | 2.6 | 1.6 | | | | | | | | | | | | | 1 | 1.0 | 0.5 |
| | | 白磁皿 | 1 | 1.1 | 0.7 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 白磁 | 皿 | 1 | 1.1 | 0.7 | | | | | | | | | | | | | | | | 3 | 2.9 | 1.6 |
| | その他 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 肥前系 | 磁器 | 碗(蓋込み) | | | | | | | 1 | 1.1 | 0.3 | 21 | 28.4 | 16.4 | 6 | 33.3 | 5.2 | 3 | 8.3 | 2.3 | 19 | 18.5 | 9.9 |
| | | 皿 | | | | | | | | | | 23 | 31.1 | 17.9 | | | | 13 | 36.1 | 10.1 | 9 | 8.7 | 4.7 |
| | | 瓶 | | | | | | | 1 | 1.1 | 0.3 | | | | | | | | | | 1 | 1.0 | 0.5 |
| | | 小杯(酒杯) | | | | | | | | | | 1 | 1.3 | 0.8 | | | | | | | 3 | 2.9 | 1.6 |
| | | 紅皿 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 仏飯器 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 香炉・火入 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 1.0 | 0.5 |
| | | その他 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 陶器 | 碗 | 12 | 12.8 | 8.8 | 6 | 15.7 | 9.8 | 9 | 9.8 | 2.8 | 7 | 9.5 | 5.5 | 2 | 11.1 | 1.7 | 2 | 5.6 | 1.6 | 4 | 3.9 | 2.1 |
| | | 皿・鉢 | 37 | 39.4 | 27.0 | 9 | 23.7 | 14.6 | 34 | 36.9 | 10.6 | 6 | 8.1 | 4.7 | 3 | 16.6 | 2.6 | 1 | 2.8 | 0.8 | 18 | 17.5 | 9.3 |
| | | 甕 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 瓶 | 7 | 7.4 | 5.1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 香炉・火入 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | その他 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 瀬戸・美濃系 | 磁器 | 碗 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 皿 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 小杯(酒杯) | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | その他 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 陶器 | 碗 | 3 | 3.2 | 2.2 | 3 | 7.9 | 4.8 | 6 | 6.5 | 1.9 | 4 | 5.4 | 3.1 | 1 | 5.6 | 0.9 | | | | 2 | 1.9 | 1.0 |
| | | 皿 | 4 | 4.2 | 2.9 | | | | 9 | 9.8 | 2.8 | 5 | 6.8 | 3.9 | 1 | 5.6 | 0.9 | | | | 3 | 2.9 | 1.6 |
| | | 鉢 | 2 | 2.1 | 1.5 | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 1.0 | 0.5 |
| | | 水甕 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 土瓶 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 香炉・火入 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | その他 | | | | | | | 1 | 1.1 | 0.3 | | | | | | | | | | | | |
| 関西系 | 磁器 | 小杯(酒杯) | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | その他 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 京・信楽系 | 陶器 | 碗 | | | | | | | 2 | 2.2 | 0.6 | | | | | | | | | | | | |
| | | 皿 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 瓶 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 香炉・火入 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 土瓶 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 灯明皿 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | その他 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 大谷焼 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 不明施釉 | 陶器 | 鉢 | | | | 1 | 2.6 | 1.6 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 甕 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 土瓶 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 行平鍋 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | その他 | | | | 2 | 5.3 | 3.2 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 軟質施釉 | 陶器 | 鉢 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 甕 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 土瓶 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 行平鍋 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 香炉・火入 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | その他 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 備前系 | 陶器 | 摺鉢 | 6 | 6.4 | 4.4 | 3 | 7.9 | 4.8 | 10 | 10.8 | 3.1 | 5 | 6.8 | 3.9 | 1 | 5.6 | 0.9 | 4 | 11.0 | 3.1 | 7 | 6.8 | 3.6 |
| | | 鉢 | | | | | | | 4 | 4.3 | 1.3 | | | | 1 | 5.6 | 0.9 | 2 | 5.6 | 1.6 | 1 | 1.0 | 0.5 |
| | | 甕 | 4 | 4.2 | 2.9 | 3 | 7.9 | 4.8 | 3 | 3.3 | 0.9 | | | | | | | | | | 15 | 14.6 | 7.8 |
| | | 瓶・徳利 | 2 | 2.1 | 1.5 | 3 | 7.9 | 4.8 | 4 | 4.3 | 1.3 | | | | | | | 2 | 5.6 | 1.6 | 2 | 1.9 | 1.0 |
| | | 灯明皿 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | その他 | 5 | 5.3 | 3.6 | 3 | 7.9 | 4.8 | 1 | 1.1 | 0.3 | | | | | | | | | | | | |
| 堺・明石系 | 陶器 | 摺鉢 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 信楽系 | 陶器 | 鉢 | | | | | | | | | | | | | | | | 9 | 25.0 | 7.0 | 2 | 1.9 | 1.0 |
| 不明焼締 | 陶器 | 摺鉢 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | その他 | | | | | | | 3 | 3.3 | 0.9 | | | | | | | | | | 2 | 1.9 | 1.0 |
| 源内焼 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 陶磁器小計 | | | 94 | 100% | | 38 | 100% | | 92 | 100% | | 74 | 100% | | 18 | 100% | | 36 | 100% | | 103 | 100% | |
| 在地産 | 土師質土器 | 小皿・坏 | 18 | | 13.2 | 16 | | 25.9 | 183 | | 57.0 | 21 | | 16.4 | 85 | | 73.9 | 59 | | 46.1 | 41 | | 21.2 |
| | | 鍋 | 14 | | 10.2 | | | | 11 | | 3.5 | | | | | | | 1 | | 0.8 | 14 | | 7.3 |
| | | 羽釜 | 1 | | 0.7 | | | | | | | 2 | | 1.6 | 2 | | 1.7 | | | | 2 | | 1.0 |
| | | 焙烙 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 摺鉢 | 6 | | 4.4 | 3 | | 4.8 | 18 | | 5.6 | 8 | | 6.3 | 1 | | 0.9 | 6 | | 4.7 | 13 | | 6.7 |
| | | 火鉢・焜炉 | | | | 4 | | 6.5 | 2 | | 0.6 | 9 | | 7.0 | 3 | | 2.6 | | | | 11 | | 5.7 |
| | | その他 | 3 | | 2.2 | | | | 9 | | 2.8 | | | | | | | | | | 2 | | 1.0 |
| 搬入品 | 土師質土器 | 亀山系鍋 | 1 | | 0.7 | 1 | | 1.6 | 1 | | 0.3 | | | | 6 | | 5.2 | 25 | | 19.5 | 1 | | 0.5 |
| | | 関西系焙烙 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 焼塩壷・蓋 | | | | | | | 5 | | 1.6 | 3 | | 2.3 | | | | 1 | | 0.8 | 4 | | 2.1 |
| | | その他 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 瓦質土器 | 鉢 | | | | | | | | | | 11 | | 8.6 | | | | | | | 2 | | 1.0 |
| 土器・陶磁器総計 | | | 137 | | 100% | 62 | | 100% | 321 | | 100% | 128 | | 100% | 115 | | 100% | 128 | | 100% | 193 | | 100% |

第６表　様相別土器・陶磁器カウント及び組成（Ａは陶磁器組成、Ｂは土器・陶磁器組成）1

| | | | 様相4 | | | | | | 様相5 | | | 様相6 | | | 様相7 | | | | | | 様相8 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | SKc20 | | | SKc21 | | | 8A・C区Ⅱ層 | | | SXc13・14 | | | SXb06 | | | SKb63 | | | SDb04 | | |
| | | | 点数 | A | B | 点数 | A | B | 点数 | A | B | 点数 | A | B | 点数 | A | B | 点数 | A | B | 点数 | A | B |
| 中国産磁器 | 景徳鎮 | 青花碗 | | | | | | | | | | | | | 1 | 0.05 | 0.05 | | | | | | |
| | | 青花皿 | | | | | | | | | | | | | 1 | 0.05 | 0.05 | | | | | | |
| | | 白磁皿 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 漳州窯 | 青花碗 | | | | | | | 7 | 0.6 | 0.35 | 1 | 0.1 | 0.05 | | | | | | | | | |
| | | 青花皿 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 白磁皿 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 白磁 | 皿 | | | | | | | | | | | | | 1 | 0.05 | 0.05 | | | | | | |
| | その他 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 肥前系 | 磁器 | 碗(蓋込み) | 10 | 32.3 | 15.4 | 10 | 35.7 | 7.4 | 346 | 28.9 | 17.8 | 184 | 17.6 | 8.5 | 324 | 18.4 | 15.8 | 80 | 22.6 | 13.6 | 174 | 17.7 | 15.0 |
| | | 皿 | 13 | 42.0 | 20.0 | 3 | 10.7 | 2.2 | 159 | 13.3 | 8.2 | 25 | 2.3 | 1.2 | 201 | 11.4 | 9.8 | 13 | 3.7 | 2.2 | 37 | 3.8 | 3.2 |
| | | 瓶 | 1 | 3.2 | 1.5 | | | | 32 | 2.6 | 1.7 | 4 | 0.4 | 0.2 | 19 | 1.1 | 0.9 | 5 | 1.4 | 0.9 | 11 | 1.1 | 0.9 |
| | | 小杯(酒杯) | 4 | 12.9 | 6.2 | 4 | 14.3 | 2.9 | 34 | 2.8 | 1.8 | 21 | 2.0 | 1.0 | 38 | 2.2 | 1.9 | 8 | 2.2 | 1.4 | 10 | 1.0 | 0.8 |
| | | 紅皿 | | | | | | | 36 | 3.0 | 1.9 | 34 | 3.2 | 1.6 | 28 | 1.6 | 1.4 | 6 | 1.7 | 1.0 | 10 | 1.0 | 0.8 |
| | | 仏飯器 | | | | | | | 5 | 0.4 | 0.25 | 9 | 0.9 | 0.4 | 9 | 0.5 | 0.4 | 1 | 0.3 | 0.2 | 6 | 0.6 | 0.5 |
| | | 香炉・火入 | | | | | | | 4 | 0.3 | 0.2 | 3 | 0.3 | 0.15 | 7 | 0.4 | 0.35 | | | | 6 | 0.6 | 0.5 |
| | | その他 | 1 | 3.2 | 1.5 | | | | 7 | 0.6 | 0.35 | 8 | 0.8 | 0.4 | 3 | 0.15 | 0.15 | 4 | 1.1 | 0.7 | 13 | 1.3 | 1.1 |
| | 陶器 | 碗 | | | | 5 | 17.8 | 3.7 | 125 | 10.4 | 6.4 | 31 | 2.9 | 1.4 | 6 | 0.3 | 0.3 | 2 | 0.6 | 0.3 | 10 | 1.0 | 0.8 |
| | | 皿・鉢 | 1 | 3.2 | 1.5 | 4 | 14.3 | 2.9 | 86 | 7.2 | 4.4 | 18 | 1.7 | 0.8 | 9 | 0.5 | 0.4 | 12 | 3.4 | 2.0 | 12 | 1.2 | 1.0 |
| | | 甕 | | | | | | | 3 | 0.3 | 0.15 | | | | | | | | | | | | |
| | | 瓶 | | | | | | | 10 | 0.8 | 0.5 | | | | | | | | | | | | |
| | | 香炉・火入 | | | | | | | | | | 1 | 0.1 | 0.05 | | | | | | | | | |
| | | その他 | | | | | | | 1 | 0.1 | 0.05 | 1 | 0.1 | 0.05 | 1 | 0.05 | 0.05 | | | | | | |
| 瀬戸・美濃系 | 磁器 | 碗 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 28 | 2.9 | 2.4 |
| | | 皿 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 7 | 0.7 | 0.6 |
| | | 小杯(酒杯) | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 7 | 0.7 | 0.6 |
| | | その他 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 12 | 1.2 | 1.0 |
| | 陶器 | 碗 | | | | 1 | 3.6 | 0.7 | 3 | 0.3 | 0.15 | 24 | 2.3 | 1.1 | 43 | 2.5 | 2.1 | 2 | 0.6 | 0.3 | 4 | 0.4 | 0.4 |
| | | 皿 | | | | | | | 1 | 0.1 | 0.05 | | | | | | | 2 | 0.6 | 0.3 | 1 | 0.1 | 0.1 |
| | | 鉢 | | | | | | | | | | 2 | 0.2 | 0.1 | | | | 2 | 0.6 | 0.3 | 3 | 0.3 | 0.3 |
| | | 水甕 | | | | | | | 2 | 0.2 | 0.1 | 2 | 0.2 | 0.1 | 21 | 1.2 | 1.0 | 1 | 0.3 | 0.2 | 16 | 1.7 | 1.4 |
| | | 土瓶 | | | | | | | | | | 9 | 0.9 | 0.4 | 4 | 0.2 | 0.2 | 2 | 0.6 | 0.3 | | | |
| | | 香炉・火入 | | | | | | | 1 | 0.1 | 0.05 | 17 | 1.6 | 0.8 | | | | | | | | | |
| | | その他 | | | | | | | 4 | 0.3 | 0.2 | 7 | 0.7 | 0.3 | 29 | 1.6 | 1.4 | 3 | 0.9 | 0.5 | 4 | 0.4 | 0.4 |
| 関西系 | 磁器 | 小杯(酒杯) | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | その他 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 15 | 1.6 | 1.3 |
| 京・信楽系 | 陶器 | 碗 | | | | | | | 75 | 6.3 | 3.9 | 274 | 26.2 | 12.8 | 186 | 10.5 | 9.0 | 32 | 9.0 | 5.5 | 51 | 5.2 | 4.4 |
| | | 皿 | | | | | | | 3 | 0.3 | 0.15 | | | | 2 | 0.1 | 0.1 | 3 | 0.9 | 0.5 | | | |
| | | 瓶 | | | | | | | 7 | 0.6 | 0.35 | 6 | 0.6 | 0.3 | 5 | 0.3 | 0.2 | 6 | 1.7 | 1.0 | 4 | 0.4 | 0.4 |
| | | 香炉・火入 | | | | | | | 16 | 1.3 | 0.8 | 6 | 0.6 | 0.3 | 5 | 0.3 | 0.2 | 2 | 0.6 | 0.3 | 16 | 1.6 | 1.4 |
| | | 土瓶 | | | | | | | 1 | 0.1 | 0.05 | 30 | 2.9 | 1.35 | 2 | 0.1 | 0.1 | 3 | 0.9 | 0.5 | 10 | 1.0 | 0.8 |
| | | 灯明皿 | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 0.3 | 0.3 | 38 | 3.9 | 3.3 |
| | | その他 | | | | | | | 3 | 0.3 | 0.15 | 3 | 0.3 | 0.15 | 20 | 1.1 | 0.9 | | | | 4 | 0.4 | 0.4 |
| 大谷焼 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 36 | 3.7 | 3.1 |
| 不明施釉 | 陶器 | 鉢 | | | | | | | | | | 4 | 0.4 | 0.2 | 130 | 7.4 | 6.3 | 16 | 4.5 | 2.7 | 24 | 2.5 | 2.0 |
| | | 甕 | | | | | | | 14 | 1.2 | 0.7 | 1 | 0.1 | 0.05 | 14 | 0.8 | 0.7 | 12 | 3.4 | 2.0 | 9 | 0.9 | 0.8 |
| | | 土瓶 | | | | | | | 1 | 0.1 | 0.05 | 2 | 0.2 | 0.1 | 33 | 1.9 | 1.6 | 4 | 1.1 | 0.7 | 25 | 2.6 | 2.2 |
| | | 行平鍋 | | | | | | | | | | | | | 5 | 0.3 | 0.2 | | | | 58 | 5.9 | 5.0 |
| | | その他 | | | | | | | 10 | 0.8 | 0.5 | 1 | 0.1 | 0.05 | 8 | 0.5 | 0.4 | 2 | 0.6 | 0.3 | 13 | 1.2 | 1.1 |
| 軟質施釉 | 陶器 | 鉢 | | | | | | | | | | 14 | 1.3 | 0.6 | 9 | 0.5 | 0.4 | | | | 27 | 2.8 | 2.3 |
| | | 甕 | | | | | | | | | | 8 | 0.8 | 0.4 | 4 | 0.2 | 0.2 | 4 | 1.1 | 0.7 | | | |
| | | 土瓶 | | | | | | | | | | | | | 295 | 16.7 | 14.3 | 44 | 12.4 | 7.4 | 190 | 19.3 | 16.4 |
| | | 行平鍋 | | | | | | | | | | | | | 5 | 0.3 | 0.2 | | | | 5 | 0.5 | 0.4 |
| | | 香炉・火入 | | | | | | | | | | 8 | 0.8 | 0.4 | | | | | | | | | |
| | | その他 | | | | | | | 2 | 0.2 | 0.1 | 2 | 0.2 | 0.1 | 6 | 0.3 | 0.3 | 5 | 1.4 | 0.9 | 9 | 0.9 | 0.8 |
| 備前系 | 陶器 | 摺鉢 | 1 | 3.2 | 1.5 | 1 | 3.6 | 0.7 | 70 | 5.8 | 3.6 | 6 | 0.6 | 0.3 | 3 | 0.15 | 0.15 | 1 | 0.3 | 0.2 | 3 | 0.3 | 0.3 |
| | | 鉢 | | | | | | | 4 | 0.3 | 0.2 | 8 | 0.8 | 0.4 | | | | 4 | 1.1 | 0.7 | 4 | 0.4 | 0.4 |
| | | 甕 | | | | | | | 9 | 0.8 | 0.5 | 5 | 0.5 | 0.25 | 6 | 0.3 | 0.3 | 1 | 0.3 | 0.2 | | | |
| | | 瓶・徳利 | | | | | | | 30 | 2.5 | 1.6 | 35 | 3.3 | 1.6 | 3 | 0.15 | 0.15 | 7 | 2.0 | 1.2 | 8 | 0.8 | 0.7 |
| | | 灯明皿 | | | | | | | 62 | 5.2 | 3.2 | 216 | 20.7 | 10.0 | 211 | 12.0 | 10.3 | 49 | 13.9 | 8.3 | 43 | 4.4 | 3.7 |
| | | その他 | | | | | | | 4 | 0.3 | 0.2 | 2 | 0.2 | 0.1 | | | | | | | 4 | 0.4 | 0.4 |
| 堺・明石系 | 陶器 | 摺鉢 | | | | | | | 10 | 0.8 | 0.5 | 9 | 0.9 | 0.4 | 47 | 2.7 | 2.3 | 4 | 1.1 | 0.7 | 5 | 0.5 | 0.4 |
| 信楽系 | 陶器 | 鉢 | | | | | | | 2 | 0.2 | 0.1 | | | | 1 | 0.05 | 0.05 | 10 | 2.8 | 1.7 | | | |
| 不明焼締 | 陶器 | 摺鉢 | | | | | | | 3 | 0.3 | 0.15 | | | | | | | | | | 3 | 0.3 | 0.3 |
| | | その他 | | | | | | | 3 | 0.3 | 0.15 | 2 | 0.2 | 0.1 | 6 | 0.3 | 0.3 | | | | 6 | 0.6 | 0.5 |
| 源内焼 | | | | | | | | | | | | | | | 14 | 0.8 | 0.7 | | | | 2 | 0.2 | 0.2 |
| 陶磁器小計 | | | 31 | 100% | | 28 | 100% | | 1195 | 100% | | 1043 | 100% | | 1765 | 100% | | 353 | 100% | | 983 | 100% | |
| 在地産 | 土師質土器 | 小皿・坏 | 24 | | 37.0 | 100 | | 73.6 | 490 | | 25.3 | 285 | | 13.3 | 65 | | 3.2 | 25 | | 4.3 | 62 | | 5.3 |
| | | 鍋 | | | | | | | 2 | | 0.1 | | | | | | | | | | | | |
| | | 羽釜 | | | | | | | 19 | | 1.0 | 393 | | 18.3 | | | | 2 | | 0.3 | | | |
| | | 焙烙 | 10 | | 15.4 | 7 | | 5.2 | 137 | | 7.1 | 249 | | 11.5 | 108 | | 5.3 | 133 | | 22.6 | 8 | | 0.7 |
| | | 摺鉢 | | | | | | | 2 | | 0.1 | 3 | | 0.15 | 15 | | 0.7 | | | | | | |
| | | 火鉢・焜炉 | | | | | | | 78 | | 4.0 | 156 | | 7.3 | 57 | | 2.8 | 64 | | 10.9 | 94 | | 8.1 |
| | | その他 | | | | 1 | | 0.7 | 1 | | 0.05 | 2 | | 0.1 | 6 | | 0.3 | 1 | | 0.2 | 9 | | 0.8 |
| 搬入品 | 土師質土器 | 竜山系鍋 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 関西系焙烙 | | | | | | | 1 | | 0.05 | | | | 26 | | 1.3 | 2 | | 0.3 | 1 | | 0.1 |
| | | 焼塩壷・蓋 | | | | | | | 9 | | 0.5 | 16 | | 0.8 | 1 | | 0.05 | 8 | | 1.4 | 2 | | 0.2 |
| | | その他 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 瓦質土器 | 鉢 | | | | | | | 5 | | 0.25 | | | | 14 | | 0.7 | | | | | | |
| 土器・陶磁器総計 | | | 65 | | 100% | 136 | | 100% | 1939 | | 100% | 2147 | | 100% | 2057 | | 100% | 588 | | 100% | 1159 | | 100% |

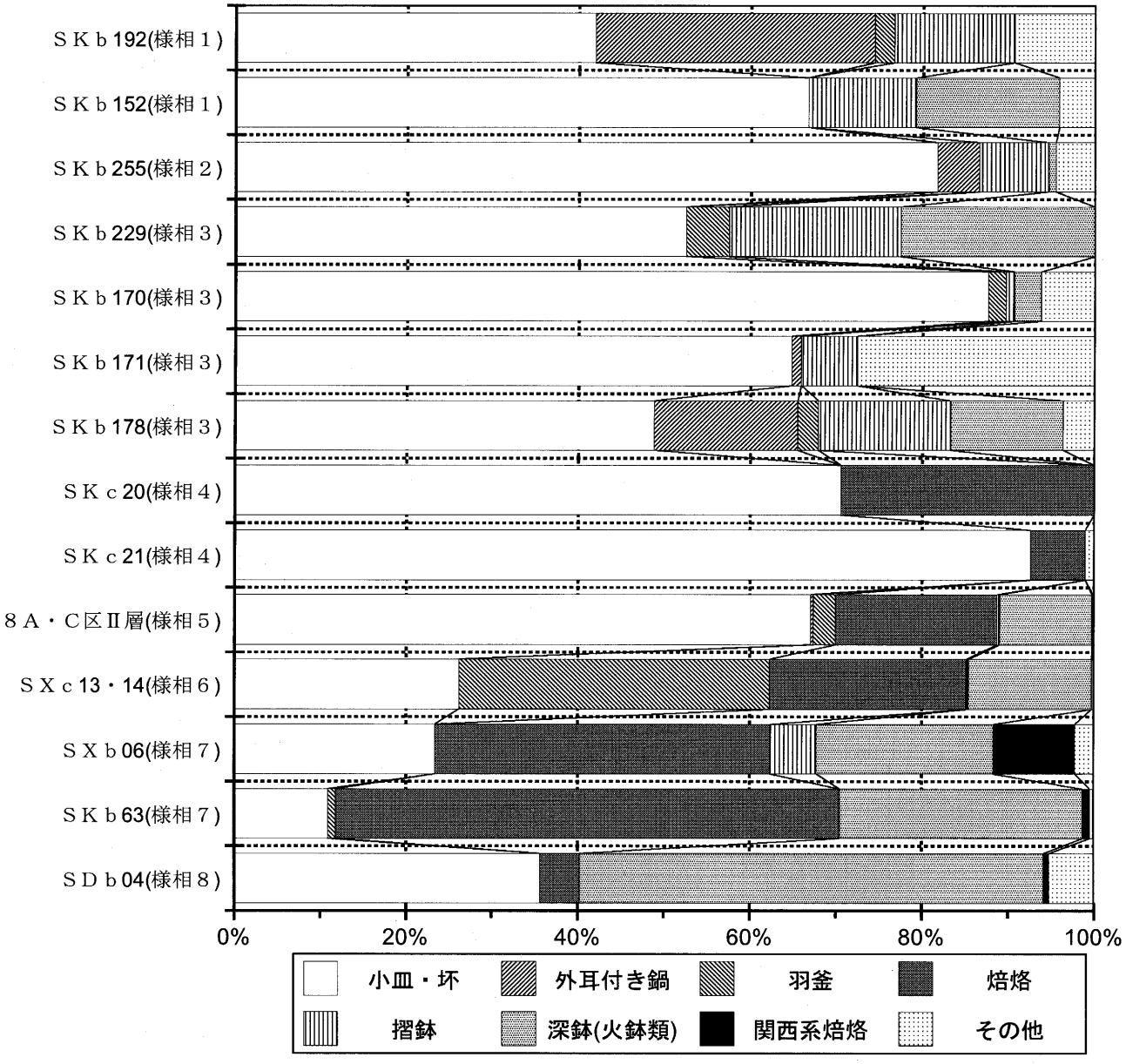
第７表　様相別土器・陶磁器カウント及び組成（Ａは陶磁器組成、Ｂは土器・陶磁器組成）２




**第231図　様相別材質組成**

| | 土器 | 陶器 | 磁器 | 軟質施釉陶器 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|
| ＳＫｂ192(様相１) | 31.3 | 59.9 | 8.8 | | |
| ＳＫｂ152(様相１) | 38.7 | 53.2 | 8.1 | | |
| ＳＫｂ255(様相２) | 71.3 | 26.8 | 1.9 | | |
| ＳＫｂ229(様相３) | 33.6 | 21.1 | 36.7 | | 8.6 |
| ＳＫｂ170(様相３) | 84.4 | 7.8 | 7.8 | | |
| ＳＫｂ171(様相３) | 71.9 | 15.6 | 12.5 | | |
| ＳＫｂ178(様相３) | 45.6 | 29.5 | 23.8 | | 1.1 |
| ＳＫｃ20(様相４) | 52.3 | 3.1 | 44.6 | | |
| ＳＫｃ21(様相４) | 79.4 | 8.1 | 12.5 | | |
| ８Ａ・Ｃ区Ⅱ層(様相５) | 38.1 | 29.0 | 32.5 | 0.1 | 0.3 |
| ＳＸｃ13・14(様相６) | 51.4 | 33.6 | 13.5 | 1.5 | |
| ＳＸｂ06(様相７) | 13.5 | 38.9 | 30.7 | 16.2 | 0.7 |
| ＳＫｂ63(様相７) | 40.0 | 31.0 | 19.9 | 9.1 | |
| ＳＤｂ04(様相８) | 15.2 | 35.7 | 29.0 | 20.1 | |

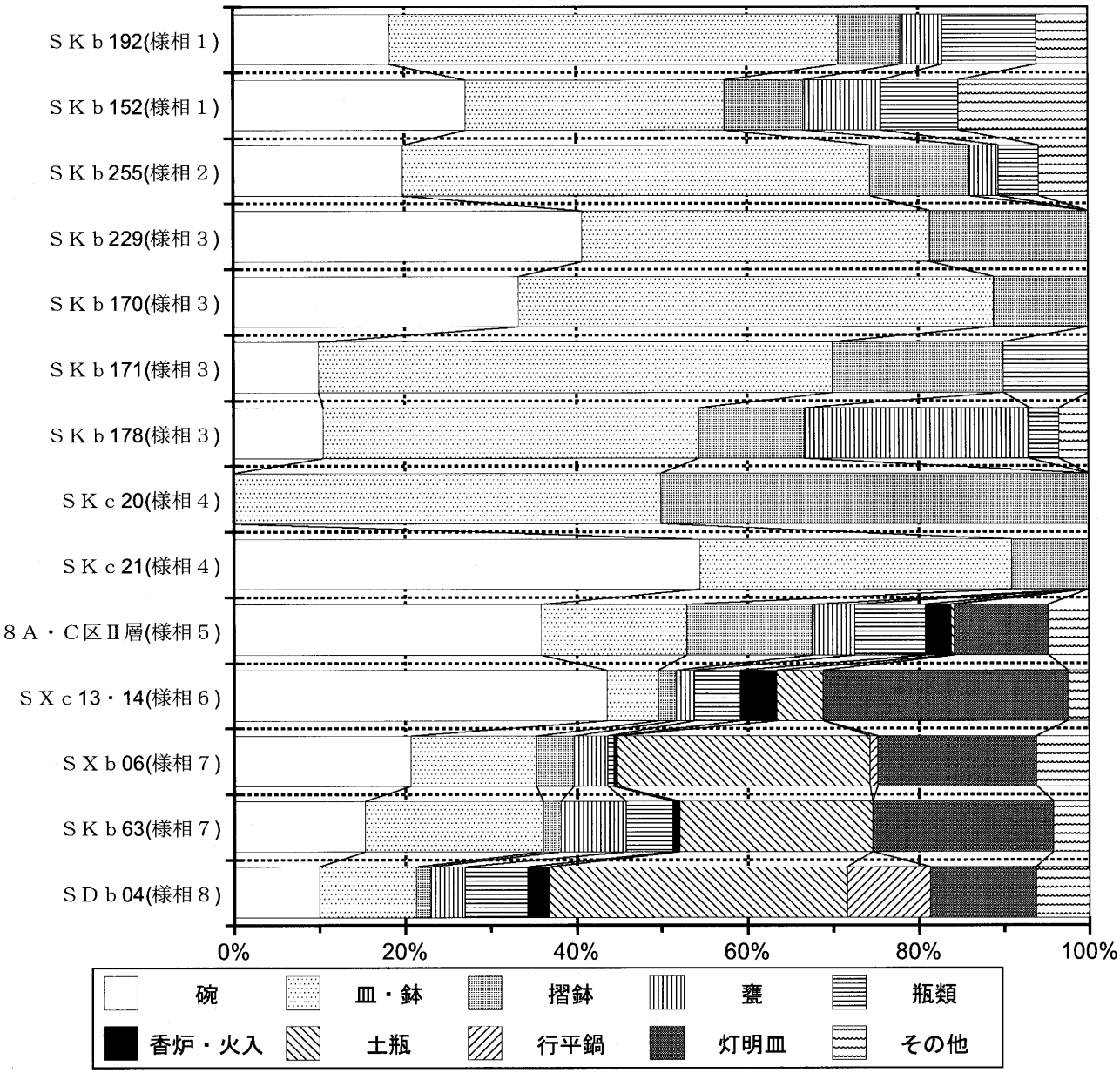
**第８表　様相別材質組成比率**




**第232図　様相別器種組成(土師質土器)**

| | 小皿・坏 | 外耳付き鍋 | 羽釜 | 焙烙 | 摺鉢 | 深鉢(火鉢類) | 関西系焙烙 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ＳＫｂ192(様相１) | 41.9 | 32.5 | 2.3 | | 14.0 | | | 9.3 |
| ＳＫｂ152(様相１) | 66.7 | | | | 12.5 | 16.7 | | 4.1 |
| ＳＫｂ255(様相２) | 81.7 | 4.9 | | | 8.0 | 0.9 | | 4.5 |
| ＳＫｂ229(様相３) | 52.5 | | 5.0 | | 20.0 | 22.5 | | |
| ＳＫｂ170(様相３) | 87.6 | | 2.1 | | 1.0 | 3.1 | | 6.2 |
| ＳＫｂ171(様相３) | 64.8 | 1.1 | | | 6.6 | | | 27.5 |
| ＳＫｂ178(様相３) | 48.8 | 16.7 | 2.4 | | 15.4 | 13.1 | | 3.6 |
| ＳＫｃ20(様相４) | 70.6 | | | 29.4 | | | | |
| ＳＫｃ21(様相４) | 92.6 | | | 6.4 | | | | 1.0 |
| ８Ａ・Ｃ区Ⅱ層(様相５) | 67.1 | 0.3 | 2.6 | 18.8 | 0.3 | 10.7 | 0.1 | 0.1 |
| ＳＸｃ13・14(様相６) | 26.2 | | 36.1 | 22.9 | 0.3 | 14.3 | | 0.2 |
| ＳＸｂ06(様相７) | 23.4 | | | 39.0 | 5.4 | 20.6 | 9.4 | 2.2 |
| ＳＫｂ63(様相７) | 11.0 | | 0.9 | 58.6 | | 28.2 | 0.9 | 0.4 |
| ＳＤｂ04(様相８) | 35.6 | | | 4.6 | | 54.0 | 0.6 | 5.2 |

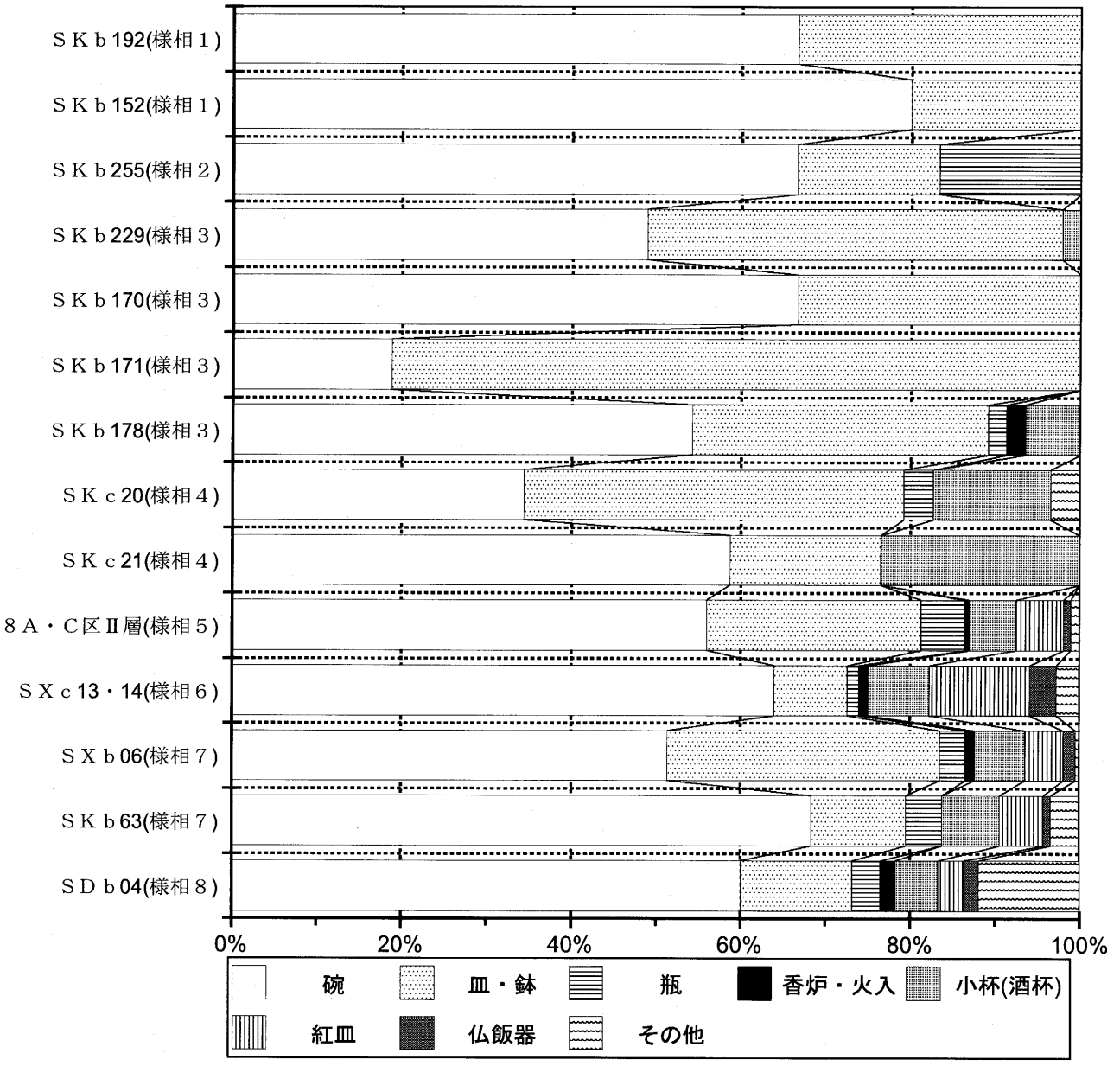
**第９表　様相別器種組成比率(土師質土器)**




第233図　様相別器種組成(陶器)

| | 碗 | 皿・鉢 | 摺鉢 | 甕 | 瓶類 | 香炉・火入 | 土瓶 | 行平鍋 | 灯明皿 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ＳＫｂ192(様相１) | 18.3 | 52.4 | 7.3 | 4.9 | 11.0 | | | | | 6.1 |
| ＳＫｂ152(様相１) | 27.2 | 30.3 | 9.1 | 9.1 | 9.1 | | | | | 15.2 |
| ＳＫｂ255(様相２) | 19.8 | 54.6 | 11.6 | 3.5 | 4.7 | | | | | 5.8 |
| ＳＫｂ229(様相３) | 40.7 | 40.7 | 18.6 | | | | | | | |
| ＳＫｂ170(様相３) | 33.3 | 55.6 | 11.1 | | | | | | | |
| ＳＫｂ171(様相３) | 10.0 | 60.0 | 20.0 | | 10.0 | | | | | |
| ＳＫｂ178(様相３) | 10.5 | 43.9 | 12.3 | 26.3 | 3.5 | | | | | 3.5 |
| ＳＫｃ20(様相４) | | 50.0 | 50.0 | | | | | | | |
| ＳＫｃ21(様相４) | 54.5 | 36.4 | 9.1 | | | | | | | |
| ８Ａ・Ｃ区Ⅱ層(様相５) | 35.9 | 17.0 | 14.7 | 4.9 | 8.3 | 3.0 | 0.4 | | 11.0 | 4.8 |
| ＳＸｃ13・14(様相６) | 43.6 | 6.1 | 2.0 | 2.1 | 5.4 | 4.2 | 5.4 | | 28.7 | 2.5 |
| ＳＸｂ06(様相７) | 20.7 | 14.6 | 4.4 | 4.0 | 0.7 | 0.4 | 29.5 | 0.9 | 18.6 | 6.2 |
| ＳＫｂ63(様相７) | 15.3 | 20.8 | 2.1 | 7.6 | 5.5 | 0.8 | 22.5 | | 21.2 | 4.2 |
| ＳＤｂ04(様相８) | 10.0 | 11.3 | 1.7 | 4.0 | 7.3 | 2.5 | 34.8 | 9.7 | 12.5 | 6.2 |

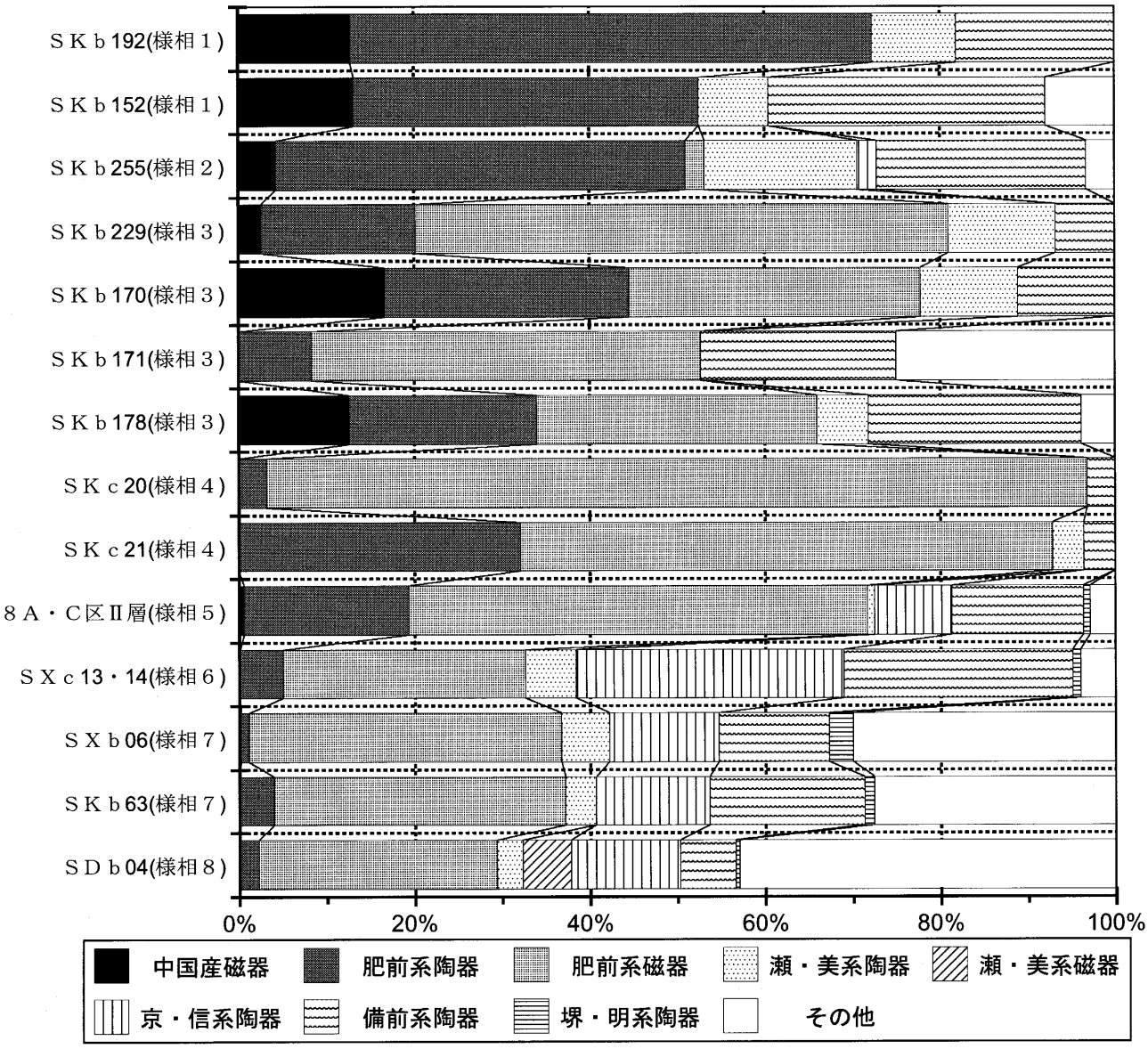
第10表　様相別器種組成比率(陶器)




第234図　様相別器種組成(磁器)

| | 碗 | 皿・鉢 | 瓶 | 香炉・火入 | 小杯(酒杯) | 紅皿 | 仏飯器 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ＳＫｂ192(様相１) | 66.7 | 33.3 | | | | | | |
| ＳＫｂ152(様相１) | 80.0 | 20.0 | | | | | | |
| ＳＫｂ255(様相２) | 66.6 | 16.7 | 16.7 | | | | | |
| ＳＫｂ229(様相３) | 48.9 | 48.9 | | | 2.2 | | | |
| ＳＫｂ170(様相３) | 66.7 | 33.3 | | | | | | |
| ＳＫｂ171(様相３) | 18.8 | 81.2 | | | | | | |
| ＳＫｂ178(様相３) | 54.3 | 34.8 | 2.2 | 2.2 | 6.5 | | | |
| ＳＫｃ20(様相４) | 34.4 | 44.8 | 3.5 | | 13.8 | | | 3.5 |
| ＳＫｃ21(様相４) | 58.8 | 17.7 | | | 23.5 | | | |
| ８Ａ・Ｃ区Ⅱ層(様相５) | 56.0 | 25.3 | 5.1 | 0.6 | 5.4 | 5.7 | 0.8 | 1.1 |
| ＳＸｃ13・14(様相６) | 64.0 | 8.6 | 1.4 | 1.0 | 7.3 | 11.8 | 3.1 | 2.8 |
| ＳＸｂ06(様相７) | 51.4 | 32.1 | 3.0 | 1.1 | 6.0 | 4.5 | 1.4 | 0.5 |
| ＳＫｂ63(様相７) | 68.4 | 11.1 | 4.3 | | 6.8 | 5.1 | 0.9 | 3.4 |
| ＳＤｂ04(様相８) | 60.1 | 13.1 | 3.3 | 1.8 | 5.0 | 3.0 | 1.8 | 11.9 |

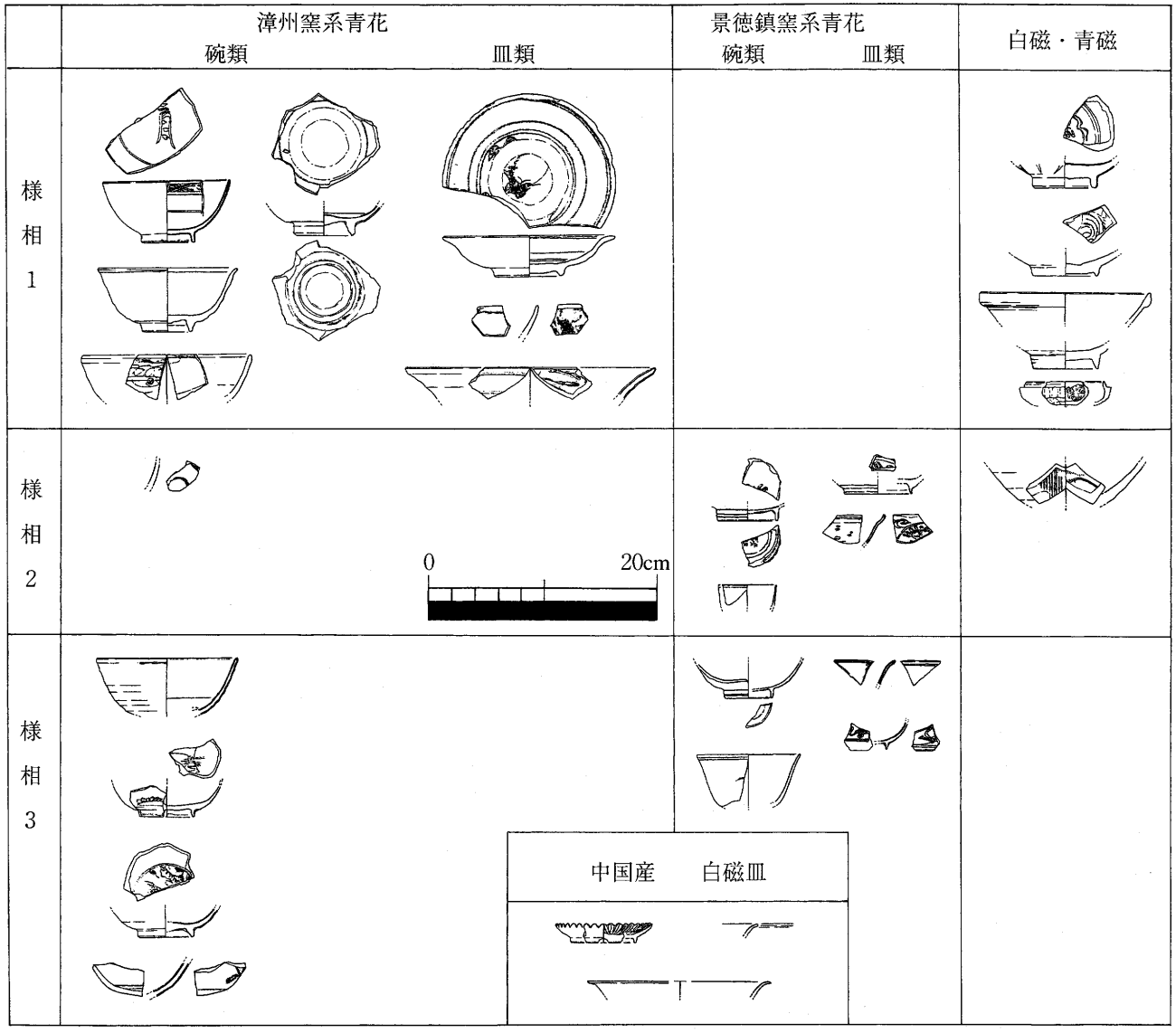
第11表　様相別器種組成比率(磁器)



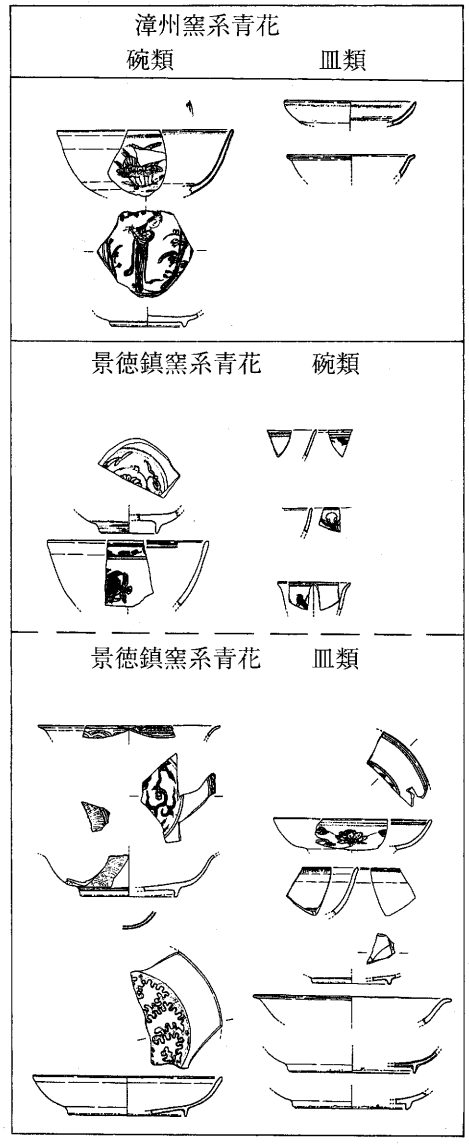

第235図　様相別産地組成

| | 中国産磁器 | 肥前系陶器 | 肥前系磁器 | 瀬・美系陶器 | 瀬・美系磁器 | 京・信系陶器 | 備前系陶器 | 堺・明系陶器 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ＳＫｂ192(様相１) | 12.8 | 59.5 | | 9.6 | | | 18.1 | | |
| ＳＫｂ152(様相１) | 13.2 | 39.4 | | 7.9 | | | 31.6 | | 7.9 |
| ＳＫｂ255(様相２) | 4.3 | 46.7 | 2.2 | 17.4 | | 2.2 | 23.9 | | 3.3 |
| ＳＫｂ229(様相３) | 2.6 | 17.6 | 60.8 | 12.2 | | | 6.8 | | |
| ＳＫｂ170(様相３) | 16.7 | 27.8 | 33.3 | 11.1 | | | 11.1 | | |
| ＳＫｂ171(様相３) | | 8.3 | 44.5 | | | | 22.2 | | 25.0 |
| ＳＫｂ178(様相３) | 12.6 | 21.4 | 32.0 | 5.8 | | | 24.3 | | 3.9 |
| ＳＫｃ20(様相４) | | 3.2 | 93.6 | | | | 3.2 | | |
| ＳＫｃ21(様相４) | | 32.1 | 60.7 | 3.6 | | | 3.6 | | |
| ８Ａ・Ｃ区Ⅱ層(様相５) | 0.6 | 18.8 | 52.2 | 0.9 | | 8.8 | 15.0 | 0.8 | 2.9 |
| ＳＸｃ13・14(様相６) | 0.1 | 4.9 | 27.6 | 5.8 | | 30.6 | 26.1 | 0.9 | 4.0 |
| ＳＸｂ06(様相７) | 0.2 | 0.9 | 35.6 | 5.5 | | 12.5 | 12.6 | 2.7 | 30.0 |
| ＳＫｂ63(様相７) | | 4.0 | 33.2 | 3.4 | | 13.1 | 17.6 | 1.1 | 27.6 |
| ＳＤｂ04(様相８) | | 2.2 | 27.2 | 2.9 | 5.5 | 12.5 | 6.3 | 0.5 | 42.9 |

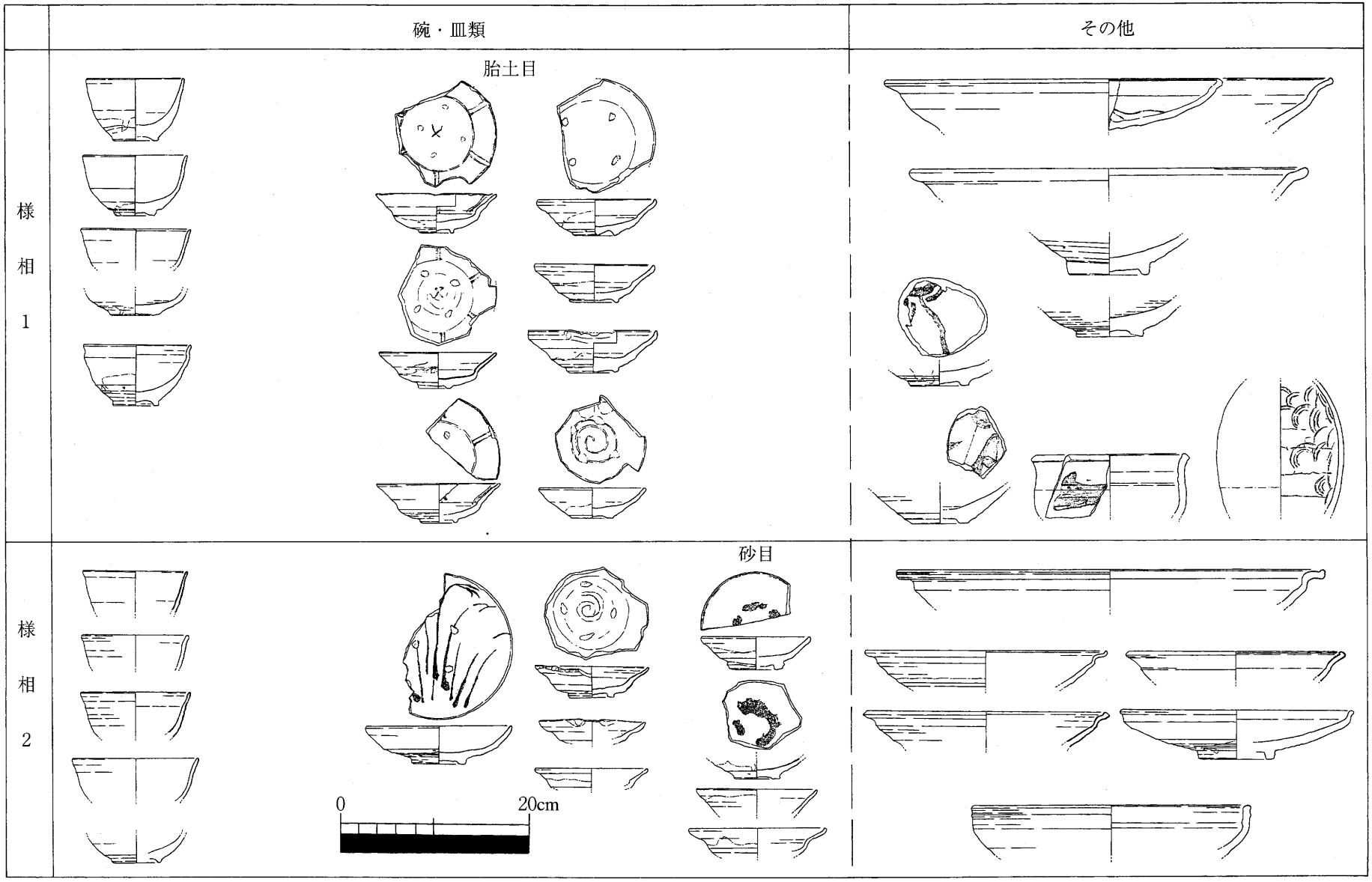
第12表　様相別産地組成比率



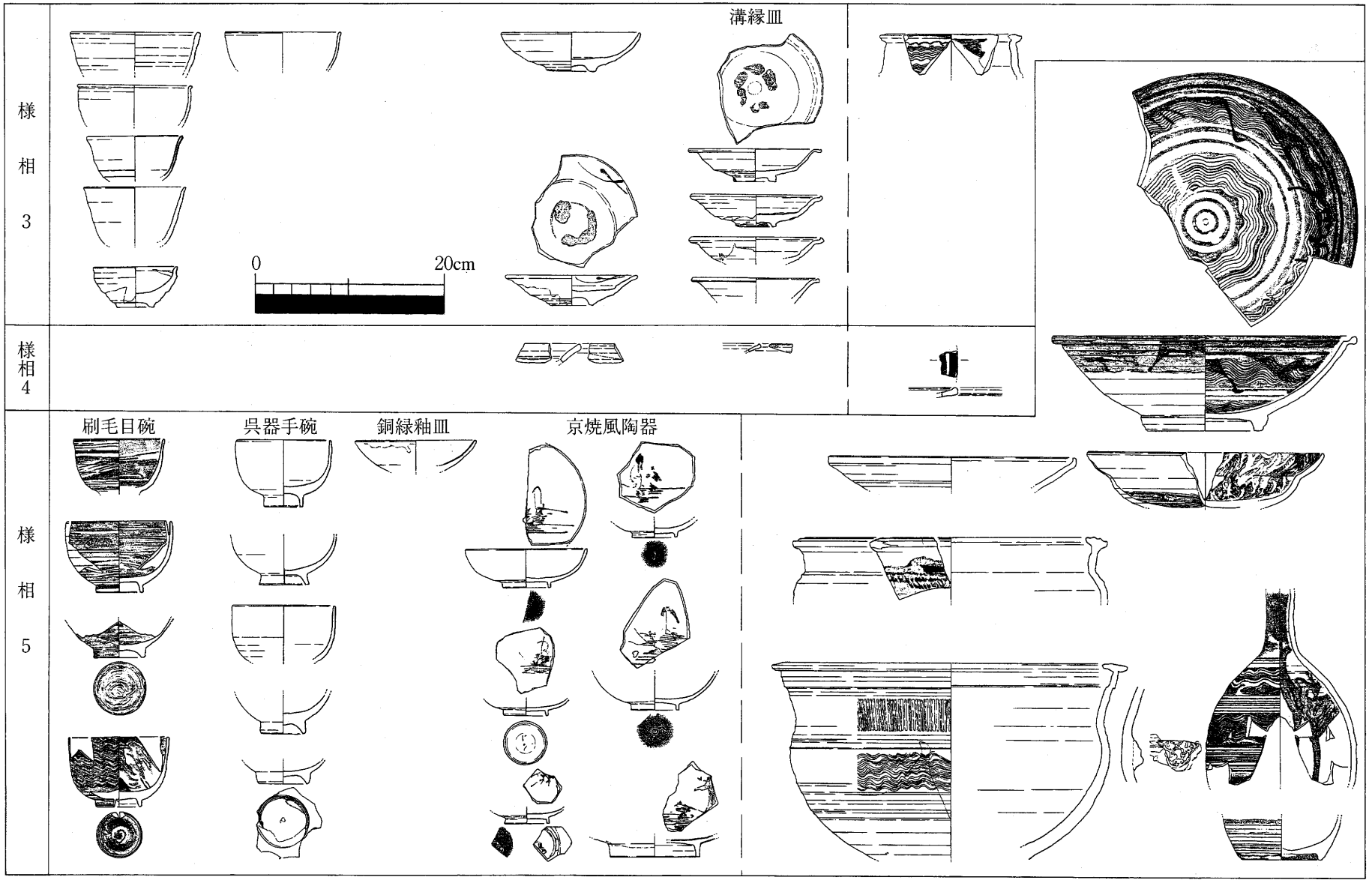

第236図　中国産磁器変遷図



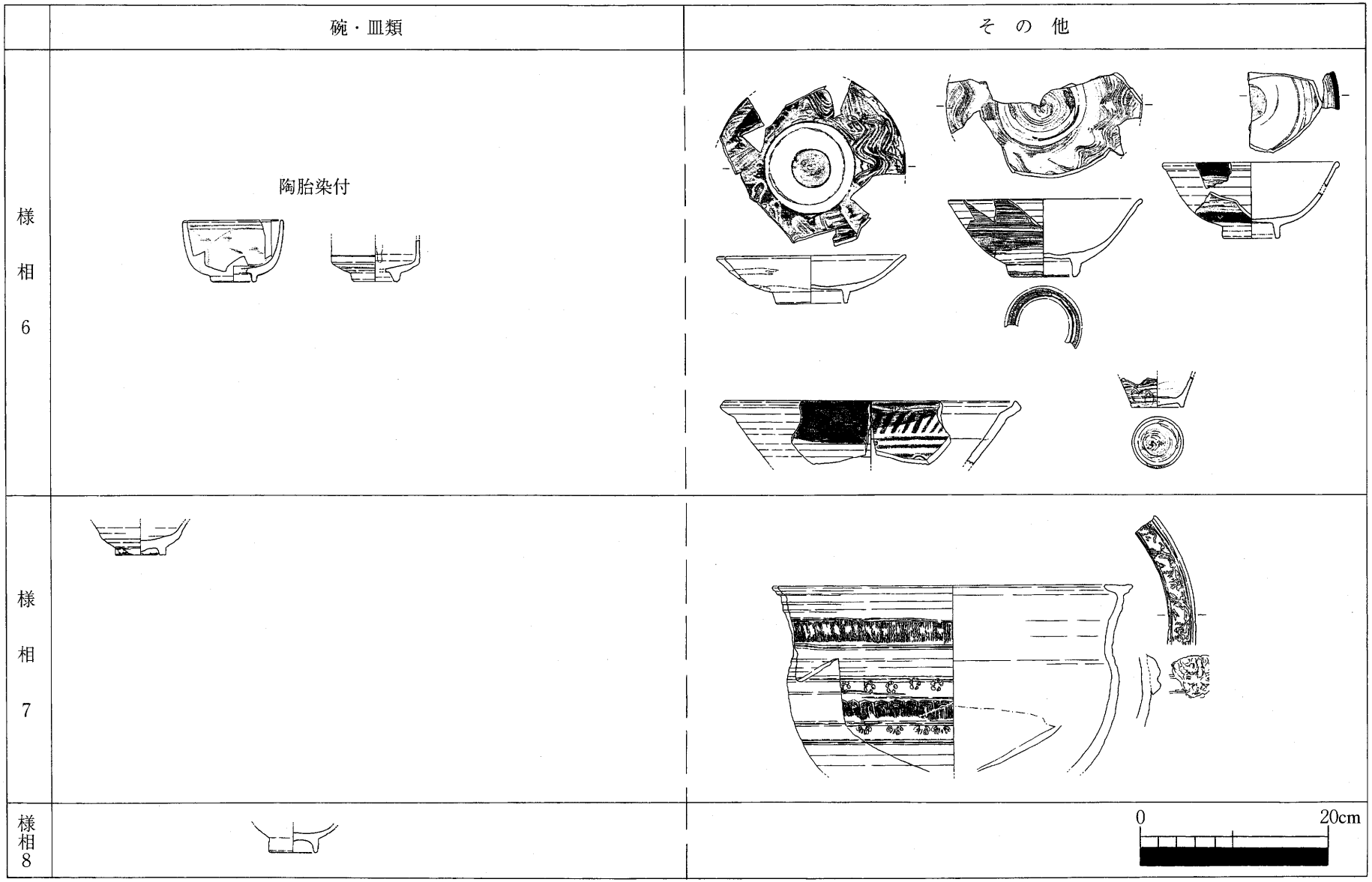

第237図　Ⅷ区ＳＺｃ01前面堆積土出土中国産磁器



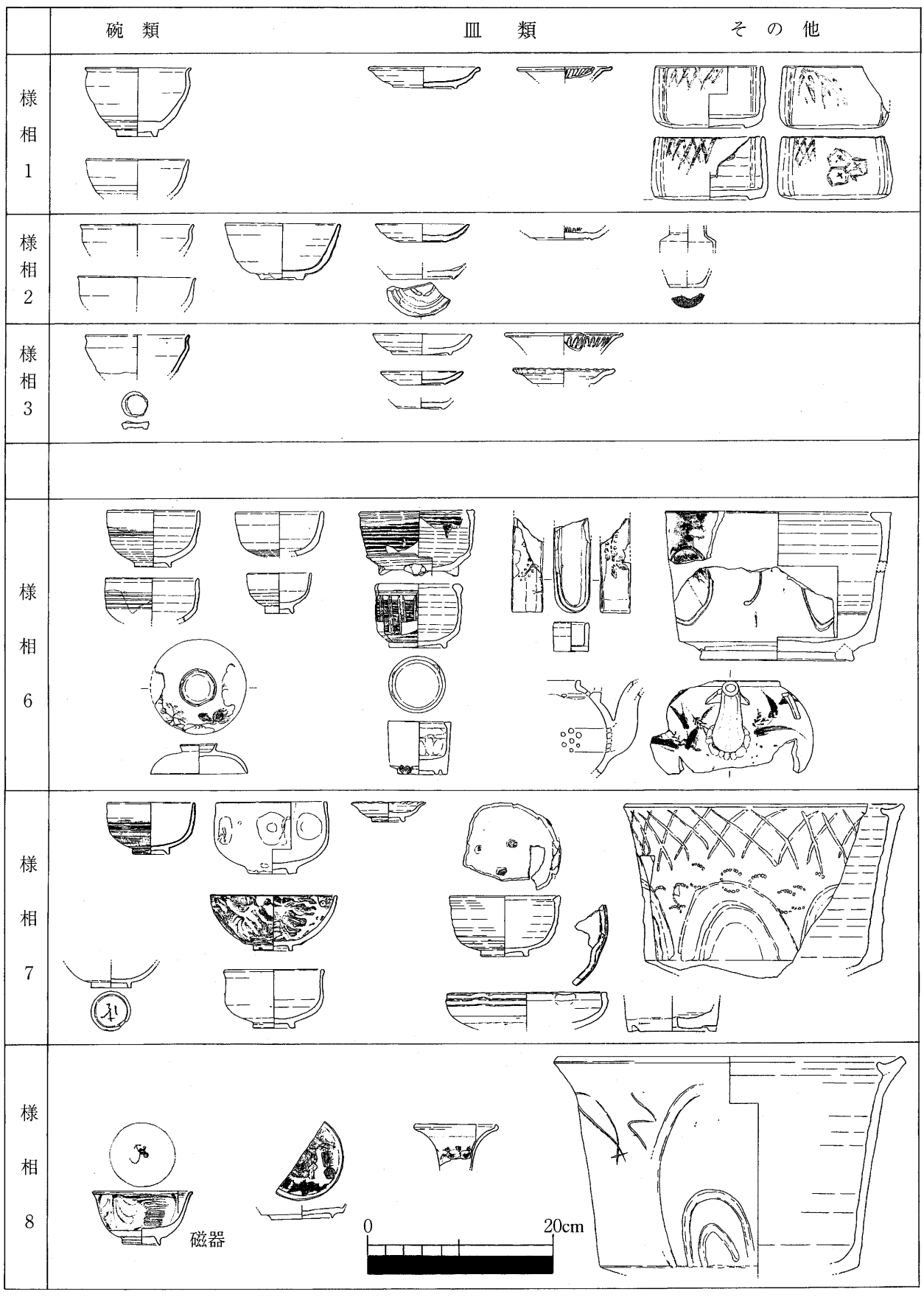

第238図　肥前系陶器変遷図 1



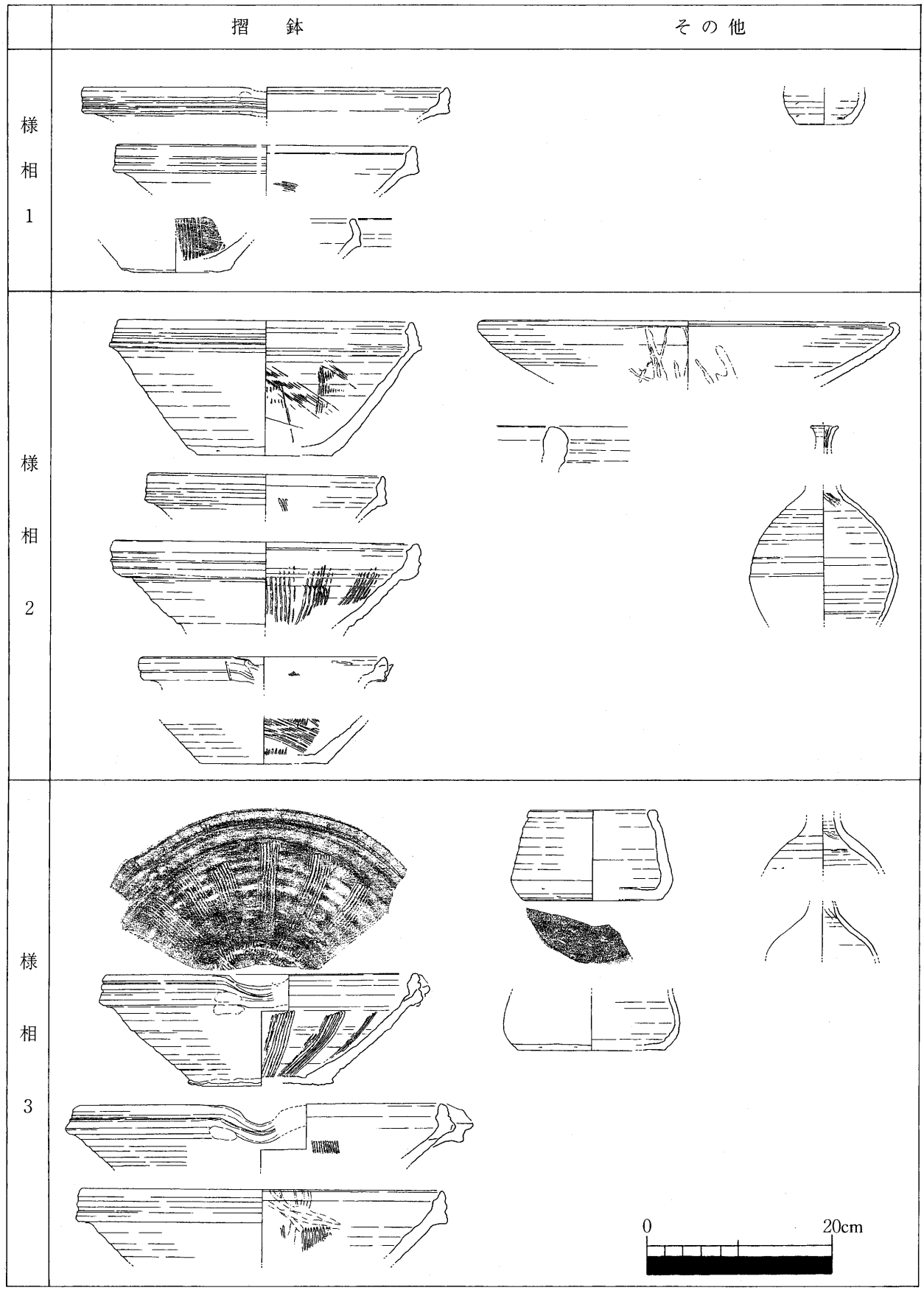

第239図　肥前系陶器変遷図 2



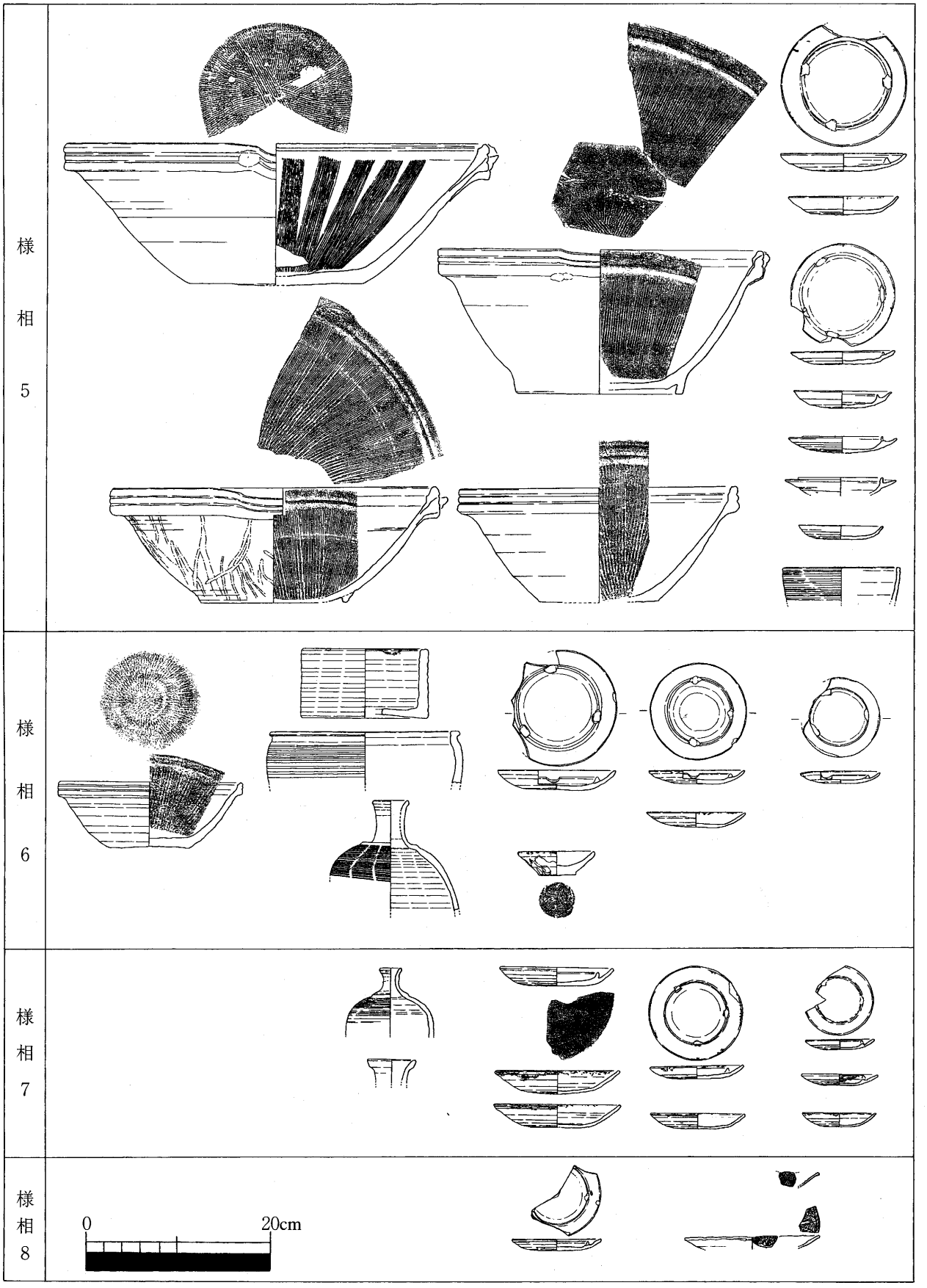

第240図　肥前系陶器変遷図 3



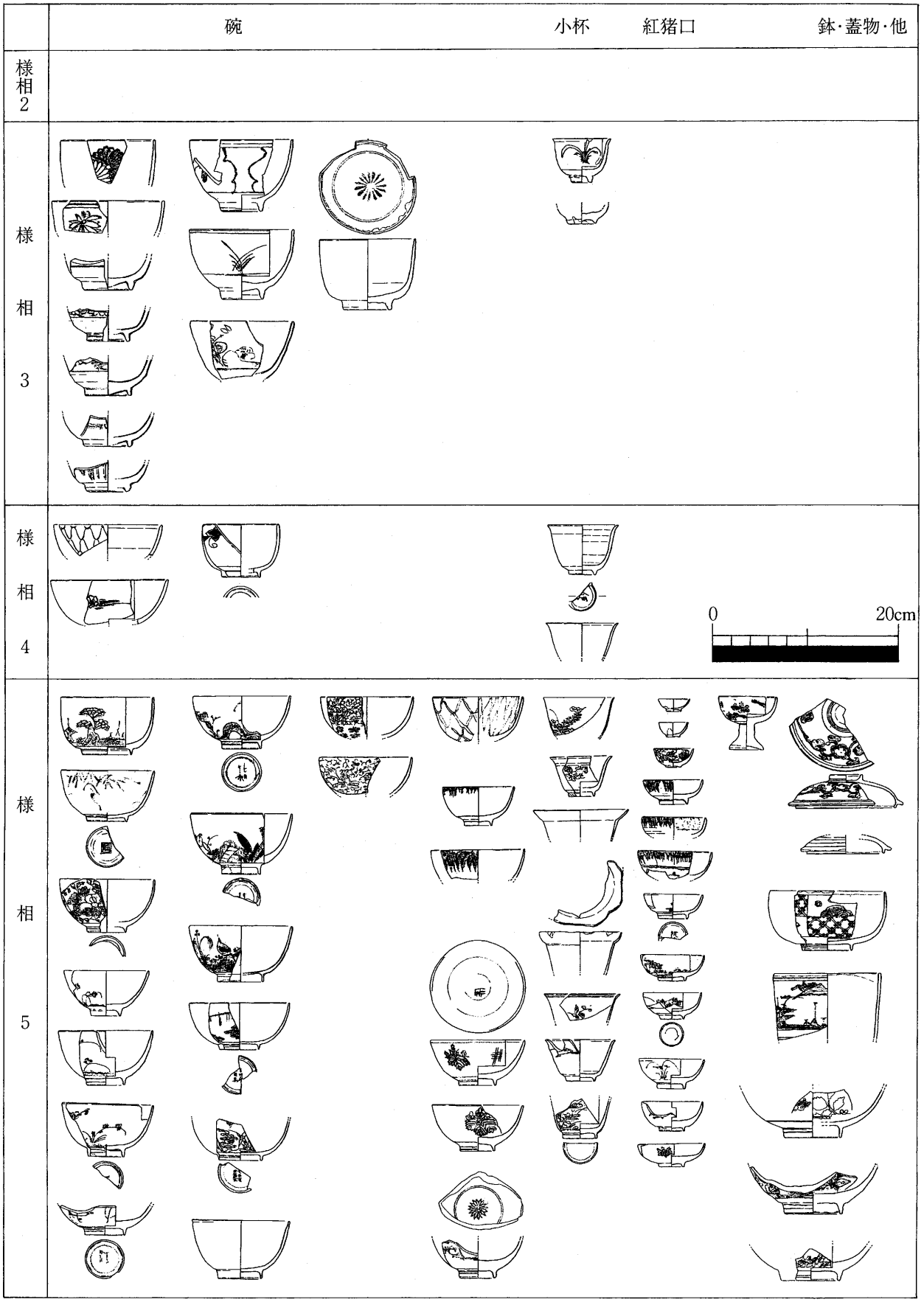

**第241図　瀬戸・美濃系陶磁器変遷図**



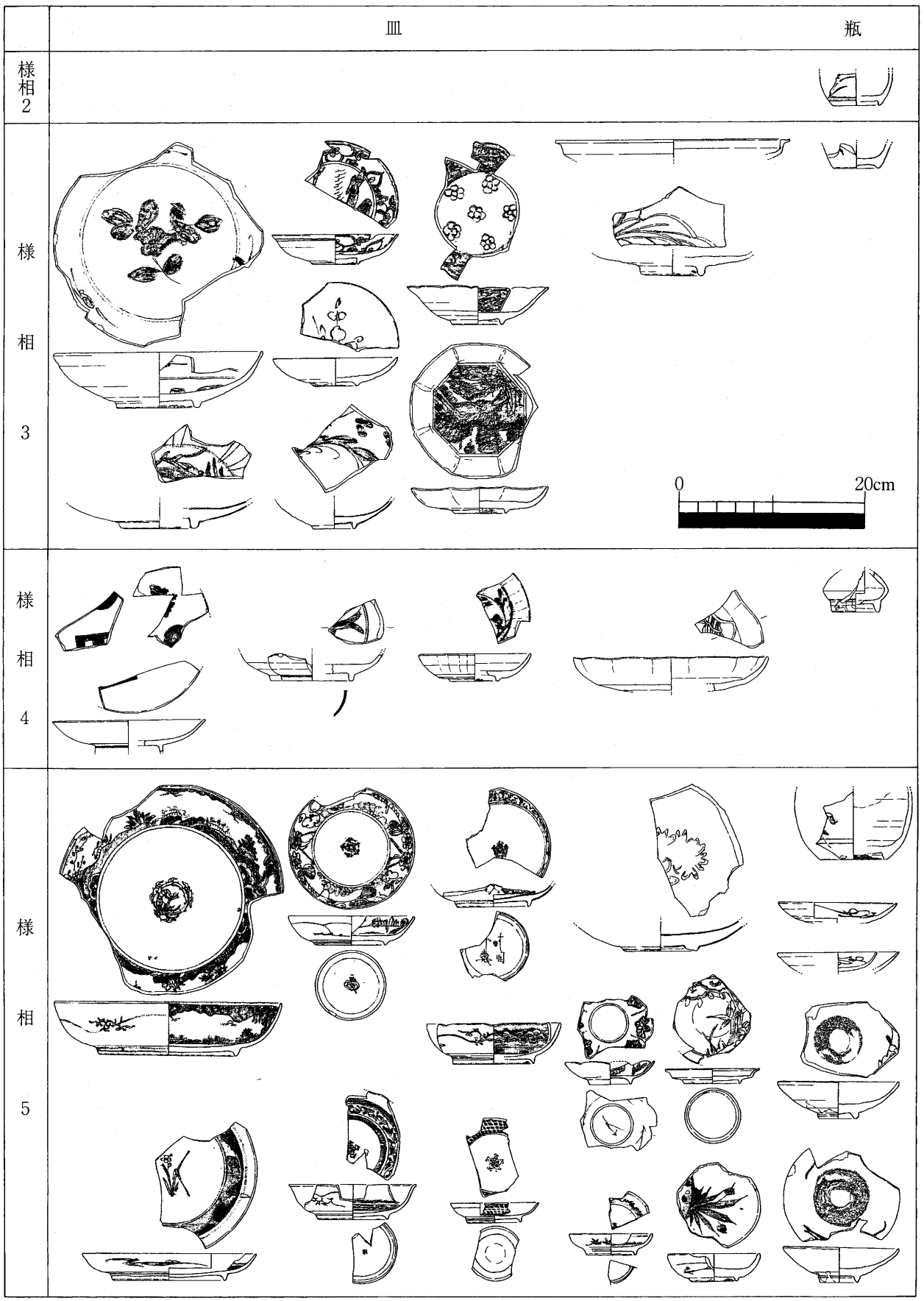

第242図　備前系陶器変遷図1



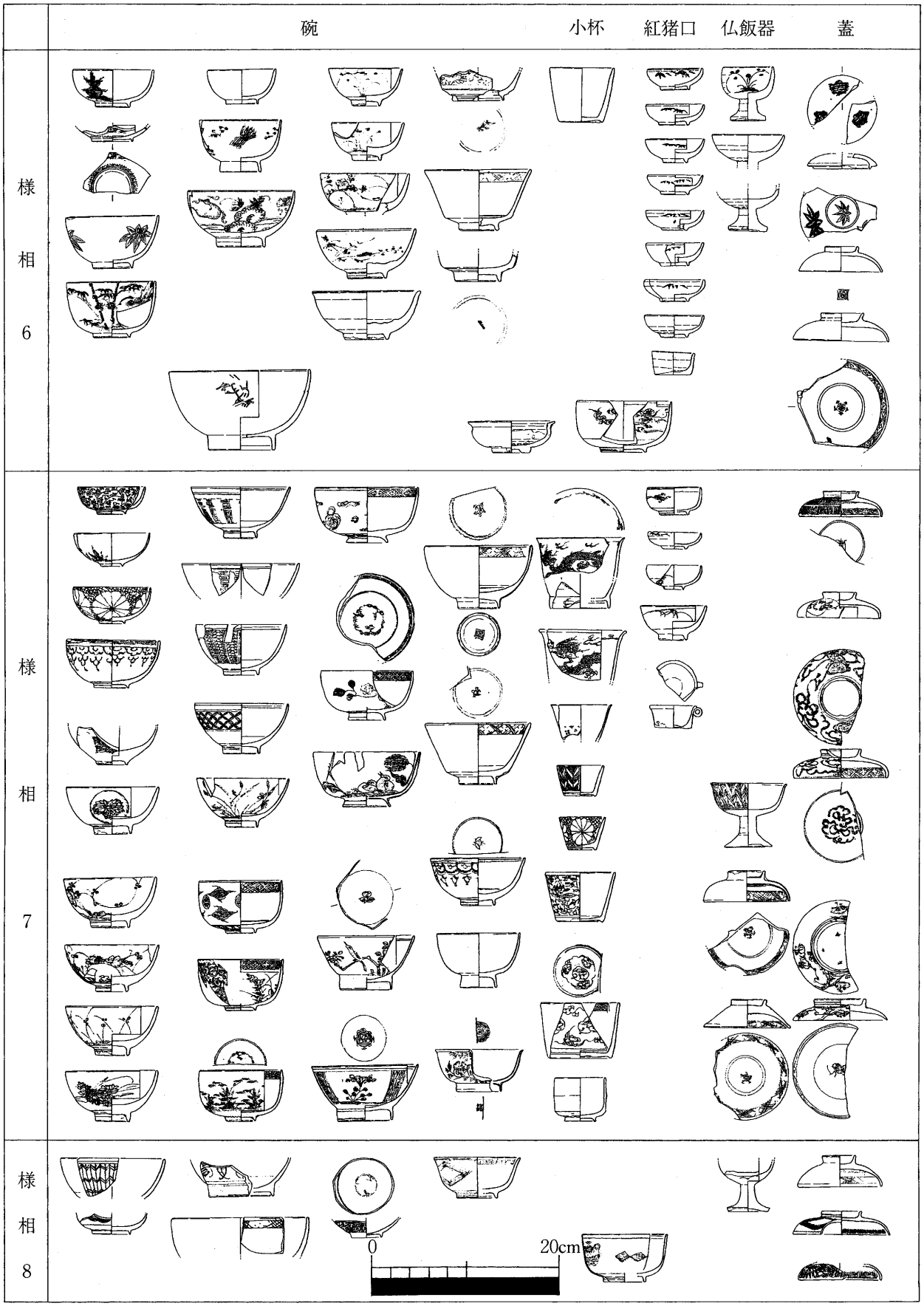

第243図　備前系陶器変遷図 2



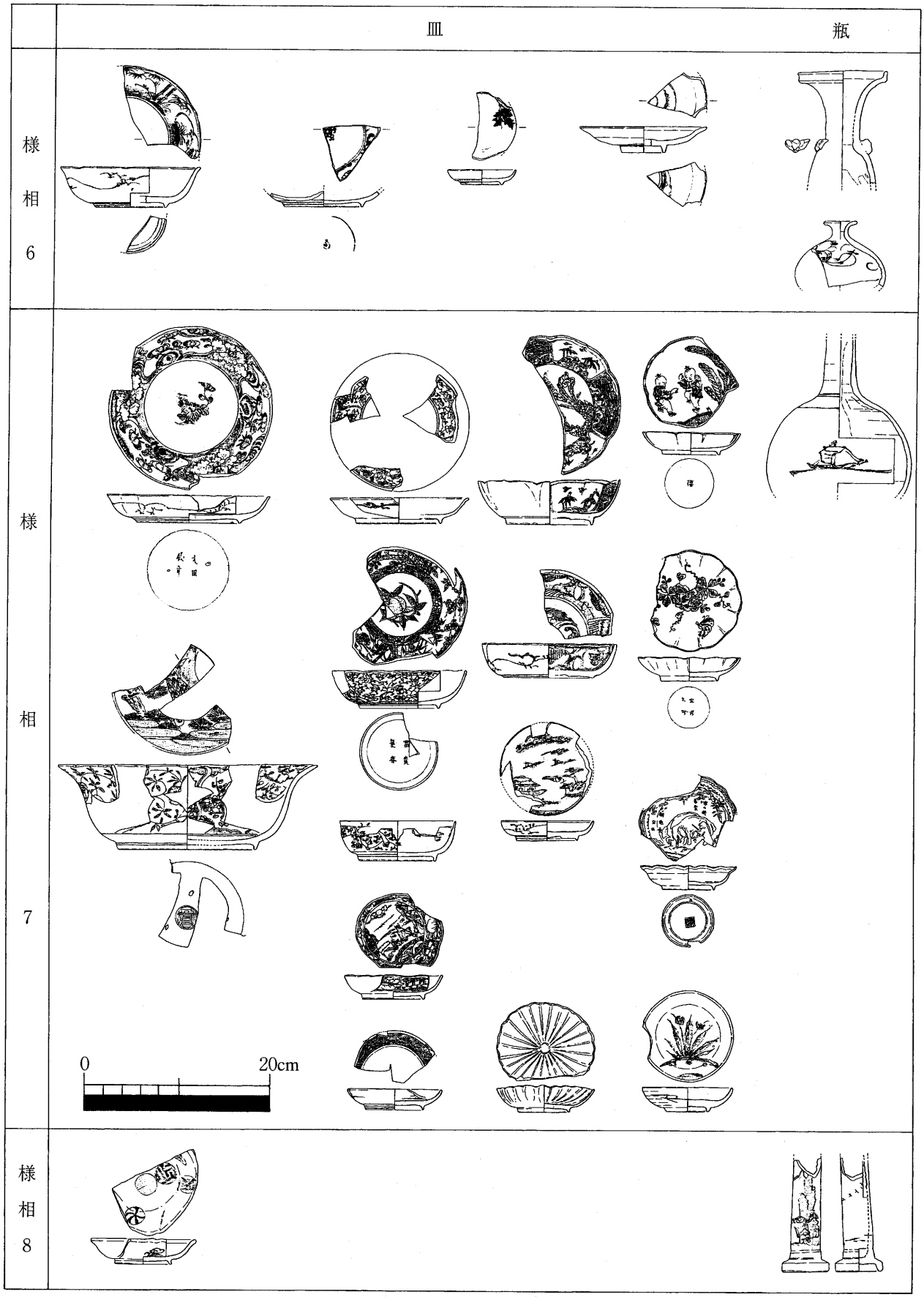

第244図　肥前系磁器変遷図 1




第245図　肥前系磁器変遷図 2



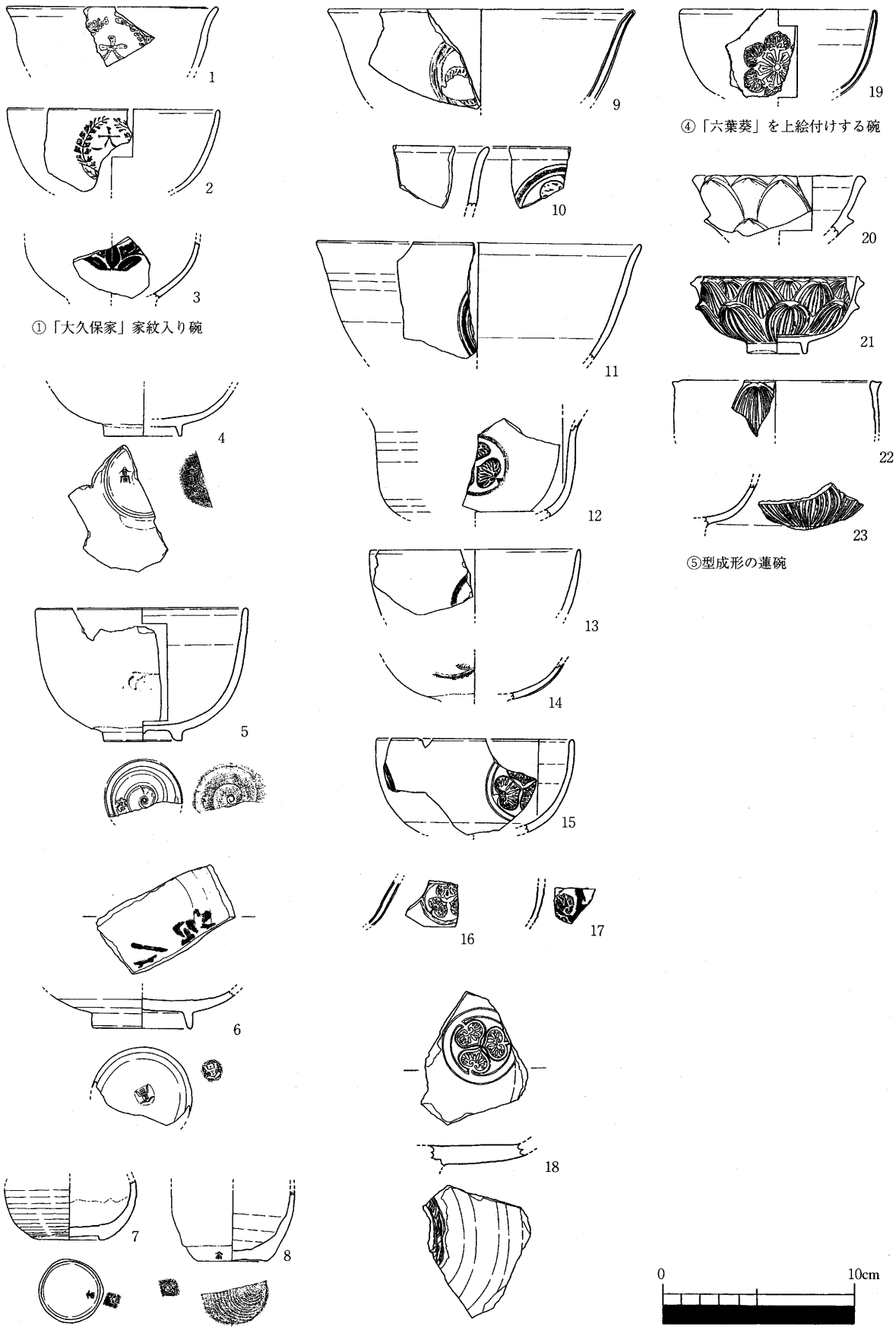

**第246図　肥前系磁器変遷図 3**



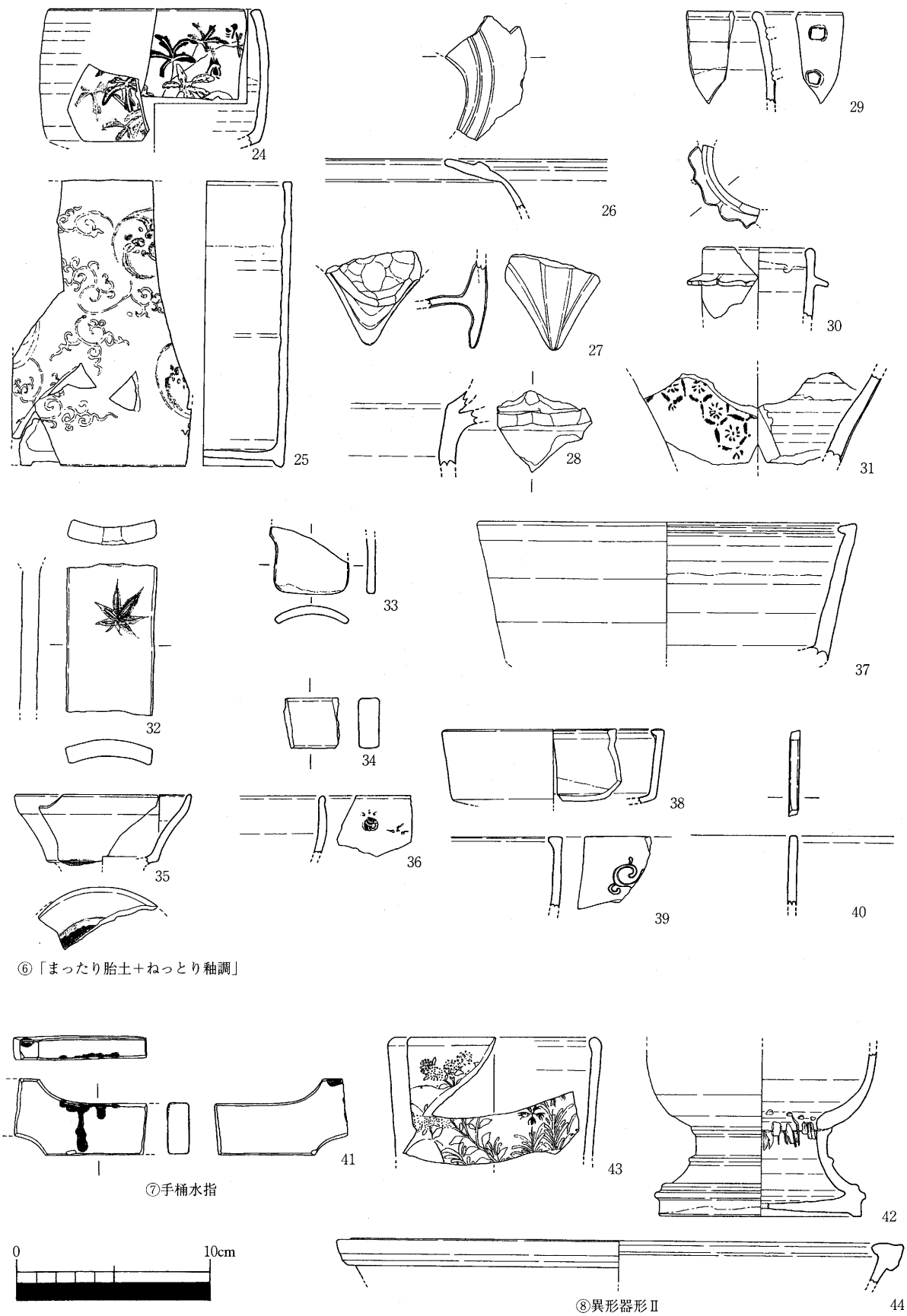

**第247図　肥前系磁器変遷図 4**

| 番号 | 出土遺構 | 所属時期 | 器種 | 胎土(質感・素地・色調) | 釉調(釉種類・色調・厚み) | 胎釉 | 上絵・下絵内容 | 絵薬 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | ＳＸb03 | 様相8併行か | 端反碗 | 陶器質、緻密、灰白色 | 灰釉、灰白色、厚い | ○ | 「大久保家家紋」 | 青色(盛り上がる) | 縁取りあり(絵薬不明) |
| 2 | ＳＸb06 | 様相7 | 丸碗 | 磁器質、緻密、灰白色 | 灰釉、灰黄褐色、薄い | | 「大久保家家紋」 | 暗褐色 | 腰細碗 |
| 3 | ＳＸc09外堀 | 様相7～8 | 丸碗 | 磁器質、緻密、灰白色 | 灰釉、灰白色、薄い | | 「大久保家家紋」 | 暗灰色(盛り上がる) | |
| 4 | ＳＫb63 | 様相7 | 丸碗 | 磁器質、緻密、灰黄色 | 灰釉、灰黄色、薄い | | | | 「破風高」刻印、渦高台(小) |
| 5 | ＳＸc13 | 様相6 | 丸碗 | 磁器質、緻密、灰白色 | 灰釉、淡緑灰色、薄い | | 「草花文」 | 銹絵染付 | 「高」刻印、渦高台 |
| 6 | ＳＸc09外堀 | 様相7～8 | 丸碗 | 軟質、緻密、黄灰色 | なし(本焼き前？) | ☆ | 「文字？」 | 灰黄褐色(下絵？) | 「破風高」刻印、軟質製品 |
| 7 | ＳＸc14 | 様相6 | 瓶 | 軟質、緻密、淡黄色 | なし(本焼き前？) | ☆ | | | 「破風高」刻印(超小型)、軟質製品、白泥塗布 |
| 8 | 攪乱出土 | | 茶入れ | 陶器質、緻密、黄灰色 | 鉄釉、暗茶褐色、厚い | | | | 「破風高」刻印(超小型)、底部回転糸切り |
| 9 | Ⅱ層 | 様相5 | 端反碗 | 陶器質、やや密、黄灰(白)色 | 灰釉、灰黄白色、厚い | △ | 「三葉葵」上絵 | 赤色、「金」の縁取り | 胎土は緻密であるが、素地内に気泡状の間隙を認める |
| 10 | Ⅱ層 | 様層5 | 端反碗 | 同上 | 同上 | △ | 「三葉葵」上絵 | 青色(盛り上がる)、「金」の縁取り | |
| 11 | ＳＤc09 | 様相5 | 端反碗 | 磁器質、緻密、灰黄色 | 灰釉、黄褐色、薄い | | 「丸枠」上絵 | 赤色、「金」の縁取り | 上絵は「三葉葵」の可能性が高い |
| 12 | 攪乱出土 | | 端反碗 | 陶器質、やや密、黄白色 | 灰釉、黄白色、薄い | | 「三葉葵」上絵 | 赤橙色 | 縁取りなし |
| 13 | ＳＤb28(７区) | 様相5？ | 丸碗 | 陶器質、やや密、淡黄色 | 灰釉、濁浅黄色、厚い | | 「三葉葵」上絵 | 青色(盛り上がる) | 縁取りなし |
| 14 | ＳＤc07 | 様相5 | 丸碗 | 同上 | 同上 | | 「三葉葵」上絵 | 赤色、「金」の縁取り | |
| 15 | 攪乱出土 | | 丸碗 | 陶器質、やや密、淡灰黄色 | 灰釉、濁黄白色、厚い | | 「三葉葵」上絵 | 赤色？、「金」の縁取り | |
| 16 | ＳＤb04 | 様相8 | 碗 | 磁器質、緻密、灰白色 | 灰釉、灰白色、薄い | | 「三葉葵」上絵 | 灰色（元来は青色） | 縁取りなし |
| 17 | 層位不明(６面出土) | | 碗 | 陶器質、緻密、灰白色 | 灰釉、灰白色、厚い | ○ | 「三葉葵」上絵 | 青色、赤色の縁取り | |
| 18 | Ⅱ区1.2―1.1m | ～様相8 | 盤 | 陶器質、緻密、灰白色 | 灰釉、灰白色、厚い | ● | 「三葉葵」上絵 | 上絵は消失 | 上絵の痕跡から縁取りありと判断 |
| 19 | 層位不明(６面出土) | | 丸碗 | 陶器質、やや密、灰色 | 灰釉、緑灰色、厚い | | 「六葉葵」上絵 | 緑色 | 枠・縁取りなし、腰部がやや細い |
| 20 | ＳＤ08 | 時期幅あり | 蓮碗 | 陶器質、緻密、灰白色 | 灰釉、灰白色、厚い | ○ | | | 型成形、葉脈なし |
| 21 | ＳＤc08 | 様相5 | 蓮碗 | 陶器質、緻密、灰白色 | 灰釉、灰白色、やや厚い | | | | 型成形、外面畳付際まで施釉、端部に刻目 |
| 22 | Ⅱ層 | 様相5 | 蓮碗 | 陶器質、緻密、灰白色 | 灰釉、灰白色、やや厚い | | | | 型成形 |
| 23 | ＳＸb06 | 様相7 | 蓮碗 | 陶器質、緻密、灰白色 | 灰釉、灰白色、やや厚い | | | | 型成形、残存部位全面施釉＝畳付際まで施釉 |
| 24 | 攪乱出土 | | 香炉 | 陶器質、緻密、灰白色 | 灰釉、灰白色、やや厚い | ○ | 「草花文」上絵 | 赤・青・緑色・＋「金」 | |
| 25 | Ⅱ層 | 様相5 | 瓶 | 陶器質、緻密、灰白色 | 灰釉、灰白色、やや厚い | ○ | 「巴文・唐草文」 | 赤・青・緑色(青は盛り上がる) | 碁笥底 |
| 26 | ＳＸb06 | 様相7 | 香炉？ | 陶器質、緻密、灰白色 | 灰釉、灰白色、やや厚い | ○ | | | 二次焼成、突帯を有し、上部は円窓を認める |
| 27 | ＳＸb06 | 様相7 | 脚？ | 陶器質、緻密、灰白色 | 灰釉、灰白色、厚い | ○ | | | 二次焼成 |
| 28 | ＳＫc09 | 共伴遺物なし | 異形器形 | 陶器質、緻密、灰白色 | 灰釉、灰白色、厚い | ○ | | | 二次焼成 |
| 29 | 攪乱出土 | | 香炉？ | 陶器質、緻密、灰白色 | 灰釉、灰白色、厚い | ○ | | | 外面に把手 |
| 30 | 攪乱出土 | | 瓶？ | 陶器質、緻密、灰白色 | 灰釉、灰白色、厚い | ○ | | | 口縁部外面に花弁状の加飾 |
| 31 | ＳＸc13 | 様相6 | 瓶？ | 陶器質、緻密、灰白色 | 灰釉、灰白色、厚い | ○ | 「亀甲繋ぎ文内花文」下絵 | 銹絵(黒色) | |
| 32 | ＳＢb05 | 様相7か | 異形器形 | 陶器質、緻密、灰白色 | 灰釉、灰白色、厚い | ○ | 「紅葉」と上絵 | 赤色 | |
| 33 | Ⅱ層 | 様相5 | 異形器形 | 陶器質、緻密、灰白色 | 灰釉、灰白色、厚い | ○ | | | 一側縁のみ無釉、逆台形の平面形 |
| 34 | ＳＺc13上面堆積土 | 様相9 | 異形器形 | 陶器質、緻密、灰白色 | 灰釉、黄灰白色、やや厚い | ○ | | | |
| 35 | 攪乱出土 | | 碗 | 陶器質、緻密、灰白色 | 灰釉、灰白色、厚い | ○ | | | 高台脇に鎬状の加飾 |
| 36 | 攪乱出土 | | 丸碗 | 陶器質、緻密、灰白色 | 灰釉、灰白色、厚い | ○ | 「宝珠文ほか」上絵 | 赤色 | |
| 37 | ＳＸb06 | 様相7 | 香炉 | 陶器質、緻密、灰白色 | 灰釉、灰白色、やや厚い | ○ | | | |
| 38 | ＳＺc03より北 | 様相7～8 | 香炉 | 陶器質、緻密、灰白色 | 灰釉、灰白色、やや厚い | ○ | | | |
| 39 | ＳＺc13裏込め | 様相9 | 香炉 | 陶器質、緻密、灰白色 | 灰釉、灰白色、厚い | ○ | 「唐草文」上絵 | 青色(盛り上がる) | |
| 40 | ＳＺc13上面堆積土 | 様相9 | 香炉 | 陶器質、緻密、灰白色 | 灰釉、灰白色、やや厚い | ○ | | | |
| 41 | ＳＢｃ02 | 様相5主体 | 手桶水指 | 磁器質、やや密、灰色 | 灰釉、灰白色、厚い | | | 青色絵薬(釉下彩) | 垂れ流し(釉下彩)→灰釉施釉 |
| 42 | 攪乱出土 | | 異形器形 | 陶器質、やや密、黄灰白色 | 灰釉、灰白色、薄い | △ | | | 分割成形→接合、擬宝珠の置物か |
| 43 | ＳＸb06 | 様相7 | 香炉 | 陶器質、やや密、黄灰色 | 灰釉、濁灰黄色、やや厚い | △ | 「草花文」上絵 | 赤・青・緑＋「金」(青は盛り上がる) | |
| 44 | Ⅱ区1.0―0.8m | ～様相3？ | 鉢？ | 陶器質、やや密、黄灰白色 | 灰釉、灰白色、薄い | △ | | | 脚になる可能性もある |
| 45 | 攪乱出土 | | 瓦葺屋根 | 軟質、中、にぶい橙色 | 灰釉ないし透明釉、薄い | ☆ | | 緑色 | 瓦当面のみ釉下彩→外面に灰釉ないし透明釉 |
| 46 | ＳＫb95 | 様相5 | 瓦葺屋根 | 軟質、中、にぶい橙色 | 灰釉ないし透明釉、薄い | ☆ | | 青色 | 瓦当面のみ釉下彩→前面に灰釉ないし透明釉 |

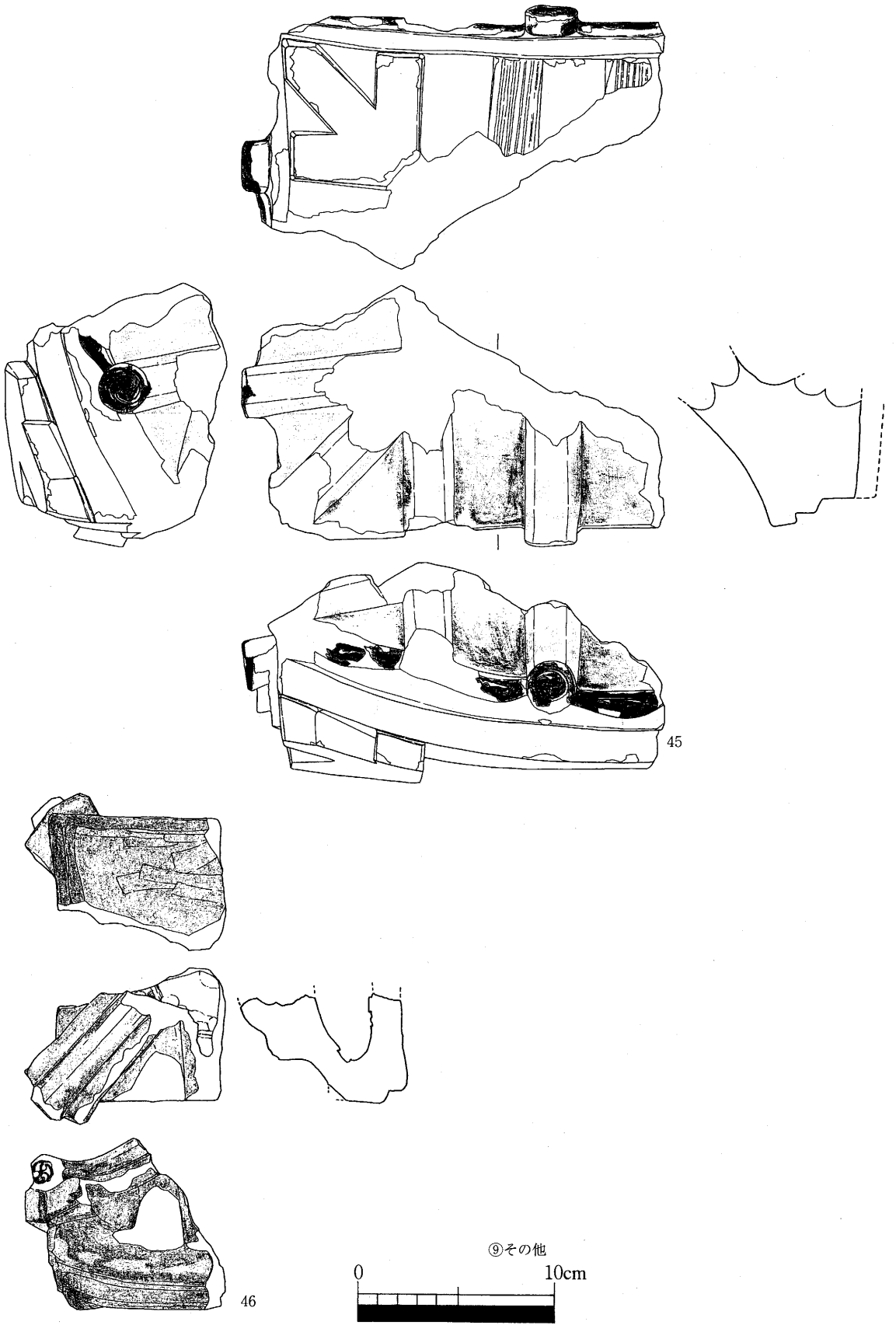
**第13表　高松城跡出土の理兵衛焼の可能性のある一群について**



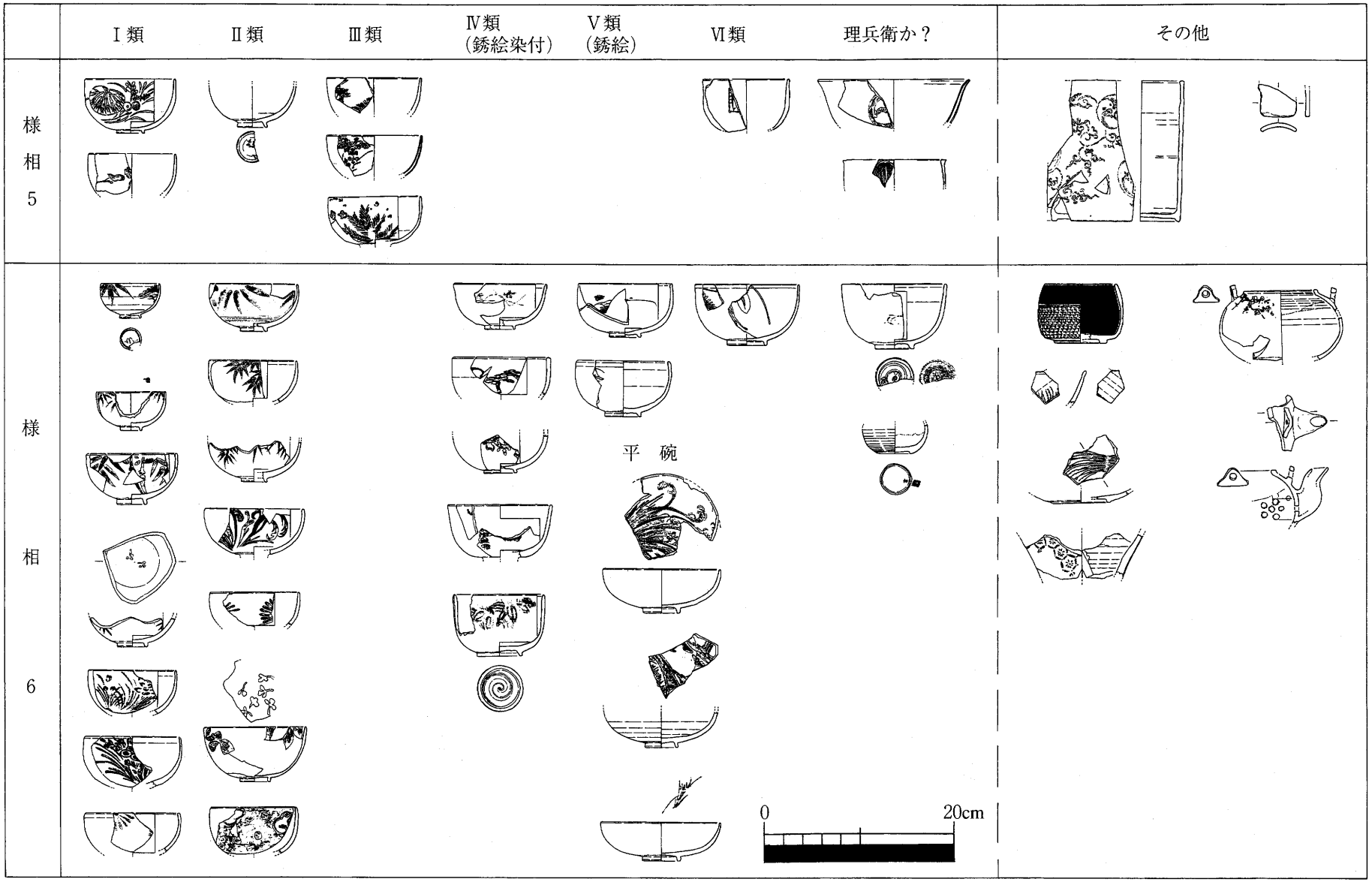

**第248図　理兵衛焼の可能性のある一群 1**



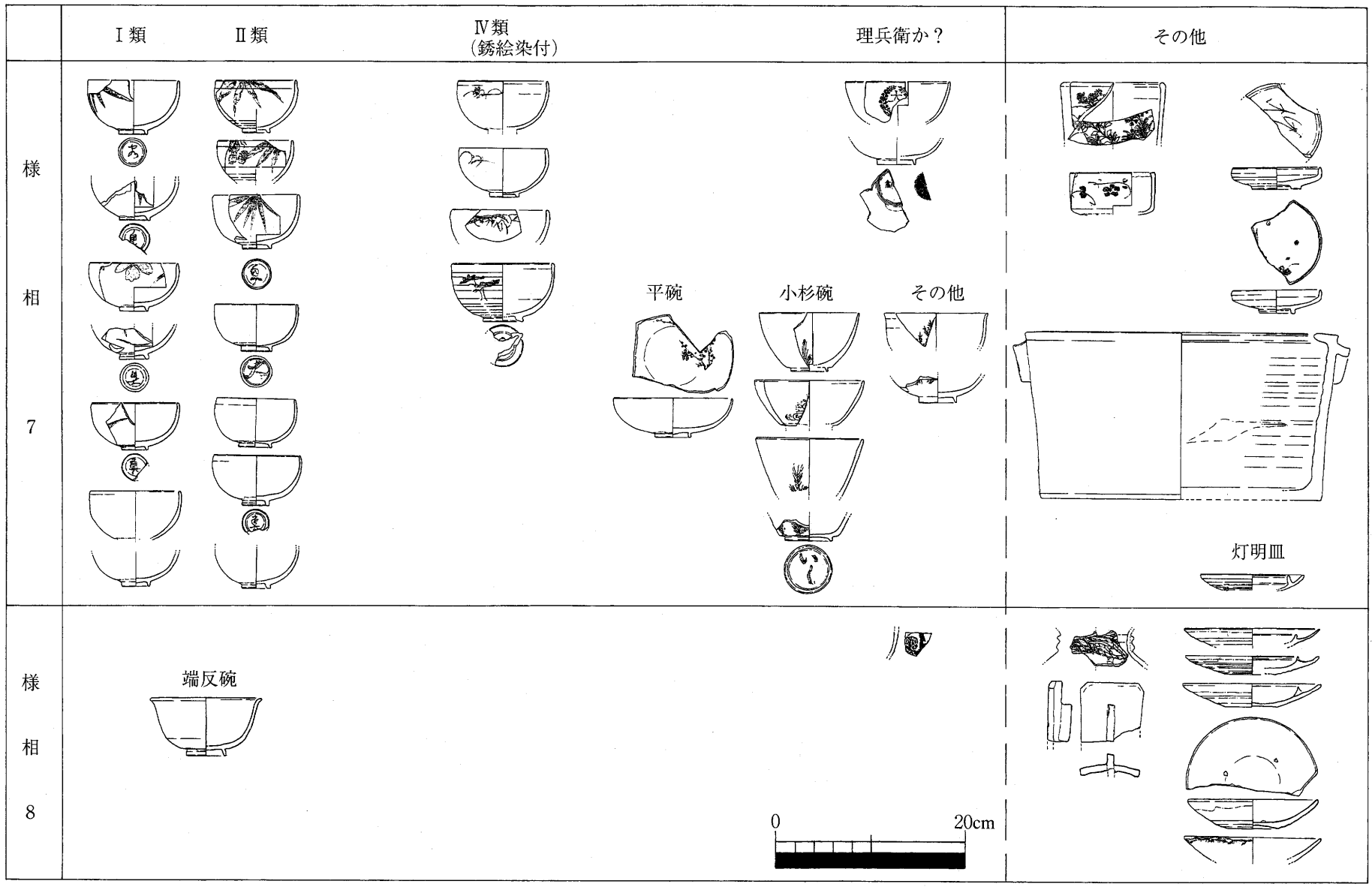

**第249図　理兵衛焼の可能性のある一群 2**



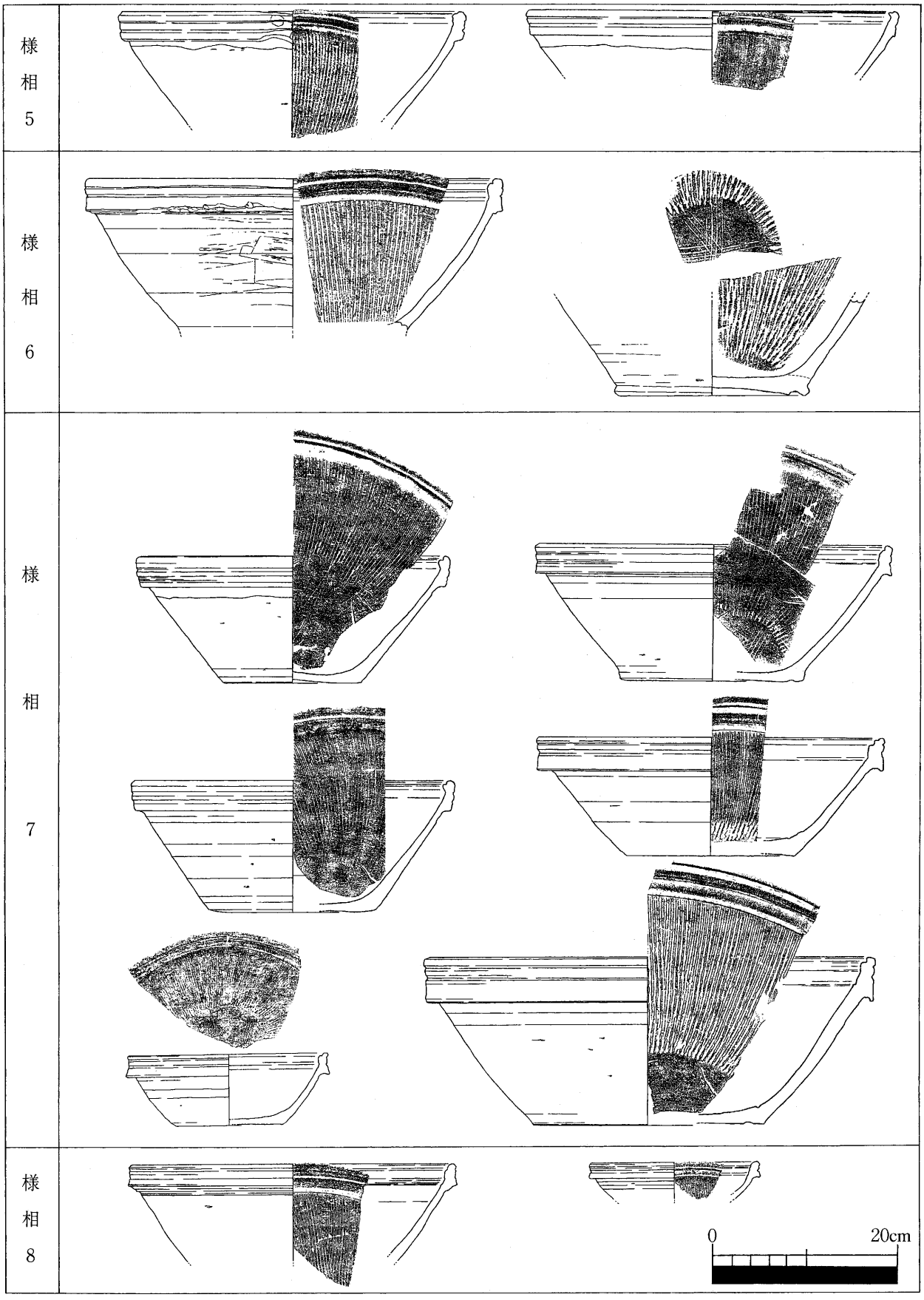

**第250図　理兵衛焼の可能性のある一群 3**




第251図　京・信楽系陶器変遷図1




第252図　京・信楽系陶器変遷図 2




第253図　堺・明石系摺鉢変遷図

## 第５節　京・信楽陶器分析

高松城跡(西の丸町Ｃ地区)から出土した理兵衛焼は、第17表で示す京・信楽番号の１～10である。現在までに県下で出土し報告されている理兵衛焼は、同Ｂ地区出土の９点、高松城東ノ丸跡出土１点、紺屋町遺跡出土１点、合わせて21点で、すべて高松城下町出土である。これに、近年の高松市教育委員会による発掘調査等により、理兵衛焼報告数は若干数を増やしつつある。提示したものは①家紋を描く、②高印(鍋蓋・破風)を施印する、のいずれかの特徴を有し、それを理兵衛焼としての判断基準としているが、そのどちらかの特徴がなければ、京・信楽系陶器と区別することは困難である。実際に、理兵衛焼が京焼の系譜上にあり(工人の移動)、土(材料)までもが、京都ないし信楽よりもたらされたものであれば、理兵衛焼を京・信楽系陶器と区別することは不可能である。しかし理兵衛焼は、地元・富田の陶石を用いて作陶したといわれており、ここに京・信楽系陶器とは一線を画する製品が存在することが窺えよう。そこで、出土した理兵衛焼を含む京・信楽系陶器の観察・分類を行い、理兵衛焼の特徴を明確にした上で、①・②の特徴が残存しないために京・信楽系陶器と分類している理兵衛焼(の可能性があるもの)の抽出を試みた。

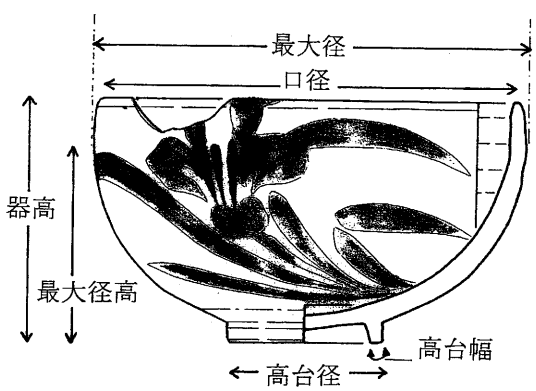
１．分類方法　第17・18・19表参照

今回分類した京・信楽系陶器の出土地点は、高松城跡(西の丸町)Ｃ地区である。一部補完という形で、同Ｂ地区、高松城跡(東ノ丸・歴史博物館地点)出土の数点を加えている。

京・信楽Noの01～228が高松城跡(西の丸町)Ｃ地区出土、数字の前にＢを付加したものが同Ｂ地区、Ｒを付加したものが高松城跡(東ノ丸・歴史博物館地点)出土の遺物である。それぞれの報文番号を(番号)(Ｈ番号)で提示した(Ｂ・Ｒが付くものは京・信楽番号＝報文番号。但し未＝未報告遺物)。以下文中では、京・信楽番号で表現する。

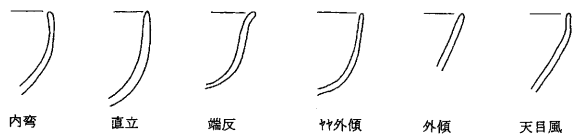
分類項目は21項目である。

**法量**(口径・高台径・高台幅・最大径・最大径高・器高)数字の単位はcm




**第254図　京・信楽系陶器　法量**

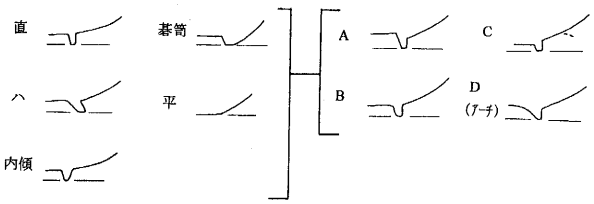
**口縁器形**




**第255図　京・信楽系陶器　口縁形状**

理兵衛焼(①・②の特徴を持つもの)は陶器質では端反・やや外傾(直立気味に立ち上がるが口縁端部が内弯しない)・直立、磁器質では端反、やや外傾でまとまる。但し、紺屋町遺跡資料のように外傾のものも存在する。

**高台形状**




**第256図　京・信楽系陶器　高台形状**

理兵衛焼のなかで高台部まで残存するものはわずかであり、今回の分類では直高台のみ確認したが、高松城東ノ丸跡出土資料からハの字高台を確認している。

**高台観察**　(図版138下位)

低兜巾(Ｈ1906)　○刻(Ｈ808)　中央渦(Ｈ807)　渦高台(Ｈ714)　アーチ(Ｈ2015)

数値は直径、単位はcm

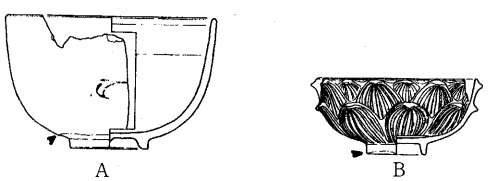
理兵衛焼では渦高台と中央渦を確認した。高台まで残存するものが少数であるため、現段階では絶対的な特徴とは言及できない。

**施釉範囲**

Ａ＝高台際まで施釉

Ｂ＝高台畳付まで施釉

－＝高台付近残存せず、不明




**第257図　京・信楽系陶器　施釉範囲**

Ｂは理兵衛焼では皆無である。全体を通しても少数確認できるのみである。

**釉境赤化**

○＝釉と露胎部境が赤く発色

高台○＝露胎部が赤く発色

高台観察、施釉範囲、釉境赤化等は高台部まで遺存する理兵衛焼が少数であるため、判断基準から省く。

**傷隠し**

○＝有

**文様**

笹・アヤメ・桜・宝珠・注連縄ほか

**筆幅**

色別に最大幅を計測したが、細片も遺存範囲で計測しているため注意が必要となる。

0.5cm以上＝太線　　0.3～0.5cm＝細線

0.3cm以下＝極細

**色**

上絵付けの色

**胎土(質感・色)**　蝕・目測

陶器質・磁器質に分類。

色　(農林水産省農林水産技術会事務局　標準土色帖を使用)

陶・磁－黄白(Ⅰ)　5Y8/2

陶・磁－黄灰(Ⅱ)　2.5Y8/1

磁－灰黄　　(Ⅲ)　2.5Y6/1

陶・磁－灰白(Ⅳ)　5Y7/1、5Y8/1

陶・磁－灰　(Ⅴ)　N7/、N8/

磁－暗灰　　(Ⅵ)　N6/、N5/

他－褐灰　　10YR8/1

残存部位が様々であるため観察箇所も統一していない。

**胎土(透明度)**　実体顕微鏡

汚れを除くため、断面を5㎜程度を研磨し観察。透明度を五段階(低・やや低・中・やや高・高)に分類。他、色が黄白色系以外に見えるものを別に、濁(褐色系)・灰(灰色系)・灰～黒(鉱質)と記載した。

**釉観察**　目測　(図版138右最下位)

A　＝光沢が有り透明度が高い。(H917)

B　＝透明度は高いが光沢が無い。(H1928)

C　＝透明度なし(H215)

C'＝Cのうち、釉色が灰色のもの(H120)

D　＝透明度なく、ねっとりした釉(H1916)

D'＝Dのうち、釉色が灰色のもの(H1924)

**白化粧**　実体顕微鏡

○＝有　　但し、透明の層状に見えるものも含む

**含有鉱物**　胎土中に含まれる粒の量　顕微鏡1㎝四方

少＝2点程度

中＝10点程度

多＝15点程度

シミと判別できないものもあり、観察は不十分

**ケズリ痕**

有＝確認できる

凹凸有り＝ケズリ痕は確認できないが釉の盛り上がりを認める。

備考

腰細などその他観察内容を記載

2．属性比較とその検討

残念ながら、全体像を把握できるものが少なく、共通内容で検討するには限界がある。検討材料としたのは、胎土、釉観察、含有鉱物の3点である。これら属性を組合せ、理兵衛焼の特徴と、同特徴をもつ京・信楽系陶器について検討を行ないたい。

＜胎土－釉調＞　第14表　第258・259図参照

この表では家紋・刻印から理兵衛焼と認識した個体が左上の太枠内に位置するように、各属性の順序を操作している。

理兵衛焼は、陶器質ではⅠ(黄白)・Ⅱ(黄灰)・Ⅴ(灰)の胎土と粘性のある釉(D)に分類され、01・02・B891・B851を確認している。同範囲中に、繊細な文様を描くB573、極細線で色絵を描く44、黒枠の中に色絵を施す146、以上3点の京・信楽系陶器を確認した。磁器質ではⅥ(暗灰)・Ⅴ(灰)・Ⅱ(黄灰)・Ⅲ(灰黄)色の胎土に、B・C(C')・D'の釉という結果が得られ、03・04・05・06・B42・B135・B376・B507・B1064・B1065がこの範囲の理兵衛焼となる。この範囲に入る京・信楽系陶器は、40・49・50・52・53・58・61・62(極細線)、65・77(細線)、102・107・110・116・130・133(太線)、158・161・163(内面文様)、B8・11・12(色絵)、13・14・15・16・17・18・19・20・21・22・23・24・25・26・29・30・31・33・34・35・39・B724・B未4・B758・R1777(異形器形・灰色胎土)である。このうち11・12のように繊細な絵付け・金彩を施すといった京・信楽系陶器ではあまりみられない絵付けパターンのものや、22・24・29・R1777等のように異形器形を呈すものが一定量確認できる。繊細な絵付けでは、極細線の一群も比較的多数この範囲中で確認できたが、宝珠文・注連縄文・根引き松文など京・信楽系陶器にも存在する文様パターンであり、これらを理兵衛焼とみなすか否かは判断が着かない。同様に太線・細線の一群も笹文といった一般的な文様で京・信楽系陶器の中でも特に違和感の有るものではない。これらのことから、理兵衛焼の可能性を窺わせる繊細な文様パターン・異形器形の一群を抽出できたものの、京・信楽系陶器として全く違和感のないものも含まれ、明確な分離には至らなかった。

＜胎土－含有鉱物＞　第15表参照

分類全点数252点中、胎土中に含有鉱物を認めるものは234点にのぼる。含有鉱物の有無については陶土の産地を示す一手段とされるが、理兵衛焼が使用したとされる富田陶石に黒色鉱物が含まれる為、分類の理兵衛焼にどの程度の鉱物が含まれるのかを確認した。陶器質-Ⅰ(黄白)で01・02が多、09が中。同-Ⅱ(黄灰)でB891が少。同-Ⅴ(灰)でB851が少。同-白(但し素焼き製品)10が多。磁器質-Ⅵ(暗灰)B1064が少、B135・06が中、同-Ⅴ(灰)07が少、04が中、同-Ⅱ(黄灰)03・B507が少、同-Ⅲ(灰黄)05が多という結果となった。このように、含有鉱物の量は理兵衛焼内でも一定した属性には分類できなかった。理兵衛焼と同分類に属する京・

信楽系陶器は、陶器質で、B573(色絵)、34(灰色胎土)、95・100・101・131(太線)、44・64・69・70・73・151・153(細線)、47(極細線)、156・165(内面文様)、146・147(異質)、188・195・196・202(錆絵)、171・187(錆絵染付)、・214・217・223・224(小杉)、磁器質で、B8(色絵)、B85・13・14・15・16・19・20・22・23・25・28・29・30・35・36(異形器形・灰色胎土)、102・104・105・106・107・110・116・123・124・126・133(太線)、65(細線)、40・49・50・51・52・53・58・61・62(極細線)、158・163(内面文様)、170・175・178(錆絵染付)、B509・B510(錆絵)、207・211・213・221・222・225・226(小杉)となる。

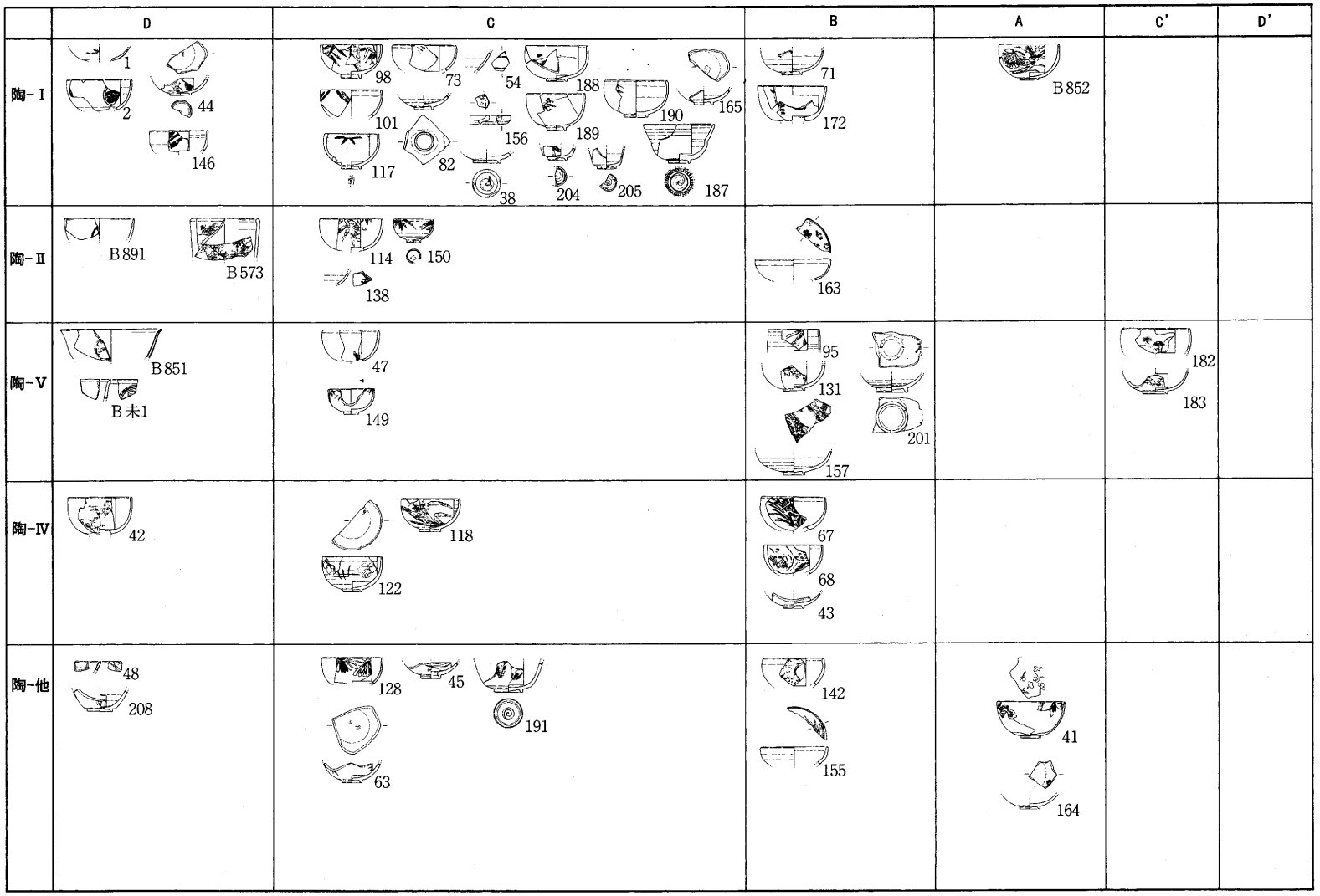
＜釉調－含有鉱物＞　第16表参照

同様に釉調と含有鉱物の関係をみてみたい。釉調B-含有鉱物少で03・07・B507、同-中04、釉調C-含有鉱物多で05、釉調C'-含有鉱物中で06、釉調D-含有鉱物少でB891・B851、同-多01・02、釉調D'-含有鉱物少B1064、同-中B135の理兵衛焼が観察できた。理兵衛焼と同分類に属する京・信楽系陶器は、B573・B8(色絵)、B65・B85・13・14・15・19・22・23・24・25・26・28・29・32・34・35(異形器形・灰色胎土)、95・101・110・111・114・116・119・120・121・125・130・131・133・134・135・137・140(太線)、64・67・68・70・71・74・75・76・78・79・80・83・84・85・88・90・91(細線)、40・42・43・46・49・52・53(極細線)、157・158・163・165・166・167(内面文様)、142・143(塗潰)、145・146(異質)、149・152(小型)、172・174・180・181・187(錆絵染付)、188・196・198・200・201・202・B509・B510(錆絵)、191・206・207・209・211・216・225・226・227(小杉)である。先の〈胎土-釉調〉と同様に、異形器形・繊細な文様を描くといった特徴を持つ理兵衛焼の可能性が考えられる一群と、明らかに京・信楽系陶器に分類される一群が存在する。理兵衛焼同範囲に分類される京・信楽系陶器と、その他の京・信楽系陶器に外見上何ら差異は無く、この中から理兵衛焼の可能性がある京・信楽系陶器を抽出することは困難である。先述の3つの属性関係において、そのすべてが理兵衛焼と同じ特徴を持つ京・信楽系陶器は、B8・13・14・15・19・22・23・25・29・34・35・40・49・52・53・110・116・133・146・158・163・207・211・225・226・B573・B509・B510である。

先に行なわれた第4回四国城下町研究会において、京焼系陶器の産地特定の難しさが再度指摘された。それは、技術・材料が移動することで、京焼と同製品を地方でも生産することが可能であったためである。理兵衛焼の場合、地元富田陶石を使用したことによって、京焼系でありながら、胎土に特異性を持つことで、他の京・信楽系陶器とは容易に区別出来得ると考えたが、実際は理兵衛焼の特徴を持つ①・②の製品からは、明確に分離することは出来なかった。先述〈胎土-釉調〉で理兵衛焼と同範囲に含まれる京・信楽系陶器のうち、一定量を認めた“高印・家紋の確認は出来ないが、異形器形を持つことから理兵衛焼の可能性が考えられる一群”において、「暗灰色ないし灰色の胎土で、粘性を持つ灰色の釉を施釉する」という特徴が得られたものの、この一群を理兵衛焼と言及する結果は導き出せなかった。但しこの一群については、研究会席上で他地域にはみられないとの指摘を受けた。理兵衛焼ついては窯構造と採算制の関係から、藩向けの上物製品以外に一般向けの雑器生産を行なった可能性があり、さらに、土についても、製品の階級によって使い分けがなされたのではないかとの見解を受けた。紀太家に伝世する理兵衛焼や江戸高松藩邸出土の理兵衛焼のうち、「暗灰色胎土・粘性灰色釉薬」の製品が皆無に等しいという理由や、国元高松城下町出土の理兵衛焼が様々な特徴を持つことは、こうした理由による可能性もある。

また、同じように抽出した京・信楽系陶器については、理兵衛焼との関係を属性上で導き出したにすぎない。これらを理兵衛として見なすのかはさらに検討すべき問題である。

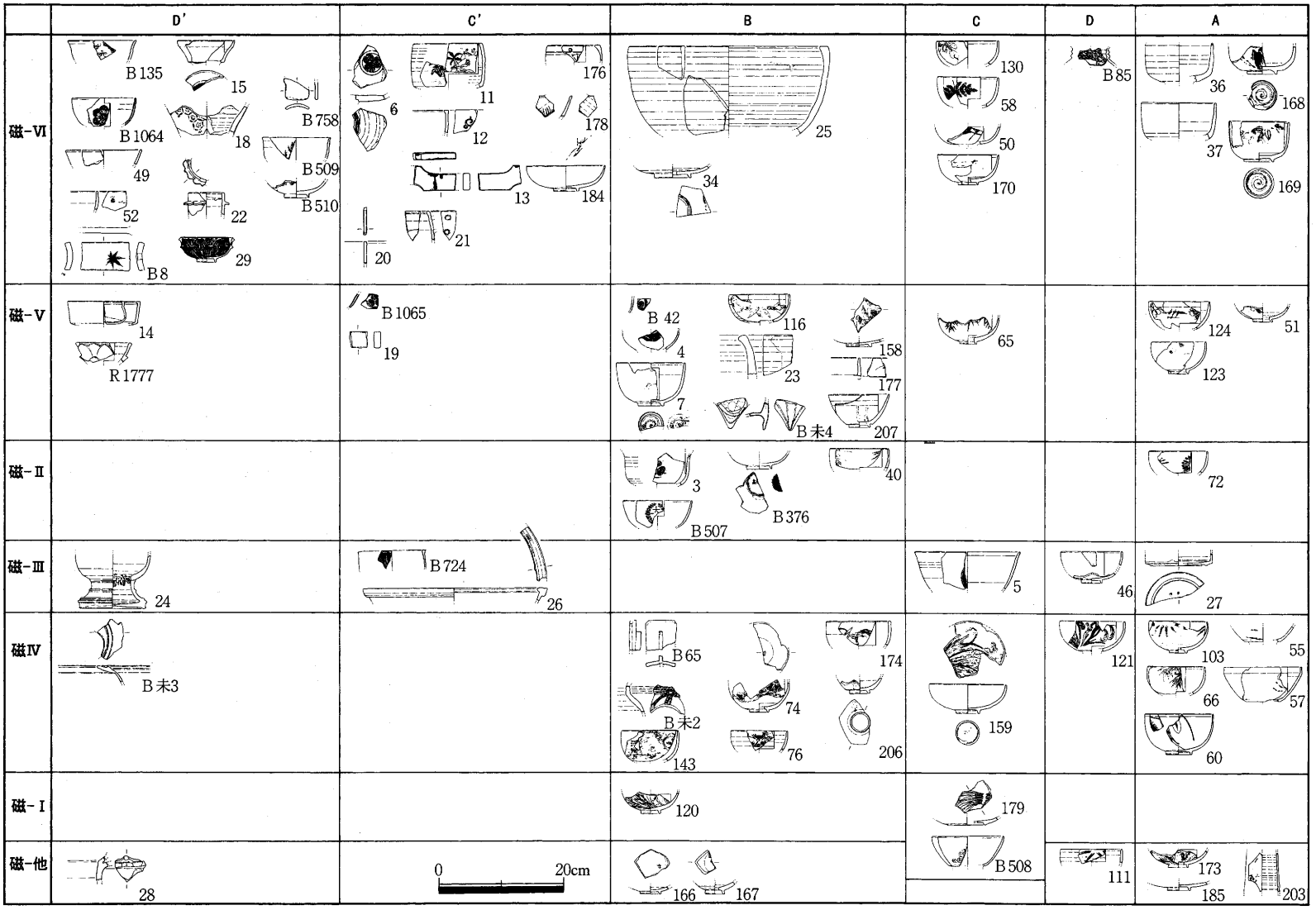
今回の作業進捗方法については、疑問点が多く不十分なものだと思っている。主観性が高い事も問題の一つである。今回、胎土に重点をおいたが、火廻りの状態によって微妙な変化を生む陶磁器において、その質感や色から得た結果が大きな意味を持つとは思えない。むしろ、含有鉱物や釉薬・絵薬の成分観察などを入念に行うべきであろうと思われる。(陶山)




0 20cm

S＝1／10

第258図　京・信楽系陶器属性分類図〈胎土一釉調〉(1/2)




S＝1／10

第259図　京・信楽系陶器属性分類図〈胎土一釉調〉(2/2)

<胎土ー釉調>

色絵

| | D | C | B | A | C' | D' |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 陶-Ⅰ(黄白) | (コ゛44●)(リ1●・2)(イ146) | (フ98・99・100・101・117)(ホ82・69・86・87・73)(コ゛54素)(イ147)(ナ165・156)(リ?灰38) | (ホ64・71・70) | (リ?イロB852) | | |
| 陶-Ⅱ(黄灰) | (リB891)(リ?イロB573) | (フ114・115・136・138・139)(コ150・151・152) | (フ135) | (コ153) | | |
| 陶-Ⅴ(灰) | (リB851(B未1)) | (ホ84)(コ゛47▲)(コ148・149) | (フ95・131)(ホ79)(ナ157●) | | | |
| 陶-Ⅳ(灰白) | (コ゛42) | (フ93・94・97・118・122)(ホ81)(ナ154●) | (ホ68・67)(コ゛43) | (フ96) | | |
| 陶-他 | (コ゛黒褐48) | (フ褐～灰128・褐113)(ホ白63・褐78・88)(コ゛白45)(ナ褐灰156・褐～灰160)(リ?灰(黄白～灰)38 | (ヌ白142)(ナ褐155) | (コ゛白41●▲?)(ナ褐灰164) | | |

| | D' | C' | B | C | D | A |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 磁-Ⅵ(暗灰) | (コ゛49・52・53)(リB135・B1064) (リ?イロB8)(リ?異15・18・22・29・B758)(リ?灰31・39) | (リ6)(リ?イロ11●・12)(リ?異13・16・17・20・21)(リ?灰33) | (リ?灰25・34・35▲) | (フ130)(コ゛58●・50) | (リ? 異B85) | (フ129)(リ?灰36・37) |
| 磁-Ⅴ(灰) | (リ?異14・R1777) | (コ゛62)(リB1065▲)(リ?異19)(リ?灰30▲) | (フ133・110・116)(ホ77)(ナ158●・161)(リ4・B42▲・7)(リ?異23・B未4)(コ゛40●)(ナ163●▲)(リ3・B376・B507) | (フ102・107)(ホ65)(コ゛61) | | (フ104・105・106・123・124・126)(コ゛51) |
| 磁-Ⅱ(黄灰) | | | | | | (ホ72) |
| 磁-Ⅲ(灰黄) | (リ?異24) | (リ?異26・B724) | | (リ5●▲) | (コ゛46●) | (リ?異27) |
| 磁-Ⅳ(灰白) | B未3 | | (フ125 140・119・141)(ホ83・90・92・74●・75●・76●)(イ145▲)(ヌ143)(ナ162)(リ?異B65・B未2)(リ?灰32▲?) | (フ109)(コ゛59)(ナ159) | (フ121) | ″(フ103・132・127)(ホ66▲・89)(コ゛55(56同)・60・57●)・ |
| 磁-Ⅰ(黄白) | | | (フ137・120)(ホ85) | (フ112) | (ホ80) | |
| 磁-他 | (リ?異不明28) | | (ホ白91)(ナ白166・167) | (フ褐灰108▲) | (フ褐灰111・134) | (イ白144) |

●＝金彩　▲＝腰細

フ=色絵太線　ホ=色絵細線　コ゛=色絵極細　イ=色絵異質　ヌ=色絵塗潰　ナ=色絵内面文様　コ=小型

リ=理兵衛焼　リ?イロ=理兵衛焼?色絵　リ?異=理兵衛焼?異形器形　リ?灰=灰色胎土

錆絵・錆絵染付

| | D | C | B | A | C' | D' |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 陶-Ⅰ(黄白) | (サ小223) | (ソ171・187)(サ188・189・190・196・195・202)(サ小204・214・217・219・224・205) | (ソ172) | (サ小215) | | |
| 陶-Ⅱ(黄灰) | | (ソ181) | | | | |
| 陶-Ⅴ(灰) | | | (サ201) | | (ソ182・183) | |
| 陶-Ⅳ(灰白) | | | | | | |
| 陶-他 | (サ208) | (サ小191) | | (サ194) | | |

| | D' | C' | B | C | D | A |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 磁-Ⅵ(暗灰) | (サB509・B510) | (ソ176・178・184) | | (ソ170・175・180) | | (ソ168・169) |
| 磁-Ⅴ(灰) | | | (ソ7高・177)(サ小207・211・225・226) | (サ小209・212・213・221・222) | | (サ193▲) |
| 磁-Ⅱ(黄灰) | | | (サ200) | | | |
| 磁-Ⅲ(灰黄) | | | | | | |
| 磁-Ⅳ(灰白) | | | (ソ174)(サ小206・216・220・227) | | | (サ192)(サ小210) |
| 磁-Ⅰ(黄白) | | | (サ小218)(サ198) | (ソ179・B508) | | |
| 磁-他 | | | | (サ小白228) | | (ソ173・185)(サ203・199) |

ソ=錆絵染付　サ=錆絵　サ小=錆絵若松文・小杉形

第14表　<胎土ー釉調>属性分類

<胎土−含有鉱物>

色絵

| | 多 | 中 | 少 | ― |
|---|---|---|---|---|
| 陶−Ⅰ(黄白) | (リ01・02)(フ101)(異146)(ナ165) | (リ素09)(フ100)(ホ64・69・70・73)(コ゛44)(異147)(ナ156) | (リ?イロB852)(コ゛54)(ホ71・82・86・87)(フ98・99) | (フ117) |
| 陶−Ⅱ(黄灰) | (フ114)(コ152) | (リ?イロB2348)(フ115・135・136・138・139)(コ150) | (リB891)(リ?イロB573)(コ153・151) | |
| 陶−Ⅴ(灰) | (コ149)(ホ84) | (リ?イロB637)(コ148)(ホ79)(ナ157) | (リB851)(リ?灰34)(フ95・131)(コ゛47) | |
| 陶−Ⅳ(灰白) | | (ナ154) | (フ93・94・96・97・118・122)(ホ67・68・81)(コ゛42・43・47) | |
| 陶−他 | (褐)ホ78・88(褐灰)ナ155・164(白・素)リ10 | 中〜多(黄白〜灰)リ?灰38(褐)ナ160(白)コ゛41 | (褐)フ113(褐灰〜灰)フ128(白)ホ63・コ゛45・ヌ142 | (黒褐)コ゛48 |

| | 少 | 中 | 多 | ― |
|---|---|---|---|---|
| 磁−Ⅵ(暗灰) | (リB1064)(リ?B85・15・16・20)(リ゛50)(リ58灰 )(フ102・105・106・110・116・123・124・126・133)(ホ65)(コ゛51・62) | (リ06・08・B135)(リ?イロB8)(リ?13・22・25・29)(リ?灰35・36)(コ゛49・52・53) | (リ?イロ11・12・17・18・21)(リ?灰31・33・37・39)(フ129・130) | (リ?B758) |
| 磁−Ⅴ(灰) | | (リ04)(リ?14・19・23)(フ104・107)(コ゛61)(ナ158) | (リ?R1777)(ナ161) | (リB42・B1065)(ホ77) |
| 磁−Ⅱ(黄灰) | (リ03・B507・)(リ?28)(コ゛40)(ナ163) | | | (リB376)(ホ72) |
| 磁−Ⅲ(灰黄) | (リ?27・B724)(コ゛46) )(リ 灰32)(フ103・109・119・121・125・127・132)(ホ66・75・76)(コ゛55・57・60)(ヌ143) | (リ?24・26) | (リ05) | |
| 磁−Ⅳ(灰白) | (ナ159) | (フ140)(ホ83・89・90)(コ゛56・59)(イ145)(ナ74) △(フ141) | (ナ162) | (リ?B未2)(ホ92) |
| 磁−Ⅰ(黄白) | (フ112・120・137)(ホ80・85) | | | |
| 磁−他 | (褐灰)フ108・111・134(白)ホ91・ナ166・167 | (白)イ144 | | |

フ=色絵太線　ホ=色絵細線　コ゛=色絵極細　イ=色絵異質　ヌ=色絵塗潰　ナ=色絵内面文様　コ=小型
リ=理兵衛焼　リ?イロ=理兵衛焼?色絵　リ?異=理兵衛焼?異形器形　リ?灰=灰色胎土

錆絵・錆絵染付

| | 多 | 中 | 少 | ― |
|---|---|---|---|---|
| 陶−Ⅰ(黄白) | (ソ187)(サ188・196・202) | (ソ171)(サ195)(ソ小214・217・223・224) | (ソ172)(サ189・190)(サ小204・215) | (サ205)(サ小219) |
| 陶−Ⅱ(黄灰) | (ソ181) | | | |
| 陶−Ⅴ(灰) | (ソ182・183) | (サ201) | | |
| 陶−Ⅳ(灰白) | | | | |
| 陶−他 | (褐)ソ186・サ小191 | (褐灰)サ194(白)サ小208 | | |

| | 少 | 中 | 多 | ― |
|---|---|---|---|---|
| 磁−Ⅵ(暗灰) | (ソ170・178) | (サB509・B510)(ソ175) | (ソ168・169・176・180・184) | |
| 磁−Ⅴ(灰) | (サ小207・211・213) | (サ小221・222・225・226) | (ソ177)(サ193)(サ小209) | (サ小212) |
| 磁−Ⅱ(黄灰) | | 磁?(サ200) | | |
| 磁−Ⅲ(灰黄) | | | | |
| 磁−Ⅳ(灰白) | (ソ174)(サ192・197)(サ小227) | (サ小206・210・216) | (サ小220) | |
| 磁−Ⅰ(黄白) | (サB508) | (ソ179)(サナ198) | (サ小218) | |
| 磁−他 | (白)サ203・サ小228 | (白)サナ199 | (白)ソ173・185 | |

ソ=錆絵染付　サ=錆絵　サ小=錆絵若松文・小杉形

第15表　<胎土−含有鉱物>属性分類

<釉調ー含有鉱物>

色絵

| 含有鉱物 / 釉調 | 少 | 中 | 多 | ー |
|---|---|---|---|---|
| A | (リ?イロB852)(リ異27)(フ96・103・105・106・123・124・126・127・132)(ホ66)(コ゛51・55・57・60)(コ153) | (リ灰36)(フ104)(ホ89)(コ゛41・56)(イ144) | (リ灰37)(フ129)(ナ164) | (ホ72) |
| B | (リ3・7・B507)(リ異B65)(リ灰34・32)(フ95・131・133・110・116・119・120・125・137)(ホ67・68・71・75・76・85・91)(コ゛40・43)(ヌ142・143)(ナ163・166・167) | (リ4)(リ灰25・35)(リ?異23)(フ135・140)(ホ64・70・74・79・83・90)(ナ157・158)(イ145) | (ナ155・161・162) | (リB42・B376)(リ?異B未2・B未4) |
| C | (フ93・94・97・98・99・102・108・109・112・113・118・122・128)(ホ63・65・81・82・86・87)(コ゛45・47・50・58)(ナ159)(コ151) | (フ100・107・115・136・138・139)(ホ69・73)(コ゛59・61)(イ147)(ナ154・156・160)(コ148・150) | (リ5)(フ101・114・130)(ホ78・84・88)(ナ165)(コ149・152) | (フ117) |
| C' | (リ異16・20・B724)(リ灰30)(コ゛62) | (リ06)(リ異13・19・26) | (リ?イロ11・12)(リ?異17・21)(リ?灰33) | (リB1065) |
| D | (リB891・リB851(B未1))(リ?イロB573)(リ?異B85)(コ゛42・46)(ホ80)(フ121・111・134) | (コ゛44) | (リ1・2)(イ146) | (コ゛黒褐48) |
| D' | (リB1064)(リ?異15・28) | (リB135)(リ?イロB8)(リ?異14・22・24・29)(コ゛49・52・53) | (リ?異18・R1777)(リ?灰31・39 | (リ?異B758・B未3) |

フ=色絵太線　ホ=色絵細線　コ゛=色絵極細　イ=色絵異質　ヌ=色絵塗潰　ナ=色絵内面文様

リ=理兵衛焼　リ?イロ=理兵衛焼?色絵　リ?異=理兵衛焼?異形器形　リ?灰=灰色胎土

錆絵・錆絵染付

| 少 | 中 | 多 |
|---|---|---|
| (ソ215)(サ192・203) | (サ194・199)(サ小210) | (ソ168・169・173・185)(サ193) |
| (ソ高7・172・174)(サ小207・211・227) | (サ小206・216・225・226)(サ198・200・201) | (ソ177(サ220(サ小218 |
| (ソ170・B508(サ189・190・197)(サ小204・213・228) | (ソ171・175・179)(サ小214・217・221・222・224)(サ195) | (ソ180・181・187)(サ188・196・202)(サ小191・209) |
| (ソ178) | | (ソ176・182・183・184) |
| | (サ小223)(サ208) | |
| | (サB509・B510) | |

ソ=錆絵染付　サ=錆絵　サ小=錆絵若松文・小杉形

第16表　<釉調ー含有鉱物>属性分類

| | 京僅No | 報文番号 | 注記番号 | 遺構名 | 口径 | 高台径 | 高台幅 | 最大径 | 最大径高 | 器高 | 口縁器形 | 高台形状 | 高台観察 | 施釉範囲 | 釉境赤化 | 傷隠し | 文様 | 筆幅 | 色絵 | 胎土(質感・色) | 胎土(透明度) | 釉観察 | 白化粧 | 含有鉱物 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 理兵衛焼(家紋) | 01 | 262 | KTCW11BD0003 | Ⅱ区SDc07攪乱部 | — | — | | | | | | | | A | | | 三葉葵 | 赤0.1(緑)0.2金0.1 | 赤・金 | 陶・黄白(黄味強) | 低 | D | | 多(粒細) | |
| 理兵衛焼(家紋) | 02 | 1916 | KTCW11B0066・0071 | Ⅱ区攪乱 | 10.1 | | | 10.2 | | | 直立 | | | — | | | 三葉葵 | ?0.15(緑)0.2金0.1 | ?・金 | 陶・黄白(黄味強) | ヤヤ低 | D | | 多 | |
| 理兵衛焼(家紋) | 03 | 1928 | KTCW11D0128 | Ⅷ区攪乱c72 | — | — | | | | | 端反 | | | — | | | 三葉葵 | (緑)0.3 | 赤(オレンジ気味) | 磁・黄灰 | ヤヤ高 | B | | 少 | |
| 理兵衛焼(家紋) | 04 | 556 | KTCW11IZ0043 | Ⅴ区SXc09外堀 | — | | | | | | | | | — | | | 上藤 | 青or黒?0.1～0.4 | 青or黒 | 磁・灰 | 高 | B | | 中 | |
| 理兵衛焼(家紋) | 05 | 215 | KTCW11BD0007 | Ⅱ区SDc09埋土 | 16.6 | | | 17 | | | 端反 | | | — | | | (家紋) | 赤(緑)0.3金0.1 | 赤・金 | 磁・灰黄 | ヤヤ高 | C | | 多 | 腰ヤヤ細? |
| 理兵衛焼(家紋) | 06 | 120 | KTCW11B0019(皿?) | Ⅱ区掘り下げL=1.2～1.1m(攪乱含む) | — | — | | | | | | | | | | | 三葉葵 | ?(緑)0.3(内)0.1 | ? | 磁・暗灰 | 中 | C' | | 中 | 理兵衛焼か? |
| 理兵衛焼(家紋) | B42 | B42 | KTCW8CD0001 | 高松城跡(西の丸町)B地区 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 三葉葵 | 青0.15 | 青? | 磁・灰 | ヤヤ高 | B | — | — | |
| 理兵衛焼(家紋) | B891 | B891 | KTCW7D0140 | 高松城跡(西の丸町)B地区 | | — | — | — | — | — | ヤヤ外傾 | — | — | — | | | 三葉葵 | 青0.4 | 青 | 陶・黄灰 | 低 | D | | 少 | |
| 理兵衛焼(家紋) | B851 | B851 | KTCW8C0029 | 高松城跡(西の丸町)B地区 | | — | — | — | — | — | 端反 | — | — | — | | | 三葉葵 | 赤0.2金0.1 | 赤・金 | 陶・灰 | 低 | D | — | 少 | |
| 理兵衛焼(家紋) | B未1 | B未1 | KTCW8A0142 | 高松城跡(西の丸町)B地区 | | — | — | — | — | — | 端反 | — | — | — | | | 三葉葵 | 青0.15金0.1 | 青・金 | 陶・灰 | 低 | D | | | B851と同一か? |
| 理兵衛焼(家紋) | B1065 | B1065 | KTCW8A0114 | 高松城跡(西の丸町)B地区 | | — | — | — | — | — | | — | — | — | | | 三葉葵 | 赤0.1線?0.1 | 赤・緑 | 磁・灰 | ヤヤ高 | C' | | | 腰細 |
| 理兵衛焼(家紋) | B1064 | B1064 | KTCW70220 | 高松城跡(西の丸町)B地区 | | — | — | — | — | — | ヤヤ外傾 | — | — | — | | | 六葉葵 | 緑 | 緑 | 磁・暗灰 | ヤヤ高(褐色ザラメ) | D' | | 少 | 理兵衛か?11似? |
| 理兵衛焼(家紋) | B507 | B507 | KTCW8CX0024 | 高松城跡(西の丸町)B地区 | | — | — | — | — | — | ヤヤ外傾 | — | — | — | | | 上藤に大 | ?0.2 | 元は赤?→茶色 | 磁・黄灰 | ヤヤ高 | B | | 少 | 被熱? |
| 理兵衛焼(家紋) | B135 | B135 | KTCW8AX0221 | 高松城跡(西の丸町)B地区 | | — | — | — | — | — | 端反 | — | — | — | — | — | 上藤に大 | 青0.2(釉下彩?) | 青(釉下彩?) | 磁・暗灰 | ヤヤ高 | D' | — | 中 | |
| 銹絵染付(高印) | 07 | 712 | KTCW11AK0019 | Ⅵ区SXc13 | 10.8 | 4 | 0.3 | 11.4 | 6.6 | 6.9 | ヤヤ外傾 | 直D ヤヤ面 | 渦高台・'高'印 | A | ○ | | 舟?草花? | 銹絵0.1 | 銹絵染付 | 磁・灰 | ヤヤ高・胎土ヤヤ灰色味 | B | ○ | 少 | |
| 理兵衛焼(高印) | 08 | 1939 | KTCW11E0111 | Ⅸ区攪乱 | | 3.6 | | | | | | 平 | | — | | | | | | 磁・暗灰 | ヤヤ高・胎土灰～黒(鉱質) | (鉄) | | 中 | '高'印　茶入れ? |
| 理兵衛焼(高印) | 09 | 811 | KTCW11AK0027 | Ⅵ区SXc14 | | 3.3 | | | | | | 碁笥底 | | — | | | | | | 陶・黄白 | ヤヤ低 | (素) | | 中 | '高'印　瓶? |
| 理兵衛焼(高印) | 10 | 557 | KTCW11IZ0046 | Ⅴ区SXc09外堀 | | 5 | 0.3 | | | | | 直B面 | | 素焼き | | | | | | 陶・白 | 低 | (素) | | 多 | '高'印　皿　内面文字 |
| 理兵衛(高印) | B376 | B376 | KTCW8DK0027 | 高松城跡(西の丸町)B地区 | — | | 0.15 | — | — | — | — | 直C一 | 中央渦? 破風高印 | A | — | — | — | — | — | 磁・黄灰 | ヤヤ高 | B | — | — | |
| 理兵衛?(色絵) | 11 | 1933 | KTCW11D0142・0145・0150 | Ⅷ区攪乱 | — | | | | | | 内傾 | | | — | | | 花 | 赤(緑)0.1 | 緑・赤・青・金 | 磁・暗灰 | ヤヤ高 | C' | | 多 | |
| 理兵衛?(色絵) | 12 | 475 | KTCW11IZ0065 | Ⅳ区SZc13解体中裏込め | | | | | | | 直立 | | | — | | | 唐草 | 0.2? | ? | 磁・暗灰 | ヤヤ高 | C' | ○ | 多 | |
| 理兵衛?(色絵) | B8 | B8 | KTCW8CB0009 | 高松城跡(西の丸町)B地区 | 10.7 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 紅葉 | 赤0.1? | 赤 | 磁・暗灰 | ヤヤ高 | D' | — | 中 | 板状製品 |
| 理兵衛?(葵色絵) | B852 | B852 | KTCW8C0030 | 高松城跡(西の丸町)B地区 | | | | | | | 直立 | ハB ヤヤ面 | 中央0.5○・低兜巾 | A | | | 葵・アヤメ | 緑?0.35・赤0.1 | 赤・緑 | 陶・(黄白) | 低 | A | | 少 | |
| 理兵衛?(色絵) | B2348 | B2348 | KTCW70048・70218 | 高松城跡(西の丸町)B地区 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 花唐草 | 青0.3黄0.15白0.15 | 青・黄・白 | 陶・黄灰 | 低 | — | — | 中 | |
| 理兵衛?(色絵) | B637 | B637 | KTCW70006・70044 | 高松城跡(西の丸町)B地区 | | | | | | | | | | | ○ | | 唐草 | 赤0.15青0.2 | 赤・青 | 陶・灰 | | マメツ | — | 中 | 瓶 |
| 理兵衛?(色絵) | B573 | B573 | | 高松城跡(西の丸町)B地区 | | | | | | | 直立 | | | — | — | — | 草花 | 緑0.15赤0.1青0.1金0.1 | 緑・赤・青・金 | 陶・黄灰 | ヤヤ高 | D | | 少 | 香炉 |
| 理兵衛焼か? | 13 | 244 | KTCW11B0014 | Ⅱ区SDc09敷石下　灰色粘質土(SBc02に該当) | | | | | | | | | | | | | | 青(釉下彩) | 青(釉下彩) | 磁・暗灰 | ヤヤ高(胎土8と似) | C' | | 中 | 手桶水差　青釉垂下 |
| 理兵衛焼か? | 14 | 407 | KTCW11I0004 | Ⅳ区SZc03より北　L=0.9～0.2m機械掘削中 | 10.6 | | | | | | (外反) | | | | | | | | | 磁・灰 | ヤヤ高(胎土8と似) | D' | ○ | 中 | 香炉? |
| 理兵衛焼か? | 15 | 1917 | KTCW11B0057 | — | 9.0 | | | | | | 外傾→直立 | | | | | | | | | 磁・暗灰 | ヤヤ高 | D' | ○ | 少 | 底部に鉄釉 |
| 理兵衛焼か? | 16 | 1953 | KTCW11I0093 | Ⅳ区SZc13上面堆積土L=0.8～SZc13石材 | | | | | | | | | | | | | | | | 磁・暗灰 | ヤヤ高 | C' | ○ | 少 | 特殊 |
| 理兵衛焼か? | 17 | 1954 | KTCW11AK0016 | Ⅵ区SXc13 | | | | | | | | | | | | | | | | 磁・暗灰 | ヤヤ高 | C' | ○ | 多 | 柄 |
| 理兵衛焼か? | 18 | 738 | KTCW11AK0021・K0016 | Ⅵ区SXc13 | — | | | | | | | | | | | | | | | 磁・暗灰 | ヤヤ高 | D' | ○ | 多 | ? |
| 理兵衛焼か? | 19 | 495 | KTCW11I0120 | Ⅳ区SZc13上面堆積土0.8～SZc13 | | | | | | | | | | | | | | | | 磁・灰(黄味) | ヤヤ低 | C' | ○ | 中 | 柄? |
| 理兵衛焼か? | 20 | 496 | KTCW11I0094 | Ⅳ区SZc13上面堆積土0.8m～SZc13 | | | | | | | | | | | | | | | | 磁・暗灰 | ヤヤ高 | C' | | 少 | 特殊 |
| 理兵衛焼か? | 21 | 1931 | KTCW11D0140 | Ⅶ区攪乱 | | | | | | | (内傾) | | | | | | | | | 磁・暗灰 | ヤヤ高 | C' | | 多 | 把手付き? |
| 理兵衛焼か? | 22 | 1930 | KTCW11D0152 | Ⅷ区攪乱 | 5.4 | | | | | | 直立 | | | | | | | | | 磁・暗灰 | ヤヤ高 | D' | ○ | 中 | 特殊瓶? |
| 理兵衛焼か? | 23 | 1926 | KTCW11D0063 | Ⅷ区攪乱 | — | | | | | | (内傾) | | | | | | | | | 磁・灰 | ヤヤ低 | B | | 中 | 鉢? |
| 理兵衛焼か? | 24 | 1932 | KTCW11D0144・0142・0148 | Ⅶ区攪乱 | | | | | | | | | | | | | | | | 磁・灰黄 | ヤヤ低 | D' | 無? | 中 | 特殊　脚付の何か? |
| 理兵衛焼か? | 25 | 1934 | KTCW11D0137・0147 | Ⅶ区北壁Ⅰ層・攪乱 | 31.8 | | | | | | 直立 | | | | | | | | | 磁・暗灰 | ヤヤ高(胎土8と似) | B | ○ | 中 | 鉢? |
| 理兵衛焼か? | 26 | 153 | KTCW11B0025 | Ⅱ区掘り下げL=1.0～0.8m(攪乱含む) | 29.4 | | | | | | 特殊 | | | | | | | | | 磁・灰黄 | ヤヤ低 | C' | | 中 | 釉透明度低 特殊(口縁ではなく脚部かも) |
| 理兵衛焼か? | 27 | 525 | KTCW11I0060 | Ⅴ区SXc09東側整地層 | | | | | | | | | | | | | | | | 磁・灰黄 | 高 | A | | 少 | 釉透明度ヤヤ低　瓶? |
| 理兵衛焼か? | 28 | 356 | KTCW11BK0001 | Ⅲ区SKc09 | | | | | | | | | | | | | | | | 磁・ | ヤヤ高 | D' | | 少 | 特殊 |
| 理兵衛焼か? | 29 | 209 | KTCW11B0157・BD0021 | Ⅱ区SDc08周辺掘り下げ | 8.4 | | | | | | 外傾 | 直B面 | | B | ○? | | | | | 磁・暗灰 | ヤヤ高(胎土8と似) | D' | | 中 | 外面蓮弁　腰細　(外見11似) |
| 灰色胎土 | 30 | 1955 | KTCW11C0040 | Ⅰ区攪乱 | — | | | | | | ヤヤ外傾? | | | — | | | | | | 磁・灰 | ヤヤ低 | C' | ○? | 少 | 口縁部ヤヤ肥大→腰細 |
| 灰色胎土 | 31 | 1956 | KTCW11A0057 | Ⅵ区SXc84より東掘り下げ中 | 11? | | | | | | 外傾? | | | — | | | | | | 磁・暗灰 | ヤヤ高(胎土8と似) | D' | ○ | 多 | |
| 灰色胎土 | 32 | 1957 | KTCW11AK0018 | Ⅵ区SXc13 | | | | | | | 直立 | | | — | | | | | | 磁・灰白 | ヤヤ高 | B | | 少 | 口縁部ヤヤ肥大→腰細?　肥前? |
| 灰色胎土 | 33 | 1958 | KTCW11DP0036 | Ⅷ区SPc316 | | | | | | | 外傾 | | | — | | | | | | 磁・暗灰 | ヤヤ高(胎土8と似) | C' | ○ | 多 | ←釉の透明度低くて見えにくい |
| 灰色胎土 | 34 | 1342 | KTCW11DX0143・P0036 | Ⅷ区SXc20 | — | 5.2 | 0.25 | — | — | — | — | ハB面 | | B | | | — | — | — | 陶・灰/磁・暗灰 | ヤヤ低(灰)/ヤヤ高 | B | ○ | 少 | |
| 灰色胎土 | 35 | 1936 | KTCW11C0040 | Ⅰ区攪乱 | 9.6 | | | | | | 直立 | | | A | | | | | | 磁・暗灰 | 中間 | B | ○ | 中 | 腰ヤヤ細 |
| 灰色胎土 | 36 | 1001 | KTCW11DK0030 | Ⅶ区SKc23 | | | | | | | | | | — | | | | | | 磁・暗灰 | 中間 | A | ○ | 中 | |
| 灰色胎土 | 37 | 1011 | KTCW11DK0034 | Ⅶ区SKc24 | 11.7 | | | | | | 直立 | | | — | | | | | | 磁・暗灰 | ヤヤ高 | A | ○ | 多 | |
| 灰色胎土 | 38 | 809 | KTCW11AK0022・K0025 | Ⅵ区SXc14 | — | 4.2 | 0.35～0.4 | | | | | 直D面 | 渦高台・墨書 | A | | | | | | 陶・黄白～灰 | ヤヤ低・ヤヤ高(胎土濁) | C | ○ | 中・多 | 胎土8似(但し焼きの弱い黄白色部分は似ていない) |
| 灰色胎土 | 39 | 1944 | KTCW11I0039 | Ⅳ区遺構面精査中L＝1.1～0.9m | | 4.6 | 0.15 | | | | | 内A面 | ? | A | ○ | | | | | 磁・暗灰 | ヤヤ高・胎土灰色 | D' | ? | 多 | 理兵衛か?胎土に似 |
| 理兵衛焼か? | R1777 | R1777 | KTCX0021(歴博) | 高松城跡(東の丸・歴史博物館地点) | 8.2 | | | | | | 外傾 | | | — | | | | | | 磁・灰 | ヤヤ高 | D' | | 多 | 外面蓮弁 |
| 理兵衛焼か? | B未2 | B未2 | KTCW8AD0008 | 高松城跡(西の丸町)B地区 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 青(釉下彩) | 青(釉下彩) | 磁・灰白(黄味) | ヤヤ高 | B | — | — | 袋物 |
| 理兵衛焼か? | B未4 | B未4 | KTCW8CX0011 | 高松城跡(西の丸町)B地区 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 磁・灰 | ヤヤ低 | B | — | — | |
| 理兵衛焼か? | B未3 | B未3 | KTCW8CX0025 | 高松城跡(西の丸町)B地区 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 磁・灰白 | 低 | D' | — | — | |
| 理兵衛焼か? | B65 | B65 | KTCW8CD0007 | 高松城跡(西の丸町)B地区 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 磁・灰白 | ヤヤ高 | B | — | 少 | |
| 理兵衛焼か? | B85 | B85 | KTCW7D0008・D0050 | 高松城跡(西の丸町)B地区 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 青(釉下彩) | 青(釉下彩) | 磁・暗灰 | ヤヤ低 | D | — | 少 | 袋物 |
| 理兵衛焼か? | B724 | B724 | KTCW8A0078 | 高松城跡(西の丸町)B地区 | | — | — | — | — | — | 直立orヤヤ内傾 | — | — | — | — | — | | — | — | 磁・灰黄 | ヤヤ高 | C' | | 少 | 外面蓮弁 |
| 理兵衛焼か? | B758 | B758 | KTCW8A0078 | 高松城跡(西の丸町)B地区 | — | — | — | — | — | — | | — | — | — | ○ | | | | | 磁・暗灰 | ヤヤ高 | D' | ○ | | |
| 色絵(極細) | 40 | 1903 | KTCW11AK0027 | Ⅵ区SXc14南北トレンチ | 9.2 | | | 9.6 | | | ヤヤ内窄 | | | — | | | 笹 | 緑0.25赤0.25金0.1 | 緑・赤・金 | 磁・黄灰 | ヤヤ高 | B | ○? | 少 | 量産品にも高級品有?(金使用) |
| 色絵(極細) | 41 | 804 | KTCW11AK0023 | Ⅵ区SXc14 | 10.6 | 3 | 0.2 | 10.8 | 5.5 | 5.8 | ヤヤ外傾 | ハB面 | | A | | ○ | 花 | 緑(線)0.1赤0.2金0.1 | 緑・赤・金 | 陶・白 | 低 | A | ○ | 中 | 磬壁薄 腰細 |
| 色絵(極細) | 42 | 210 | KTCW11BD0021 | Ⅱ区SDc08内埋土 | 10 | | | 10.2 | | | 直立 | | | A | | | 笹 | 赤0.2 ?(線)0.1 | 赤・? | 陶・灰白 | ヤヤ高 | D | | 少? | 理兵衛か?1・2と似 |
| 色絵(極細) | 43 | 708 | KTCW11AK0019 | Ⅵ区SXc13 | — | 3.2 | 0.2～0.25 | | | | | ハAヤヤ面 | | A | | | 宝珠? | 赤0.2 | 赤 | 陶・灰白 | ヤヤ低 | B | ○? | 少 | |
| 色絵(極細) | 44 | 1942 | KTCW11I0028 | Ⅳ区掘り下げL=0.9～西側溝 | — | 3.4 | 0.2 | | | | | 直Bヤヤ面 | 高台内 径0.4○ | A | | ○ | 草花 | ?(花)0.5青0.1金0.1 | 青・白・金 | 陶・黄白 | 低 | D | | 中 | |
| 色絵(極細) | 45 | 1948 | KTCW11IZ0036 | Ⅴ区SXc09外堀 | — | 3.0 | 0.15～0.2 | | | | | 直B面 | | A | | | 宝珠 | 緑(線)0.25 | 緑 | 陶・白 | 低 | C | | 少 | |
| 色絵(極細) | 46 | 1913 | KTCW11B0058 | Ⅱ区攪乱 | 9.7 | 3.3 | 0.1～0.15 | 5.0 | | | 直立?(細片) | 直Cヤヤ面 | | A | ○ | | 花? | 赤0.15金0.1 | 赤・金 | 磁・灰黄 | ヤヤ高・胎土灰色 | D | | 少 | |
| 色絵(極細) | 47 | 243 | KTCW11BD0009 | Ⅱ区SDc09敷石下灰色粘質土(SBc02に該当) | 8.8 | | | 9.2 | | | 直立 | | | — | | | 根引松 | ?0.1～0.3 | ? | 陶・灰 | ヤヤ高 | C | | 少 | 腰細 |
| 色絵(極細) | 47 | 137 | KTCW11B0036 | Ⅱ区SDc07・SDc09整地層 | 9.9 | | | | | | 端部内窄 | | | — | | | — | — | — | 陶・灰白 | ヤヤ高 | | ○ | 少 | |
| 色絵(極細) | 48 | 1293 | KTCW11DP0030 | Ⅷ区SPc471 | — | | | | | | 外傾? | | | — | | | 草? | ?0.2 | ? | 陶・黒褐 | 粗 | D | ○ | | 特殊口縁 |
| 色絵(極細) | 49 | 1915 | KTCW11B0068 | Ⅱ区攪乱 | 12 | — | | | | | 外傾 | | | — | | | 草花? | 赤(線)0.1(0.2) | 赤 | 磁・暗灰 | ヤヤ高・胎土灰色 | D' | ○ | 中 | 粘性釉 |
| 色絵(極細) | 50 | 1912 | KTCW11B0071 | Ⅱ区攪乱 | —(平碗?) | — | | | | | | | | A | ○ | | 根引松 | 緑0.1青0.1 | 緑・青 | 磁・暗灰 | ヤヤ高・胎土灰色 | C | ○ | 少 | 根が描かれない若松文 |
| 色絵(極細) | 51 | 1881 | KTCW11A0037・0017 | Ⅵ区SZKTCW11c13に伴う整地層上層・精査 | — | 3.0 | 0.25 | | | | | ハB面 | | A | | | 宝珠 | 緑0.15赤0.15 | 緑・赤・青 | 磁・灰 | 高 | A | ○ | 少 | 釉下泡状 |
| 色絵(極細) | 52 | 1924 | KTCW11BD0021 | Ⅱ区SDc08 | — | | | | | | ヤヤ内窄 | | | — | | | 宝珠 | 緑0.1～0.2(0.8) | 赤 | 磁・暗灰 | ヤヤ高・胎土灰色 | D' | ○ | 中 | |
| 色絵(極細) | 53 | 1959 | KTCW11A0056 | Ⅵ区SXc84周辺掘り下げ中 | 12? | | | | | | 直立 | | | — | | | 宝珠? | 赤0.2 | 赤 | 磁・暗灰 | ヤヤ高・胎土灰色 | D' | | 中 | |
| 色絵(極細) | 54 | 1914 | KTCW11B0069 | Ⅱ区攪乱 | — | — | | | | | | | | — | | | 縄文 | 赤(緑)0.3 | 赤 | 陶・黄白 | 低 | (素) | | 少 | |
| 色絵(極細) | 55 | 951 | KTCW11DP0036 | Ⅷ区SPc316 | — | — | | | | | | | | A | | | 縄文 | 赤(緑)0.25 | 赤 | 磁・灰白 | 高 | A | | 少 | 小杉形 |
| 色絵(極細) | 56 | 1960 | KTCW11DP0036 | Ⅷ区SPc338 | — | — | | | | | | | | A | | | 縄文 | 赤0.2 | 赤 | 磁・灰白 | ヤヤ高 | A | | 中 | |
| 色絵(極細) | 57 | 917 | KTCW11D0169 | Ⅶ区掘り下げL=1.2～1.0m | 12.3 | — | — | — | — | — | 天目風 | — | — | A | | | 縄文+? | 赤0.25金0.25 | 赤・金 | 磁・灰白 | 高 | A | — | 少 | |
| 色絵(極細) | 58 | 261 | KTCW11BD0004・0059 | Ⅱ区SDc07攪乱部 | 9.6 | | | 10 | | | 直立 | | | — | | | 注連縄 | 緑0.15金0.1 | 緑・金 | 磁・暗灰 | 中 | C | ○? | 少 | |
| 色絵(極細) | 59 | 1961 | KTCW11B0069・0058 | Ⅱ区攪乱 | — | — | | | | | | | | — | | | 木 | ピンク0.3黄0.1 | ピンク・黄 | 磁?・灰白 | ヤヤ低 | C | | 中 | |
| 色絵(極細) | 60 | 710 | KTCW11AK0018・K0019 | Ⅵ区SXc13 | 10.9 | 4.2 | 0.25 | 11.2 | 5.4 | 6.5 | 直立 | 直D面 | 高台内 径0.5○ | A | | | 注連縄 | ?(細)0.15 | ? | 磁・灰白 | 高 | A | | 少? | |
| 色絵(極細) | 61 | 1962 | KTCW11D0042 | Ⅷ区掘り下げL=1.1～1.0m(攪乱可能性有) | — | — | | | | | | | | — | | | ? | 緑?0.4以上銹0.2 | 緑・銹絵 | 磁・灰 | ヤヤ低 | C | | 中 | |
| 色絵(極細) | 62 | 1963 | KTCW11B0092 | Ⅲ区掘り下げ(1.4～1.3m) | — | — | | | | | | | | — | | | 草花? | 赤0.1 | 赤 | 磁・灰 | ヤヤ高 | C' | | 少 | |

第17表　京・信楽系陶器一覧表(1/3)

| | 京信No | 報文番号 | 注記番号 | 遺構名 | 口径 | 高台径 | 高台幅 | 最大径 | 最大径高 | 器高 | 口縁器形 | 高台形状 | 高台観察 | 施釉範囲 | 釉境赤化 | 傷隠し | 文様 | 筆幅 | 色絵 | 胎土(質感・色) | 胎土(透明度) | 釉観察 | 白化粧 | 含有鉱物 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 色絵(細線) | 63 | 1902 | KTCW11AK0023 | Ⅵ区SXc14西半部 | — | 3.1 | 0.2 | | | | | 直B面 | 高台内 径0.6○・低兜巾 | A | | ○ | 笹 | 線0.3 | 緑 | 陶・白 | ヤヤ低 | C | | 少 | 粉っぽい釉 |
| 色絵(細線) | 64 | 1964 | KTCW11E0006 | Ⅸ区第2面構成土 | — | — | | | | | | | | — | | | 笹 | ?0.25 | ? | 陶・黄白 | 低・濁(褐色系) | B | | 中 | |
| 色絵(細線) | 65 | 806 | KTCW11AK0024 | Ⅵ区SXc14 | — | 2.7 | 0.2 | | | | | ハB面 | | A | ヤヤ○ | | 笹 | 線0.3青?0.3 | 緑・青? | 磁・灰 | ヤヤ高 | C | | 少 | |
| 色絵(細線) | 66 | 1901 | KTCW11AK0023 | Ⅵ区SXc14西半部 | 9.0 | | | 9.4 | | | ヤヤ内弯 | | | — | | | 笹 | 線0.4赤0.2 | 緑・赤 | 磁・灰白 | ヤヤ高 | A | | 少 | 腰細 |
| 色絵(細線) | 67 | 706 | KTCW11AK0019 | Ⅵ区SXc13 | 9.9 | | | 10.6 | | | 内弯 | | | — | | | 草花 | 線0.35赤0.2青0.4 | 緑・赤・青 | 陶・灰白 | ヤヤ低 | B | | 少 | |
| 色絵(細線) | 68 | 803 | KTCW11AK0024 | Ⅵ区SXc14 | 9.0 | | | 9.5 | | | 直立 | | | — | | | 草花 | 線0.3赤0.25青0.25ﾋﾟﾝｸ0.4 | 緑・赤・青・ﾋﾟﾝｸ? | 陶・灰白 | ヤヤ低 | B | | 少 | |
| 色絵(細線) | 69 | 1965 | KTCW11AK0027 | Ⅵ区SXc14 | 9? | — | | | | | 内弯 | | | — | | | 花 | ？0.3 | 赤・? | 陶・黄白 | ヤヤ低 | C | | 中 | |
| 色絵(細線) | 70 | 1966 | KTCW11I0067 | Ⅴ区攪乱 | — | 3 | 0.25 | | | | | 直Bヤヤ面 | 墨書 | A | | ○ | 草 | 線0.25 | 緑・赤 | 陶・黄白 | ヤヤ低 | B | | 中 | |
| 色絵(細線) | 71 | 1907 | KTCW11A0057 | Ⅵ区SXc84より東掘り下げ中 | — | 3.1 | 0.1～0.15 | | | | | ハA面 | | A | | | 笹・花 | 線0.3赤0.2 | 緑・赤 | 陶・黄白 | ヤヤ低 | B | | 少 | |
| 色絵(細線) | 72 | 1904 | KTCW11AK0023 | Ⅵ区SXc14西半部 | 9.2 | — | | 9.6 | | | 直立 | | | — | | | 菊 | 線0.4 | 緑 | 磁・黄灰 | 高 | A | | | |
| 色絵(細線) | 73 | 707 | KTCW11AK0016 | Ⅵ区SXc13 | 9.8 | — | | 10.2 | | | 内弯 | | | — | | | 菊 | 線0.4赤0.5 | 緑・赤 | 陶・黄白 | ヤヤ低 | C | ○? | 中 | |
| 色絵(細線) | 74 | 1883 | KTCW11A0037 | Ⅵ区SZc13に伴う整地層上層 | — | 3 | 0.15 | | | | | ハA面 | 高台部赤色化 | A | 高台○ | ○ | 草花(菊) | 線(線)0.2青0.25金0.1 | 緑・青・金 | 磁・灰白 | ヤヤ高 | B | | 中 | |
| 色絵(細線) | 75 | 1967 | KTCW11A0006 | Ⅵ区SXc13周辺精査 | 9.4 | — | | | | | 内弯 | | | — | | ○ | 草花(菊) | 線(線)0.25金0.2 | 緑・赤 | 磁・灰白 | 高 | B | | 少 | |
| 色絵(細線) | 76 | 1882 | KTCW11A0037 | Ⅵ区SZc13に伴う整地層上層 | 8.8 | — | | 9.0 | | | 直立 | | | — | | | 草花(菊) | 線(線)0.2赤0.2金0.1 | 緑・赤・金 | 磁・灰白 | 高 | B | | 少 | |
| 色絵(細線) | 77 | 1968 | KTCW11AK0027 | Ⅵ区SXc14 | — | — | | | | | | | | — | | | 菊木 | 線(線)0.2赤0.2 | 緑・赤 | 磁・灰 | ヤヤ低 | B | | | |
| 色絵(細線) | 78 | 1969 | KTCW11AK0016 | Ⅵ区SXc13 | — | | | | | | | | | A | | ○? | ? | | 緑・赤 | 陶・(褐) | 低・胎土濁(褐色系) | C | ○ | 多 | |
| 色絵(細線) | 79 | 1970 | KTCW11AK0016 | Ⅵ区SXc13 | 9.0? | | | | | | (細片) | | | — | | | — | 線0.4 | 緑 | 陶・灰 | ヤヤ高・(灰色系) | B | ○ | 中 | 胎土灰色 |
| 色絵(細線) | 80 | 1971 | KTCW11A0058 | Ⅵ区SAc05周辺 | — | — | | | | | | | | — | | | 草? | 線0.4赤0.25 | 緑・赤 | 磁・黄白 | 低 | D | ○? | 少 | |
| 色絵(細線) | 81 | 1972 | KTCW11I0009 | Ⅳ区SZC03前面堆積土0.9～-0.2m機械掘削中 | — | — | | | | | | | | A? | | | 草花？ | 線0.1黒0.3 | 緑・黒 | 陶・灰白 | 低 | C | | 少 | |
| 色絵(細線) | 82 | 1938 | KTCW11C0040 | Ⅰ区攪乱 | — | 3 | 0.2 | | | | | 直A面 | 低兜巾 | A | | | 線 | 線0.3赤0.2 | 緑・赤・? | 陶・黄白 | 低 | C | | 少 | |
| 色絵(細線) | 83 | 1973 | KTCW11AK0019 | Ⅵ区SXc13 | — | — | | | | | | | | - | | | 笹 | ？0.3 | ? | 磁・灰白 | ヤヤ高 | B | | 中 | |
| 色絵(細線) | 84 | 1974 | KTCW11B0139 | Ⅲ区東壁精査 | — | — | | | | | | | | - | | | 笹 | 線?0.3 | 赤・緑? | 陶?・灰 | 中 | C | | ヤヤ多 | |
| 色絵(細線) | 85 | 1975 | KTCW11B0068 | Ⅱ区攪乱 | 12? | — | | | | | 端部内弯 | | | - | | | 線? | 線0.35 | 緑 | 磁・黄白 | 低 | B | | 少 | |
| 色絵(細線) | 86 | 1976 | KTCW11BK0002 | Ⅲ区SKc07 | — | — | | | | | | | | A | | | 草? | 線0.2ﾋﾟﾝｸ0.4 | 緑・ﾋﾟﾝｸ? | 陶・黄白 | 低 | C | | 少 | |
| 色絵(細線) | 87 | 1977 | KTCW11C0040 | Ⅰ区攪乱 | — | — | | | | | | | | — | | | ? | 青0.8(花)0.2(線) | 青 | 陶・黄白 | ヤヤ低・濁(褐色系) | C | | 少 | |
| 色絵(細線) | 88 | 1978 | KTCW11AK0023 | Ⅵ区SXc14(西半部) | — | — | | | | | | | | — | | | ? | | 緑 | 陶・褐 | 低・胎土褐 | C | | 多 | |
| 色絵(細線) | 89 | 1979 | KTCW11AK0018・K0023 | Ⅵ区SXc14(西半部)・SXc13 | 10 | — | | | | | 内弯 | | | — | | | 草? | 線0.4 | 緑 | 磁・灰白 | ヤヤ高 | A | | 中 | |
| 色絵(細線) | 90 | 1980 | KTCW11AK0016 | Ⅵ区SXc13 | — | — | | | | | | | | — | | | ? | 赤0.2 | 赤 | 磁・灰白 | ヤヤ高 | B | ○ | 中 | |
| 色絵(細線) | 91 | 1981 | KTCW11B0069 | Ⅱ区攪乱 | — | — | | | | | | | | — | | | 草? | 線0.3 | 緑 | 磁・白 | ヤヤ高・均一 | B | | 少 | |
| 色絵(細線) | 92 | 1982 | KTCW11B0136 | Ⅲ区SBc07周辺上面精査 | — | — | | | | | | | | — | | | ? | 赤0.35 | 赤・? | 磁・灰白 | ヤヤ高 | B | | | |
| 色絵(太線) | 93 | 1983 | KTCW11AK0024 | Ⅵ区SXc14(西半部) | 9.8 | | | | | | ヤヤ内弯 | | | — | | | 笹 | 線0.6赤0.5 | 緑・赤 | 陶・灰白 | ヤヤ低 | C | | 少 | |
| 色絵(太線) | 94 | 1984 | KTCW11AK0024・0007 | Ⅵ区SXc14(西半部)・SXc14周辺精査 | 9.4 | | | | | | 内弯 | | | — | | | 竹(笹) | 線0.6赤0.55 | 緑?・赤 | 陶・灰白 | ヤヤ低 | C | | 少 | |
| 色絵(太線) | 95 | 1887 | KTCW11AK0018 | Ⅵ区SXc13 | 7.7 | | | 8.5 | | | 直立 | | | — | | | 笹 | 線0.6赤0.5 | 緑・赤 | 陶・灰 | ヤヤ高 | B | ○ | 少 | |
| 色絵(太線) | 96 | 1985 | KTCW11B0103 | Ⅲ区攪乱 | — | — | | | | | | | | — | | | 笹 | 線0.65 | 緑・赤 | 陶・灰白 | ヤヤ低 | A | | 少 | |
| 色絵(太線) | 97 | 1986 | KTCW11AX0011 | Ⅵ区SXc10 | — | — | | | | | | | | — | | | ? | — | 緑・赤 | 陶・灰白 | ヤヤ高 | C | | 少 | |
| 色絵(太線) | 98 | 705 | KTCW11AK0021 | Ⅵ区SXc13 | 9.3 | 3.0 | 0.3 | 9.7 | 4.5 | 5.5 | 直立 | ハA面 | 低兜巾 | A | ○ | | 竹(笹) | 線0.65赤0.6青0.7 | 緑・赤・青 | 陶・黄白 | 低 | C | | 少 | |
| 色絵(太線) | 99 | 1987 | KTCW11I0004 | Ⅳ区SZc03前面堆積土0.9～-0.2m機械掘削 | — | — | | | | | | | | — | | | 笹? | — | 赤 | 陶・黄白 | ヤヤ高 | C | | 少 | |
| 色絵(太線) | 100 | 1988 | KTCW11D0062 | Ⅷ区攪乱 | — | | | | | | ヤヤ内弯 | | | — | | | 笹 | 線0.55 | 緑・赤 | 陶・黄白 | 低 | C | | 中 | |
| 色絵(太線) | 101 | 1940 | KTCW11I0028 | Ⅳ区掘り下げL=0.9～西側溝 | 9.4 | | | 9.9 | | | 内弯 | | | — | | | 笹 | 線0.7赤0.45黒0.7 | 緑・赤・黒 | 陶・黄白 | 低 | C | | 多 | 口縁端部ヤヤ肥大 |
| 色絵(太線) | 102 | 1989 | KTCW11AK0018 | Ⅵ区SXc13 | 9.0 | | | | | | 内弯 | | | — | | | 笹 | 線0.7赤0.55 | 緑・赤 | 磁・灰 | ヤヤ高 | C | | 少 | |
| 色絵(太線) | 103 | 704 | KTCW11AK0016・X0011 | Ⅵ区SXc13・SXc10 | 9.0 | 1.4 | 0.25 | 9.5 | 4.0 | 5.1 | 内弯 | ハA面 | | A | | | 笹2・花 | 線0.7赤0.5白?0.6 | 緑・赤・白? | 磁・灰白 | ヤヤ高 | A | | 少 | |
| 色絵(太線) | 104 | 1990 | KTCW11I0009 | Ⅳ区SZc03前面堆積土0.9～-0.2m機械掘削 | 10? | — | | | | | 内弯?(細片) | | | — | | | 笹 | 線0.9 | 緑・赤 | 磁・灰 | 高 | A | | 中 | 釉下泡状 |
| 色絵(太線) | 105 | 1991 | KTCW11I0004 | Ⅳ区SZc03前面堆積土0.9～-0.2m機械掘削 | 9 | | | | | | 直立 | | | — | | ? | 笹 | 黒0.45 | 黒 | 磁・灰 | 高 | A | | 少 | 釉下泡状 |
| 色絵(太線) | 106 | 1992 | KTCW11I0093 | Ⅳ区SZc13上面堆積土0.8～SZc13石材 | 8.8 | | | | | | 内弯 | | | — | | | 笹 | ？0.6 | ? | 磁・灰 | ヤヤ高 | A | | 少 | |
| 色絵(太線) | 107 | 1993 | KTCW11AK0017・K0018 | Ⅵ区SXc13 | 8.6 | | | | | | 内弯 | | | — | | | 笹 | 線0.7 | 緑 | 磁・灰 | ヤヤ高 | C | | 中 | |
| 色絵(太線) | 108 | 1995 | KTCW11AK0019 | Ⅵ区SXc13 | 10. | — | | | | | ヤヤ内弯 | | | — | | | 笹 | 線0.6 | 緑・赤 | 磁・褐灰 | ヤヤ高・胎土濁 | C | | 少 | |
| 色絵(太線) | 109 | 1996 | KTCW11AK0019 | Ⅵ区SXc13 | 10.6 | | | | | | 直立 | | | — | | | 笹 | 線0.9赤0.6 | 緑・赤 | 磁・灰白 | 高 | C | | 少 | |
| 色絵(太線) | 110 | 1994 | KTCW11I0039 | Ⅳ区1.1～0.9m精査中 | — | | | | | | 直立?(細片) | | | — | | | 笹or花 | 線0.65赤0.5 | 緑・赤 | 磁・灰 | ヤヤ高 | B | | 少 | |
| 色絵(太線) | 111 | 1886 | KTCW11AK0018 | Ⅵ区SXc13 | 9.7 | | | 10.0 | | | 直立 | | | — | | | 笹 | 線0.5赤0.4 | 緑・赤 | 磁・褐灰 | ヤヤ高・胎土濁 | D | ○ | 少 | |
| 色絵(太線) | 112 | 1997 | KTCW11AK0024 | Ⅵ区SXc14(西半部) | 10以上? | | | | | | 直立?(細片) | | | — | | | 笹 | 線0.5 | 緑 | 磁・黄白 | ヤヤ低 | C | | 少 | |
| 色絵(太線) | 113 | 1998 | KTCW11IZ0036 | Ⅴ区SXc09外堀 | 11? | | | | | | 直立?(細片) | | | — | | | 笹 | 線?0.65赤0.55 | 緑?・赤 | 陶・褐 | ヤヤ高 | C | | 少 | 口縁端部ヤヤ肥大 |
| 色絵(太線) | 114 | 1947 | KTCW11IZ0036 | Ⅴ区SXc09外堀 | 9.7 | — | | 10.1 | | | 直立 | | | — | | ○ | 葉？ | 線?0.5赤0.3 | 緑?・赤 | 陶・黄灰 | ヤヤ低・胎土汚い | C | | 多 | 胎土汚い |
| 色絵(太線) | 115 | 1999 | KTCW11AK0016 | Ⅵ区SXc13 | — | — | | | | | | | | — | | | ? | 線0.4 | 緑 | 陶・黄灰 | 低 | C | | 中 | |
| 色絵(太線) | 116 | 1878 | KTCW11A0065・0037 | Ⅳ区路床・SDc13に伴う整地層上層 | 9.5 | | | 10.0 | | | ヤヤ内弯 | | | A | | | 笹 | 線0.65赤0.4 | 緑・赤 | 磁・灰 | ヤヤ高 | B | ○? | 少 | |
| 色絵(太線) | 117 | 136 | KTCW11B0036 | Ⅱ区SDc07・c09整地層 | 8.4 | 3.1 | 0.25 | 8.9 | 4.5 | 5.6 | 内弯 | ハB面 | 墨書 | A | | | 笹 | 赤0.45 | 赤・緑 | 陶・黄白 | 低 | C | — | ? | |
| 色絵(太線) | 118 | 1906 | KTCW11A0057・K0024 | Ⅵ区SXc84より東掘り下げ中・SXc14 | 9.1 | 3.3 | 0.1～0.2 | 9.4 | 4.5 | 5.3 | ヤヤ内弯 | 直B面 | 低兜巾 | A | | | アヤメ・？ | 線0.7赤0.3青0.6 | 緑・赤・青? | 陶・灰白 | ヤヤ低 | C | ○ | 少 | |
| 色絵(太線) | 119 | 2000 | KTCW11AK0019・K0018 | Ⅵ区SXc13 | — | | | | | | ヤヤ内弯 | | | — | | | アヤメ? | 線0.65赤0.5 | 緑・赤 | 磁・灰白 | ヤヤ高 | B | | 少 | |
| 色絵(太線) | 120 | 1880 | KTCW11A0037 | Ⅵ区SZc13に伴う整地層上層 | — | 3.1 | 0.2～0.25 | | | | | 直A面 | 低兜巾 | A | | | アヤメ? | 線0.9赤0.2 | 緑・赤 | 磁・黄白 | ヤヤ高 | B | | 少 | |
| 色絵(太線) | 121 | 805 | KTCW11AK0022 | Ⅵ区SXc14 | 10.3 | — | | | | | 直立気味 | | | A | ○ | | 蕨? | 線0.5赤0.4紫0.5 | 緑・赤・紫 | 磁・灰白 | 高 | D | | 少 | |
| 色絵(太線) | 122 | 1884 | KTCW11AK0019・0003 | Ⅵ区L=1.5精査・SXc13 | 9.2 | 2.9 | 0.15～0.25 | 9.5 | 4.5 | 5.6 | 直立 | 直A面 | 高台内 径0.4○ | A | | | 桜・# | 線1.5(花弁幅)赤0.25 | 緑・赤 | 陶・灰白 | ヤヤ高 | C | | 少 | |
| 色絵(太線) | 123 | 678 | KTCW11AX0011 | Ⅵ区SXc10 | 8.6 | 3.1 | 0.1～0.15 | 9.0 | 4.4 | 5.2 | ヤヤ内弯 | 直C面 | | A | ○ | | 桜・線 | 線1.8(花弁幅)赤0.3 | 緑・赤 | 磁・灰 | ヤヤ高 | A | | 少 | |
| 色絵(太線) | 124 | 1879 | KTCW11A0065・0037 | Ⅳ区路床・SDc13に伴う整地層上層 | 9.6 | | | | | | ヤヤ内弯・端部細 | | | — | | | 桜・# | 線・?1.4赤0.5 | 緑・赤・? | 磁・灰 | ヤヤ高・胎土ヤヤ灰色 | A | ○? | 少 | 腰細 |
| 色絵(太線) | 125 | 2001 | KTCW11B0058 | Ⅱ区攪乱 | — | | | | | | 内弯 | | | — | | | 桜 | 赤0.5黒0.9 | 赤・黒 | 磁・灰白 | ヤヤ高 | B | | 少 | |
| 色絵(太線) | 126 | 2002 | KTCW11B0108 | Ⅲ区掘り下げ1.3～1.2m | — | — | | | | | | | | — | | | 花・線？ | 線1(花弁幅) | 緑・赤 | 磁・灰 | 低 | A | | 少 | |
| 色絵(太線) | 127 | 2003 | KTCW11D0021 | Ⅳ区SDc19(南東部) | 9.0 | 2.0 | | | | | 端部ヤヤ肥大 | | | — | | | # | 赤0.6 | 赤 | 磁・灰白 | ヤヤ高 | A | ○? | 少 | |
| 色絵(太線) | 128 | 311 | KTCW11B0120 | Ⅲ区掘り下げL=1.1～0.9m | 9.4 | — | — | 9.8 | — | — | 直立 | — | — | — | | | 花 | 線0.5赤0.4 | 緑・赤 | 陶・褐灰～灰 | 中間 | C | — | 少 | |
| 色絵(太線) | 129 | 2004 | KTCW11A0017 | ⅥSXc13 | — | — | | | | | | | | A | | | 木or花 | 線1.3(花弁幅) | 緑 | 磁・暗灰 | ヤヤ高・胎土灰色 | A | ○ | 多 | 黒粒多い 胎土灰色 |
| 色絵(太線) | 130 | 1935 | KTCW11C0040 | Ⅰ区攪乱 | 9.6 | | | 10.0 | | | 直立 | | | — | | | 葉or花 | 線1～1.15(花弁幅) | 緑 | 磁・暗灰 | ヤヤ高・胎土灰色 | C | ○ | 多 | 胎土灰色 |
| 色絵(太線) | 131 | 1905 | KTCW11A0007 | Ⅵ区SXc14周辺精査 | — | 3.4 | 0.2～0.25 | | | | | ハB面 | | A | | | 草??? | 線0.5 | 緑 | 陶・灰 | ヤヤ低 | B | ○ | 少 | |
| 色絵(太線) | 132 | 2005 | KTCW11AZ0009 | Ⅵ区SZc13前面検出中 | — | — | | | | | | | | — | | | 笹？ | 線?0.7 | 緑? | 磁・灰白 | ヤヤ高・粗い | A | ○? | 少 | |
| 色絵(太線) | 133 | 2006 | KTCW11A0055 | Ⅵ区SXc84周辺掘り下げ中 | — | | | | | | | | | — | | ○ | ? | 線0.5 | 緑 | 磁・灰 | 高 | B | | 少 | |
| 色絵(太線) | 134 | 2007 | KTCW11I0093 | Ⅳ区SZc13上面堆積土0.8～SZc13石材 | 11? | | | | | | 外傾?(細片) | | | — | | | 笹 | 線1 | 緑 | 磁・褐灰 | ヤヤ低 | D | | 少 | |
| 色絵(太線) | 135 | 2008 | KTCW11AK0019 | Ⅵ区SXc13 | — | — | | | | | | | | — | | | 木？ | 線0.4(一筆分) | 緑 | 陶・黄灰 | ヤヤ低 | B | | 中 | |
| 色絵(太線) | 136 | 2009 | KTCW11I0039 | Ⅳ区1.1～0.9m精査中 | — | — | | | | | | | | — | | | 葉？ | 線0.9(一筆分) | 緑 | 陶・黄灰 | 低 | C | | 中 | 緑粒若干含む 胎土精良 |
| 色絵(太線) | 137 | 2010 | KTCW11AK0025 | Ⅵ区SXc14東半部 | — | — | | | | | | | | — | | | 葉？ | 線0.45 | 緑 | 磁?・黄白 | ヤヤ高 | B | | 少 | |
| 色絵(太線) | 138 | 1888 | KTCW11AK0019 | Ⅵ区SXc13 | — | — | | | | | | | | — | | | ? | 線0.8赤0.2青0.4以上 | 緑・赤・青 | 陶・黄灰 | 低 | C | | 中 | |
| 色絵(太線) | 139 | 2011 | KTCW11C0040 | Ⅰ区攪乱 | — | — | | | | | | | | — | | | 桜・笹？ | | 緑・? | 陶・黄灰 | 低 | C | | 中 | |
| 色絵(太線) | 140 | 2012 | KTCW11AK0019 | Ⅵ区SXc13 | 10 | | | | | | 内弯 | | | — | | | 線 | 線0.7 | 緑 | 磁・灰白 | ヤヤ高 | B | | 中 | |
| 色絵(太線) | 141 | 2013 | KTCW11AK0018 | Ⅵ区SXc13 | — | — | | | | | | | | — | | | 草 | 線?0.5 | 緑? | 磁・灰白 | ヤヤ高 | B | | △ | |

第18表　京・信楽系陶器一覧表(2/3)

| | 京信No | 報文番号 | 注記番号 | 遺構名 | 口径 | 高台径 | 高台幅 | 最大径 | 最大径高 | 器高 | 口縁器形 | 高台形状 | 高台観察 | 施釉範囲 | 釉境赤化 | 傷隠し | 文様 | 筆幅 | 色絵 | 胎土(質感・色 | 胎土(透明度) | 釉観察 | 白化粧 | 含有鉱物 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 色絵(塗潰) | 142 | 1943 | KTCW11I0004 | Ⅳ区SZc03前面堆積土L=0.9～-0.2m | 9.3 | | | 10 | | | 内弯 | | | — | | | 宝珠? | 塗り潰し | 緑・赤・黒? | 陶・白 | 低 | B | | 少 | |
| 色絵(塗潰) | 143 | 709 | KTCW11AK0018 | Ⅵ区SXc13 | 8.9 | | | 9.6 | | | 内弯 | | | — | | | 宝珠? | 塗り潰し・赤0.2 | 緑・赤・黄? | 磁・灰白 | 高 | B | | 少 | |
| (異質) | 144 | 2014 | KTCW11B0105 | Ⅲ区撹乱 | — | — | | | | | | | | — | | | ? | ?0.8 | ? | 磁・白 | 高 | A | | 中? | 釉下泡状　絵付ではナイ? |
| (異質) | 145 | 2015 | KTCW11C0040 | Ⅰ区撹乱 | — | 3.8 | 0.15 | | | | | 直D面 | 高台内アーチ状 | A | | | 花?家紋? | ?0.2 | ? | 磁・灰白 | 高 | B | | 中? | 腰細　型紙っぽい |
| 色絵(異質) | 146 | 1941 | KTCW11I0025 | Ⅳ区掘り下げL=0.9～0.7撹乱含む | 8.9 | — | | 9.3 | | | 直立 | | | — | | | 木? | 線0.8赤0.4 | 緑・赤 | 陶・黄白 | ヤヤ低 | D | | 多 | |
| 色絵(異質) | 147 | 2016 | KTCW11IZ0041 | Ⅴ区SXc09外堀 | — | — | | | | | | | | — | | | 字 | 線?0.2黒0.3 | 緑?・黒 | 陶・黄白 | 低 | C | | 中 | |
| <小型> | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 色絵(太線) | 148 | 2021 | KTCW11AK0021 | Ⅵ区SXc13 | 小型7.0 | | | | | | 内弯・端部肥大 | | | A | | | 花 | 線0.55赤0.4 | 緑・赤 | 陶・灰 | 高 | C | | 中 | |
| 色絵(細線) | 149 | 802 | KTCW11AK0022 | Ⅵ区SXc14 | 小型7.2 | 2.2 | 0.15 | 7.2 | 3.8 | 4.1 | 直立 | ハB面 | 高台内 径0.35～○ | A | ○ | ○ | 笹 | 線0.4赤0.25 | 緑?・赤 | 陶・灰 | ヤヤ低 | C | ○ | 多 | |
| 色絵(細線) | 150 | 703 | KTCW11AK0018 | Ⅵ区SXc13 | 小型6.1 | 2.3 | 0.15 | 6.4 | 3.3 | 3.7 | 内弯 | ハCヤヤ面 | 高台内 径0.8○・墨書 | B | | | 笹・松 | 線0.4赤0.3 | 緑・赤・黒? | 陶・黄灰 | ヤヤ低 | C | | 中 | 高台脇まで施釉 |
| 色絵(細線) | 151 | 2022 | KTCW11A0017 | Ⅵ区精査 | 小型7.0 | 3.0 | 0.15 | 7.6 | 3.3 | 3.6 | 内弯 | | 高台脇面 | A | | | 笹 | 線0.4赤0.3 | 緑・赤 | 陶・黄灰 | 低 | C | | 少? | 腰ヤヤ細 |
| 色絵(細線) | 152 | 2023 | KTCW11A0062 | Ⅵ区撹乱 | 小型7.0 | | | | | | 内弯 | | | — | | | 笹 | 線0.5赤0.3 | 緑・赤 | 陶・黄灰 | 低・(ヤヤ褐色系) | C | | 多 | 胎土濁っているが密 |
| 色絵(細線) | 153 | 2024 | KTCW11AK0024・K0027 | Ⅵ区SXc14 | 10.0 | | | | | | 内弯 | | | — | | | 線 | ピン?0.3 | 緑・ピンクっぽい | 陶・黄灰 | ヤヤ高 | A | | 少 | |
| <内面文様> | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 色絵(太線) | 105 | 1991 | KTCW11I0004 | Ⅳ区SZc03前面堆積土0.9～-0.2m機械掘削 | 9.0 | | | | | | 直立 | | | | | ? | 笹 | 黒0.45 | 黒 | 磁・灰 | 高 | A | | 少 | 釉下泡状 |
| 色絵(太線) | 133 | 2006 | KTCW11A0055 | Ⅵ区SXc84周辺掘り下げ中 | — | | | | | | | | | | | ○ | ? | 線0.5 | 緑 | 磁・灰 | 高 | B | | 少 | |
| 色絵(太線) | 114 | 1947 | KTCW11I0036 | Ⅴ区SXc09外堀 | 9.7 | — | | 10.1 | | | 直立 | | | | | ○ | 葉? | 線?0.5赤0.3 | 緑?・赤 | 陶・黄灰 | ヤヤ低・胎土汚い | C | | 多 | 胎土汚い |
| 色絵(傷隠し) | 149 | 802 | KTCW11AK0022 | Ⅵ区SXc14 | 小型7.2 | 2.2 | 0.15 | 7.2 | 3.8 | 4.1 | 直立 | ハB面 | 高台内 径0.35～○ | A | ○ | ○ | 笹 | 線?0.4赤0.25 | 緑?・赤 | 陶・灰 | ヤヤ低 | C | ○ | 多 | |
| 色絵(傷隠し) | 63 | 1902 | KTCW11AK0023 | Ⅳ区SXc14西半部 | — | 9.1 | 0.2 | | | | | 直B面 | 高台内 径0.6○・低兜巾 | A | | ○ | 笹 | 線0.3 | 緑 | 陶・白 | ヤヤ低 | C | | 少 | 粉っぽい釉 |
| 色絵(傷隠し) | 78 | 1969 | KTCW11AK0016 | Ⅵ区SXc13 | — | | | | | | | | | | | ○? | ? | | 緑・赤 | 陶・(褐) | 低・胎土濁(褐色系) | C | ○ | 多 | |
| 色絵(傷隠し) | 70 | 1966 | KTCW11I0067 | Ⅴ区撹乱 | — | 3.0 | 0.25 | | | | | 直Bヤヤ面 | 墨書 | A | | ○ | 草 | 線0.25 | 緑・赤 | 陶・黄白 | ヤヤ低 | B | | 中 | |
| 色絵(傷隠し) | 74 | 1883 | KTCW11A0037 | Ⅵ区SZc13に伴う整地層上層 | — | 3.0 | 0.15 | | | | | ハA面 | 高台部赤色化 | A | 高台○ | ○ | 草花(菊) | 線(線)0.2青0.25金0.1 | 緑・青・金 | 磁・灰白 | ヤヤ高 | B | | 中 | |
| 色絵(傷隠し) | 75 | 1967 | KTCW11A0006 | Ⅵ区SXc13周辺精査 | 9.4 | — | | | | | 内弯 | | | | | ○ | 草花(菊) | 線(線)0.25金0.2 | 緑・赤 | 磁・灰白 | 高 | B | | 少 | |
| 色絵(傷隠し) | 41 | 804 | KTCW11AK0023 | Ⅵ区SXc14 | 10.6 | 3.0 | 0.2 | 10.8 | 5.5 | 5.8 | 外傾 | ハB面 | | A | | ○ | 花 | 線(線)0.1赤0.2金0.1 | 緑・赤・金 | 陶・白 | 低 | A | ○ | 中 | 器壁薄 腰細 |
| 色絵(傷隠し) | 44 | 1942 | KTCW11I0028 | Ⅳ区掘り下げL=0.9～西側溝 | — | 3.4 | 0.2 | | | | | 直Bヤヤ面 | 高台内 径0.4○ | A | | ○ | 草花 | ?(花)0.5青0.1金0.1 | 青・白・金 | 陶・黄白 | 低 | D | | 中 | |
| 色絵(傷隠し). | 164 | 1910 | KTCW11A0057 | Ⅵ区SXc84より東掘り下げ中 | — | 3.2 | 0.25 | | | | | ヤヤハB面不明 | | A | | | 目跡隠(?) | | 緑 | 陶・褐灰 | ヤヤ低 | A | ○ | 多 | |
| 色絵(傷隠し). | 165 | 1909 | KTCW11A0015 | Ⅵ区SXc84精査 | — | 3.0 | 0.25 | | | | | 直A面 | 低兜巾 | A | | | 目跡隠(花) | | ? | 陶・黄白 | ヤヤ低 | C | | 多 | |
| 色絵(傷隠し). | 166 | 1892 | KTCW11AK0018 | Ⅵ区SXc13 | — | 3.2 | 0.25 | | | | | ハB面 | 高台内 径0.4○ | A | | | 目跡隠(花) | | 緑 | 磁・白 | ヤヤ高 | B | | 少 | |
| 色絵(傷隠し). | 167 | 1922 | KTCW11B0113 | Ⅲ区L=1.2～1.1m掘り下げ | — | 3.0 | 0.2 | | | | | ハB面 | | A | | | 目跡隠?(花) | | 緑 | 磁・白 | ヤヤ高 | B | | 少 | |
| 色絵(内面種細) | 154 | 2020 | KTCW11AX0011 | Ⅵ区SXc10 | — | — | | | | | | | | — | | | 草花? | ?0.1金0.1 | ?・金 | 陶・灰白 | 低 | C | | 中 | |
| 色絵(内面大) | 155 | 1893 | KTCW11AK0019(器形?) | Ⅵ区SXc13 | 10.4 | | | 10.8 | | | 直立 | | | — | | | 笹 | 線0.6 | 緑・赤 | 陶・褐灰 | ヤヤ低・釉濁 | B | ○ | 多 | |
| 色絵(内面大) | 156 | 1929 | KTCW11D0146 | Ⅶ区撹乱 | ? | ? | | | | 1.1 | 特殊 | 内A面不明 | 高台際まで施釉 | B | | | 梅花? | 赤(点)0.15　?(点)0.25 | 赤・? | 陶・黄白 | 低 | C | | 中 | 特殊口縁 |
| 色絵(内面大) | 157 | 1894 | KTCW11AK0019(平碗) | Ⅵ区SXc13 | — | 3.4 | 0.2 | | | | | ハA面 | ○刻有り力? | A | ○ | | 山水図? | 線・青太　赤0.25金0.1 | 緑・赤・青・金 | 陶・灰 | ヤヤ高 | B | ○ | 中 | |
| 色絵(内面大) | 158 | 1895 | KTCW11AK0019(平碗) | Ⅵ区SXc13 | — | 3.9 | 0.25 | | | | | ヤヤハC面 | 低兜巾・墨書 | A | ○ | | 花or山水or宝珠 | 赤0.25金0.1 | 緑・赤・青・金? | 磁・灰 | 高 | B | ○ | 中 | |
| 色絵(内面大) | 159 | 711 | KTCW11AK0018・K0019(平) | Ⅵ区SXc13 | 12.2 | 3.8 | 0.25 | 12.5 | 4.4 | 4.7 | 外傾→端部直立 | 直Aヤヤ面 | 高台脇に面 | A | | | 蕨? | 線0.35赤0.3金0.1 | 緑・赤・金 | 磁・灰白 | ヤヤ高 | C | | 少 | |
| 色絵(内面大) | 160 | 2017 | KTCW11B0150(平碗?) | Ⅲ区掘り下げ1.3～1,1m | — | 4.4 | 0.25～0.3 | | | | | 直B面 | 高台内 径0.8○ | A | | | 草花 | 線?0.2 | 緑?・青? | 陶・褐～灰 | ヤヤ低・釉濁 | C | ○ | 中 | |
| 色絵(内面大) | 161 | 2018 | KTCW11AK0017 | Ⅵ区SXc13 | — | — | | | | | | | | — | | | ? | 赤0.35 | 緑・赤 | 磁・灰 | 高 | B | ○ | 多 | |
| 色絵(内面大) | 162 | 2019 | KTCW11IZ0065 | Ⅳ区SZc13裏込め | — | — | | | | | | | | — | | | 草 | 線0.5～ | 緑 | 磁・灰白 | ヤヤ低 | B | | 多 | |
| 色絵(内面大) | 163 | 1908 | KTCW11A0057(平碗?) | Ⅵ区SXc84より東掘り下げ中 | 11.8 | | 12.1 | | | | 外傾→端部直立 | | | — | | | 草・梅花 | 線(丸)0.4赤(丸)0.3金0.1 | 緑・赤・?・金 | 磁・黄灰 | ヤヤ高 | B | ○ | 少 | 腰細 |
| 銹絵染付(高印) | 07 | 712 | KTCW11AK0019 | Ⅵ区SXc13 | 10.8 | 4.0 | 0.3 | 11.4 | 6.6 | 6.9 | ヤヤ外傾 | 直Dヤヤ面 | 渦高台・'高'印 | A | ○ | | 舟?草花? | 銹絵0.1 | 銹絵染付 | 磁・灰 | ヤヤ高・胎土ヤヤ灰色味 | B | ○ | 少 | |
| 銹絵染付 | 168 | 677 | KTCW11AX0011 | Ⅵ区SXc10 | — | 4.6 | 0.2 | | | | | ハDヤヤ面 | 渦高台 | A | | | 草? | | 銹絵染付 | 磁・暗灰 | 高 | A | | 多 | 黒粒多い |
| 銹絵染付 | 169 | 714 | KTCW11AK0016 | Ⅵ区SXc13 | 9.5 | 4.8 | 0.3 | 9.9 | 6.4 | 6.6 | 直立 | ハDヤヤ面 | 渦高台 | A | | | アヤ? | 銹絵0.1～染付0.4 | 銹絵染付 | 磁・暗灰 | ヤヤ高・胎土灰色味 | A | ○ | 多 | 胎土灰色味 |
| 銹絵染付 | 170 | 713 | KTCW11AK0018 | Ⅵ区SXc13 | 9.6 | 3.1 | 0.15～0.2 | 9.9 | | 4.9 | 外傾 | 直C一 | 高台内中央○ | A | ○ | | 松花 | 銹絵0.2染付0.2 | 銹絵染付 | 磁・暗灰 | 高 | C | | 少 | |
| 銹絵染付 | 171 | 2025 | KTCW11AK0018 | Ⅵ区SXc13 | 9.0 | | | | | | 直立or外傾 | | | — | | | ? | | 銹絵染付 | 陶・黄白 | 低 | C | | 中 | |
| 銹絵染付 | 172 | 1891 | KTCW11AK0018 | Ⅵ区SXc13 | 10.8 | | | 11.1 | | | 外傾 | | | — | | | | | 銹絵染付 | 陶・黄白 | ヤヤ低 | B | | 少 | |
| 銹絵染付 | 173 | 1923 | KTCW11B0153 | Ⅲ区第1面(L=1.3)精査 | — | 3.2 | 0.2 | | | | | ハB一 | 高台内中央○ | A | | | 草? | | 銹絵染付 | 磁・白 | 高 | A | | 多 | |
| 銹絵染付 | 174 | 1890 | KTCW11AK0016 | Ⅵ区SXc13 | 9.9 | | | 10.4 | | | 直立 | | | — | | | 松 | 銹絵0.4染付0.4 | 銹絵染付 | 磁・灰白 | 低 | B | | 少 | 口縁端部肥大 |
| 銹絵染付 | 175 | 2026 | KTCW11DP0036(袋物力?) | Ⅶ区SPc316 | — | — | | | | | | | | — | | | ? | | 銹絵染付 | 磁・暗灰 | 中間(隙間あり) | C | | 中 | |
| 銹染・灰色胎土 | 176 | 152 | KTCW11B0025(香炉?) | Ⅱ区掘り下げL=1.0～0.8m(撹乱含む) | 7.2 | | | | | | (内傾) | | | — | | | 松? | 銹絵0.1染付0.1 | 銹絵染付 | 磁・暗灰 | 中間・胎土ヤヤ灰色味 | C' | | 多 | 胎土ヤヤ灰色味(07似)理兵衛焼力? |
| 銹絵染付 | 177 | 1376 | KTCW11E0008 | Ⅸ区第2面構成土 | | | | | | | 特殊器形 | | | — | | | 草花 | 銹絵0.1 | 銹絵染付 | 磁・灰 | 低 | B | | 多 | 特殊器形　黒粒多い |
| 銹絵染付 | 178 | 1889 | KTCW11AK0018 | Ⅵ区SXc13 | | | | | | | 外傾→ヤヤ端反 | | | — | | | 稲穂? | 銹絵0.1染付0.1 | 銹絵染付 | 磁・暗灰 | 中間 | C' | | 少 | 口錆 |
| 銹絵染付 | 179 | 717 | KTCW11AK0019 | Ⅵ区SXc13 | — | 6.0 | 0.25 | | | | | | 高台斜め・碁笥底風 | — | ○ | | 稲穂 | 銹絵0.1染付0.1 | 銹絵染付 | 磁・黄白 | 低 | C | | 中 | 高台碁笥底気味　気泡大 |
| 銹絵染付 | 180 | 2027 | KTCW11AK0024 | Ⅵ区SXc14(西半部) | — | — | | | | | | | | — | | | 松? | 銹絵0.3染付0.4 | 銹絵染付 | 磁?・暗灰 | ヤヤ低 | C | ○ | 多 | |
| 銹絵染付 | 181 | 2028 | KTCW11AK0016(瓶類) | Ⅵ区SXc13 | — | — | | | | | | | | — | | | 花? | 銹絵0.3染付0.4 | 銹絵染付 | 陶・黄灰 | 低 | C | | 多 | |
| 銹絵染付 | 182 | 1911 | KTCW11B0082 | Ⅱ区南側溝 | 10.4 | | | 11.3 | | | 内弯 | | | — | | | 草花 | 銹絵0.15 | 銹絵染付 | 陶・灰 | 中間 | C' | | 多 | |
| 銹絵染付 | 183 | 1920 | KTCW11B0057(平碗) | Ⅱ区撹乱 | — | 3.8 | 0.2 | | | | | 直C面 | 高台内 径0.5○ | A | ○ | | 草花 | 銹絵0.1 | 銹絵染付 | 陶・灰 | ヤヤ高 | C' | ○ | 多 | |
| 銹絵染付 | 184 | 810 | KTCW11AK0027(平碗) | Ⅵ区SXc14 | 12.4 | 3.9 | 0.25 | 12.7 | 4.0 | 4.1 | 外傾→内弯 | ハB面 | | A | ○ | | アヤ? | 銹絵0.15～染付0.2 | 銹絵染付 | 磁・暗灰 | ヤヤ高・胎土ヤヤ灰色味 | C' | | 多 | 胎土ヤヤ灰色味 |
| 銹絵染付 | 185 | 1900 | KTCW11AK0018(皿) | Ⅵ区SXc13 | | 3.6 | 0.25 | | | | | ハA面 | 低兜巾 | A | | | ? | ? | 銹絵染付 | 磁・白 | 高 | A | ○ | 多 | |
| 銹絵染付・瓶? | 186 | 575 | KTCW11IZ0048 | Ⅴ区SXc09外堀 | 8.6 | 8.4 | — | — | — | — | — | — | 切り高台 | — | | | ? | 銹絵0.1染付0.2 | 銹絵染付 | 陶・褐 | 中間・褐色ザラメ状 | | ○ | 多 | |
| 染付? | 187 | 716 | KTCW11AK0016 | Ⅵ区SXc13 | 11.1 | 3.5 | 0.35 | (11.5) | (6.0) | 6.2 | | ハD面 | 渦高台? | A | | | | | 銹染or銹絵 | 陶・黄白 | ヤヤ低・胎土濁 | C | ○ | 多 | 特殊器形高台際に放射線状ケズリ痕　関西系 |
| 銹絵染付 | B508 | B508 | KTCW8CX0018 | 高松城跡(西の丸町)B地区 | — | — | — | — | — | — | 外傾 | — | — | A | — | — | 流水文? | 銹0.15染0.2 | 銹染付 | 磁・黄白 | ヤヤ高 | C | — | 少 | |
| 銹絵 | 188 | 808 | KTCW11AK0024・0057 | Ⅵ区SXc14・SXc84より東掘り下げ中 | 9.6 | 3.2 | 0.25 | 10.2 | 4.4 | 5.7 | 内弯 | ハC面 | 高台内 径0.6○・低兜巾 | A | | | 草花 | | 銹絵 | 陶・黄白 | 低 | C | | 多 | (少し粉っぽい釉) |
| 銹絵 | 189 | 679 | KTCW11AX0011・K0019・K0020 | Ⅵ区SXc10・SXc13・SXc13東西トレンチ | 9.0 | 3.0 | 0.15～0.2 | 9.4 | 5.3 | 5.8 | 直立 | 直Aヤヤ面 | 低兜巾 | A | | | | | 銹絵 | 陶・黄白 | ヤヤ低 | C | | 少 | |
| 銹絵 | 190 | 807 | KTCW11AK0024 | Ⅵ区SXc14 | 9.8 | 3.6 | 0.2～0.25 | 10.3 | 4.6 | 5.9 | 内弯 | 直Bヤヤ面 | 高台中央0.9の渦兜巾 | A | | | ? | | 銹絵 | 陶・黄白 | ヤヤ低 | C | | 少 | 見込み部3つ目跡 |
| 銹絵(根引松) | 191 | 1885 | KTCW11A0003 | Ⅵ区L=1.5精査 | — | 4.4 | 0.35 | | | | | ハB?面 | 渦高台 | A | | | 根引松 | 銹絵0.2 | 銹絵 | 陶・黄(橙) | ヤヤ低 | C | | 多 | 含有粒多い |
| 銹絵 | 192 | 2029 | KTCW11ZI0048 | Ⅴ区SXc09外堀最下層 | 11.0 | — | | | | | 内弯(細片) | | | — | | | 笹? | 銹絵0.35 | 銹絵 | 磁・灰白 | ヤヤ高 | A | ○ | 少 | |
| 銹絵・灰色胎土 | 193 | 2030 | KTCW11AK0021 | Ⅵ区SXc13 | 9.8 | — | | | | | 直立 | | | — | | | 木? | 銹絵0.1 | 銹絵 | 磁・灰 | ヤヤ高・胎土灰色味 | A | ○ | 多 | 腰細　胎土灰色味 |
| 銹絵 | 194 | 2031 | KTCW11AK0018(鉢?) | Ⅵ区SXc13 | 10.4 | — | | | | | 端部内弯 | | | — | | | 草花 | 銹絵0.15 | 銹絵 | 陶・褐灰 | 低・(褐色系・軟質) | A | ○ | 中 | 口縁端部肥大 |
| 銹絵 | 195 | 2032 | KTCW11B0063(袋物?) | Ⅱ区撹乱 | — | — | | | | | | | | — | | | 笹 | 銹絵0.3 | 銹絵 | 陶・黄白 | ヤヤ低 | C | | 中 | |
| 銹絵 | 196 | 2033 | KTCW11C0041(瓶?) | Ⅰ区撹乱 | — | — | | | | | | | | — | | | 笹 | 銹絵0.4 | 銹絵 | 陶・黄白 | 低 | C | | 多 | |
| 銹絵 | 197 | 2034 | KTCW11I0041(瓶?) | Ⅳ区撹乱 | — | 5.2 | | | | | | 平 | | | | | ? | 銹絵0.25 | 銹絵 | 磁・灰白 | ヤヤ低 | C | | 少 | |
| 銹絵(内面) | 198 | 2035 | KTCW11AK0021 | Ⅵ区SXc14(西半部) | — | 4.0 | 0.2 | | | | | ハB面 | | A | | | | 銹絵0.1 | 銹絵 | 磁・黄白 | ヤヤ高 | B | | 中 | |
| 銹絵(内面)・平碗 | 199 | 2036 | KTCW11IZ0049(平碗) | Ⅴ区SXc09ベルト | — | 3.8 | 0.25 | | | | | ヤヤハA面 | | A | | | ? | 銹絵0.15 | 銹絵(内面) | 磁・白 | ヤヤ高 | A | ○ | 中 | |
| 銹絵・平碗 | 200 | 2037 | KTCW11AK0016(平碗) | Ⅵ区SXc13 | 12.0 | 4.4 | 0.3 | 13.0 | 4.1 | 4.4 | ヤヤ外傾 | 直B面 | | A | | | ? | 銹絵0.2 | 銹絵(内面) | 磁?・黄灰 | 中・(隙間あり) | B | | 中 | |
| 銹絵 | 201 | 1927 | KTCW11D0101(鉢?) | Ⅶ区撹乱c69 | — | 4.9 | 0.4 | | | | | ハB?面 | 低兜巾 | A | 一部○ | | 笹? | 銹絵0.3 | 銹絵(内・外面) | 陶・灰 | ヤヤ高 | B | | 中 | 目跡??2ツ |
| 銹絵 | 202 | 2038 | KTCW11D0040(瓶) | Ⅶ区L=1.1m精査 | — | — | | | | | | | | | | | 松? | 銹絵0.1 | 銹絵 | 陶・黄白 | 低 | C | | 多 | |
| 銹絵 | 203 | 339 | KTCW11BP0006(瓶) | Ⅲ区SPc101 | — | — | | | | | | | | | | | ? | 銹絵0.1 | 銹絵 | 磁・白 | 高 | A | | 少 | |
| 銹絵(根引松?) | 204 | 1925 | KTCW11D0040 | Ⅶ区L=1.1m面精査 | — | 2.6 | 量付=点 | | | | | ハD面 | 割高台・渦高台 | A | | | 根引松? | 銹絵0.1 | 銹絵 | 陶・黄白 | 低 | C | | 少 | 特殊器形 |
| 銹絵(根引松) | 205 | 1316 | KTCW11DK0015 | Ⅶ区SKc27 | — | 2.7 | 量付=点 | — | — | — | — | ハD面 | 渦高台・割高台 | A | | | 根引松 | 銹絵0.1 | 銹絵 | 陶・黄白 | 低 | C | — | — | |
| 銹絵(根引松) | 206 | 1918 | KTCW11B0061 | Ⅱ区撹乱 | — | 3.1 | 0.25 | | | | | ハB面 | 低兜巾 | A | | | 根引松 | 銹絵0.2 | 銹絵 | 磁・灰白 | ヤヤ高 | B | | 中 | |
| 銹絵(根引松) | 207 | 1949 | KTCW11IZ0036 | Ⅴ区SXc09外堀 | 9.4 | 3.1 | 0.2 | 9.7 | | 5.3 | 外傾 | ハC面 | 低兜巾 | A | | | 根引松 | 銹絵0.1 | 銹絵 | 磁・灰 | ヤヤ高 | B | | 少 | |
| 銹絵(根引松) | 208 | 1951 | KTCW11I0092 | Ⅳ区SZc13上面堆積土L=0.8～SZc13石材 | — | 3.8 | 0.2 | | | | | ハC面 | | A | | | 根引松 | 銹絵0.1 | 銹絵 | 陶・白 | ヤヤ低 | D | | 中 | |
| 銹絵(根引松) | 209 | 2039 | KTCW11B0061 | Ⅱ区撹乱 | — | — | | | | | 外傾 | | | A | | | 根引松 | 銹絵0.3 | 銹絵 | 磁・灰 | ヤヤ低 | C | | 多 | 茶色のシミor粒全面に有り |
| 銹絵(根引松) | 210 | 2040 | KTCW11IZ0048 | Ⅴ区SXc09外堀最下層 | 11.0? | — | | | | | 外傾 | | | | | | 根引松 | 銹絵0.1 | 銹絵 | 磁・灰白 | 低 | A | | 中 | |
| 銹絵(根引松) | 211 | 2041 | KTCW11B0019 | Ⅱ区撹乱含む掘り下げ | — | — | | | | | | | | A | | | 根引松 | 銹絵0.1 | 銹絵 | 磁・灰 | 低 | B | | 少 | |
| 銹絵(根引松) | 212 | 2042 | KTCW11B0070 | Ⅱ区SDc09撹乱部トレンチ | — | — | | | | | | | | | | | 根引松 | 銹絵0.1 | 銹絵 | 磁・灰 | ヤヤ高 | C | | | |
| 銹絵(根引松) | 213 | 2043 | KTCW11B0109 | Ⅱ区掘り下げ中L=1.3～1.2m | 13.0? | — | | | | | 外傾 | | | | | | 根引松 | 銹絵0.2 | 銹絵 | 磁・灰 | 高 | C | | 少 | |
| 無文(小杉形) | 214 | 2044 | KTCW11I0065 | Ⅴ区撹乱 | 9.0 | | | | | | 外傾 | | | A | | | | | | 陶・黄白 | 低 | C | | 中 | |
| 無文(小杉形) | 215 | 2045 | KTCW11B0130 | Ⅲ区第1面精査 | — | — | | | | | | | | A | | | | | | 陶・黄白 | 低 | A | | 少 | |
| 無文(小杉形) | 216 | 2046 | KTCW11AX0011 | Ⅵ区SXc10 | — | — | | | | | | | | A | | | | | | 磁・灰白 | ヤヤ高 | B | | 中 | |
| 無文(小杉形) | 217 | 653 | KTCW11AK0012 | Ⅵ区SKc15 | 8.8 | 3.4 | 0.25 | | | 5.7 | 外傾 | ハC一 | 墨書 | A | | | | | | 陶・黄白 | 高 | C | | 中 | |
| 無文(小杉形) | 218 | 2047 | KTCW11I0065 | Ⅴ区撹乱 | | 3.4 | 0.15 | | | | | ヤヤハCヤヤ面 | | A | | | | | | 磁・黄白 | ヤヤ高 | B | | 多 | |
| 無文(小杉形) | 219 | 2048 | KTCW11E0048 | Ⅸ区掘り下げ(表土～) | | 3.2 | 0.15 | | | | | 直Cヤヤ面 | | A | | | | | | 陶・黄白 | ヤヤ高 | C | | | |
| 無文(小杉形) | 220 | 2049 | KTCW11I0118 | Ⅳ区SZc13前面堆積土0.8～0.5m | — | — | | | | | | | | A | | | | | | 磁・灰白 | ヤヤ低・(隙間あり) | B | | 多 | |
| 無文(小杉形) | 221 | 2050 | KTCW11I0035 | Ⅳ区0.9m精査 | | 3.0 | 0.25 | | | | | 直C面 | | A | | | | | | 磁・灰 | ヤヤ高 | C | ○? | 中 | |
| 無文(小杉形) | 222 | 2051 | KTCW11IZ0081 | Ⅳ区SZc13裏込め石材検出中 | | 5.0 | 0.15 | | | | | 直C面 | | A | | | | | | 磁?・灰 | ヤヤ低 | C | | 中 | |
| 無文(小杉形) | 223 | 2052 | KTCW11B0058 | Ⅱ区撹乱 | — | — | | | | | | | | B | | | | | | 陶・黄白 | ヤヤ高 | D | | 中 | 段下位にも施釉及ぶ |
| 無文(小杉形) | 224 | 2053 | KTCW11D0035 | Ⅶ区L=1.3m精査 | — | 3.4 | 0.15 | | | | | 内C面 | | A | | | | | | 陶・黄白 | ヤヤ低・(褐色系) | C | | 中 | |
| 無文(小杉形) | 225 | 2054 | KTCW11IZ0049 | Ⅴ区SXc09ベルト | | 3.4 | 0.2 | | | | | ハAヤヤ面 | | A | | | | | | 磁・灰 | ヤヤ高 | B | | 中 | |
| 無文(小杉形) | 226 | 2055 | KTCW11B0061 | Ⅱ区撹乱 | — | ? | 0.15 | | | | | ハBヤヤ面 | | A | | | | | | 磁・灰 | ヤヤ高 | B | | 中 | |
| 無文(小杉形) | 227 | 2056 | KTCW11D0062 | Ⅶ区撹乱 | — | 3.4 | 0.15～0.2 | | | | | ハC一 | | B | | | | | | 磁・灰白 | ヤヤ高 | B | ○ | 少 | 畳付部際まで施釉 |
| 無文(小杉形) | 228 | 2057 | KTCW11I0065 | Ⅱ区撹乱 | | 3.4 | 0.15 | | | | | 直A面 | | A | | | | | | 磁・白 | ヤヤ高 | C | ○? | 少 | |
| 銹絵 | B509 | B509 | KTCW8CX0022 | 高松城跡(西の丸町)B地区 | — | — | — | — | — | — | 端反 | — | — | — | — | — | 木葉? | 銹?0.15 | 銹絵? | 磁・暗灰 | ヤヤ低(灰) | D' | ○ | 中 | |
| 銹絵(B509同一?) | B510 | B510 | KTCW8CX0018 | 高松城跡(西の丸町)B地区 | — | — | 0.15 | — | — | — | — | 直Cヤヤ面 | 低兜巾 | A | — | — | 木葉? | 銹?0.1 | 銹絵? | 磁・暗灰 | ヤヤ低(灰) | D' | ○ | 中 | |

第19表　京・信楽系陶器一覧表(3/3)

## 引用文献・主要参考文献


飯田町遺跡調査会1995『飯田町遺跡』
井汲隆夫1992「近世やきものの器種分化」『新宿区　内藤町遺跡』
稲垣正宏2000「四国窯と信楽焼」『第２回　徳島城下町研究会　四国・淡路の陶磁器－生産と流通Ⅰ－』
上田秀夫1991「16世紀末から17世紀前半における中国製染付碗・皿の分類と編年への予察」『関西近世考古学研究会』Ⅰ
江浦　洋2000「大坂城跡出土の犬型土製品小考」『大阪文化財研究』第18号　㈶大阪府文化財調査センター
及川　登1999「江戸遺跡における京都・信楽系製品の流通について」『江戸遺跡研究会第12回大会　江戸の物流－陶磁器・漆器・瓦から－』江戸遺跡研究会
大嶋和則2000『都市計画道路室町新田線埋蔵文化財発掘調査報告書　第２冊　川南・東遺跡』高松市教育委員会
大嶋和則2002「高松城跡（松平大膳家中屋敷）発掘調査概要」四国城下町研究会2002
大橋康二1994『古伊万里の文様』理工学社
大橋康二2000「九州陶磁概論」『九州陶磁の編年　九州近世陶磁学会10周年記念』九州陶磁学会
大橋康二・坂井隆1999「インドネシア・バンテン遺跡出土の陶磁器」『国立歴史民俗博物館研究報告』第82集
岡佳子2001「近世京焼の展開－18世紀を中心に－」『近世信楽焼をめぐって』関西陶磁史研究会
岡佳子2002「京焼と理兵衛焼」四国城下町研究会2002
小川光彦2001「志賀島勝馬沖発見の碇石と碇石研究における諸問題」西谷正編『玄界灘における海底遺跡の探査と確認調査』
大阪市文化財協会1998『住友銅吹所跡発掘調査報告』
大阪市文化財協会1999『堂島蔵屋敷跡』
大阪市文化財協会2000『難波宮址の研究』第11
小野正敏1982「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究№２』日本貿易陶磁研究会
尾上　実1983「南河内の瓦器椀」『藤澤一夫先生古稀記念古文化論叢』
香川県教育委員会1987『高松城東ノ丸跡発掘調査報告書』
香川県立文書館1998・1999『香川県立文書館資料集１・２　高松藩御令之内書抜上巻・下巻』
片桐孝浩1994「古代から中世にかけての土器様相－香川県における予察－」『中小河川大足川改修工事(津の郷橋～弘光橋間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　川津元結木遺跡』㈶香川県埋蔵文化財調査センターほか
川口宏海1990「16世紀における大和型土釜の動向」『中近世土器研究会』Ⅳ　日本中世土器研究会
関西陶磁史研究会2001『近世信楽焼をめぐって』
九州近世陶磁学会2000『九州陶磁の編年　九州近世陶磁学会10周年記念』
北山健一郎1999『香川県立博物館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　高松城跡』㈶香川県埋蔵文化財調査センターほか
日下正剛1998『新蔵町１丁目遺跡　企業局総合管理センター地点』徳島県埋蔵文化財センター
日下正剛2000ａ「徳島城下町」『江戸遺跡研究会第13回大会　江戸と国元』江戸遺跡研究会
日下正剛2000ｂ「大谷焼・源内焼」『第２回徳島城下町研究会　四国・淡路の陶磁器－生産と流通Ⅰ－』
日下正剛2000ｃ『新蔵町１丁目遺跡　企業局総合管理事務所地点Ⅱ』徳島県埋蔵文化財センター
日下正剛2002『南前川町１丁目遺跡』徳島県埋蔵文化財センター
財団法人　小谷城郷土館2000『シンポジウム　焼塩壷の旅－ものの始まり堺－』
佐賀県立九州陶磁文化館1984『国内出土の肥前陶磁』
佐賀県立九州陶磁文化館1996『土と炎－九州陶磁の歴史的展開－』
佐藤　隆2000「実年代資料　大坂」『第12回　関西近世考古学研究会大会　近世の実年代資料』
佐藤雅彦編1968『日本の美術　京焼』第28号　至文堂
佐藤竜馬1998「十瓶山窯と亀山窯」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　研究紀要』Ⅳ　㈶香川県埋蔵文化財調査センター
佐藤竜馬2000『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第４冊　空港跡地遺跡Ⅳ』㈶香川県埋蔵文化財調査センターほか
佐藤竜馬2001ａ「高松城跡（西の丸町）の資料整理」『平成12年度サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告　浜ノ町遺跡・高松城跡（西の丸町）・西打遺跡』㈶香川県埋蔵文化財調査センターほか
佐藤竜馬2001ｂ「瀬戸内沿岸地域からみた讃岐の焙烙」『第３回四国徳島城下町研究会　四国と周辺の土器－炮烙の生産と流通－』

佐藤竜馬2002「香川県監獄署における窯業生産」四国城下町研究会2002
佐藤竜馬2003刊行予定『サンポート高松総合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第４冊　高松城跡（西の丸町地区）Ⅱ』㈶香川県埋蔵文化財調査センターほか
實川順一1995「出土理兵衛焼の集成」『飯田町遺跡』飯田町遺跡調査会
白神典之1992「堺摺鉢考」『東洋陶磁』第19号
新宿区内藤町遺跡調査会1992『東京都新宿区　内藤町遺跡』
鋤柄俊夫・森毅1999「豊臣期大坂城跡における三ノ丸築造以前の基準資料」『大阪市文化財協会研究紀要』第２号　大阪市文化財協会
鈴木正貴2001「東海地方の土器・陶磁器流通」『戦国・織豊期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品』財団法人　瀬戸市埋蔵文化財センター
鈴木裕子2002「理兵衛焼雑感－第４回四国城下町研究会に参加して－」『四国城下町通信』第10号
積山　洋1994「消費地報告　大坂」『近世陶磁器の諸様相』関西近世考古学研究会
積山　洋1995「近世大坂出土の土師質土器編年、素描」『大阪府埋蔵文化財協会　研究紀要３』
田中一廣1992「泉州名産『焼塩壷』」『関西近世考古学研究』Ⅱ
中央公論社1989『普及版　日本の陶磁13　京焼』林屋晴三
千代田区飯田町遺跡調査会ほか2001『飯田町遺跡』
東京大学埋蔵文化財調査室編1990『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書３　東京大学本郷構内の世紀医学部附属病院地点』
同志社大学校地学術調査委員会1990『同志社大学　徳照館地点・新島会館地点の発掘調査』
豊田　基1965「東讃の古窯に関する研究－特に富田焼について－」『文化財協会報』特別号７　香川県文化財保護協会
豊田　基1968「讃岐のお庭焼きについて」『香川県文化財調査報告』第九　香川県教育委員会
豊田　基1982「讃岐のやきもの」『日本やきもの集成10　四国』平凡社
豊田　基1995「讃岐の諸窯について」『飯田町遺跡』飯田町遺跡調査会
長佐古真也1994「江戸遺跡における18世紀後半の陶磁器組成－尾張藩麹町邸跡出土一括資料を中心に－」『尾張藩麹町邸跡』紀尾井町６－18遺跡調査会ほか
長佐古真也2001「近世期の日常喫茶と陶磁器－信楽における小物生産転換への予察－」『近世信楽焼をめぐって』関西陶磁史研究会
長佐古真也2002ａ「「お茶碗」考」『国立歴史民俗博物館研究報告　第94集』国立歴史民俗博物館
長佐古真也2002ｂ「考古学の方法で見る「京焼」－その多面性－」四国城下町研究会2002
中野雄二1998『三股青磁窯跡』長崎県波佐見町教育委員会
中野雄二2001『智恵治窯跡』長崎県波佐見町教育委員会
仲野泰裕2000「江戸藩邸・国元における軟質陶器の焼成－尾張藩江戸上屋敷楽々園焼を中心として－」『江戸遺跡研究会第13回大会　江戸と国元』江戸遺跡研究会
仲野泰裕2002「御用窯再考・廃藩と御用焼物師」四国城下町研究会2002
成瀬晃司2000「江戸遺跡における実年代資料」『第12回　関西近世考古学研究会大会　近世の実年代資料』
難波洋三1992「徳川大坂城期の炮烙」『難波宮址の研究』第９
能芝　勉2002「第４回四国城下町研究会に参加して」『四国城下町通信』第10号
乗岡　実1999「近世備前焼の擂鉢」『関西近世考古学研究　Ⅶ　特集　上方と江戸』関西近世考古学研究会
乗岡　実2000「備前焼擂鉢の編年について」『第３回中近世備前焼研究会資料』中近世備前焼研究会
乗岡　実2002『岡山城三之曲輪跡－表町一丁目地区再開発ビル建設に伴う発掘調査－』岡山市教育委員会
乗松真也編2002ａ『平成13年度高松家庭裁判所移転に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告　高松城跡（丸の内地区）』㈶香川県埋蔵文化財調査センターほか
乗松真也編2002ｂ『平成13年度サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要　浜ノ町遺跡』㈶香川県埋蔵文化財調査センターほか
橋本久和1977『上牧遺跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会
林屋晴三編1989『京焼』日本の陶磁13　中央公論社
備前市教育委員会1998『備前焼紀年銘土型調査報告』
福岡市教育委員会1998『博多61－下川端地区市街地再開発事業に伴う博多遺跡群第89次調査の概要－』
藤澤良祐1987「本業焼の変遷（１）」『瀬戸市歴史民俗資料館　研究紀要　Ⅵ』瀬戸市歴史民俗資料館
藤澤良祐1993『瀬戸市史　陶磁史篇』瀬戸市

藤澤良祐1998「近世瀬戸磁器編年の再検討－磁器端反碗を中心に－」『楢崎彰一先生古希記念論文集』
藤澤良祐2000「西日本における瀬戸・美濃大窯製品の受容」『列島に華開く大窯製品　西日本の様相』㈶瀬戸
藤澤良祐2001「瀬戸・美濃大窯製品の生産と流通－研究の現状と課題－」『戦国・織豊期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品』財団法人　瀬戸市埋蔵文化財センター
藤本史子2002「理兵衛焼と富田焼の関係」四国城下町研究会2002
藤好史郎1996『高松港頭土地区画整理事業平成７年度埋蔵文化財発掘調査概報　高松城跡』㈶香川県埋蔵文化財調査センターほか
藤好史郎・佐藤竜馬1997『高松港頭土地区画整理事業平成８年度埋蔵文化財発掘調査概要　高松城跡（西の丸町）』㈶香川県埋蔵文化財調査センターほか
古野徳久ほか2000『平成11年度サンポート高松整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告　高松城跡（西の丸町）・浜ノ町遺跡』㈶香川県埋蔵文化財調査センターほか
古野徳久2001『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第３冊　高松城跡（西の丸町地区）Ⅰ』㈶香川県埋蔵文化財調査センターほか
北條ゆうこ1998「近世阿波のしめなわ文茶碗」『徳島県立博物館研究報告』第８号
北條ゆうこ2001「徳島出土のしめなわ文茶碗」『近世信楽焼をめぐって』関西陶磁史研究会
堀内秀樹1997「東京大学本郷校内の遺跡における年代的考察」『東京大学校内遺跡調査研究年報Ⅰ　1996年度』東京大学埋蔵文化財調査室
堀内秀樹2000「江戸遺跡出土陶磁器の段階設定とその画期」『竹石健二先生・澤田大多郎先生還暦記念論文集』
松田直則2001「中国・四国の様相」『戦国・織豊期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品』
松本和彦2000『都市計画道路錦町国分寺綾南線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　松並・中所遺跡』㈶香川県埋蔵文化財調査センターほか
松本和彦2001「高松城における土器・陶磁器の様相　高松城編年様相６の基準資料の紹介とその問題点」『四国徳島城下町通信』７号
松本和彦2002ａ「四国地方－香川県－」『第12回九州近世陶磁学会　国内出土の肥前陶磁　西日本の流通をさぐる』九州近世陶磁学会
松本和彦2002ｂ「高松城跡出土の京・信楽系陶器と理兵衛焼」四国城下町研究会2002
松本和彦2002ｃ「第４回四国城下町研究会に参加して」『四国城下町通信』第10号
松本和彦・佐藤竜馬2001「高松城出土土器・陶磁器の変遷　様相の把握」『第３回四国徳島城下町研究会　四国と周辺の土器－炮烙の生産と流通－　佐藤発表追加資料』
森　毅　1992「16世紀後半から17世紀初頭の陶磁器」『難波宮址の研究』第９　財団法人　大阪市文化財協会
森下英治ほか1998『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第29冊　龍川五条遺跡Ⅱほか』㈶香川県埋蔵文化財調査センターほか
森下友子1996「高松城下の絵図と城下の変遷」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　研究紀要』Ⅳ　㈶香川県埋蔵文化財調査センター
森下友子1998『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第３冊　空港跡地遺跡Ⅲ』香川県教育委員会ほか
森下友子2000「富田－吉金窯跡－出土の様相」『第２回徳島城下町研究会四国・淡路の陶磁器－生産と流通Ⅰ－』
森下友子2002「紀太家由緒書と理兵衛焼」四国城下町研究会2002
森島康雄1992「畿内産瓦器椀の併行関係と暦年代」『大和の中世土器Ⅱ』大和古中近研究会
森田克行1984『摂津　高槻城』高槻市教育委員会
森田　稔1995「中世須恵器」『概説　中世の土器・陶磁器』中世時研究会編
森村健一1995「福建省漳州窯青花・五彩・瑠璃地の編年」『大阪府埋蔵文化財協会　研究紀要３』
森村健一1998「福建省漳州窯青花（スワトウ・ウェア）と近世開花」『楢崎彰一先生古希記念論文集』
矢田俊文2001「文献史学から見た陶磁器流通」『戦国・織豊期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品』
山本悦代1993「吉備系土師器椀の成立と展開」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告書　第６冊　鹿田遺跡３』岡山大学埋蔵文化財研究センター
山本悦代1997「岡山南部における土師器鍋の変遷」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告書　第11冊　鹿田遺跡４』岡山大学埋蔵文化財研究センター
山本信夫1995「中世前期の貿易陶磁器」『概説　中世の土器・陶磁器』中世時研究会編
横田賢次郎・森田勉1978「太宰府出土の貿易陶磁」『九州歴史資料館研究論集４』
リチャード・Ｌ・ウィルソン1995「京焼と理兵衛焼」『飯田町遺跡』飯田町遺跡調査会

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | たかまつじょうあと(にしのまるちょうちく)さん |
| 書名 | 高松城跡(西の丸町地区)Ⅲ |
| 副書名 | |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 |
| シリーズ番号 | 第5冊 |
| 編著者名 | 松本和彦・陶山仁美 |
| 編集機関 | 財団法人　香川県埋蔵文化財調査センター |
| 所在地 | 〒762－0024　香川県坂出市府中町南谷5001－4　　電話　㈹0877－48－2191 |
| 発行機関名 | 香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター |
| 発行年月日 | 西暦2003年3月31日 |

| 総頁数 | 目次等 | 本文 | 観察表 | 図版 | 写真枚数 | 挿図枚数 | 付図枚数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 610頁 | 22頁 | 450頁 | 59頁 | 138頁 | 916枚 | 259枚 | 6枚 |

| 所収遺跡名(ふりがな) | 所在地(ふりがな) | コード 市町 | コード 遺跡 | 北緯 °′″ | 東経 °′″ | 調査期間 | 調査面積 m² | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| たかまつじょうあと 高松城跡 (にしのまるちょうちくさん)(西の丸町地区)Ⅲ | かがわけんたかまつしにしのまるちょう 香川県高松市西の丸町 | 37201 | | 34度20分40秒 | 134度30分50秒 | 19970601～19970731<br>19990401～20000331<br>20001101～20001231 | 10,052m² | サンポート高松総合整備事業 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| たかまつじょうあと 高松城跡 (にしのまるちょうちくさん)(西の丸町地区)Ⅲ | 西外曲輪<br>(武家屋敷) | 鎌倉時代<br>江戸時代 | 礫敷遺構・土坑<br>石垣・突堤・礎石建物・掘立柱建物・石組溝・井戸 | 須恵器・瓦器椀・吉備系土師器・中国産磁器・和鏡・石仏・木製碇<br>陶器・磁器・土師質土器<br>漆器・銅製品 | 湊(港湾施設、和泉型瓦器椀の搬入港か)<br>搬入品の多寡<br>海域へ拡張を示す石垣を4列確認<br>理兵衛焼 |

サンポート高松総合整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告
第５冊

# 高松城跡（西の丸町地区）Ⅲ
## 第１分冊

編集　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
　　香川県坂出市府中町字南谷5001番の４
発行　香　川　県　教　育　委　員　会
　　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
印刷　タナカ印刷株式会社

サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第５冊

# 高松城跡（西の丸町地区）Ⅲ

第２分冊

2003．3

香　川　県　教　育　委　員　会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第５冊

# 高松城跡（西の丸町地区）Ⅲ

第２分冊

2003．3

香　川　県　教　育　委　員　会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

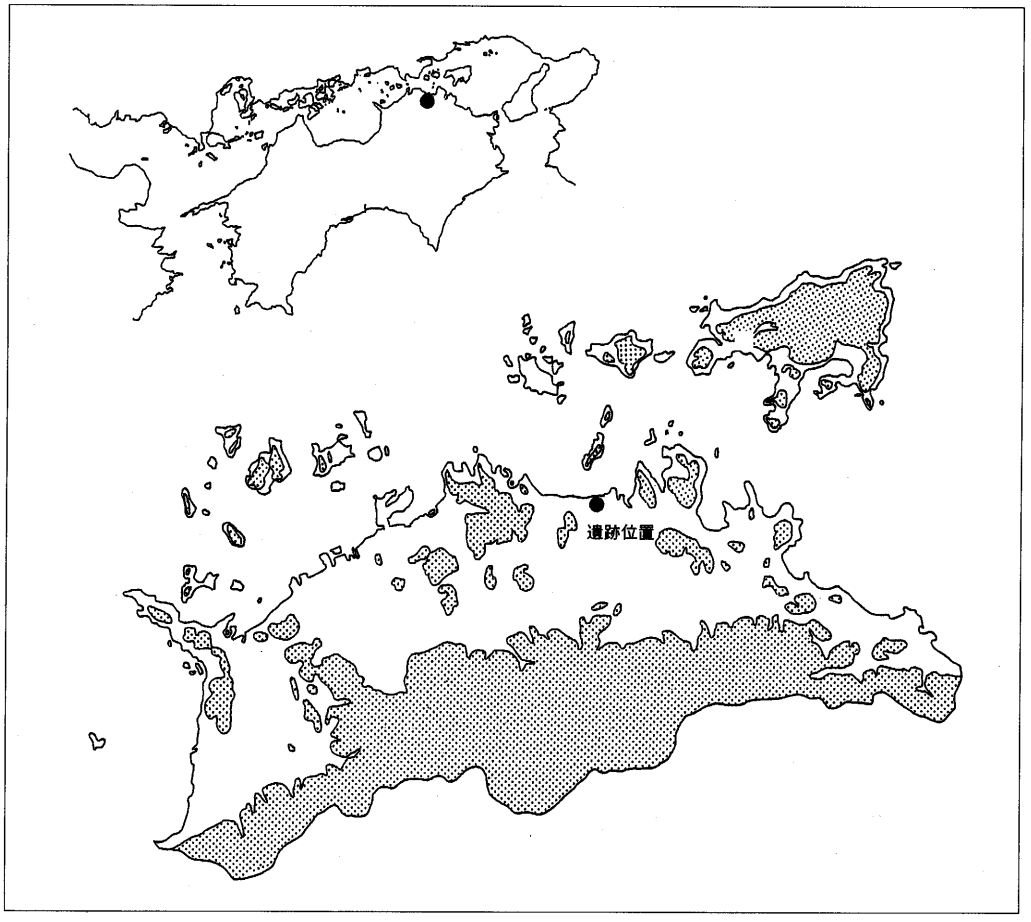
# 第２分冊目次


第１～112図　遺構挿図……１～119
第113～224図　遺物挿図……120～232

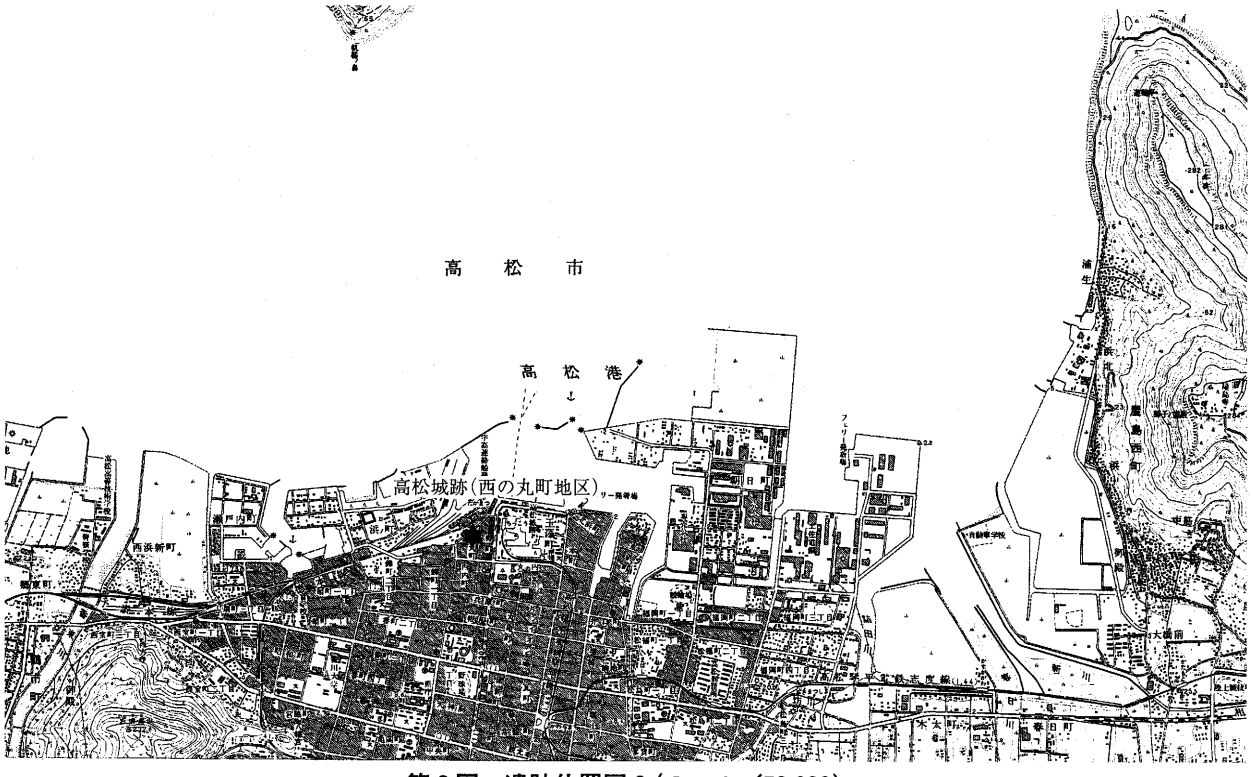
第１図　遺跡位置図１
第２図　遺跡位置図２（Ｓ＝１／50,000）
第３図　高松城跡（西の丸町地区）位置図３（高松城下図を基に作成）
第４図　『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』（森下1996より抜粋）
第５図　『讃岐高松丸亀両城図　高松城下図』（森下1996より抜粋）
第６図　『高松城下図屏風』（胡1997より抜粋）
第７図　『高松城下図』（森下1996より抜粋）
第８図　『高松市街古図』（高松市歴史資料館蔵）
第９図　『天保15年高松之図』（森下1996より抜粋）
第10図　『高松城全図』（森下1996より抜粋）
第11図　『高松市街明細全図』（森下1996より抜粋）
第12図　高松城跡（西の丸町地区）地区割図
第13図　高松城跡（西の丸町Ｃ地区）調査時調査区割図（Ｓ＝１／1,000）
第14図　高松城跡（西の丸町Ｃ地区）報告調査区割図（Ｓ＝１／1,000）
第15図　高松城跡（西の丸町Ｃ地区）石垣平面図（Ｓ＝１／1,000）
第16図　石垣からの想定面概念図
第17図　基本層序断面位置図（Ｓ＝１／1,000）
第18図　基本層序図１（天地Ｓ＝１／80、左右Ｓ＝１／160）
第19図　基本層序図２（天地Ｓ＝１／80、左右Ｓ＝１／160）
第20図　Ⅰ区　第１面遺構配置図（Ｓ＝１／200）
第21図　Ⅰ区　第２面遺構配置図（Ｓ＝１／200）
第22図　Ⅰ区　第３面遺構配置図（Ｓ＝１／200）
第23図　Ⅰ区　壁面図１（天地Ｓ＝１／40、左右Ｓ＝１／80）
第24図　Ⅰ区　壁面図２～３（天地Ｓ＝１／40、左右Ｓ＝１／80）
第25図　Ⅰ区　第１面ＳＤｃ02～05平・断面図及び立面図
第26図　Ⅰ区　第１面ＳＤｃ06他平・断面図
第27図　Ⅰ区　第２面ＳＢｃ01、ＳＤｃ01平・断面図
第28図　Ⅰ区　第３面ＳＸｃ01・02平・断面図
第29図　Ⅰ区　第３面ＳＺｃ01平・断面図及び立面図
第30図　Ⅱ区　第１面遺構配置図（Ｓ＝１／200）
第31図　Ⅱ区　第２面遺構配置図（Ｓ＝１／200）
第32図　Ⅱ区　壁面図１（天地Ｓ＝１／40、左右Ｓ＝１／80）
第33図　Ⅱ区　壁面図２・３（Ｓ＝１／40）
第34図　Ⅱ区　第１面上位図ＳＢｃ02平・断面図（黒；上位、赤；下位）
第35図　Ⅱ区　第１面上位面ＳＢｃ03平・断面図
第36図　Ⅱ区　第１面上位面ＳＢｃ04・05平・断面図
第37図　Ⅱ区　第１面上位面ＳＢｃ06、ＳＸｃ03平・断面図
第38図　Ⅱ区　第１面下位面ＳＤｃ09・10平・断面図及び立面図
第39図　Ⅱ区　第１面下位面ＳＤｃ07・08平・断面図及び立面図
第40図　Ⅱ区　第２面ＳＺｃ02平・断面図
第41図　Ⅲ区　第１面遺構配置図（Ｓ＝１／200）
第42図　Ⅲ区　第２面遺構配置図（Ｓ＝１／200）
第43図　Ⅲ区　壁面図１・２（天地Ｓ＝１／40、左右Ｓ＝１／80）
第44図　Ⅲ区　第１面ＳＡｃ04、ＳＢｃ07平・断面図
第45図　Ⅲ区　遺構平・断面図１
第46図　Ⅲ区　遺構平・断面図２
第47図　Ⅲ区　遺構平・断面図３
第48図　Ⅳ区　第１面遺構配置図（Ｓ＝１／200）
第49図　Ⅳ区　第２面遺構配置図（Ｓ＝１／200）
第50図　Ⅳ区　壁面図（Ｓ＝１／40）
第51図　Ⅳ区　第１面ＳＺｃ04を利用したＳＺｃ13構築状況　平・立面図
第52図　Ⅳ区　第１面ＳＺｃ13平・立面図
第53図　Ⅳ区　第１面ＳＺｃ13断面図（Ｓ＝１／40）
第54図　Ⅳ区　第２面ＳＺｃ03･12断面図（Ｓ＝１／40）
第55図　Ⅳ区　第２面ＳＺｃ03･07･12平・立面図
第56図　Ⅳ区　第２面ＳＺｃ07～11打設杭種類
第57図　Ⅳ区　第２面ＳＺｃ04･08平・断面図及び立面図
第58図　Ⅳ区　第２面ＳＺｃ03～07、ＳＤｃ11平・断面図及び立面図
第59図　Ⅳ区　第２面ＳＢｃ08平・断面図
第60図　Ⅴ区　第１面遺構配置図（Ｓ＝１／200）
第61図　Ⅴ区　第２面遺構配置図（Ｓ＝１／200）
第62図　Ⅴ区　壁面図（天地Ｓ＝１／40、左右Ｓ＝１／80）
第63図　Ⅴ区　第１面ＳＢｃ09、ＳＸｃ09平面図
第64図　Ⅴ区　第１面ＳＸｃ09平・断面図
第65図　Ⅴ区　第２面ＳＺｃ03断面図（Ｓ＝１／40）
第66図　Ⅵ区　遺構配置図（Ｓ＝１／200）
第67図　Ⅵ区　壁面図（天地Ｓ＝１／40、左右Ｓ＝１／80）
第68図　Ⅵ区　遺構平・断面図１
第69図　Ⅵ区　遺構平・断面図２
第70図　Ⅶ区　遺構配置図（Ｓ＝１／200）
第71図　Ⅶ区　壁面図１・２（天地Ｓ＝１／40、左右Ｓ＝１／80）
第72図　Ⅶ区　遺構平・断面図１

第73図　Ⅶ区　遺構平・断面図２
第74図　Ⅷ区　第１面遺構配置図（Ｓ＝１／200）
第75図　Ⅷ区　第２面遺構配置図（Ｓ＝１／200）
第76図　Ⅷ区　第３面遺構配置図（Ｓ＝１／200）
第77図　Ⅷ区　壁面図１（天地Ｓ＝１／40、左右Ｓ＝１／80）
第78図　Ⅷ区　壁面図２・３（天地Ｓ＝１／40、左右Ｓ＝１／80）
第79図　Ⅷ区　第２面ＳＺｃ01平・断面図
第80図　Ⅷ区　第２面ＳＺｃ01写植
第81図　Ⅷ区　遺構平・断面図１
第82図　Ⅷ区　遺構平・断面図２
第83図　Ⅷ区　遺構平・断面図３
第84図　Ⅷ区　遺構平・断面図４
第85図　Ⅷ区　遺構平・断面図５
第86図　Ⅷ区　遺構平・断面図６
第87図　Ⅸ区　第１・２面遺構配置図（Ｓ＝１／200）
第88図　Ⅸ区　第３・４面遺構配置図（Ｓ＝１／200）
第89図　Ⅸ区　壁面図１（天地Ｓ＝１／40、左右Ｓ＝１／80）
第90図　Ⅸ区　壁面図２・３（天地Ｓ＝１／40、左右Ｓ＝１／80）
第91図　Ⅸ区　遺構平・断面図１
第92図　Ⅸ区　遺構平・断面図２
第93図　Ⅸ区　遺構平・断面図３
第94図　Ⅸ区　遺構平・断面図４
第95図　Ⅸ区　遺構平・断面図５
第96図　Ⅹ区　遺構配置図（Ｓ＝１／200）
第97図　Ⅹ区　壁面図１・２（天地Ｓ＝１／40、左右Ｓ＝１／80）
第98図　Ⅹ区　遺構平・断面図１
第99図　Ⅹ区　遺構平・断面図２
第100図　Ⅹ区　遺構平・断面図３
第101図　Ⅹ区　遺構平・断面図４
第102図　Ⅺ区　遺構配置図（Ｓ＝１／200）及び壁面図（天地Ｓ＝１／40、左右Ｓ＝１／80）
第103図　Ⅺ区　遺構平・断面図１
第104図　Ⅺ区　遺構平・断面図２
第105図　Ⅺ区　遺構平・断面図３
第106図　中世遺構配置図（Ｓ＝１／400）
第107図　Ⅹ区　ＳＸｃ30平・断面図
第108図　Ⅸ区　ＳＸｃ31平面図
第109図　Ⅸ区　ＳＸｃ31断面図（天地Ｓ＝１／40、左右Ｓ＝１／80）
第110図　Ⅷ区　ＳＸｃ34平・断面図
第111図　中世遺構平・断面図１
第112図　中世遺構平・断面図２
第113図　Ⅰ区　整地層出土遺物１
第114図　Ⅰ区　整地層出土遺物２
第115図　Ⅰ区　整地層出土遺物３、遺構出土遺物１
第116図　Ⅰ区　遺構出土遺物２
第117図　Ⅰ区　遺構出土遺物３
第118図　Ⅰ区　遺構出土遺物４
第119図　Ⅱ区　整地層出土遺物１
第120図　Ⅱ区　整地層出土遺物２
第121図　Ⅱ区　整地層出土遺物３
第122図　Ⅱ区　整地層出土遺物４
第123図　Ⅱ区　整地層出土遺物５
第124図　Ⅱ区　整地層出土遺物６、遺構出土遺物１
第125図　Ⅱ区　遺構出土遺物２
第126図　Ⅱ区　遺構出土遺物３
第127図　Ⅱ区　遺構出土遺物４
第128図　Ⅲ区　整地層出土遺物１
第129図　Ⅲ区　整地層出土遺物２
第130図　Ⅲ区　整地層出土遺物３
第131図　Ⅲ区　遺構出土遺物１
第132図　Ⅲ区　遺構出土遺物２
第133図　Ⅳ区　整地層出土遺物
第134図　Ⅳ区　遺構出土遺物１
第135図　Ⅳ区　遺構出土遺物２
第136図　Ⅳ区　遺構出土遺物３
第137図　Ⅳ区　遺構出土遺物４
第138図　Ⅳ区　遺構出土遺物５
第139図　Ⅳ区　遺構出土遺物６
第140図　Ⅳ区　遺構出土遺物７
第141図　Ⅳ区　遺構出土遺物８
第142図　Ⅳ区　遺構出土遺物９
第143図　Ⅳ区　遺構出土遺物10
第144図　Ⅴ区　整地層出土遺物、遺構出土遺物１
第145図　Ⅴ区　遺構出土遺物２
第146図　Ⅴ区　遺構出土遺物３
第147図　Ⅴ区　遺構出土遺物４
第148図　Ⅴ区　遺構出土遺物５
第149図　Ⅵ区　整地層出土遺物１
第150図　Ⅵ区　整地層出土遺物２
第151図　Ⅵ区　整地層出土遺物３、遺構出土遺物１
第152図　Ⅵ区　遺構出土遺物２
第153図　Ⅵ区　遺構出土遺物３
第154図　Ⅵ区　遺構出土遺物４
第155図　Ⅵ区　遺構出土遺物５
第156図　Ⅵ区　遺構出土遺物６
第157図　Ⅵ区　遺構出土遺物７
第158図　Ⅵ区　遺構出土遺物８
第159図　Ⅵ区　遺構出土遺物９
第160図　Ⅵ区　遺構出土遺物10
第161図　Ⅵ区　遺構出土遺物11
第162図　Ⅵ区　遺構出土遺物12
第163図　Ⅵ区　遺構出土遺物13
第164図　Ⅵ区　遺構出土遺物14
第165図　Ⅵ区　遺構出土遺物15

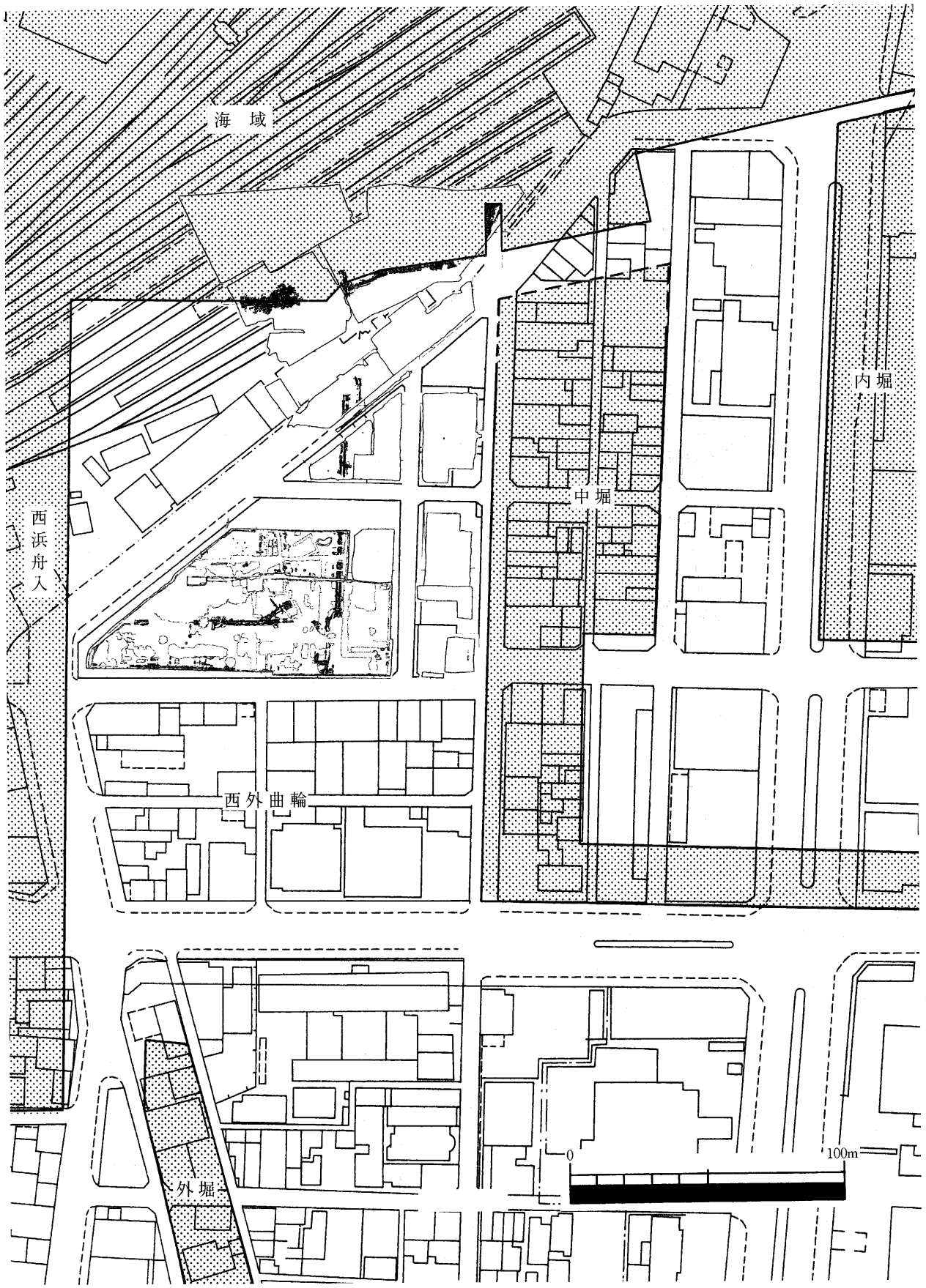
第166図　Ⅵ区　遺構出土遺物16
第167図　Ⅵ区　遺構出土遺物17
第168図　Ⅵ区　遺構出土遺物18
第169図　Ⅶ区　整地層出土遺物１
第170図　Ⅶ区　整地層出土遺物２、遺構出土遺物１
第171図　Ⅶ区　遺構出土遺物２
第172図　Ⅶ区　遺構出土遺物３
第173図　Ⅷ区　整地層出土遺物１
第174図　Ⅷ区　整地層出土遺物２
第175図　Ⅷ区　整地層出土遺物３
第176図　Ⅷ区　整地層出土遺物４
第177図　Ⅷ区　整地層出土遺物５
第178図　Ⅷ区　遺構出土遺物１
第179図　Ⅷ区　遺構出土遺物２
第180図　Ⅷ区　遺構出土遺物３
第181図　Ⅷ区　遺構出土遺物４
第182図　Ⅷ区　遺構出土遺物５
第183図　Ⅷ区　遺構出土遺物６
第184図　Ⅷ区　遺構出土遺物７
第185図　Ⅷ区　遺構出土遺物８
第186図　Ⅷ区　遺構出土遺物９
第187図　Ⅷ区　遺構出土遺物10
第188図　Ⅷ区　遺構出土遺物11
第189図　Ⅷ区　遺構出土遺物12
第190図　Ⅷ区　遺構出土遺物13
第191図　Ⅷ区　遺構出土遺物14
第192図　Ⅷ区　遺構出土遺物15
第193図　Ⅷ区　遺構出土遺物16
第194図　Ⅸ区　整地層出土遺物１
第195図　Ⅸ区　整地層出土遺物２
第196図　Ⅸ区　整地層出土遺物３
第197図　Ⅸ区　遺構出土遺物１
第198図　Ⅸ区　遺構出土遺物２
第199図　Ⅸ区　遺構出土遺物３
第200図　Ⅸ区　遺構出土遺物４
第201図　Ⅸ区　遺構出土遺物５
第202図　Ⅹ区　整地層出土遺物１
第203図　Ⅹ区　整地層出土遺物２、遺構出土遺物１
第204図　Ⅹ区　遺構出土遺物２
第205図　Ⅹ区　遺構出土遺物３
第206図　Ⅹ区　遺構出土遺物４
第207図　Ⅹ区　遺構出土遺物５
第208図　Ⅺ区　遺構出土遺物１
第209図　Ⅺ区　遺構出土遺物２
第210図　中世敷石遺構他出土遺物１
第211図　中世敷石遺構他出土遺物２
第212図　中世敷石遺構他出土遺物３
第213図　中世敷石遺構他出土遺物４
第214図　中世敷石遺構他出土遺物５
第215図　中世敷石遺構他出土遺物６
第216図　中世敷石遺構他出土遺物７
第217図　中世敷石遺構他出土遺物８
第218図　中世敷石遺構他出土遺物９
第219図　攪乱他出土遺物１
第220図　攪乱他出土遺物２
第221図　京・信楽系陶器再抽出（攪乱含む）１
第222図　京・信楽系陶器再抽出（攪乱含む）２
第223図　京・信楽系陶器再抽出（攪乱含む）３
第224図　京・信楽系陶器再抽出（攪乱含む）４



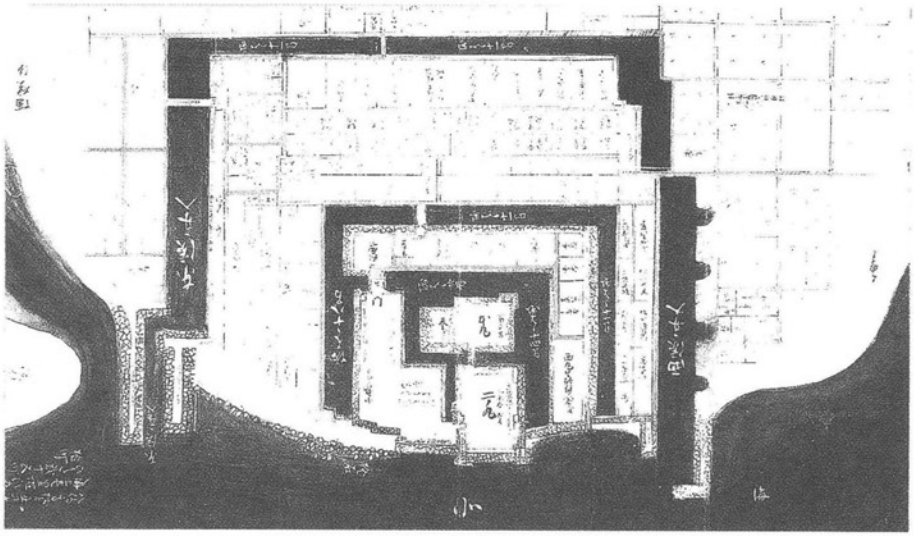

第１図　遺跡位置図１




第２図　遺跡位置図２（Ｓ＝１／50,000）

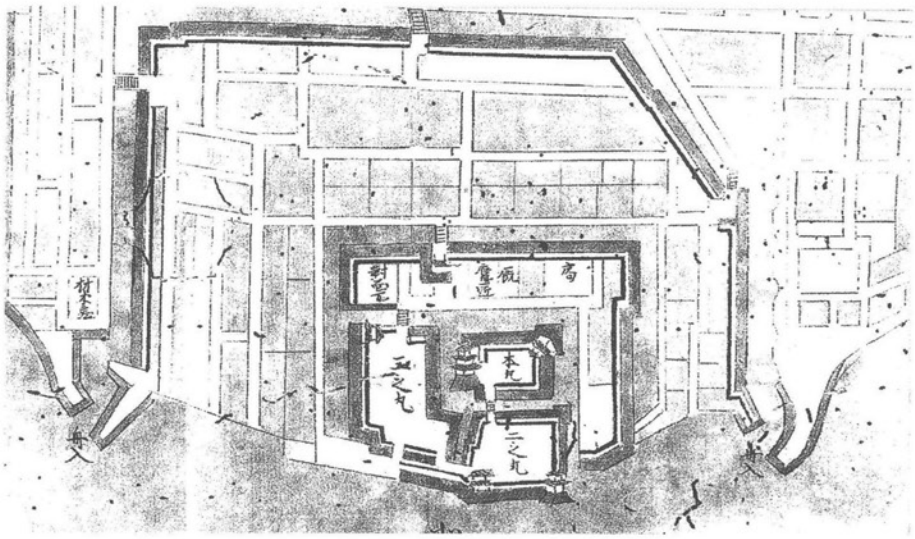



第３図　高松城跡（西の丸町地区）位置図３（高松城下図を基に作成）



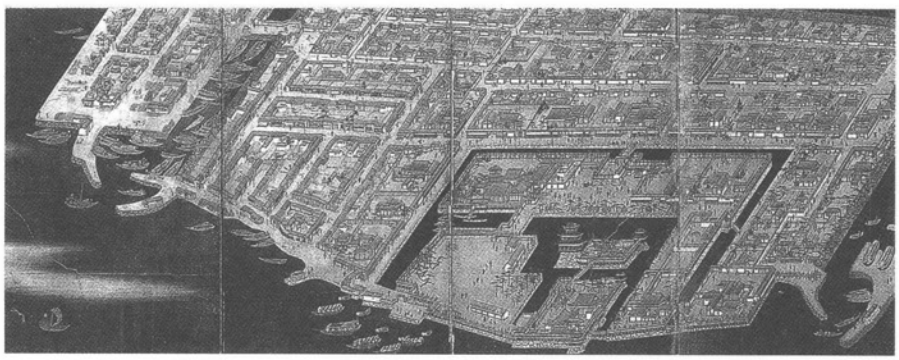
寛永15～16年(1638～1639年)
西外曲輪の屋敷地は均等割りされるが、拝領者を明記する目的に起因したものであろう。北端部東側は「蔵」と記載される。

第４図　『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』(森下1996より抜粋)



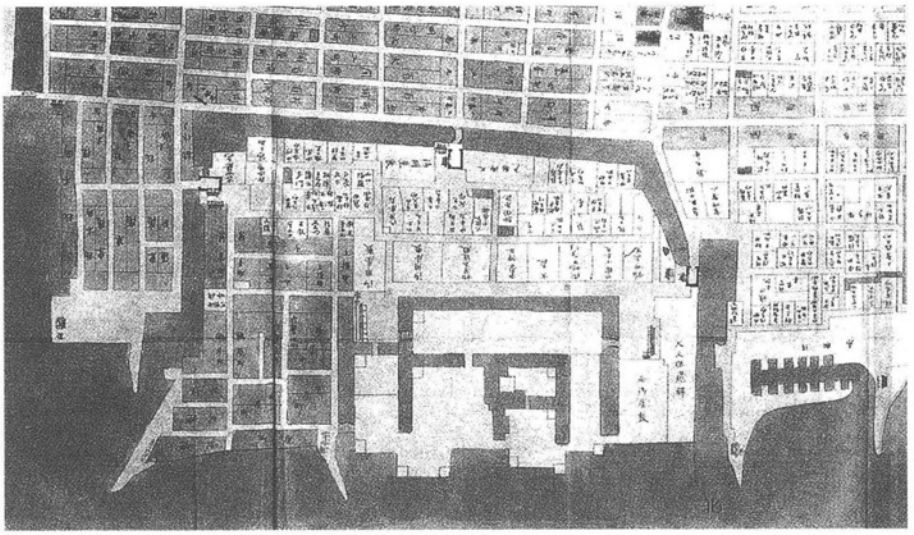
1650年代前半以前
西外曲輪のほぼ中央に屈曲する道路を認め、その道路の両脇に規模の異なる屋敷地が展開。

第５図　『讃岐高松丸亀両城図　高松城下図』(森下1996より抜粋)



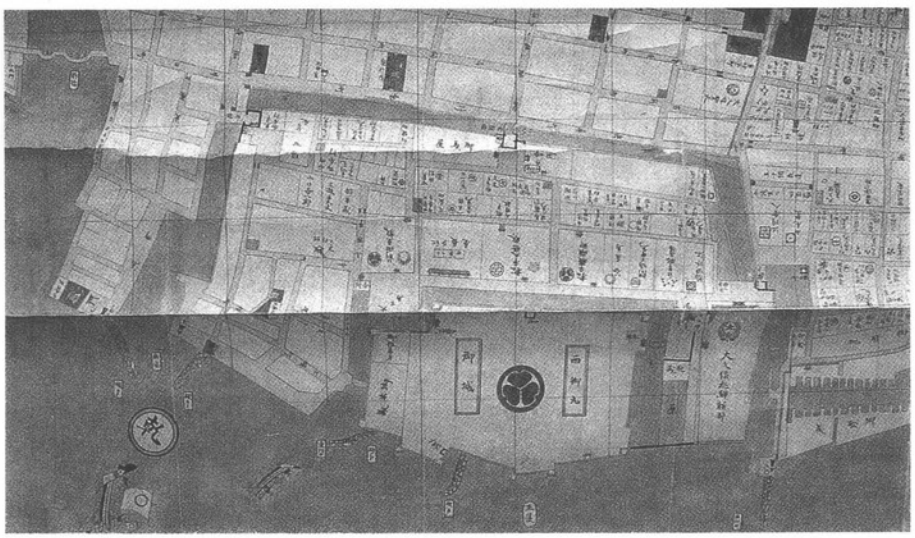
1650年代前半
西外曲輪のほぼ中央に鍵形道路を認め、その両脇に規模の異なる屋敷地が展開する。北辺はひとつの屋敷地に統合され、街路は延長しない。

第６図　『高松城下図屏風』(胡1997より抜粋)



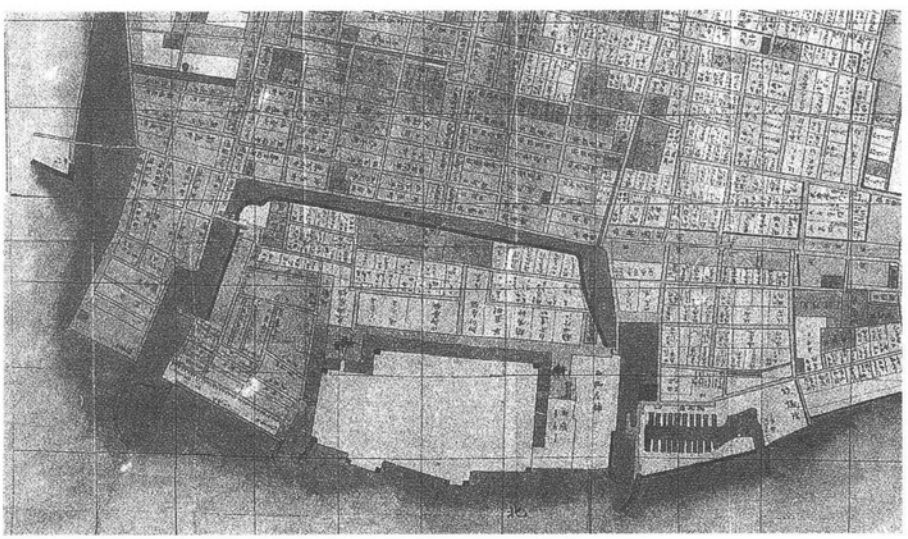
亨保年間(1716～1736年)
西外曲輪が東西に二分され、その西側には大久保家屋敷地、北東側に西御屋敷(藩主の居住施設)が設置される。

第７図　『高松城下図』(森下1996より抜粋)



文化年間(1804～1818年)
西外曲輪の西半には大久保家屋敷地、北東部には「原」(防火用の緩衝地)、東部中央に「籾蔵」、南東部に「西下馬」と記載される。

第８図　『高松市街古図』(高松市歴史資料館蔵)

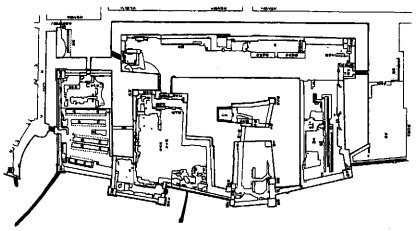


天保15年(1844年)
西外曲輪の西半には「西御屋敷」(大久保家が藩主の公族になることに起因する)、北東部には「籾蔵・長屋あり」と記載される。西下馬部分にはＬ字形の建物があり、『高松城下図』からの連続性を認める。

第９図　『天保15年高松之図』(森下1996より抜粋)

幕末

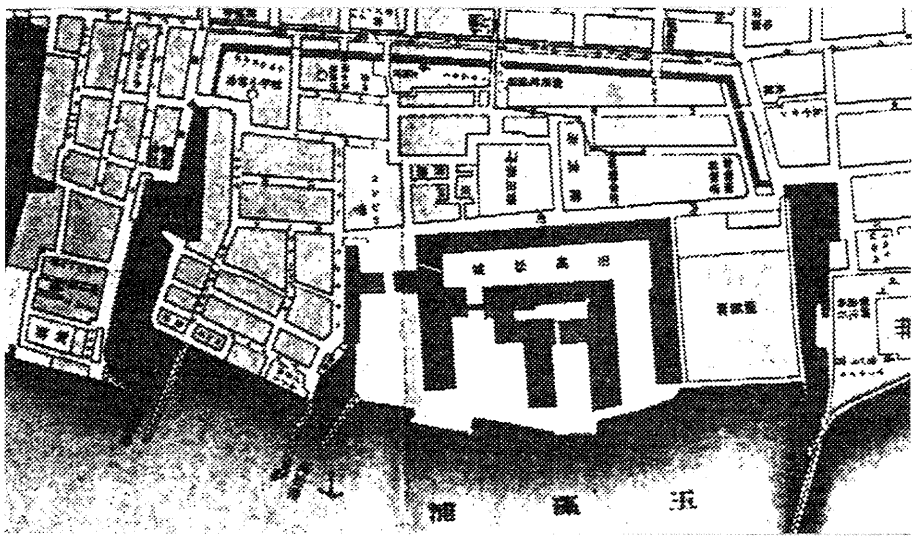
西外曲輪は西半部分がわずかに描かれ、「西御屋敷」と記載される。北東側は「畑地」とあり、南端には「御籾倉」、南東側には「腰掛」建物が描かれる。



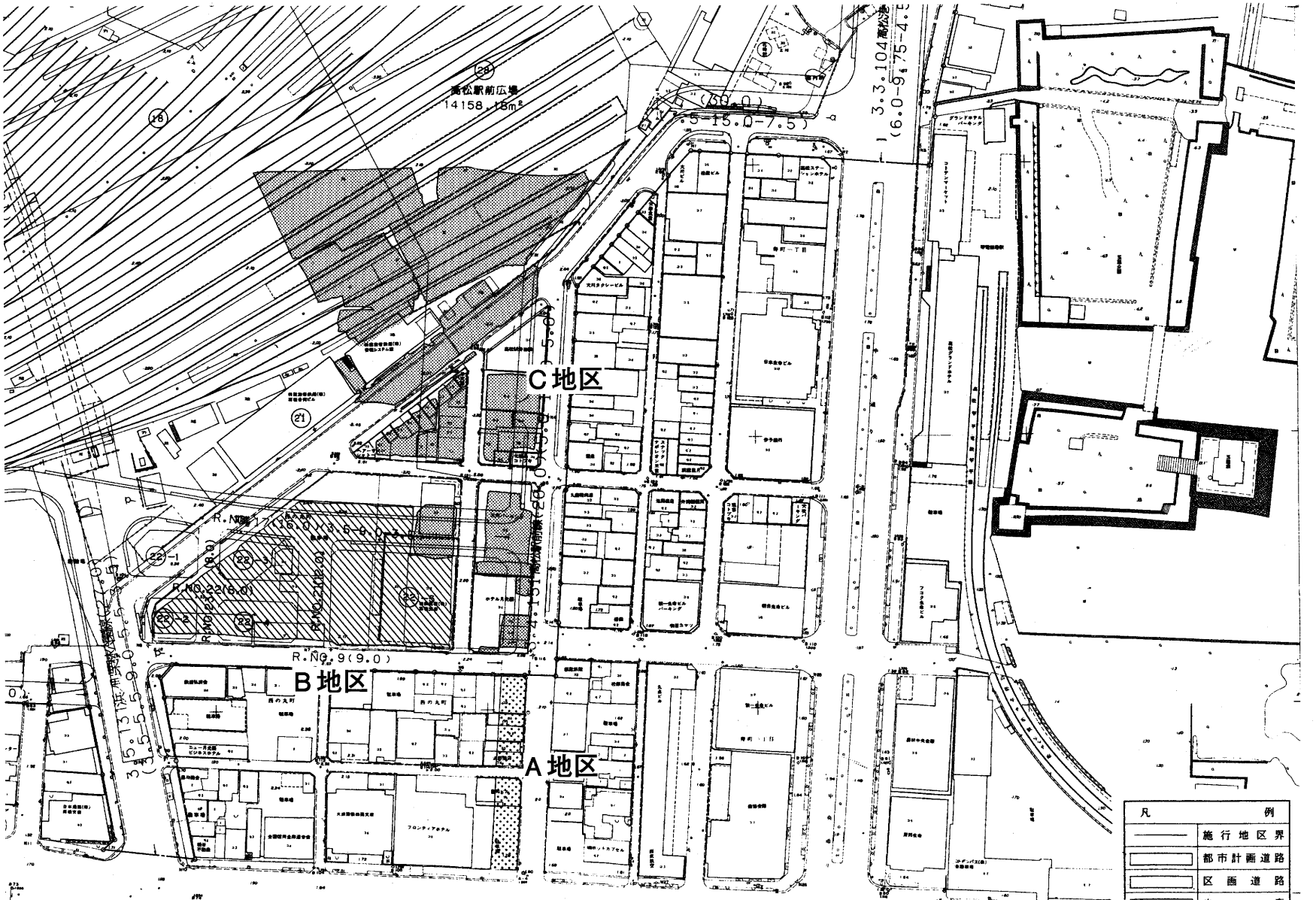
第10図　『高松城全図』(森下1996より抜粋)

明治28年(1895年)

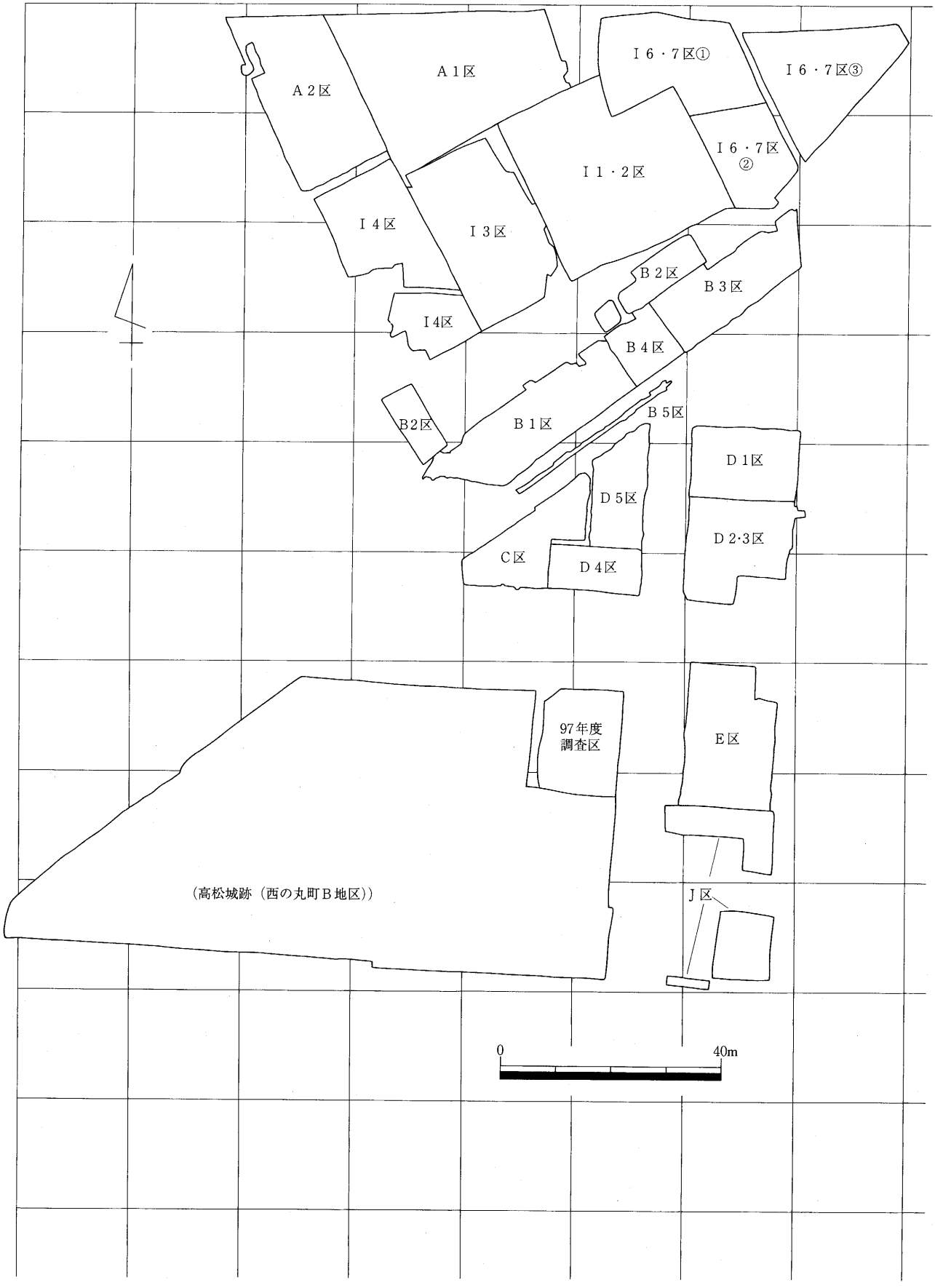
西外曲輪全域が一区画として統合され、「監獄署」が設置される。



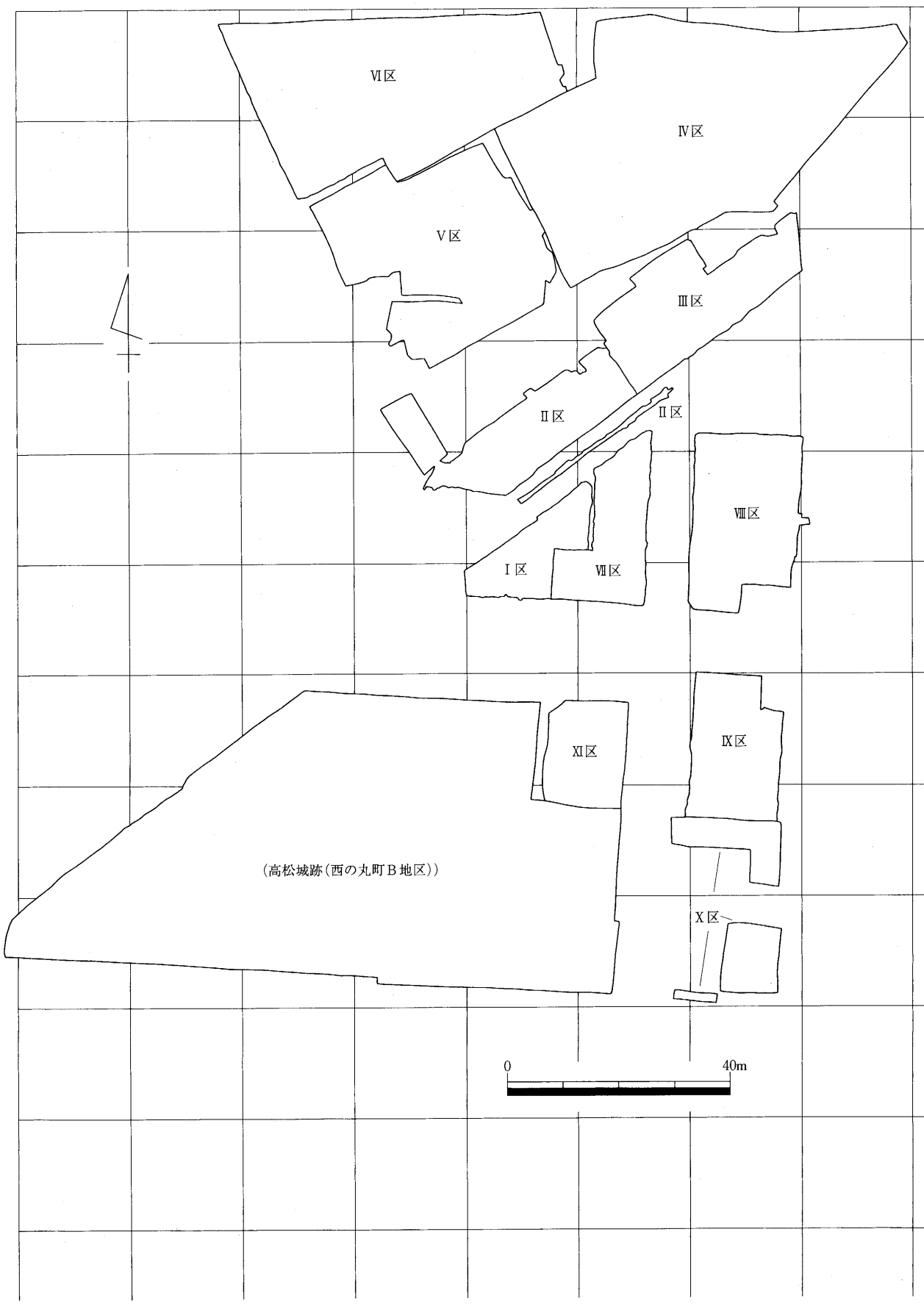
第11図　『高松市街明細全図』(森下1996より抜粋)



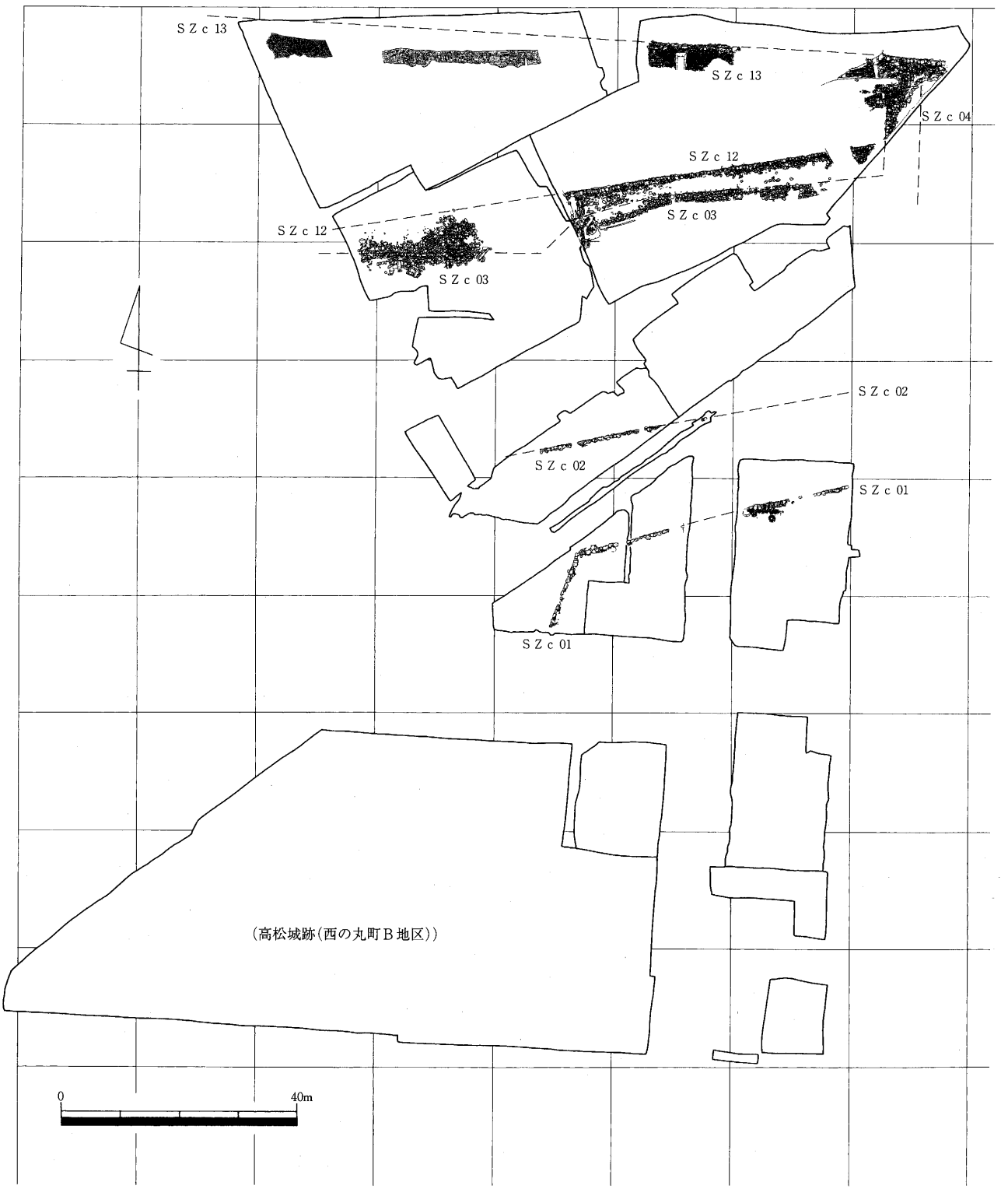

第12図　高松城跡(西の丸町地区)地区割図



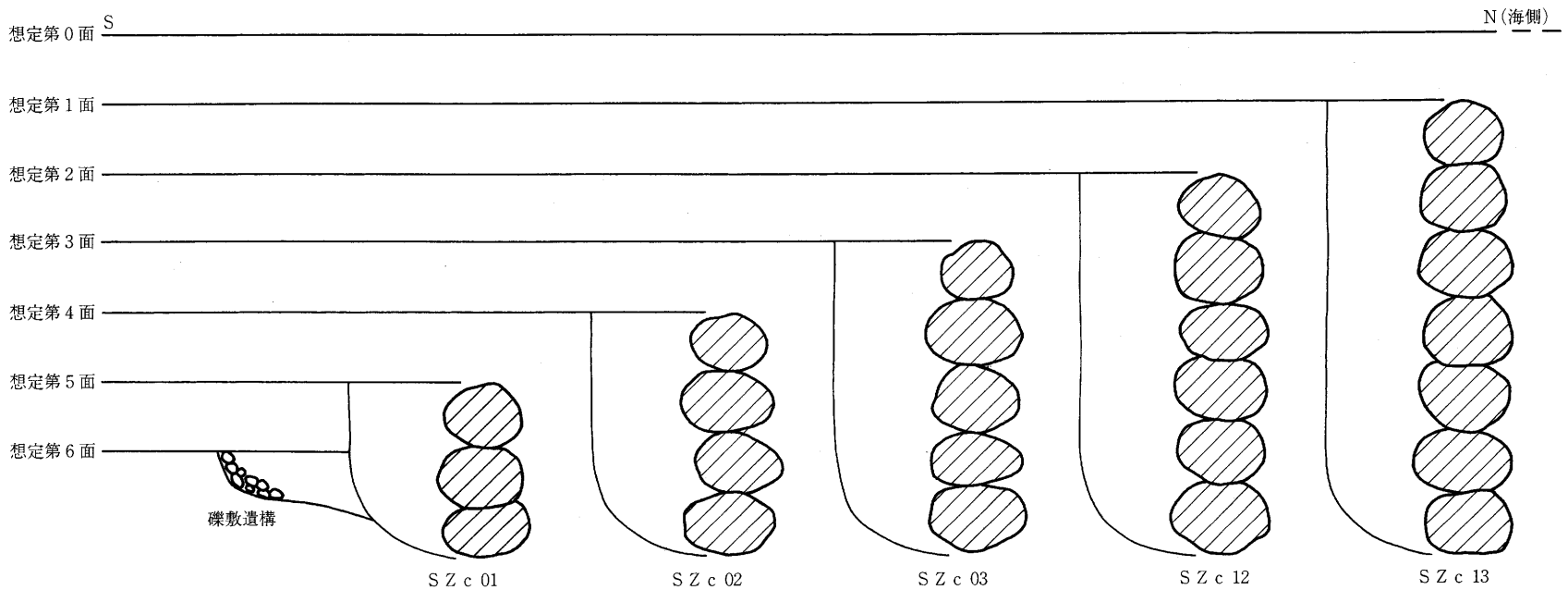

**第13図　高松城跡（西の丸町Ｃ地区）調査時調査区割図（Ｓ＝１／1,000）**




**第14図　高松城跡(西の丸町Ｃ地区)報告調査区割図(Ｓ＝１／1,000)**

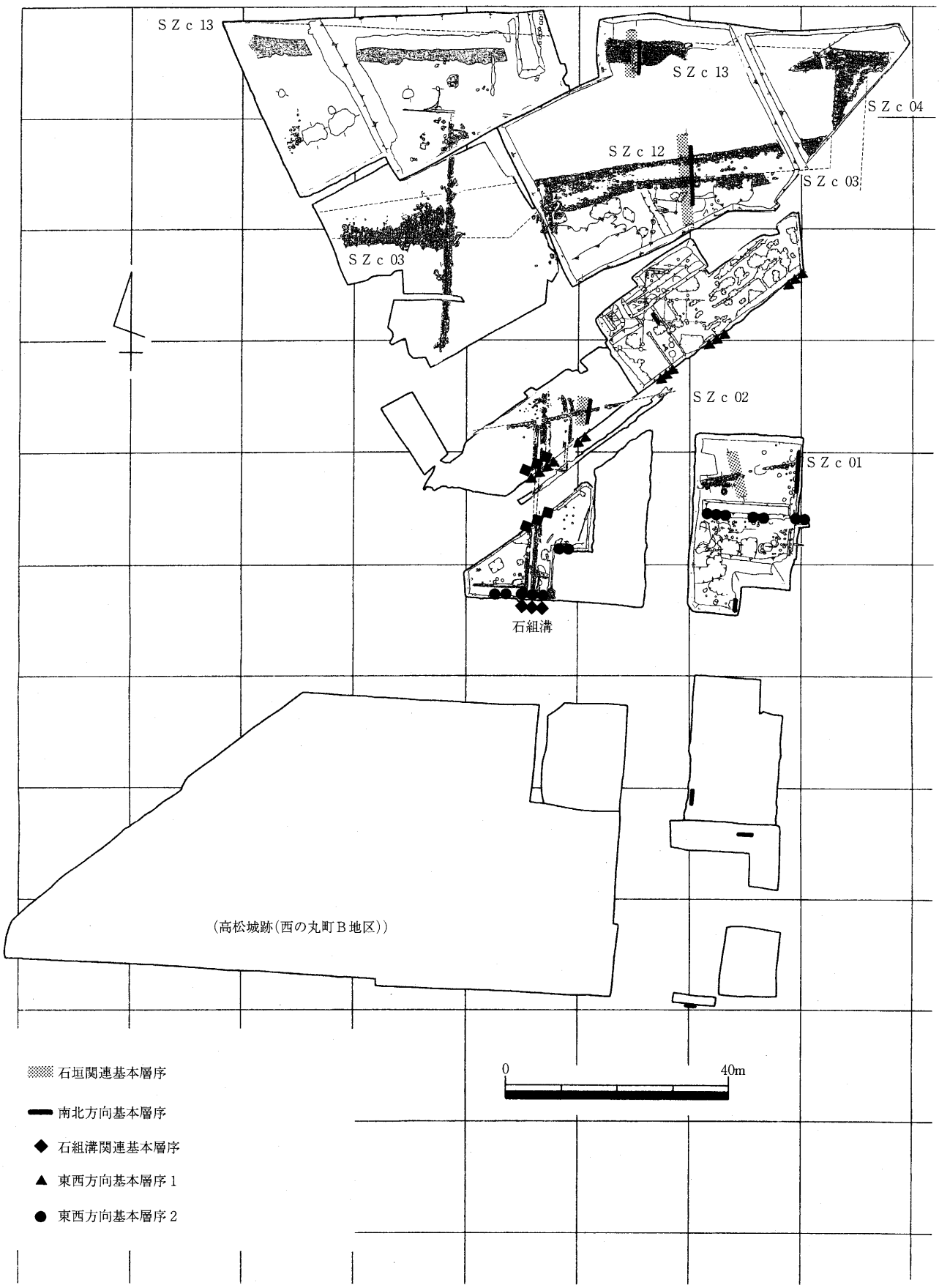



第15図　高松城跡(西の丸町C地区)石垣平面図(S＝1／1,000)



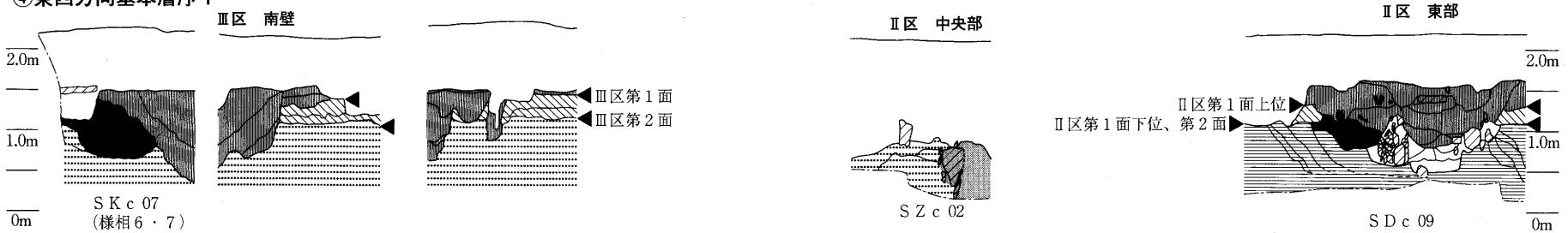

| 石垣 | 各石垣構築時期 | 概念想定面 | 想定面機能年代 | 様相 |
|---|---|---|---|---|
| 未確認 | 大正時代 | ０面 | 近・現代 | ― |
| ＳＺｃ13 | 明治時代 | １面 | 1872年～（明治・大正時代） | 様相９ |
| ＳＺｃ12 | 18世紀後半か？ | ２面 | 18世紀第３四半期～1872年 | 様相６～８ |
| ＳＺｃ03 | 1640年代～1650年代前半 | ３面 | 17世紀中葉～1747年 | 様相４・５ |
| ＳＺｃ02 | 1630年代後半 | ４面 | 1630年代後半～17世紀中葉 | 様相２・３ |
| ＳＺｃ01 | 16世紀末（1589年～） | ５面 | 1588年～1630年代前半 | 様相１・２ |
| 中世礫敷 | 12世紀後半～13世紀前葉 | ６面 | 12世紀後半～13世紀前葉 | ― |

第16図　石垣からの想定面概念図

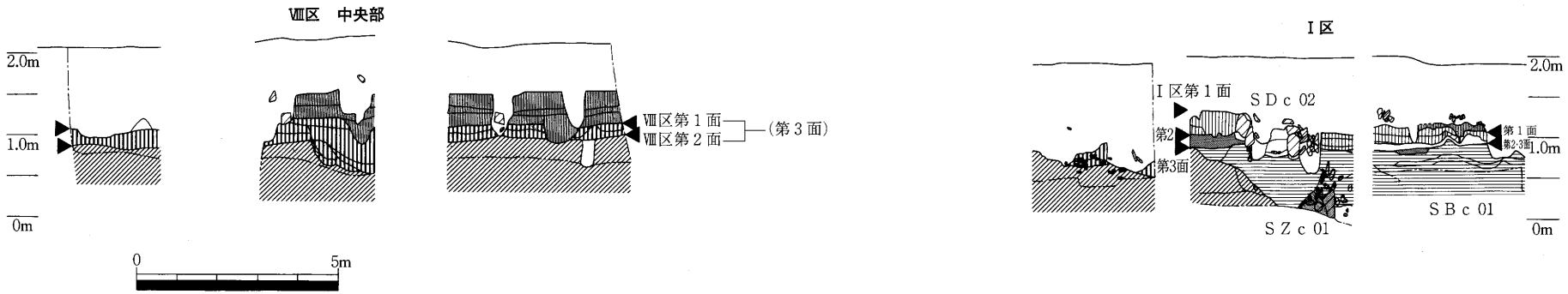



**第17図　基本層序断面位置図(S＝1／1,000)**

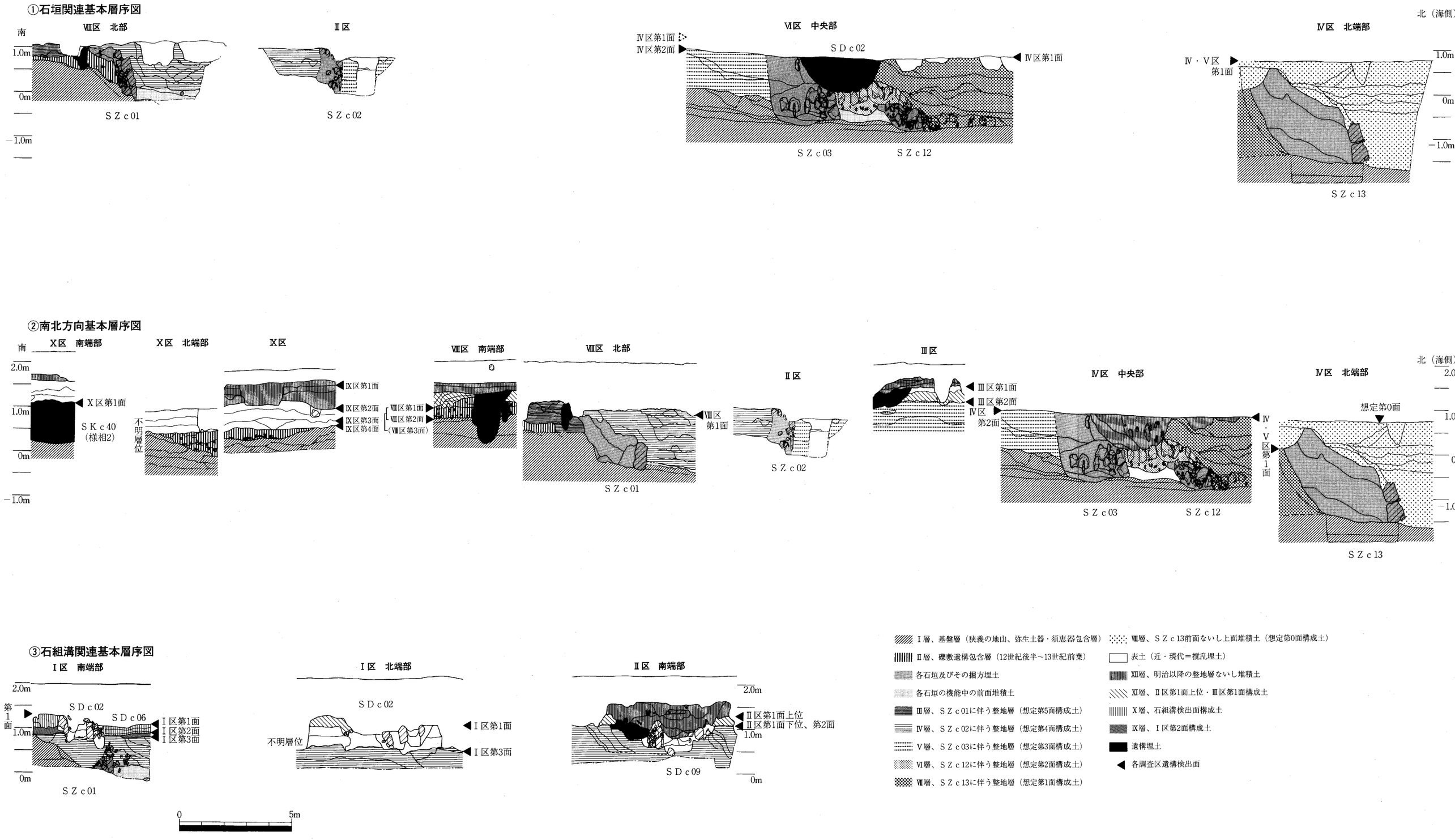
④東西方向基本層序１



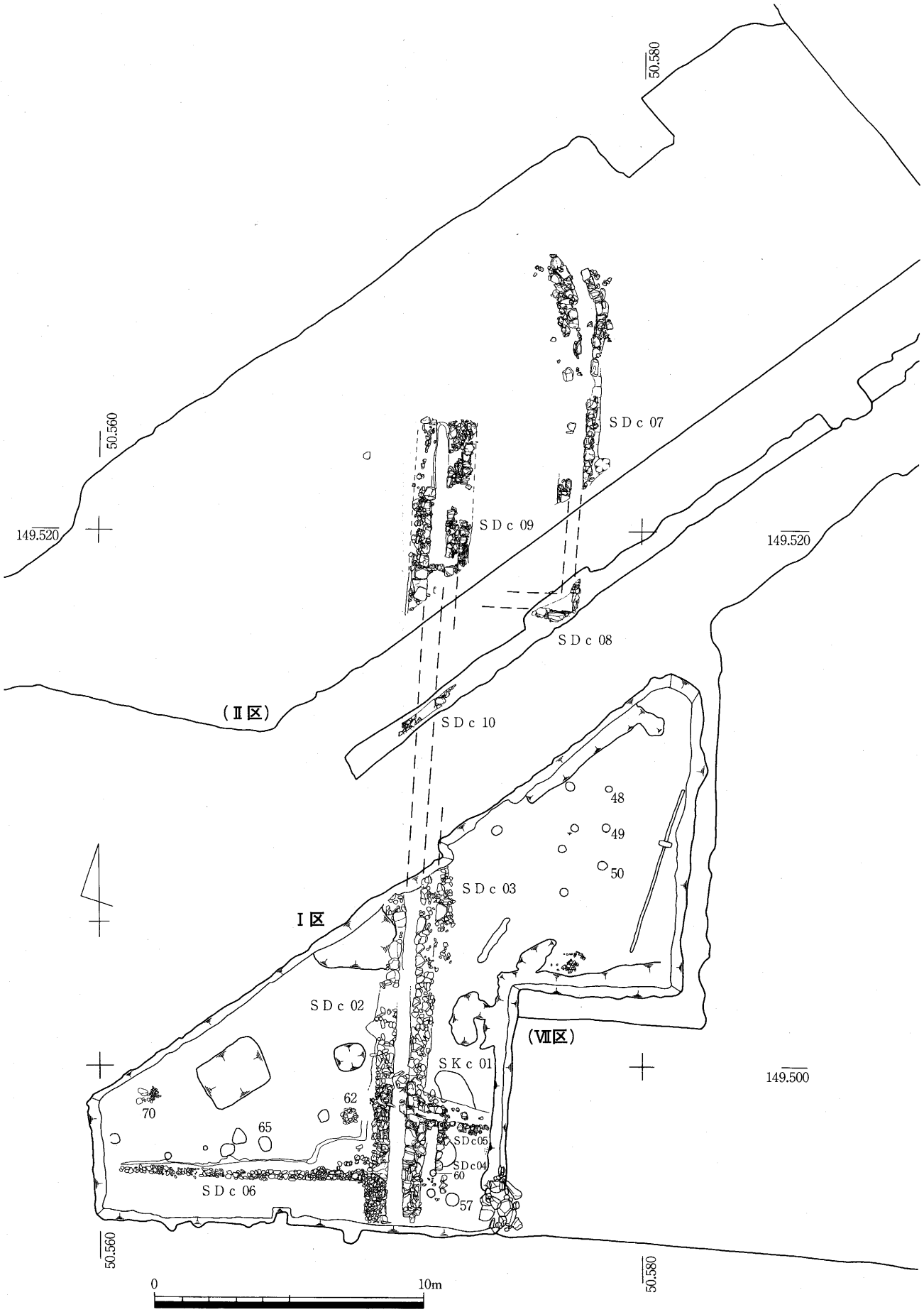

⑤東西方向基本層序２



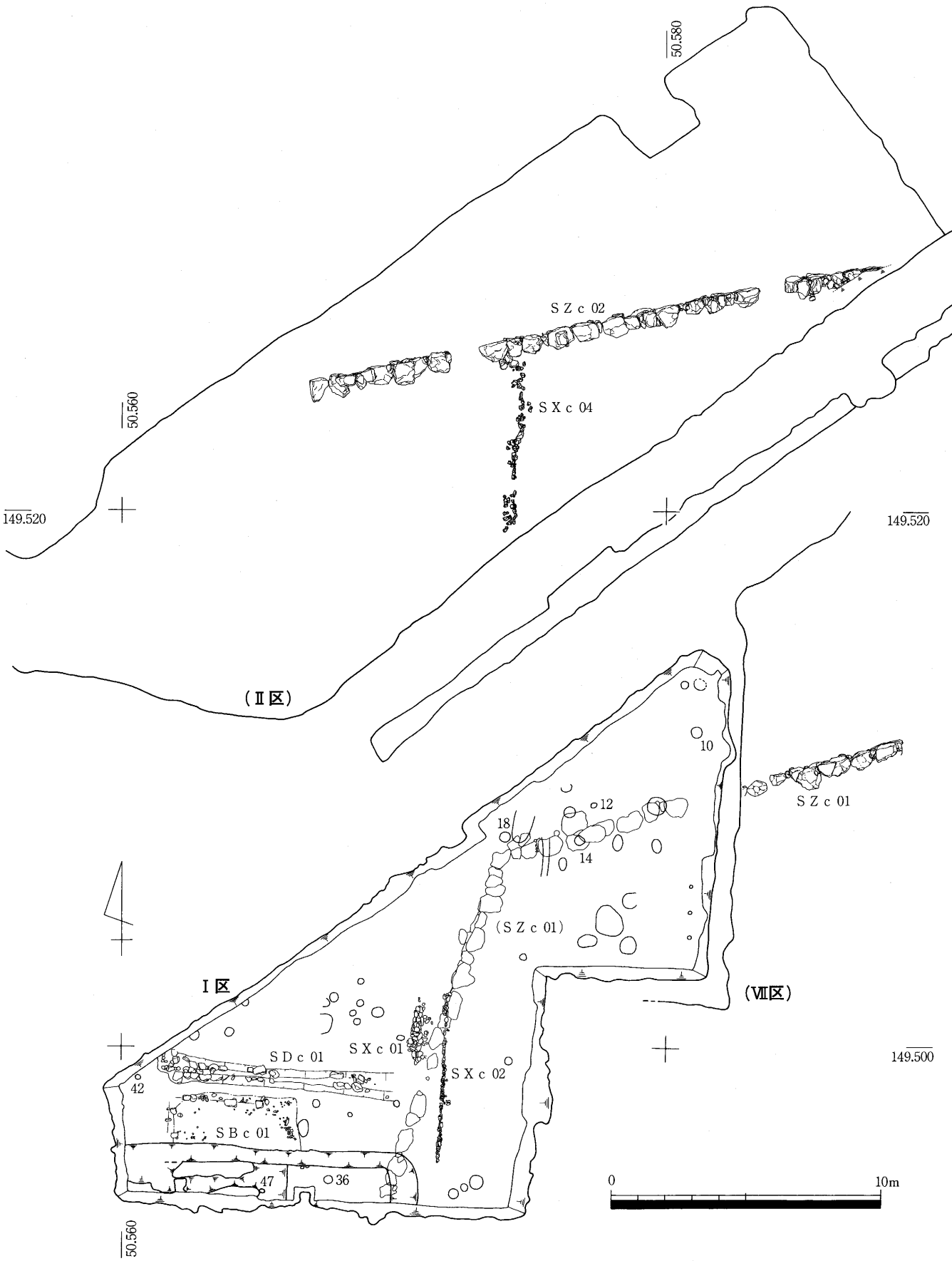

第19図　基本層序図２（天地Ｓ＝１／80、左右Ｓ＝１／160）



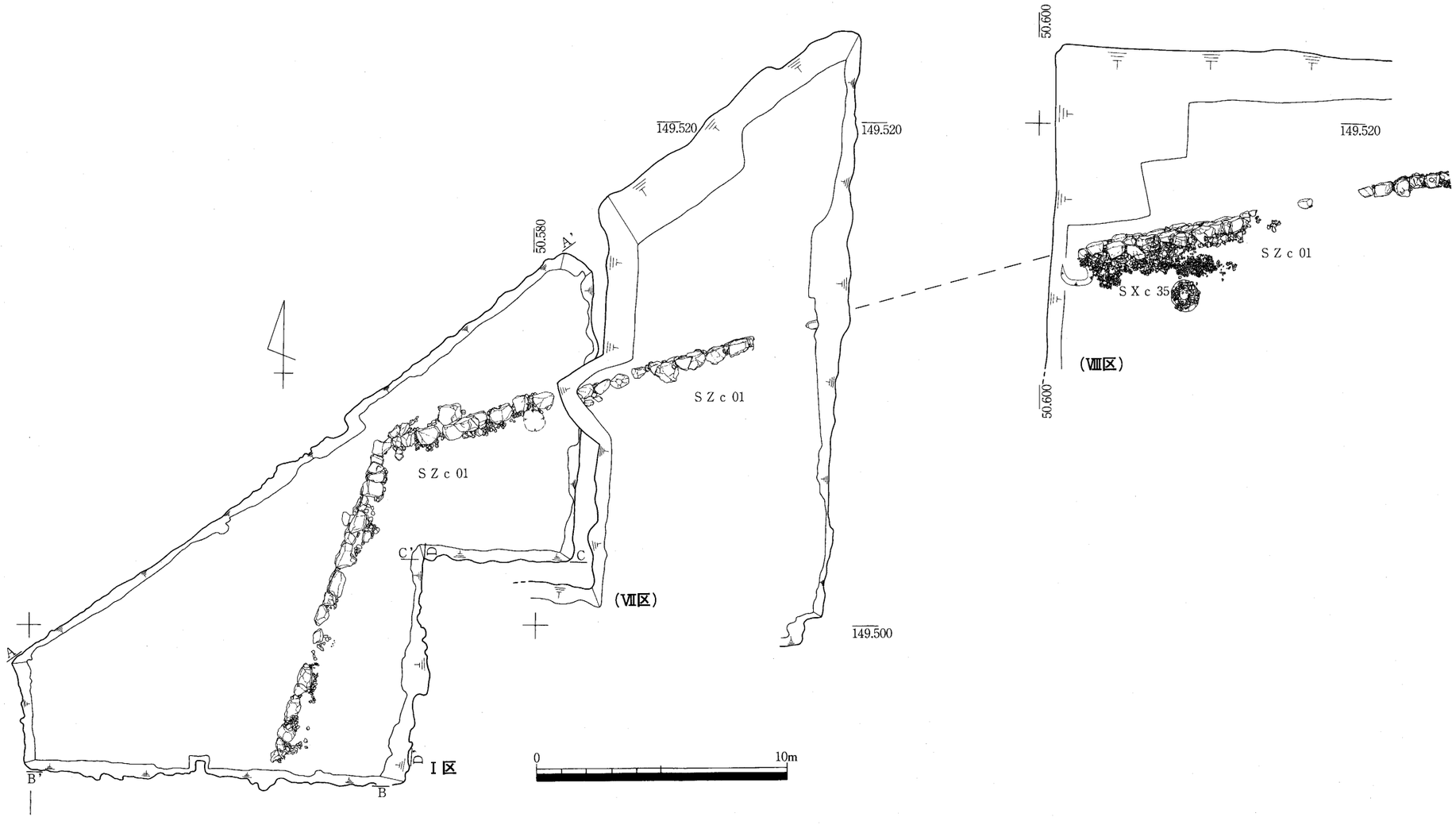

第18図　基本層序図１（天地Ｓ＝１／80、左右Ｓ＝１／160）



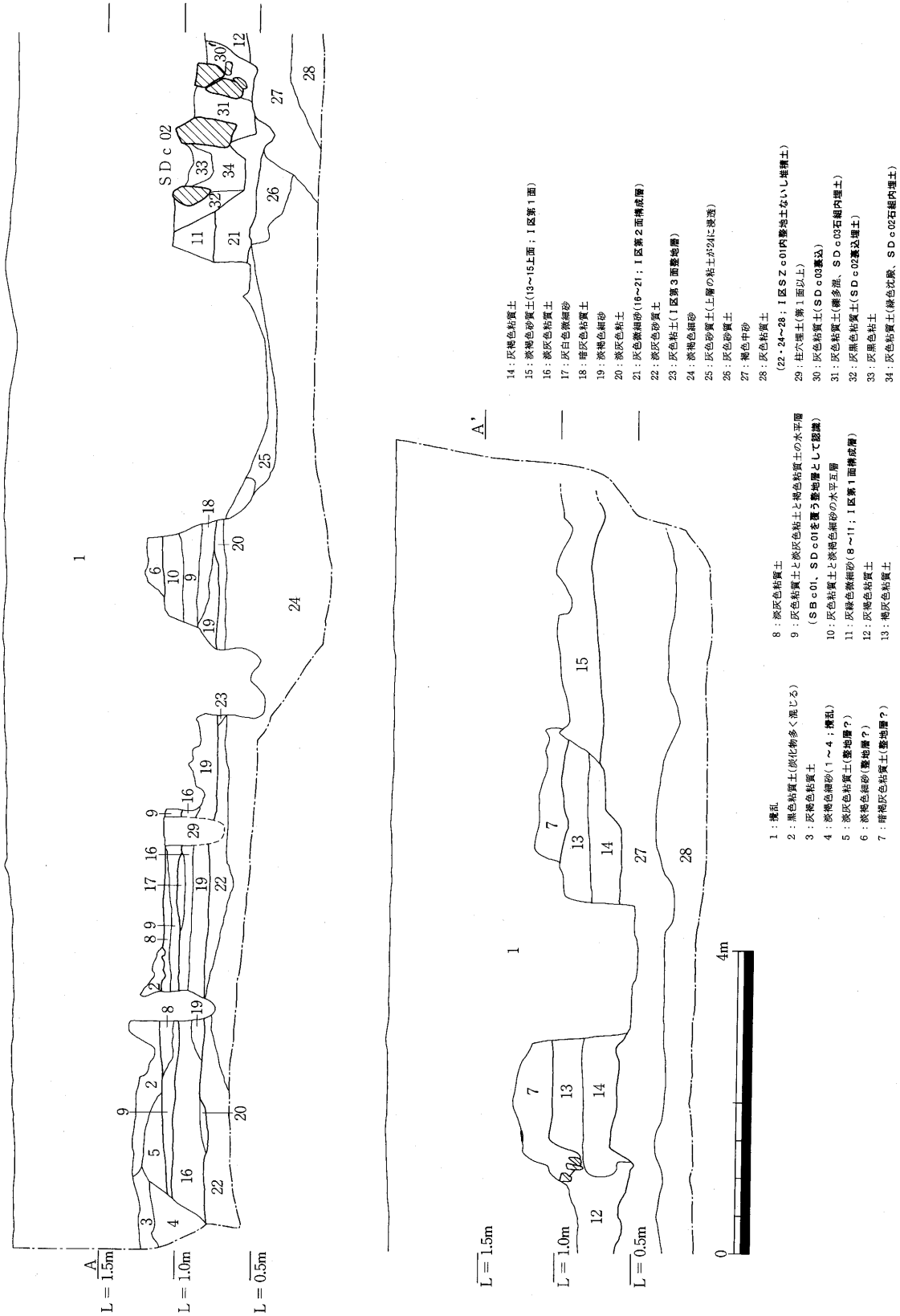

第20図　Ⅰ区　第１面遺構配置図（Ｓ＝１／200）



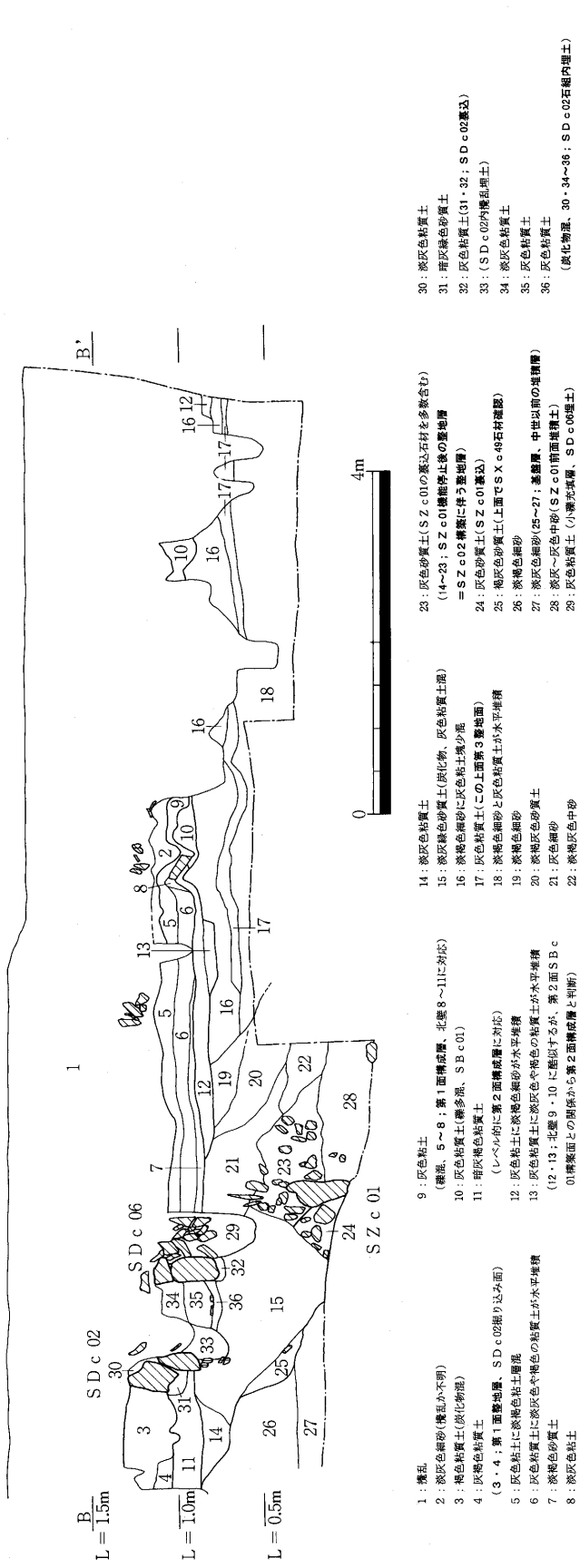

第21図　Ⅰ区　第２面遺構配置図（S＝１／200）

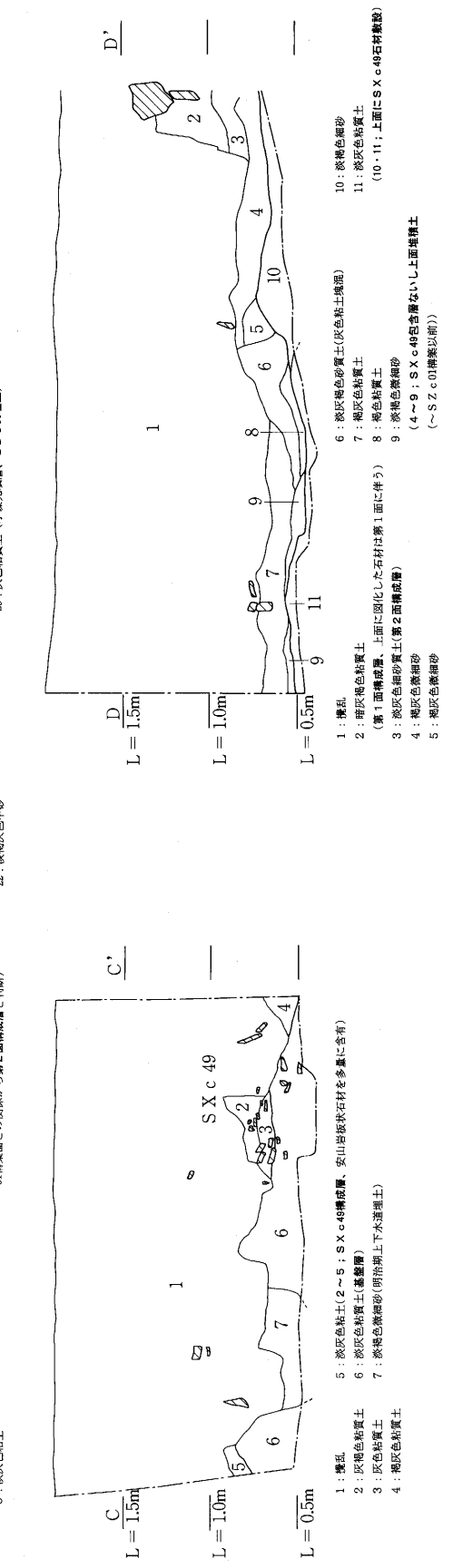



第22図　Ⅰ区　第３面遺構配置図（Ｓ＝１／200）

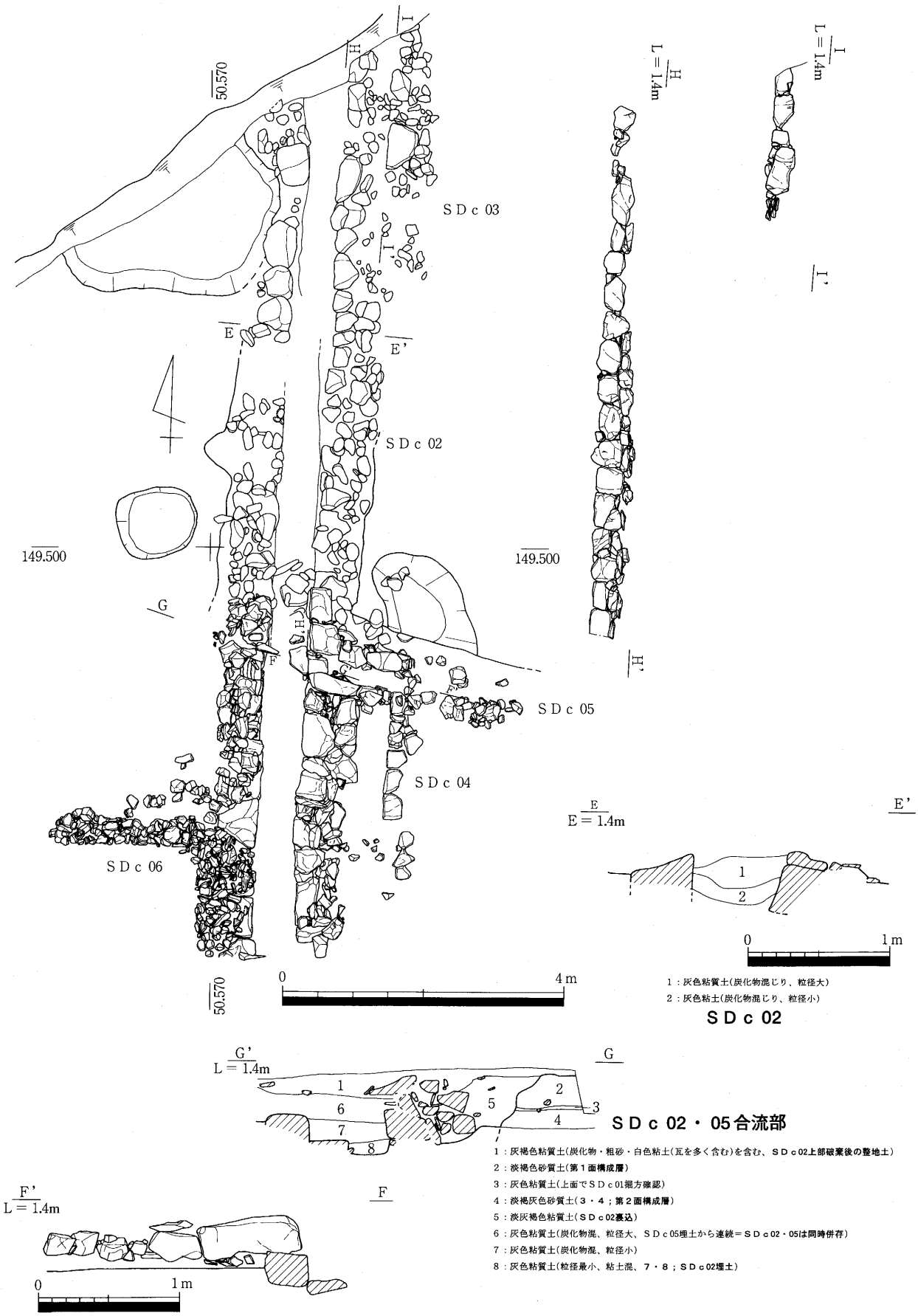



**第23図　Ⅰ区　壁面図1（天地S＝1／40、左右S＝1／80）**

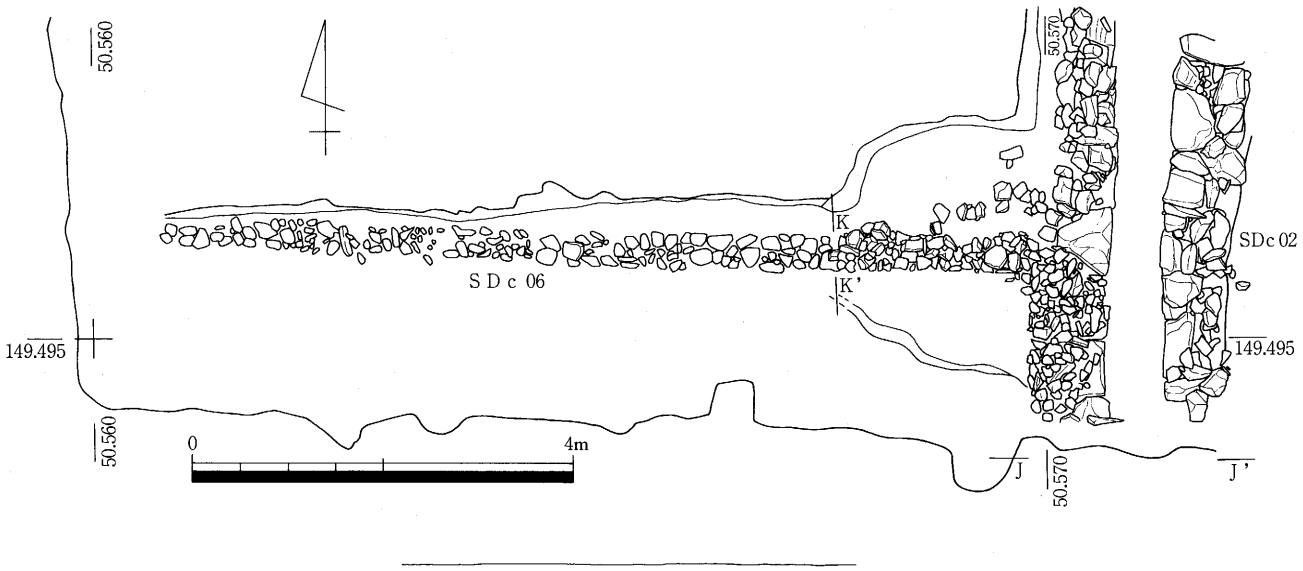


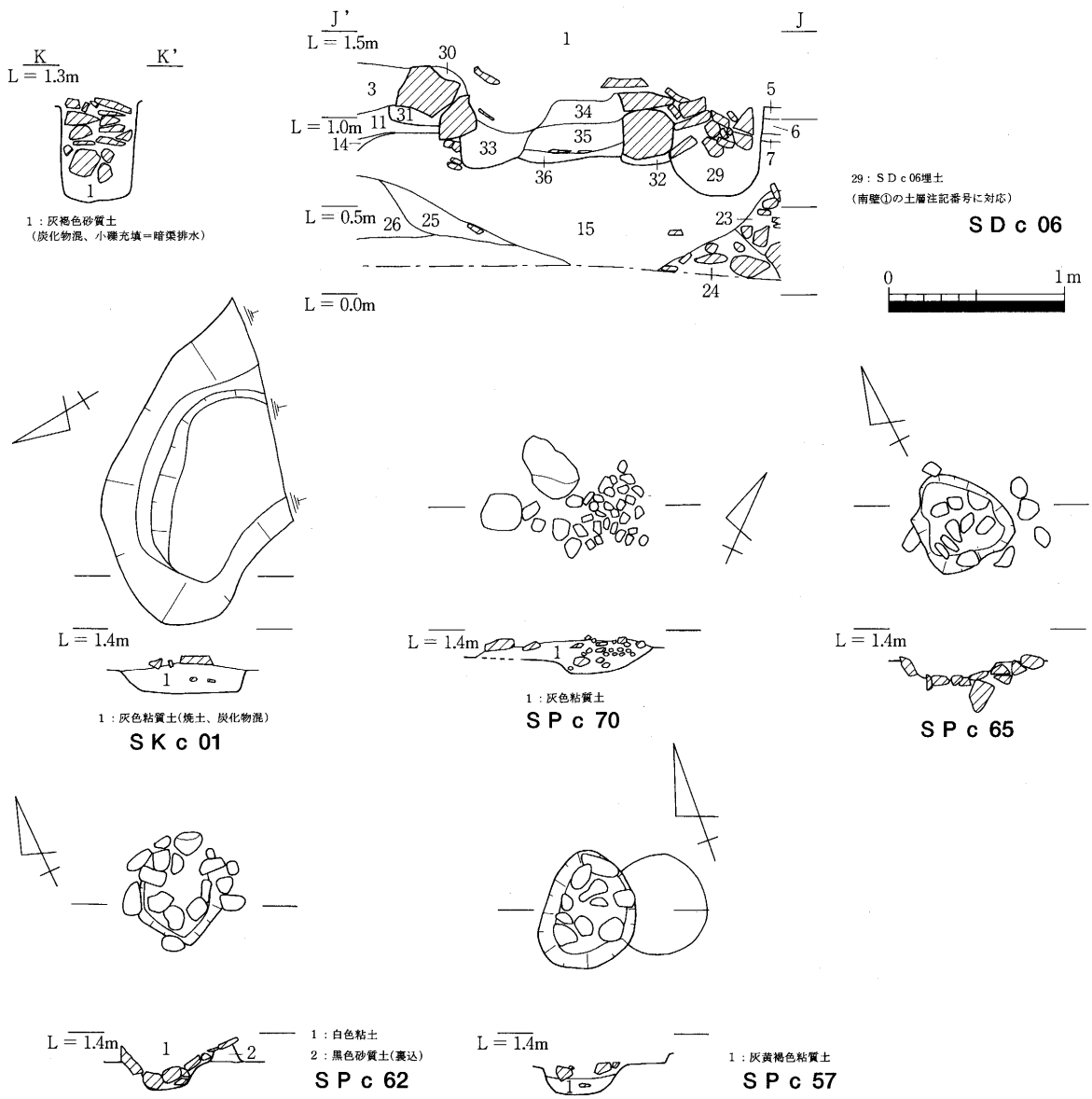




**第24図　Ⅰ区壁面図２～３(天地Ｓ＝１／40、左右Ｓ＝１／80)**



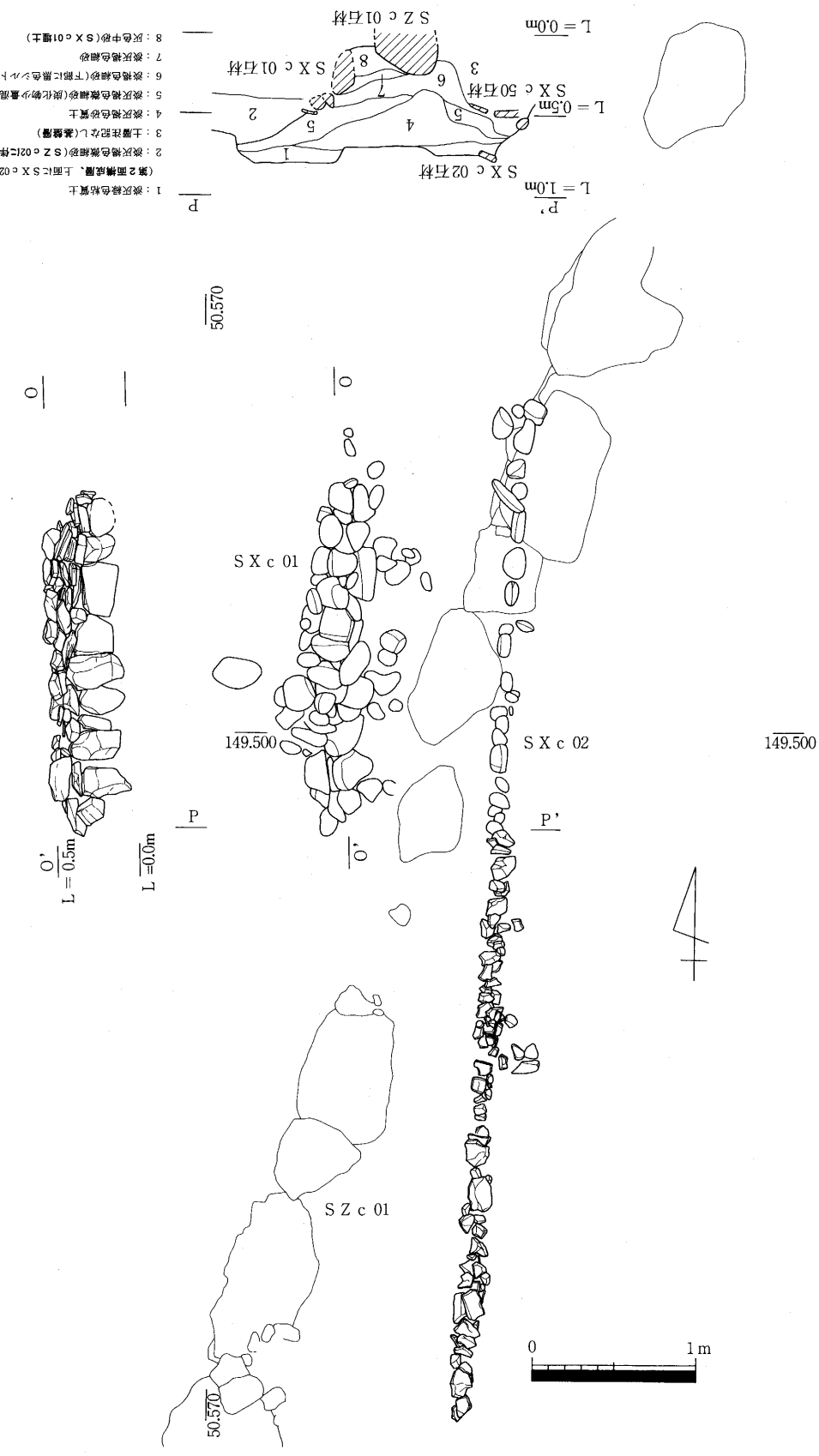

第25図　Ⅰ区　第1面SDc02～05平・断面図及び立面図



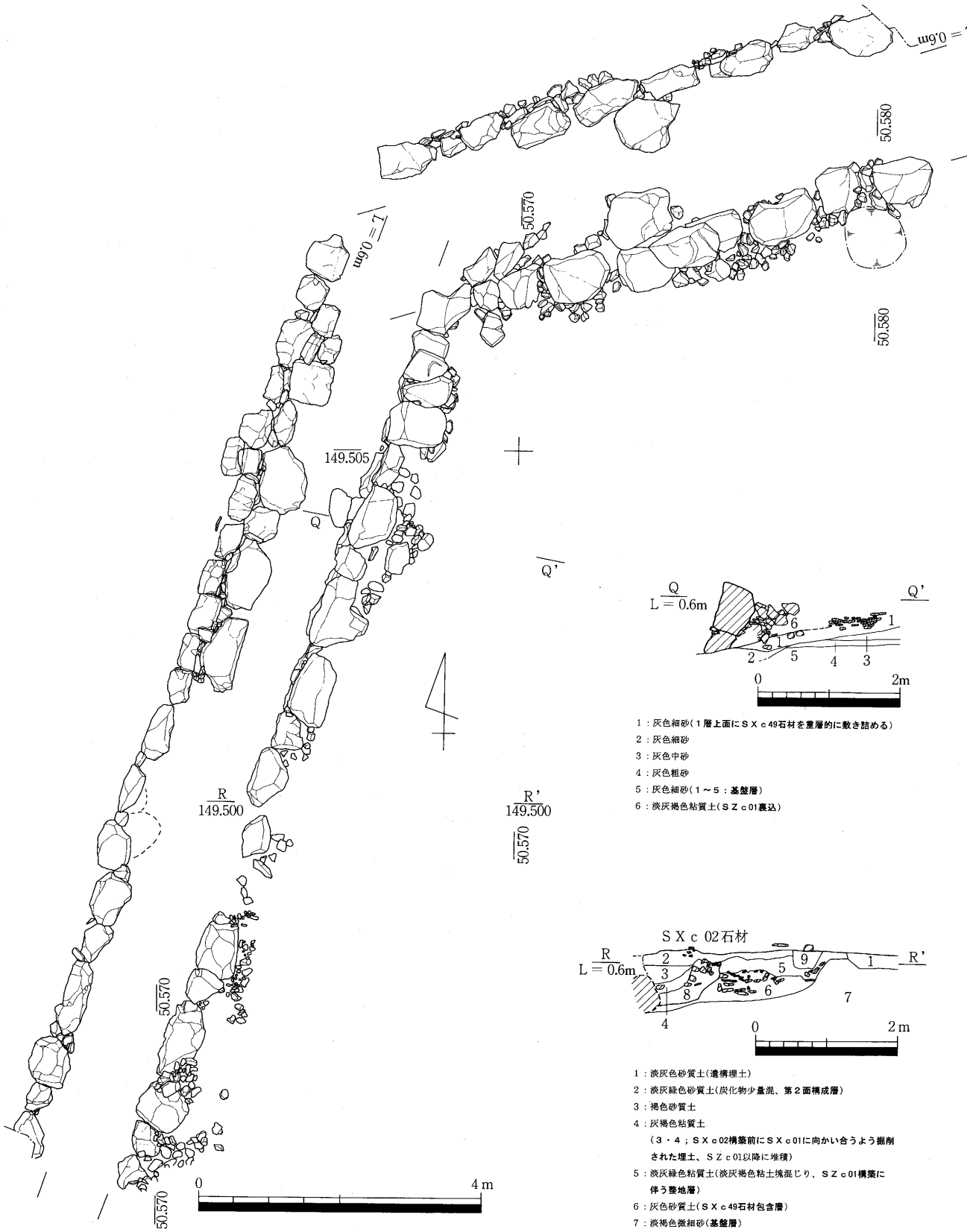




第26図　Ⅰ区　第１面ＳＤｃ06他平・断面図

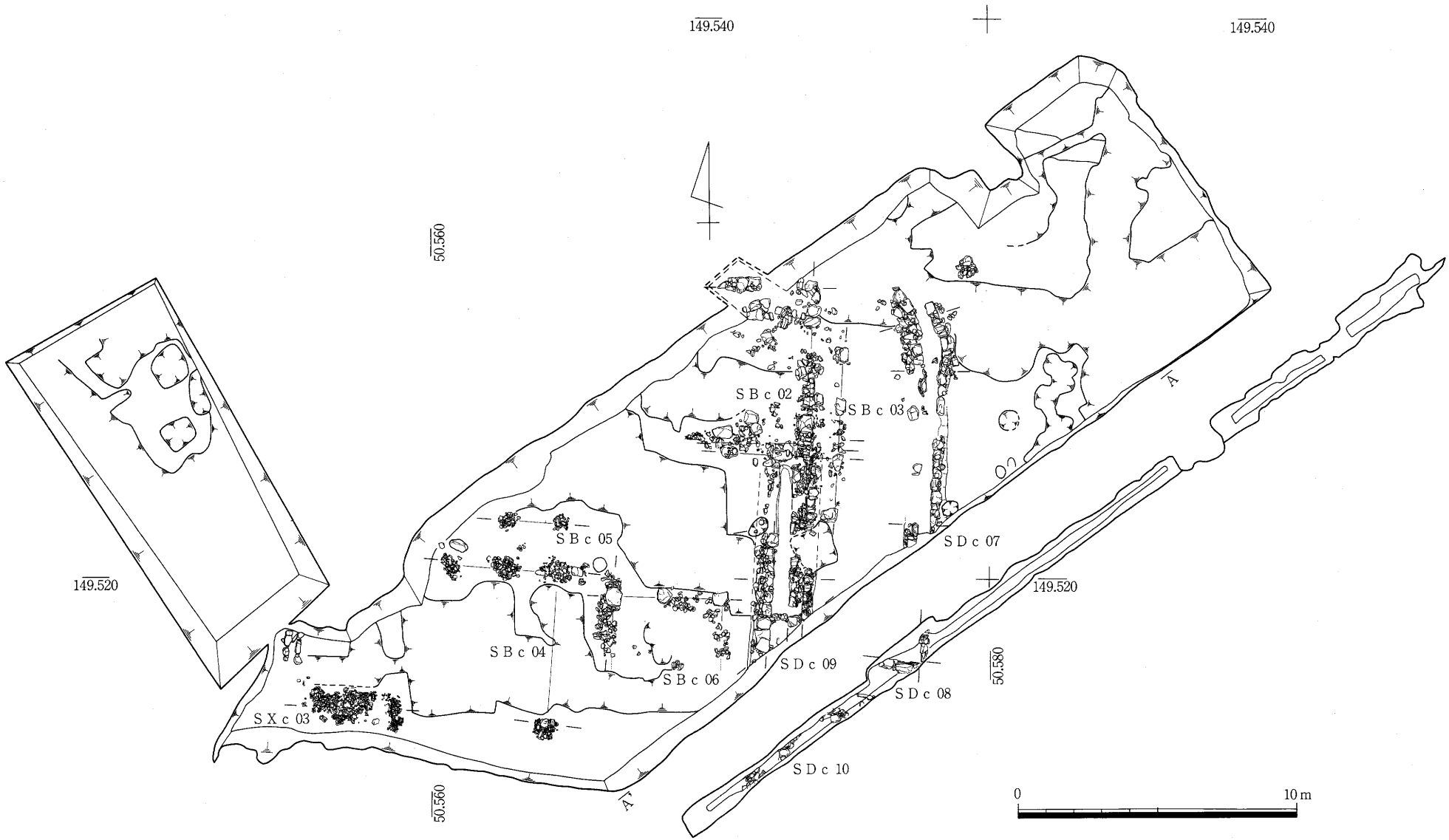
第27図　Ⅰ区　第２面ＳＢｃ01、ＳＤｃ01平・断面図



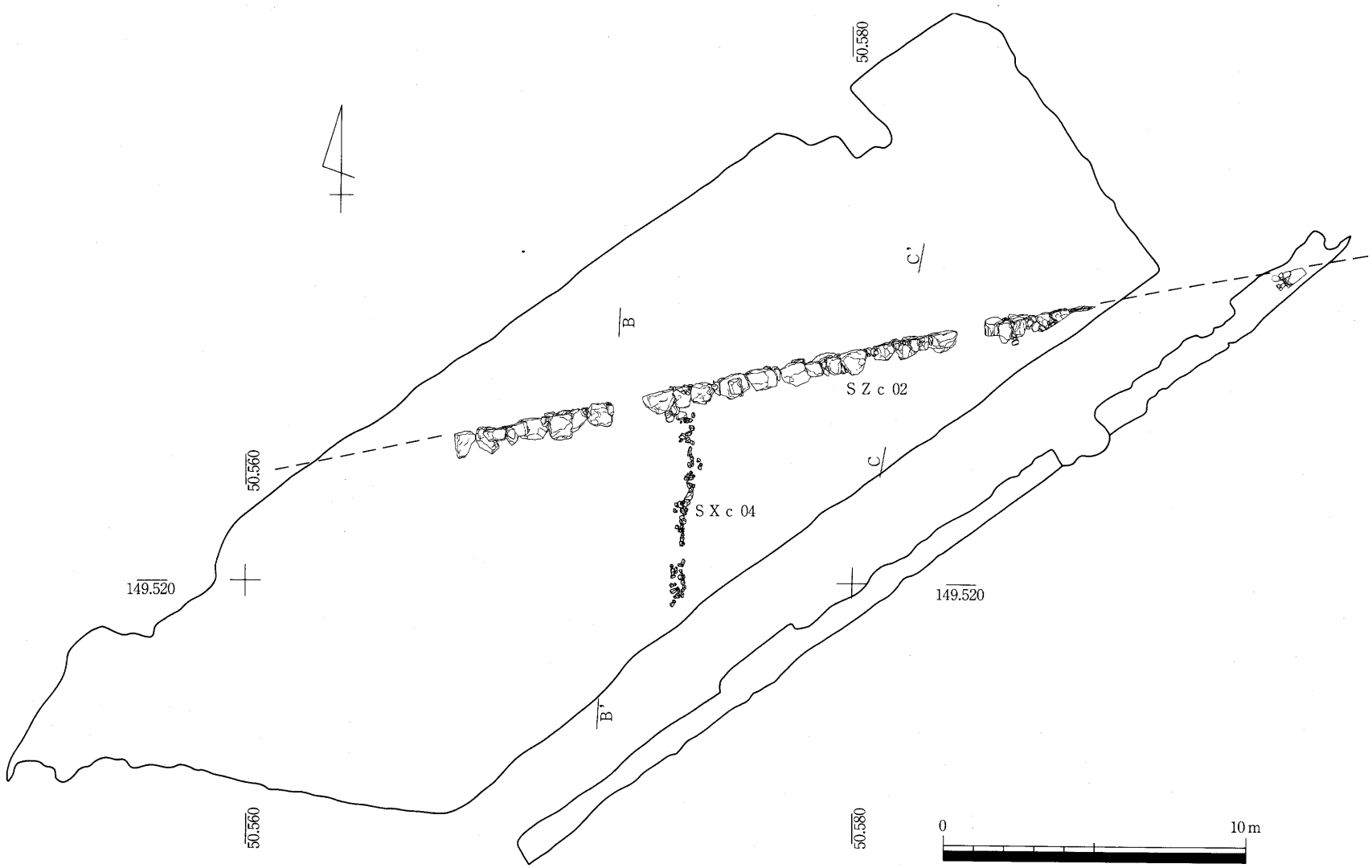

**第28図　Ⅰ区　第3面SXc01・02平・断面図**



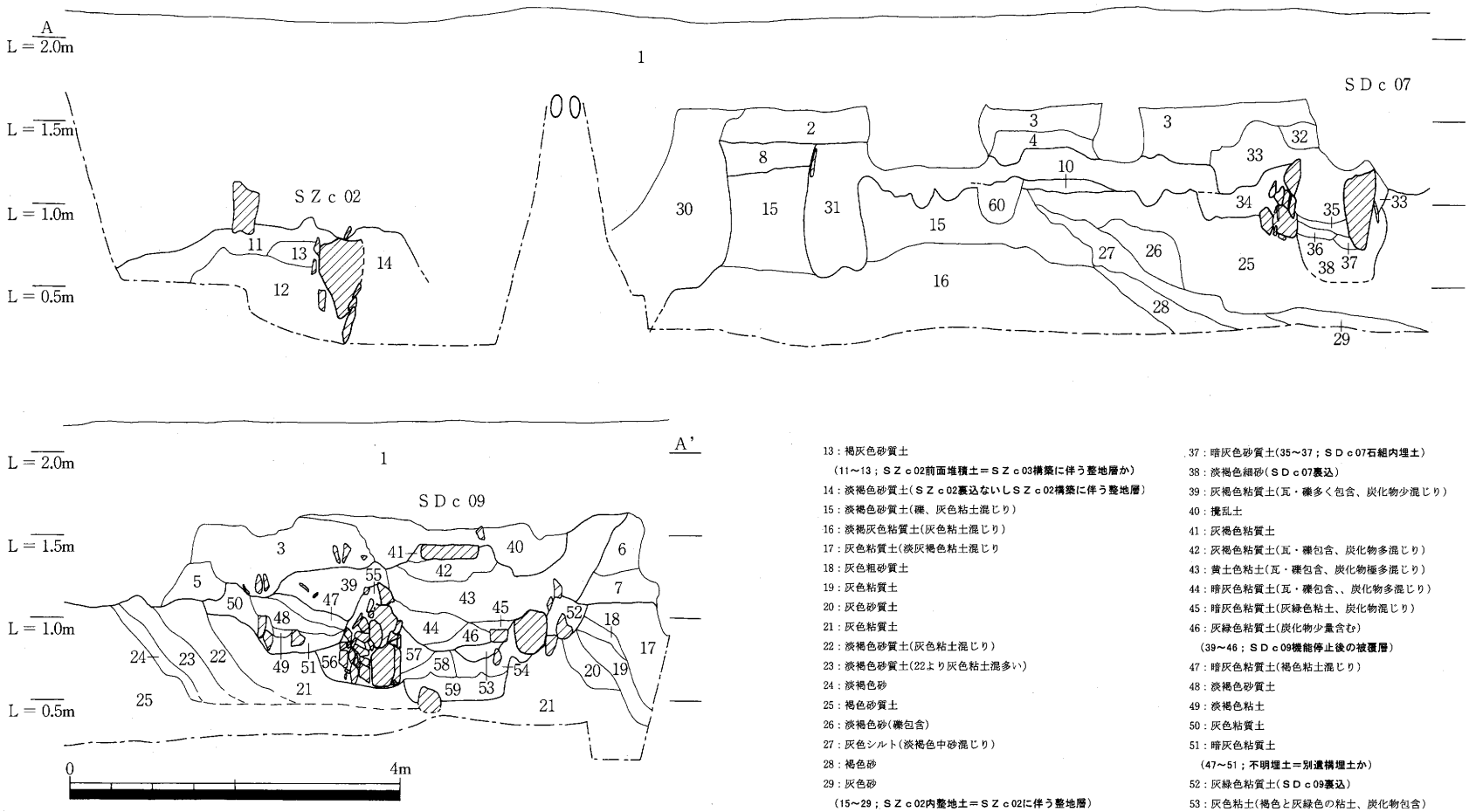

**第29図　Ⅰ区　第３面ＳＺｃ01平・断面図及び立面図**




第30図　Ⅱ区　第１面遺構配置図（Ｓ＝１／200）

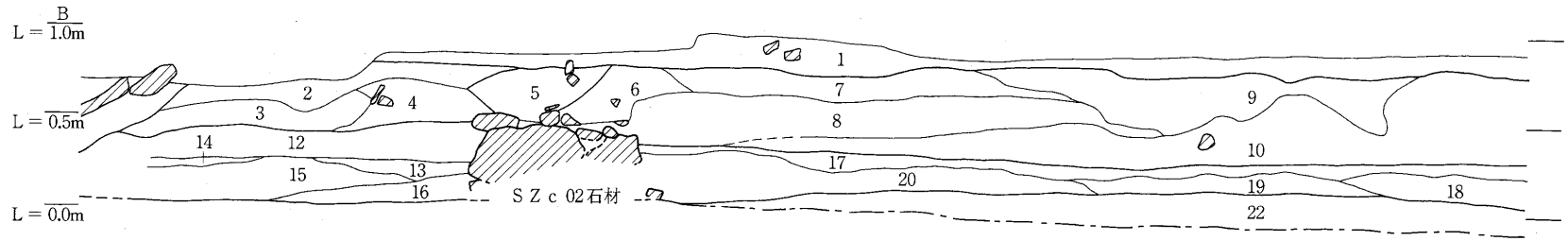


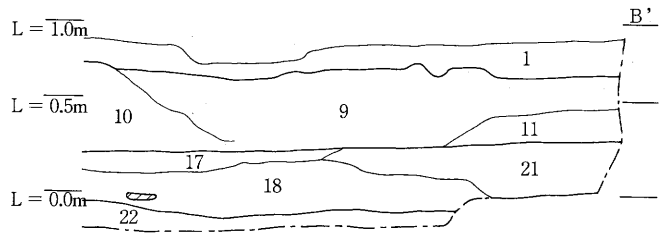

第31図　Ⅱ区　第２面遺構配置図（Ｓ＝１／200）



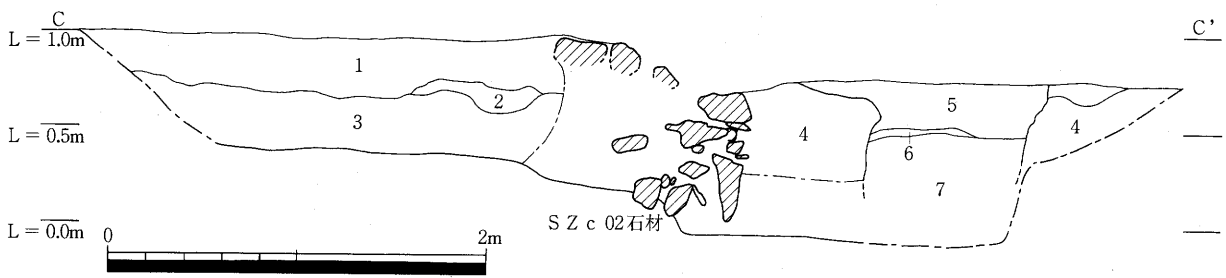

1：攪乱
2：暗灰色粘質土(整地層？)
3：淡灰褐色粘質土や灰褐色粘質土等の互層(間)に炭化物・焼土層をはさむ(明治期整地層？)
4：灰緑色粘土
(明治期整地層？、ＳＤｃ07・ＳＤｃ09を被覆)
5：暗灰色粘質土
(礫、炭化物多く包含、明治期整地層？)
6：灰色粘質土(礫・炭化物包含)
7：灰色粘質土(礫・炭化物包含)
(６・７；整地層、時期不詳(明治期か))
8：灰黄色粘質土
9：褐灰色粘質土(灰緑色粘土粒混じり)
(８・９；整地層、時期不詳(ＳＤｃ07の想定掘方検出面の関係から、第１面再整地層と考えたい))
10：灰色細砂質土(第２面構成土)
11：褐灰色粘質土(灰色粘土粒混じり)
12：淡褐色細砂
13：褐灰色砂質土
(11～13；ＳＺｃ02前面堆積土＝ＳＺｃ03構築に伴う整地層か)
14：淡褐色砂質土(ＳＺｃ02裏込ないしＳＺｃ02構築に伴う整地層)
15：淡褐色砂質土(礫、灰色粘土混じり)
16：淡褐灰色粘質土(灰色粘土混じり)
17：灰色粘質土(淡灰褐色粘土混じり
18：灰色粗砂質土
19：灰色粘質土
20：灰色砂質土
21：灰色粘質土
22：淡褐色砂質土(灰色粘土混じり)
23：淡褐色砂質土(22より灰色粘土混多い)
24：淡褐色砂
25：褐色砂質土
26：淡褐色砂(礫包含)
27：灰色シルト(淡褐色中砂混じり)
28：褐色砂
29：灰色砂
(15～29；ＳＺｃ02内整地土＝ＳＺｃ02に伴う整地層)
30：(明治上水道埋土)
31：灰褐色粘質土(明治期整地層ないし掘り込みか？)
32：灰色粘質土(瓦・礫包含)
33：灰色粘質土(瓦・礫包含、灰緑色粘土混じり)
(32・33；ＳＤｃ07機能停止後の被覆層＝整地層)
34：ＳＤｃ07裏込(調査段階は９層に連続していたが、層位の連続性・遺構掘削面と所属時期等からここに掘方に想定した。)
35：暗灰色粘土
36：暗灰色粘質土
37：暗灰色砂質土(35～37；ＳＤｃ07石組内埋土)
38：淡褐色細砂(ＳＤｃ07裏込)
39：灰褐色粘質土(瓦・礫多く包含、炭化物少混じり)
40：攪乱土
41：灰褐色粘質土
42：灰褐色粘質土(瓦・礫包含、炭化物多混じり)
43：黄土色粘土(瓦・礫包含、炭化物極多混じり)
44：暗灰色粘質土(瓦・礫包含、、炭化物多混じり)
45：暗灰色粘質土(灰緑色粘土、炭化物混じり)
46：灰緑色粘質土(炭化物少量含む)
(39～46；ＳＤｃ09機能停止後の被覆層)
47：暗灰色粘質土(褐色粘土混じり)
48：淡褐色砂質土
49：淡褐色粘土
50：灰色粘質土
51：暗灰色粘質土
(47～51；不明埋土＝別遺構埋土か)
52：灰緑色粘質土(ＳＤｃ09裏込)
53：灰色粘土(褐色と灰緑色の粘土、炭化物包含)
54：暗灰緑色粘土(53・54；ＳＤｃ09新段階埋土)
55：淡灰褐色粘質土(49の粘土混じり)
56：灰色粘質土(礫多く包含)
(55・56；ＳＤｃ09裏込)
57：灰色粘質土
58：暗灰緑色粘質土
59：灰緑色粘質土(57～59；ＳＤｃ09古段階埋土)
60：灰褐色粘質土
(第２面遺構埋土、褐色土灰色粘土、腐食木等混在)

第32図　Ⅱ区　壁面図１(天地Ｓ＝１／40、左右Ｓ＝１／80)



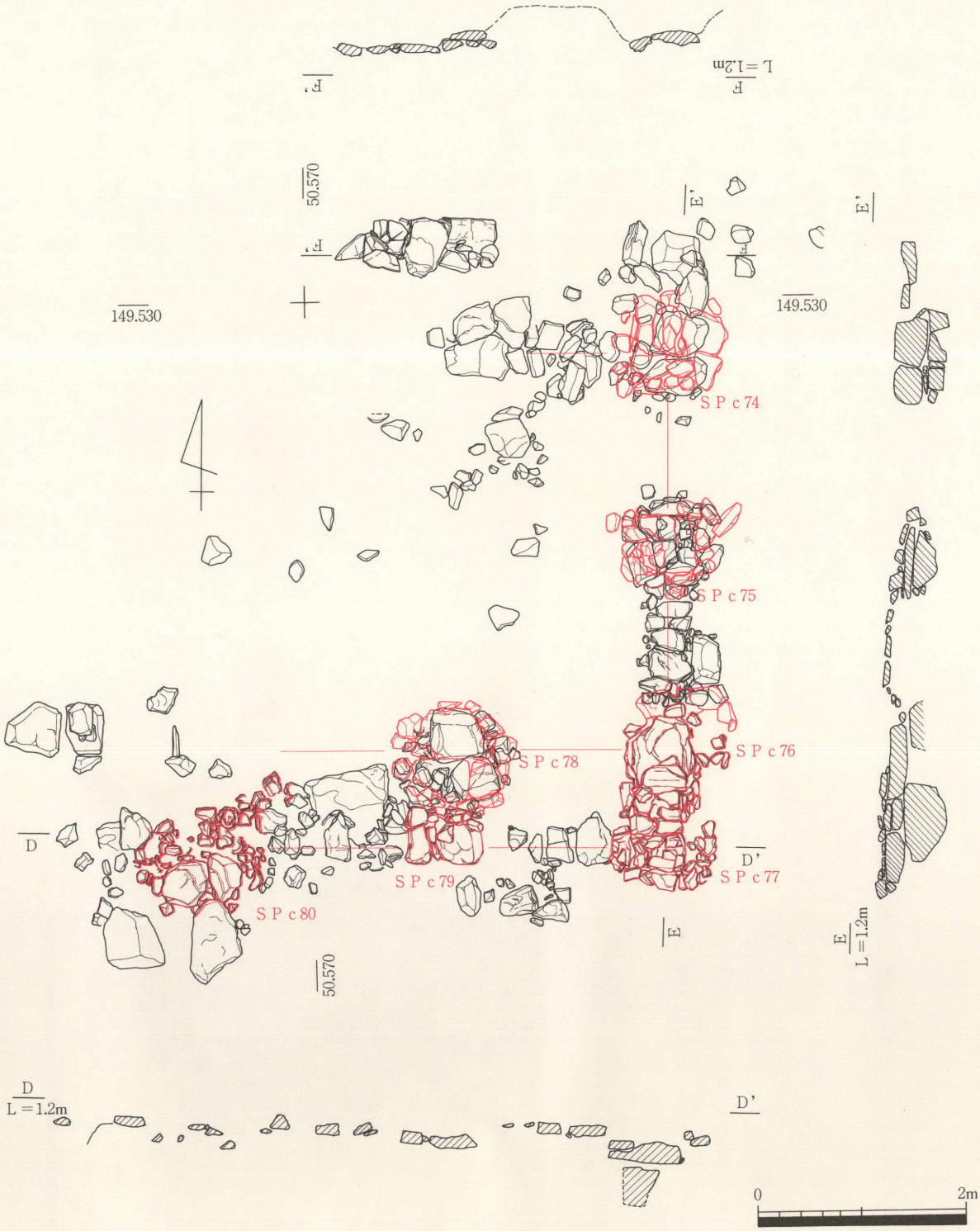




1：淡灰色粘質土(灰緑色粘土粒混じり、ＳＤｃ09裏込？)
2：灰色砂質土
3：淡褐色中砂
4：灰褐色細砂
5：褐灰色砂質土
6：灰褐色粘質土
7：暗灰色粘質土と淡灰色砂質土の細かい互層(炭化物少混じり)
8：灰色粘質土と淡灰色砂質土の細かい互層(炭化物少混じり)
9：灰色砂質土(鉄分の沈殿を多く認める)
10：灰色粘質土(鉄分の沈殿を多く認める)
11：灰色砂質土
（２～11；第１面構成土、ＳＺｃ02機能停止後にそれを被覆）
12：灰色細砂
13：淡褐色細砂
14：灰色粘質土
15：淡褐色細砂(礫多混じり)
16：淡灰色細砂
（12～16；ＳＺｃ02前面堆積土＝ＳＺｃ03に伴う整地層）
17：淡灰褐色粘質土(灰緑色粘土混じり)
18：淡灰褐色粘質土
19：淡灰色細砂
20：淡灰色細砂
21：灰色砂質土(灰褐色粘土混じり)
（17～21；ＳＺｃ02に伴う整地層）
22：淡灰褐色細砂(基盤層？)

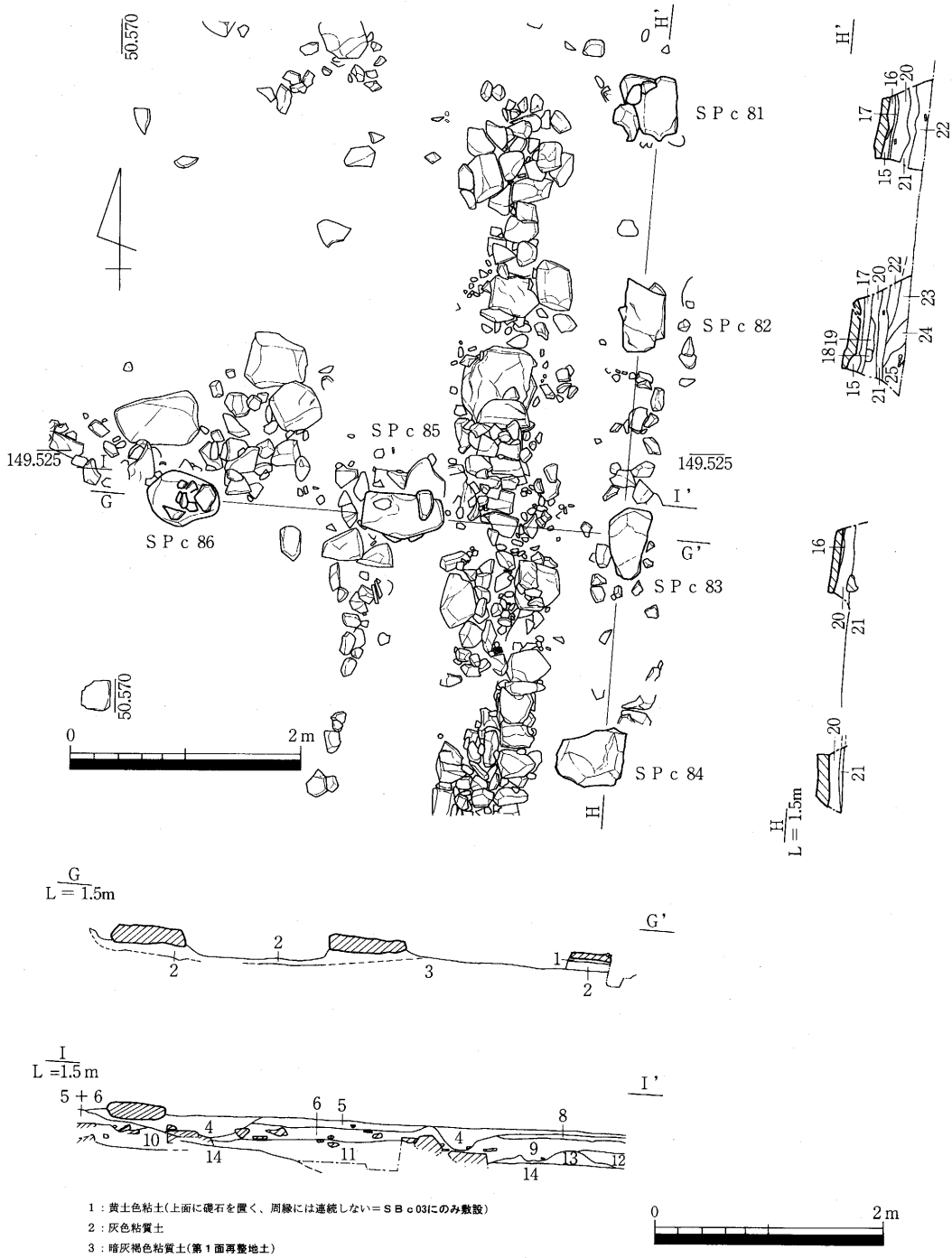



1：淡褐～灰色砂質土(灰色粘土混じり)
2：淡褐色中砂
3：灰色粘質土(灰色粘土混じり)
（１～３；ＳＺｃ02に伴う整地層）
4：淡褐色細砂(ＳＺｃ02前面堆積土＝ＳＺｃ03に伴う整地層)
5：褐灰色砂質土
6：灰褐色粘質土
7：褐灰色砂質土(５～７；攪乱、護岸裏込礫を多く包含)

**第33図　Ⅱ区　壁面図２・３（Ｓ＝１／40）**

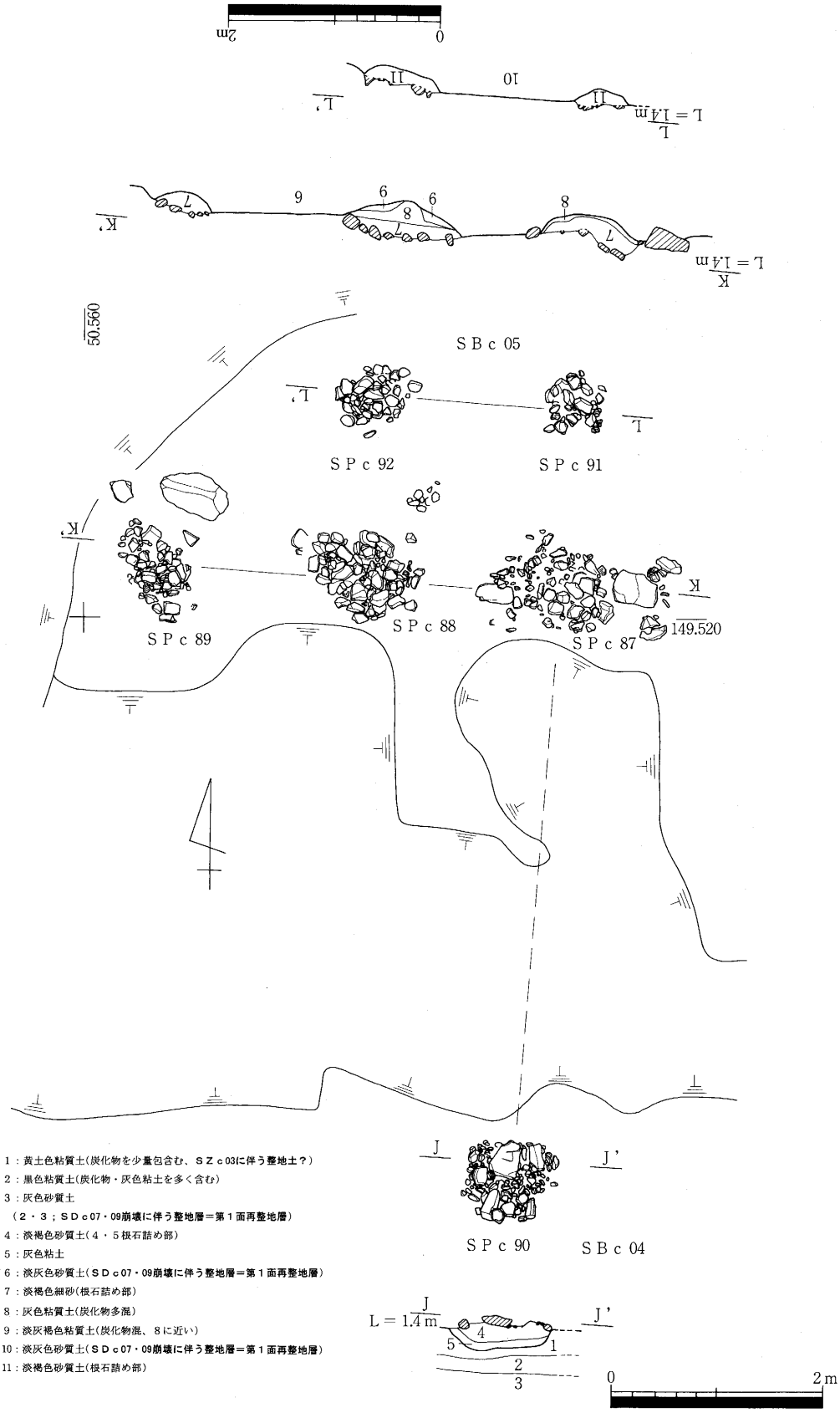



第34図　Ⅱ区　第１面上位図ＳＢｃ02平・断面図(黒；上位、赤；下位)

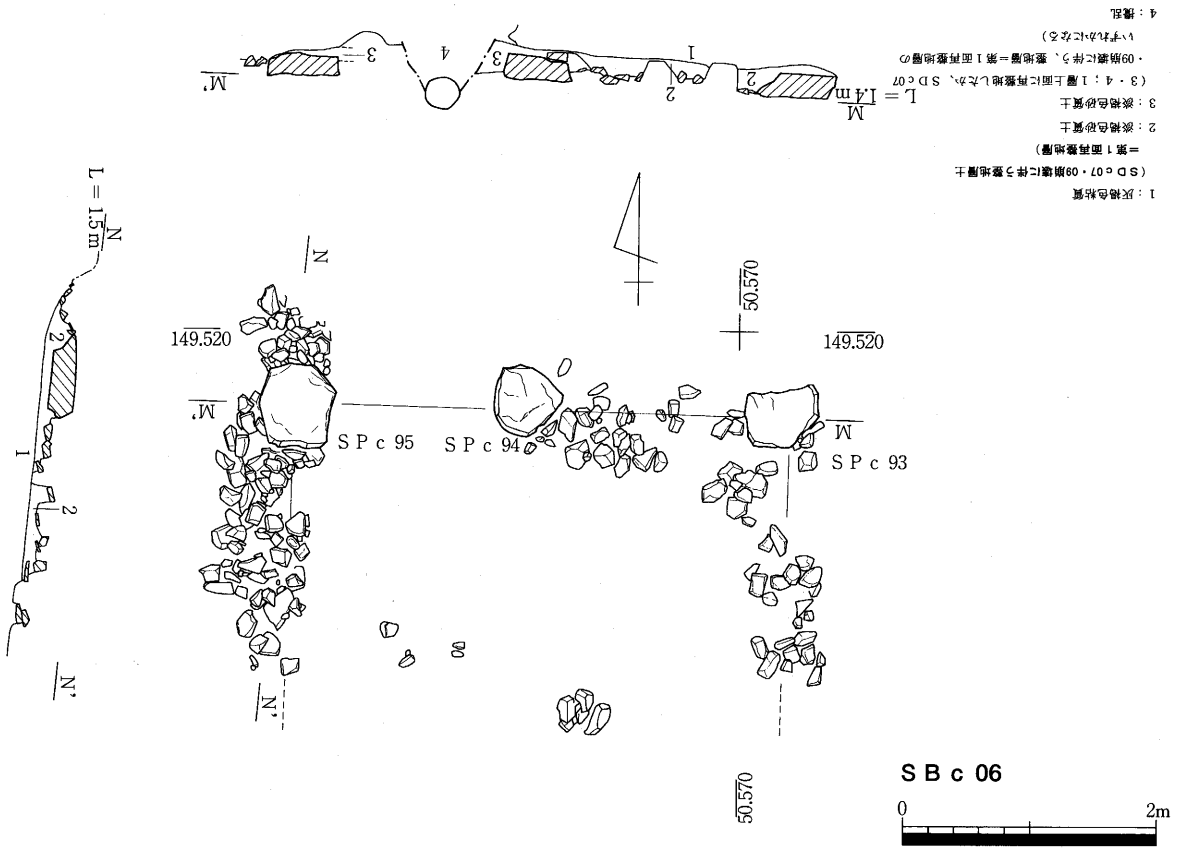


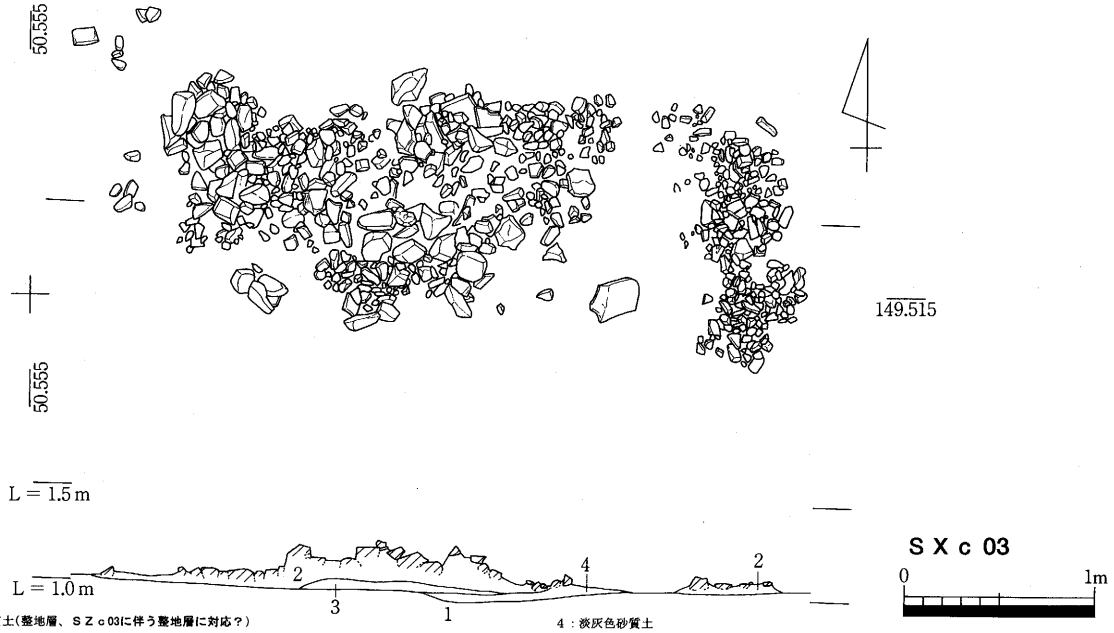

1：黄土色粘土(上面に礎石を置く、周縁には連続しない＝ＳＢｃ03にのみ敷設)
2：灰色粘質土
3：暗灰褐色粘質土(第１面再整地土)
4：淡褐色粘土(漆喰を多く含む、礎石を敷くための整地土)
5：灰褐色粘質土(礫、炭化物少混じり)
6：淡灰褐色粘質土(礫多混)
7：淡褐色中砂
8：淡褐色細砂
9：暗灰色粘質土(礫・炭化物包含、淡褐色粘土粒混じり)
10：淡褐色砂質土
11：淡灰褐色粘質土(６より明るい、炭化物包含、灰緑色粘土粒混じり)
12：暗灰色粘質土(灰緑色粘土を多く含む)
13：淡褐色砂質土
（５～13；ＳＤｃ07・09崩壊に伴う整地層＝第１面再整地層）
14：淡褐色細砂(ＳＺｃ03に伴う整地層)
15：黄土色粘土
16：淡褐色砂質土
17：黄土色粘土
18：黄土色粘土
19：漆喰
20：淡褐色砂質土(炭化物多混)
21：暗灰褐色粘質土(21・22炭化物多、灰緑色粘土粒混)
22：暗灰褐色粘質土(21より砂質大)
（16～22；ＳＤｃ07・09崩壊に伴う整地層＝第１面再整地層）
23：淡灰色砂質土
24：灰色粘質土(灰緑色粘土ブロック多混)
25：灰色粘質土(炭化物少混(23～25；ＳＺｃ03に伴う整地層))

**第35図　Ⅱ区　第１面上位面ＳＢｃ03平・断面図**

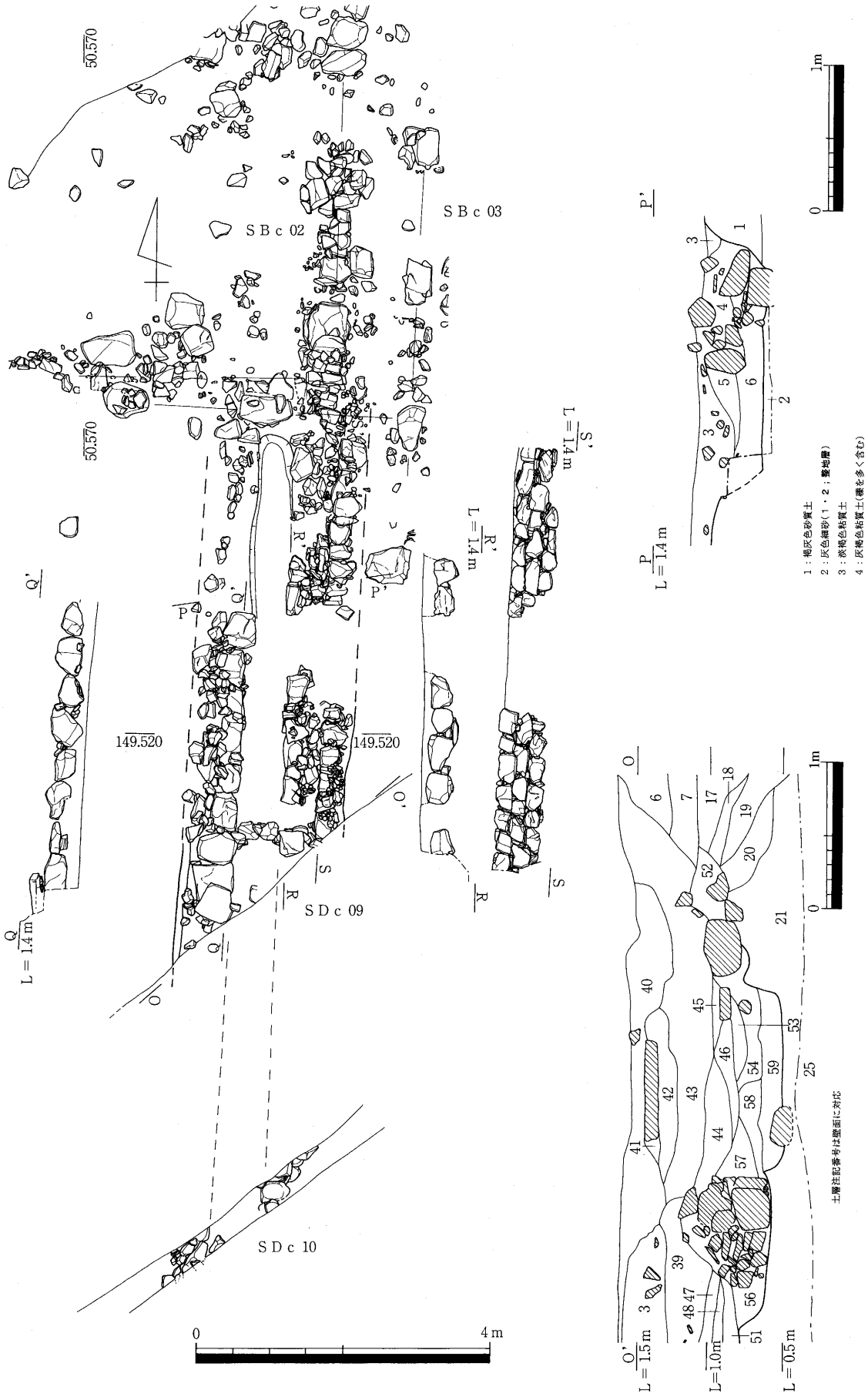



**第36図　Ⅱ区　第１面上位面ＳＢｃ04・05平・断面図**

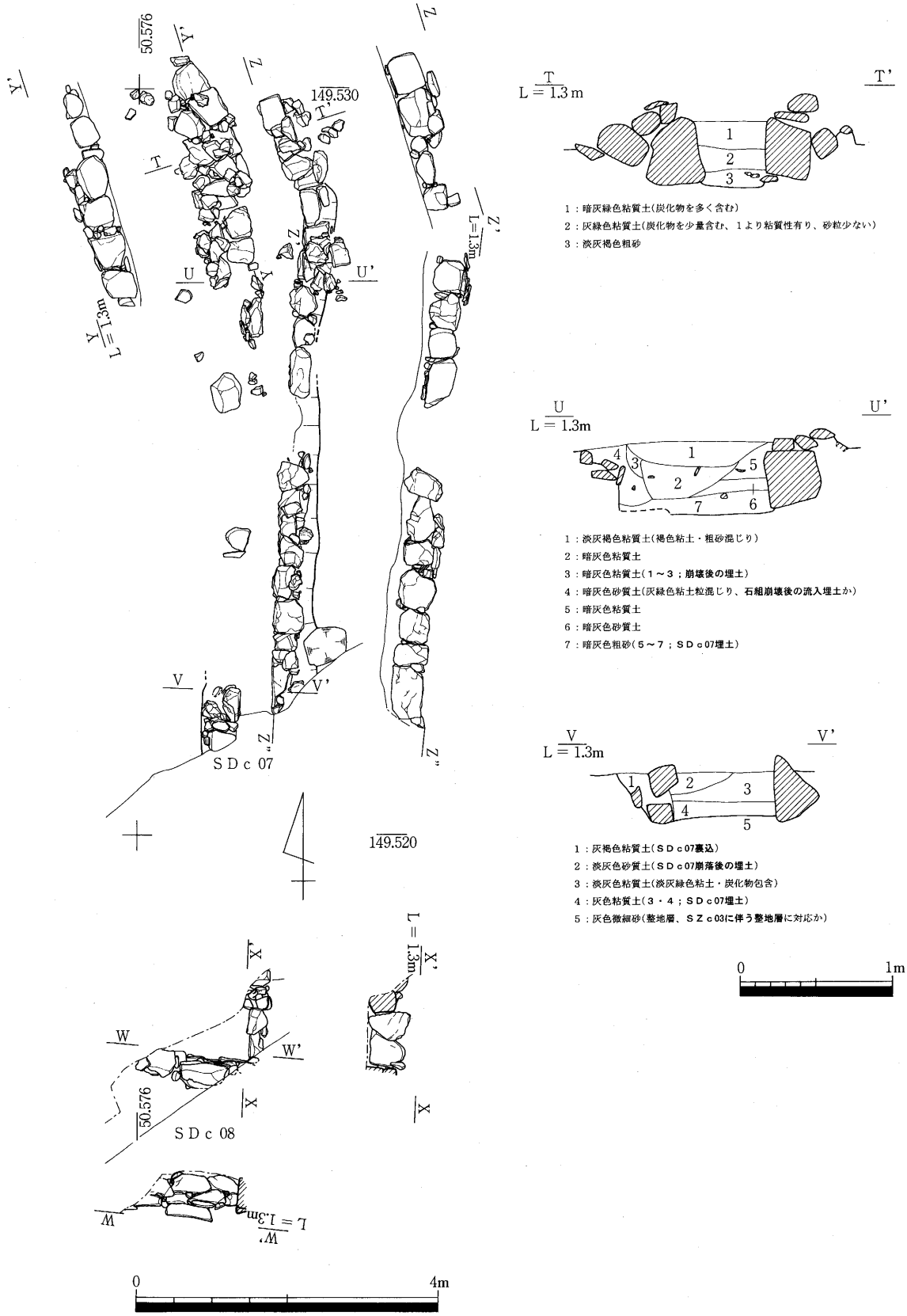


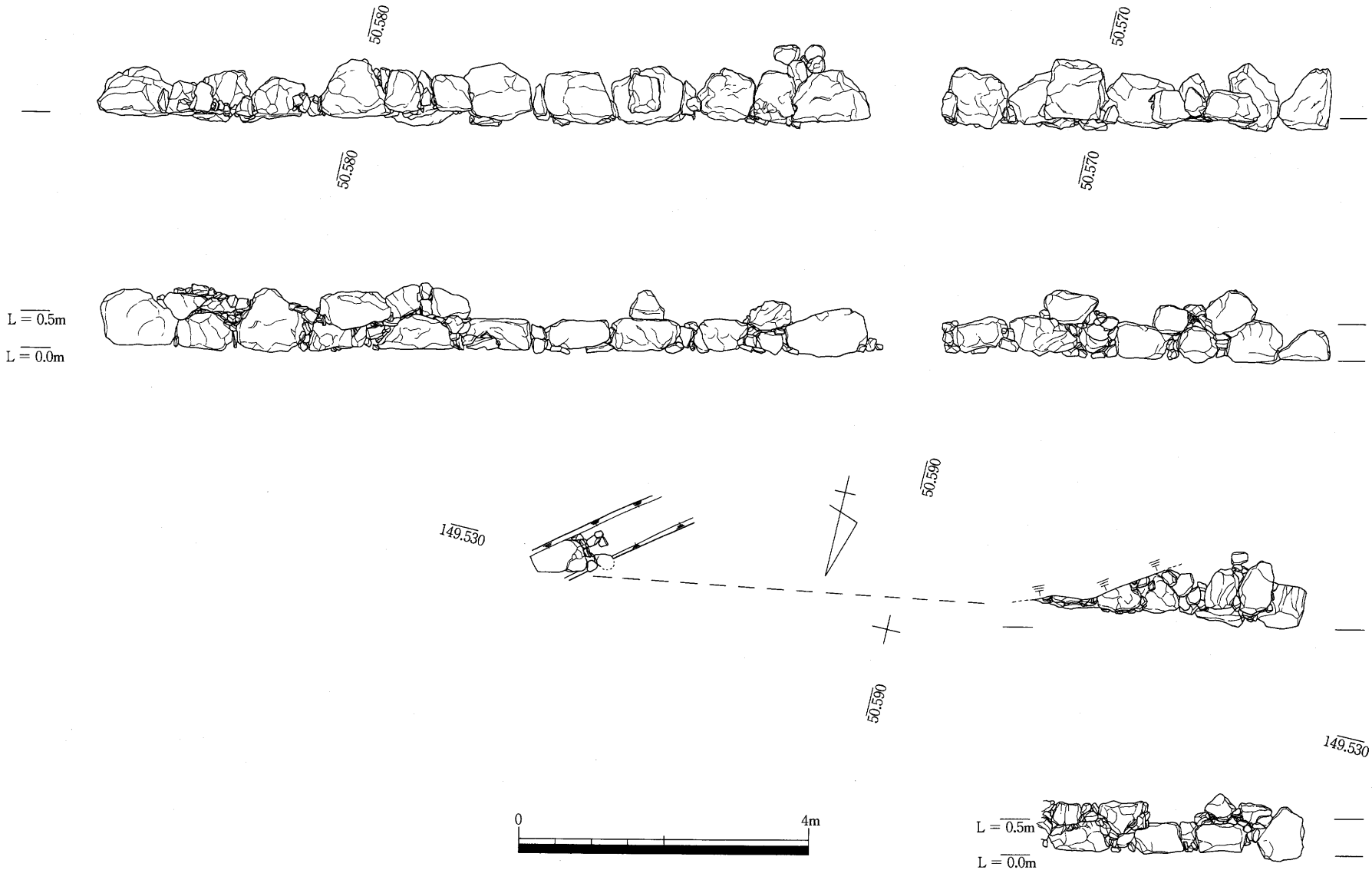

**第37図　Ⅱ区　第1面上位面SBc06、SXc03平・断面図**




**第38図　Ⅱ区　第１面下位面ＳＤｃ09・10平・断面図及び立面図**



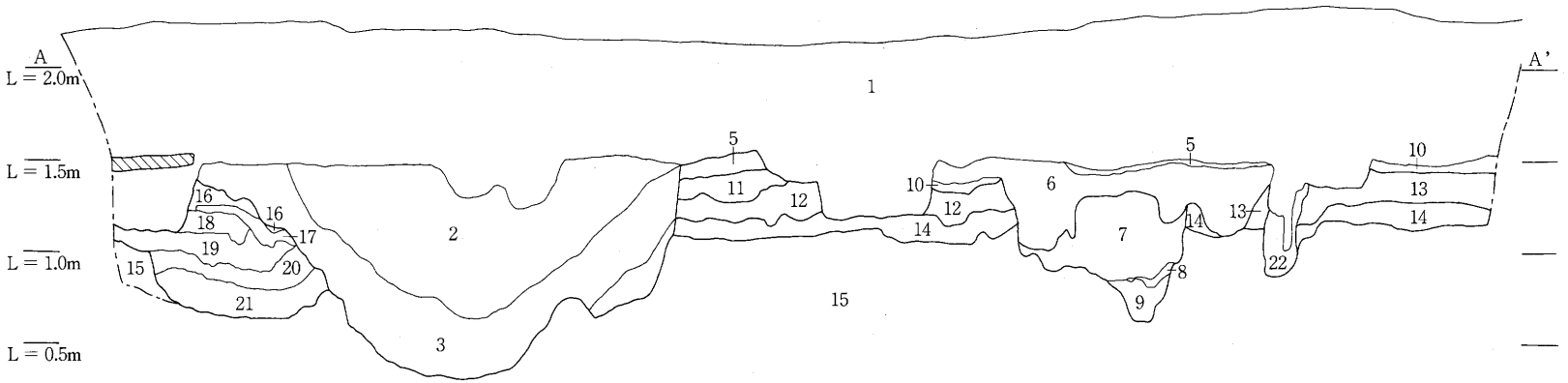

**第39図　Ⅱ区　第1面下位面SDc07・08平・断面図及び立面図**



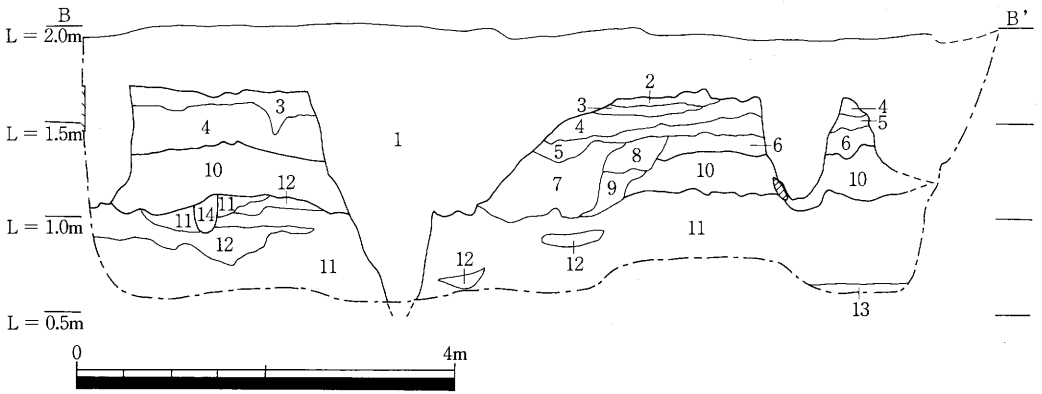

第40図　Ⅱ区　第２面ＳＺｃ02平・断面図

第41図　Ⅲ区　第１面遺構配置図（Ｓ＝１／200）

第42図　Ⅲ区　第２面遺構配置図（Ｓ＝１／200）

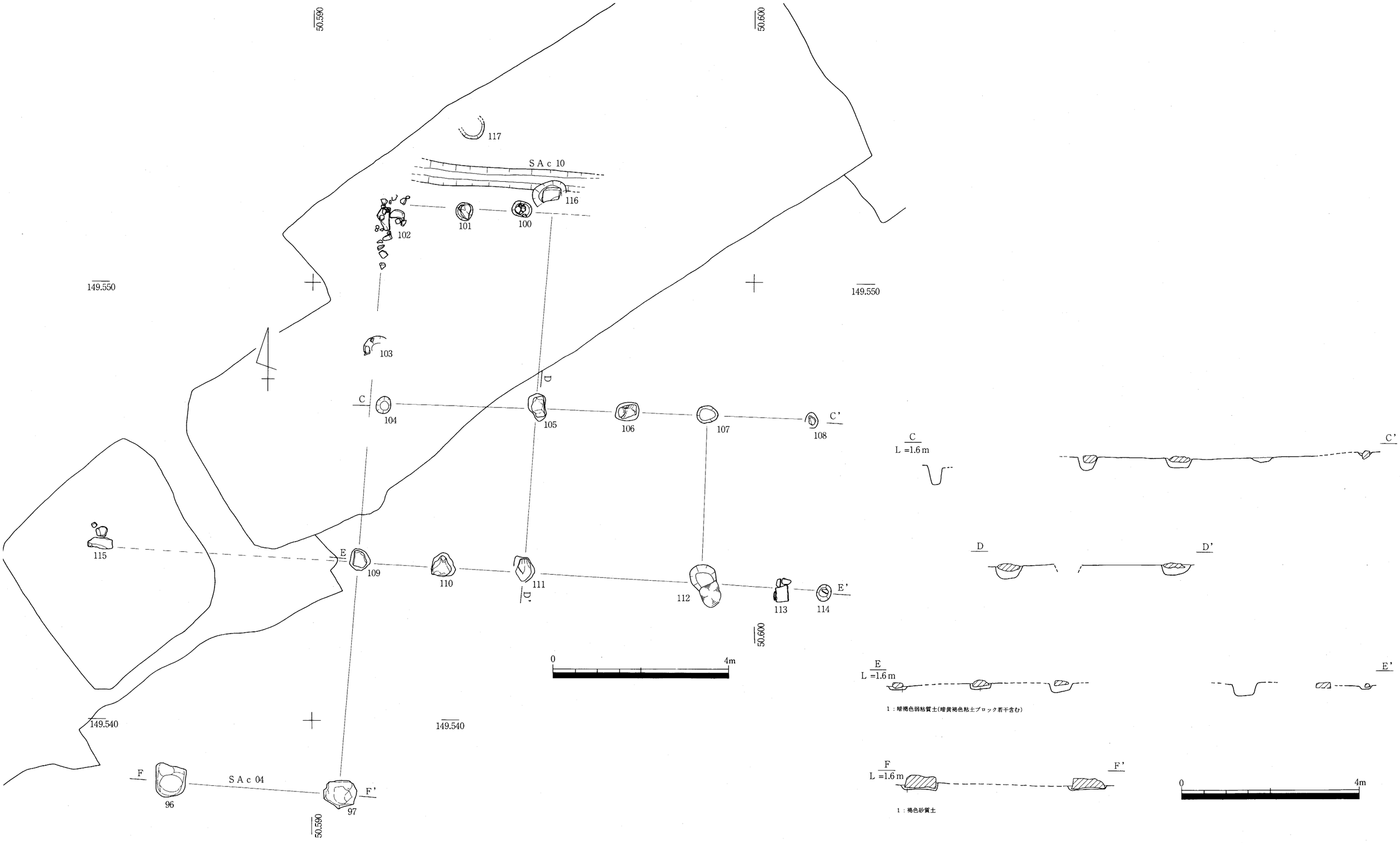



1：攪乱
2：灰色砂質土(礫を多く含む)
3：灰褐色粘質土(礫包含)
4：淡褐色砂質土(２～４；明治期以降の攪乱埋土)
5：淡褐灰色砂質土(整地層？)
6：淡褐灰色粘質土(漆喰を少量含む)
7：暗灰色粘質土
8：淡褐色砂質土
9：10・13層ブロックの混在(６～９；明治期以降の攪乱埋土)
10：黄土色粘質土(花崗土らしいものを含む、整地層？)
11：灰色粘質土と淡褐色砂質土の水平体積(瓦含む明治以降の整地層)
12：淡褐灰色粘質土
13：灰褐色粘質土(炭化物包含)
14：淡褐色砂質土(12～14；Ⅱ区第１面再整地層に対応)
15：淡褐色中砂(ＳＺｃ03に伴う整地層)
16：黄土色粘質土(炭化物包含)
17：灰色粘質土(炭化物・焼土包含)
18：淡褐色砂質土(礫包含)
19：黄土色粘質土(炭化物包含)
20：灰色粘質土(炭化物・焼土を多く含む)
21：灰色砂質土(礫を多量に包含)
(16～21；ＳＫｃ07埋土)
22：攪乱埋土

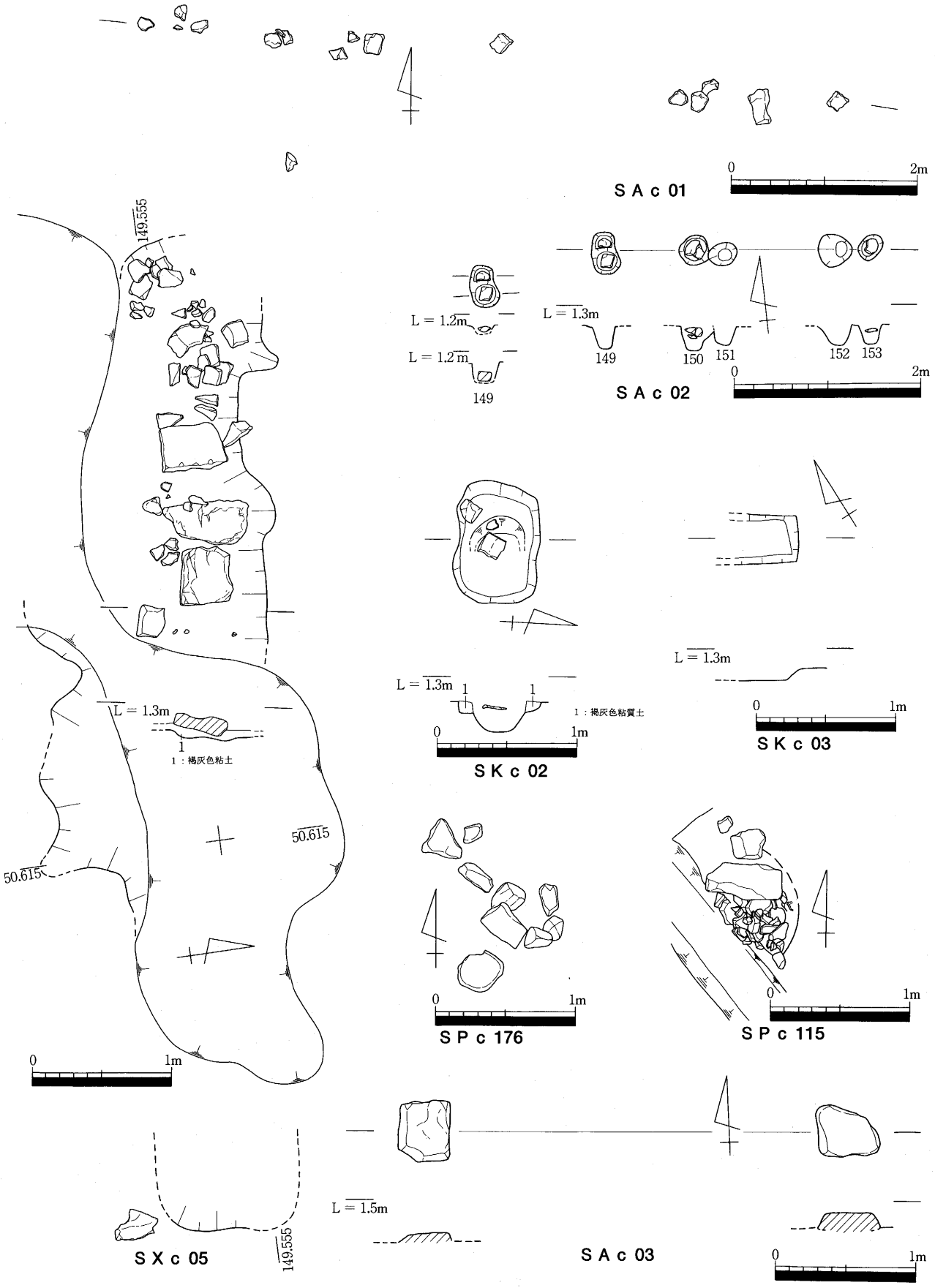



1：表土(攪乱)
2：明褐色砂
3：暗灰色砂質土
4：暗褐色砂質土＋褐色砂質土(互層になっている)
5：黄褐色粘土(0.1～0.2cmの砂粒・炭化物少量包含)
(２～５；明治期以降の整地層)
6：灰褐色粘質土(時期不詳整地層)
7：明灰褐色粘質土(0.5～１cmの砂粒を少量含む)
8：淡褐灰色弱粘質土
9：淡灰褐色砂質土(７～９；不明遺構埋土か)
10：暗褐灰色弱粘質土(0.5～２cm大の小礫を若干含む)
(南壁14層と同じ、Ⅱ区第１面再整地層に対応か)
11：淡灰褐色砂
12：淡緑灰色粘質土
13：褐灰色粗砂(0.5～１cmの砂粒を多く含む)
(11～13；ＳＺｃ03に伴う整地層)

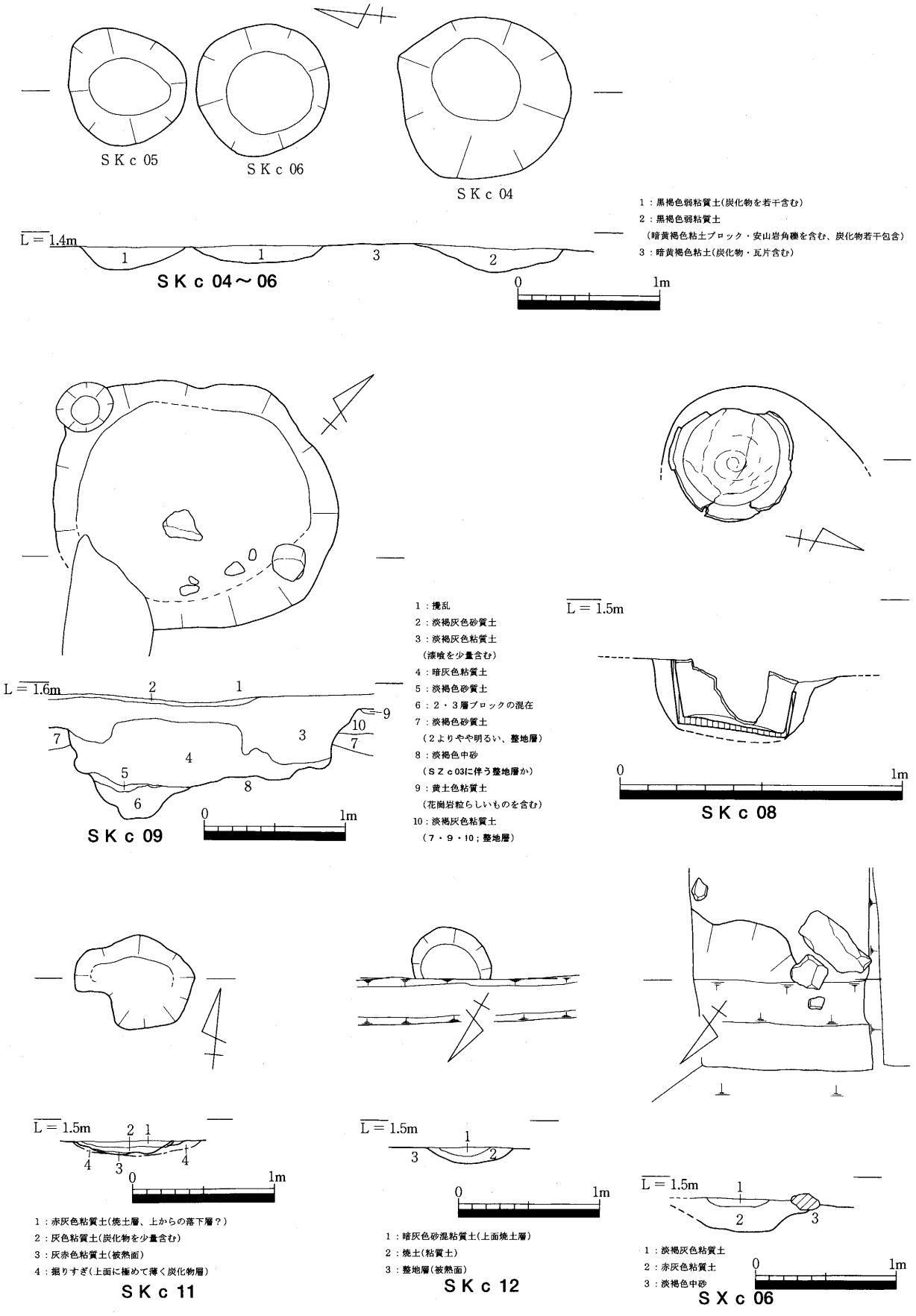
第43図　Ⅲ区　壁面図１・２(天地Ｓ＝１／40、左右Ｓ＝１／80)



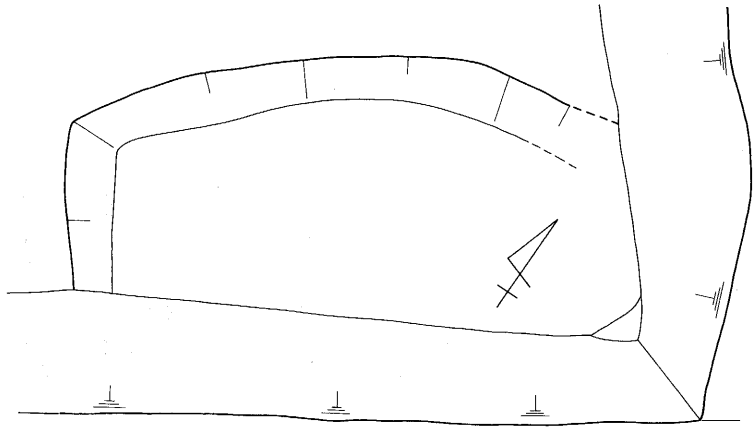

第44図　Ⅲ区　第１面ＳＡｃ04、ＳＢｃ07平・断面図

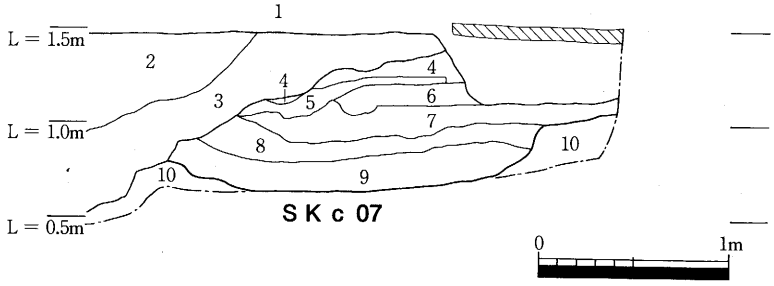



第45図　Ⅲ区　遺構平・断面図１

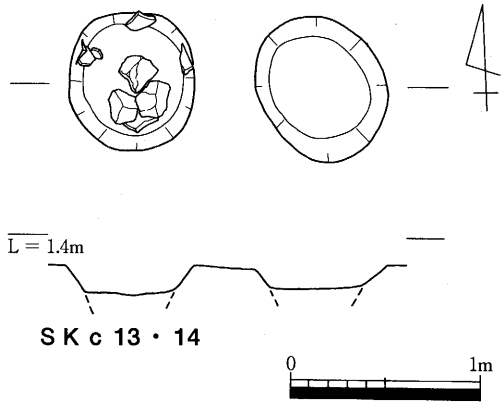



**第46図　Ⅲ区　遺構平・断面図2**

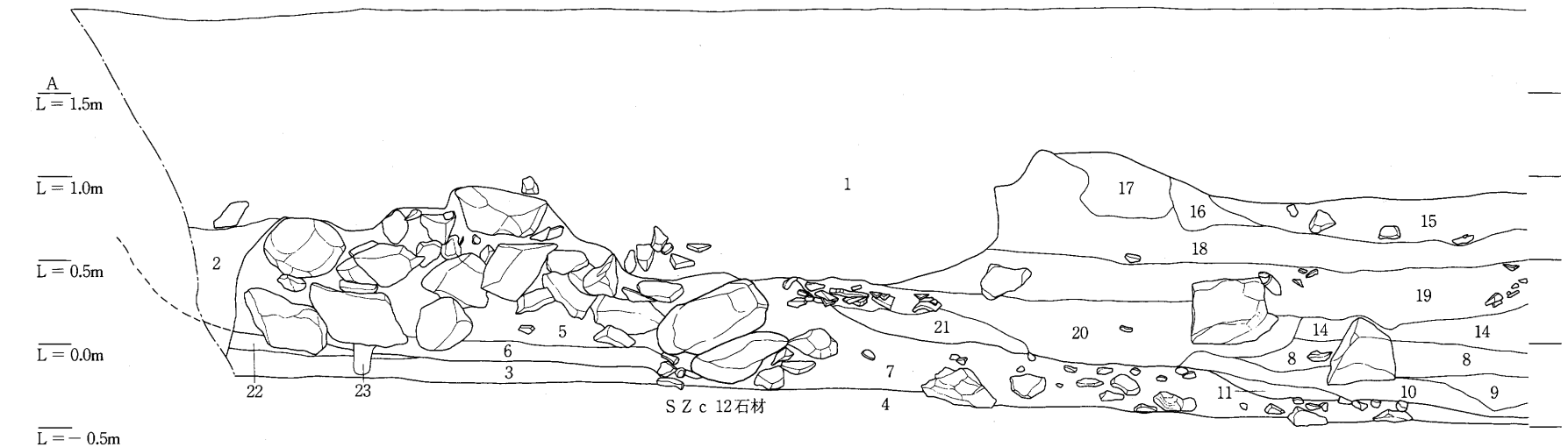


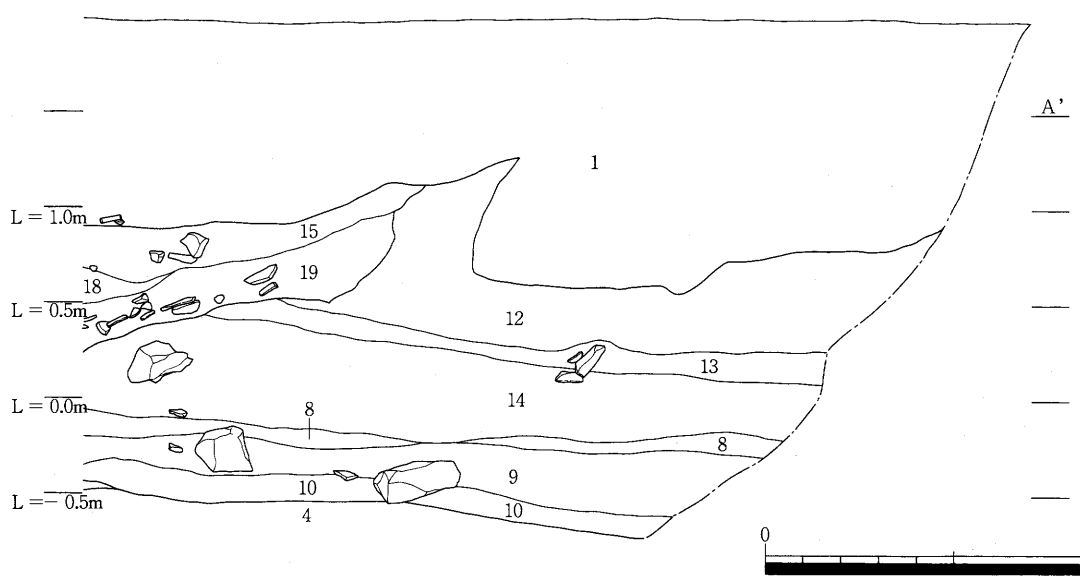



1：攪乱
2：灰色砂質土(礫を多く含む)
3：灰褐色粘質土(礫包含)
4：黄土色粘質土(炭化物包含)
5：灰色粘質土(炭化物・焼土包含)
6：淡褐色砂質土(礫包含)
7：黄土色粘質土(炭化物包含)
8：灰色粘質土(炭化物・焼土を多く含む)
9：灰色砂質土(礫を多量に包含)
10：淡褐色中砂(ＳＺｃ03に伴う整地層)




第47図　Ⅲ区　遺構平・断面図３

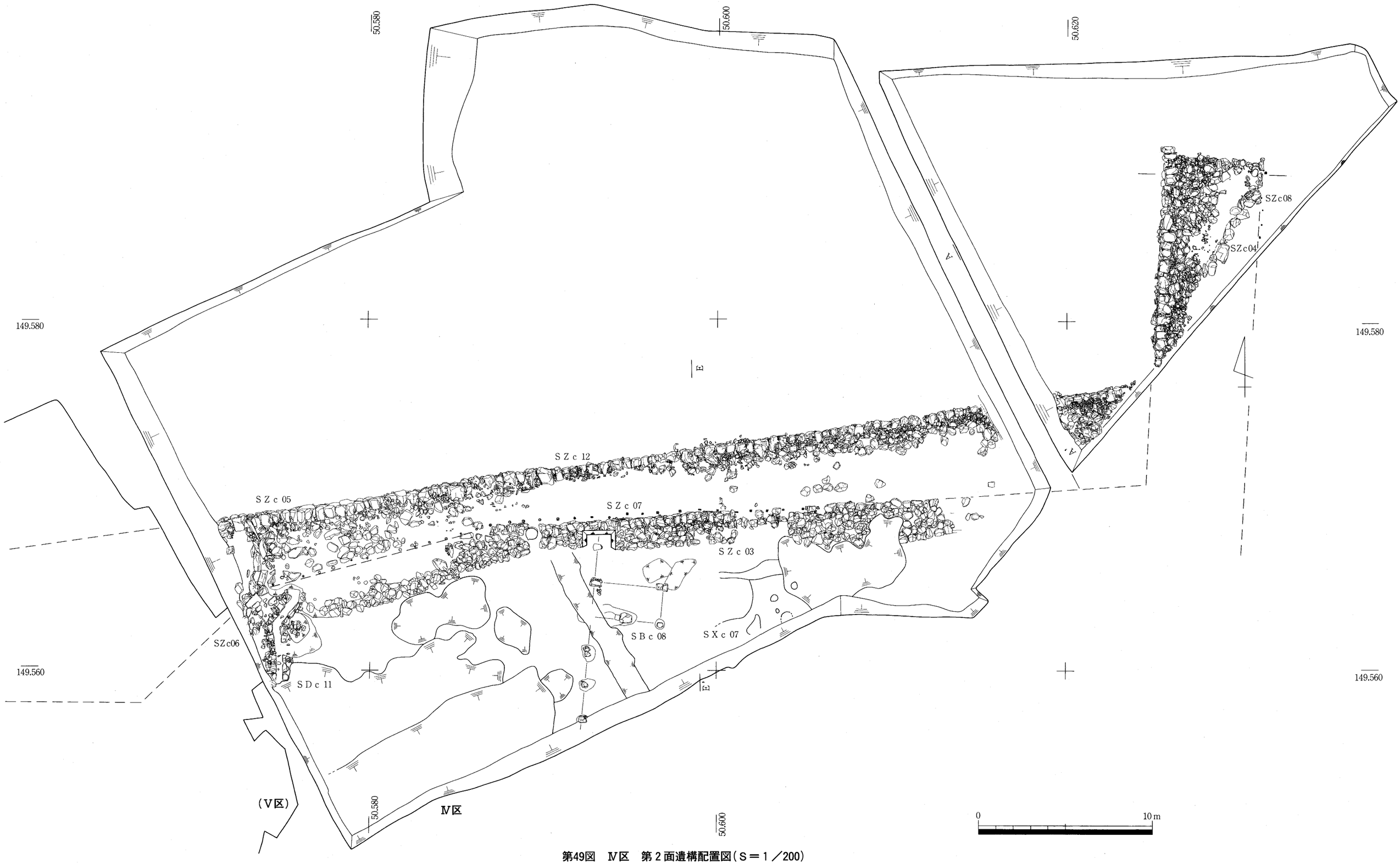


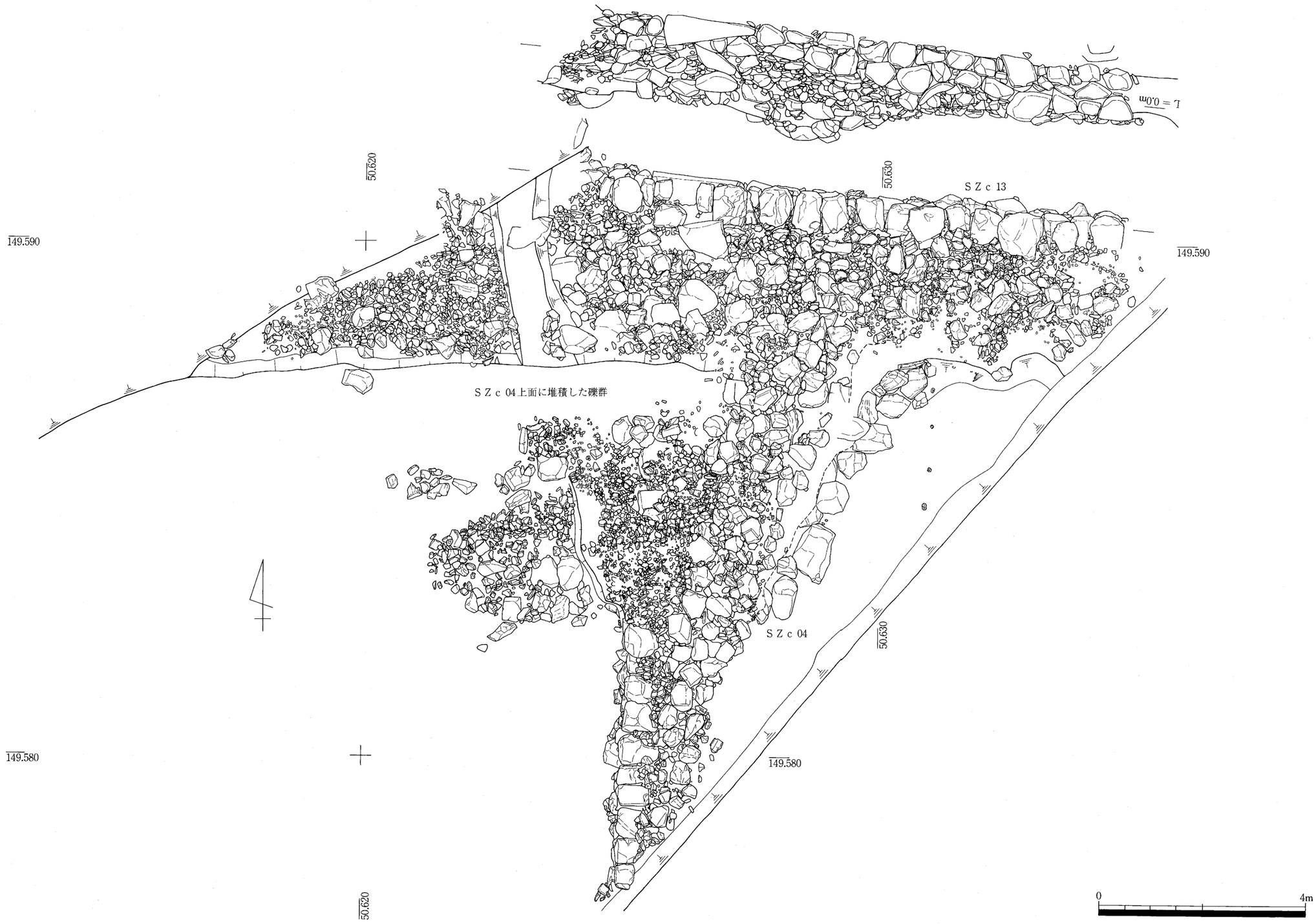

1：攪乱
2：褐灰色(10YR4/1)混砂粘質土(攪乱土)
3：灰色(N4/)砂利層、2mm前後の砂利を多量に含む、砂利層
4：砂利・拳大礫層、堅緻にしまる
（旧海岸、ＳＺｃ04・12・13構築面）
5：褐灰色(10YR6/1)砂、人頭大以上～拳大の礫充填
6：にぶい黄色(2.5Y6/3)砂質土
（５・６；ＳＺｃ12裏込）
7：灰黄色(2.5Y7/2)砂層、３cm～拳大以上の砂利・砂粒を多量に含む
8：浅黄色(2.5Y7/4)細砂
9：オリーブ灰色(2.5GY6/1)細砂
10：オリーブ灰色(5GY6/1)ラミナ、砂利と砂粒の相互層
11：オリーブ灰色(5GY6/1)ラミナ、砂利と砂粒の相互層
12：浅黄色(2.5Y7/3)粗砂層、１cm以下の砂利を多く含む
13：にぶい黄橙色(10YR7/3)細砂層、極めて細かい砂
14：明黄褐色(10YR7/6)細砂層、１～５cmの砂利を少量含む
（７～14；ＳＺｃ13に伴う整地層）
15：オリーブ黄色(7.5Y6/3)粘質土
16：黒褐色(2.5Y3/1)粘質土
17：灰黄色(2.5Y7/2)粘質土
18：オリーブ灰色(10Y6/2)混砂粘質土
19：オリーブ灰色(10Y5/2)混砂粘質土
20：灰色(7.5Y5/1)混砂粘質土
21：オリーブ灰色(5GY6/1)ラミナ、砂利と細砂の相互層
（15～21；不明埋土、ＳＤｃ12に対応する埋土の可能性も残る）
22：黄灰色(2.5Y5/1)砂質土、砂利を少量含む
（構築以前の堆積層）
23：灰色(5Y5/1)砂利
（不明埋土、木杭の可能性も残るが、当該箇所に杭の打設は確認できない）

**第50図　Ⅳ区　壁面図(Ｓ＝１／40)**

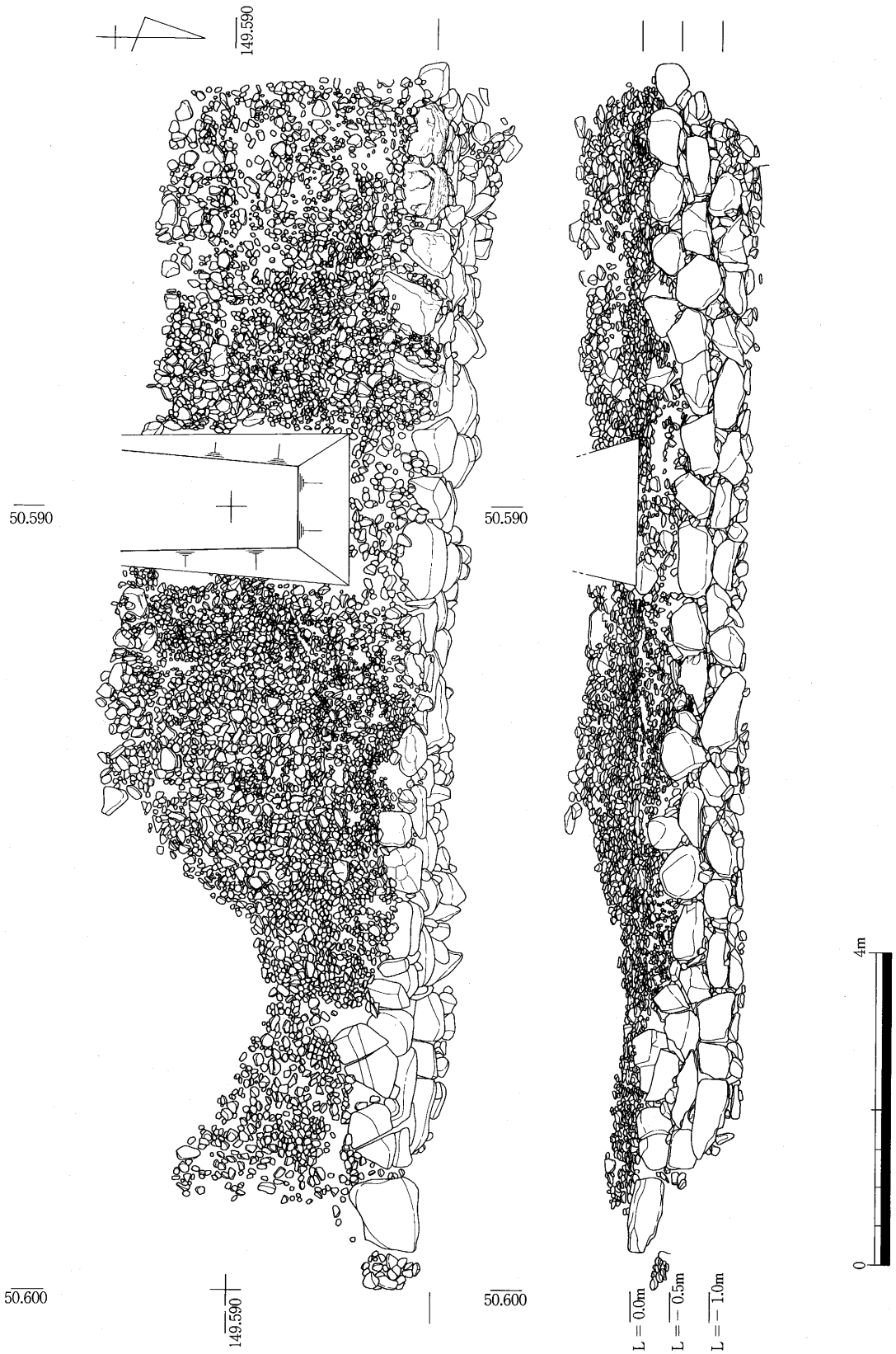
第48図　Ⅳ区　第１面遺構配置図（S＝１／200）



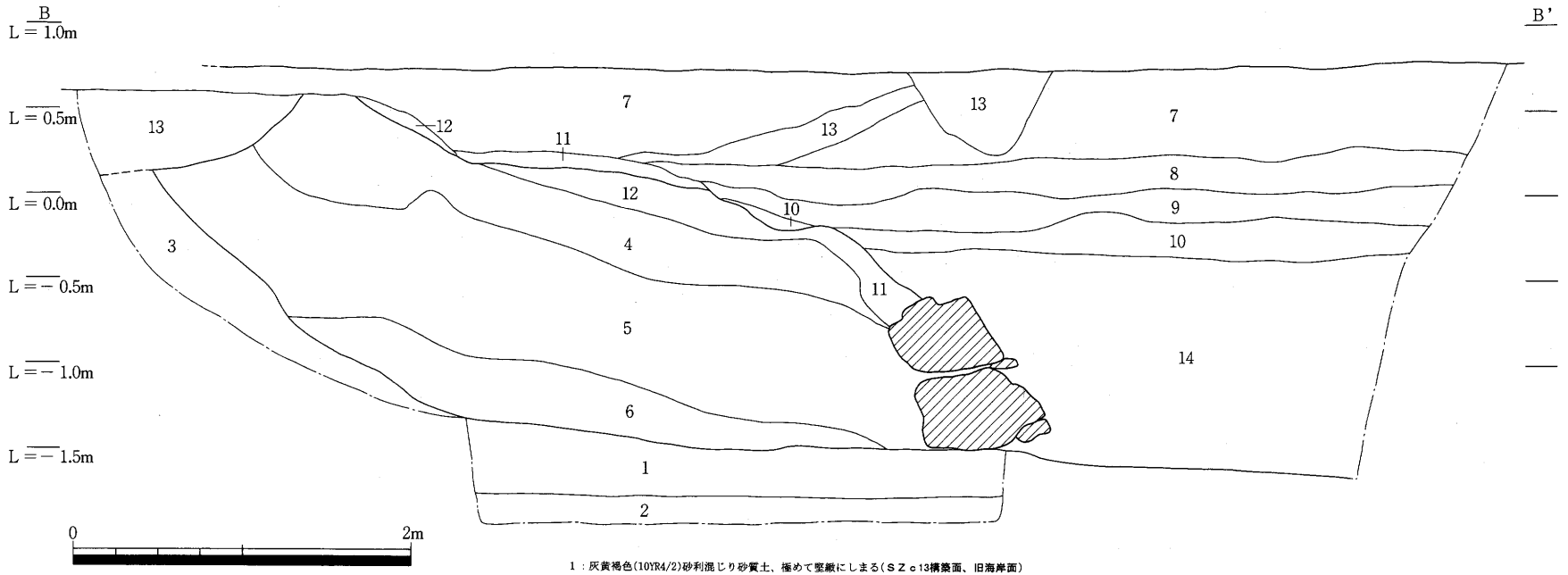

第49図　Ⅳ区　第２面遺構配置図（Ｓ＝１／200）




第51図　Ⅳ区　第１面ＳＺｃ04を利用したＳＺｃ13構築状況　平・立面図（Ｓ＝１／80）

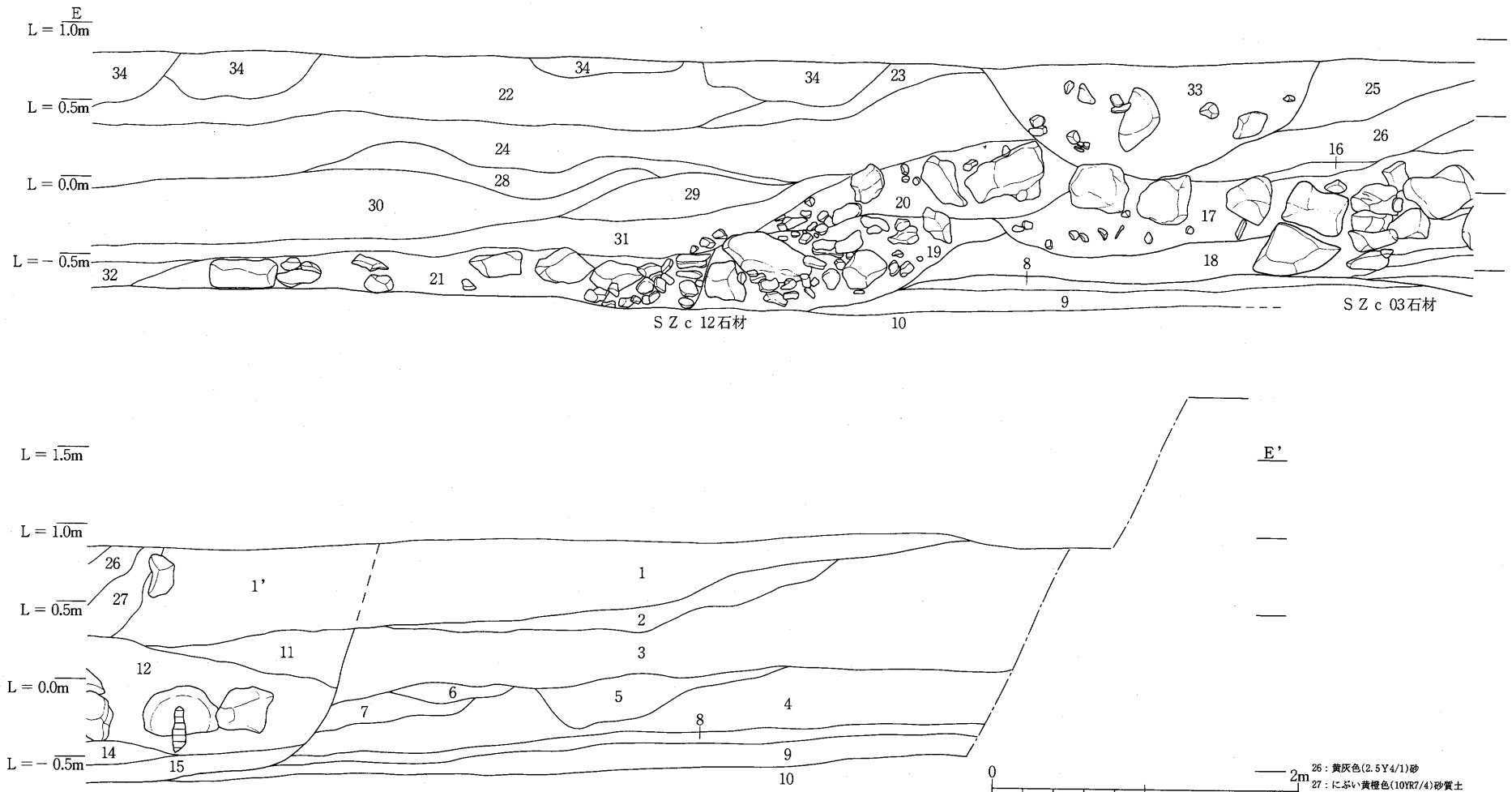



第52図　Ⅳ区　第１面ＳＺｃ13平・立面図



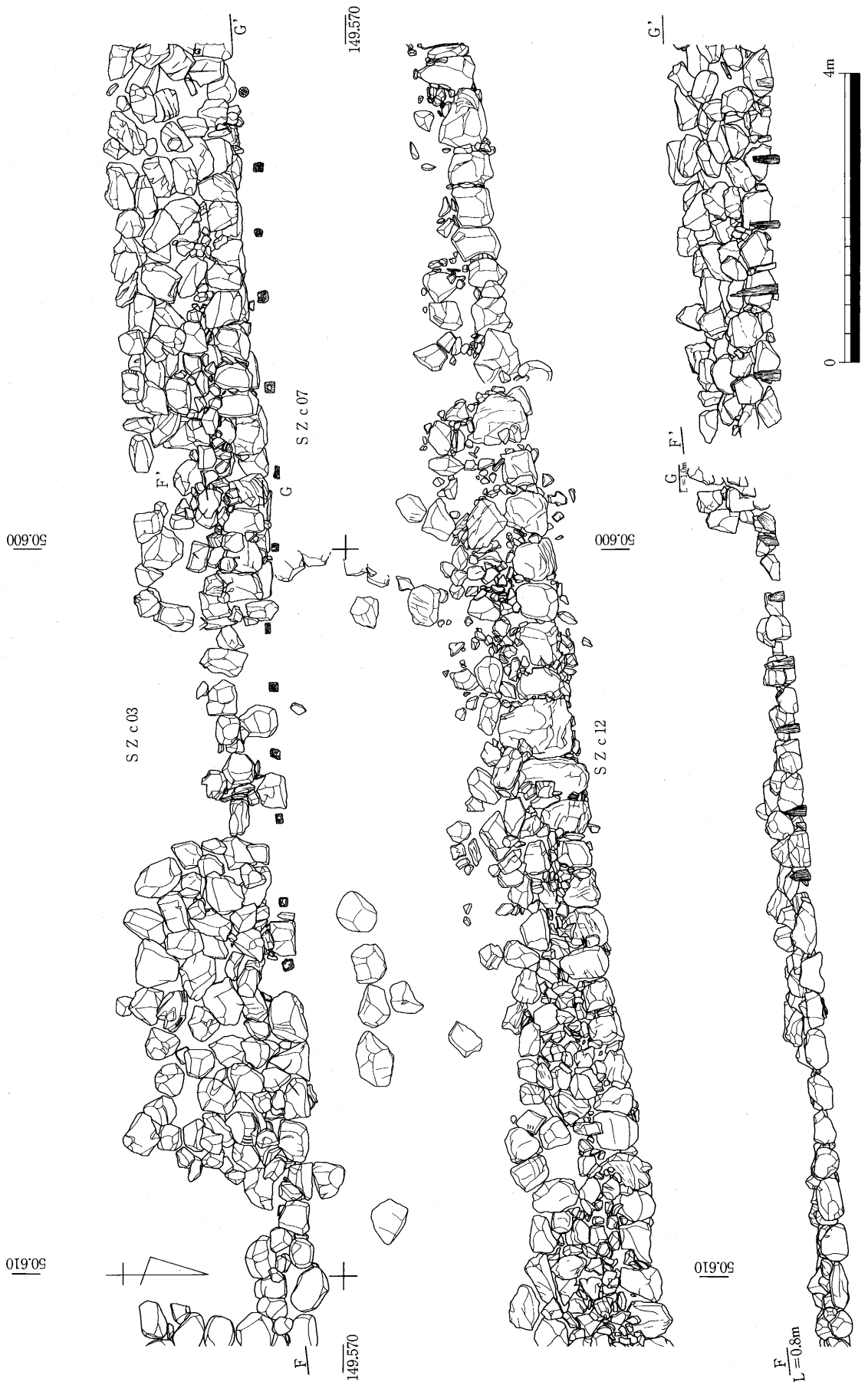

1：灰黄褐色(10YR4/2)砂利混じり砂質土、極めて堅緻にしまる(ＳＺｃ13構築面、旧海岸面)
2：黒色(7.5Y2/1)粘土、粘性が極めて強い(旧海浜部埋土)
3：黄褐色砂質土(ＳＺｃ13に伴う整地層)
4：拳大～その２倍前後の礫充填層
5：拳大～人頭大以上の礫充填層
6：拳大～その２倍前後の礫充填層
（４～６；ＳＺｃ13裏込）
7：にぶい黄橙色(10YR7/3)砂質土、5mm～10cmの砂利を多量に含む
8：黄灰色(Hue2.5Y6/1)砂質土、5mm～10cmの砂利を多量に含む
9：にぶい黄橙色(10YR7/2)砂質土、２～5mmの砂利を多量に含む
10：褐灰色(10YR5/1)シルト質土、一部ラシナ状を呈する
11：灰褐色(7.5YR4/2)砂質土、裏込石の流入土、拳大の礫を多量に含む
12：灰黄褐色(10YR5/2)混砂粘質土、裏込石の流入土、拳大の礫を多量に含む
（７～12；ＳＺｃ13上面堆積土＝機能停止後の堆積層）
13：攪乱
14：にぶい黄橙色(10YR7/2)砂質土(ＳＺｃ13前面堆積土)

第53図　Ⅳ区　第１面ＳＺｃ13断面図(Ｓ＝１／40)

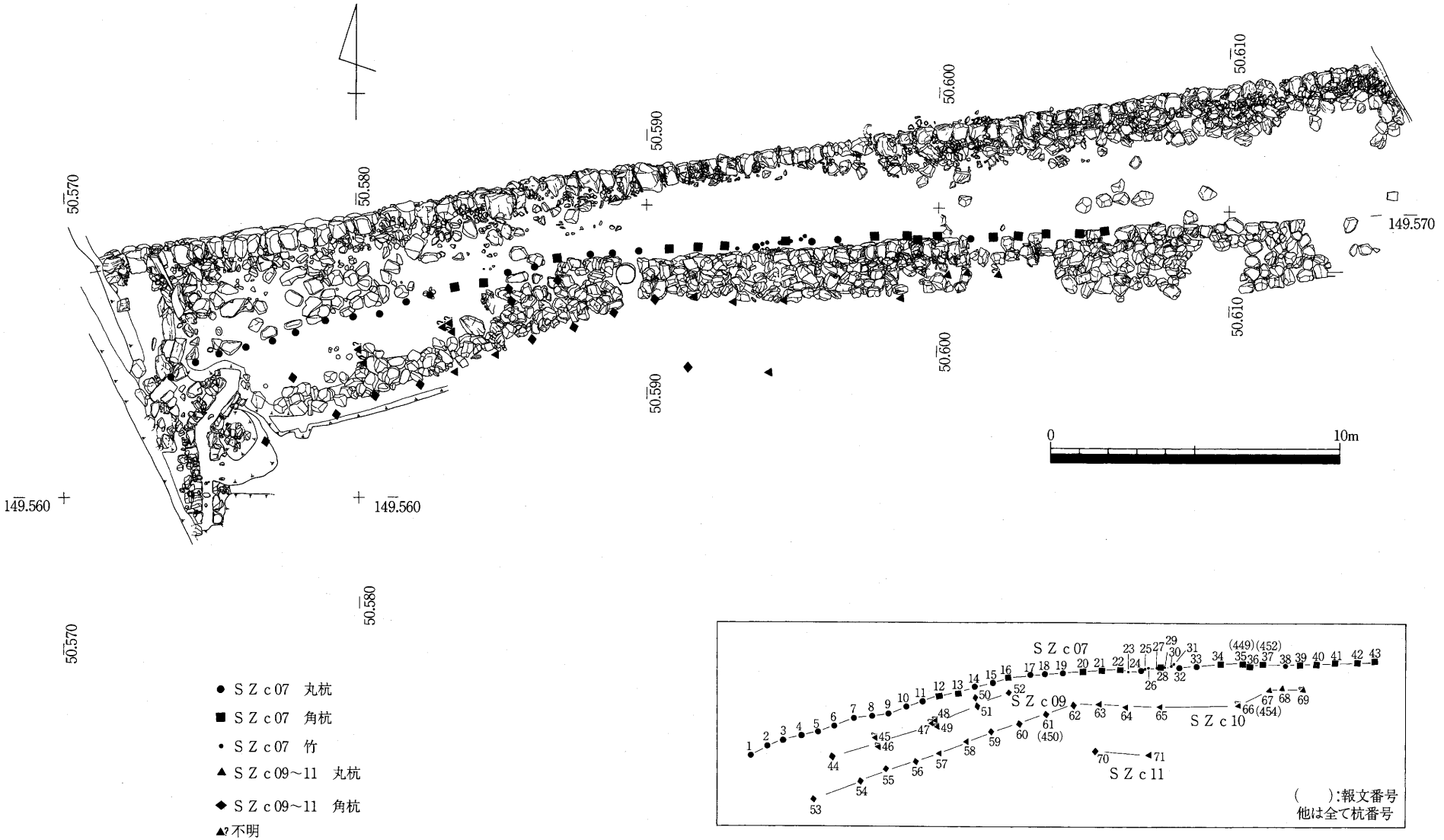



1：灰黄褐色(10YR6/2)砂質土、3cm前後の小礫を多量に含む
2：黄灰色(2.5Y5/1)砂質土、暗灰黄色(2.5Y5/2)粘質土ブロック多く含む
3：にぶい黄色(2.5Y6/3)砂質土、1～3cm前後の小礫を多量に含む
（1～3；ＳＺｃ03に伴う整地層）
4：灰黄色(2.5Y6/2)砂質土、砂利と砂がラミナ状に堆積
5：灰色(5Y4/1)混砂粘質土
6：黒褐色(2.5Y3/2)粘質土
7：にぶい黄色(2.5Y6/3)砂
8：オリーブ黒色(5Y3/1)砂利
9：灰オリーブ色(5Y5/2)砂
（4～9；ＳＺｃ03構築以前の堆積層）
10：灰色(5Y4/1)砂質土、地山？、5cm弱の砂利を多量に含み、堅緻にしまる、旧海岸
1'：ＳＺｃ03の掘方を確認しなければならないが、識別できなかった
11：灰オリーブ色(5Y6/2)砂質土
12：灰色(5Y6/1)砂質土
13：にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土
14：褐灰色(10YR6/1)砂質土
15：灰色(5Y5/1)混砂粘質土
（1'・11～15；ＳＺｃ03裏込＝掘方埋土）
16：黄灰色(2.5Y6/1)砂
17：灰黄色(2.5Y7/2)砂質土、拳大以下の礫を多量に含む
18：暗灰黄色(2.5Y5/2)砂（ＳＺｃ12構築に伴う整地土）
19：灰黄色(2.5Y6/2)砂質土（ＳＺｃ12裏込）
20：黄灰色(2.5Y4/1)砂質土、5cm以下の小礫を多量に含む
（17・20；ＳＺｃ12崩壊後の石材充填層＝ＳＺｃ13構築に伴う整地層）
21：灰色(5Y5/1)砂
（ＳＺｃ12前面堆積土＝崩壊石材、ＳＺｃ13構築に伴う整地層）
22：褐灰色(10YR6/1)砂
23：灰黄褐色(10YR6/2)砂
24：灰色(5Y6/1)砂質土、砂利を多量に含む
25：浅黄色(2.5Y7/4)砂
26：黄灰色(2.5Y4/1)砂
27：にぶい黄橙色(10YR7/4)砂質土
28：灰色(5Y5/1)砂
29：黄灰色(2.5Y5/1)砂
30：明黄褐色(10YR6/6)砂
31：黄灰色(2.5Y5/1)砂
32：にぶい黄色(2.5Y6/4)砂
（16・22～31；ＳＺｃ13に伴う整地層）
33：にぶい黄褐色(10YR5/3)粘土、褐灰色(10YR4/1)砂質土をブロック状に含む
（ＳＤｃ12埋土）
34：攪乱

**第54図　Ⅳ区　第2面ＳＺｃ03･12断面図（Ｓ＝1／40）**

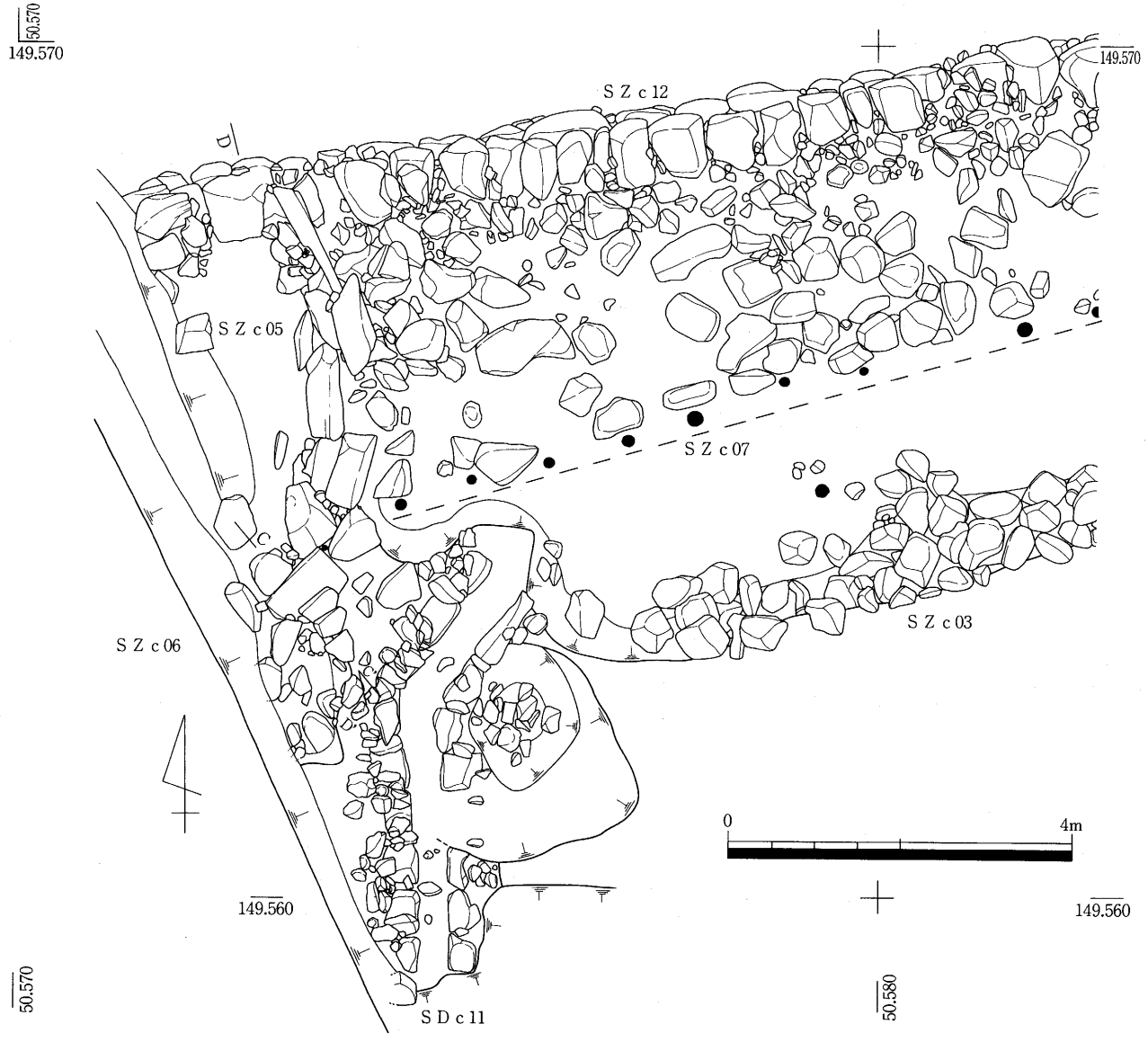


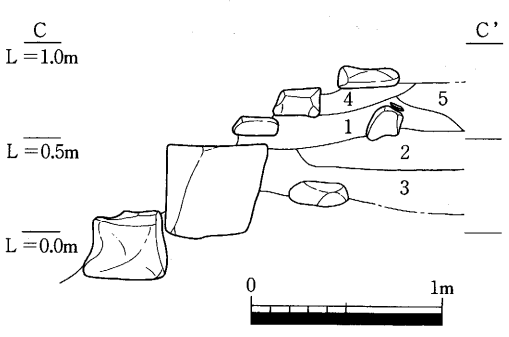

**第55図　Ⅳ区　第２面ＳＺｃ03･07･12平・立面図**




第56図　Ⅳ区　第２面ＳＺｃ07～11打設杭種類

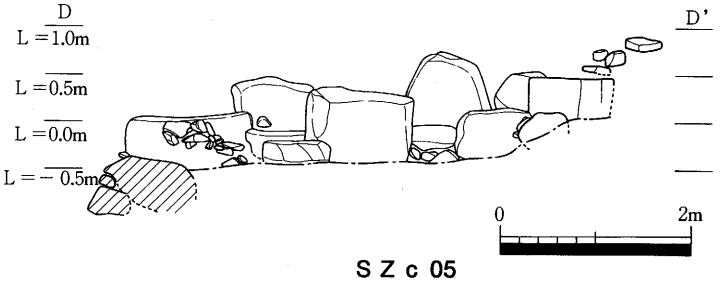
第57図　Ⅳ区　第２面ＳＺｃ04･08平・断面図及び立面図



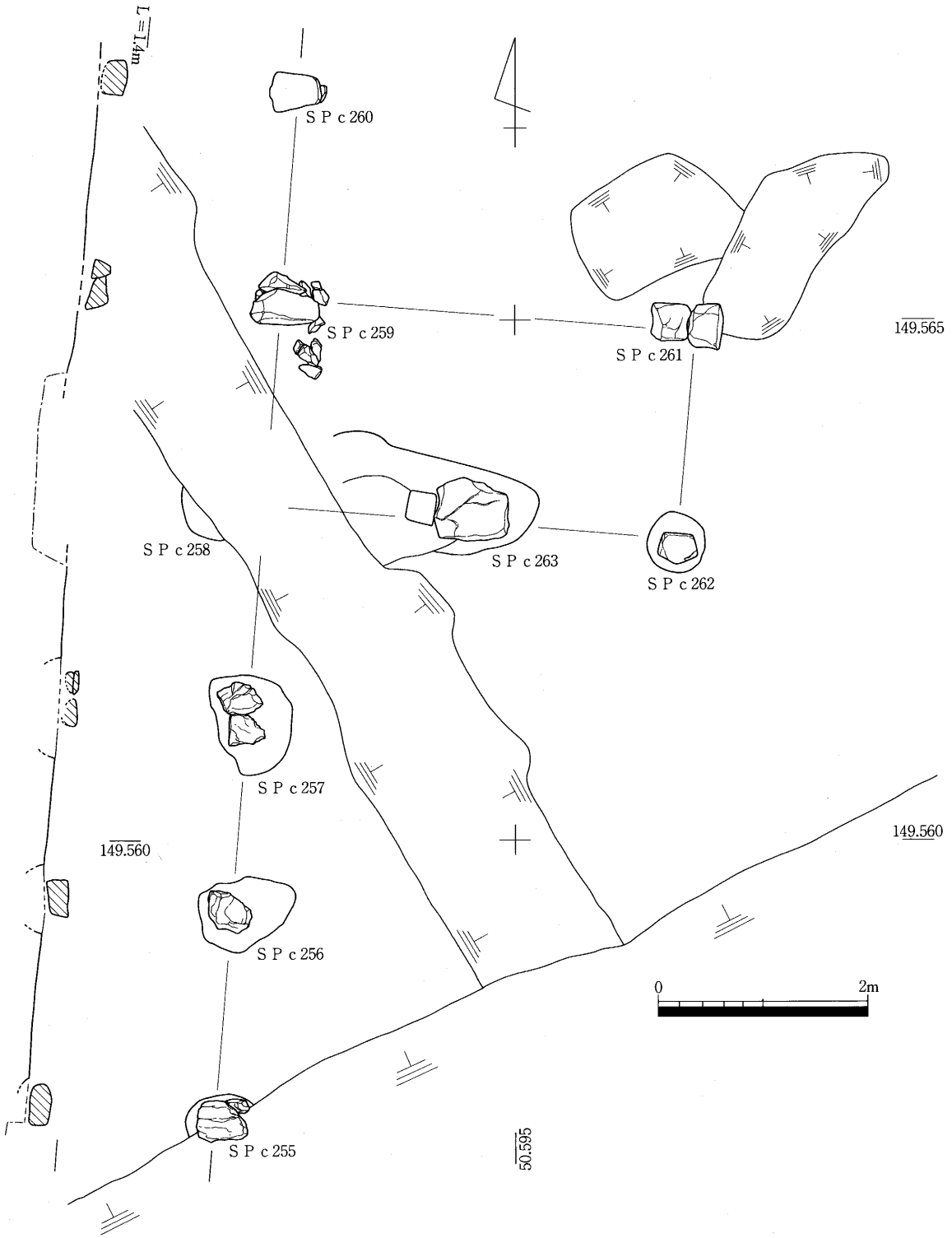

1：灰色(7.5Y4/1)砂質土
2：灰オリーブ(5Y6/2)砂質土
3：オリーブ黒色(5Y3/1)混砂粘質土
(1～3；SZc06裏込①)
4：灰色(5Y5/1)砂質土、堅緻にしまる
(SZc06裏込②)
5：灰色(5Y4/1)混砂質土(SDc11裏込)

SZc 06

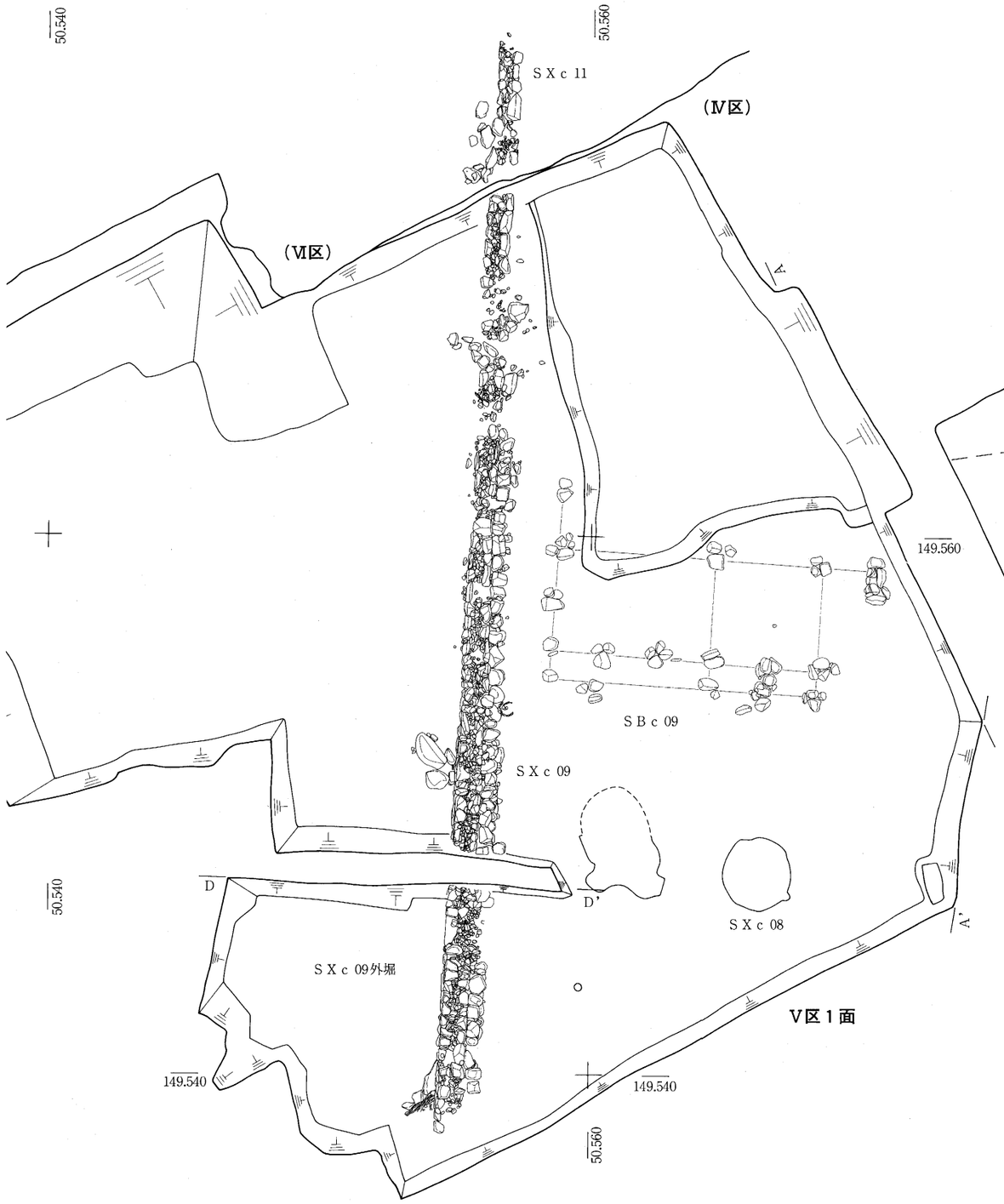



SZc 05

第58図　Ⅳ区　第2面SZc03～07、SDc11平・断面図及び立面図

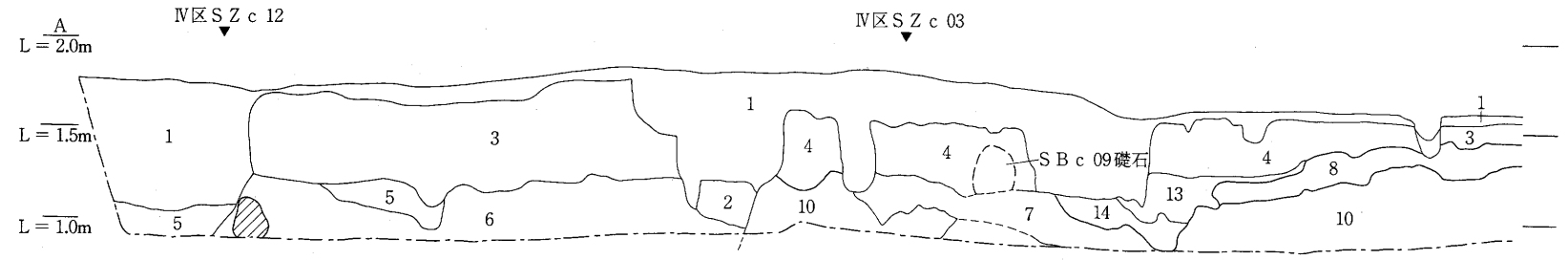


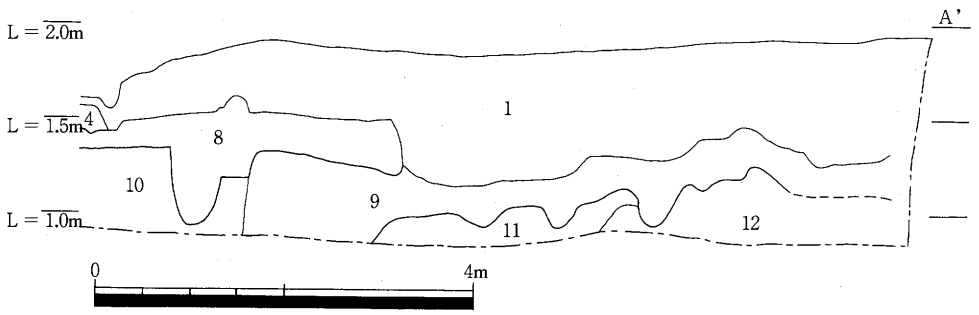

第59図　Ⅳ区　第２面ＳＢｃ08平・断面図




第60図　Ⅴ区　第1面遺構配置図（S＝1／200）

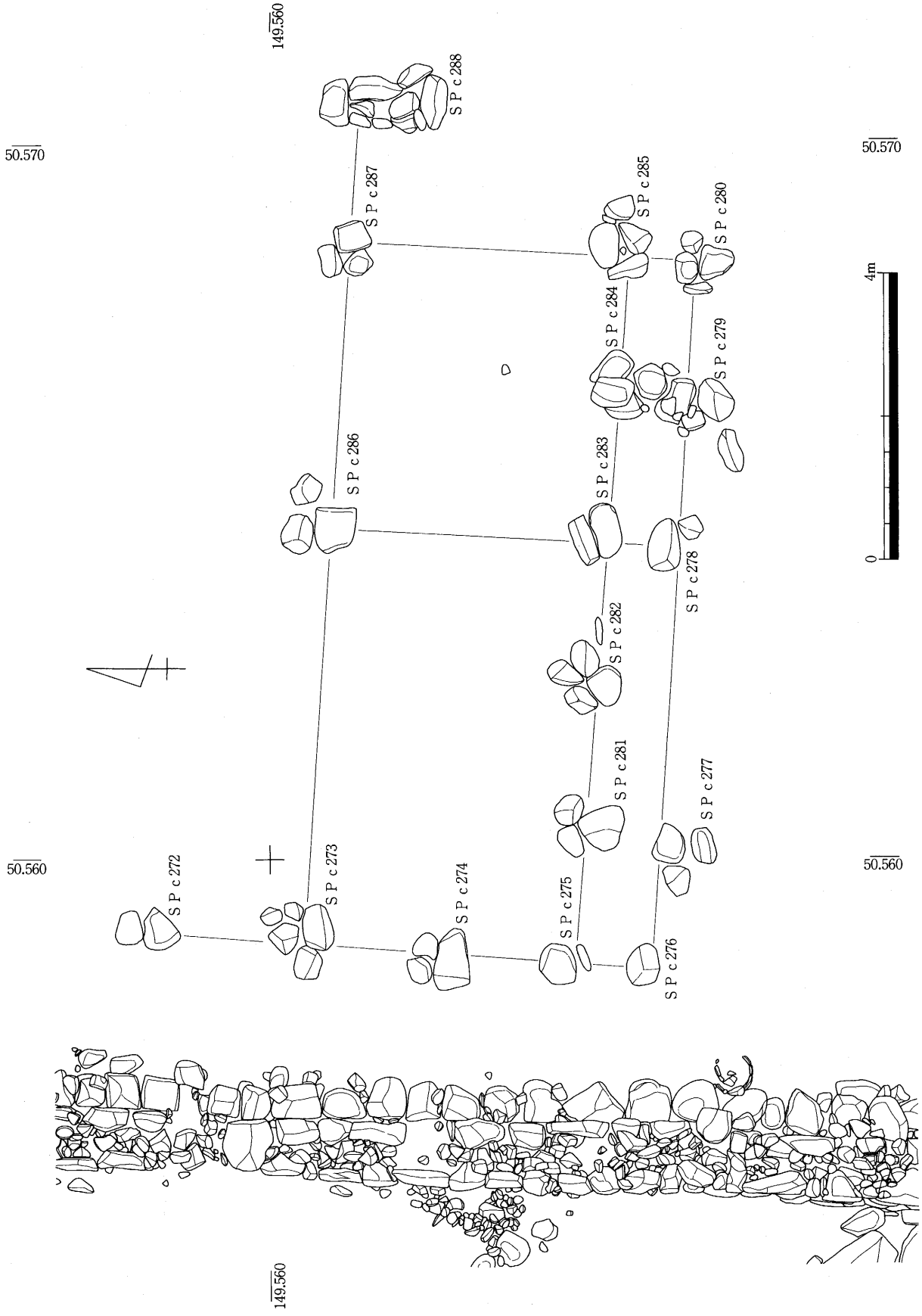
第61図　Ⅴ区　第2面遺構配置図（S＝1／200）



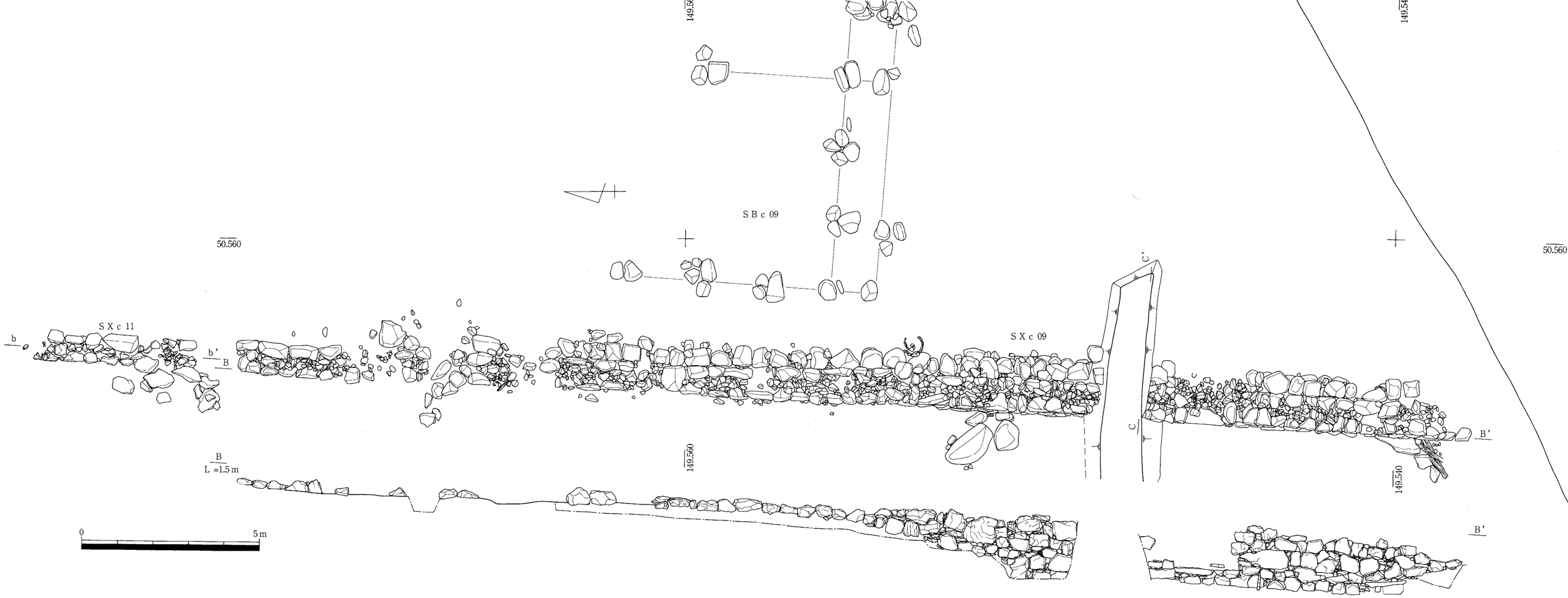



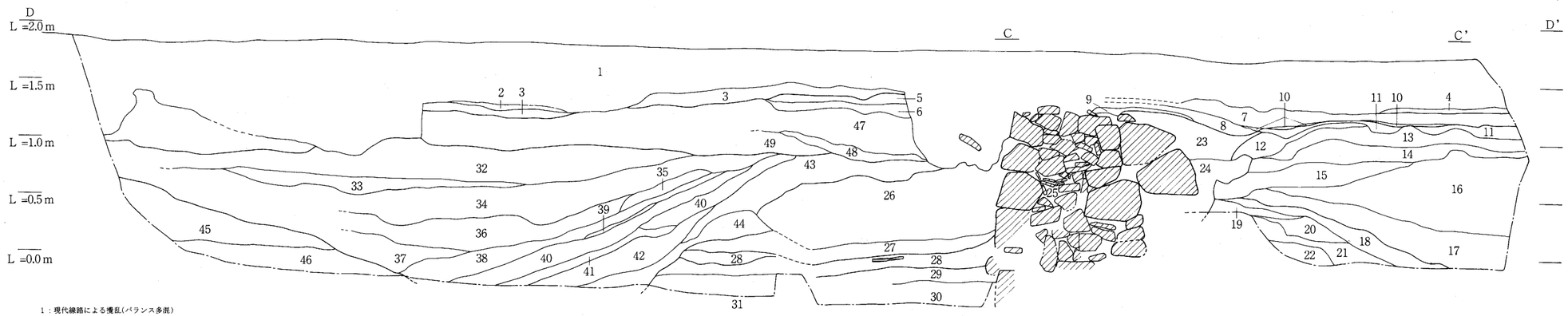

1：灰色砂粘質土(バラスを多く含む、攪乱)
2：攪乱
3：淡褐色粘質土(金色粘質土等の水平整地層、下部に瓦を多量に含む、攪乱)
4：淡褐色粘土(砂質土や灰青色粘土の水平堆積層、瓦・漆喰包含)
5：淡灰褐色粘質土
6：淡褐色砂質土(５・６；ＳＺｃ13に伴う整地層)
7：灰青色砂質土(礫包含、上面にＳＢｃ09礎石設置)
8：灰青色粘質土(整地層、明治期以降)
9：灰色粘質土と淡褐色砂質土のブロック混在(整地層、６層と同一時期の所産か)
10：灰青色砂質土
11：淡灰色中砂
12：褐色粘質土(瓦、礫多混じり)
(10～12ＳＺｃ03に伴う整地層の可能性が高いが、調査担当者は攪乱層と判断)
13：褐灰紫色粘土(Ⅳ区ＳＤｃ12に対応)
14：８と同じ

第62図　Ⅴ区　壁面図(天地Ｓ＝１／40、左右Ｓ＝１／80)



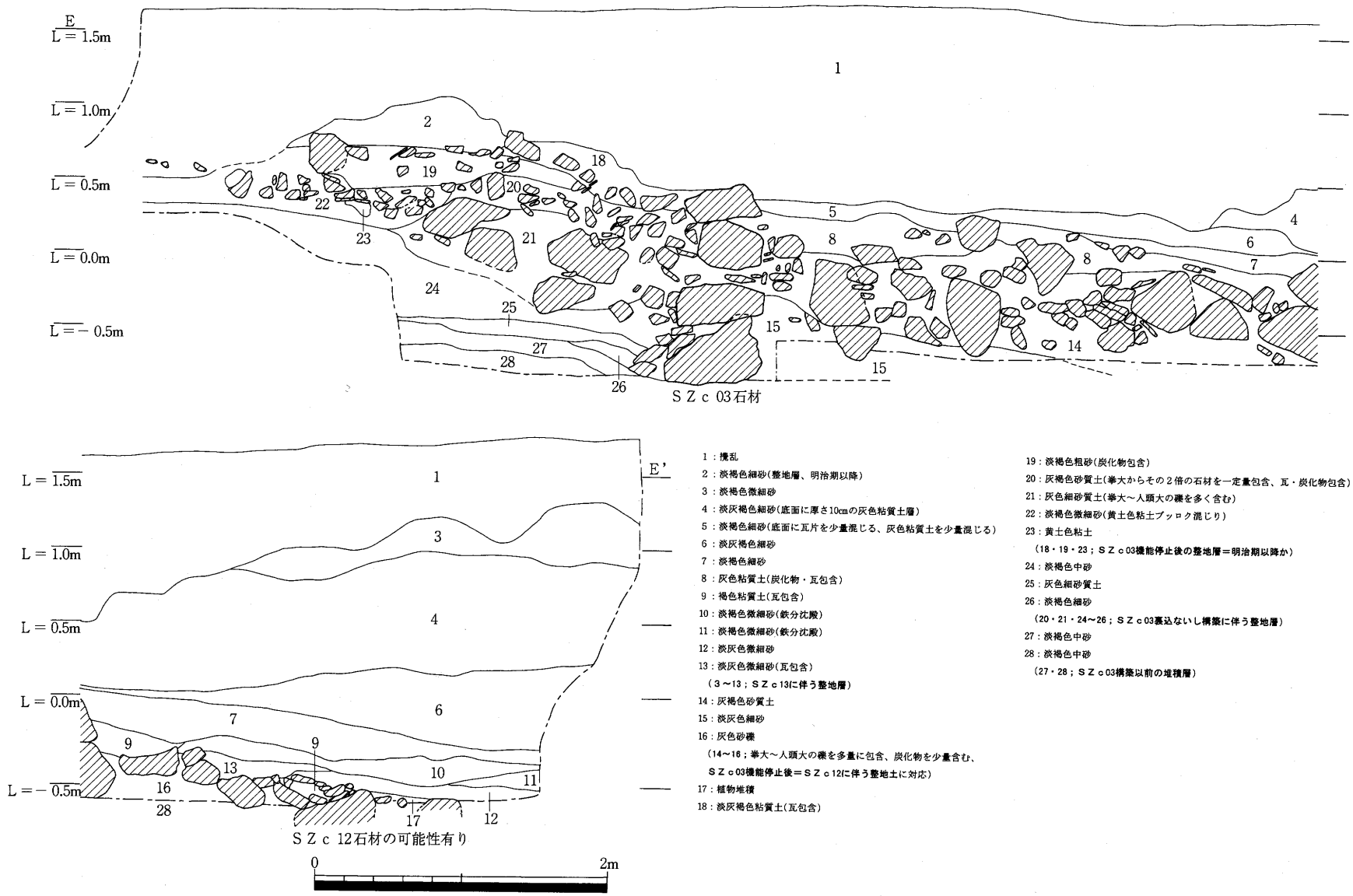

**第63図　Ⅴ区　第１面ＳＢｃ09、ＳＸｃ09平面図**



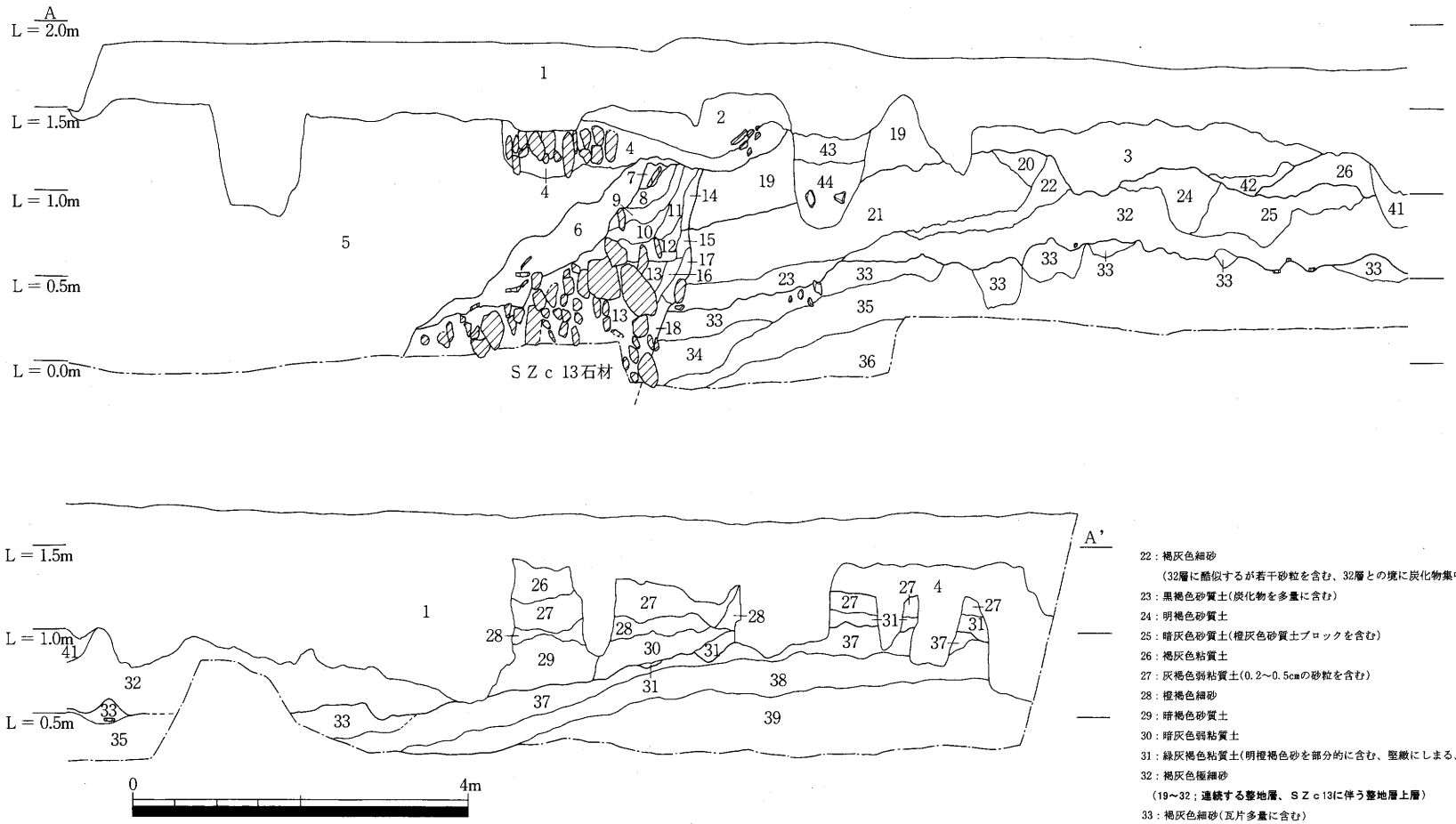

1：現代線路による攪乱(バランス多混)
2：淡褐色細砂(攪乱)
3：褐灰色砂質土(攪乱)
4：黄土色粘土(風化した礫を多く含む、明治期以降の整地面か)
5：灰緑色粘質土(礫・瓦を多く含む)
6：灰緑色粘土
7：淡灰緑色粘質土(炭化物・板材・瓦等を多数含む)
8：緑灰色粘質土(漆喰・炭化物を多く含む)
9：淡緑色粘土
10：淡灰色粘土
（5～10；連続する整地層、ＳＸｃ09・ＳＢｃ09機能停止後の整地層）
11：黒色炭化物(整地層、ＳＢｃ09に伴う整地層か)
12：淡灰緑色粘質土(ブロック状、礫・炭化物含有)
13：淡緑灰色粘質土(ブロック状、瓦・焼土含有)
14：淡灰緑色砂質土(ブロック状)
15：灰色砂質土と灰緑色粘質土の混在(礫・瓦含有)
16：灰緑色粘質土(ブロック状、炭化物・礫・瓦・漆喰含有)
17：黒色粘質土(瓦・木質を極めて多量に含む)
18：灰色粘質土
19：灰色砂質土
20：淡灰色砂質土
21：淡灰色粘質土
22：淡褐色砂質土
（12～22；連続する整地層、ＳＸｃ09構築に伴う整地土の可能性が高い）
23：褐灰色粘土
24：灰褐色粘質土
（23・24；ＳＸｃ09東側掘方裏込）
25：礫・瓦充填層(ＳＸｃ09裏込)
26：灰褐色粘土
27：暗灰色砂質土
（26・27；ＳＸｃ09西側堆積層＝上層）
28：植物腐敗土(板材等を含む、ＳＸｃ09西側堆積層＝中層)
29：灰色粘土
30：灰色粘質土
31：青灰色中砂
（29～31；ＳＸｃ09西側堆積層＝下層）
32：灰色粘質土(瓦・礫を多く含む)
33：緑色粘土
34：灰黒色粘質土(瓦・漆喰を多く含む)
35：灰緑色粘土(漆喰を多く含む)
36：灰緑色砂質土(礫・瓦を多く含む)
37：暗灰色粘質土(瓦・炭化物を多く含む)
38：灰黒色粘質土(40層が混じる)
39：灰色砂質土
40：灰色砂質土(黒色粘質土混じり)
41：灰色砂質土
42：灰黒色粘質土(礫・瓦・木質を多量に包含)
43：灰緑色粘質土(瓦を多く含む、礫包含)
44：灰緑色粘土
（32～44；ＳＸｃ09外堀埋土）
45：淡灰緑色砂質土
46：灰色粘質土
（45・46；ＳＸｃ09西側堆積層）
47：灰緑色粘質土(瓦・礫を多量に包含)廃埋立土
48：暗灰色粘質土(炭化物・砂包含)
49：灰緑色粘質土(漆喰・礫包含)
（47～49；ＳＸｃ09外堀埋め立て土）

**第64図　Ⅴ区　第１面ＳＸｃ09平・断面図**



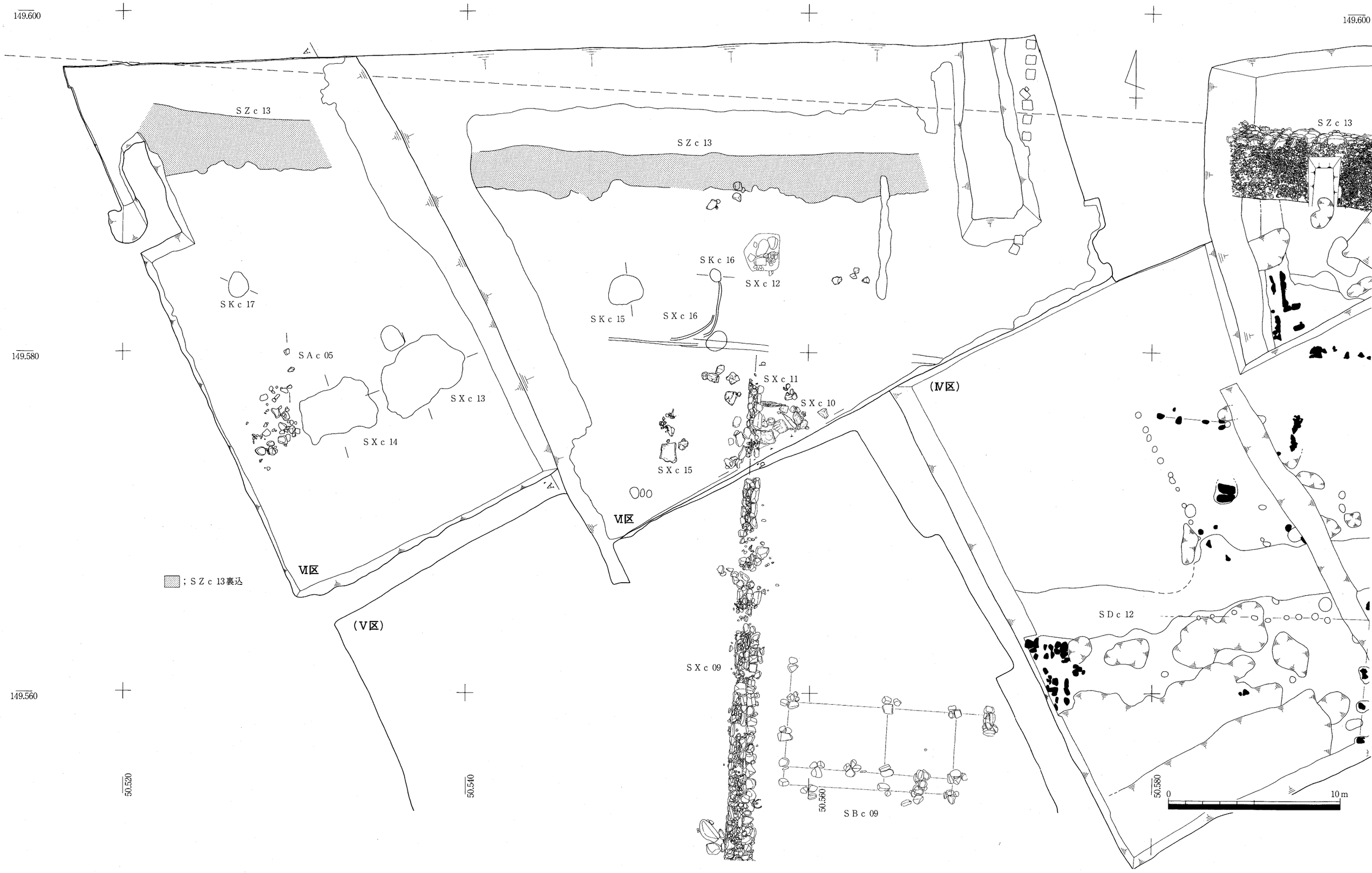

1：攪乱
2：淡褐色細砂(整地層、明治期以降)
3：淡褐色微細砂
4：淡灰褐色細砂(底面に厚さ10cmの灰色粘質土層)
5：淡褐色細砂(底面に瓦片を少量混じる、灰色粘質土を少量混じる)
6：淡灰褐色細砂
7：淡褐色細砂
8：灰色粘質土(炭化物・瓦包含)
9：褐色粘質土(瓦包含)
10：淡褐色微細砂(鉄分沈殿)
11：淡褐色微細砂(鉄分沈殿)
12：淡灰色微細砂
13：淡灰色微細砂(瓦包含)
(3～13；ＳＺｃ13に伴う整地層)
14：灰褐色砂質土
15：淡灰色細砂
16：灰色砂礫
(14～16；拳大～人頭大の礫を多量に包含、炭化物を少量含む、ＳＺｃ03機能停止後＝ＳＺｃ12に伴う整地土に対応)
17：植物堆積
18：淡灰褐色粘質土(瓦包含)
19：淡褐色粗砂(炭化物包含)
20：灰褐色砂質土(拳大からその２倍の石材を一定量包含、瓦・炭化物包含)
21：灰色細砂質土(拳大～人頭大の礫を多く含む)
22：淡褐色微細砂(黄土色粘土ブロック混じり)
23：黄土色粘土
(18・19・23；ＳＺｃ03機能停止後の整地層＝明治期以降か)
24：淡褐色中砂
25：灰色細砂質土
26：淡褐色細砂
(20・21・24～26；ＳＺｃ03裏込ないし構築に伴う整地層)
27：淡褐色中砂
28：淡褐色中砂
(27・28；ＳＺｃ03構築以前の堆積層)

**第65図　Ｖ区　第２面ＳＺｃ03断面図(Ｓ＝１／40)**

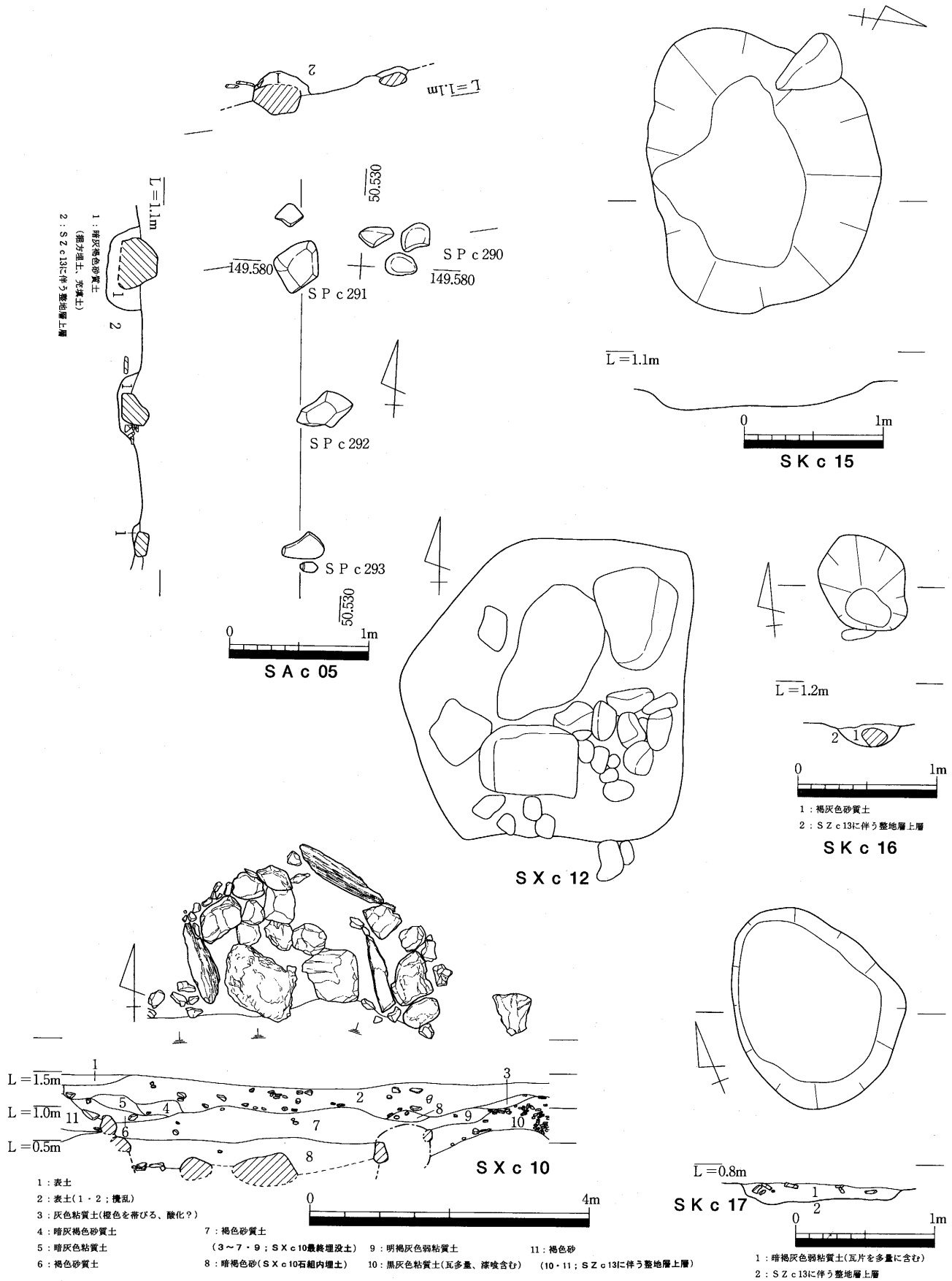



1：パラス敷き
2：褐色粘質土(攪乱)
3：暗褐灰色粘質土
（炭化物・瓦・土器片を多く含む、堅緻にしまる、21・22層との境に瓦片集中）
4：攪乱
5：淡褐色細砂(海砂)
6：黒灰色粘質土(炭化物多量に含む、レンガ・土器片含む)
（5・6；ＳＺｃ13上面堆積土）
7：褐色砂質土
8：暗褐色弱粘質土
9：淡褐色砂質土
10：明灰褐色粘質土
11：灰褐色粘質土(緑灰色粘土ブロック(風化礫？)若干含む)
12：灰褐色弱粘質土
13：暗灰色弱粘質土
14：緑灰褐色粘土(緑灰色粘土ブロック(風化礫？)を多量に含む)
15：灰褐色粘質土(緑灰色粘土ブロック(風化礫？)を少量に含む)
16：緑灰褐色粘土(緑灰色粘土ブロック(風化礫？)を含む)
17：緑褐色灰色粘土(緑灰色粘土ブロック(風化礫？)を多量に含む)
18：暗褐色砂質土
（7～18；ＳＺｃ13掘方裏込）
19：明褐灰色砂質土
20：明灰色弱粘質土
21：褐色砂質土(0.1～2cmの砂利を含む)
22：褐灰色細砂
（32層に酷似するが若干砂粒を含む、32層との境に炭化物集中）
23：黒褐色砂質土(炭化物を多量に含む)
24：明褐色砂質土
25：暗灰色砂質土(橙灰色砂質土ブロックを含む)
26：褐灰色粘質土
27：灰褐色弱粘質土(0.2～0.5cmの砂粒を含む)
28：橙褐色細砂
29：暗褐色砂質土
30：暗灰色弱粘質土
31：緑灰褐色粘質土(明橙褐色砂を部分的に含む、堅緻にしまる、風化礫？)
32：褐灰色極細砂
（19～32；連続する整地層、ＳＺｃ13に伴う整地層上層）
33：褐灰色細砂(瓦片多量に含む)
34：暗灰褐色弱粘質土
35：褐灰色極細砂
36：暗褐灰色砂
37：明橙褐色砂(0.1～1cmの砂粒を含む)
38：淡褐色細砂(0.1～0.5cmの砂粒を含む)
39：明褐色細砂(0.1～2cmの砂粒を含む)
（33～39；連続する整地層、ＳＺｃ13に伴う整地層下層）
40：明褐色砂質土(攪乱)
41：暗灰色弱粘質土(攪乱)
42：灰色砂質土(攪乱)
43：暗褐灰色粘質土
44：黒色粘質土(炭化物層、しっくい、レンガ片含む)
（43・44；攪乱埋土）

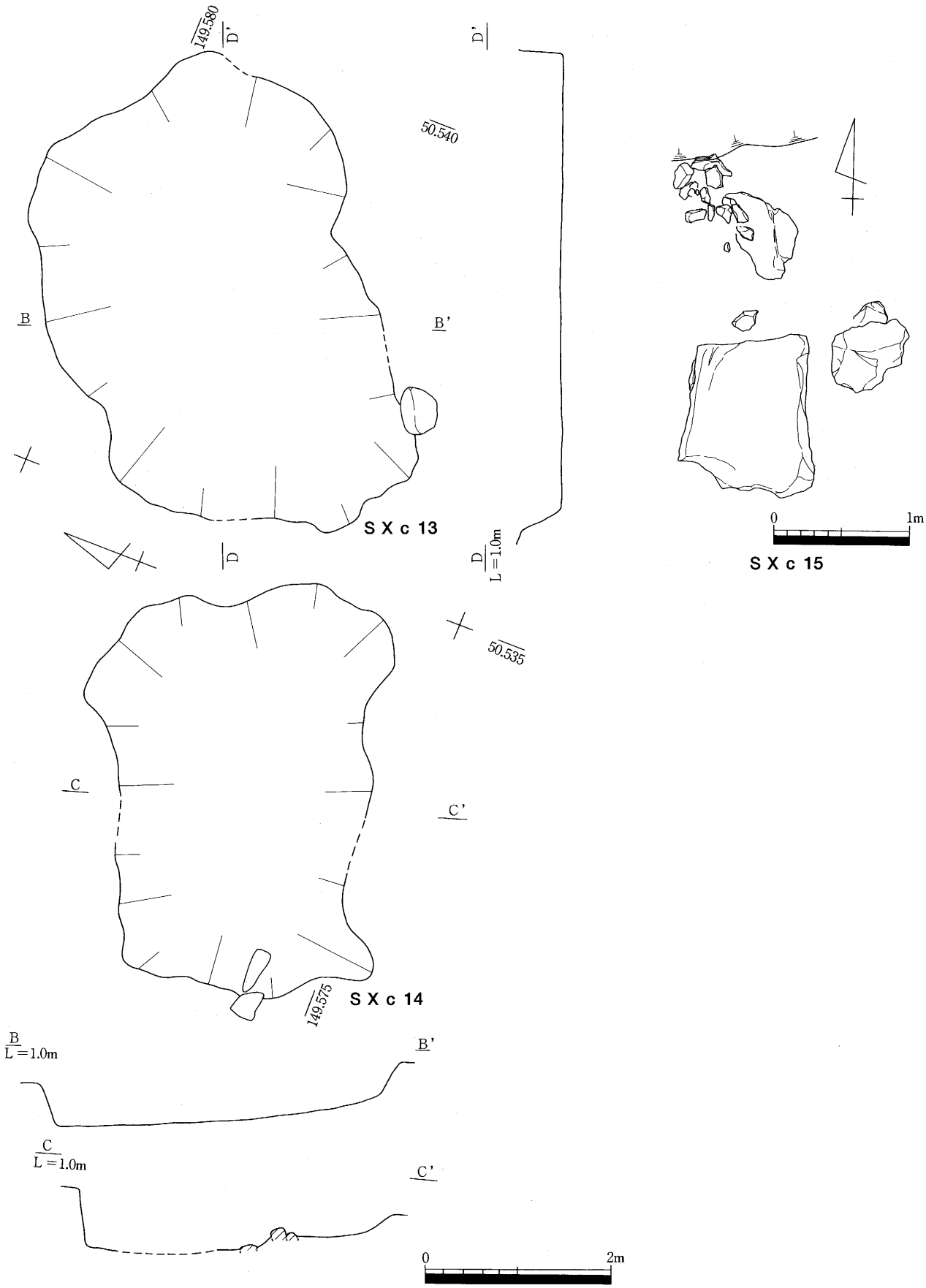
**第67図　Ⅵ区　壁面図(天地Ｓ＝１／40、左右Ｓ＝１／80)**



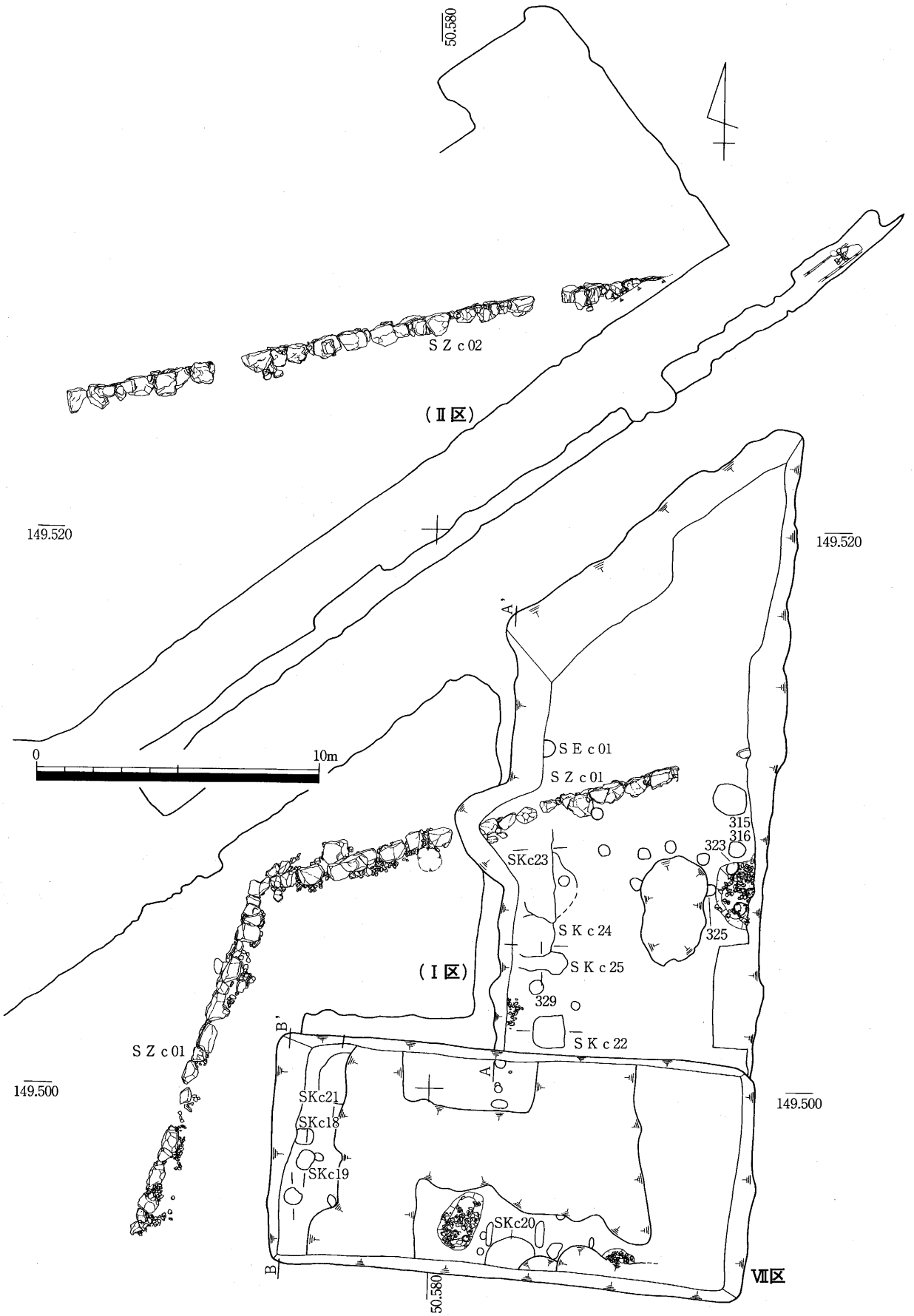

第66図　Ⅵ区　遺構配置図（S＝1／200）



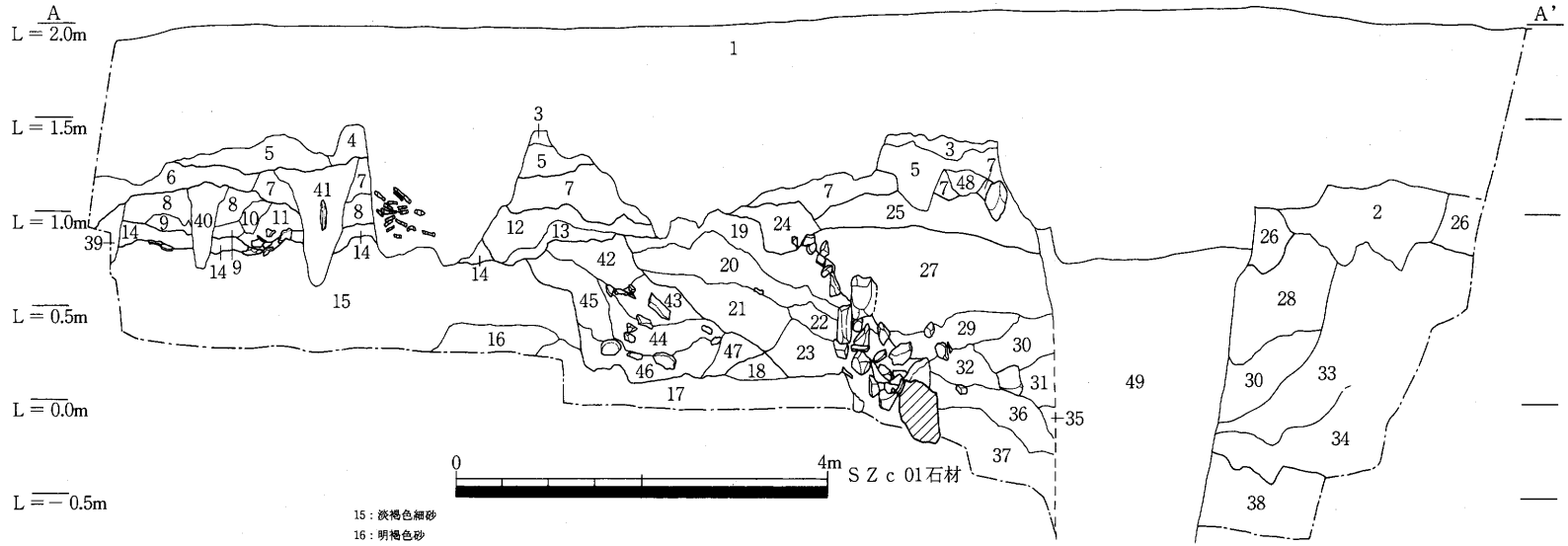

第68図　Ⅵ区　遺構平・断面図1



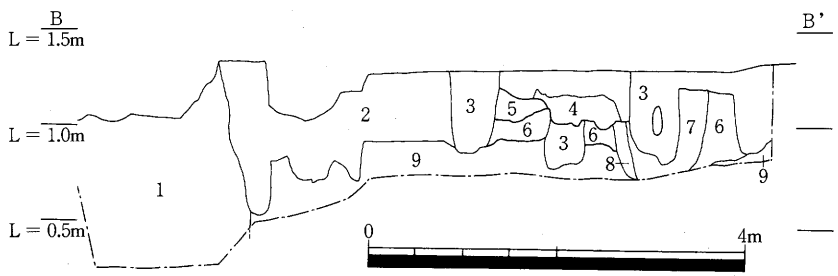

第69図　Ⅵ区　遺構平・断面図 2




第70図　Ⅶ区　遺構配置図（S＝1／200）

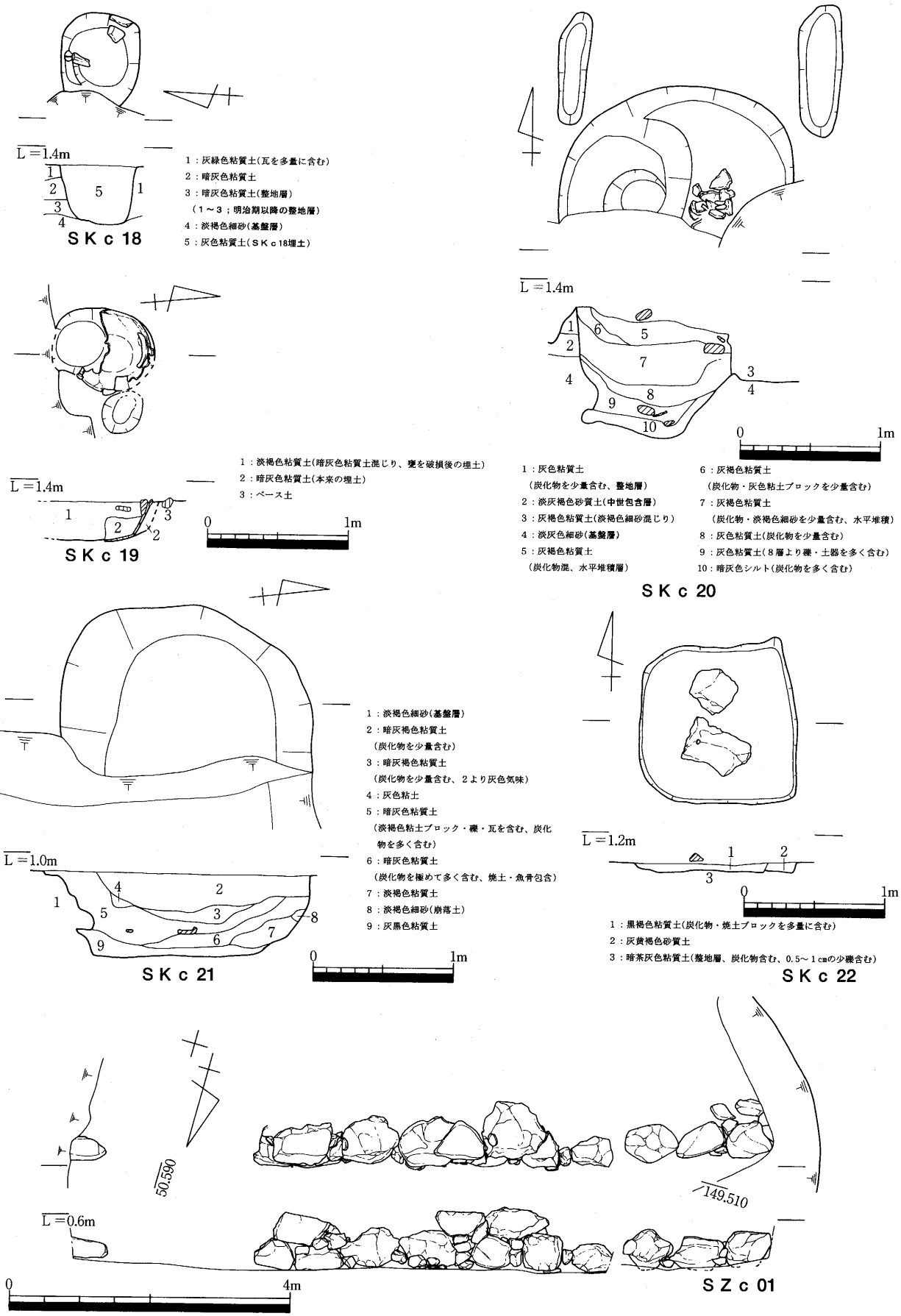



1：攪乱
2：攪乱
3：茶黒色粘質土(0.5～1cmの褐灰色粘土ブロック・炭化物を含む)
4：暗灰茶色粘質土(砂粒含む)
5：暗灰茶色粘質土(炭化物多量に含む、砂粒含む)
（3～5；明治期以降の整地層か）
6：灰茶色粘質土(砂粒含む)
7：暗茶灰色粘質土(炭化物含む、0.5～1cmの少礫含む)
（6・7；整地層＝上面は遺構検出面(38・41；遺構埋土)）
8：灰褐色砂質土(炭化物少量含む、12層と酷似)
9：灰白色粘土
10：暗灰色砂質土(橙褐色粘土ブロックを含む)
11：灰色砂質土(橙褐色粘土ブロックを含む)
12：灰褐色砂質土(炭化物少量含む、0.5～1cmの少礫を含む)
（8～12；連続する整地層、ＳＺｃ01機能停止後の整地層、上面は遺構検出面）
13：明灰褐色粘質土(0.5～1cm大の少礫を多量に含む)
14：褐色砂(拳大の板石を包含、中世遺物包含層)
15：淡褐色細砂
16：明褐色砂
17：灰橙褐色粗砂(0.5～1cmの少礫を多量に含む)
18：橙褐灰色粗砂(0.5～1cmの少礫を多量に含む)
（15～18・38；基盤層）
19：明灰褐色砂質土(0.5～1cmの少礫を多量に含む)
20：灰色弱粘質土(橙褐色(酸化？)の網目模様あり)
21：暗褐色砂質土(20層ブロックを若干含む)
22：灰褐色砂質土(20層ブロックを含む、0.5～1cmの少礫少量含む、)
23：灰色砂質土(1～5cmの少礫多量に含む)
（19～23；ＳＺｃ01裏込）
24：暗黄茶色粘質土(0.5～1cm大の少礫を含む、灰色粘土ブロック含む)
25：暗茶灰色砂質土(0.5～1cm大の少礫を含む)
26：明褐色砂質土(1～5cm大の少礫多量に含む)
（24～26；連続する整地層、8～12に連続する可能性が高い、ＳＺｃ01機能停止後以降の整地層）
27：明灰褐色砂質土(0.5～1cm大の少礫を含む、27～37Ⅱ期護岸に伴う整地層)
28：暗橙灰褐色砂質土(0．5～3cm大の小礫多量に含む)
29：暗橙褐灰色砂
30：灰橙色砂(0.5～2cm大の小礫を含む)
31：暗褐灰色砂質土
32：暗褐灰色弱粘質土
33：褐灰色粘質土(砂層は帯状に入る)
34：暗褐灰色砂質土(0.5～1cm大の小礫含む)
35：暗黄褐灰色細砂質土
36：暗黄褐灰色細砂
37：暗灰色粗砂質土(1～3cm大の小礫含む)
（27～37；ＳＺｃ01前面堆積土＝ＳＺｃ01機能中の堆積土、ＳＺｃ02構築に伴う整地層）
38：暗青灰色粘質土(基盤層)
39：暗茶色粘質土(遺構埋土か、灰色粘土ブロック少量含む)
40：黒褐色弱粘質土(遺構埋土、0.5cmの褐灰色粘土ブロック含む、炭化物若干含む)
41：暗灰褐色弱粘質土(遺構埋土、0.5～1cmの灰色粘土ブロックを含む、炭化物を若干量含む)
42：明茶色砂質土(0.5cmの小礫を少量含む)
43：明灰茶色砂質土(0.5cmの小礫を少量含む)
44：明茶灰色弱粘質土(0.5cmの小礫を少量含む)
45：明青灰色粘土
46：明青灰色砂質土(45層のブロックを含む)
47：褐灰色砂質土(1～2cmの小礫を多量に含む)
（42～47；ＳＸｃ47埋土）
48：暗紫褐色粘質土(遺構埋土)
49：ＳＥｃ01埋土(明治期以降)

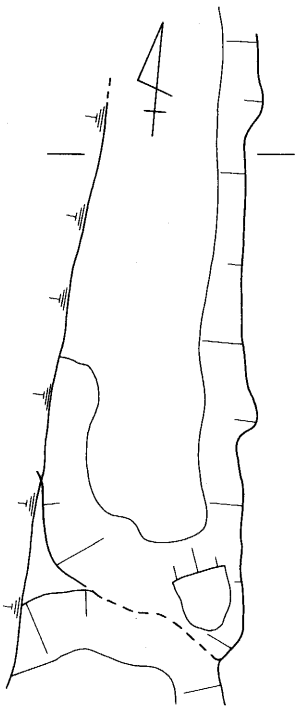


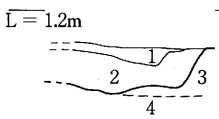

1：明治上水道埋土
2：灰緑色粘質土(瓦を多量に含む)
3：灰色粘質土(淡褐色粘土の混在、柱穴一部柱痕残遺存(径約20cm))
4：灰色粘質土(淡褐色粘土の混在、柱穴ではない整地土)
5：暗灰色粘質土
（2～5；明治期以降の整地層ないし掘り込み埋土）
6：暗灰色粘質土(整地層)
7：暗灰色粘質土(炭化物・淡褐色粘土を多く含む)
8：淡褐灰色粘質土
（7・8；ＳＫｃ21埋土）
9：淡褐色細砂(基盤層)

第71図　Ⅶ区　壁面図１・２(天地Ｓ＝１／40、左右Ｓ＝１／80)



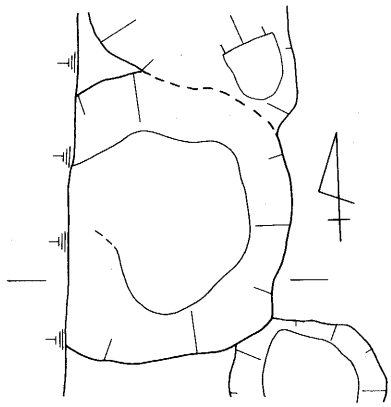

第72図　Ⅶ区　遺構平・断面図1

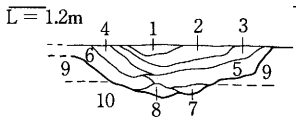





1：淡茶褐色砂質土
2：黒褐色砂質土(炭化物を多量に含む、1層ブロックを少量含む)
3：灰褐色砂質土(炭化物少量含む)
4：淡褐色細砂

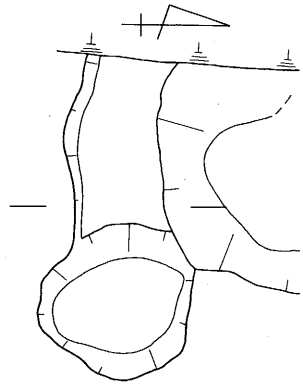
**ＳＫｃ 23**

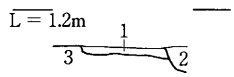





1：灰褐色砂質土(2層をブロック状に含む)
2：灰黄褐色砂質土(炭化物・焼土を少量含む)
3：黒色混砂粘質土(炭化物充填層、明橙色の焼土を少量含む)
4：2層と酷似するが焼土を含まない
5：黒褐色砂質土(炭化物を多量に含む)
6：暗灰黄色砂質土(焼土・炭化物を少量含む)
7：灰黄褐色砂質土(炭化物を少量含む)
8：黄褐色砂質土(炭化物を少量含む)
9：灰褐色砂質土(炭化物少量含む)
10：淡褐色細砂

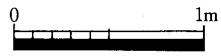
**ＳＫｃ 24**



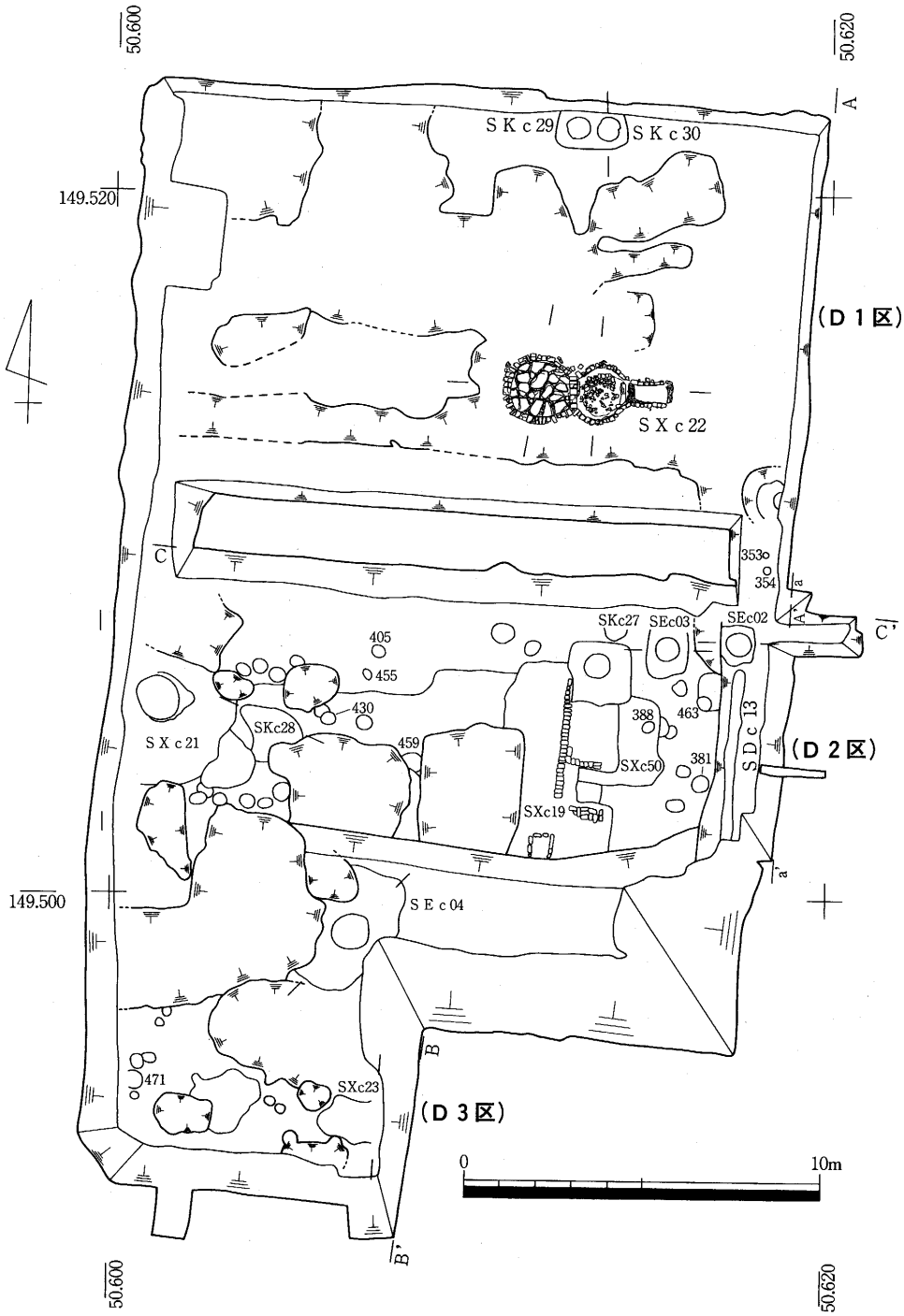



1：淡茶褐色砂質土(焼土・炭化物を少量含む)
2：ＳＫｃ24埋土
3：灰褐色砂質土(炭化物少量含む)

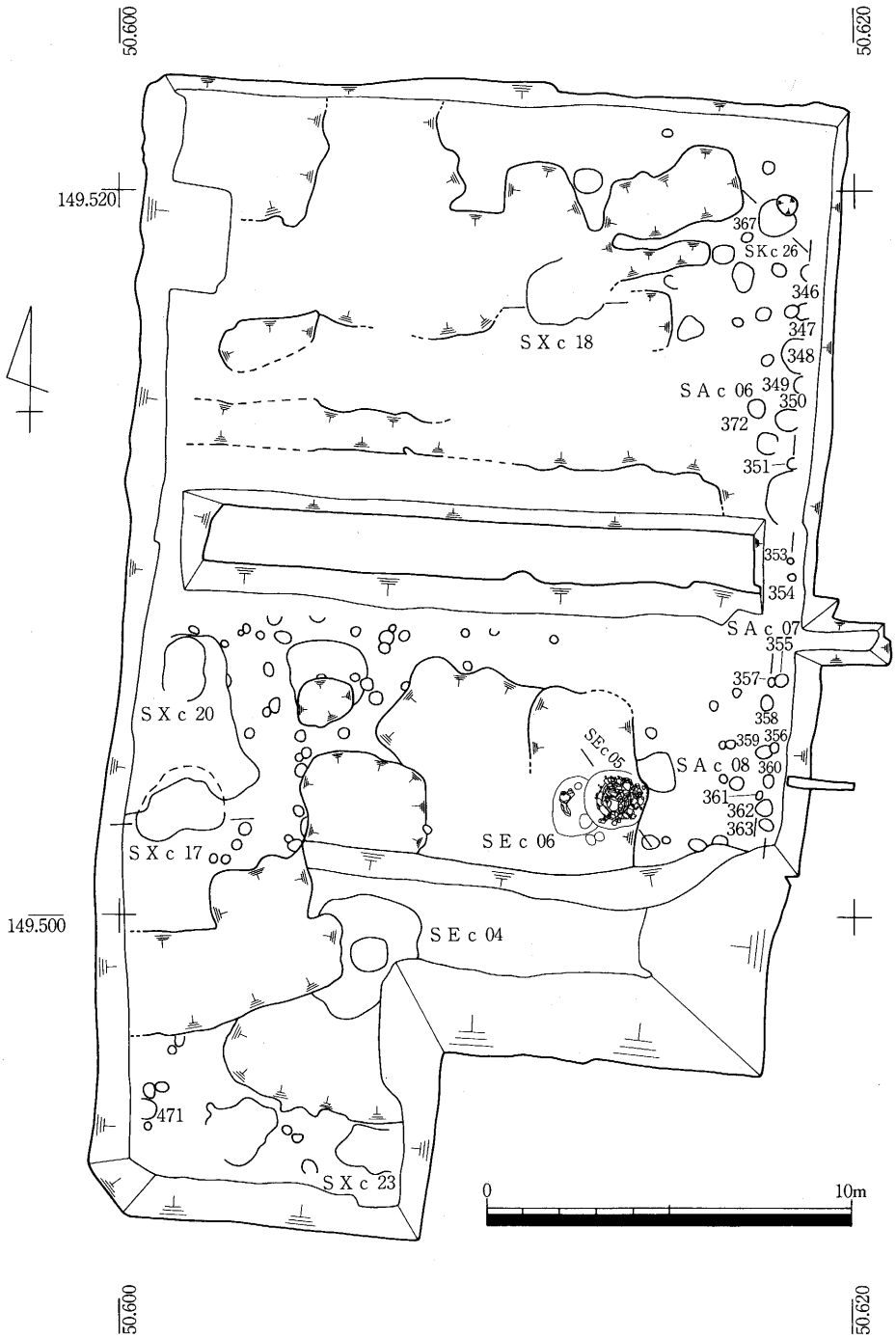
**ＳＫｃ 25**



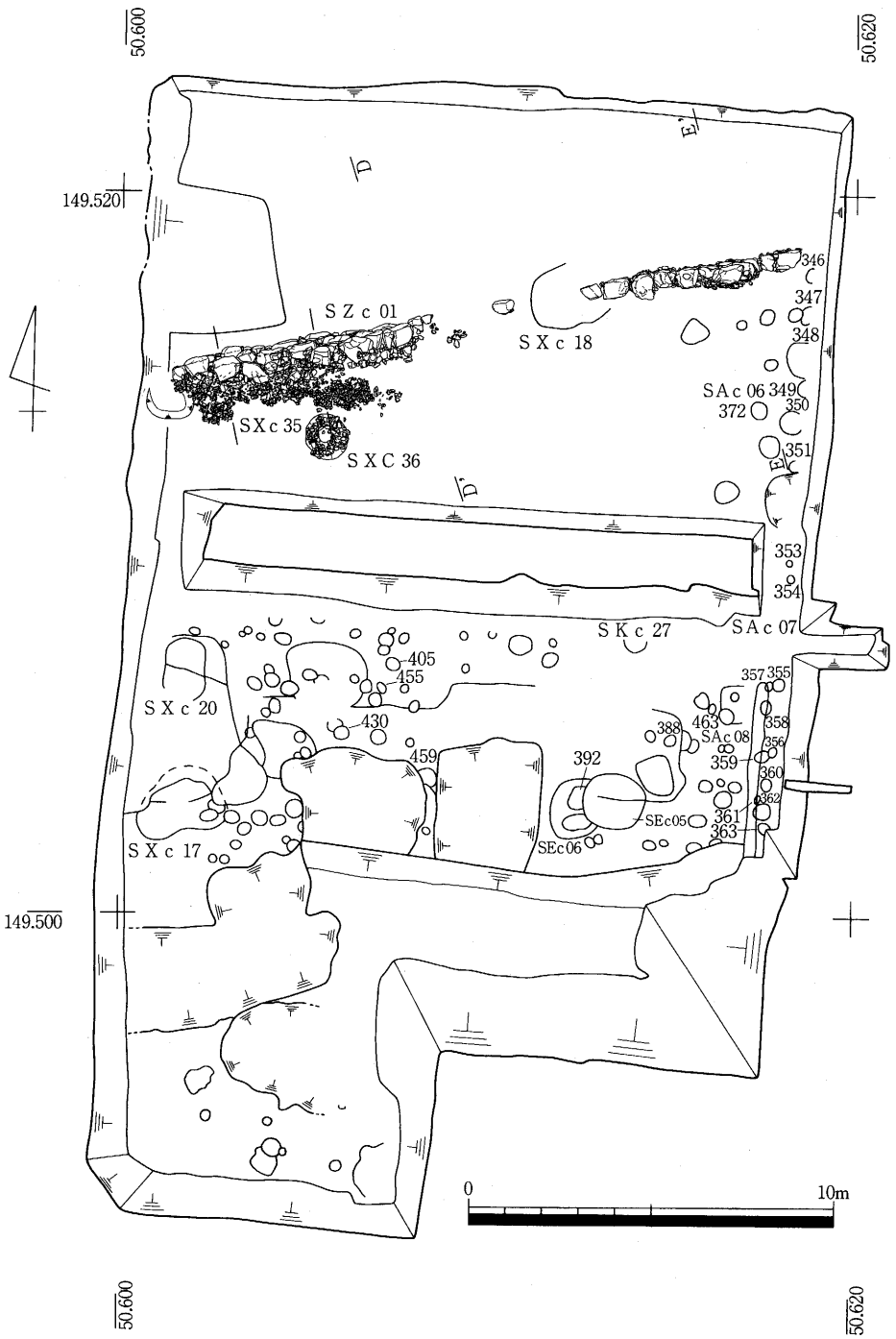

**第73図　Ⅶ区　遺構平・断面図 2**



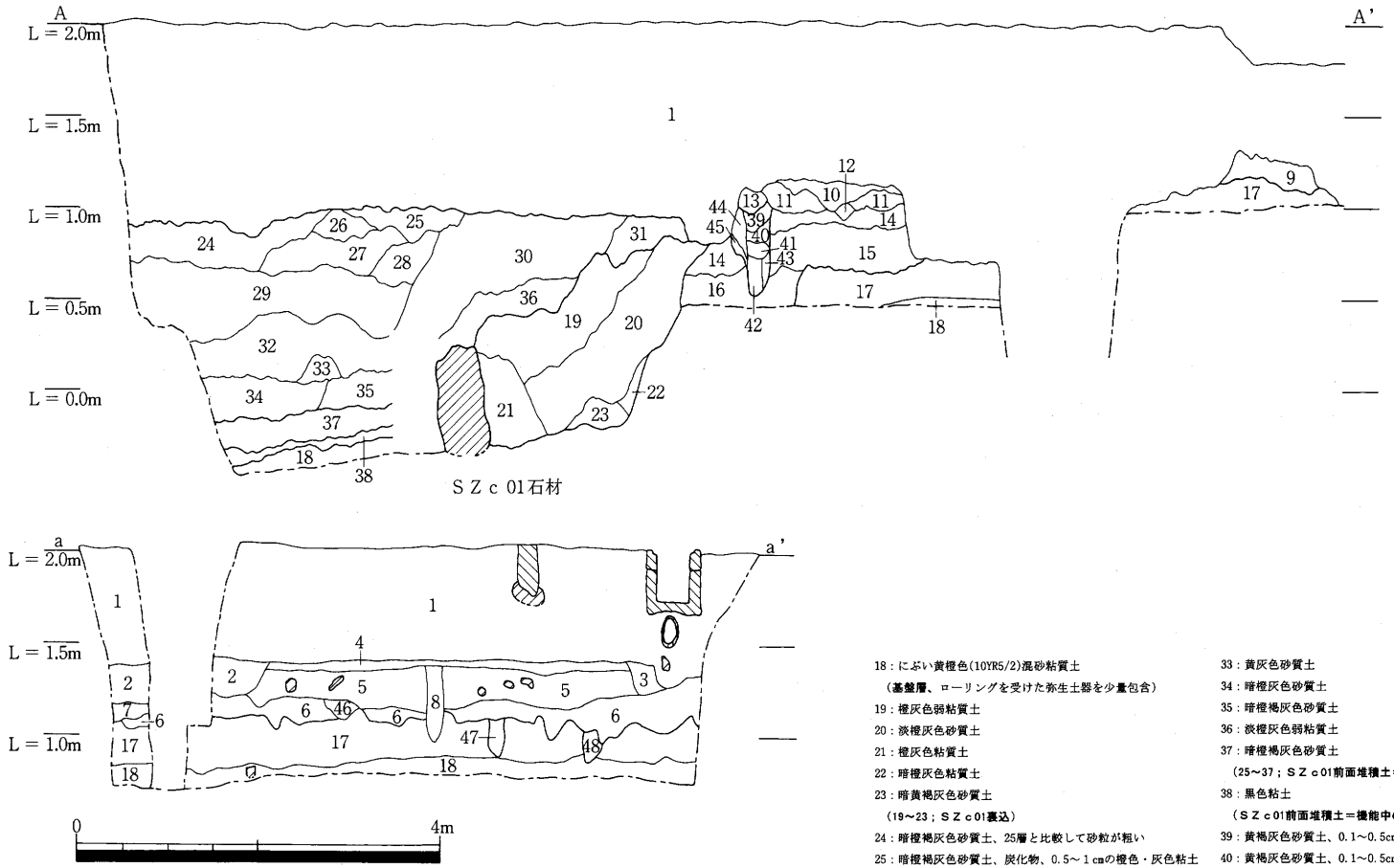

第74図　Ⅷ区　第1面遺構配置図(S＝1／200)




第75図　Ⅷ区　第２面遺構配置図（Ｓ＝１／200）

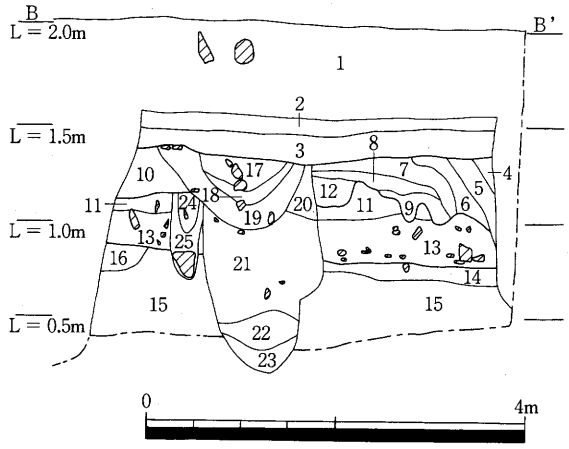



第76図　Ⅷ区　第３面遺構配置図（Ｓ＝１／200）

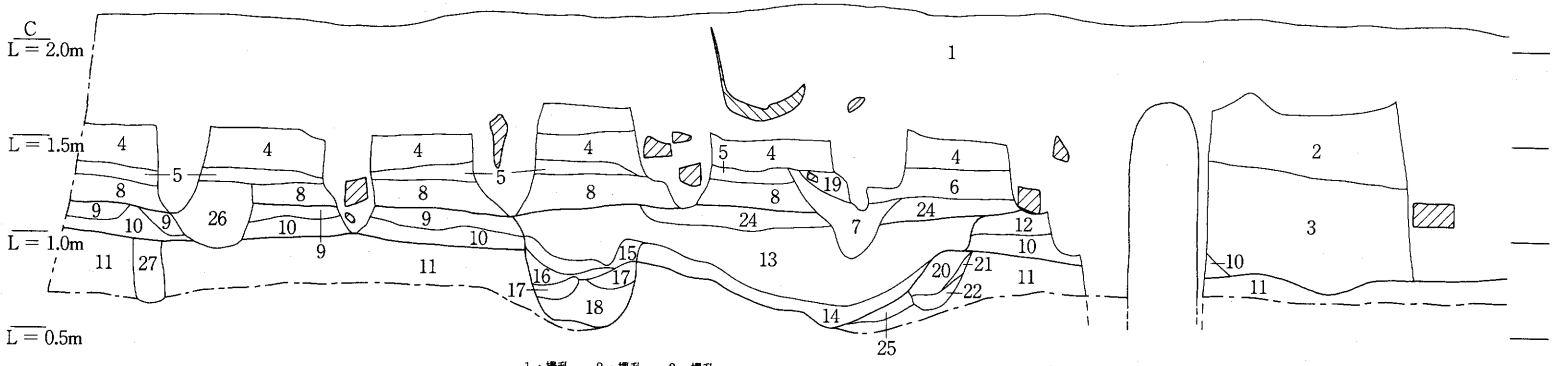


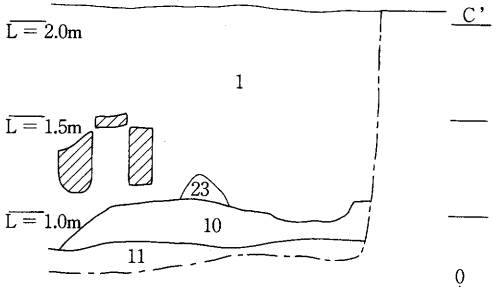

1：攪乱
2：灰黄色(2.5Y6/2)混砂粘質土、攪乱
3：暗灰黄色(2.5Y5/2)粘質土、溜枡堀方(近現代)
4：灰色(５Y5/1)粘質土、にぶい黄色(2.5Y6/4)粘質土ブロックを多量に含む
5：灰オリーブ色(５Y4/2)粘質土、４層のブロックないし明黄褐色(10YR6/6)粘土ブロック・炭化物を多く含む
6：黄灰色(2.5Y6/6)粘質土、水の浸透により変色、５層と同一層位
（４～６；調査区東端近代石組水路の埋土）
7：褐灰色(10YR4/1)混砂粘質土、炭化物を多量に含む
8：灰色(7.5Y5/1)粘質土、にぶい黄色(2.5Y6/4)粘土ブロックを多含むく明治期以降、
9：暗黄褐色砂、明治期以降？
10：暗黄褐灰色粘質土、炭化物、0.1～0.5cmの橙色・灰色粘土ブロクッを含む
11：淡褐色砂、0.5～１cmの灰色粘土ブロックを含む
12：橙灰色砂
13：暗灰黄色粘質土、炭化物を含む
（10～13；連続する整地層ないし埋土、明治期以降）
14：暗灰黄褐色粘質土、0.5～１cmの橙灰色粘土ブロックを少量含む
15：灰褐色砂質土、炭化物若干含む
16：暗黄灰色砂質土、0.1～0.5cmの橙色、灰色粘土ブロックを少量含む
（14～16；連続する整地層、ＳＺｃ01に伴う整地層）
17：にぶい赤褐色(５YR4/3)砂質土
（中世遺物包含層、安山岩板状石材包含(ＳＸｃ34、ＳＸｃ35ほか)）
18：にぶい黄橙色(10YR5/2)混砂粘質土
（基盤層、ローリングを受けた弥生土器を少量包含）
19：橙灰色弱粘質土
20：淡橙灰色砂質土
21：橙灰色粘質土
22：暗橙灰色粘質土
23：暗黄褐灰色砂質土
（19～23；ＳＺｃ01裏込）
24：暗橙褐灰色砂質土、25層と比較して砂粒が粗い
25：暗橙褐灰色砂質土、炭化物、0.5～１cmの橙色・灰色粘土ブロックを含む
26：黄灰褐色砂質土、炭化物、焼土ブロックを少量含む
27：黄灰褐色砂質土、26層と同一層位、やや砂粒密度が粗い
28：灰黄褐色砂質土、26・27層に連続、炭化物・焼土ブロックを少量含む
29：暗赤褐灰色砂質土、炭化物、0.5cm前後の橙色・灰色粘土ブロックを少量含む、１～３cmの小礫を含む
30：褐灰色砂質土、0.5～１cmの黄色・灰色粘土ブロックを含む、１～３cmの小礫を含む
31：明橙褐灰色砂質土
32：淡灰黄色砂
33：黄灰色砂質土
34：暗橙灰色砂質土
35：暗橙褐灰色砂質土
36：淡橙灰色弱粘質土
37：暗橙褐灰色砂質土
（25～37；ＳＺｃ01前面堆積土＝ＳＺｃ02に伴う整地層）
38：黒色粘土
（ＳＺｃ01前面堆積土＝機能中の堆積土）
39：黄褐灰色砂質土、0.1～0.5cmの灰色粘土ブロックを含む
40：黄褐灰色砂質土、0.1～0.5cmの灰色粘土ブロックを含む、39層に比べやや粘性強い、炭化物を少量含む
41：黒灰色粘質土
42：暗灰色粘質土、炭化物を多量に含む
43：黄褐灰色粘質土、0.1～0..5cmの灰色粘土ブロックを含む
44：淡灰褐色砂質土
45：淡灰褐色砂質土、44層に比べやや砂質度が高い
（39～45；遺構埋土）
46：褐灰色(7.5YR5/1)粘質土、遺構埋土か
47：褐灰色(10YR5/1)混砂粘質土、柱穴埋土
48：黄灰色(2.5Y5/1)混砂粘質土、柱穴埋土

**第77図　Ⅷ区　壁面図１(天地Ｓ＝１／40、左右Ｓ＝１／80)**




1：攪乱
2：灰黄褐色(10YR5/2)混砂粘質土、３層との境に鉄分沈着
3：暗灰黄色(2.5Y4/2)混砂粘質土、炭化物・焼土含む、灰色(５Y6/1)粘質土ブロックを含む
4：褐灰色(５YR5/1)粘質土
5：明黄褐色(10YR6/6)砂
6：褐灰色(10YR4/1)粘質土
7：灰黄褐色(10YR4/2)混砂粘質土
8：黄灰色(2.5Y4/1)粘質土
9：灰色(５Y4/1)粘質土
**（４～９；不明堆積土、南への落ち込み埋土）**
10：黄灰色(2.5Y5/1)混砂粘質土、明黄褐色(10YR6/6)焼土を含む、**整地層上面遺構検出面**
11：にぶい黄褐色(５YR5/3)砂質土
12：11に暗褐色(10YR3/3)粘質土が若干入る
13：暗赤褐色(５YR3/2)混砂粘質土
**（11～13；中世土器包含層、安山岩板状石材包含＝ＳＸｃ34）**
14：にぶい褐色(7.5YR5/3)砂質土
15：にぶい黄橙色(10YR5/2)混砂粘質土
（ローリングを受けた弥生土器を少量包含）
**（14・15；基盤層（中世以前の堆積層））**
16：灰黄色(2.5Y6/2)シルト質土、ＳＸｃ34敷設前の整地層か
17：灰色(５Y5/1)粘質土
18：にぶい黄橙色(10YR6/4)粘質土
19：褐灰色(7.5YR4/1)混砂粘質土
20：黒褐色(2.5Y3/2)混砂粘質土
21：暗褐色(10YR3/3)混砂粘質土、炭化物を少量含む
22：黒褐色(2..5Y3/1)混砂粘質土
23：黄灰色(2.5Y5/1)砂質土
**（17～23；ＳＸｃ23埋土）**
24：褐灰色(10YR4/1)混砂粘質土
25：褐灰色(7.5YR4/1)今砂粘質土
（24・25；柱穴埋土）




1：攪乱　2：攪乱　3：攪乱
4：暗褐色(10YR3/4)粘質土、炭化物を少量含む
5：にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質土、４層に近似したブロック土を少量含む
**（４・５；明治期以降の整地層）**
6：暗灰黄褐色(2.5Y5/2)砂質土、不明の攪乱土
7：灰オリーブ色(５Y5/2)混砂粘質土
**（６・７・19；同一攪乱埋土）**
8：暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土、５のブロックを少量含む、明治期以降の整地層
9：灰黄褐色(10YR5/2)混砂粘質土
10：にぶい褐色(５YR4/3)砂質土
**（９・10；中世土器包含層、安山岩板状石材包含＝ＳＸｃ34ほ上面近世遺構検出面）か**
11：にぶい黄橙色(10YR7/4)砂
**（ＳＸｃ34構築以前の堆積土、弥生土器？細々片摩滅著しい）**
12：灰色(５Y4/1)混砂粘質土
13：灰色(５Y5/1)粘質土、灰オリーブ色(7.5Y5/2)粘土ブロック、黄灰色(2.5Y5/1)砂質土をブロック状に含む、堅緻にしまる
14：暗灰黄色(2.5Y5/2)混砂粘質土
**（12～14・24；連続する埋土、中世段階の整地層の可能性が高い）**
15：暗灰黄色(2.5Y4/2)混砂粘質土、10層をブロック状に含む
16：灰黄褐色(10YR4/2)混砂粘質土
17：浅黄色(2.5Y7/4)砂質土
18：灰黄色(2.5Y6/2)粘質土、13層と近似
**（15～18；不明落ちの埋土、12～14層との層序関係から、中世段階の所産であろう）**
19：黄褐色(2.5Y5/4)粘質土、炭化物を含む
20：にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土、10層に酷似
21：にぶい黄橙色(10YR7/2)砂質土
22：11層に20層がブロック状に混じる
**（20～22；不明落ちの埋土、12～14層との層序関係　から、中世段階の所産であろう）**
23：灰黄褐色(10YR5/2)砂質土、10層と近似、ブロック状の盛り上がり？
24：黄灰色(2.5Y4/1)混砂粘質土
25：11層が14層の影響で変色
26：褐灰色(10YR4/1)粘質土、にぶい黄褐色(10YR5/3)粘質土ブロックを多量に含む
27：黄灰褐色砂質土、中世段階の柱穴埋土か

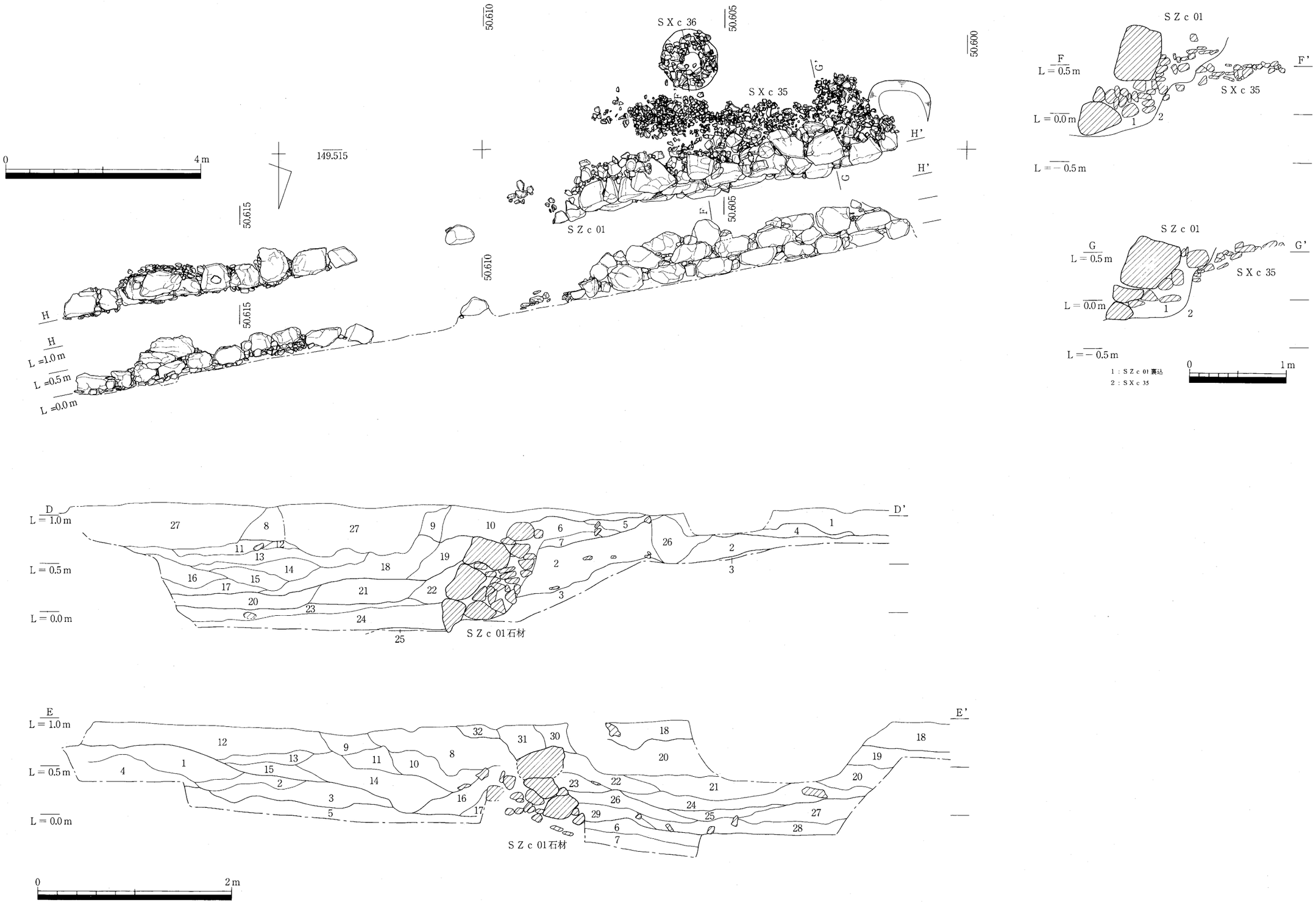
0　4m

**第78図　Ⅷ区　壁面図２・３(天地Ｓ＝１／40、左右Ｓ＝１／80)**

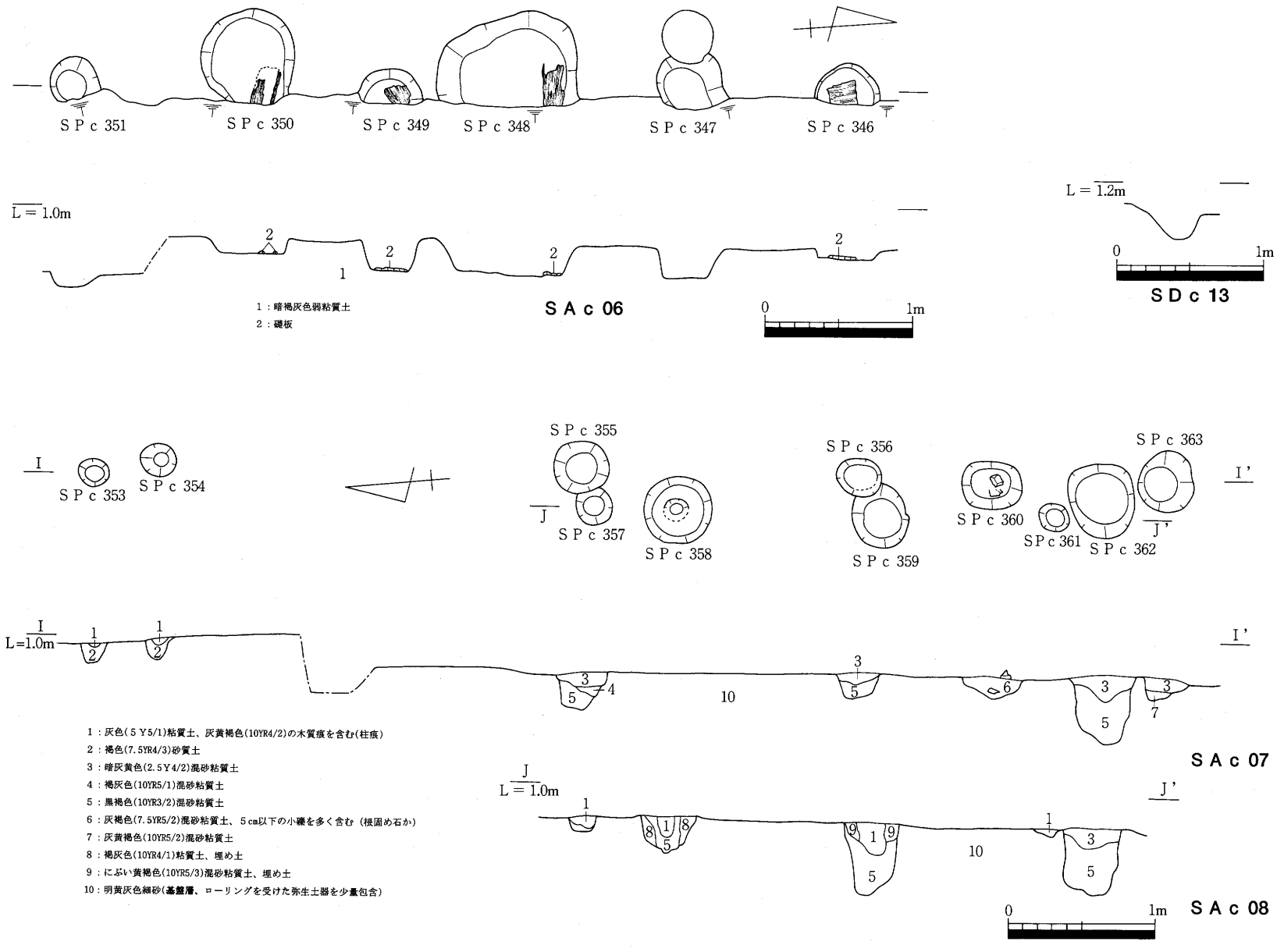
１：明灰色砂質土(上層からの掘り込みもしくはＳＺｃ02構築以降の整地層)
２：暗褐灰色細砂質土(ＳＺｃ01構築以前の堆積層)
３：明黄灰色細砂(基盤層、ローリングを受けた弥生土器を少量包含)
４：橙灰色粘質土
５：褐灰色粘質土
６：褐灰色粘質土(拳～人頭大の石材を多量に包含、狭義のＳＺｃ01裏込)
７：橙灰褐色砂質土
（４～７；ＳＺｃ01構築に伴う整地層ないしＳＺｃ01裏込）
８：橙灰褐色砂質土(１cmの灰色粘土ブロック含む)
９：暗黄灰褐色砂質土
10：暗褐灰色弱粘質土
（８～10；ＳＺｃ01前面堆積土・赤灰褐色砂層＝ＳＺｃ02構築に伴う整地層）
11：暗橙灰色弱粘質土
12：橙灰褐色砂
13：暗橙灰色砂質土
14：暗茶青色砂質土
15：暗橙黄灰色粘質土
16：暗茶灰色弱粘質土
17：暗灰茶色砂質土
18：茶灰色砂質土(0.5cmの黄灰色粘土ブロックをわずかに含む)
19：灰茶色砂質土
（11～19；ＳＺｃ01前面堆積土・赤灰褐色砂層＋暗青灰色砂質土混在層＝ＳＺｃ02に伴う整地層）
20：暗橙灰色弱粘質土(0.5～１cmの橙灰色粘土ブロックを含む)
21：橙褐灰色弱粘質土(0..5～１cmの橙色、灰色粘土ブロックを含む)
22：暗橙青灰色砂質土
（20～22；ＳＺｃ01前面堆積土・暗青灰色砂質土層＝ＳＺｃ02に伴う整地層）
23：暗灰色粘土(１cm前後の橙灰色粘土ブロック含む)
24：橙灰色細砂
（23・24；ＳＺｃ01前面堆積土・黒灰色粘質土＝ＳＺｃ01機能中の堆積土）
25：黄灰色細砂(基盤層)
26：黄灰色細砂質土(遺構埋土？)
27：攪乱

１：褐灰色細砂
２：明褐灰色砂
３：明黄褐色砂
４：淡黄灰色細砂
５：暗灰色砂
６：暗青灰色砂
７：黒灰色砂
（１～７；基盤層）
８：淡橙灰色細砂質土
９：黒褐灰色砂質土
10：淡橙灰色砂質土
11：褐灰色砂質土
12：暗灰褐色弱粘質土
13：灰橙色弱粘質土
14：明橙灰色砂
15：黄灰色砂
（８～15；調査段階ではＳＺｃ01構築に伴う整地層と想定していたが、18層から連続するＳＺｃ02構築に伴う整地土と判断）
16：黄褐灰色砂質土
17：黄褐灰色粘質土
（16・17；ＳＺｃ01裏込）
18：暗橙褐灰色砂質土(炭化物包含、0.5～１cmの橙色・灰色粘土ブロックを含む)
（18；ＳＺｃ01前面堆積土・赤灰褐色砂層＝ＳＺｃ02構築に伴う整地層）
19：淡灰褐色砂(炭化物包含、0.5cm前後の橙色・灰色粘土ブロックを少量含む)
20：暗赤褐灰色砂質土(炭化物包含、0.5cm前後の橙色・灰色粘土ブロックを少量含む、１～３cmの小礫を含む)
21：暗黄灰色弱粘質土(炭化物包含､0.5～１cmの橙色・灰色粘土ブロックを含む)
22：灰色弱粘質土
23：黄灰色弱粘質土(炭化物包含、0.5～１cmの橙色・灰色粘土ブロックを含む)
24：暗橙灰色弱粘質土(炭化物包含、0.5～１cmの橙色・灰色粘土ブロックを含む)
（19～24；ＳＺｃ01前面堆積土・赤灰褐色砂層＋暗青灰色砂質土混在層＝ＳＺｃ02に伴う整地層）
25：暗灰色粘土
26：淡灰黄色細砂
27：明灰褐色粗砂
28：黒色粘土
（25～28；ＳＺｃ01前面堆積土・黒灰色粘質土＝ＳＺｃ01機能中の堆積土）
29：明灰色砂質土
（29；ＳＺｃ01に伴う整地土ないし機能中の堆積土、28層との土質の格差が激しい）
30：橙灰色砂質土
31：淡橙灰色砂質土
32：橙褐灰色砂質土
（30～32；８～15層・18層に連続する層位、ＳＺｃ02構築に伴う整地層）

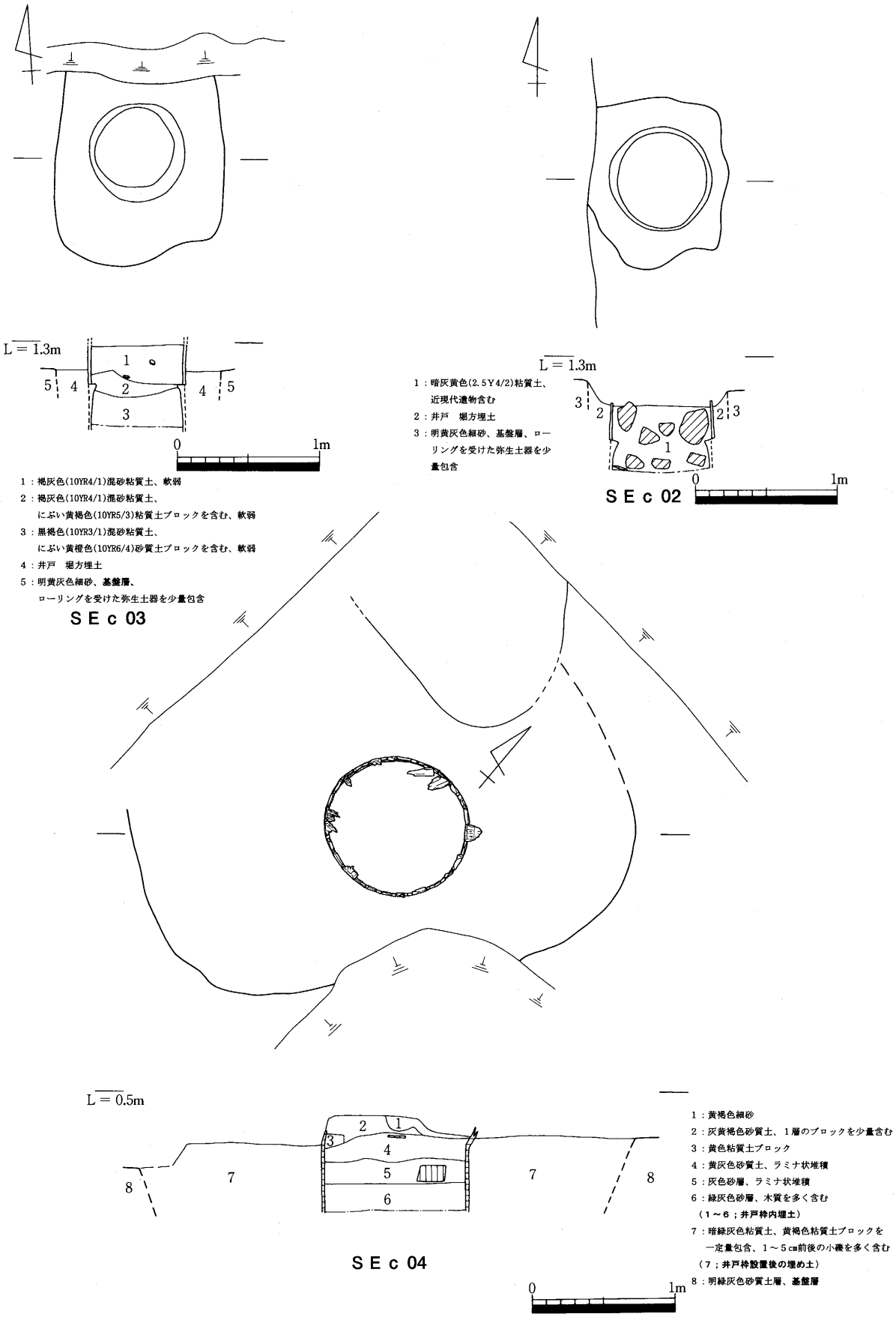
**第80図　Ⅷ区　第２面ＳＺｃ01写植**



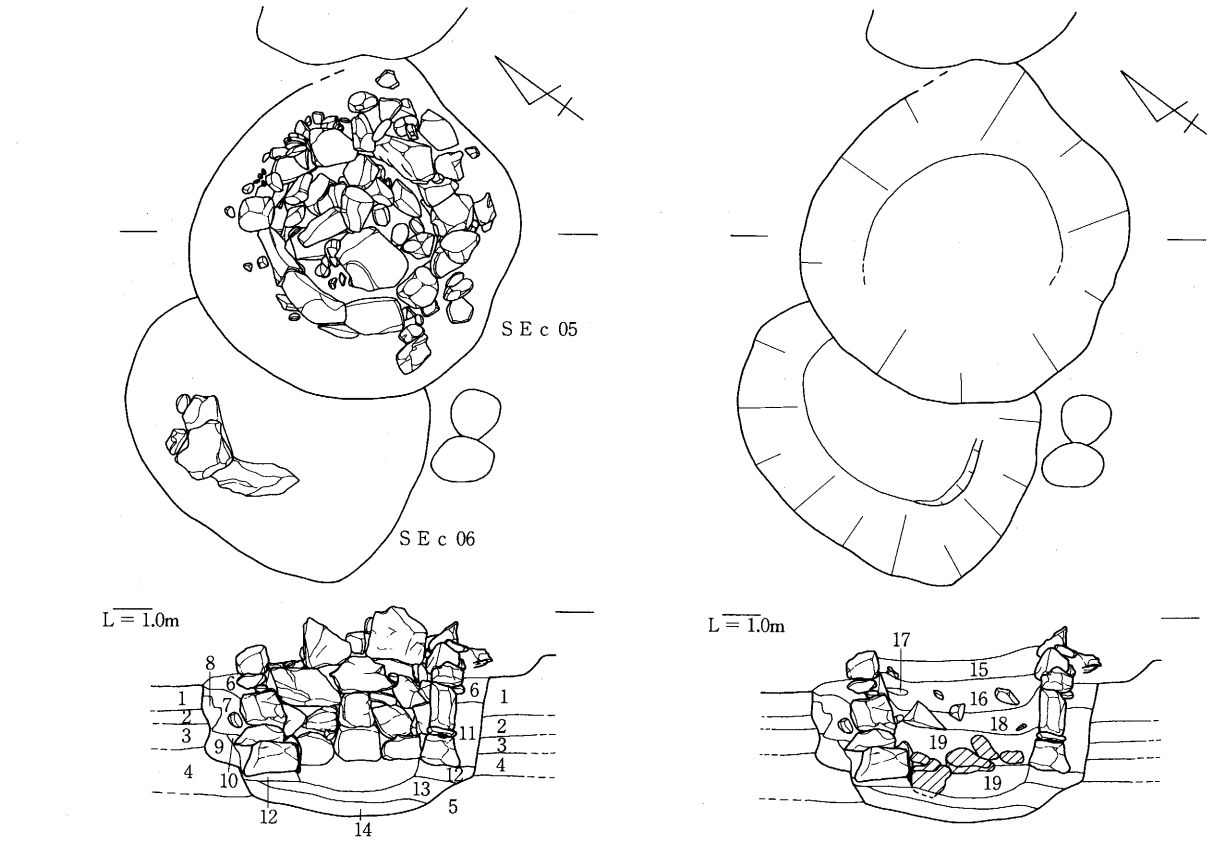

第79図　Ⅷ区　第２面ＳＺｃ01平・断面図




第81図　Ⅷ区　遺構平・断面図1

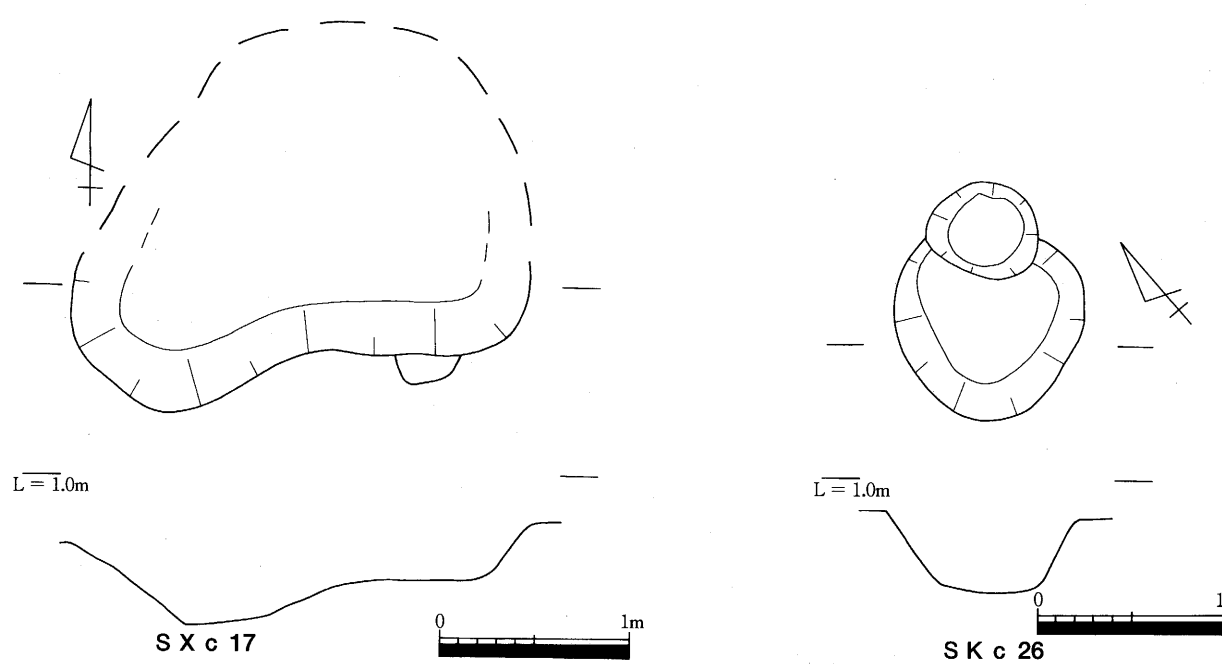



第82図　Ⅷ区　遺構平・断面図2



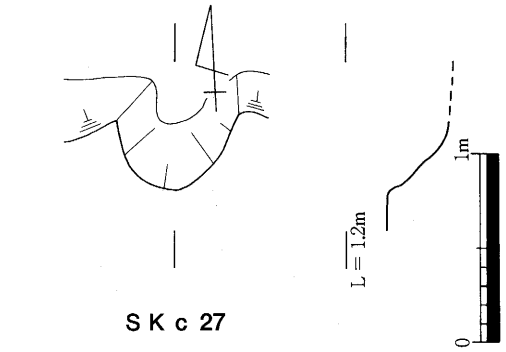

1：灰黄色(2.5Y7/2)砂
2：黄褐色(2.5Y5/3)砂利
3：浅黄色(2.5Y7/3)砂
4：灰黄褐色(10YR6/2)砂利
5：にぶい黄褐色(10YR7/2)砂
（1～5；基盤層、ローリングを受けた弥生土器を少量包含）
6：にぶい黄色(2.5Y6/3)混砂粘質土(砂質土ブロックを含む、6～14埋め土)
7：黄灰色(2.5Y5/1)砂質土
8：灰黄褐色(10YR5/2)砂質土、ブロック状
9：暗灰黄色(2.5Y4/2)混砂粘質土
10：褐灰色(10YR6/1)砂質土
11：灰色(5Y5/1)砂質土、粘土ブロックを少量含む
（6～11；石組埋め土、掘方と石組間充填土）
12：灰色(7.5Y5/1)混砂粘質土
13：灰オリーブ色(5Y6/2)砂質土
14：灰色(5Y5/1)混砂粘質土
（12～14；掘方開削後の置き土）
15：暗灰黄色(2.5Y5/2)混砂粘質土
16：灰色(5Y4/1)砂質土
17：明黄褐色(2.5Y6/6)粘土ブロック
18：褐灰色(10YR4/1)混砂粘質土
19：褐灰色(10YR4/1)混砂粘質土、拳大からその2倍はある石材を包含
（15～19；井戸枠内埋土）

**SEc 05・06**

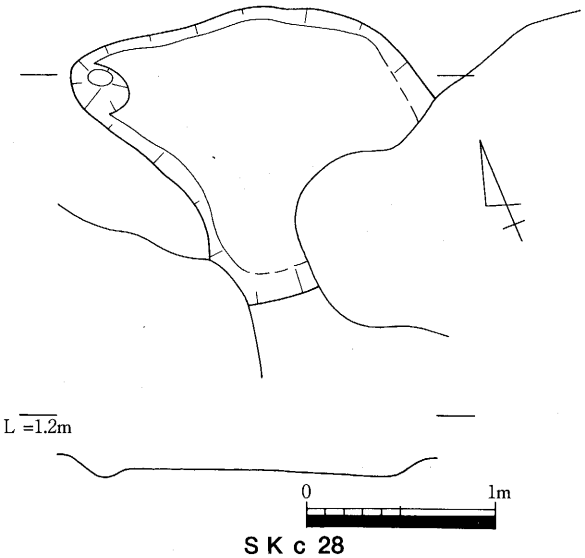



**SXc 17**　　**SKc 26**

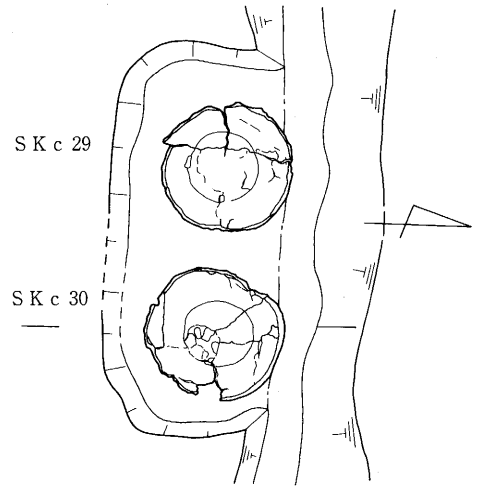
**第83図　Ⅷ区　遺構平・断面図3**

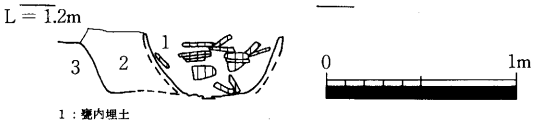



SKc 27



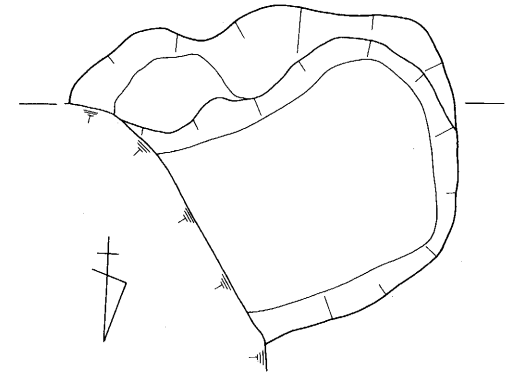

SKc 28

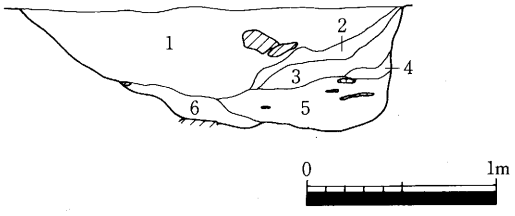



1：甕内埋土
2：灰黄褐色混砂粘質土、甕埋め土
3：淡橙灰色細砂質土
（SZc01前面堆積土・赤灰褐色砂層）

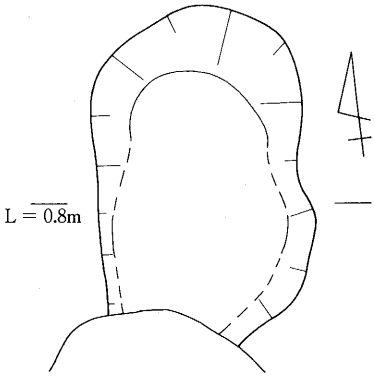
SKc 29・30

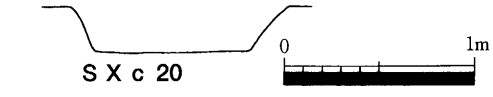



1：紫褐灰色弱粘質土
2：紫褐灰色弱粘質土、黄色粘土ブロック多量に混じる
3：黒灰色粘質土、炭化物を多量に含む
4：褐灰色細砂質土、基盤層に酷似、基盤層崩落土
5：暗灰黒色粘土、炭化物を多量に含む、1～5cmの小礫含む、木材を多量に含む
6：暗青灰色粘土

SXc 18

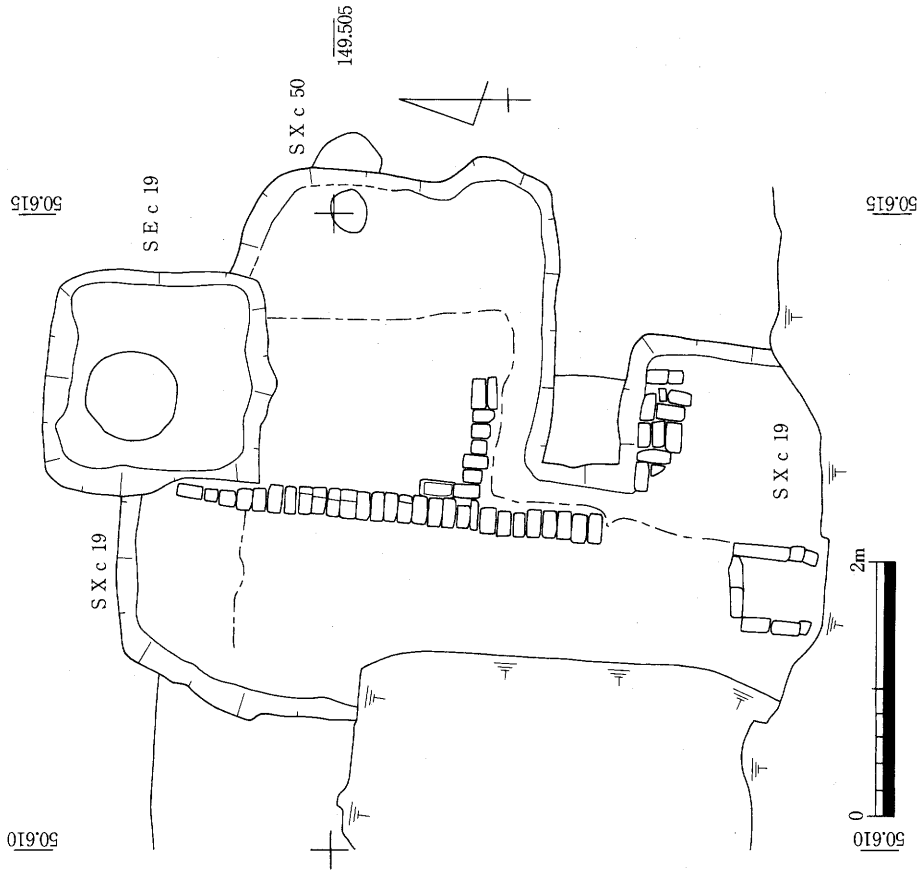


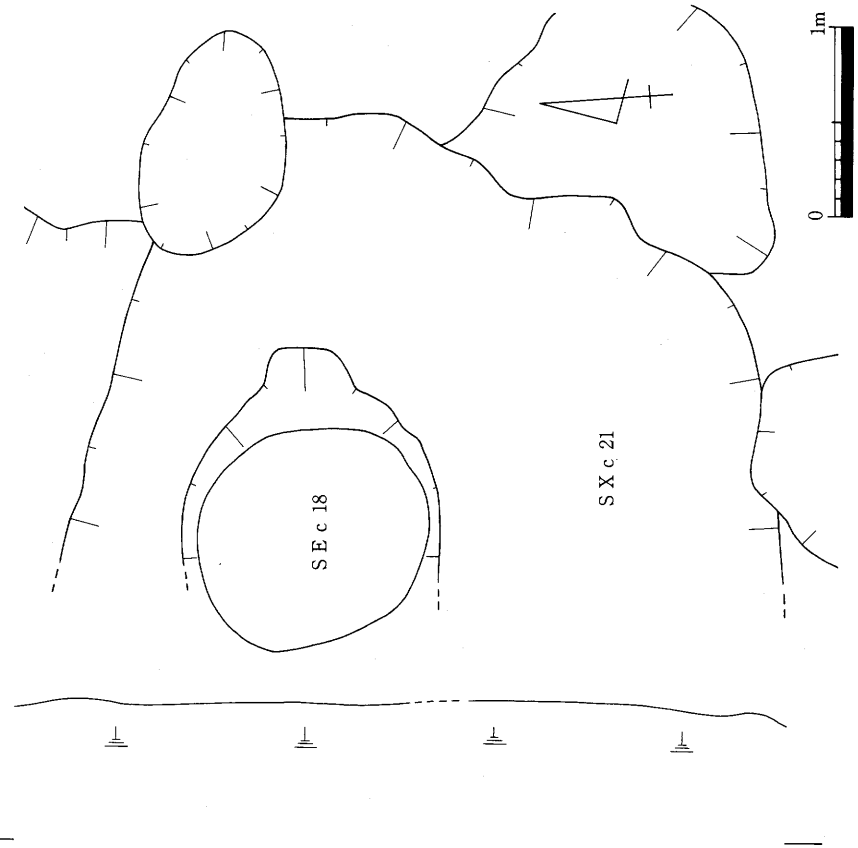



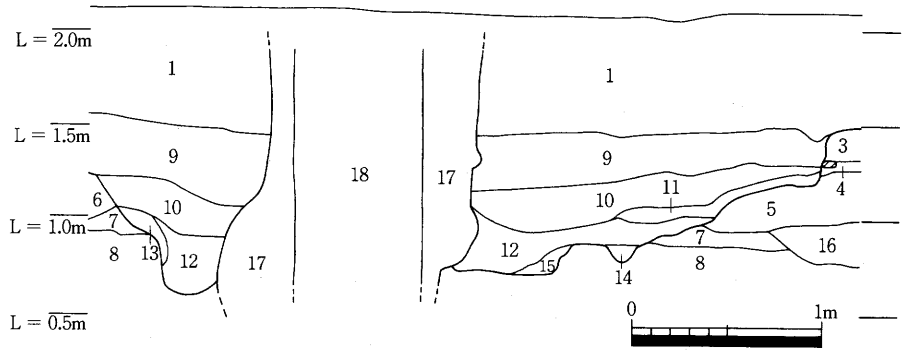

SXc 20

第84図　Ⅷ区　遺構平・断面図4

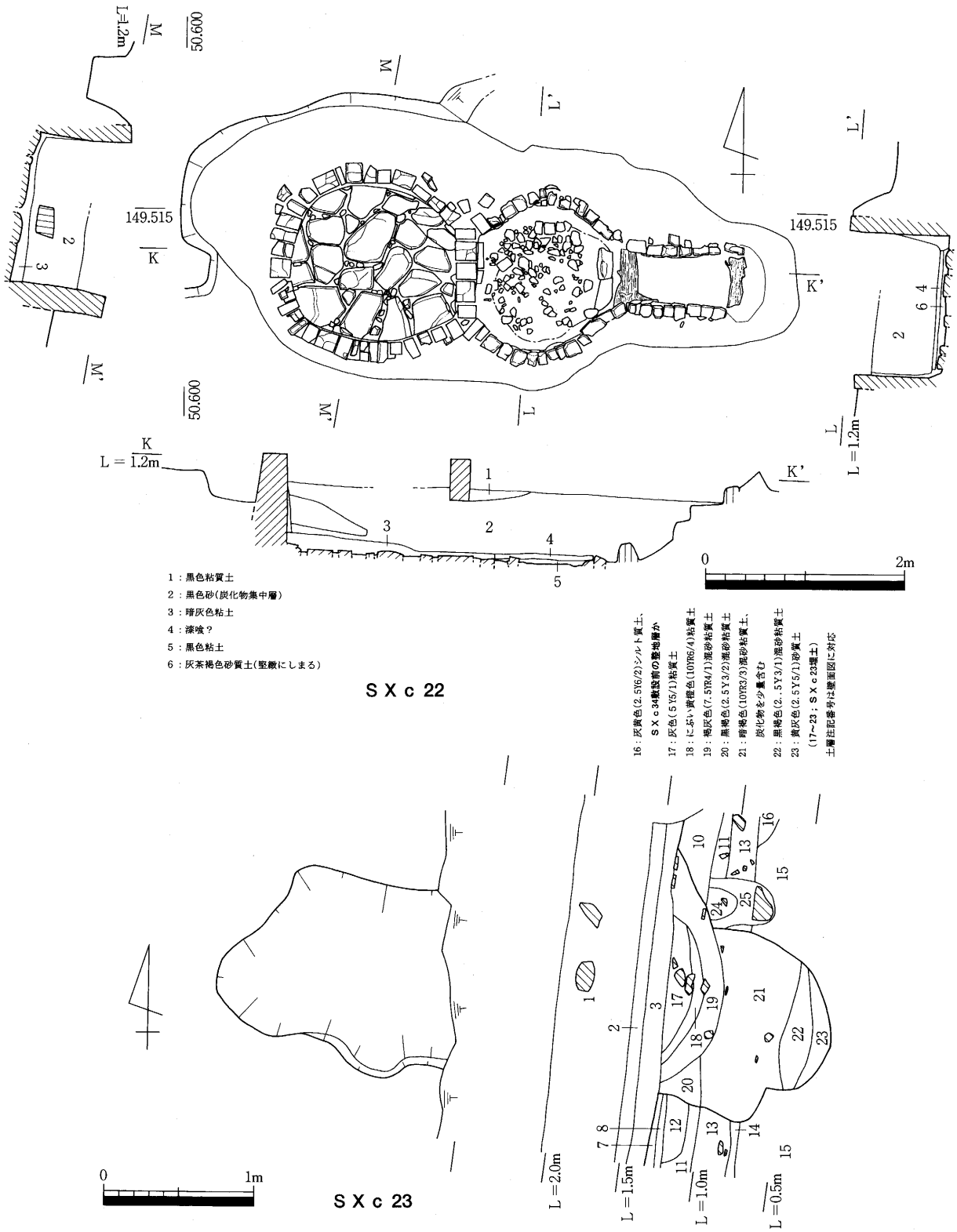
# 第85図　Ⅷ区　遺構平・断面図５



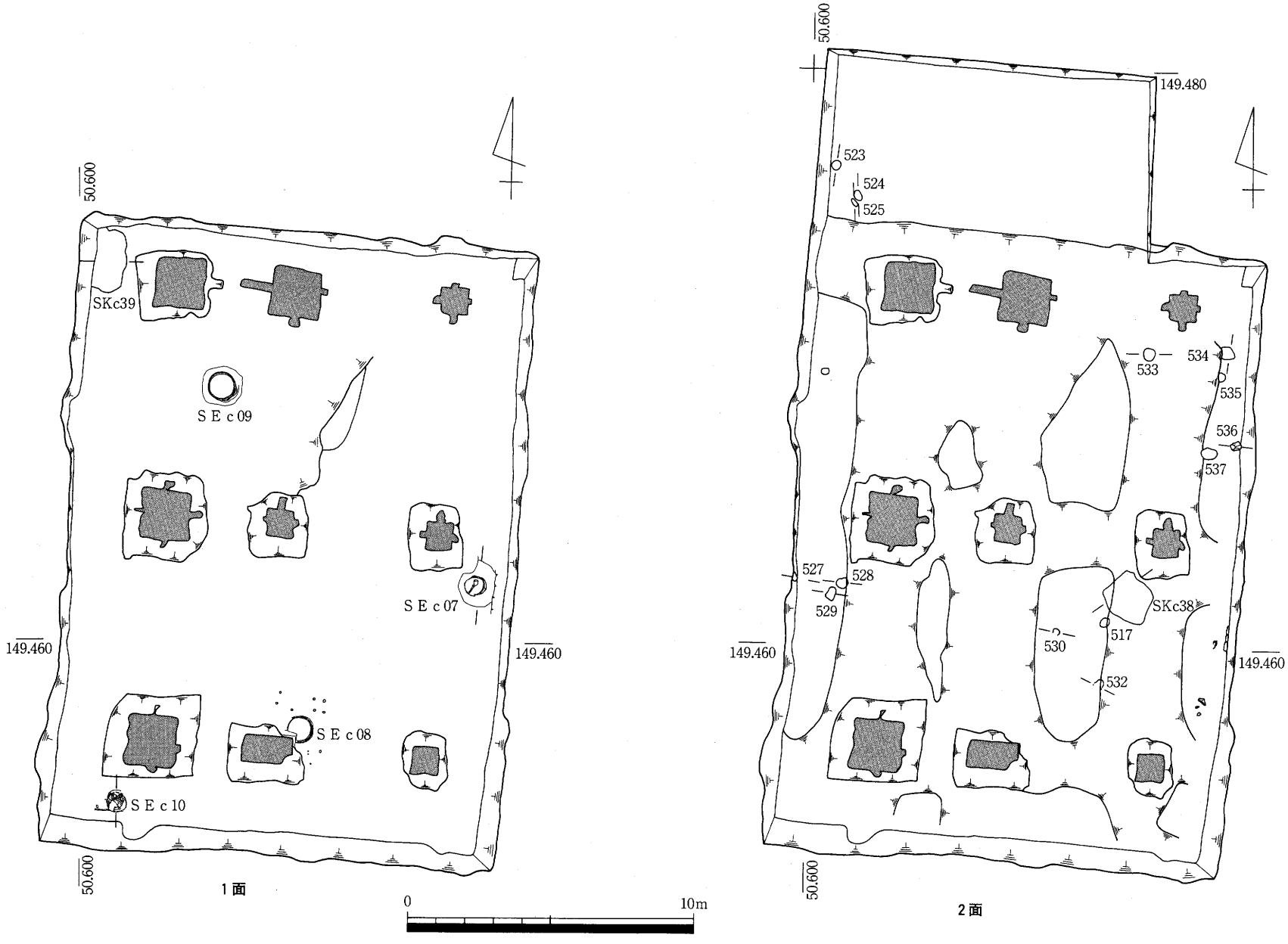




1：攪乱
2：灰色（５Ｙ6/1）粘質土
3：暗褐色(10YR3/4)粘質土、炭化物を少量含む、明治期以降の整地層？
4：にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質土、整地層？
5：褐灰色（５YR4/1)粘質土、明黄褐色(10YR6/6)粘質土を多量に含む、整地層？
6：暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土、５層に連続する整地層か
7：にぶい赤褐色（５YR4/3)砂質土、ＳＸｃ34包含層
8：にぶい黄橙色(10YR7/4)砂、基盤層
9：灰褐色(7.5YR4/2)粘質土、炭化物を多く含む
10：灰黄褐色(10YR6/2)粘質土、瓦片を多量に含む、河原石を少量含む
11：褐灰色(10YR6/1)混砂粘質土、にぶい黄色(2.5Y6/4)粘質土ブロックを含む
12：黒褐色(2.5Y3/2)粘質土
13：12に８が多量に混じる
14：12に８のブロックをやや多く含む
15：12に８のブロックを少量含む
（９～15；ＳＸｃ21埋土）
16：褐灰色(7.5YR4/1)粘質土、遺構埋土か
17：浅黄橙色(10YR8/4)砂（コンクリート井戸堀方埋め土）
18：コンクリート井戸枠

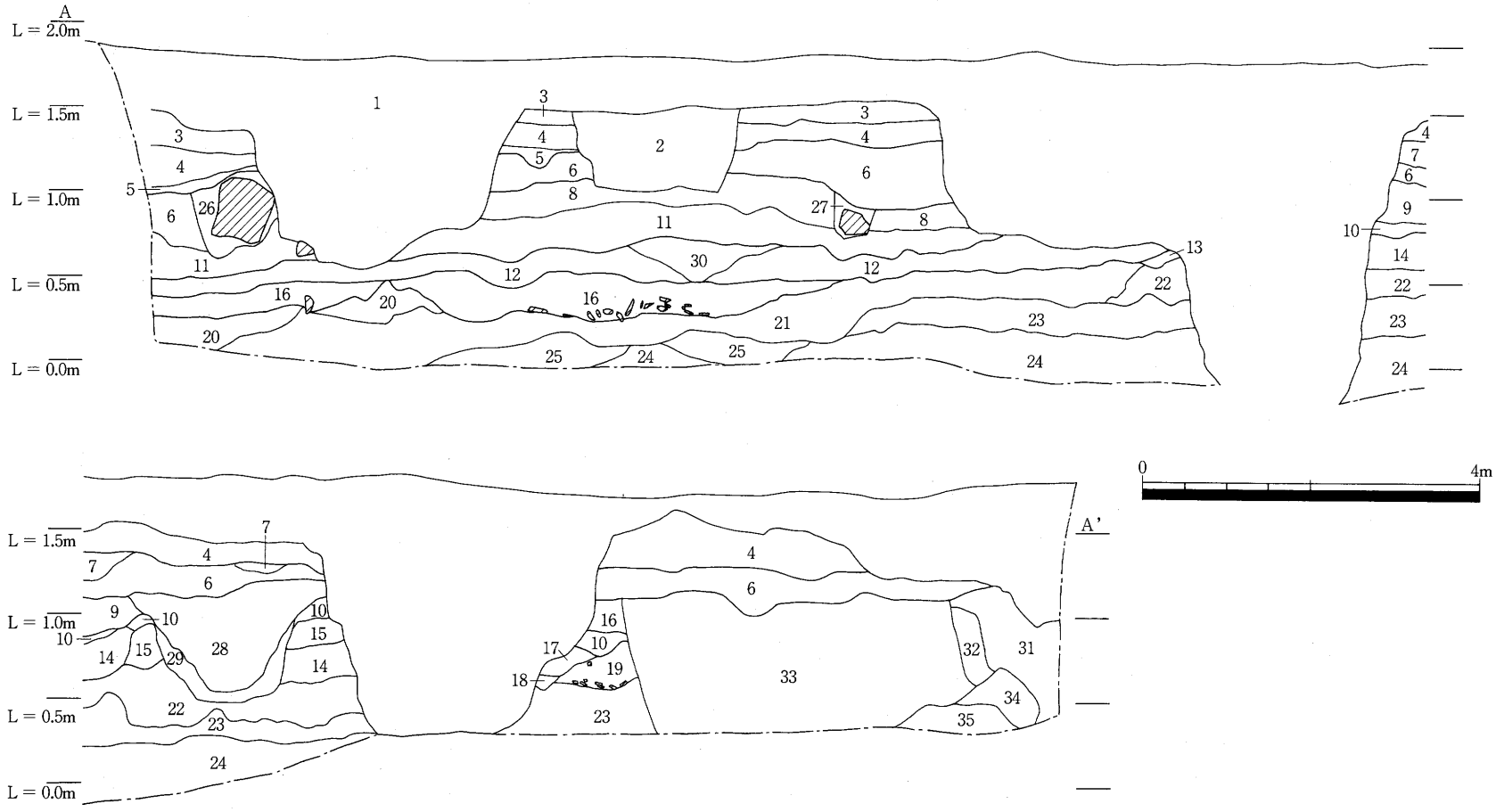



第86図　Ⅷ区　遺構平・断面図6



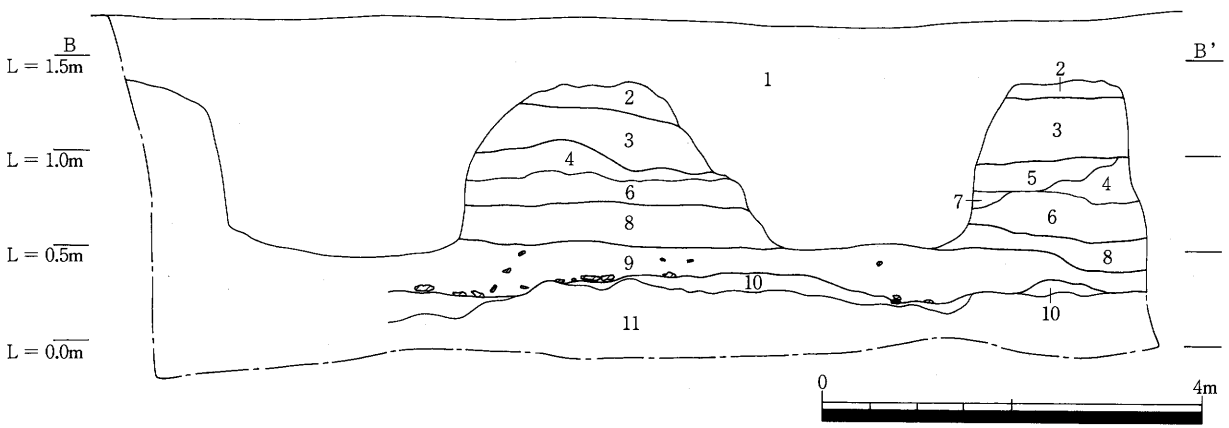

第87図　Ⅸ区　第１・２面遺構配置図（Ｓ＝１／200）

第88図　Ⅸ区　第３・４面遺構配置図（Ｓ＝１／200）

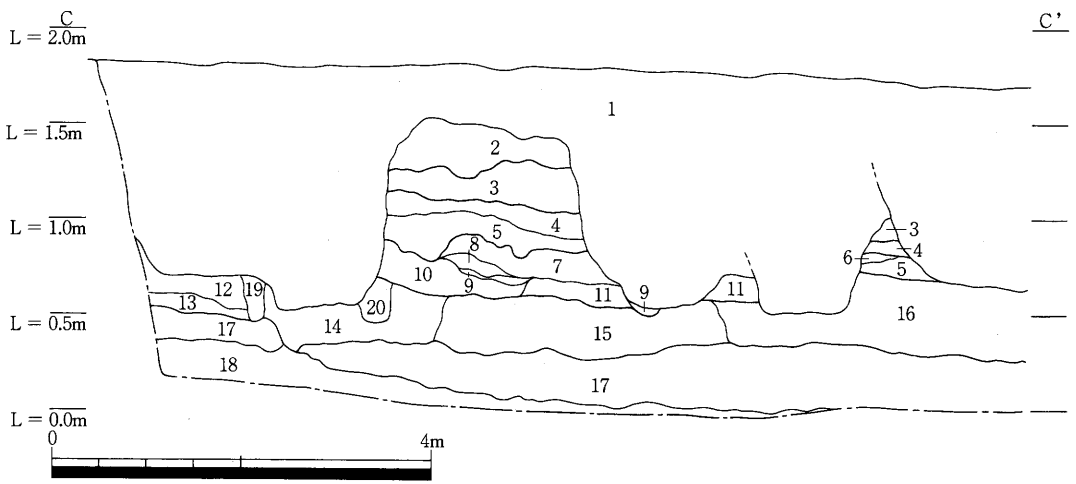



1：攪乱
2：攪乱
3：黒褐色粘質土(炭化物を少量含む)
4：黒褐色砂質土(炭化物を少量含む)
5：黒色粘質土(炭化物を多量に含む、漆喰包含、炭化物集中層)
（3～5；明治期以降の整地層）
6：明灰褐色砂質土(炭化物少量含む、黄褐色粘土ブロックを少量含む)
7：橙灰褐色粘質土
（6・7；連続する整地層、上面遺構検出面1面）
8：灰褐色シルト(黄色、灰色粘土ブロックを多く含む)
9：黄白色砂
10：暗灰色弱粘質土
11：橙灰色粘質土
（8・9・11；連続する整地層、上面遺構検出面2面）
12：暗褐灰色弱粘質土
13：明灰褐色砂質土
14：明褐灰色弱粘質土
15：橙褐灰色弱粘質土
（10・12～15；連続する整地層、上面遺構検出面3面）
16：暗褐灰色砂質土(小石を少量含む)
17：橙褐灰色砂質土
18：暗灰色砂質土
19：暗褐灰色砂質土(小石を多く含む)
（16～19；中世土器包含層、ＳＸｃ31・32包含層）
20：灰色砂
21：褐灰色シルト
22：明褐灰色シルト
23：暗灰色砂質土(1～5㎝の橙灰色粘土ブロックを含む)
24：灰褐色砂(しまり弱い、砂粒粗い)
25：灰褐色粘質土
（20～25；基盤層、ＳＸｃ31・32構築以前の堆積層、ごく少量の弥生土器・須恵器包含）
26：明灰色砂(遺構埋土、礫石)
27：灰色砂質土(遺構埋土、根石)
28：明黄灰色弱粘質土(1～5㎝の橙褐色粘土ブロックを多量に含む、瓦包含)
29：灰白色弱粘質土(0.2～1㎝の橙褐色粘土ブロックを少量含む)
（28・29；遺構埋土）
30：暗灰色粘質土(遺構埋土か、ＳＸｃ26埋土に近似)
31：黄灰褐色砂
32：褐灰色砂
33：明褐色粗砂
34：暗灰色細砂
35：明黄灰色細砂
（30～35；不明埋土、遺構か）

**第89図　Ⅸ区　壁面図1（天地Ｓ＝1／40、左右Ｓ＝1／80）**

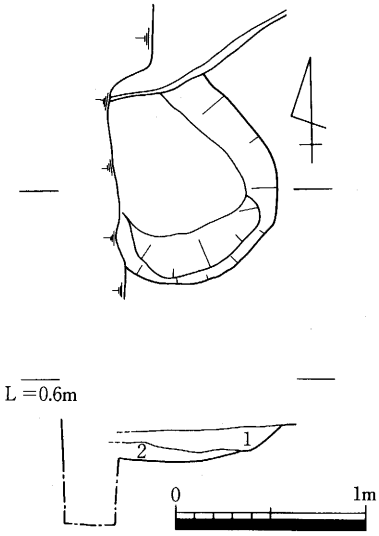



1：攪乱
2：黒褐色砂質土(明治期以降の整地層、西壁３～５層に対応)
3：明灰褐色砂質土
（連続する整地層、上面遺構検出面１面、西壁６・７層に対応）
4：灰褐色シルト
5：灰褐色シルト(橙黄色・灰色粘土ブロックを多量に含む)
6：橙灰色弱粘質土
7：明黄灰色粘土
（４～７；連続する整地層、上面遺構検出面２面、西壁８・９・11層に対応）
8：暗褐灰弱粘質土
（８；整地層、上面遺構検出面３面、西壁14層に対応）
9：暗褐灰色砂質土
（９；中世土器包含層、ＳＸｃ31・32包含層、西壁16～19層に対応）
10：灰色砂
11：褐灰色シルト
（10・11；基盤層、ＳＸｃ31・32構築以前の堆積層、ごく少量の弥生土器・須恵器包含、西壁20～25層に対応）



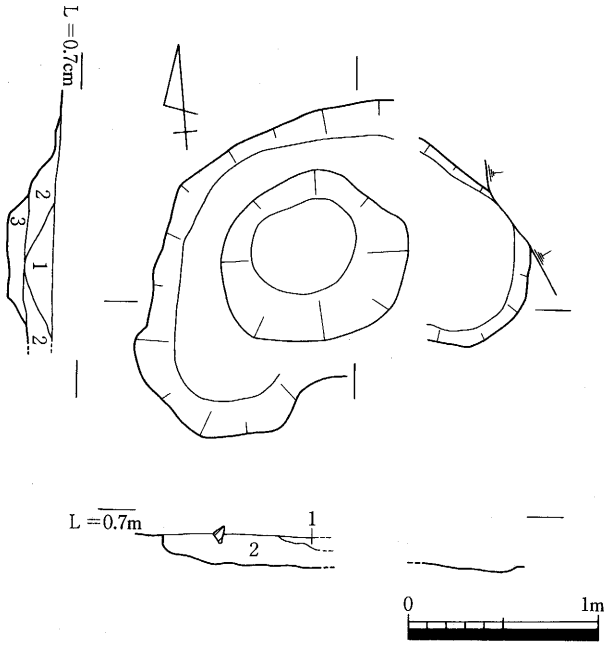

1：攪乱
2：黒褐灰色砂質土(炭化物を含む、明治期以降の整地層、西壁３～５層に対応))
3：暗灰褐色弱粘質土(上面遺構検出面１面、西壁６・７層に対応)
4：灰褐色弱粘質土(４層上端に黄褐色粘土ブロックがベルト状に存在する)
5：灰褐色弱粘質土(５層上端に黄褐色粘土ブロックがベルト状に存在する)
6：黒灰色粘質土(炭化物集中層)
7：暗灰色弱粘質土(炭化物を多量に含む、0.5～２cmの黄褐色粘土ブロックを含む)
（４～７；連続する整地層、上面遺構検出面２面、西壁８・９・11層に対応）
8：黄色砂
9：灰色弱粘質土(炭化物を含む)
10：暗褐灰色弱粘質土(0.2～0.5cmの黄褐色粘土ブロックを少量含む)
11：黄灰色弱粘質土
(0.2～１cmの黄色粘土ブロックを含む、10層と比較して黄色粘土ブロックの含有率が高い)
（８～11；連続する整地層、上面遺構検出面３面、西壁14層に対応）
12：灰褐色砂(砂粒細かい)
13：黄褐色粘土
14：明褐灰色シルト(１～５cmの黄褐色・橙褐色粘土ブロックを含む)
15：褐灰色シルト(１～３cmの黄褐色・橙褐色粘土ブロックを少量含む)
16：明灰褐色シルト(部分的に灰色砂質土を含む、主構成物、副構成物が14層と逆転)
（12～16；中世土器包含層、ＳＸｃ31・32包含層、西壁16～19層に対応）
17：褐灰色砂質土(18層と比較して堅緻にしまる)
18：褐灰色砂(軟弱)
（17・18；基盤層、ＳＸｃ31・32構築以前の堆積層、ごく少量の弥生土器・須恵器包含、西壁20～25層に対応）
19：暗褐灰色砂質土(遺構埋土)
20：灰褐色砂質土(黄褐色粘土ブロックを少量含む、遺構埋土、中世？)

第90図　Ⅸ区　壁面図２・３(天地Ｓ＝１／40、左右Ｓ＝１／80)



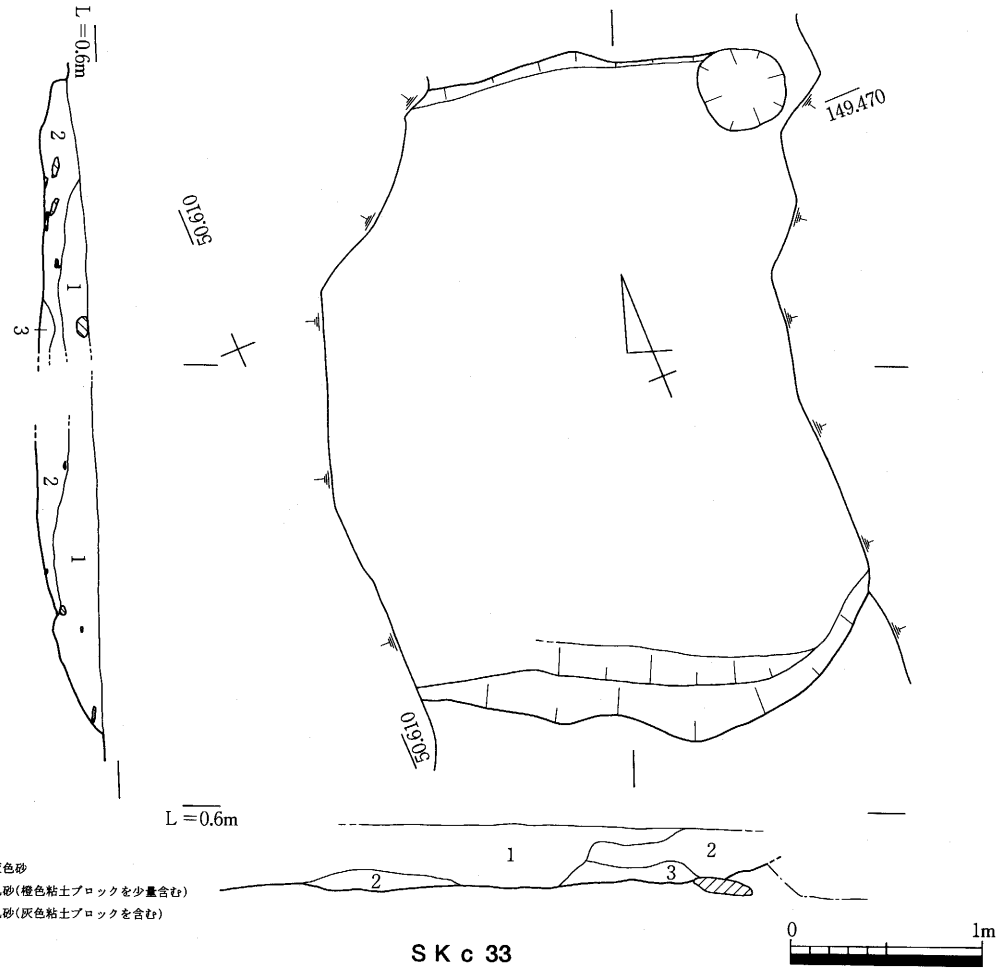

1：灰褐色砂質土(炭化物をごく少量含む)
2：灰色砂質土

**ＳＸｃ 24**




1：暗褐灰色砂質土
2：暗黄灰色砂質土
3：灰色砂質土(1・2層に比して、砂質土の比率が高い)

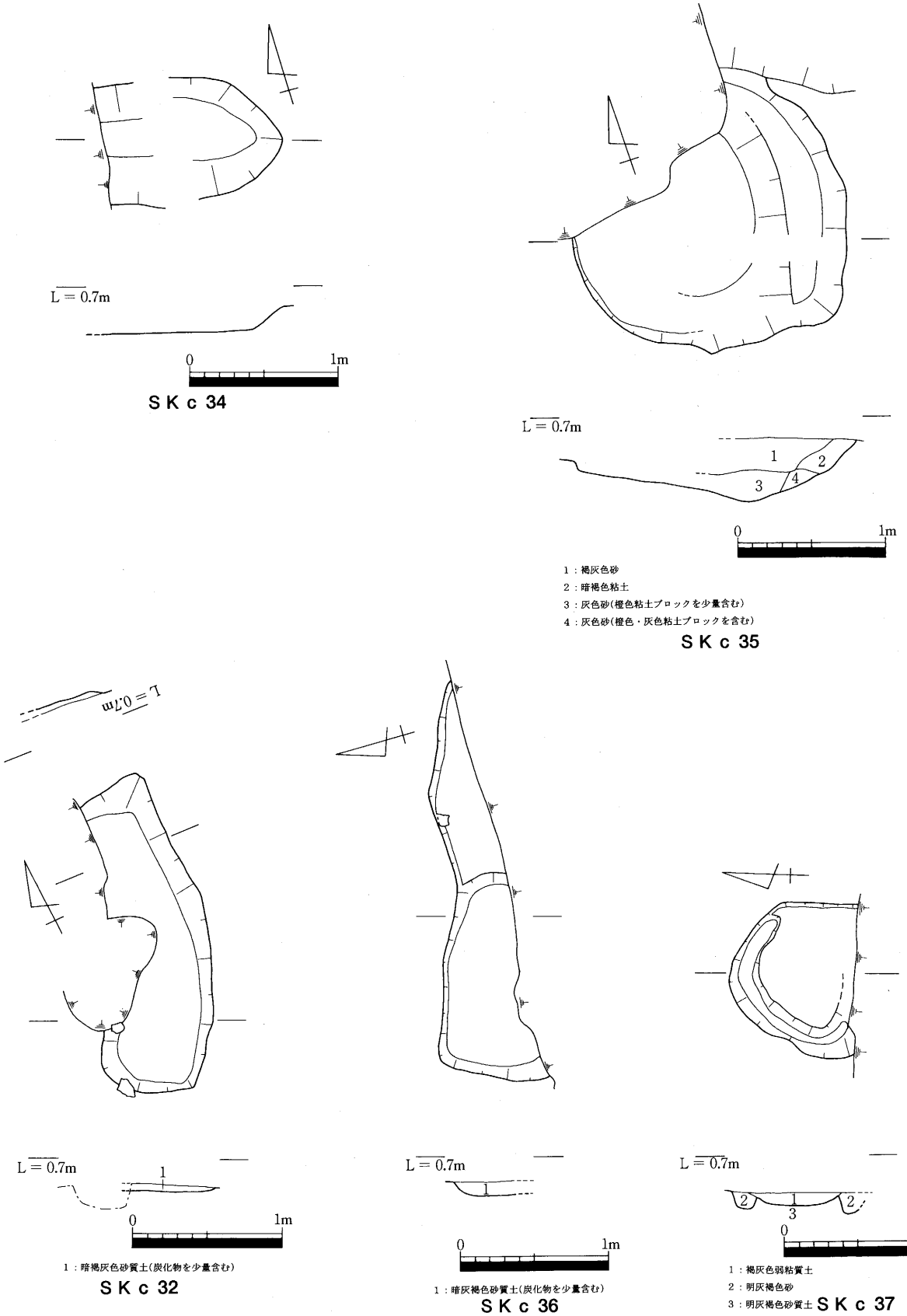
**ＳＸｃ 31**




1：褐灰色砂
2：灰色砂(橙色粘土ブロックを少量含む)
3：灰色砂(灰色粘土ブロックを含む)

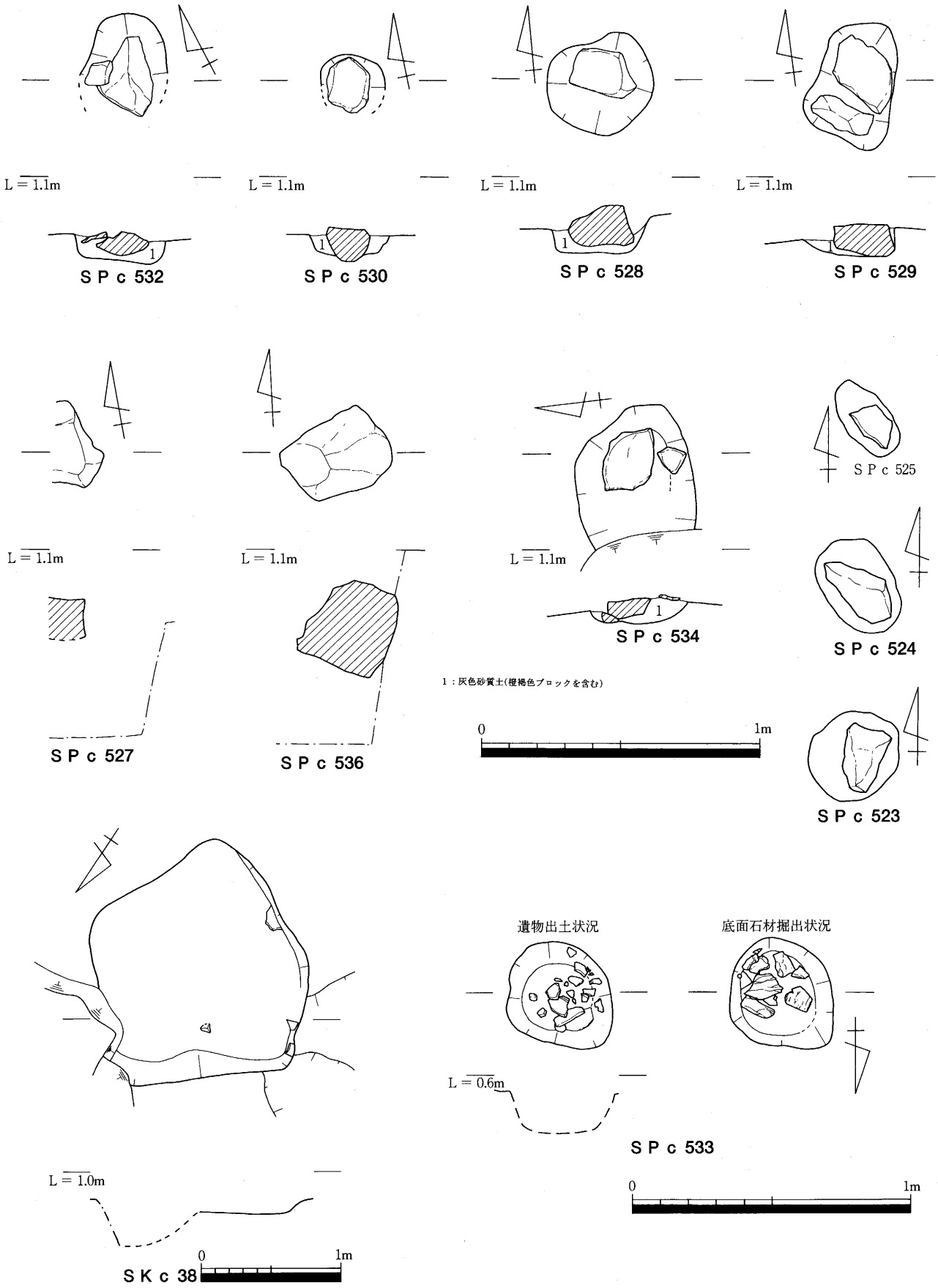
**ＳＫｃ 33**

**第91図　Ⅸ区　遺構平・断面図１**

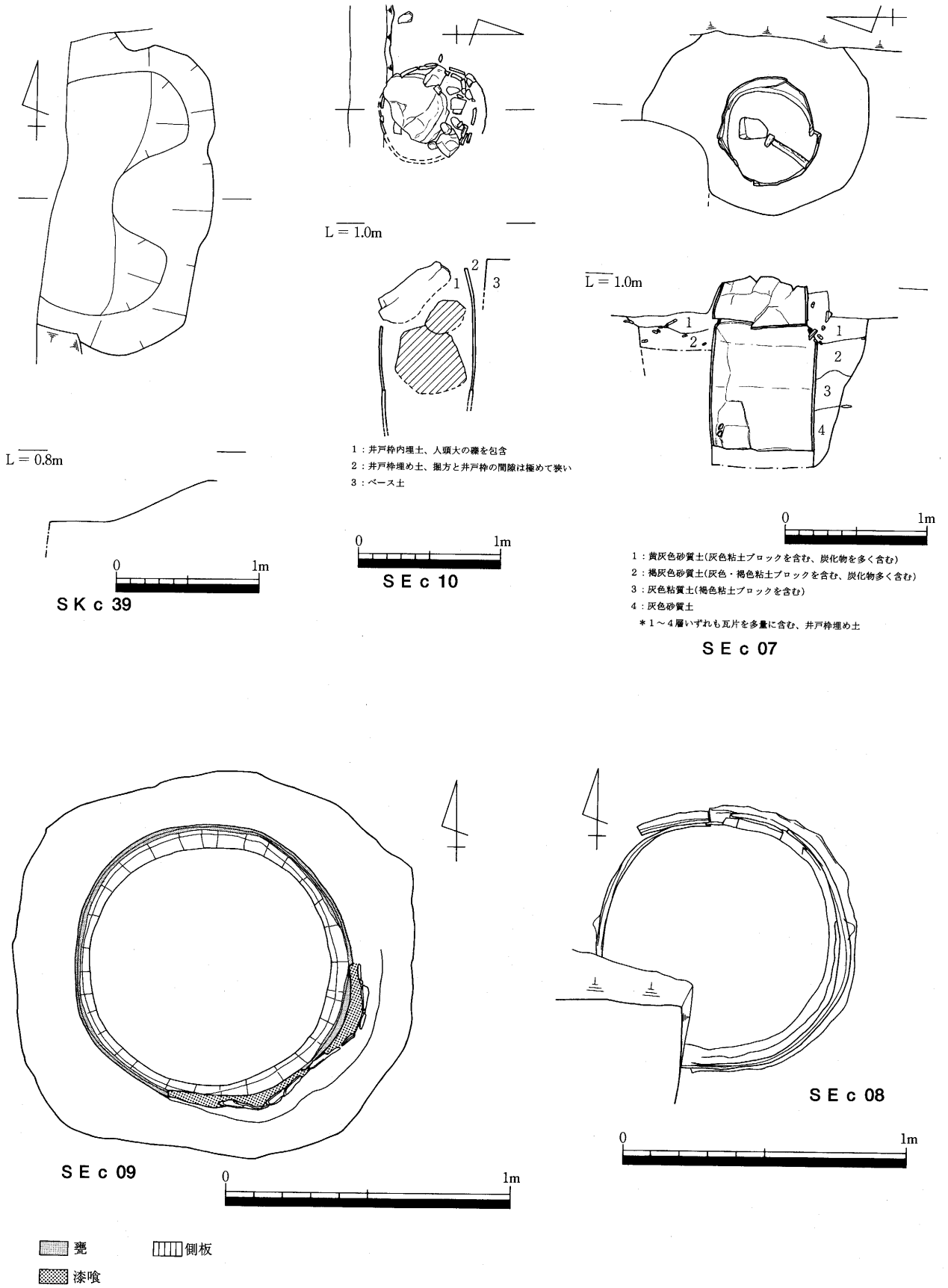



第92図　Ⅸ区　遺構平・断面図2

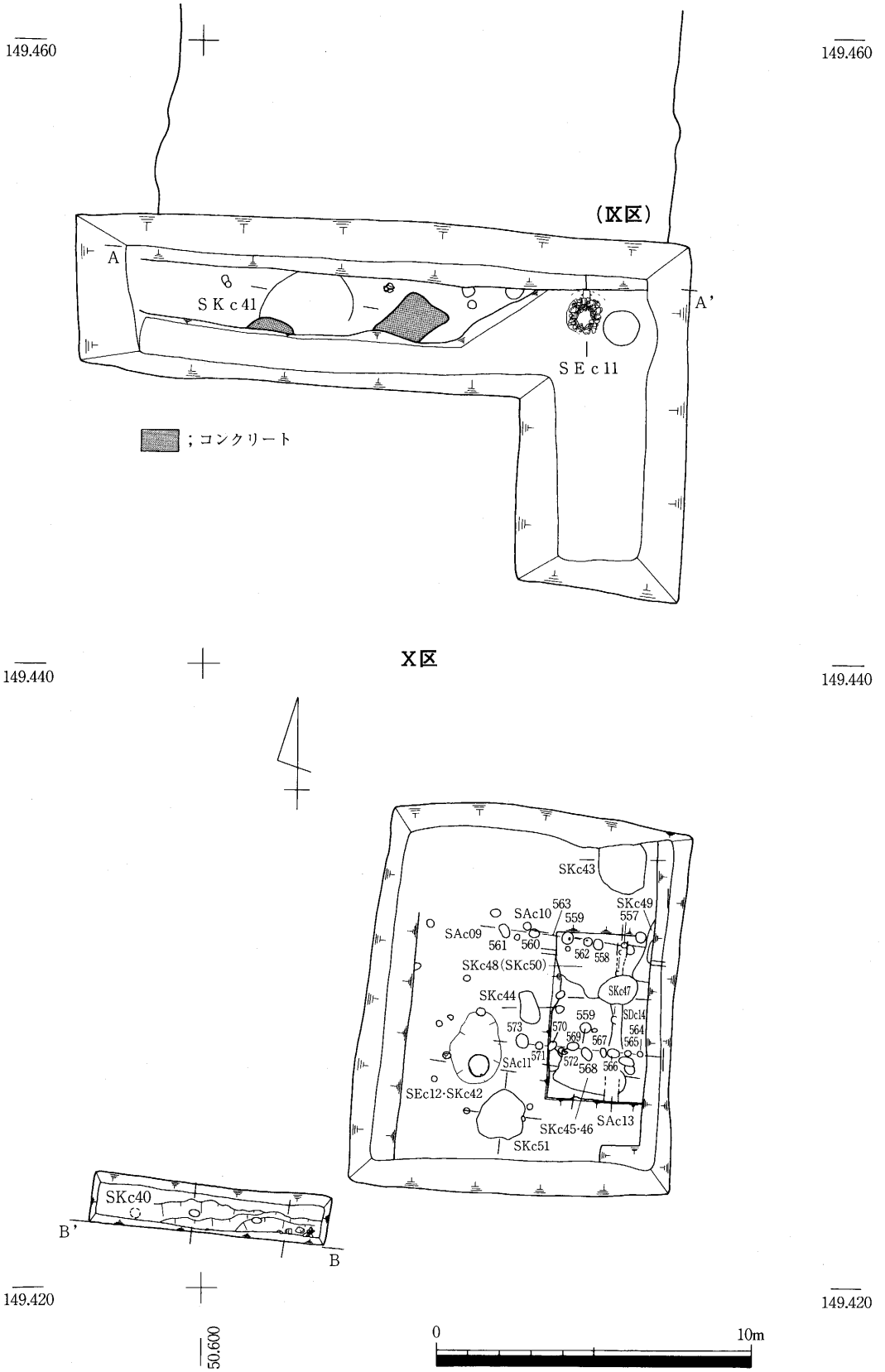
第93図　区区　遺構平・断面図3



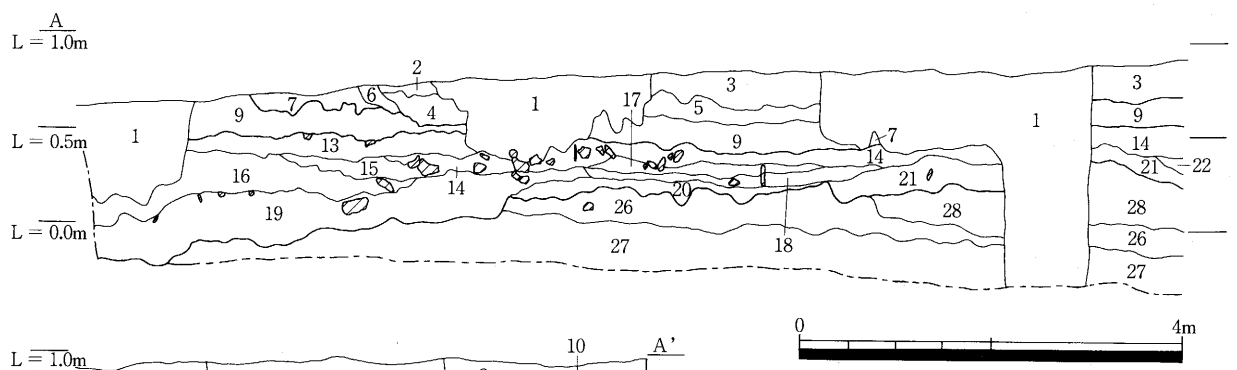

第94図　Ⅸ区　遺構平・断面図 4

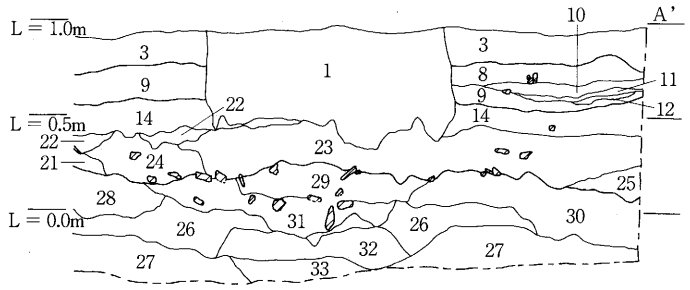



第95図　Ⅸ区　遺構平・断面図5



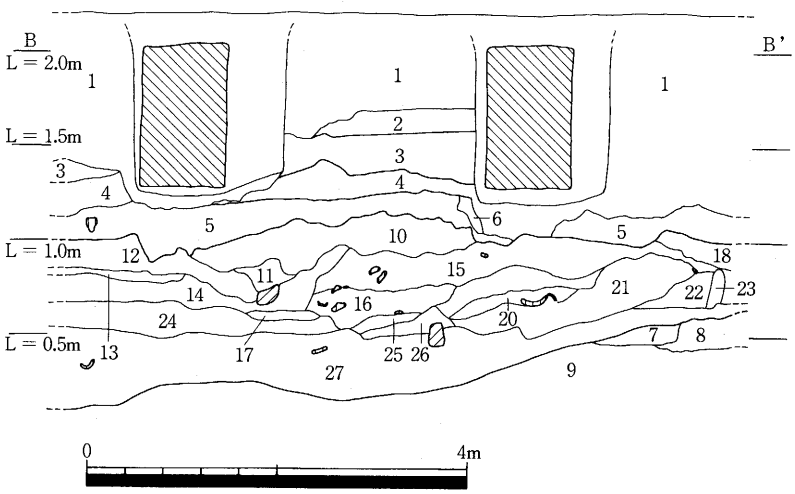

第96図　X区　遺構配置図(S＝1／200)



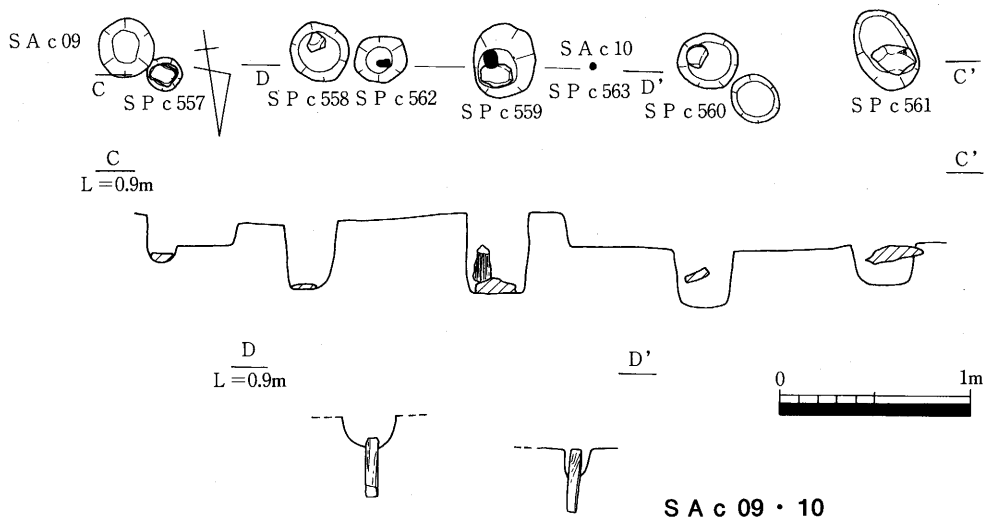

1：攪乱
2：暗褐色(10YR3/3)粘土(細砂粒を若干含む、にぶい黄色(2.5Y6/3)粘土ブロック含む)
3：黄灰色(2.5Y5/1)シルト(0.5～5cmの砂～小礫を多量に含む)
4：灰色(N5/(Y))粘質シルト(0.5～1cmの砂、小礫を若干含む、炭化物を若干含む)
5：灰色(N5/(YR))シルト(0.5～2cmの砂、小礫を若干含む、炭化物若干含む)
6：黄灰色(5Y5/1)シルト(0.5～5cmの小礫を少量含む、にぶい黄色(2.5Y6/3)～明黄褐色(2.5Y6/6)粘土ブロックを多量に含む＝粒径0.5～3cm)
7：灰色(7.5Y6/1)砂質シルト(にぶい黄色(2.5Y6/3)～明黄褐色(2.5Y6/6)粘土ブロック＝径0.5～2cm、基本的には6層と同一層位か)
8：灰オリーブ色(5Y5/2)砂質シルト(灰色(5Y5/1)～灰オリーブ色(5Y6/2)粘質シルトブロック＝径　0.5～2cmを多量に含む、径0.5～5cmの小礫含む)
9：灰色(N4/(Y))シルト(灰オリーブ色(5Y6/4)～明黄褐色(10YR6/6)砂質シルト、シルトブロック＝　径0.5cm含む、炭化物を少量含む、径0.2～2cmの小礫を含む)
10：黄灰色(2.5Y5/1)細砂質シルト(にぶい黄色(2.5Y6/4)細砂を帯状に含む)
11：浅黄色(5Y7/4)シルト(灰色(5Y6/1)シルトブロックを含む)
12：暗灰色(N5/)シルト(炭化物を多量に含む)
13：黄灰色(2.5Y5/1)砂質シルト
14：灰色(7.5Y5/1)砂質シルト(0.1～1cmの砂、小礫を多量に含む、炭化物含む)
15：灰色(5Y6/1)砂質シルト(まだらに酸化橙色化、灰色(N4/)粘土ブロック＝径1～2cm含む、まだらにオリーブ色(5Y6/6)化、砂粒を多量に含む)
16：黄灰色(2.5Y5/1)シルト(まだらに酸化、灰色(N4/)粘質シルトブロック＝径1～5cm含む、炭化物を少量含む、砂粒を少量含む)
17：灰オリーブ色(5Y6/2)砂質シルト(にぶい黄色(2.5Y6/3)～明黄褐色(2.5Y6/6)シルトブロック＝径0.5cmを少量含む、炭化物を含む、14層より砂質強い)
18：黄灰色(2.5Y4/1)シルト
19：黄灰色(2.5Y5/1)シルト(基本的には16層と同じだが砂粒を多く含む、小礫を含む)
20：灰色(5Y5/1)シルト質砂(基本的には細砂～砂、17層or19層の帯状ブロック、ラミナ状堆積？)
21：黄灰色(2.5Y5/1)シルト(19層に比べ砂質強い、まだらに鉄分沈着、炭化物少量含む)
22：にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質砂(鉄分の沈着著しい)
23：灰オリーブ色(5Y5/2)～黄褐色(2.5Y5/3)シルト(炭化物・砂粒を若干含む)
24：灰色(N5/(YR))シルト(炭化物を若干含む)
25：基本的には23層と同じ、ただし砂粒をあまり含まない
26：暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト(19層に近似)
27：暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質粗砂(径1～5cmの小礫を極多量に含む)
28：暗灰黄色(2.5Y5/2)～黄褐色(5Y5/3)粘質シルト(黄灰色(2.5Y5/1)シルトブロック＝径1～10cmを斑点状に含む)
29：暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト(炭化物を多量に含む、砂粒を多量に含む)
30：黄灰色(2.5Y6/1)～灰黄色(2.5Y6/2)シルト(砂粒含む)
31：褐灰色(10YR5/1)～灰黄褐色(10YR5/2)粘質シルト(砂粒を多量に含む、炭化物を少量含む)
32：26層と同じ、グライ化
33：27層と同じ、グライ化

**(3；整地層)　(2・4・5；連続する整地層)　(13・14・17；連続する整地層)**
**(15・16・18・22～25・29・31；中世以降の堆積層、中世土器包含、SXc30包含層)**
**(19～21・26～28・30・32・33；基盤層、中世以前の堆積層)**
**(遺物取り上げ単位：2～8；A層、9；C層、10；B層、13～25；D層、26～33；E層)**

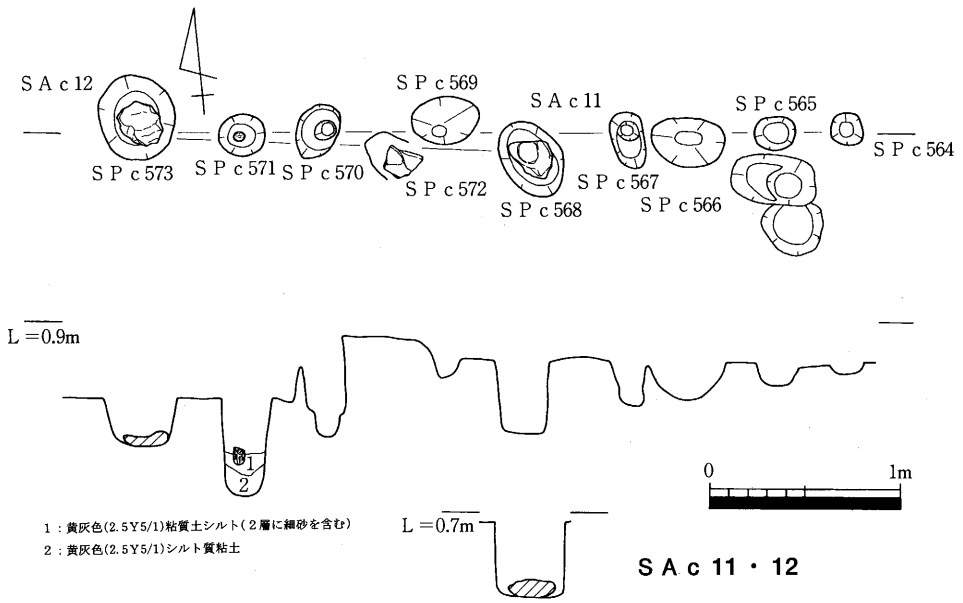



1：攪乱
2：灰色(N5/)粘土、黄褐色(10YR5/6)細砂網目状に含む、明治期整地層
3：にぶい黄褐色(10YR5/4)砂混シルト、炭化物を少量含む
(3；整地層、上面遺構検出面)
4：灰色(5Y6/1)・黄褐色(10YR5/4)シルトブロック混褐灰色(10YR5/1)シルト層、炭化物を少量含む
(4；整地層、上面遺構検出面)
5：にぶい黄褐色(10YR5/4)細砂混灰色(N4/)シルト層、炭化物を含む
6：5層と基本的には同じ、上層攪乱の影響で色調変化
(5・6；整地層、上面遺構検出面)
7：28層＋黄褐色(2.5Y5/3)細砂ブロック
8：灰色(N4/～N6/)シルト・黄褐色(2.5Y5/3)シルトブロック混暗灰黄色(2.5Y5/2)細砂層、炭化物を少量含む
9：灰色(N4/)粘土ブロック混灰オリーブ色(5Y5/2)細砂層
(7～9；基盤層、中世以前の堆積土)
10：にぶい黄褐色(10YR5/4)細砂・褐灰色(10YR5/1)シルトブロック混灰色(N4/YR)シルト層
11：黄灰色(2.5Y4/1)シルト層、炭化物を多量に含む、にぶい黄褐色(10YR5/4)砂包含
12：黄灰色(2.5Y4/1)シルト層、灰オリーブ色(5Y5/2)粘土ブロックを若干含む
13：黄褐色(2.5Y5/4)シルト混じり層を帯状に含む黄灰色(2.5Y4/1)シルト層、炭化物を少量含む
14：黄褐色(2.5Y5/4)シルトブロック混灰色(10Y4/1)シルト層、炭化物を含む
15：黄褐色(2.5Y5/4)砂・にぶい黄褐色(10YR5/4)シルトブロック混黄灰色(2.5Y5/1)シルト層、炭化物を少量含む、小礫を少量含む
16：基本的には15層と同一層位、ただしブロックの混入は皆無
17：黄褐色(2.5Y5/4)細砂、24層ブロックを含む
18：黄灰色(2.5Y4/1)シルト混暗灰黄色(2.5Y5/2)細砂層、炭化物を微量含む
19：21層と同一層位、炭化物を多く含む
20：21層を基調とし貝殻(漆喰？)、炭化物を多量に含む
21：灰色(N4/Y)細砂シルト層、炭化物を斑点状に含む
22：黄褐色(2.5Y5/3)細砂ブロック(帯状)、混灰色(N4/Y)シルト層、炭化物を若干含む
23：青灰色(10BG5/1)砂、貝殻・炭化物含む、貝殻で変色？
(10～23；SKc40上層埋土、最上面は遺構検出面に対応)
24：暗青灰色(5PB4/1)細砂混微粒シルト
25：27層＋炭化物
26：27層＋細砂
27：暗青灰色(5PB3/1)粘土、木片・炭化物包含、灰色砂混じる
28：灰色(N3.5/)～暗灰色粘土、炭化物を少量含む
(24～28；SKc40下層埋土)

**第97図　X区　壁面図1・2(天地S＝1／40、左右S＝1／80)**

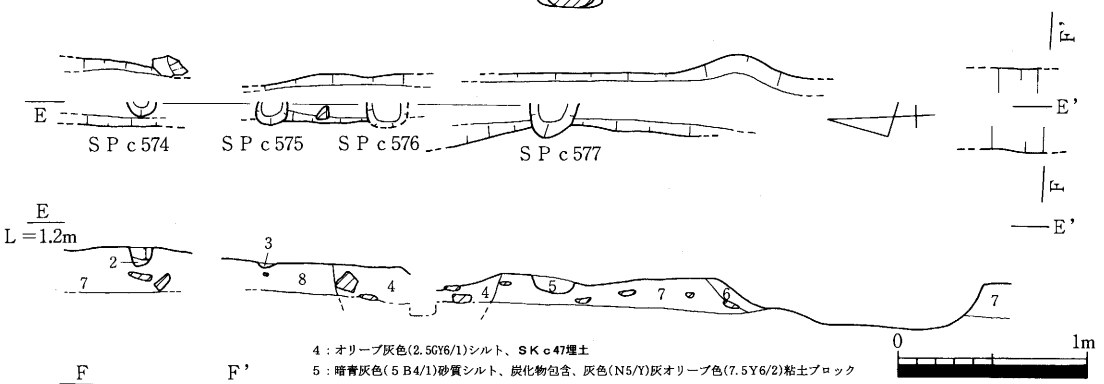


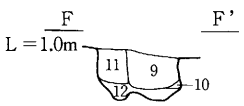

SAc 09・10




1：黄灰色(2.5Y5/1)粘質土シルト(2層に細砂を含む)
2：黄灰色(2.5Y5/1)シルト質粘土

SAc 11・12



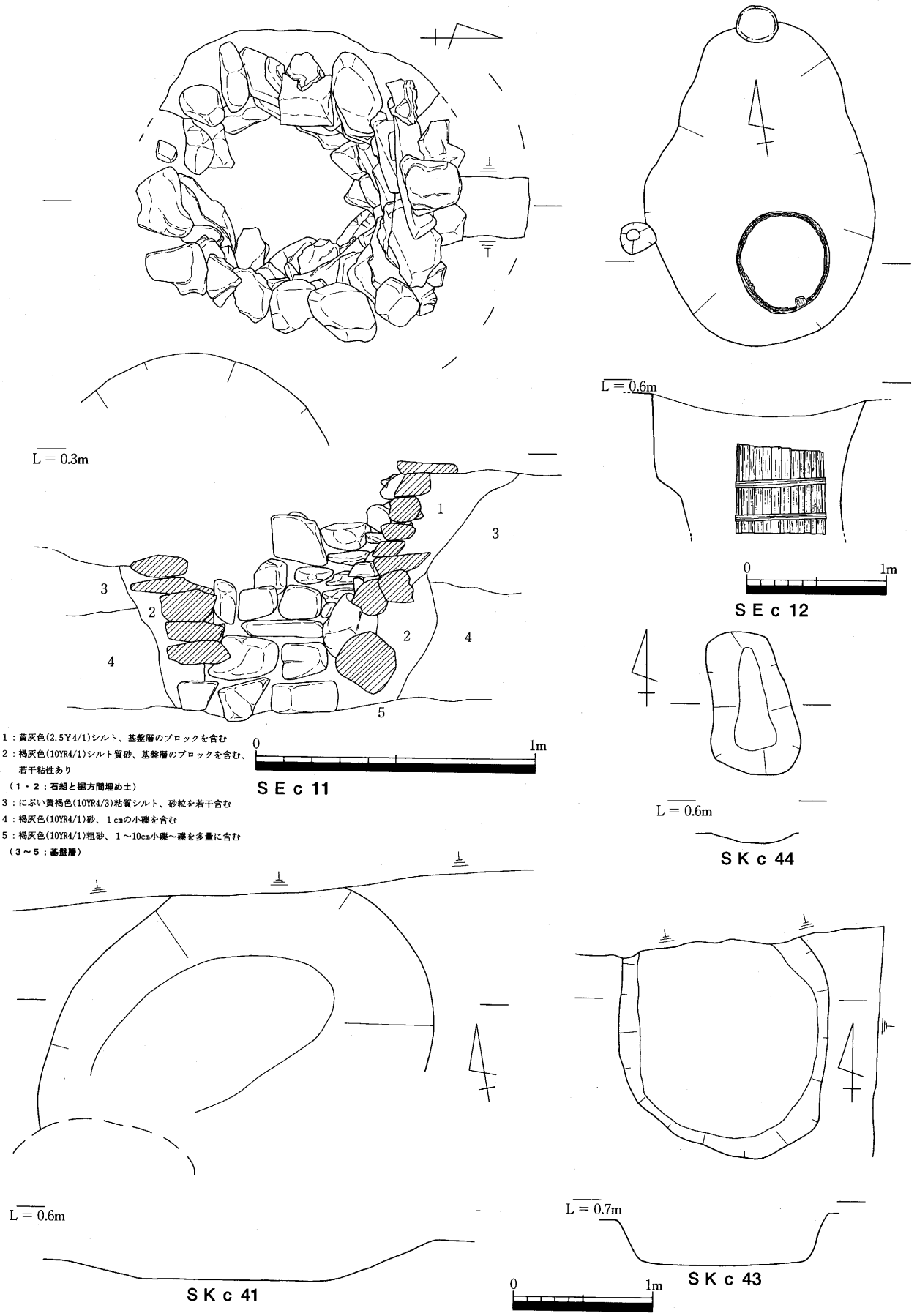




1：暗青灰色(5PB3/1)シルト質粘土、木くず？若干含む
2：褐灰色(10YR5/1)シルト、8層ブロック混じる、にぶい黄褐色(10YR6/4)砂ブロックを含む
3：暗青灰色(5B4/1)粘質シルト、にぶい黄橙色(10YR6/4)粘土ブロックを若干含む
(1～3・5；柵列埋土か)

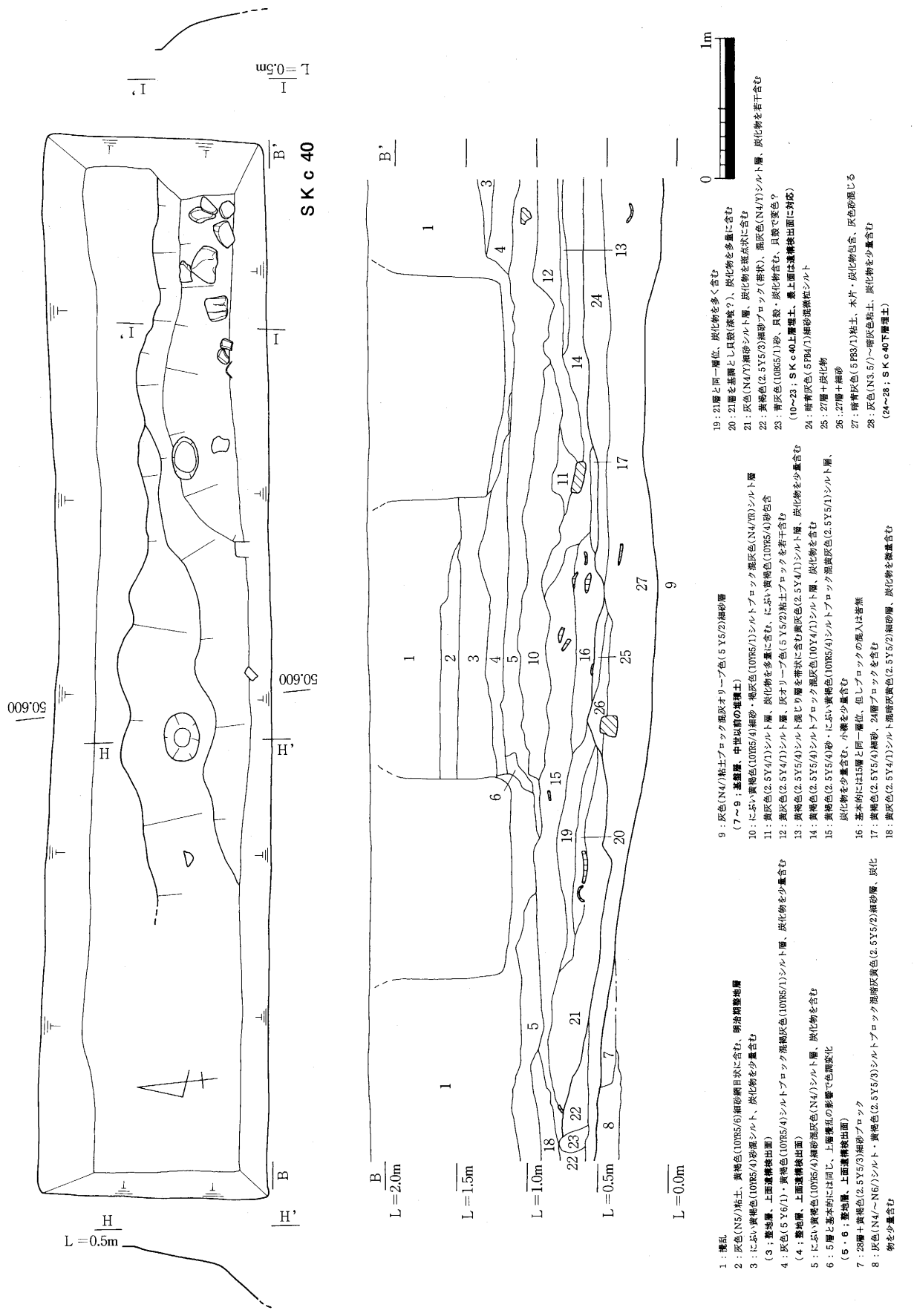
4：オリーブ灰色(2.5GY6/1)シルト、SKc47埋土
5：暗青灰色(5B4/1)砂質シルト、炭化物包含、灰色(N5/Y)灰オリーブ色(7.5Y6/2)粘土ブロック含む
6：灰色(7.5Y6/1)シルト、炭化物を若干含む、SKc45埋土
7：褐灰色(10YR5/1～6/1)砂質シルト、灰色(N4/～5/)粘土ブロックを含む
8：青灰色(5B5/1)砂質シルト、炭化物を若干含む、緑灰色(7.5GY6/1)粘質シルト・粘土ブロック含む
(7・8；SDc14埋土)
9：暗灰黄色(2.5Y5/1)シルト、径0.1～0.5cmの砂粒を多く含む、にぶい黄色(2.5Y6/4)粘質シルトブロック＝径0.5～1cm多く含む、炭化物含む、1～3・5に連続する柵列を構成する柱穴埋土か
10：淺黄色(2.5Y7/4)シルト質粘土
11：灰黄色(2.5Y6/2)シルト、基盤層ブロック含む
12：灰色(5Y6/1)シルト、基盤層ブロック含む (10～12；SDc14埋土)

SAc 13・SDc 14

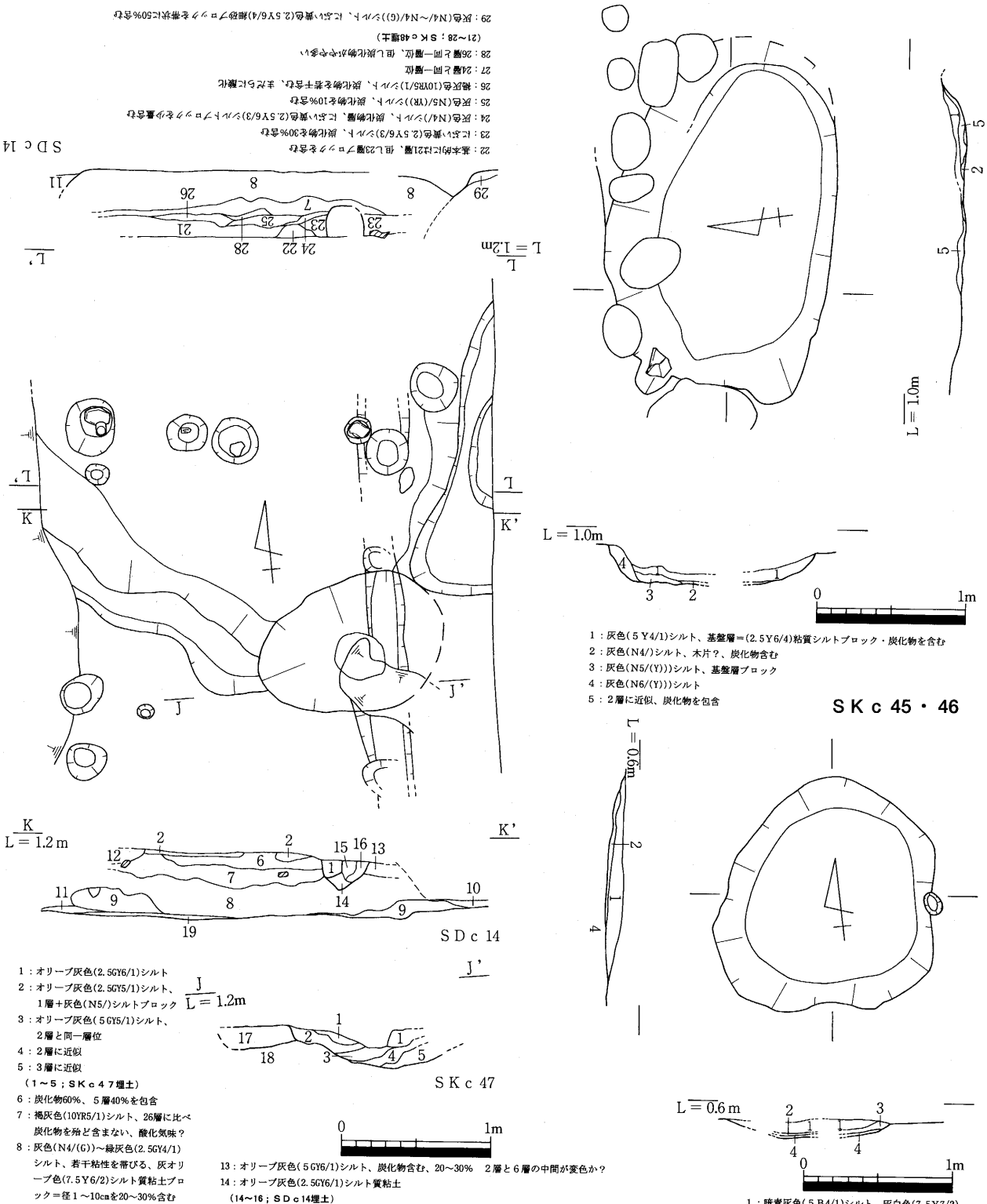
**第98図　X区　遺構平・断面図1**




第99図　X区　遺構平・断面図2




**第100図　X区　遺構平・断面図3**




1：灰色(5Y4/1)シルト、基盤層＝(2.5Y6/4)粘質シルトブロック・炭化物を含む
2：灰色(N4/)シルト、木片？、炭化物含む
3：灰色(N5/(Y)))シルト、基盤層ブロック
4：灰色(N6/(Y)))シルト
5：2層に近似、炭化物を包含

**SKc 45・46**

1：オリーブ灰色(2.5GY6/1)シルト
2：オリーブ灰色(2.5GY5/1)シルト、1層＋灰色(N5/)シルトブロック
3：オリーブ灰色(5GY5/1)シルト、2層と同一層位
4：2層に近似
5：3層に近似
（1～5；SKc47埋土）
6：炭化物60%、5層40%を包含
7：褐灰色(10YR5/1)シルト、26層に比べ炭化物を殆ど含まない、酸化気味？
8：灰色(N4/(G))～緑灰色(2.5GY4/1)シルト、若干粘性を帯びる、灰オリーブ色(7.5Y6/2)シルト質粘土ブロック＝径1～10cmを20～30%含む
9：基本的には8層、但しブロック含有率40～50%
10：灰色(N5/～N4/(G))シルト、灰色(N4/)・オリーブ灰色(5GY6/1)シルトブロック径0.5～2cm含む、30%
（10・29；SKc49埋土）
11：オリーブ灰色(2.5GY6/1)シルト質粘土
（6～9・11；SKc48埋土）
12：灰黄褐色(10YR5/2)砂質シルト、2層に比べ、炭化物多い
13：オリーブ灰色(5GY6/1)シルト、炭化物含む、20～30%　2層と6層の中間が変色か？
14：オリーブ灰色(2.5GY6/1)シルト質粘土
（14～16；SDc14埋土）
15：黄灰色粘土質シルト、砂粒含む
16：灰黄色砂質シルト、砂粒含む
（15・16；柱穴埋土）
17：灰色(N5/)シルト、オリーブ灰色(2.5GY6/1)シルトブロックまだらに含む、SKc48埋土
18：緑灰色(78.5GY6/1)シルト、にぶい黄褐色(10YR5/4)シルトブロック＝径0.2～0.5cm含む、基盤層
19：オリーブ灰色(2.5GY6/1)シルト質細砂、基盤層
20：褐灰色(10YR5/1)粘質シルト、径1～5cmの小礫を含む、黄灰色(2.5Y5/1)粘土ブロック＝径1～2cmを10%含む、まだらに酸化、SDc14埋土
21：灰黄褐色(10YR5/2)シルト、径0.1～0.5cmの砂粒を含む、にぶい黄褐色(10YR5/4)砂包含(20～30%)、炭化物を若干含む

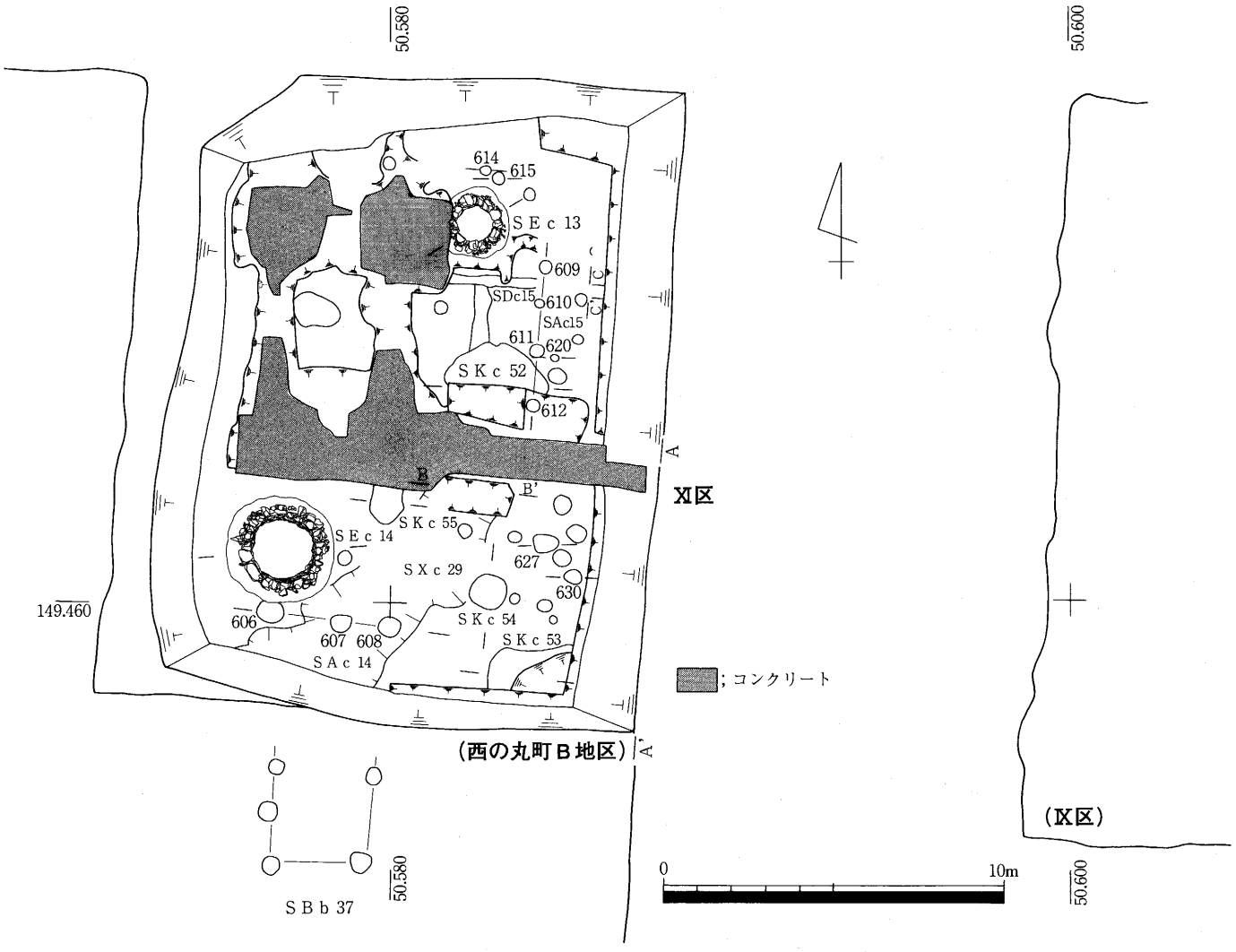
**SKc 47・48・49**

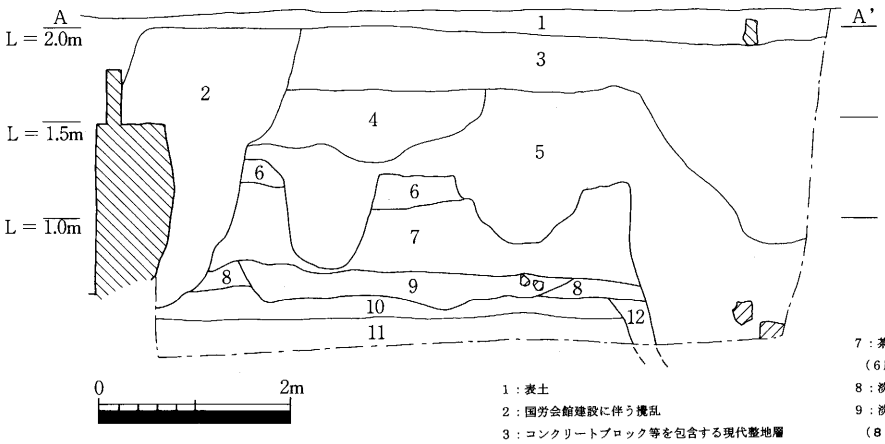
1：暗青灰色(5B4/1)シルト、灰白色(7.5Y7/2)シルト質粘土ブロック＝径0.5～5cmを含む
2：灰色(N4/)粘質シルト、木片？を多量に含む
3：褐灰色(10YR4/1)シルト
4：青灰色(5BG6/1)砂質シルト

**SKc 51**

22：基本的には21層、但し23層ブロックを含む
23：にぶい黄色(2.5Y6/3)シルト、炭化物を30%含む
24：灰色(N4/)シルト、炭化物層、にぶい黄色(2.5Y6/3)シルトブロックを少量含む
25：灰色(N5/(YR))シルト、炭化物を10%含む
26：褐灰色(10YR5/1)シルト、炭化物を若干含む、まだらに酸化
27：24層と同一層位
28：26層と同一層位、但し炭化物がやや多い
（21～28；SKc48埋土）
29：灰色(N4/～N4/(G))シルト、にぶい黄色(2.5Y6/4)細砂ブロックを帯状に60%含む

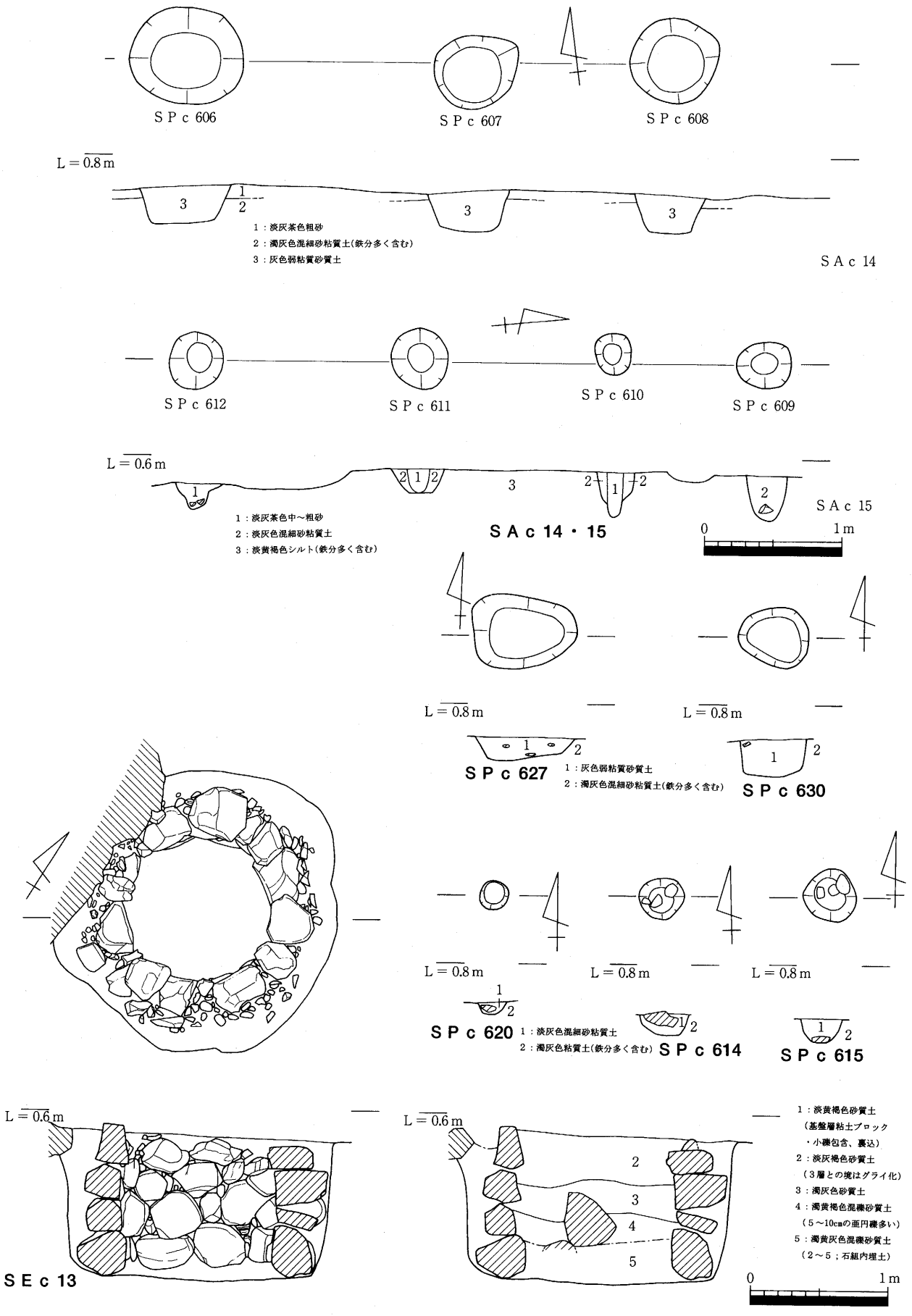
**第101図　X区　遺構平・断面図4**



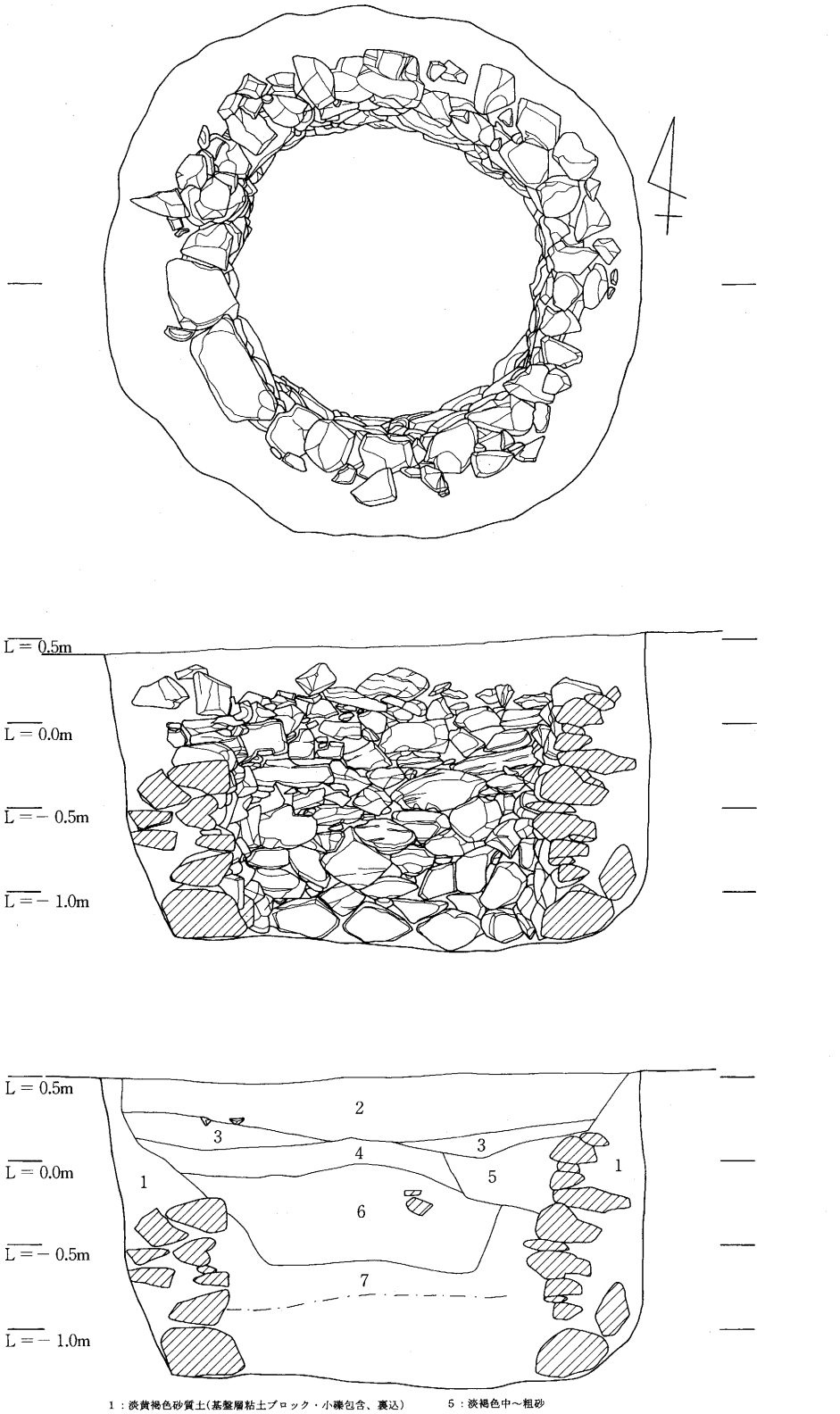




1：表土
2：国労会館建設に伴う攪乱
3：コンクリートブロック等を包含する現代整地層
4：瓦片を多量に含んだ攪乱(黄褐色砂質土)
5：巨石・瓦片を多量に含んだ攪乱(淡茶褐色混細砂粘質土)
6：茶褐色混細砂粘質土
(炭化物を少量含む、整地層、上面遺構検出面か)
7：茶褐色混細砂粘質土
(6層より砂粒径が粗い、炭化物なし、整地層、上面遺構検出面か)
8：淡茶灰色粘質土(淡黄褐色粘土ブロックを含む)
9：淡褐色中～粗い砂
(8・9；整地層、上面遺構検出面か)
10：淡黄灰色混細砂粘質土(シルト質、鉄分含む、上面遺構検出面)
11：淡灰色混細砂粘質土(シルト質、鉄分含む)
(10・11；基盤層)
12：濁灰色混中砂粘質土(SKc53埋土)

**第102図　XI区　遺構配置図(S＝1／200)及び壁面図(天地S＝1／40、左右S＝1／80)**

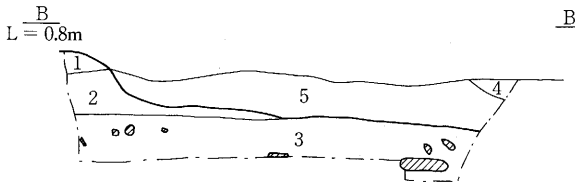



第103図　Ⅺ区　遺構平・断面図1



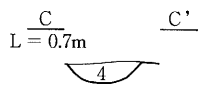

SEc 14

**第104図　Ⅺ区　遺構平・断面図2**



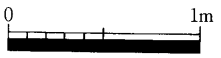

1：灰色混細砂粘質土(整地層)
2：濁黄褐色シルト(鉄分を多量に含む)
3：淡黄褐色シルト(鉄分・炭化物を多量に含む)
（2・3；ＳＸｃ33包含層）

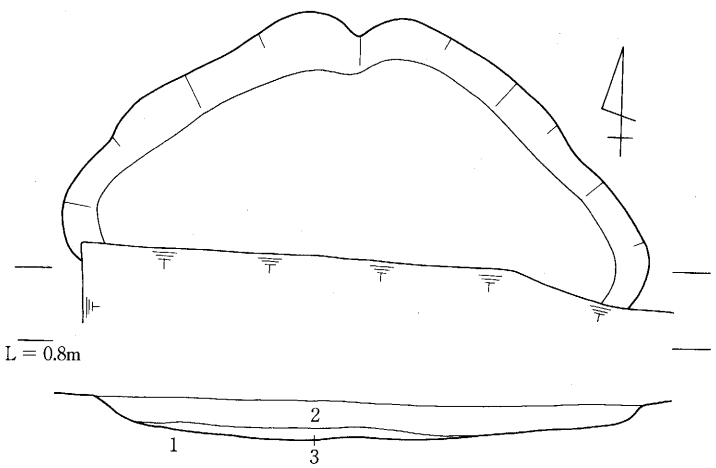
**ＳＸｃ 29**




4：淡茶褐色砂質土(ＳＤｃ15埋土)

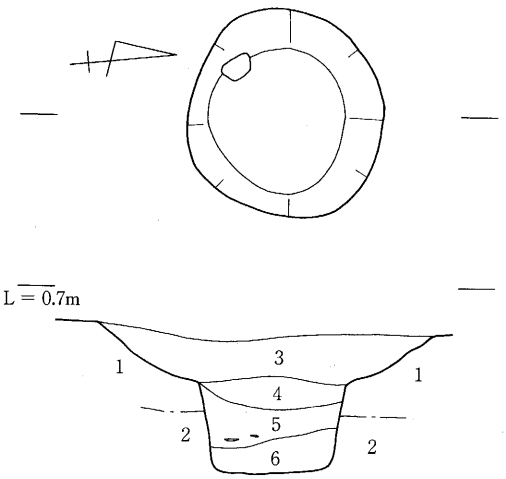
**ＳＤｃ 15**



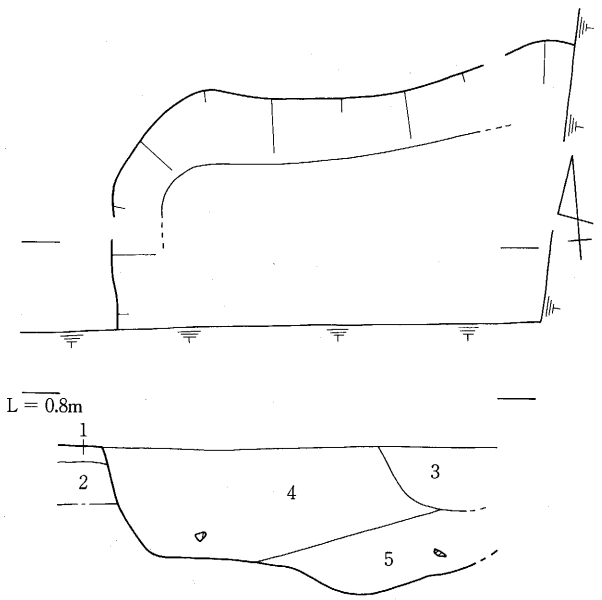

1：濁黄灰色シルト(基盤層、鉄分を多量に含む)
2：淡褐色中～粗砂
3：濁灰褐色混中砂粘質土
（2・3；ＳＫｃ52埋土）

**ＳＫｃ 52**



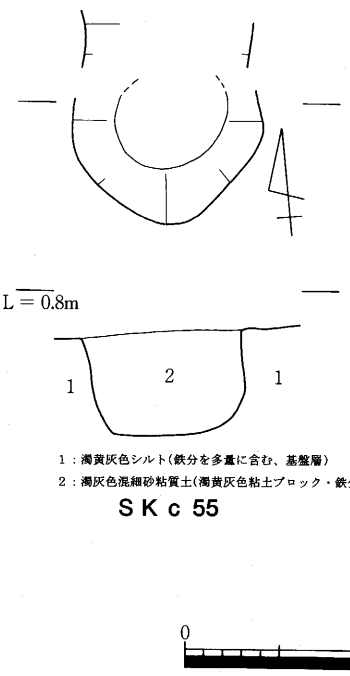

1：淡黄灰色シルト(鉄分を多量に含む)
2：灰色中～粗砂
（1・2；基盤層）
3：濁灰色混中砂粘質土
4：濁黄灰色シルト
5：青灰色粘土
6：淡青灰色シルト

**ＳＫｃ 54**




1：淡灰色粘質土(整地層)
2：濁褐色～淡褐色中砂(基盤層)
3：濁灰黄色粘質土(淡黄色・淡灰色粘土ブロック・瓦を包含、攪乱埋土)
4：淡茶灰色混中砂粘質土(瓦を少量含む)
5：濁青灰色混粗砂粘質土
（4・5；ＳＫｃ53埋土）

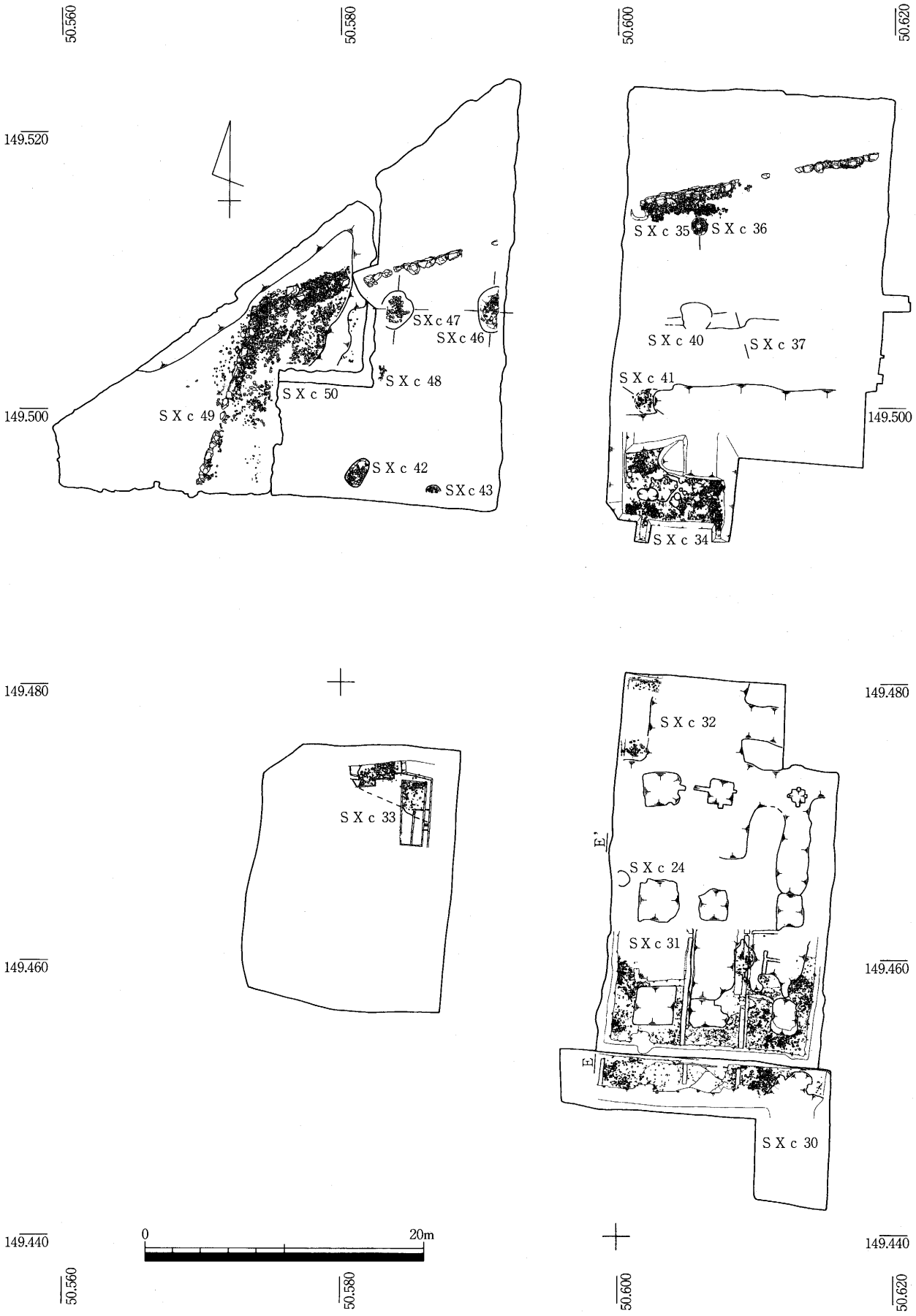
**ＳＫｃ 53**




1：濁黄灰色シルト(鉄分を多量に含む、基盤層)
2：濁灰色混細砂粘質土(濁黄灰色粘土ブロック・鉄分包含)

**ＳＫｃ 55**

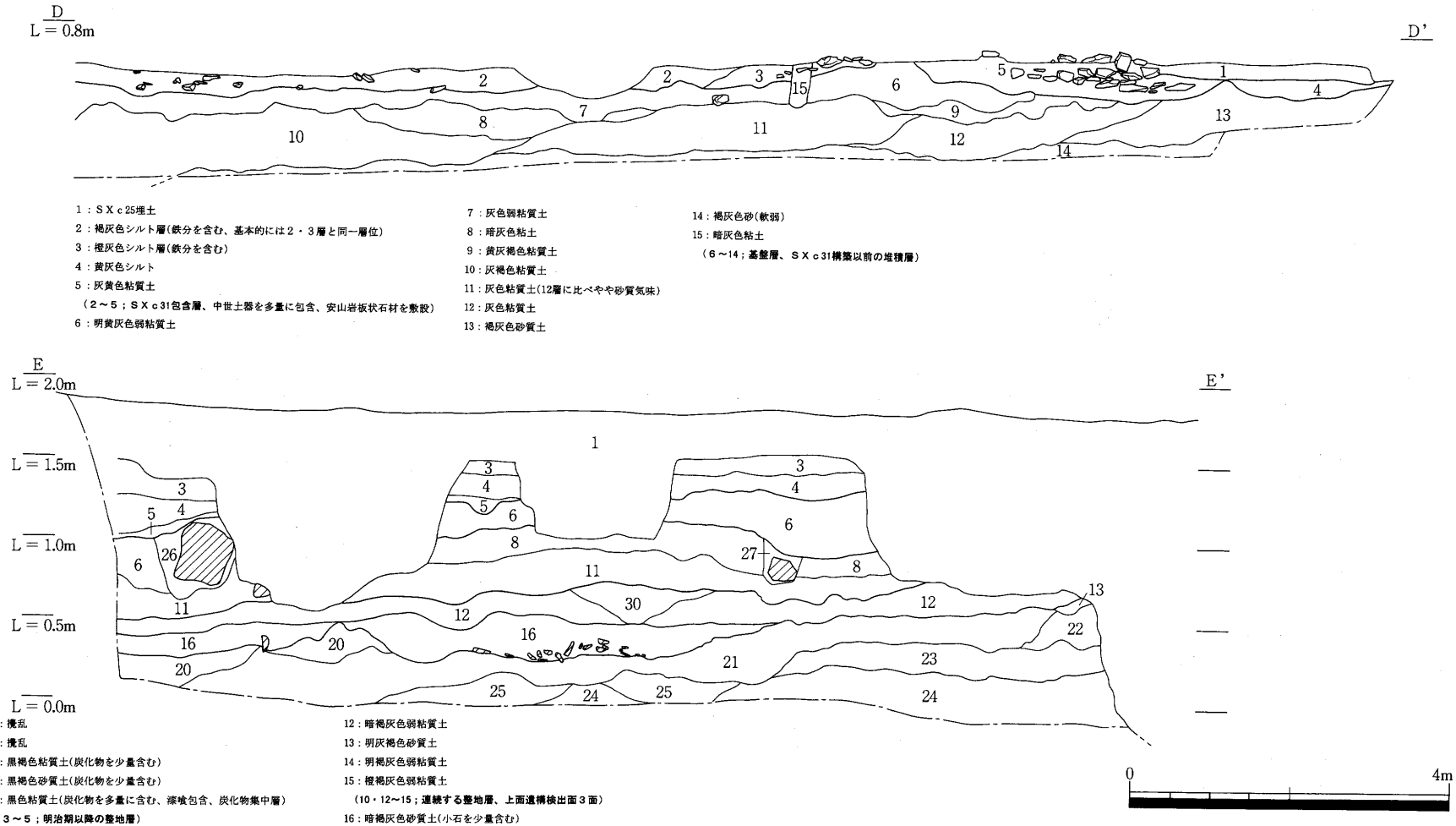
**第105図　Ⅺ区　遺構平・断面図３**




第106図　中世遺構配置図（S＝1／400）

**第107図　Ｘ区　ＳＸｃ30平・断面図**

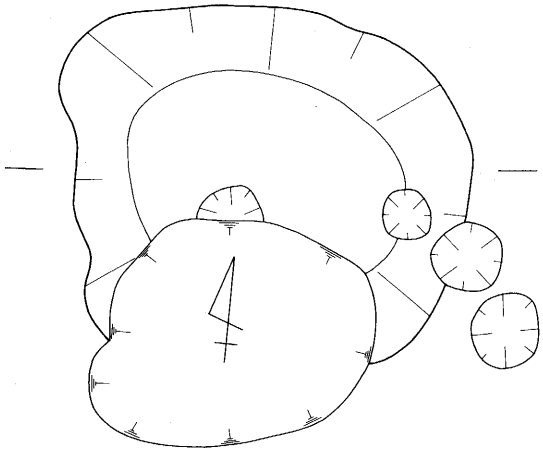
第108図　Ⅸ区　ＳＸｃ31平面図

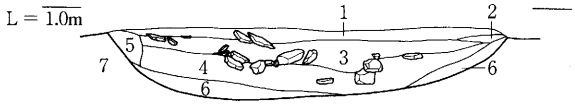



1：ＳＸｃ25埋土
2：褐灰色シルト層(鉄分を含む、基本的には２・３層と同一層位)
3：橙灰色シルト層(鉄分を含む)
4：黄灰色シルト
5：灰黄色粘質土
（２～５；ＳＸｃ31包含層、中世土器を多量に包含、安山岩板状石材を敷設）
6：明黄灰色弱粘質土
7：灰色弱粘質土
8：暗灰色粘土
9：黄灰褐色粘質土
10：灰褐色粘質土
11：灰色粘質土(12層に比べやや砂質気味)
12：灰色粘質土
13：褐灰色砂質土
14：褐灰色砂(軟弱)
15：暗灰色粘土
（６～14；基盤層、ＳＸｃ31構築以前の堆積層）

1：攪乱
2：攪乱
3：黒褐色粘質土(炭化物を少量含む)
4：黒褐色砂質土(炭化物を少量含む)
5：黒色粘質土(炭化物を多量に含む、漆喰包含、炭化物集中層)
（３～５；明治期以降の整地層）
6：明灰褐色砂質土(炭化物少量含む、黄褐色粘土ブロックを少量含む)
7：橙灰褐色粘質土
（６・７；連続する整地層、上面遺構検出面１面）
8：灰褐色シルト(黄色、灰色粘土ブロックを多く含む)
9：黄白色砂
10：暗灰色弱粘質土
11：橙灰色粘質土
（８・９・11；連続する整地層、上面遺構検出面２面）
12：暗褐灰色弱粘質土
13：明灰褐色砂質土
14：明褐灰色弱粘質土
15：橙褐灰色弱粘質土
（10・12～15；連続する整地層、上面遺構検出面３面）
16：暗褐灰色砂質土(小石を少量含む)
17：橙褐灰色砂質土
18：暗灰色砂質土
19：暗褐灰色砂質土(小石を多く含む)
（16～19；中世土器包含層、ＳＸｃ31・32包含層）
20：灰色砂
21：褐灰色シルト
22：明褐灰色シルト
23：暗灰色砂質土(１～５cmの橙灰色粘土ブロックを含む)
24：灰褐色砂(しまり弱い、砂粒粗い)
25：灰褐色粘質土
（20～25；基盤層、ＳＸｃ31・32構築以前の堆積層、ごく少量の弥生土器・須恵器包含）
26：明灰色砂(遺構埋土、礫石)
27：灰色砂質土(遺構埋土、根石)
28：明黄灰色弱粘質土(１～５cmの橙褐色粘土ブロックを多量に含む、瓦包含)
29：灰白色弱粘質土(0.2～１cmの橙褐色粘土ブロックを少量含む)
（28・29；遺構埋土）
30：暗灰色粘質土(遺構埋土か、ＳＸｃ26埋土に近似)
31：黄灰褐色砂
32：褐灰色砂
33：明褐色粗砂
34：暗灰色細砂
35：明黄灰色細砂
（30～35；不明埋土、遺構か）

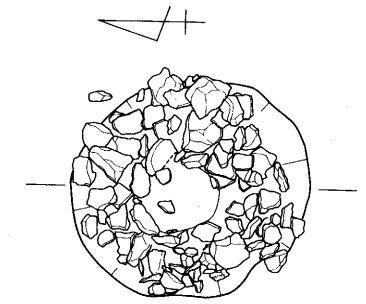
**第109図　Ⅸ区　ＳＸｃ31断面図(天地Ｓ＝１／40、左右Ｓ＝１／80)**

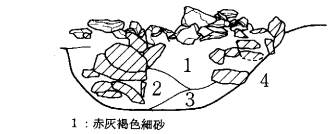





1：灰色(５Y6/1)砂質土、板状石材少量包含
2：灰白色(2.5Y8/1)シルト質土、
3：灰オリーブ色(５Y6/2)混砂粘質土、板状石材包含
4：灰色(7.5Y5/1)シルト質土、板状石材少量包含
5：灰黄色(2.5Y7/2)混砂粘質土
6：にぶい黄色(2.5Y6/3)砂質土
7：にぶい黄橙色(10YR5/2)砂、**基盤層**

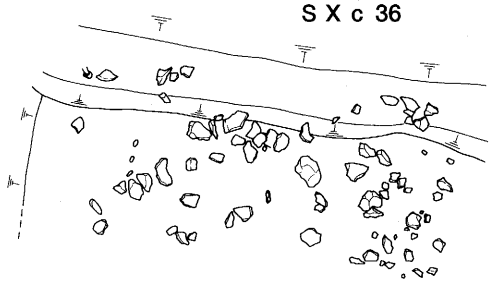
**ＳＸｃ 40**

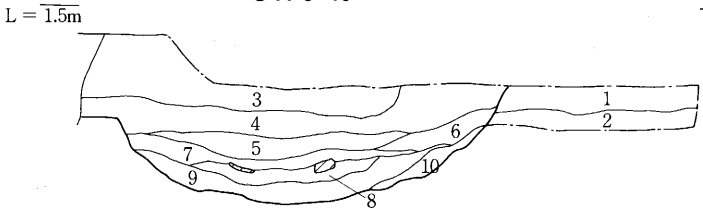





1：赤灰褐色細砂
2：灰色細砂質土(１層に比べて若干しまり強い)
3：明灰色細砂質土
4：にぶい黄橙色(10YR5/2)砂、**基盤層**

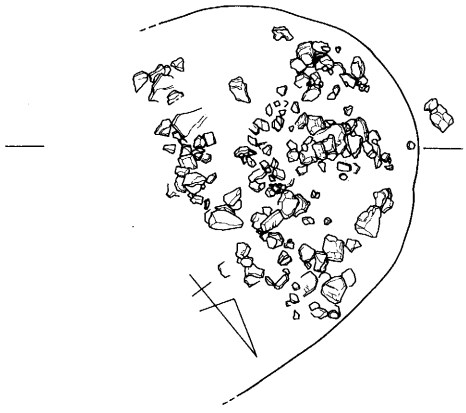
**ＳＸｃ 36**

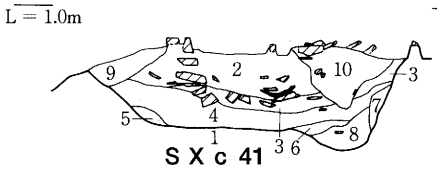





1：暗赤褐色(５YR3/4)砂質土、単一層としたが部位により、暗赤褐色(7.5R3/2・10R3/3ないし3/2)・にぶい赤褐色(2.5YR4/3)の色調を呈する
2：にぶい黄橙色(10YR5/2)砂、**基盤層**
3：浅黄色(2.5Y7/4)砂、５mm前後の砂利を含む
4：暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土
5：灰色(５Y5/1)粘質土、黄灰色(2.5Y4/1)粘質土ブロックを含む
6：５とほぼ同質だが黄灰色(2.5Y4/1)粘質土・灰色(５Y5/1)粘質土ブロックを含む
7：黄灰色(2.5Y6/1)混砂粘質土
8：灰色(５Y4/1)混砂粘質土、９層をブロック状に含む
9：灰白色(7.5Y7/1)粘質土、粘性高い、にぶい黄橙色(10YR6/4)粘質土に一部変色(水の浸水)
10：灰黄褐色(10YR4/2)混砂粘質土、１層と似るが２層のブロックを少量含む

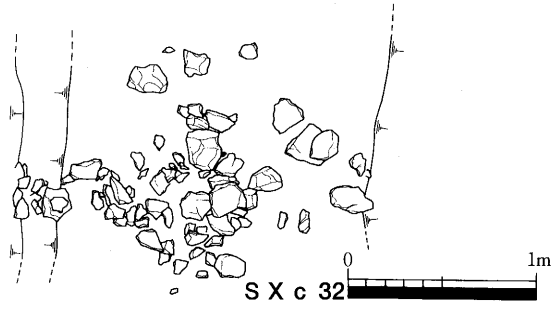
**ＳＸｃ 37**






1：にぶい黄橙色(10YR5/2)砂、**基盤層**
2：灰黄色(2.5YR4/2)砂質土、板状石材を多く含む
3：黄灰色(2.5Y6/1)粘質土、板状石材を一部含む、１層がブロック状に少量混じる
4：灰白色(2.5Y7/1)粘質土、板状石材を含まず、にぶい黄色(2.5Y6/3)粘質土をブロック状に含む
5：浅黄色(2.5Y7/3)混砂粘質土
6：灰褐色(7.5YR5/2)混砂粘質土
7：灰褐色(５YR4/2)砂質土
8：褐灰色(10YR5/1)混砂粘質土
9：にぶい黄橙色(10YR7/2)混砂粘質土、攪乱埋土
10：にぶい黄褐色(５YR5/3)砂質土、橙色(５YR6/6)粘土をブロック状に含む

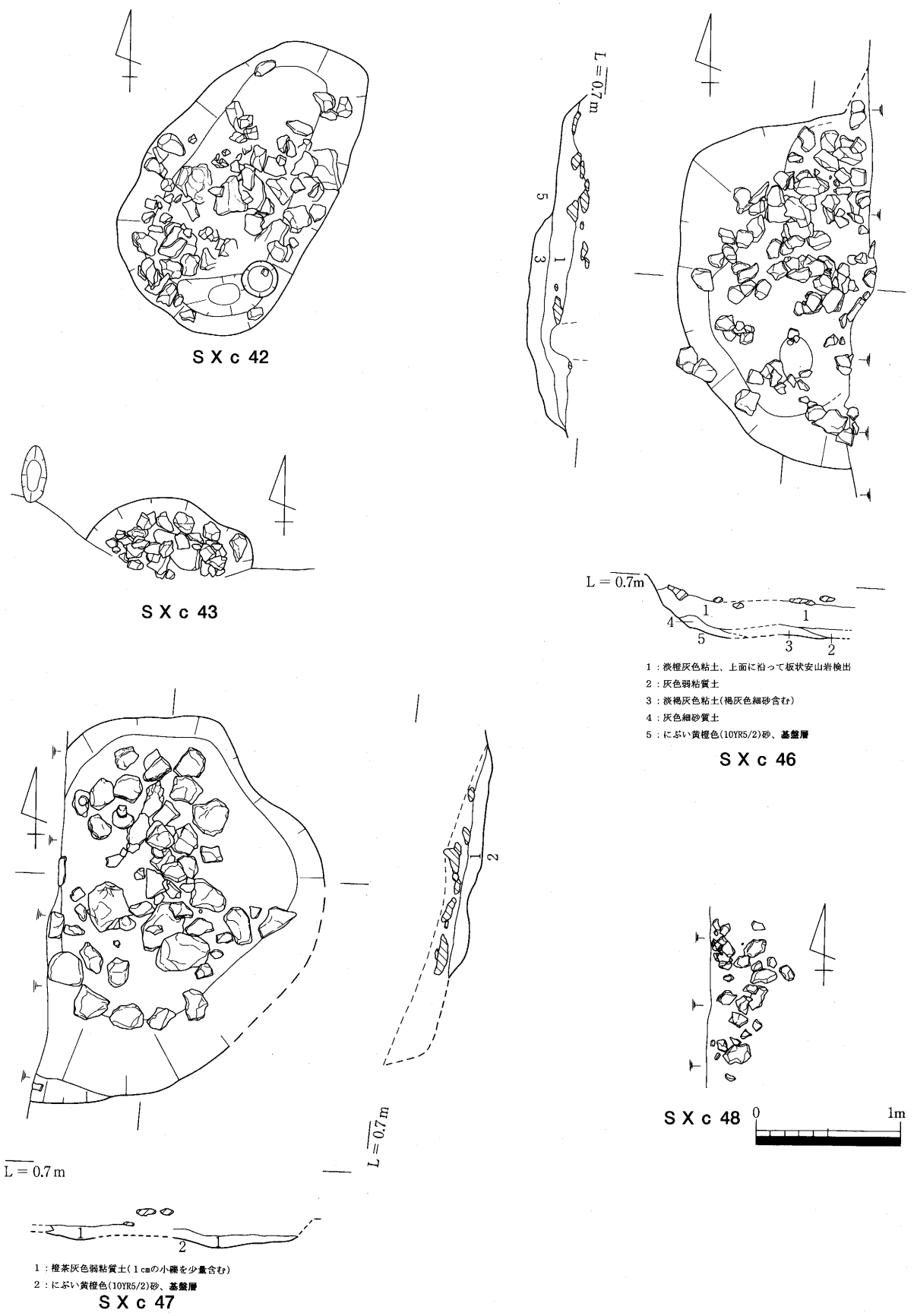
**ＳＸｃ 41**



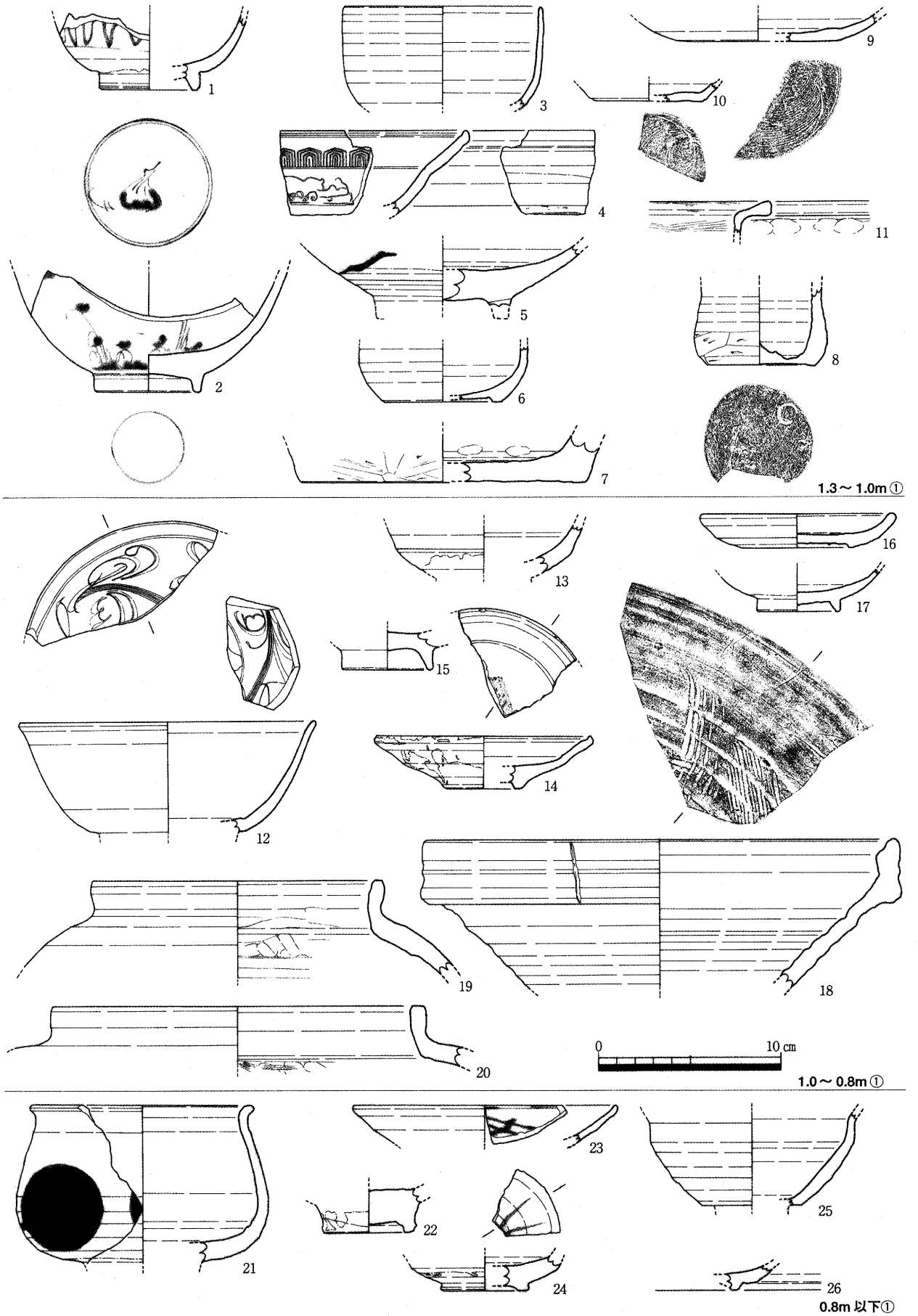

**ＳＸｃ 32**

**第111図　中世遺構平・断面図１**

第110図　Ⅷ区　ＳＸｃ34平・断面図




第112図　中世遺構平・断面図 2




第113図　Ⅰ区　整地層出土遺物1